県道高松志度線道路改良工事に伴う

# 埋蔵文化財発掘調査報告

# 小山・南谷遺跡Ⅱ

２００６．12

香川県教育委員会

# 序　　文

小山・南谷遺跡は県道高松志度線道路改良工事に伴い発掘調査を行った、高松市新田町小山、高松市高松町南谷に所在する遺跡です。

発掘調査は香川県教育委員会からの委託で、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成５年度から平成７年度まで継続して実施しました。

小山・南谷遺跡の発掘調査では、縄文時代から古代の遺構と遺物が多量に出土しました。注目されるものとしては弥生時代後期前半の集落跡で、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土坑跡、土壙墓などを検出し、竪穴住居跡、土坑跡などから多量の製塩土器が出土しました。このことから小山・南谷遺跡の集落は、弥生時代の塩づくりを行った集団の住む集落であることが解りました。

整理作業は、香川県埋蔵文化財センターが平成17年度に実施し、その成果を「県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　小山・南谷遺跡Ⅱ」として刊行することになりました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理、報告書の刊行に至るまでの間、香川県土木部道路建設課及び関係機関、地元関係者各位に多大な御協力と御指導を頂きました。ここに深く感謝の意を表するとともに、今後とも御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成18年12月

香川県埋蔵文化財センター
所長　　渡部　明夫

# 例　　言

1．本報告書は、県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第二冊で、香川県高松市新田町小山、高松市高松町南谷に所在する小山・南谷遺跡（こやま・みなみだにいせき）の報告を収録した。

2．発掘調査は、香川県教育委員会が香川県土木部道路建設課からの依頼を受け、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3．発掘調査の期間及び担当は以下のとおりである。

平成５年度

対象面積　10,000㎡

調査期間　平成５年４月１日～平成６年３月31日

調査担当者　中川芳和、片桐孝浩、石井健一

平成６年度

対象面積　8,303㎡

調査期間　平成６年４月１日～平成７年３月31日

調査担当者　森下友子、山田秀樹、佐柳真樹

4．発掘調査にあたって、下記の関係機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

香川県土木部道路建設課、香川県高松土木事務所、地元自治会

5．報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。

本報告書の執筆・編集は片桐孝浩が担当した。

6．報告書の作成にあたっては、以下の方々のご教示を得た。記して謝意を表したい。（五十音順、敬称略）

大久保徹也、大嶋和則、久保穣二朗、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所

7．本報告書で用いる方位の北は、旧国土座標系第Ⅳ系の北であり、標高は東京湾平均海水位（T.P.）を基準としている。

また、遺構は下記の略号により表示している。

ＳＢ…掘立柱建物跡　ＳＨ…竪穴住居跡　ＳＴ…埋葬遺構（土壙墓）　ＳＥ…井戸跡

ＳＫ…土坑跡　ＳＤ…溝状遺構　ＳＰ…柱穴跡　ＳＲ…自然流路跡　ＳＸ…不明遺構

8．石器実測図中、スクリントーンを貼っている部分は擦痕を、輪郭線の回りの「⟷」は摩滅・

使用痕の範囲を、輪郭線の周りの「⟝」は敲打痕の範囲を表す。なお、現代の欠損は黒く塗りつぶしている。

9．挿図の一部に国土地理院地形図 「高松北部」、「高松南部」、「五剣山」、「志度」（1/25,000）を使用した。

10. 本遺跡の報告の遺物写真については、撮影を美巧社に委託した。

11. 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖　1998年度版』による。

12. 添付ＣＤのビューワは、株式会社トリワークス（http://www.kuraemon.com）「蔵衛門 2005 professional」を使用した。

# 目　　次

序文
例言
第１章　調査の経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 1
第２章　立地と環境 …… 10
　第１節　地理的環境 …… 10
　第２節　歴史的環境 …… 10
第３章　調査の成果 …… 14
　第１節　周辺環境の復元 …… 14
　　１．高松平野北東部の旧流路（氾濫原）の復元 …… 14
　　２．試掘調査・発掘調査からの検証 …… 15
　　３．弥生時代後期の海岸線の復元 …… 17
　　４．小山・南谷遺跡周辺の地形復元 …… 18
　第２節　調査成果の概要 …… 22
　　１．調査区について …… 22
　　２．遺構番号について …… 22
　　３．各調査区の概要 …… 22
　第３節　土層序の概要 …… 23
　第４節　遺構・遺物について …… 28
第４章　自然科学的分析 …… 274
第５章　まとめ …… 279
　第１節　縄文時代の「落し穴」 …… 279
　第２節　弥生時代後期初頭～中葉の土器 …… 287
　第３節　角閃石含有土器について …… 315
　第４節　弥生時代後期前半～中葉の遺構の変遷 …… 317

# 挿図目次


第1図　試掘トレンチ配置図……3～4
第2図　調査区割図……5～6
第3図　遺跡位置図……10
第4図　周辺遺跡位置図……13
第5図　試掘・発掘調査位置図……16
第6図　遺跡位置図、旧地形復元図……19～20
第7図　第Ⅰ～Ⅲ調査区土層柱状図……25～26
第8図　第Ⅰ調査区位置図……28
第9図　第Ⅰ調査区包含層出土遺物実測図……30
第10図　第Ⅱ調査区位置図……31
第11図　SK544・545・547・550・552・555平・断面図……34
第12図　SK549・564・566・568・579平・断面図……35
第13図　SK554平・断面図、出土遺物実測図……37
第14図　SK558・559・561平・断面図、出土遺物実測図……39
第15図　SK563平・断面図、出土遺物実測図……40
第16図　SR501・502・603・604土層断面図……43～44
第17図　SR501第1層出土遺物実測図①……45
第18図　SR501第1層出土遺物実測図②……46
第19図　SR501第1層出土遺物実測図③……47
第20図　SR501第2層・第3層出土遺物実測図①……48
第21図　SR501第3層出土遺物実測図②……49
第22図　SR501第4層出土遺物実測図……50
第23図　SR502第1層・第2層出土遺物実測図……53
第24図　SR502第3・4層出土遺物実測図①……55
第25図　SR502第3・4層出土遺物実測図②……56
第26図　SR502第3・4層出土遺物実測図③……57
第27図　SR502第3・4層出土遺物実測図④……58
第28図　SR502第5・6・8・9層出土遺物実測図……59
第29図　SR502第7層出土遺物実測図①……61
第30図　SR502第7層出土遺物実測図②……62
第31図　SR502第10層・第11層・第14層出土遺物実測図……63
第32図　SR603出土遺物実測図……65
第33図　SR604出土遺物実測図……66
第34図　SB501・502平・断面図、SB502出土遺物実測図……68
第35図　SB503平・断面図……69
第36図　SH501～504位置関係図……70
第37図　SH501・502平・断面図、出土遺物実測図……71
第38図　SH503平・断面図、出土遺物実測図……73
第39図　SH504平・断面図、出土遺物実測図……74
第40図　SH505平・断面図、出土遺物実測図、
　遺物出土状況図……76
第41図　SH507平・断面図……78
第42図　SH506・508・516・517平・断面図……79
第43図　SH506・508・516・517出土遺物実測図……80
第44図　SH509平・断面図、遺物出土状況図……81
第45図　SH509出土遺物実測図①……83
第46図　SH509出土遺物実測図②……84
第47図　SH509遺物出土状況図……85
第48図　SH510平・断面図……86
第49図　SH511平・断面図、下層出土遺物実測図……89
第50図　SH511上層平・断面図、遺物出土状況図……90
第51図　SH511上層出土遺物実測図①……91
第52図　SH511上層出土遺物実測図②……92
第53図　SH511上層出土遺物実測図③……93
第54図　SH511上層出土遺物実測図④……94
第55図　SH511上層出土遺物実測図⑤……95
第56図　SH511上層出土遺物実測図⑥……96
第57図　SH511上層出土遺物実測図⑦……97
第58図　SH512・514平・断面図……98
第59図　SH513平・断面図、出土遺物実測図……99
第60図　SH515平・断面図、出土遺物実測図……100
第61図　SH515遺物出土状況図……101
第62図　SH518平・断面図、炉遺物出土状況図……104
第63図　SH518出土遺物実測図①……105
第64図　SH518出土遺物実測図②……106
第65図　SH518出土遺物実測図③……107
第66図　SH518出土遺物実測図④……108
第67図　SH518出土遺物実測図⑤……109
第68図　SH518出土遺物実測図⑥……110
第69図　SH519平・断面図、SH518・519位置関係図……112
第70図　SH519出土遺物実測図①……113
第71図　SH519出土遺物実測図②……114
第72図　SH520平・断面図、出土遺物実測図……115
第73図　SH521平・断面図……116
第74図　SH521出土遺物実測図、炉遺物出土状況図……117
第75図　ST501・502・503・504・505平・断面図……120
第76図　SE501平・断面図、出土遺物実測図……121
第77図　SE501出土遺物実測図……122
第78図　SE502平・断面図、出土遺物実測図……124
第79図　SK506・510・516・518平・断面図、
　出土遺物実測図……126
第80図　SK519・521平・断面図……127
第81図　SK519・521出土遺物実測図……128
第82図　SK531・536平・断面図、出土遺物実測図……130

第83図　SK543平・断面図、出土遺物実測図 …… 131
第84図　SK546・548・577・582平・断面図、出土遺物実測図 …… 132
第85図　SK586・587・588平・断面図、出土遺物実測図 …… 134
第86図　SK591平・断面図、出土遺物実測図 …… 136
第87図　SD501・502・508～511・514出土遺物実測図、
SD508土層断面図 …… 140
第88図　SD516土層断面図、出土遺物実測図 …… 142
第89図　SD517～519・521～524・526土層断面図、
SD526遺物出土状況図、SD517・520・521・
523・524・526出土遺物実測図 …… 144
第90図　SD535・543・546土層断面図、SD529・532・534・
535・537・542・543・546出土遺物実測図 …… 149
第91図　SD550・551土層断面図、出土遺物実測図① …… 155
第92図　SD550・551出土遺物実測図② …… 156
第93図　SD552・553土層断面図、出土遺物実測図 …… 158
第94図　SD554・556・557出土遺物実測図 …… 160
第95図　SD558・559出土遺物実測図 …… 162
第96図　SD562・572土層断面図、SD562・572・577
出土遺物実測図 …… 164
第97図　SX502・503・504平・断面図、出土遺物実測図 …… 168
第98図　SX507平・断面図、出土遺物実測図 …… 169
第99図　第Ⅱ調査区柱穴出土遺物実測図① …… 170
第100図　第Ⅱ調査区柱穴出土遺物実測図② …… 171
第101図　SK508・569・571・581平・断面図、
出土遺物実測図 …… 172
第102図　SX512平・断面図、出土遺物実測図 …… 174
第103図　第Ⅱ調査区包含層出土遺物実測図① …… 176
第104図　第Ⅱ調査区包含層出土遺物実測図② …… 177
第105図　第Ⅱ調査区包含層出土遺物実測図③ …… 178
第106図　第Ⅱ調査区包含層出土遺物実測図④ …… 179
第107図　第Ⅱ調査区包含層出土遺物実測図⑤ …… 180
第108図　第Ⅲ調査区位置図 …… 181
第109図　SR505土層断面図 …… 182
第110図　SR505出土遺物実測図 …… 183
第111図　第Ⅳ調査区位置図 …… 184
第112図　第Ⅳ－1調査区土層柱状図⑮ …… 184
第113図　第Ⅳ－2調査区土層柱状図⑯ …… 184
第114図　SD681～689・691・693・694・6102・6113・6120・6121
土層断面図、SD681・683出土遺物実測図 …… 186
第115図　SD6116出土遺物実測図 …… 189
第116図　SD6116・6117・6119平・断面図 …… 190
第117図　SD6122土層断面図、出土遺物実測図 …… 192
第118図　SD6127土層断面図、遺物出土状況図 …… 193
第119図　SD6127出土遺物実測図① …… 194
第120図　SD6127出土遺物実測図② …… 195
第121図　SD6127出土遺物実測図③ …… 196
第122図　SD6127出土遺物実測図④ …… 197
第123図　SD6127出土遺物実測図⑤ …… 198
第124図　SD6108～6110・6130～6133土層断面図、
SD6110・6130・6131・6133出土遺物実測図 …… 200
第125図　SR607・608出土遺物実測図 …… 203
第126図　SR607・608・609土層断面図 …… 205～206
第127図　SR609出土遺物実測図① …… 207
第128図　SR609出土遺物実測図② …… 208
第129図　SR609出土遺物実測図③ …… 209
第130図　SR609出土遺物実測図④ …… 210
第131図　第Ⅳ調査区包含層出土遺物実測図 …… 212
第132図　第Ⅴ－1・2調査区位置図 …… 213
第133図　第Ⅴ－2調査区土層柱状図⑰ …… 213
第134図　第Ⅴ－2調査区土層柱状図⑱ …… 213
第135図　SE603平・断面図、井戸枠出土状況図 …… 216
第136図　SE603出土遺物実測図 …… 217
第137図　SK6118～6121平・断面図、SK6118
出土遺物実測図 …… 219
第138図　SD6135土層断面図、出土遺物実測図 …… 221
第139図　SD6134土層断面図、SD6138・6153～6155
出土遺物実測図 …… 222
第140図　SD6156土層断面図、出土遺物実測図 …… 225
第141図　SR611・612・624土層断面図 …… 227～228
第142図　SR611出土遺物実測図 …… 229
第143図　SR612出土遺物実測図① …… 230
第144図　SR612出土遺物実測図② …… 231
第145図　SR612出土遺物実測図③ …… 232
第146図　SR616～618・622土層断面図 …… 235
第147図　SR613・615・616・618出土遺物実測図 …… 236
第148図　第Ⅴ－4調査区位置図 …… 237
第149図　第Ⅴ－4調査区土層柱状図⑲ …… 237
第150図　第Ⅴ－4調査区土層柱状図⑳ …… 237
第151図　SB604平・断面図 …… 239
第152図　SB605平・断面図、SP61260出土遺物実測図 …… 240
第153図　SB606・607平・断面図、SP61281平・断面図、
SP61281出土遺物実測図 …… 241
第154図　SB608平・断面図、SP61289出土遺物実測図 …… 243
第155図　SB609平・断面図、SP61306出土遺物実測図 …… 244
第156図　SB610・611平・断面図 …… 245
第157図　SB612・613平・断面図 …… 247
第158図　SB614平・断面図、SP61342出土遺物実測図 …… 248
第159図　SE604平・断面図、出土遺物実測図、
井戸枠出土状況図 …… 250
第160図　SK6126出土遺物実測図 …… 251

第161図　SD6161·6163～6165土層断面図、
SD6160·6161·6163～6166·6168出土遺物実測図 …… 252
第162図　SD6128·SR625·626土層断面図 …… 254
第163図　SD6128土層断面図 …… 255～256
第164図　SD6128出土遺物実測図① …… 257
第165図　SD6128出土遺物実測図② …… 258
第166図　SD6128出土遺物実測図③ …… 259
第167図　SD6128出土遺物実測図④ …… 260
第168図　SD6170出土遺物実測図① …… 262
第169図　SD6170出土遺物実測図② …… 263
第170図　SR625出土遺物実測図① …… 265
第171図　SR625出土遺物実測図② …… 266
第172図　SR626出土遺物実測図 …… 268
第173図　SX652·653出土遺物実測図 …… 269
第174図　第Ⅴ調査区包含層出土遺物実測図① …… 272
第175図　第Ⅴ調査区包含層出土遺物実測図② …… 273
第176図　花粉化石組成 …… 276
第177図　花粉化石（1） …… 277
第178図　花粉化石（2） …… 278
第179図　落し穴配置図 …… 280
第180図　落し穴分類図 …… 282
第181図　落し穴推定復元図 …… 286
第182図　大空遺跡出土遺物実測図① …… 288
第183図　大空遺跡出土遺物実測図② …… 289
第184図　大空遺跡出土遺物実測図③ …… 290
第185図　大空遺跡出土遺物実測図④ …… 291
第186図　大空遺跡出土遺物実測図⑤ …… 292
第187図　大空遺跡出土遺物実測図⑥ …… 293
第188図　製塩土器形態分類及び変遷図 …… 299
第189図　細部変遷図 …… 306
第190図　製塩土器法量変化 …… 308
第191図　前田東·中村遺跡Ｆ区SK07出土遺物実測図 …… 311
第192図　志度町天野出土遺物実測図 …… 313
第193図　第Ⅱ調査区　弥生時代遺構変遷図 …… 319～320

# 表　目　次

第１表　試掘·本調査一覧表 …… 9
第２表　分析試料一覧 …… 274
第３表　花粉分析結果 …… 276
第４表　落し穴観察表 …… 282
第５表　製塩土器鉢部容量表 …… 310
第６表　角閃石含有比率 …… 316
第７表　角閃石含有器種時期別変遷 …… 316
第８表　柱穴観察表 …… 321
第９表　土坑観察表 …… 333
第10表　土器観察表 …… 335
第11表　石器観察表 …… 416
第12表　木製品観察表 …… 420
第13表　鉄製品観察表 …… 420
第14表　瓦観察表 …… 421

# 付　図　目　次

付図１　小山・南谷遺跡遺構配置図
付図２　小山・南谷遺跡遺構配置図
付図３　小山・南谷遺跡遺構配置図
付図４　小山・南谷遺跡遺構配置図
付図５　小山・南谷遺跡土器変遷図

# 図 版 目 次


図版１　（１）調査区遠景
　　（２）高松平野夜景
図版２　（１）高松平野遠景（東より）
　　（２）高松平野遠景（南東より）
図版３　（１）高松平野北東部遠景（南東より）
　　（２）第Ⅰ・Ⅱ調査区遠景（南より）
図版４　（１）第Ⅰ調査区東部全景（真上より）
　　（２）第Ⅰ調査区西部全景（真上より）
図版５　（１）第Ⅰ調査区東部遺構完掘状況（西より）
　　（２）第Ⅰ調査区西部遺構完掘状況（東より）
図版６　（１）第Ⅰ・Ⅱ調査区遠景（東より）
　　（２）第Ⅰ・Ⅱ調査区遠景（西より）
図版７　（１）第Ⅱ－１調査区東壁（第７図土層柱状図②）土層断面（南西より）
　　（２）第Ⅱ－１調査区北壁（第７図土層柱状図③）土層断面（南より）
図版８　（１）第Ⅱ－１調査区北壁（第７図土層柱状図⑥）土層断面（南より）
　　（２）第Ⅱ－１調査区北壁（第７図土層柱状図⑦）土層断面（南より）
図版９　（１）第Ⅱ－１調査区東部北側全景（真上より）
　　（２）第Ⅱ－１調査区東部南側全景（真上より）
図版10　（１）第Ⅱ－１調査区中央部北側全景（真上より）
　　（２）第Ⅱ－１調査区中央部南側全景（真上より）
図版11　（１）第Ⅱ－１調査区西部北側全景（真上より）
　　（２）第Ⅱ－１調査区西部南側全景（真上より）
図版12　（１）第Ⅱ－１調査区西端全景（真上より）
　　（２）第Ⅱ－１調査区西端北側全景（真上より）
図版13　第Ⅱ－２調査区東部全景（真上より）
図版14　第Ⅱ－２調査区西部全景（真上より）
図版15　（１）第Ⅱ－１調査区東端遺構完掘状況（北より）
　　（２）第Ⅱ－１調査区SH501～504検出状況（北より）
図版16　（１）第Ⅱ－１調査区東部北側遺構完掘状況（西より）
　　（２）第Ⅱ－１調査区東部南側遺構完掘状況（西より）
図版17　（１）第Ⅱ－１調査区中央部北側遺構完掘状況（東より）
　　（２）第Ⅱ－１調査区中央部北側遺構完掘状況（西より）
図版18　（１）第Ⅱ－１調査区中央部南側遺構完掘状況（西より）
　　（２）第Ⅱ－１調査区西部北側遺構完掘状況（東より）
図版19　（１）第Ⅱ－１調査区西部遺構完掘状況（東より）
　　（２）第Ⅱ－１調査区西部遺構完掘状況（西より）
図版20　（１）第Ⅱ－１調査区縄文時代土坑群検出状況（東より）
　　（２）第Ⅱ－１調査区SK544完掘状況（西より）
図版21　（１）第Ⅱ－１調査区SK545土層断面（西より）
　　（２）第Ⅱ－１調査区SK545完掘状況（西より）
　　（３）第Ⅱ－１調査区SK547土層断面（西より）
　　（４）第Ⅱ－１調査区SK547完掘状況（北西より）
図版22　（１）第Ⅱ－１調査区SK559完掘状況・SK554土層断面（南より）
　　（２）第Ⅱ－１調査区SK554土層断面（南より）
　　（３）第Ⅱ－１調査区SK554完掘状況（南より）
　　（４）第Ⅱ－１調査区SK554完掘状況（真上より）
図版23　（１）第Ⅱ－１調査区SK552土層断面（東より）
　　（２）第Ⅱ－１調査区SK552完掘状況（東より）
　　（３）第Ⅱ－１調査区SK549土層断面（南より）
　　（４）第Ⅱ－１調査区SK555土層断面（北より）
図版24　（１）第Ⅱ－１調査区SK558土層断面（南より）
　　（２）第Ⅱ－１調査区SK558完掘状況（真上より）
　　（３）第Ⅱ－１調査区SK559土層断面（南より）
　　（４）第Ⅱ－１調査区SK559完掘状況（北より）
図版25　（１）第Ⅱ－１調査区SK561土層断面（北より）
　　（２）第Ⅱ－１調査区SK561完掘状況（南より）
　　（３）第Ⅱ－１調査区SK563土層断面（南より）
　　（４）第Ⅱ－１調査区SK563完掘状況（北より）
図版26　（１）第Ⅱ－１調査区SK564検出状況（南より）
　　（２）第Ⅱ－１調査区SK564土層断面（南より）
　　（３）第Ⅱ－１調査区SK564完掘状況（南より）
　　（４）第Ⅱ－１調査区SK564完掘状況（南より）
図版27　（１）第Ⅱ－１調査区SK566検出状況（西より）
　　（２）第Ⅱ－１調査区SK566土層（南より）
　　（３）第Ⅱ－１調査区SK566土層断面（南より）
　　（４）第Ⅱ－１調査区SK566完掘状況（南より）
図版28　（１）第Ⅱ－１調査区SK568検出状況（南より）
　　（２）第Ⅱ－１調査区SK568土層断面（南より）
　　（３）第Ⅱ－１調査区SK568完掘状況（西より）
　　（４）第Ⅱ－１調査区SK579土層断面（西より）
図版29　（１）第Ⅱ－１調査区西端全景（真上より）
　　（２）第Ⅱ－１調査区SR501土層断面（東より）
図版30　（１）第Ⅱ－１調査区SR502土層断面（南西より）
　　（２）第Ⅱ－１調査区SR502土層断面拡大（南西より）
図版31　（１）第Ⅱ－２調査区東部完掘状況（東より）
　　（２）第Ⅱ－２調査区SR604土層断面（東より）

図版32 （1）第Ⅱ－2調査区西部完掘状況（東より）
（2）第Ⅱ－2調査区北壁土層断面（南西より）
図版33 （1）第Ⅱ－1調査区SH501～504検出状況（北より）
（2）第Ⅱ－1調査区SH503･504完掘状況（北より）
図版34 （1）第Ⅱ－1調査区SH505検出状況（西より）
（2）第Ⅱ－1調査区SH505完掘状況（西より）
図版35 （1）第Ⅱ－1調査区SH505土層断面（東より）
（2）第Ⅱ－1調査区SH505遺物出土状況（西より）
図版36 （1）第Ⅱ－1調査区SH509検出状況（南より）
（2）第Ⅱ－1調査区SH509完掘状況（南より）
図版37 （1）第Ⅱ－1調査区SH509土層断面（南より）
（2）第Ⅱ－1調査区SH509遺物出土状況（西より）
図版38 （1）第Ⅱ－1調査区SH509炉土層断面（西より）
（2）第Ⅱ－1調査区SH509内柱穴出土遺物（北より）
図版39 （1）第Ⅱ－1調査区SH511上層遺物出土状況（南西より）
（2）第Ⅱ－1調査区SH511上層遺物出土状況（西より）
図版40 （1）第Ⅱ－1調査区SH511上層遺物出土状況（南西より）
（2）第Ⅱ－1調査区SH511上層遺物出土状況（南より）
図版41 （1）第Ⅱ－1調査区SH511上層遺物出土状況（西より）
（2）第Ⅱ－1調査区SH511東西土層断面（西より）
図版42 （1）第Ⅱ－1調査区SH511床面検出状況（南西より）
（2）第Ⅱ－1調査区SH511完掘状況（南西より）
図版43 （1）第Ⅱ－1調査区SH511完掘状況（北より）
（2）第Ⅱ－1調査区SH511炉土層断面（北より）
図版44 （1）第Ⅱ－1調査区SH513東西土層断面（北より）
（2）第Ⅱ－1調査区SH513完掘状況（北より）
図版45 （1）第Ⅱ－1調査区SH515東西土層断面（北より）
（2）第Ⅱ－1調査区SH515遺物出土状況（西より）
図版46 （1）第Ⅱ－1調査区SH515完掘状況（南より）
（2）第Ⅱ－1調査区中央部北側遺構完掘状況（東より）
図版47 （1）第Ⅱ－1調査区SH519東西土層（北より）
（2）第Ⅱ－1調査区SH519遺物出土状況（北より）
図版48 （1）第Ⅱ－1調査区SH519遺物出土状況（北より）
（2）第Ⅱ－1調査区SH519完掘状況（北より）
図版49 （1）第Ⅱ－1調査区SH518遺構検出状況（北西より）
（2）第Ⅱ－1調査区SH518遺物出土状況（北より）
図版50 （1）第Ⅱ－1調査区SH518完掘状況（北西より）
（2）第Ⅱ－1調査区SH518完掘状況（北西より）
図版51 （1）第Ⅱ－1調査区SH521検出状況（南より）
（2）第Ⅱ－1調査区SH521完掘状況（南より）
図版52 （1）第Ⅱ－1調査区SH521（SP51006）土層断面（南より）
（2）第Ⅱ－1調査区SH521炉（SK584）内遺物出土状況（真上より）
図版53 （1）第Ⅱ－1調査区SK518遺物出土状況（北より）
（2）第Ⅱ－1調査区SK519土層断面（西より）
図版54 （1）第Ⅱ－1調査区SK519遺物出土状況（西より）
（2）第Ⅱ－1調査区SD523土層断面（南より）
図版55 （1）第Ⅱ－1調査区SD524土層断面（南より）
（2）第Ⅱ－1調査区SD526土層断面（南より）
図版56 （1）第Ⅱ－1調査区SD552土層断面（南より）
（2）第Ⅱ－1調査区SD572土層断面（南西より）
図版57 （1）第Ⅲ調査区東部全景（真上より）
（2）第Ⅲ調査区西部全景（真上より）
図版58 （1）第Ⅲ調査区東部遺構完掘状況（西より）
（2）第Ⅲ調査区西部遺構完掘状況（東より）
図版59 （1）第Ⅲ調査区SR505土層断面（南より）
（2）第Ⅲ調査区北壁土層断面（南より）
図版60 第Ⅳ－1調査区全景（真上より）
図版61 第Ⅳ－2調査区全景（真上より）
図版62 （1）第Ⅳ－1調査区第1遺構面遺構完掘状況（西より）
（2）第Ⅳ－2調査区第1遺構面遺構完掘状況（東より）
図版63 （1）第Ⅳ－2調査区第1遺構面SD6116土層断面（北より）
（2）第Ⅳ－2調査区第1遺構面SD6116遺物出土状況（東より）
図版64 （1）第Ⅳ－2調査区第1遺構面SD6127遺物出土状況（南より）
（2）第Ⅳ－3調査区西部完掘状況（東より）
図版65 （1）第Ⅳ－3調査区東部完掘状況（東より）
（2）第Ⅳ－1調査区東部第2遺構面完掘状況（東より）
図版66 （1）第Ⅳ－1調査区西部第2遺構面完掘状況（西より）
（2）第Ⅳ－2調査区第2遺構面完掘状況（西より）
図版67 （1）第Ⅳ－2調査区第2遺構面完掘状況（東より）
（2）第Ⅳ－2調査区第2遺構面SR608･607完掘状況（北より）
図版68 （1）第Ⅳ－2調査区第2遺構面SR608・607土層断面（南より）
（2）第Ⅳ－2調査区第2遺構面SR608北壁土層断面（南より）
図版69 （1）第Ⅳ－2調査区第2遺構面SR607北壁土層断面（南より）
（2）第Ⅳ－2調査区第2遺構面完掘状況（南東より）
図版70 （1）第Ⅳ－2調査区第2遺構面SD6133土層断面（北西より）
（2）第Ⅳ－2調査区第2遺構面SD6133土層断面拡大（北西より）
図版71 （1）第Ⅴ－1調査区第1遺構面完掘状況（西より）
（2）第Ⅴ－1調査区第1遺構面完掘状況（東より）
図版72 （1）第Ⅴ－1調査区第1遺構面SD6128完掘状況（東より）
（2）第Ⅴ－2調査区第1遺構面完掘状況（西より）
図版73 （1）第Ⅴ－2調査区第2遺構面完掘状況（西より）
（2）第Ⅴ－2調査区西端第2遺構面完掘状況（西より）
図版74 （1）第Ⅴ－2調査区第2遺構面SE603土層断面（東より）
（2）第Ⅴ－2調査区第2遺構面SE603檜出土状況（上より）

図版75　（1）第Ⅴ－2調査区第2遺構面SE603遺物出土状況（西より）
（2）第Ⅴ－2調査区第2遺構面SE603遺物出土状況（南より）
図版76　（1）第Ⅴ－2調査区第2遺構面SE603遺物出土状況（上より）
（2）第Ⅴ－2調査区第2遺構面SE603完掘状況（上より）
図版77　（1）第Ⅴ－1調査区東端第3遺構面完掘状況（西より）
（2）第Ⅴ－1調査区東端第3遺構面完掘状況（北より）
図版78　（1）第Ⅴ－1調査区東端第3遺構面完掘状況（東より）
（2）第Ⅴ－1調査区第3遺構面東壁土層断面（西より）
図版79　（1）第Ⅴ－1調査区第3遺構面完掘状況（西より）
（2）第Ⅴ－1調査区第3遺構面SK6118土層断面（南より）
図版80　（1）第Ⅴ－1調査区第3遺構面SK6119土層断面（北より）
（2）第Ⅴ－1調査区第3遺構面SK6121土層断面（南より）
図版81　（1）第Ⅴ－2調査区東部第3遺構面完掘状況（北より）
（2）第Ⅴ－2調査区第3遺構面完掘状況（東より）
図版82　（1）第Ⅴ－2調査区第3遺構面完掘状況（東より）
（2）第Ⅴ－2調査区西端第3遺構面完掘状況（西より）
図版83　第Ⅴ－4調査区全景（真上より）
図版84　（1）第Ⅴ－4調査区第1遺構面完掘状況（西より）
（2）第Ⅴ－4調査区第1遺構面完掘状況（南より）
図版85　（1）第Ⅴ－4調査区第1遺構面SB608（SP61289）検出状況（西より）
（2）第Ⅴ－4調査区第1遺構面SB614完掘状況（西より）
図版86　（1）第Ⅴ－4調査区第1遺構面SE604土層断面（北西より）
（2）第Ⅴ－4調査区第1遺構面SE604検出状況（南東より）
図版87　（1）第Ⅴ－4調査区第1遺構面SE604検出状況（北東より）
（2）第Ⅴ－4調査区第1遺構面SE604検出状況（西より）
図版88　（1）第Ⅴ－4調査区第1遺構面SE604検出状況（南より）
（2）第Ⅴ－4調査区第1遺構面SE604検出状況（北西より）
図版89　（1）第Ⅴ－4調査区第1遺構面SE604検出状況（南東より）
（2）第Ⅴ－4調査区第1遺構面SE604完掘状況（南西より）
図版90　（1）第Ⅴ－4調査区第1遺構面SD6128土層断面（北東より）
（2）第Ⅴ－4調査区第1遺構面SD6128土層断面（東より）
図版91　（1）第Ⅴ－4調査区第1遺構面SD6128土層断面（東より）
（2）第Ⅴ－4調査区第2遺構面SR626完掘状況（東より）
図版92　（1）第Ⅴ－4調査区第2遺構面SR626·625完掘状況（南より）
（2）第Ⅴ－4調査区第2遺構面SR626土層断面（東より）
図版93　小山・南谷遺跡出土遺物①
図版94　小山・南谷遺跡出土遺物②

# 第１章　調査の経緯

## 第１節　調査に至る経緯

県道高松志度線道路改良事業は、徳島県と県都高松市を結ぶ一般国道11号線の渋滞緩和のため、現在山間部を縫うように走る県道高松志度線のバイパス建設工事として計画された事業である。牟礼町区間では既に現道拡幅の形で２車線化が一部進められており、高松市内区間（県道塩江屋島西線以東区間）については、平成４年度に急速に建設工事が進展した。

香川県教育委員会事務局文化行政課（以下文化行政課とする）は、事業予定地周辺に弥生時代後期初頭の標識遺跡として著名な大空（スベリ山）遺跡や南谷遺跡が隣接して所在すること、丘陵縁辺部には南谷古墳、長尾古墳群（現存３基）等の後期古墳が所在することから平成４年７月に現地踏査を行い、大規模な採土及び地下げ部分を除く延長約1.8㎞について事前に試掘調査を実施する必要があると判断し、香川県土木部道路建設課と文化行政課との間で試掘調査の方法、時期等について協議した結果、大半の部分が平成４年度秋に用地買収の集団調印が行われることから、平成５年２月から試掘調査を開始することとなった。

平成４年度の試掘調査の対象範囲は県道塩江屋島西線以東の延長1,800ｍ、幅15～29ｍ、面積約30,000㎡である。試掘調査では事前の分布調査で確認した地形・地割及び水路や公・私道の現状等を勘案して試掘トレンチを設定し、順次用地買収の完了した部分から試掘調査を開始した。しかし、用地買収の進捗状況により、平成４年度の試掘調査は西から錨池西方地区、長尾池東方地区、丘陵縁辺地区、山間部地区（第Ⅰ調査区東方）の４箇所（第１図）についてのみの実施となった。

試掘調査は平成５年度も継続して実施し、平成４年度に実施できなかった部分、県道塩江屋島西線の東隣接地区、錨池西方地区と長尾池東方地区間、長尾池東方地区と丘陵縁辺地区間の３箇所が試掘調査対象地となった。

また、平成７年度には県道塩江屋島西線道路改修工事に伴い同路線の西側に隣接する部分の試掘調査を実施した。

各年度の試掘調査の結果をもとに文化行政課は香川県土木部道路建設課との協議の結果、県道塩江屋島西線から丘陵部間で、20,957㎡の範囲（第２図　第Ⅰ～Ⅵ調査区）について保護措置が必要と判断した。

保護措置が必要となった部分は東西延長約1,500ｍの広大な範囲にあり、西は高松市新田町小山、東は高松市高松町南谷に位置するが、同一路線内であること、範囲内には保護措置の不要部分も部分的にあるが近接すること、確認遺構内容も概ね近似することから同一遺跡とし、「小山・南谷遺跡」と命名した。

## 第２節　調査の経過

小山・南谷遺跡は香川県による「県道高松志度線道路改良事業」・「県道塩江屋島西線道路改修事業」に先立ち、発掘調査を実施した遺跡である。

平成４・５・７年度の３ヵ年に文化行政課によって試掘調査が実施され、20,957㎡が発掘調査対象地となり、発掘調査は平成５年度から実施し、平成６・７年度の３ヵ年で実施した。

調査グリッドは、同一遺跡であることと平成５年度から継続事業として実施することから調査対

象範囲全域を同一の呼称で識別できるものとした。

道路予定地が直線的に東西に延び、調査対象地が国土座標に合致することからグリッド配置は、国土座標を基準として設定した（第２図）。グリッドの呼称は東西を東からローマ数字で１～○とし、南北を北からアルファベットでＡ～○とした。

小山・南谷遺跡は部分的に保護措置の不要部分と現道のため調査対象外となる部分が計３箇所あり、調査区は４箇所に分かれている。また、調査年度の違いにより、個別の呼称として遺跡範囲東から第Ⅰ調査区～第Ⅵ調査区とし、更に細分が必要な部分については第Ⅰ－１～○調査区とした。

平成５年度の発掘調査は第Ⅰ調査区、第Ⅱ調査区（発掘調査時には第Ⅱ－１～３調査区　当報告書では第Ⅱ－１調査区とした）、第Ⅲ調査区で、概ね小山・南谷遺跡の東半部である。対象面積は10,000㎡で、平成５年４月１日～平成６年３月31日までの12ヶ月間で実施した。

発掘調査は工事請負方式で、４月21日に請負業者と契約を行い、安全柵の打設、仮畦畔設置、現地盤測量などの作業を経て、５月13日から表土掘削を開始した。

調査は第Ⅰ調査区から開始し、重複させながら第Ⅱ調査区、第Ⅲ調査区へと展開した。第Ⅰ調査区では、中世～近世にかけての溝状遺構・柱穴跡を中心として検出し、第Ⅱ調査区では弥生時代後期前半の掘立柱建物跡・竪穴住居跡・溝状遺構・土壙墓・柱穴跡を検出し、第Ⅲ調査区では自然流路跡の堆積層を検出した。第Ⅱ調査区からは多量の弥生土器と共に製塩土器が出土した。現地での調査は平成６年３月18日に終了した。

平成６年度の発掘調査は第Ⅱ調査区（発掘調査時には第Ⅱ－４・５調査区　当報告書では第Ⅱ－２調査区とした）、第Ⅳ調査区、第Ⅴ調査区（第Ⅴ－１～４調査区）で、概ね小山・南谷遺跡の西半部である。対象面積は10,341㎡で、平成６年４月１日～平成７年３月31日までの12ヶ月間で実施した。発掘調査は工事請負方式で、４月21日に請負業者と契約を行い、安全柵の打設などの作業を経て、５月23日から表土掘削を開始した。しかし、用地の関係から第Ⅴ調査区（第Ⅴ－３調査区　宅地部分）の2,038㎡については翌年度に継続調査をすることとなり、対象面積も8,303㎡に変更することとなった。現地での調査は平成６年３月中旬に終了した。

平成７年度の発掘調査は第Ⅴ調査区（Ⅴ－３調査区　宅地部分）、小山・南谷遺跡の西端部である。

対象面積は当初2,038㎡で、調査期間は平成７年７月１日～９月30日までの３ヶ月間であった。しかし、県道高松志度線と県道塩江屋島西線との交差点部分、県道塩江屋島西線道路改修に伴い路線西側で用地買収が進み、平成７年６月に文化行政課はこの部分について試掘調査を実施し、試掘対象地内の616㎡において溝状遺構・柱穴跡などの遺構と共に須恵器・土師器が出土したことから、埋蔵文化財包蔵地であることを確定した。これを受けて、香川県教育委員会は当初計画に追加し、小山・南谷遺跡の第Ⅵ調査区として発掘調査を実施することとした。

その結果、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターは香川県教育委員会と契約変更を行い、平成７年度の調査面積は第Ⅴ－３調査区と第Ⅵ調査区の合計で2,654㎡、調査期間は平成７年７月１日～11月31日の５ヶ月間となった。発掘調査は直営方式で実施した。

平成５～７年度の小山・南谷遺跡の発掘調査は各年度の４月１日に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターと香川県教育委員会との間で締結した「埋蔵文化財調査契約書」にもとづき実施した。

今回報告するのは、平成５・６年度に発掘調査を実施した第Ⅰ～Ⅳ調査区、第Ⅴ－１・２・４調査区である。平成７年度に発掘調査を実施した第Ⅴ－３調査区、第Ⅵ調査区については、平成８年度

第１図　試掘トレンチ配置図

Y56,700
Y56,800
Y56,900
Y57,000
Y57,100
Y57,200
Y57,300
X146,800
X146,700
長尾池
第Ⅲ調査区
第Ⅱ－2調査区
新池
第Ⅱ－1調査区
唐戸下池
唐戸池
第Ⅰ調査区
35
30
25
20
15
10
5
Y55,900
Y56,000
Y56,100
Y56,200
Y56,300
Y56,400
Y56,500
Y56,600
第Ⅵ調査区
第Ⅴ－4調査区
第Ⅴ－3調査区
第Ⅴ－2調査区
第Ⅴ－1調査区
第Ⅳ－3調査区
第Ⅳ－2調査区
第Ⅳ－1調査区
鎧池
75
70
65
60
55
50
40
0
45
100m

第２図　調査区割図

に整理作業を実施し、平成９年度（1997）に「県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　小山・南谷遺跡Ⅰ」として刊行している。今回報告する小山・南谷遺跡は「小山・南谷遺跡Ⅱ」として、刊行する。したがってこの報告書を以て「県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告　小山・南谷遺跡」は完結する。

発掘調査体制は下記のとおりである。

平成５年度

| 文化行政課 | | | 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 総括 | 課長 | 中村　仁 | 総括 | 所長 | 松本　豊胤 |
| | 主幹 | 菅原　良弘 | | 次長 | 真鍋　隆幸 |
| 総務 | 係長 | 源田　和幸 | 総務 | 係長 | 土井　茂樹 |
| | 主任主事 | 櫻木　新士 | | 係長 | 上林　和明 |
| | 主事 | 藤原　和子 | | 主査 | 西村　厚二 |
| 埋蔵文化財 | 係長 | 藤好　史郎 | 調査 | 文化財専門員 | 中川　芳和 |
| | 主任技師 | 國木　健司 | | 主任技師 | 片桐　孝浩 |
| | 主任技師 | 森下　英治 | | 参事 | 糸目　末夫 |
| | | | | 調査技術員 | 石井　健一 |

平成６年度

| 文化行政課 | | | 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 総括 | 課長 | 高木　尚 | 総括 | 所長 | 松本　豊胤 |
| | 課長補佐 | 高木　一義 | | 次長 | 真鍋　隆幸 |
| 総務 | 係長 | 源田　和幸 | 総務 | 参事（土木） | 別枝　善昭 |
| | 主査 | 星加　宏明 | | 係長 | 前田　和也 |
| | 主事 | 高倉　秀子 | | 主査 | 西村　厚二 |
| 埋蔵文化財 | 係長 | 藤好　史郎 | 調査 | 主任技師 | 森下　友子 |
| | 主任技師 | 國木　健司 | | 主任技師 | 山田　秀樹 |
| | 主任技師 | 森下　英治 | | 参事 | 糸目　末夫 |
| | | | | 調査技術員 | 佐柳　真樹 |

整理作業は平成17年４月１日より開始し、平成18年３月31日に終了した。

整理作業体制は下記のとおりである。

平成17年度

文化行政課

| | | |
|---|---|---|
| 総括 | 課　長 | 吉田　光成 |
| | 課長補佐 | 中村　禎信 |
| 総務 | 副主幹 | 河内　一裕 |
| | 主任主事 | 八木　秀憲 |
| 埋蔵文化財 | 課長補佐 | 藤好　史郎 |
| | 文化財専門員 | 山下　平重 |
| | 文化財専門員 | 信里　芳紀 |

香川県埋蔵文化財センター

| | | |
|---|---|---|
| 総括 | 所　長 | 渡部　明夫 |
| | 次　長 | 榊原　正人 |
| 総務課 | 副主幹 | 松崎　日出穂 |
| | 主　査 | 塩崎　かおり |
| | 主　査 | 田中　千晶 |
| 資料普及課 | 課　長 | 廣瀬　常雄 |
| | 文化財専門員 | 片桐　孝浩 |
| | 整理作業員 | 葛西　薫 |
| | | 小林　里美 |
| | | 田井　景子 |
| | | 徳永　貴美 |
| | | 西桶　右子 |
| | | 山地　真理子 |

## 第１表　試掘・本調査一覧表

試掘調査

| 年　　度 | 所在地 | 試掘面積(㎡) |
|---|---|---|
| 平成４年度 | 高松市高松町・新田町 | 858 |
| 平成５年度 | 高松市高松町・新田町 | 323 |
| 平成７年度 | 高松市新田町 | 34 |

本調査

| 年　　度 | 所在地 | 調査面積(㎡) | 調査期間 | 遺　　構 | 遺　　物 | 調査方法 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 平成５年度 | 高松市高松町 | 10,000 | 平成５年４月１日～<br>平成６年３月31日 | 縄文時代おとし穴、弥生時代竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土壙墓・溝・土坑・柱穴・自然流路跡等 | 縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器 | 工事請負 | 小山･南谷遺跡Ⅱ<br>(当報告書) |
| 平成６年度 | 高松市高松町・新田町 | 8,303 | 平成６年４月１日～<br>平成７年３月31日 | 縄文時代自然流路跡、弥生時代溝、平安時代掘立柱建物跡・井戸跡・溝等 | 縄文土器・弥生土器・須恵器・土師器・墨書土器・土馬等 | 工事請負 | 小山･南谷遺跡Ⅱ<br>(当報告書) |
| 平成７年度 | 高松市新田町 | 2,654 | 平成７年７月１日～<br>11月31日 | 条里坪界溝・井堰・井戸跡・掘立柱建物跡等 | 土師器・須恵器・小型素文鏡・金環 | 直営 | 小山･南谷遺跡Ⅰ<br>(1997刊行) |

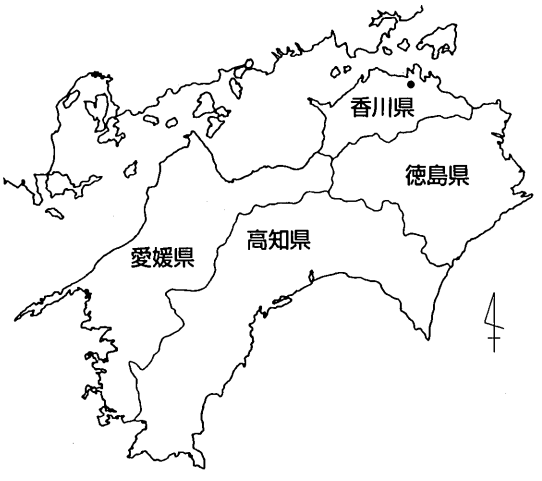

参考文献
「香川県埋蔵文化財調査年報」　平成５年度　香川県教育委員会　1994
「香川県埋蔵文化財調査年報」　平成６年度　香川県教育委員会　1995
「香川県埋蔵文化財調査年報」　平成７年度　香川県教育委員会　1996
「埋蔵文化財試掘調査報告Ⅵ　国道バイパス・県道建設予定地及び県営ほ場整備事業予定地内の調査」　香川県教育委員会　1993
「埋蔵文化財試掘調査報告Ⅶ　国道バイパス・県道・高松土木事務所建設予定地及び県営ほ場整備事業予定地内の調査」　香川県教育委員会　1994
「県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　小山･南谷遺跡　平成５年度」　香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1994
「県道関係埋蔵文化財発掘調査概報　平成６年度」　香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1995
「県道関係埋蔵文化財発掘調査概報　平成７年度」　香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1996
「県道高松志度線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　小山･南谷遺跡Ⅰ」　香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1997
「県道塩江屋島西線道路改修に伴う埋蔵文化財試掘調査実績報告書」　香川県教育委員会　1996

# 第２章　立地と環境

## 第１節　地理的環境

小山・南谷遺跡は高松平野の北東部にあり、西は新川・春日川・詰田川による氾濫原、東は立石山山塊、南はその立石山山塊から西に延びる久米山丘陵、北は屋島と瀬戸内海によって遮られた南北約３㎞、東西約1.5㎞の範囲の東から西に向けて緩やかに傾斜する扇状地に位置する。

この地域で確認されている遺跡の立地を見ると屋島から久米池に向けて延びる現在の県道塩江屋島西線（通称新田街道）より東側に全て所在する。これは新田街道より西が河川の氾濫原で、居住域に適していなかったためである。




第３図　遺跡位置図

周辺地域の地理的環境の詳細については、第３章第１節　周辺環境の復元に譲る。

## 第２節　歴史的環境

小山・南谷遺跡の周辺には、主として弥生時代から古墳時代の遺跡が所在する。これらは特に立石山山塊から北西方向に蜘蛛手状に延びる丘陵上、丘陵緩斜面ないし、低丘陵地一帯に集中している。それが近年の調査と小山・南谷遺跡の調査で、縄文時代前期・後期の遺物が出土したことから当地域での集落の形成が縄文時代まで遡ること、弥生時代の集落がかなり広い範囲で形成されていたことが判明した。

確認・推定できる遺跡を時期的に見ると現在、旧石器時代の遺構・遺物は確認されていない。

縄文時代になると小山･南谷遺跡で、縄文時代前期の土器、縄文時代後期の縁帯文土器が出土し、縄文時代後期と考えられる落し穴を確認している。落し穴の検出は香川県初で、検出位置、配置等から縄文時代の狩猟方法の一端が解明できるものと考える。同時期の竪穴住居等の明確な集落遺構を検出していないが、隣接して集落があった可能性が考えられる。また縄文時代晩期の突帯文土器も出土しており、断続的に縄文時代前期から集落が形成されていたことが解る。

弥生時代では縄文時代晩期の突帯文土器と共に弥生時代前期の刻み目貼り付け突帯を持った甕、中期の土器、後期の土器が出土していることから弥生時代全期を通じて、連綿と集落が形成されていたことが判明した。ただし、弥生時代前期、中期の土器の出土は少量で、集落の規模は小規模であったと考えられる。

弥生時代の集落の立地をみると立石山山塊から北西方向に延びる丘陵が蜘蛛手状に派生し、その丘陵間に集落が形成されていたものと考えられる。弥生時代の集落としては、岡山古墳群が形成される南部の丘陵と長尾古墳群が形成される小山・南谷遺跡の北側にある丘陵に挟まれた部分に集落の一つが想定される。この部分には更に旧流路が想定され、旧流路間に挟まれた部分にかなり広い範囲で緩傾斜部分が存在することから、この部分が集落の中心と考えられ、小山・南谷遺跡が所在する旧流路間に挟まれた部分にはやや規模の小さい集落が形成されていたものと考えられる。ま

た、長尾古墳群が所在する丘陵の北側の谷部でも、平成９～12年に高松市教育委員会により高松市東部運動公園整備に伴う事前の調査で奥の坊権現前遺跡(註1)、奥の坊遺跡、大空北遺跡(註2)、奥の坊奥池西遺跡(註3)などの弥生時代中期～後期の集落が検出されており、弥生時代後期に限定すれば丘陵間に挟まれた緩傾斜部分にかなり広い範囲で集落が形成されていたことが解る。

また、この地域で確認されている弥生時代の集落の標高を見ると大空遺跡(註4)(推定標高約65m)、南谷遺跡(註5)(推定標高約55m)、大空南遺跡（推定標高約70m)、奥の坊奥池西遺跡（標高約47m)、奥の坊権現前遺跡（標高約36m)、大空北遺跡（標高約43m)、小山・南谷遺跡（標高約23～37m）の７遺跡である。このように遺跡の標高は標高約23～70mの範囲にあり、当時の海岸線が現標高の２～３mと考えられることからかなり高所に集落が立地していたことになる。この高所の立地を時期ごとに見ると、弥生時代後期初頭には標高60～70mに集落が所在し、弥生時代後期中葉になると徐々に標高20～40mに居住域が移り変わるものと考えられる。

これらの遺跡は立石山山塊から北西に延びる丘陵の先端部に位置するが、標高60m以上は等高線が密になるかなりの傾斜面で、標高60m以下は等高線の間隔も開き、緩傾斜となり、集落規模の拡大に伴い安定した部分へ集落が移り変わっていったものと考えられる。

また、これらの遺跡は約１㎞以内にあり、周辺に同時期の遺跡がないことから、この７遺跡が広義の弥生時代の１つの集落として考えられるものである。

一方南部の久米山丘陵周辺には久米池遺跡(註6)、久米池南遺跡(註7)、川添浄水場遺跡(註8)など弥生時代中期にまで遡る遺跡があり、後期初頭まで営まれていることから久米山丘陵の北側と南側に２つの集落を形成していた集団が所在していたことが窺われる。

また、立石山南西麓に所在する前田東・中村遺跡でも弥生時代の集落が確認されており、ここにも弥生時代に別の集団が集落を形成していたことが窺われる。

古墳時代になると新川の東に立石山から西に派生する久米山丘陵があり、その頂部に碧玉製鍬形石・舶載画文帯神獣鏡・鉄剣・大型の祭祀用鉄鏃等の副葬品が出土した前期前方後円墳である高松市茶臼山古墳(註9)が造られる。この古墳は古墳の構造、出土遺物から畿内勢力との関係が窺われ、同時期に在地勢力の中心であった高松平野中央部を基盤とする石清尾山古墳群(註10)に楔を打ち込むように造られた古墳である。古墳時代中期の古墳は確認されていないが、古墳時代後期になると小山・南谷遺跡の北側の丘陵に所在する長尾古墳群、南側の丘陵に所在する岡山古墳群と岡山小古墳群、久米山丘陵に所在する久米山古墳群、立石山山塊の南西部の丘陵に所在する平尾古墳群が形成される。特に岡山古墳群が所在する丘陵と久米山丘陵間の低丘陵地には久本古墳(註11)、小山古墳、山下古墳(註12)が造られる。特に久本古墳は横穴式石室で、奥壁に石棚が作られ、石室内から畿内型の亀甲型陶棺が出土することから、畿内との密接な関係が窺われる古墳である。

古代になるとこの平野部分に白鳳期の瓦が出土している山下廃寺(註13)が所在し、また立石山山塊の南西部、高松市前田東町付近は山田郡の郡衙が所在したと推定され、白鳳期の瓦が出土した宝寿寺跡が所在する。

立石山山塊の西及び南西部も含めて後期古墳の分布を見ると、北部の長尾古墳群を中心として、小山・南谷遺跡周辺に分布する古墳群のグループ①、岡山小古墳群、岡山古墳群を中心として周辺に分布する古墳群のグループ②、久米山丘陵を中心として分布する古墳群のグループ③、平尾古墳群、平尾小古墳群を中心として分布する古墳群のグループ④が形成されている。それぞれのグルー

プでは周辺に弥生時代の集落があり、おそらくこれらの集落が統一される形で、高松市茶臼山古墳が造られ、中期は不明であるが、古墳時代後期にそれぞれのグループ毎に再度、古墳群が形成されることが解る。古代になるとそのグループの中でグループ②・③間とグループ④周辺に古代寺院が造られることから、これらの古墳群を形成した集団が古代に続き、この地域を支配していたことが解る。一方グループ①を形成した集団は、古代まで存続せず、グループ②・③に吸収されるか没落したことが想定される。

古代の遺跡の分布は概ね新川の東部に展開する集団が形成したものと考えられるが、新川の氾濫原や久米山丘陵を境として久米山丘陵北部は北を瀬戸内海、西を新川、南を久米山丘陵、東を立石山山塊で画されており、高松平野からは隔絶した地域であることが解る。

この地域には現存する表層条里地割が確認できる。条里地割には２種類あり、南部を中心として高松平野に残る条里地割と同方向、おそらく南海道を規程の山田郡条里地割を延伸拡張した地割と北部を中心とした異方位条里地割である。前者がＮ－11°－Ｅをとり、後者はＮ－５°－Ｅと若干方位を異にする。藤好はこの異方位条里地割に注目し、小山・南谷遺跡で検出した８世紀頃の東西溝を根拠とし、屋島城との関係を考察した[(註14)]。屋島城[(註15)]は日本書紀天智６年の条に記載された「屋島城」で、この隔絶した地域の北部にある屋島に所在する。この屋島城は中央直轄の城で、その維持を地方に任せず、人的にも経済的にも地方から切り放した基盤を持たせることが必要とし、そのためにこの隔絶した地域に異方位条里地割が存在するとした。

このように古墳時代～古代においてこの地域は、在地勢力との関係は薄く、常に畿内中央政権との関係が密接であった地域であることが解る。

(註)

(１)「高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第２冊　奥の坊遺跡群Ⅱ（奥の坊権現前遺跡）」高松市教育委員会　2004

(２)「高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第３冊　奥の坊遺跡群Ⅲ（大空北遺跡・奥の坊奥池西遺跡）」高松市教育委員会　2004

(３)　註（２）に同じ

(４)「すべり山遺跡」『香川叢書　考古編』香川県教育委員会　1983
「大空遺跡出土弥生土器」『高松市歴史資料館収蔵資料目録』高松市歴史資料館　1996

(５)　大久保徹也「後期前半段階の資料群」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第６冊　上天神遺跡』香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1995

(６)「高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第４冊　奥の坊遺跡群Ⅳ（奥の坊古墳群・久米池遺跡）」高松市教育委員会　2006

(７)「久米池南遺跡発掘調査報告書」高松市教育委員会　1989

(８)「鶴尾神社４号墳調査報告書」高松市教育委員会　1983

(９)「高松市茶臼山古墳」『香川叢書　考古編』香川県教育委員会　1983

(10)「讃岐高松石清尾山石塚の研究」京都帝国大学文学部　1933

(11)「保存整備・市道新田町61号線道路改良に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　久本古墳」高松市教育委員会　1980.3

(12)「高松市山下古墳調査報告」香川県教育委員会　1980

(13)　川畑　聰『第11回特別展　讃岐の古瓦展』高松市歴史資料館　1996

(14)　藤好史郎「屋島城と城山城　－古代山城研究の一視点－」『研究紀要Ⅴ　特集７世紀の讃岐』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1997

(15)「史跡天然記念物屋島」高松市教育委員会　2003

1 小山・南谷遺跡（平成6・7年度調査）
2 小山・南谷遺跡（平成5年度調査）
3 湯の谷1号古墳
4 〃 2号古墳
5 〃 3号古墳
6 経塚古墳
7 神櫛王墓
8 喜岡城跡
9 奥之坊古墳
10 大空遺跡
11 スベリ山南遺跡
12 長尾1号古墳
13 〃 2号古墳
14 〃 3号古墳
15 南谷古墳
16 南谷遺跡
17 石塚古墳
18 小山古墳
19 山下古墳
20 山下廃寺
21 岡山小古墳群
22 岡山1号古墳
23 〃 2号古墳
24 〃 3号古墳
25 大谷山古墳
26 丸山古墳
27 久本山東峯古墳
28 久本古墳
29 瀧本神社古墳
30 北山古墳群
31 傍生山古墳
32 久米池南遺跡
33 高松市茶臼山古墳
34 高松市茶臼山東古墳
35 高松市茶臼山南古墳
36 高松市茶臼山西古墳
37 西茶臼山1号古墳
38 〃 2号古墳
39 諏訪神社遺跡
40 久米山古墳群
41 川添浄水場遺跡
42 金石山1号古墳
43 〃 2号古墳
44 田楽古墳
45 平尾1号古墳
46 〃 2号古墳
47 〃 3号古墳
48 〃 4号古墳
49 平尾小古墳群
50 山本古墳
51 潮満塚古墳
52 一字一石経塚
53 宝寿寺跡
54 前田城跡
55 前田東・中村遺跡
56 東山崎・水田遺跡
57 六条・上所遺跡
58 権八原古墳群
59 川南・西遺跡
60 川南・東遺跡
61 奥の坊権現前遺跡
62 奥の坊奥池西遺跡
63 大空北遺跡

第４図　周辺遺跡位置図

# 第３章　調査の成果

## 第１節　周辺環境の復元

### １．高松平野北東部の旧流路（氾濫原）の復元

小山・南谷遺跡の西部に広がる高松平野北東部の土地の高低差や現地表面に残る地形の乱れから微地形を復元し、小山・南谷遺跡の弥生時代の海岸線及び旧流路の河口、更に遺跡周辺の旧流路を推定することにより、当時の環境を復元したい。

高松平野北東部には現在、西から詰田川、春日川、新川が北流する。

現在の春日川は香川県南部、高松市と塩江町の境に位置する八丁山（標高632.9m）を中心とする山塊を源とし、ほぼ南北方向に流路を取る。この春日川は高松市六条町付近（久米山古墳、諏訪神社古墳などが所在する独立丘陵の久米山丘陵南西部）で、高松市南部から北東方向に流路を取る古川と合流し、僅かに北部分、高松市元山町で春日川から詰田川は北西方向に派生する。

一方現在の新川は三木町奥山に所在する高仙山（標高627.1m）を中心とする山塊を源とし、また吉田川は三木町小蓑を源として北西方向に流路を取り、ちょうど高松市亀田町あたりで北方向に流路を変え、北流する。この吉田川と新川はちょうど久米山丘陵（標高52.3m）南部で合流する。

高松平野北東部における現在の河川をみると西から古川、春日川、吉田川、新川の４河川がちょうど久米山丘陵南西部でそれぞれが合流し、春日川と新川は約800mとかなり近接していることがわかる。

この２つの河川の旧流路を復元することはかなり困難であるが、地形の乱れから氾濫原（時期を比定しなければ）を推定することは可能である。

高松平野北東部における地形の乱れをみると古川、春日川、吉田川、新川が合流、近接する部分である久米山丘陵南西部（高松市東山崎町）を扇の要として、西は概ね主要地方道高松長尾大内線（高松琴平電鉄長尾線）を境とし、東は概ね久米山丘陵から屋島方向（県道塩江屋島西線　所謂新田街道）を境として扇状に広がる範囲に地形の乱れを確認できる（第５図）。高松平野は古代に施工された旧山田郡・香川郡の条里地割が現在も残っているが、この部分については条里地割がほとんど残っていない。

条里地割については元来この部分が氾濫原で、不安定な土地であったために施工されなかったのか、施工されていた条里地割が河川の氾濫により、消失したのかは不明であるが、現在の地表面では確認できない。

文献資料として香西成資が享保４（1719）年に成立させた『南海通記』によれば、天正10（1582）年頃の地形として「・・・、春日ノ里ニ至ル、此所ハ屋島山、石清尾山両受ノ間、入海ニテ山田郡小山ノ下マデ潮サシ来ル、遠干潟ナ春日里ト木太郷ノ間、海ノ中道アツテ通用ス。・・・」（巻之十五）と記載していることから新田町の「小山」近辺まで海岸線あるいは河口が湾状に入り込んでいたと考えられる。

また、絵図資料として寛永10（1633）年の『讃岐国絵図』によると、海岸線はかなり内陸に入り込んでおり、屋島は「島」として描かれている。

## 2．試掘調査・発掘調査からの検証

次にこの氾濫原面を香川県教育委員会、高松市教育委員会の試掘調査、発掘調査から検証したい（第５図）。

香川県教育委員会は県道建設・河川改修で、氾濫原面及び隣接部分で調査を実施している。

平成５年度に高松長尾大内線道路改良工事に伴い高松市東山崎町（Ａ地点）において試掘調査を実施している。その結果をみると耕作土直下薄い黄灰色粘土（床土か）が堆積しているものの、それ以下は砂層が厚く堆積していることを確認し、遺構は検出していない。この地点は現春日川と新川のほぼ中央部にあたり、氾濫原復元の結果で見るとちょうど合流地点に当たることが解る。

平成６年度に実施した小規模河川宮川改修事業に伴い高松市木太町（Ｂ地点）において試掘調査を実施している。その結果では安定した黄色系粘質土の基盤層を検出している。

平成９年度に高松長尾大内線（琴電高架）道路改良工事に伴い高松市東山崎町字水田（Ｃ地点）において試掘調査を実施している。その結果、対象地内全域において厚い砂質土層の堆積を確認し、遺構は検出していない。この地点は新川の氾濫原面と考えられる。

平成９年度に宮川河川改修に伴い高松市木太町木太２区（Ｄ地点）において工事立会中に遺構を確認し、調査を実施した。遺構は奈良時代（８世紀中頃～後半）の井戸跡で、井戸検出面はT.P.２ｍ付近の黄褐色粘土層上面である。おそらく古代の基盤層と考えられ、近接して旧河道が確認されているもののかなり安定した地点と考えられる。

平成12年度に県道高松長尾大内線バイパス建設に伴い高松市春日町・東山崎町において試掘調査を実施している。春日町で実施した試掘調査（Ｅ地点）では耕作土直下青灰色砂層が堆積し、旧流路部分であることが判明している。また東山崎町で実施した試掘調査（Ｆ地点）では耕作土直下青灰色系と褐色系の粘土と砂層の互層、暗褐色系の粘土と安定する粘質土・粘土系の堆積土が認められ、Ｅ地点と若干の差があるが、生活面としての安定した基盤層ではないことを確認している。

一方高松市教育委員会は都市計画道路建設で、氾濫原面及び隣接部分で調査を実施している。

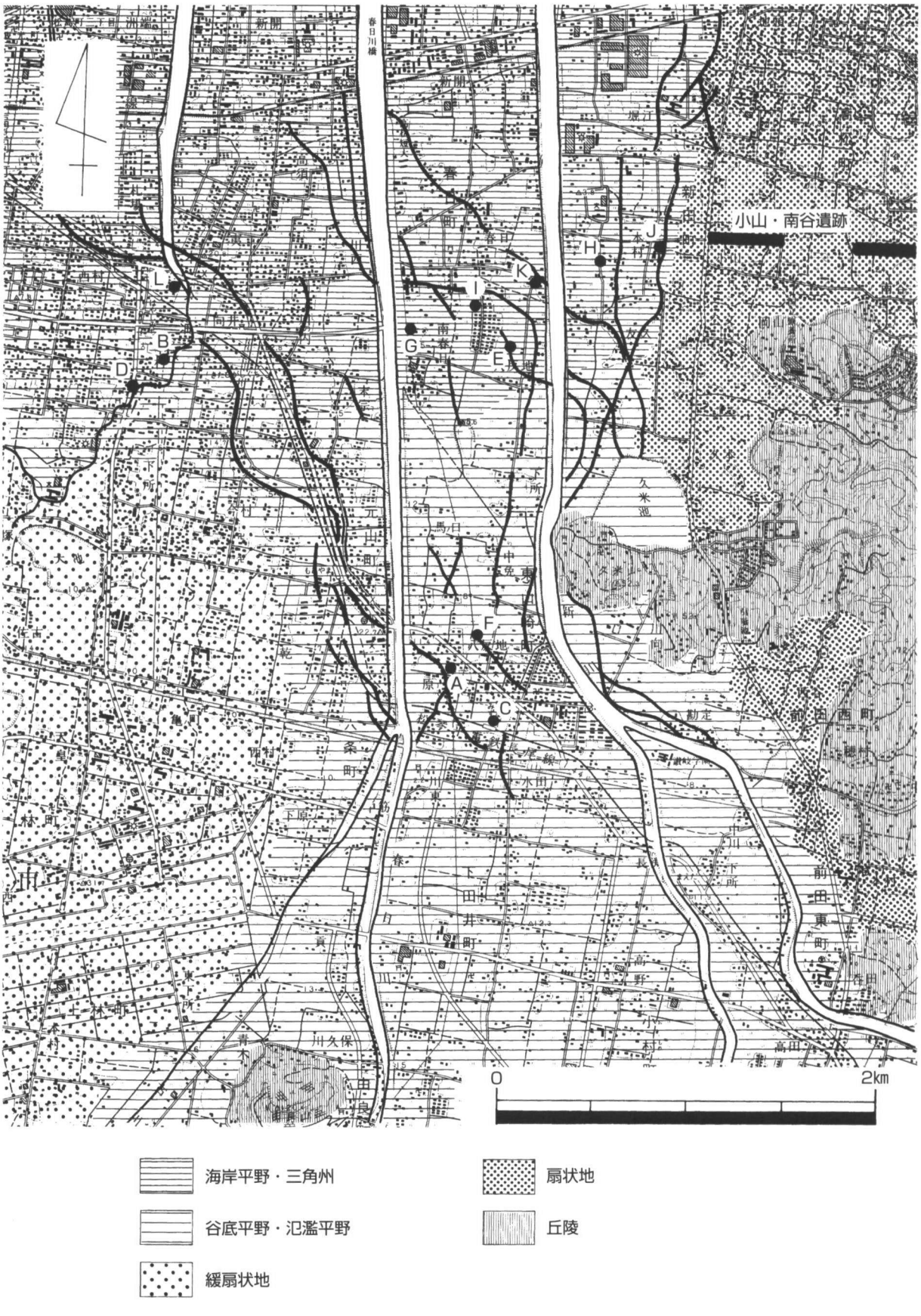
平成７年に都市計画道路室町新田線建設に伴い高松市春日町･新田町（新川～県道塩江屋島西線）において試掘調査を実施している。春日町で実施した試掘調査（Ｇ地点）では耕作土直下約１ｍ程度、灰色・褐色系の砂層が、近世の耕作土上に堆積していることが確認された。近世の耕作土下は暗灰青色砂混じりシルトとなる。上部の砂層は聞き取りから大正時代の氾濫によるものと判明し、それ以前は水田となっていた状況が確認できる。また新田町で実施した試掘調査（Ｈ地点）では耕作土直下青灰色系の砂層となり、約１ｍ下からはかなりの湧水層となる。

前年度の試掘調査結果から平成８年に都市計画道路室町新田線建設に伴い高松市春日町454-3において発掘調査を実施した川南・西遺跡（Ｉ地点）がある。

川南・西遺跡は中世後半～近世にかけての遺跡で、掘立柱建物跡・火葬土壙墓・井戸跡などを検出している。この遺跡は北流する春日川・新川が形成した沖積面の氾濫原面にあり、地形帯としては三角州帯Ⅱａに属する海抜２ｍあまりの低地である。遺構を検出した基盤層はシルト質細砂を基本とし、その上面では下層の液状化による噴砂跡が確認されている。

平成８・９年に都市計画道路室町新田線建設に伴い高松市新田町において発掘調査を実施した新田本村遺跡（Ｊ地点）がある。

新田本村遺跡は香川県教育委員会が発掘調査を実施した小山・南谷遺跡と県道塩江屋島西線を挟




第５図　試掘・発掘調査位置図

んで西側に所在する。調査区西側は新川の氾濫原面と考えられ、砂層の堆積が確認されている。遺構は弥生時代から近世にかけての集落跡で、古代の遺構を中心として検出しており、小山・南谷遺跡から継続する遺構も確認されていることから同一集落である可能性が高い。弥生時代の遺構は溝を中心として少量確認されているが、弥生時代後期で、今回報告する小山・南谷遺跡の時期とほぼ同時期と考えられる。調査区西端では南北方向の溝状遺構が確認されており、この溝状遺構を境として調査区西側は新川の氾濫原面と考えられ、砂層の堆積が確認されている。調査区西端の遺構検出面はT.P.1.5m付近（現地表で約2.5m）で、黄色系の粘質土が基盤層となる。

平成10・11年に都市計画道路室町新田線建設に伴い高松市春日町において発掘調査を実施した川南・東遺跡（K地点）がある。

川南・東遺跡は近世～近代にかけての遺跡で、掘立柱建物跡・土坑跡・溝状遺構などを検出している。この遺跡も川南・西遺跡と同様には北流する春日川・新川が形成した沖積面の氾濫原面にあり、地形帯としては三角州帯Ⅱａに属する海抜２ｍあまりの低地である。遺構を検出した基盤層は灰白色砂層～粗砂を基本としている。

平成10・11年に都市計画道路福岡三谷線建設に伴い高松市木太町において発掘調査を実施した木太中村遺跡（L地点）がある。

木太中村遺跡は弥生時代後期～近世にかけての遺跡で、掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑跡、井戸跡などを検出している。この遺跡は氾濫原面の西側隣接地に位置し、基盤層が黄色系の粘質土と安定している。弥生時代後期の遺構はT.P.２ｍ付近（現地表で約2.4m）で検出している。周辺には古墳時代中期の白山神社古墳、古代の井戸跡を検出した木太本村Ⅱ遺跡、中世後半の神内城跡、向城跡などが所在していることから、古代から開発され、高松市中央部東端での重要な地域であることが解る。また出土遺物においても公の施設を中心として出土する楠葉型Ⅰ期の瓦器椀が出土するなど遺物からも重要な地域であることが検証できる。

以上の発掘調査、試掘調査から①氾濫原面の基部、②氾濫原面内、③氾濫原面の西側隣接地、④東側隣接地の状況が断片的ではあるが推定できる。

①氾濫原面の基部の調査としてはＡ・Ｃ・Ｆ地点があり、部分的に粘質土系の堆積土が確認されており、これらの地点から約200m地点で、中世から近世にかけての集落跡である東山田・水田遺跡が所在し、徐々に安定する部分であることが解る。②氾濫原面内の調査としてはＥ・Ｇ・Ｈ・Ｉ・Ｋ地点があり、ほとんどの地点では旧河川の氾濫原と考えられ、砂層がかなり堆積している。しかしこの氾濫原面内でも中世後半頃からやや安定したＩ・Ｋ地点では集落が営まれていたことが解る。③氾濫原面の西側隣接地の調査としてはＢ・Ｄ・Ｌ地点があり、黄色系の粘質土が基盤層で、弥生時代後期から古墳時代、古代、中世以降も連綿と集落が営まれており、かなり安定した環境であったことが解る。④氾濫原面の東側隣接地の調査としてはＪ地点があり、黄色系の粘質土の基盤層で、弥生時代後期、古代、近世の遺構が検出されていることから、弥生時代後期以降は安定した環境であることが解る。

### ３．弥生時代後期の海岸線の復元

前述した地形復元と試掘・発掘調査の結果から弥生時代後期の遺構検出面は、木太中村遺跡でT.P.２ｍ付近（現地表で約2.4m）、新田本村遺跡でT.P.1.5m付近（現地表で約2.5m）であることか

ら現地標高約2.5mあたりが弥生時代後期の海岸線であった可能性が指摘できる。

## 4．小山・南谷遺跡周辺の地形復元

小山・南谷遺跡は高松市新田町小山から高松町南谷に至る東西方向延べ約1,500mの範囲に所在する遺跡である。遺跡西部は高松平野の北東部縁辺、一方東部は高松市と牟礼町間にある立石山を中心とする山塊から北西に派生する低丘陵に挟まれた谷部に相当し、周辺に複数の溜池を伴う田園の中を東から西へ緩やかに下る地形となる。現地表の標高は遺跡東部の唐戸池南において約39m、長尾池南端付近は19～20m、西端の主要地方道塩江屋島西線（通称新田街道）沿いは６m前後で、その標高差は約33mを測る。

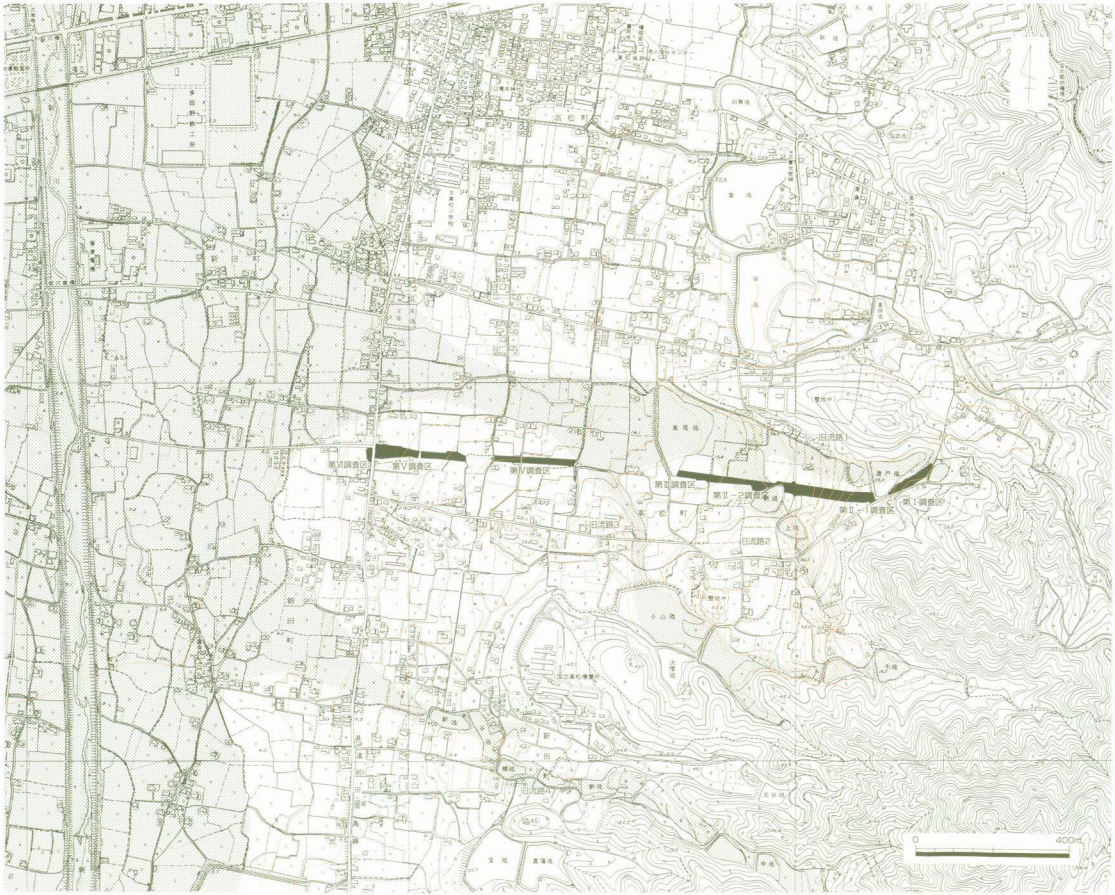
現地表面に残る痕跡（小河川、高低差、溜池など）と本調査結果、試掘調査結果から旧地形を復元すると立石山山塊から延びる低丘陵間に旧流路があり、概ね東から西方向に延びていることが解る。調査区東端周辺で谷筋に造られている池からみると唐池→唐戸池→唐戸下池→長尾池の旧流路１、ウラ谷池→上池→新池→長尾池の旧流路２、平木池→平木下池→覚造池→小山池→錨池の旧流路３が推定でき、ちょうど新池付近で旧流路１と旧流路２は合流するようである。この復元流路からみるとちょうど第Ⅰ調査区、第Ⅱ－１調査区は２本の旧流路（谷筋）に挟まれた緩やかな丘陵地（緩斜面）に位置することが解る。発掘調査での標高差を見ると高所（東）が約39mで、低所（西）が約23mと約16mの高低差しかなく、調査区の東西幅が約250mであることから傾斜角度は約３°40′と緩やかな傾斜であることが解る。また馬背状になった丘陵ではなく、東西方向にも南北にも緩やかに広い丘陵であることが解る。

旧流路３は第Ⅲ調査区と第Ⅳ－１調査区の間を抜け、旧流路１に合流する。第Ⅳ・Ⅴ調査区はちょうど丘陵先端部の微高地部分に位置し、北に旧流路１が、西に新川、春日川の氾濫原が確認できる。

また、第Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ調査区が位置する微高地の南には旧流路４が復元でき、かなり安定した部分の北部に位置していることが解る。

**参考文献**


・藤好史郎「屋島城と城山城　－古代山城研究の一視点－」『研究紀要Ⅴ　特集７世紀の讃岐』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1997.3
・「埋蔵文化財試掘調査報告Ⅶ　国道バイパス・県道・高松土木事務所建設予定地及び県営ほ場整備事業予定地内の調査」香川県教育委員会　1994.3
・「埋蔵文化財試掘調査報告Ⅷ　国道バイパス・県道建設予定地及び県営ほ場整備事業予定地内等の調査」香川県教育委員会　1995.3
・「埋蔵文化財試掘調査報告Ⅺ　香川県内遺跡発掘調査」香川県教育委員会　1998.3
・「宮川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　木太本村Ⅱ遺跡」香川県教育委員会　1998.3
・「県道高松長尾大内線バイパス建設に伴う埋蔵文化財試掘調査報告書」香川県教育委員会　2000.2
・「都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書　第一冊　川南・西遺跡」高松市教育委員会　1999.3
・「都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書　第二冊　川南・東遺跡」高松市教育委員会　2000.3
・「都市計画道路福岡三谷線に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第一冊　木太中村遺跡」高松市教育委員会　2001.3
・「高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第１冊　奥の坊遺跡群Ⅰ（奥の坊地区(試掘)・大空古墳・金川渕古墳)」高松市教育委員会　1999.3




第６図　遺跡位置図、旧地形復元図

・「高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第２冊　奥の坊遺跡群Ⅱ（奥の坊権現前遺跡）」高松市教育委員会　2004.3
・「高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第３冊　奥の坊遺跡群Ⅲ（大空北遺跡・奥の坊奥池西遺跡）」高松市教育委員会　2004.12
・「白山神社古墳」『香川考古　―特集：香川の中期古墳―』香川考古刊行会　1994.12
・「陣内城跡・向城跡」『香川県中世城館跡詳細分布調査報告』香川県教育委員会　2003

## 第２節　調査成果の概要

### １．調査区について

小山・南谷遺跡は高松市の北東部、高松市新田町小山と高松市高松町南谷にあり、その範囲は東西が約1,500mにも及ぶ。

発掘調査は、平成５年度から平成７年度にかけての継続事業であることから、調査区の設定及びグリッド配置は平成５年度に設定した調査区配置を踏襲した（第２図）。

調査区の配置は平成５年度の調査時に第Ⅰ調査区を東から設定し、西は県道塩江屋島西線の東側を第Ⅴ調査区、西側を第Ⅵ調査区とした。またそれぞれの調査区には小調査区として第Ⅱ調査区には－１、－２の小調査区が、第Ⅳ調査区には－１～３の小調査区が、第Ⅴ調査区には－１～４の小調査区がある。

今回の報告する調査区は、平成７年に発掘調査、平成８年に整理作業、平成９年に報告書を刊行した「小山・南谷遺跡Ⅰ」に掲載している第Ⅴ－３調査区（平成７年度調査）、第Ⅵ調査区（平成７年度調査）を除く部分で、東から第Ⅰ調査区（平成５年度調査）、第Ⅱ－１・２調査区（平成５・６年度調査）、第Ⅲ調査区（平成５年度調査）、第Ⅳ－１～３調査区（平成６年度調査）、第Ⅴ－１・２・４調査区（平成６年度調査）である。

調査グリッドは平成５年度の調査時に、国土座標第Ⅳ系のＸＹ軸と平行するラインを基準とし、南北（Ｘ軸）を北からアルファベットのＡ～○とし、東西（Ｙ軸）を東からローマ数字の１～○を20m毎に付し、北西の交点を各グリッドの名称とした。

### ２．遺構番号について

「小山・南谷遺跡Ⅰ」では報告書掲載の遺構番号を平成７年度調査であることから遺構略号の後ろに平成７年度の「７」を入れ、「ＳＤ７０１」としている。この考え方を踏襲し、本報告書「小山・南谷遺跡Ⅱ」で掲載する遺構の遺構番号は、平成５年度調査、平成６年度調査に関係なく、第Ⅰ～Ⅳ調査区、第Ⅴ－１・２・４調査区で検出したそれぞれの遺構に東の第Ⅰ調査区から通し番号を付し、調査年度を加えた「遺構略号＋調査年度＋通し番号」とした。

例１　東からの通し番号で１棟目の竪穴住居跡が、平成５年度に調査が行われていた場合は、「ＳＨ５０１」となる。

ＳＨ（竪穴住居跡略号）　＋　５（平成５年度調査）　＋　０１（東からの通し番号）

例２　東からの通し番号で２棟目の竪穴住居跡が、平成６年度に調査が行われていた場合は、「ＳＨ６０２」となる。

ＳＨ（竪穴住居跡略号）　＋　６（平成６年度調査）　＋　０２（東からの通し番号）

この考え方を踏襲したため、100条以上検出している溝や1,000個以上検出している柱穴は「SD6127（例）」、「SP61238（例）」となり、溝は略号も含めると６桁、柱穴は７桁となり、かなり煩雑になる。そのために付図に付する柱穴遺構番号については東からの検出番号のみの記載とした。

### ３．各調査区の概要

#### （１）第Ⅰ調査区

第Ⅰ調査区は、小山・南谷遺跡の最東端にあり、立石山山塊から北西に延びる丘陵の縁辺部で、

調査区北側には谷部を堰き止めて造られた唐戸池が所在する。

調査の結果、南東から北西に向けての傾斜面で、中世～近世の柱穴跡・土坑跡・溝状遺構を検出した。検出した遺構は希薄で、特に柱穴跡は部分的に集中するが、掘立柱建物を構成するまでには至っていない。

（2）第Ⅱ調査区

第Ⅱ調査区は、立石山山塊から北西に延びる丘陵の緩傾斜面と旧流路２の推定復元部分に位置する。

調査の結果、第Ⅱ－１調査区では南東から北西に向けての緩傾斜面で、縄文時代の落し穴・自然流路跡、弥生時代の掘立柱建物跡・竪穴住居跡・土坑跡・柱穴跡・溝状遺構、中世～近世の柱穴跡・土坑跡などを検出した。

縄文時代の落し穴は県内では初例で、四国内でも確実なものは確認されていない。弥生時代の遺構からは製塩土器が多量に出土しており、弥生時代後期前半の土器製塩に関係のある集団の集落であることが解る。

旧流路２推定部分に当たる第Ⅱ－２調査区では、ほぼ同方向に流路を取る自然流路跡を２条検出し、それ以外の遺構はほとんど検出していない。

（3）第Ⅲ調査区

第Ⅲ調査区は第Ⅱ調査区の緩傾斜面がほぼ水平になる部分で、明確な遺構はなく、自然流路跡を中心として、土坑跡などを検出している。調査区西側では湿地状の堆積層を検出しており、居住域としては適さない場所だったことが解る。

（4）第Ⅳ調査区

第Ⅳ調査区は推定復元で旧流路３とした部分の西側にあり、立石山から派生する丘陵の先端部の緩やかな傾斜部分に位置する。

調査の結果、南東から北西に向けての緩傾斜面で溝跡、土坑跡、自然流路跡などを検出した。

（5）第Ⅴ調査区

第Ⅴ－１・２・４調査区は県道塩江屋島西線の東に位置する調査区で、現地形では南東方向から北西方向に緩やかに傾斜している。

調査の結果、第Ⅴ－１・２調査区では井戸跡、土坑跡、溝跡、自然流路跡などを、第Ⅴ－４調査区では主として古代の掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡を検出しており、第Ⅴ－３調査区で検出した古代を中心とした掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、溝内の井堰跡を考慮すると、第Ⅴ－３調査区以西が古代の居住域であることが解る。

## 第３節　土層序の概要

（1）第Ⅰ調査区

調査前は南東から北西に向けての傾斜部で、立石山山塊から延びる丘陵の縁辺部に棚田状の水田が３枚程度連なる部分である。

調査区南側は高所側に当たり、耕作土･床土直下遺構面の基盤層である淡茶色バイラン土となる。

調査区東側は唐池から唐戸池に延びる谷筋（旧流路１）に当たり、淡黄茶色砂層、暗灰色砂質土層、黒色砂混じり粘質土層などの砂質・砂層系の堆積土が２ｍ以上堆積している。北側には灰色系

の砂混じり粘質土・砂質土が堆積し、遺物はほとんど包含されていない。

基盤層の標高は高所側（南側）で約39.5m、低所側（北側）で約38.5mを測る。

（2）第Ⅱ調査区

調査前は概ね東から西に向けての傾斜部で、東部分は棚田状の細長い水田が広がり、西部分は水平に水田が広がる部分である。

東部分は黄茶色系の砂混じり粘質土が20～40cm程度堆積し、その下位に堆積する灰こげ茶色砂混じり粘質土層（第７図　柱状図④第８層）上面で中世の遺構を検出した。この灰こげ茶色砂混じり粘質土層には弥生土器が包含されており、この下位の濁茶黄色バイラン土（第７図　柱状図④第９層）上面で弥生時代の遺構を検出した。

西部分では耕作土・床土直下、灰色系の粘質土、褐色系の砂混じり粘質土が約１m堆積しており、下位部分には中世以降の遺物を少量包含している。下位には古代の遺物を包含する茶褐色砂混じり粘質土層（第７図　柱状図⑤第７層）、白灰色砂層（第７図　柱状図⑤第８層）が、更に下位には弥生時代後期の遺物を包含する褐茶色砂質土層（第７図　柱状図⑤第９層）があり、この下位で弥生時代後期の遺構面となる基盤層、淡黄茶色粘質土層（第７図　柱状図⑤第10層）がある。第Ⅱ調査区では縄文時代、弥生時代、中世と３時期の遺構面を確認している。縄文時代の遺構面と弥生時代の遺構面は概ね同一遺構面で検出しているが、部分的に弥生時代の遺構を確認した基盤層（暗灰色砂混じり粘質土）が間層となる部分があり、その下位で縄文時代の遺構面を検出した部分がある。

基盤層の標高は高所側（第Ⅱ－１調査区東端）で約37.0m、低所側（第Ⅱ－１調査区西端）で約24.0mと約13.0mの比高差がある。

（3）第Ⅲ調査区

調査前の現状は南東から北西に向けて緩やかに傾斜し、階段状の水田として利用されていた。遺構面は若干の南東方向から北西方向への傾斜が認められた。

遺構面は地表下約50cmで確認でき、暗青灰黄色砂混じり粘質土（第７図　柱状図⑭第６層）が遺構面となる。遺構面上部には灰色系の粘質土が堆積し、下位には灰色系の粘土層と砂質土層が概ね交互堆積し、安定していない。

基盤層の標高は約19.8mを測る。

（4）第Ⅳ調査区

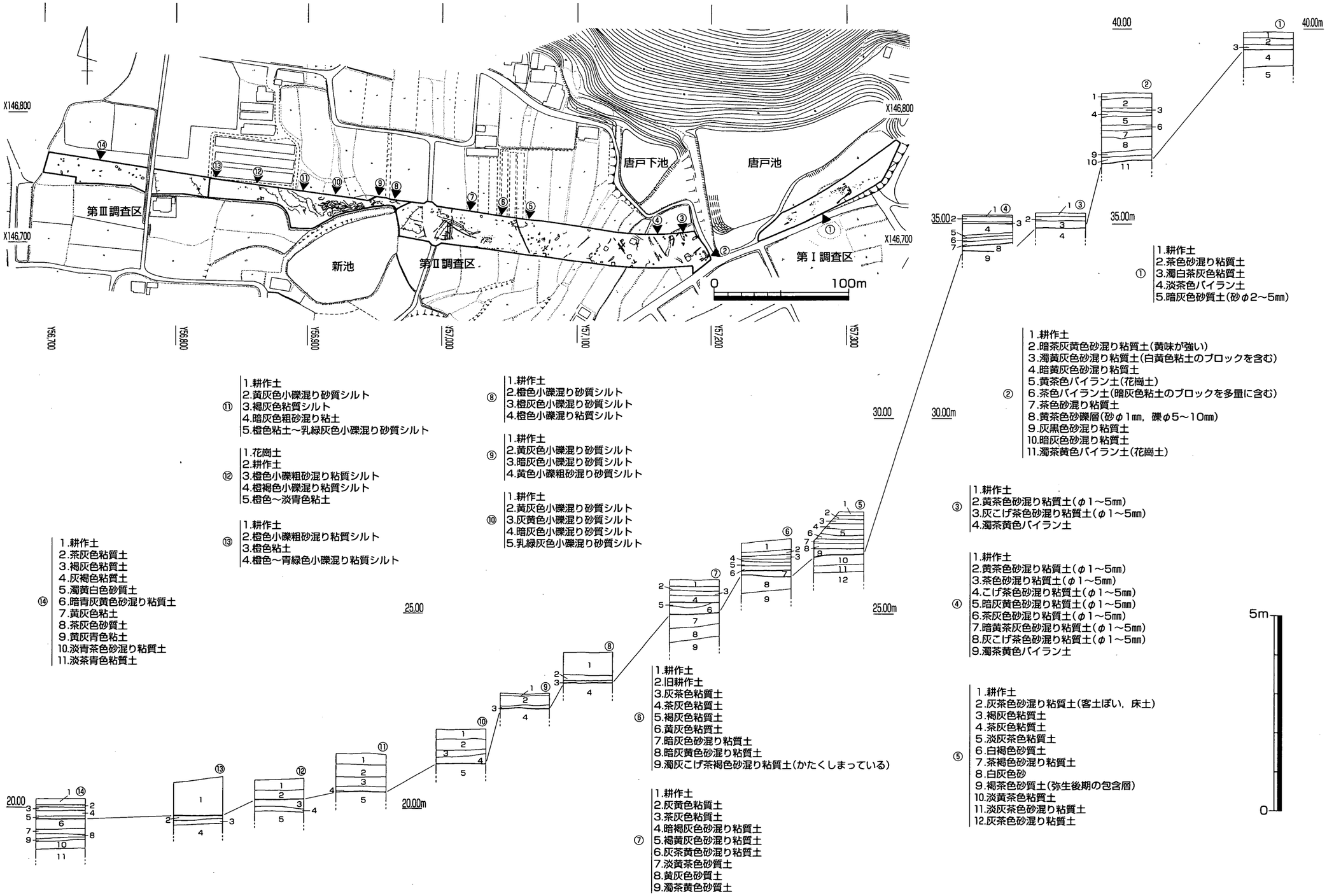
調査前の現状は南東から北西に向けて緩やかに傾斜し、階段状の水田として利用されていた。遺構面は若干の南東方向から北西方向への傾斜が認められた。

遺構面は２面検出している。第１面は中世以降の時期で、第２面は古代以前の時期である。基盤層は第１遺構面が小礫混じり粗砂層、第２遺構面が粘質シルト層とどちらも安定した土質ではなく、古代以前には住居域としては適さない場所だったことが解る。また、それは第１遺構面の上部及び第２遺構面の下部に堆積する土層もシルト系及び砂系の堆積土で、かなり旧流路及び丘陵部からの氾濫、堆積を繰り返したていたことが解る土層であることからも裏付けられる。

第１・２遺構面の基盤層の標高は約11.9～12.2mを測る。

（5）第Ⅴ調査区

調査前はほとんど傾斜がなく、水田として利用されていた。遺構面は若干の南東方向から北西方向への傾斜が認められる。




① 1.耕作土
2.茶色砂混り粘質土
3.濁白茶灰色粘質土
4.淡茶色バイラン土
5.暗灰色砂質土(砂φ2～5㎜)

② 1.耕作土
2.暗茶灰黄色砂混り粘質土(黄味が強い)
3.濁黄灰色砂混り粘質土(白黄色粘土のブロックを含む)
4.暗黄灰色砂混り粘質土
5.黄茶色バイラン土(花崗土)
6.茶色バイラン土(暗灰色粘土のブロックを多量に含む)
7.茶色砂混り粘質土
8.黄茶色砂礫層(砂φ1㎜，礫φ5～10㎜)
9.灰黒色砂混り粘質土
10.暗灰色砂混り粘質土
11.濁茶黄色バイラン土(花崗土)

③ 1.耕作土
2.黄茶色砂混り粘質土(φ1～5㎜)
3.灰こげ茶色砂混り粘質土(φ1～5㎜)
4.濁茶黄色バイラン土

④ 1.耕作土
2.黄茶色砂混り粘質土(φ1～5㎜)
3.茶色砂混り粘質土(φ1～5㎜)
4.こげ茶色砂混り粘質土(φ1～5㎜)
5.暗灰黄色砂混り粘質土(φ1～5㎜)
6.茶灰色砂混り粘質土(φ1～5㎜)
7.暗黄茶灰色砂混り粘質土(φ1～5㎜)
8.灰こげ茶色砂混り粘質土(φ1～5㎜)
9.濁茶黄色バイラン土

⑤ 1.耕作土
2.灰茶色砂混り粘質土(客土ぼい，床土)
3.褐灰色粘質土
4.茶灰色粘質土
5.淡灰茶色粘質土
6.白褐色砂質土
7.茶褐色砂混り粘質土
8.白灰色砂
9.褐茶色砂質土(弥生後期の包含層)
10.淡黄茶色粘質土
11.淡灰茶色砂混り粘質土
12.灰茶色砂混り粘質土

⑥ 1.耕作土
2.旧耕作土
3.灰茶色粘質土
4.茶灰色粘質土
5.褐灰色粘質土
6.黄灰色粘質土
7.暗灰色砂混り粘質土
8.暗灰黄色砂混り粘質土
9.濁灰こげ茶褐色砂混り粘質土(かたくしまっている)

⑦ 1.耕作土
2.灰黄色粘質土
3.茶灰色粘質土
4.暗褐灰色砂混り粘質土
5.褐黄灰色砂混り粘質土
6.灰茶黄色砂混り粘質土
7.淡黄茶色砂質土
8.黄灰色砂質土
9.濁茶黄色砂質土

⑧ 1.耕作土
2.橙色小礫混り砂質シルト
3.橙灰色小礫混り砂質シルト
4.橙色小礫混り粘質シルト

⑨ 1.耕作土
2.黄灰色小礫混り砂質シルト
3.暗灰色小礫混り砂質シルト
4.黄色小礫粗砂混り砂質シルト

⑩ 1.耕作土
2.黄灰色小礫混り砂質シルト
3.灰黄色小礫混り砂質シルト
4.暗灰色小礫混り砂質シルト
5.乳緑灰色小礫混り砂質シルト

⑪ 1.耕作土
2.黄灰色小礫混り砂質シルト
3.褐灰色粘質シルト
4.暗灰色粗砂混り粘土
5.橙色粘土～乳緑灰色小礫混り砂質シルト

⑫ 1.花崗土
2.耕作土
3.橙色小礫粗砂混り粘質シルト
4.橙褐色小礫混り粘質シルト
5.橙色～淡青色粘土

⑬ 1.耕作土
2.橙色小礫粗砂混り粘質シルト
3.橙色粘土
4.橙色～青緑色小礫混り粘質シルト

⑭ 1.耕作土
2.茶灰色粘質土
3.褐灰色粘質土
4.灰褐色粘質土
5.濁黄白色砂質土
6.暗青灰黄色砂混り粘質土
7.黄灰色粘土
8.茶灰色砂質土
9.黄灰青色粘土
10.淡青茶色砂混り粘質土
11.淡茶青色粘質土

第７図　第Ⅰ～Ⅲ調査区土層柱状図

第Ⅴ－１・２調査区では遺構面は３面検出しているが、第１遺構面の基盤層はシルト層、第２遺構面の基盤層は粗砂～細砂層、第３遺構面はシルト層といずれも安定した土質ではなく、古代以前には住居域としては適さない場所だったことが解る。また、遺構面間の堆積土層もシルト系及び砂系の堆積土であり、それを裏付けている。

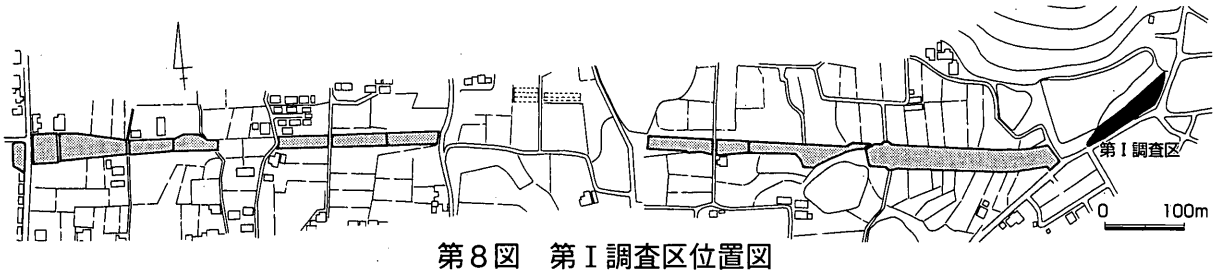
ただ、井戸跡ＳＥ603、柱穴跡を検出した第２遺構面の北西部が古代に徐々に安定し、居住域となっていったことが解る。

第Ⅴ－４調査区では、遺構面を３面検出している。基盤層は第Ⅴ－１・２調査区と同様であるが、掘立柱建物跡、井戸跡などを検出していることから、居住域として機能していたことが解り、古代以降安定した場所であったと考えられる。

第Ⅴ－１・２調査区の第１～３遺構面の基盤層の標高は約7.6～7.9mを、第Ⅴ－４調査区の第０～２遺構面の基盤層の標高は約5.5～5.7mを測る。

## 第４節　遺構･遺物について

小山・南谷遺跡は東西に長い遺跡で、第Ⅲ調査区と第Ⅳ調査区間に保護措置の不要部分が約250ｍある。第Ⅰ～Ⅴ調査区をそれぞれの調査区毎に説明するが、本節では地域的、検出遺構の時期に纏まりのある第Ⅰ～Ⅲ調査区、第Ⅳ・Ⅴ調査区を一つの区分として説明したい。




第８図　第Ⅰ調査区位置図

### 第Ⅰ調査区

第Ⅰ調査区は東西に長い小山・南谷遺跡の東端に位置し、第Ⅱ調査区東端から狭小な谷筋を挟み、東に約37ｍの位置にある（第８図)。現況からの地形復元（第６図）の結果、第Ⅰ調査区東から北にかけては唐池→唐戸池→唐戸下池→長尾池の旧流路１が復元できる。また西には小さい谷筋が確認でき、ちょうど調査区は東西に旧流路の谷筋によって挟まれた南から北及び東西方向に向けての緩傾斜地に位置する。

遺構面の標高差を見ると南北方向は高低差約0.62ｍ、東方向に約0.82ｍ、西方向に約1.54ｍとなる。ちょうど丘陵部の頂部先端と考えられる。

調査区は東西幅約128ｍ、南北幅約13.5ｍと東西に細長い調査区で、溝状遺構、土坑跡、柱穴跡を検出した。

この調査区では、遺構面を１面確認した。

遺構面は第１層耕作土下に第２層茶色砂混じり粘質土層、第３層濁白茶灰色粘質土層があり、地表面から約44㎝下で確認した（第７図)。

遺構面を形成する基盤層は第４層が淡茶色バイラン土、第５層が暗灰色砂質土となる。

検出した遺構は、溝状遺構６条、土坑跡３基、柱穴跡である。

溝状遺構は調査区の傾斜に合致するように、等高線に併行するものを主として検出した。中には傾斜に併行するが途中で直角に屈曲するものがあり、建物を区画する溝状遺構あるいは雨落ち溝の可能性が考えられる。土坑跡は散漫に検出した。柱穴跡は概ね２箇所に集中するが、区画溝、雨落ち溝に伴うものは検出していない。

#### １．溝状遺構

第Ⅰ調査区で検出した溝状遺構は総数６条（ＳＤ501～506）で、調査区中央と西部で検出している。これら溝状遺構は等高線に併行することから、全て地形に制約され、掘削されている。

ＳＤ501・502・504は掘立柱建物跡に伴う溝状遺構と考えられる。

#### ＳＤ501

ＳＤ501は第Ⅰ調査区（Ｅ・Ｆ－３）中央部で検出した溝状遺構で、ＳＤ502と約30㎝の間隔を空け、併走する。流路方向は北東－南西（Ｎ－９°－Ｅ）を取り、屈曲した部分は北北西－南南東（Ｎ

－80° －W）を取る。規模は最大幅約0.55m、深さ約0.09m、検出長約5.4mを測る。溝状遺構内堆積土は灰色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈している。

溝状遺構内下位より弥生土器甕、高坏、器台が出土している（第87図）。

甕は底部が平底で、頸部が「く」の字に屈曲し、屈曲部内面に1.3cm程度の平坦な面を持ち、横ナデが施されているものと緩やかに屈曲するものがある。口縁部は外反し、端部は上方に拡張するもの（2）とそのまま終わらせるもの（3）がある。体部外面に粗いハケ目（6～7本／cm）が、内面には体部上半は指ナデ・指頭痕が施されているものと屈曲部から下はヘラケズリが施されているものがある。高坏は口縁部のみで、端部は僅かに内方に摘み出す。器台は体部外面に縦方向の粗いハケ目（6本／cm）が、内面には横方向のハケ目（6本／cm）が施され、長方形の透かしが確認できる。

時期は弥生土器しか出土していないが、溝状遺構内堆積土、近世の溝状遺構ＳＤ502と流路が併行していることから近世と考える。

### ＳＤ502

ＳＤ502は第Ⅰ調査区（Ｅ－3、Ｆ－3・4）中央部で検出した溝状遺構で、直線的に延びる溝状遺構が北東部で直角に屈曲する。この溝状遺構は高所側からの雨水から掘立柱建物等を守るための排水溝と考えられる。流路方向は北東－南西（Ｎ－11° －Ｅ）をとり、屈曲した部分は北北西－南南東（Ｎ－85° －Ｗ）を取る。規模は最大幅約1.2m、深さ約0.09m、検出長約17.5mを測る。溝状遺構内堆積土は灰色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈している。

溝内より近世の備前焼、瓦質羽釜、鳥笛が出土している（第87図）。備前焼は内面の条溝が密で、金具により施されている。鳥笛は陶器で、褐黄色と濃緑色の釉がかかっている。

出土遺物から時期は近世と考えられる。

### ＳＤ503

ＳＤ503は第Ⅰ調査区（Ｅ－4）中央部で検出した溝状遺構で、ＳＤ502に区画された内側にある。流路方向は西－東（Ｎ－71° －Ｗ）をとる。規模は最大幅約0.3m、深さ約0.05m、検出長約1.9mを測る。溝状遺構内堆積土は灰色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈している。

溝状遺構内より遺物は出土していない。溝状遺構内から遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。

### ＳＤ504

ＳＤ504は第Ⅰ調査区（Ｆ－4）中央部で検出した溝状遺構で、ＳＤ502西端の南側に併行して流路を取る溝状遺構である。おそらくＳＤ501の延長と考えられる。流路方向は北東－南西（Ｎ－78° －Ｅ）を取る。規模は最大幅約0.3m、深さ約0.05m、検出長約2.7mを測る。溝状遺構内堆積土は灰色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈している。

溝状遺構内より遺物は出土していない。溝状遺構内から遺物が出土していないため、詳細な時期は不明であるが、近世の溝状遺構ＳＤ502と流路が併行していることから近世と考える。

ＳＤ505

ＳＤ505は第Ｉ調査区（Ｆ－５）西部で検出した溝状遺構である。流路方向は東－西（Ｎ－73°－Ｗ）をとり、等高線に直交する。部分的に２条に分かれるが、同一の溝と考える。規模は最大幅約0.6m、深さ約0.13m、検出長約4.4mを測る。溝状遺構内堆積土は灰色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝状遺構内より土師器坏片が出土している。土師器坏は底部が平底で、ヘラ切り痕が確認できる。

出土遺物から時期は中世と考えられる。

ＳＤ506

ＳＤ506は第Ｉ調査区（Ｇ－５・６）西部で検出した溝状遺構である。流路方向は北東－南西（Ｎ－85°－Ｅ）を取る。規模は最大幅約0.5m、深さ約0.05m、検出長約4.3mを測る。溝状遺構内堆積土は灰色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝状遺構内より弥生土器と思われる小片が出土しているのみである。

胎土に角閃石を含む土器の全体の割合は約16.7％である。

出土遺物が小片のため、詳細な時期は不明である。

２．土坑跡

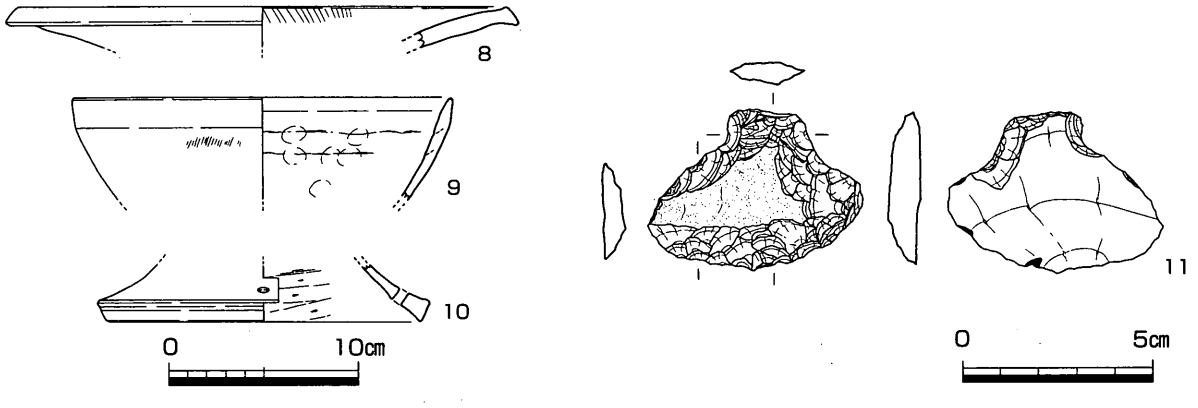
第Ｉ調査区で検出した土坑跡は総数３基（ＳＫ501～503）で、調査区のほぼ中央部を中心に検出した。これらの土坑跡は出土遺物が小片のため、時期は不明であるが、ＳＫ501は近世の溝状遺構、柱穴跡と近接することから同時期と考えられる。

３．柱穴跡

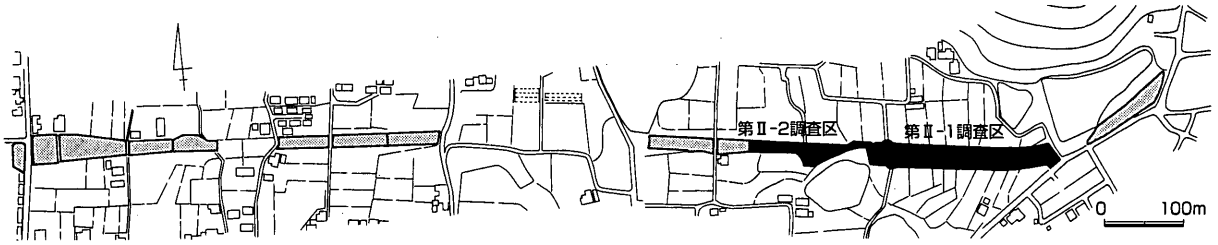
第Ｉ調査区では柱穴跡を多数検出したが、掘立柱建物を構成するには至っていない。

４．包含層出土遺物

包含層出土遺物として図化したものは機械掘削時、遺構面精査段階で出土したものである。遺物には弥生土器、サヌカイト製品があり、近接して弥生時代の集落の可能性が指摘できる。




第９図　第Ｉ調査区包含層出土遺物実測図




第10図　第Ⅱ調査区位置図

第Ⅱ調査区

第Ⅱ調査区は東西に長い小山・南谷遺跡の東部に位置し、ほぼ中央に位置する第Ⅲ調査区の東端に隣接し、第Ⅰ調査区からは西に約37m西の位置にある（第10図）。現況からの地形復元（第６図）の結果、調査区周辺は南東から北西に向けての緩傾斜地となっている。現地盤の標高差を見ると南北方向は調査区の南北幅が約26mと狭いことからほとんど高低差が認められないが、東西方向は調査区の東西幅が約377mと長く、東端が標高約約36.76m、西端が標高約19.75mと、約17.0mの高低差が確認できる。

推定旧地形からみると第Ⅱ調査区は立石山山塊から北西に延びる丘陵のひとつの先端部に位置する。また調査区北側と南側には明確な旧流路（旧流路１、旧流路２）が復元できる。

調査区は東西に細長い調査区で、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土壙墓跡、井戸跡、土坑跡、溝状遺構、自然流路跡、柱穴跡を中心とした遺構を検出した。

第Ⅱ調査区では、遺構面を２面確認した。

第１遺構面は部分的に確認でき、土層柱状図（第７図　柱状図⑤）でみると第１・２層耕作土・床土下に第３層褐灰色粘質土層、第４層茶灰色粘質土層、第５層淡灰茶色粘質土層、第６層白褐色砂質土層、第７層茶褐色砂混じり粘質土、第８層白灰色砂層があり、地表面から約70cm下で確認した。第２遺構面は第１遺構面の基盤層である第９層褐茶色砂質土層約20cm下で確認した。

第１遺構面で検出した遺構は、土坑跡４基、柱穴跡、不明遺構である。

第１遺構面は第Ⅱ調査区において部分的に検出した。この調査区は調査前の状況が階段状を呈した水田で、水田耕作地の確保のために高所部分を削平し、低所部分に削平土を盛ることで耕地面積を確保したことが確認できた。そのため高所側の削平が著しく、遺構及び包含層が部分的に無い状況であった。

第１遺構面の時期は中世で、中世以降に水田耕作地への改変が行われたことが解る。

第２遺構面で検出した遺構は、掘立柱建物跡３棟、竪穴住居跡21棟、土壙墓跡５基、井戸跡２基、土坑跡95基、溝状遺構71条、自然流路跡３条、柱穴跡を中心とした遺構を検出した。

検出した掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝状遺構などは、地形の傾斜である南東から北西へ向けての傾斜に合致するように、ほとんどが等高線に併行するように検出している。掘立柱建物跡、竪穴住居跡の時期は弥生時代後期前半～中葉を中心とする時期である。

また傾斜面では弥生時代後期前半を中心とする遺構を検出したが、低所部分では同一面である第２遺構面で縄文時代の後期の落し穴状の遺構（以後「落し穴」とする）、機能していた時期が縄文時代まで遡る自然流路跡を検出しており、近接して縄文時代の集落の可能性が指摘できる。

## 縄文時代

第Ⅱ調査区で検出した縄文時代の遺構は落し穴（ここでは土坑跡とし、ＳＫ●とする）と自然流路である。土坑跡は平面的な配置、土坑の平面・断面、底面の柱穴・杭跡検出状況から「落し穴」と考えられる。これらは立石山山塊に生息する獲物を対象とした狩猟方法の痕跡である。

縄文時代の明確な遺構はこれら以外に検出しておらず、集落域がどこに存在したか不明であるが、第Ⅳ・Ⅴ調査区においてもかなり多量に縄文土器が出土していることから、調査区南側の微高地部分に縄文時代の集落があるものと考えられる。

### １．土坑跡（落し穴）

第Ⅱ調査区で検出した縄文時代の土坑跡は総数16基検出した。これらの土坑は全て第Ⅱ調査区中央部で検出した。地形的に土坑を検出した位置は、旧地形復元の結果及び遺構検出面での地形から、ちょうど南東方向にある丘陵から延びる傾斜（南東方向から北西方向へ傾斜）から東から西へと傾斜が変わり、緩やかな傾斜になる平地への変換点に集中していることが解る。

#### ＳＫ544

ＳＫ544は第Ⅱ調査区（Ｇ－15）中央部南、東方向から西方向に約4.0ｍで、約0.20ｍの比高差を持つ傾斜地の標高27.18ｍで検出した土坑跡である。平面形態は隅丸方形を呈する。ほぼ中央底部で平面形態が円形で、直径0.20ｍ、検出面からの深さ0.13ｍを測る柱穴跡を検出した。土坑跡の断面形態は緩やかに中央部が窪む擂鉢状を呈しており、その最深部に柱穴跡がある。土層断面部分に柱穴がかかっておらず、柱穴と上部の土坑との関係は不明であるが、他の土坑の状況から、この土坑底面からの掘削と考える。規模は東西方向1.53ｍ、南北方向1.39ｍ、検出面からの深さは最深部で約0.15ｍを測る。土坑跡の堆積土は単層で、淡灰茶色砂混じり粘質土が全体に堆積している。基盤層は２層に細分でき、上層がこげ茶色砂混じり粘質土、下層が灰茶色砂混じり粘質土と土坑内の堆積土とかなり近似する。

土坑跡内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明であるが、土坑跡内堆積土、杭の痕跡から縄文時代と考えられる。

#### ＳＫ545

ＳＫ545は第Ⅱ調査区（Ｇ－15）中央部南、東方向から西方向に約4.0ｍで、約0.20ｍの比高差を持つ傾斜地の標高27.16ｍで検出した土坑跡である。平面形態は隅丸方形を呈する。ほぼ中央底部に平面形態が円形で、直径0.26ｍ、検出面からの深さ0.17ｍを測る柱穴跡を検出した。土坑跡の断面形態はやや歪な箱型を呈しており、その底部に柱穴がある。土層断面部分に柱穴がかかっておらず、柱穴と上部の土坑との関係は不明であるが、他の土坑の状況から、この土坑底面からの掘削と考える。規模は南西－北東方向1.35ｍ、北西－南東方向1.33ｍ、検出面からの深さは約0.34ｍを測る。土坑跡の堆積土は単層で、淡黄青灰色砂混じり粘質土が全体に堆積している。基盤層は３層に細分でき、上層が褐茶色砂混じり粘質土、中層が淡茶色砂混じり粘質土、下層が茶青灰色粘質土と土坑内の堆積土とかなり近似する。

土坑跡内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明であるが、土坑跡内堆積土、杭の痕

跡から縄文時代と考えられる。

### ＳＫ547

ＳＫ547は第Ⅱ調査区（Ｇ－15）中央部南、東方向から西方向に約4.0ｍで、約0.20ｍの比高差を持つ傾斜地の標高27.12ｍで検出した土坑跡である。平面形態は隅丸方形を呈する。ほぼ中央底部で平面形態が円形で、直径0.20ｍ、検出面からの深さ0.18ｍを測る柱穴跡を検出した。土坑跡の断面形態は箱型を呈しており、その最深部に柱穴跡がある。土層断面部分に柱穴がかかっており、土坑堆積層上面から掘削されている。また、土坑底面からは杭状の落ち込みが確認されていることから柱穴以外にも杭があった可能性が考えられる。規模は南西－北東方向1.52ｍ、北西－南東方向1.36ｍ、検出面からの深さは約0.23ｍを測る。土坑跡の堆積土は３層で、全体に淡灰茶色砂混じり粘質土が堆積している。基盤層は２層に細分でき、上層が黄茶色砂混じり粘質土、下層が灰茶色砂混じり粘質土と土坑内の堆積土とかなり近似する。柱穴・杭状痕跡の埋土（第１・３層）は淡茶青灰色砂混じり粘質土で明瞭な差が認められる。

土坑跡内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明であるが、土坑跡内堆積土から縄文時代と考えられる。

### ＳＫ549

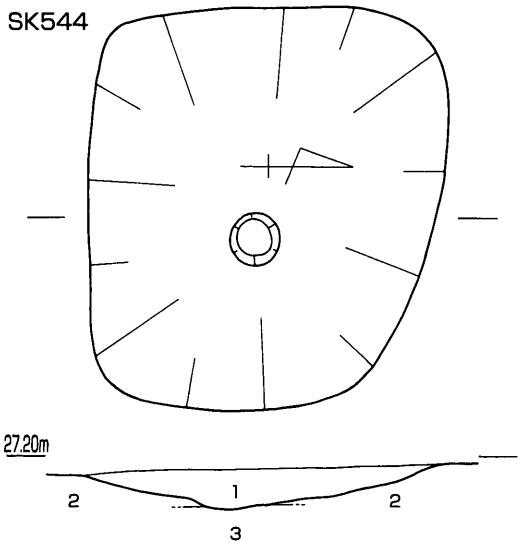
ＳＫ549は第Ⅱ調査区（Ｇ－15）中央部北、東方向から西方向に約4.0ｍで、約0.20ｍの比高差を持つ傾斜地の標高26.40ｍで検出した土坑跡である。平面形態は隅丸の方形を呈する。底面は２段になっており、低い部分において平面形態が隅丸長方形で、直径0.20～0.24ｍ、深さ0.06ｍを測る柱穴を検出した。土坑跡の断面形態は２段の箱型になっており、その最深部に柱穴跡がある。土層断面部分に柱穴がかかっており、土坑底面からの掘削となっている。しかし柱穴の掘削深度が６㎝であることから下層は杭を固定する堆積土の可能性を考えたい。規模は南西－北東方向0.79ｍ、北西－南東方向0.75ｍ、検出面からの深さは１段目が約0.12～0.15ｍ、底面が0.24ｍを測る。土坑跡の埋土は２層で、上層が青灰色砂質土と濁茶色粘質土の混じった層、下層が上層よりやや粘質が強い粘質土が堆積している。基盤層は単層で、青灰色粘質土と土坑内の堆積土とかなり近似する。柱穴跡の堆積土は青灰色砂層で明瞭な差が認められる。

土坑跡内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明であるが、土坑跡内堆積土から縄文時代と考えられる。

### ＳＫ550

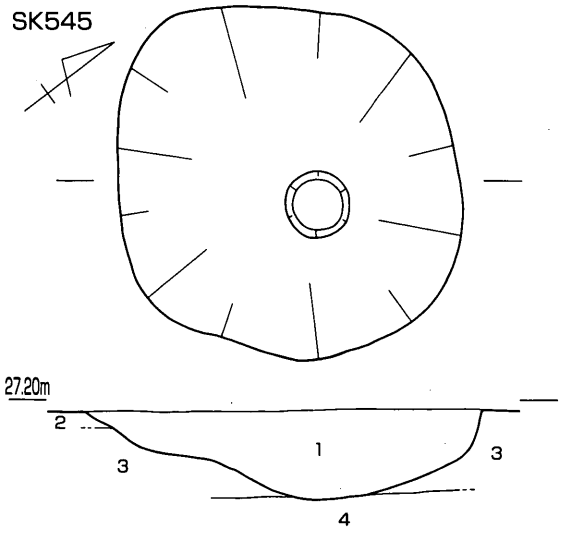
ＳＫ550は第Ⅱ調査区（Ｇ－15）中央部北、東方向から西方向に約4.0ｍで、約0.20ｍの比高差を持つ傾斜地の標高26.31ｍで検出した土坑跡である。平面形態は若干歪ではあるが隅丸の方形を呈する。一部２段状になっており、低い部分において平面形態が隅丸方形で、直径0.35ｍ、深さ0.08ｍを測る柱穴跡を検出した。土坑跡の断面形態は歪な箱型になっており、その最深部に柱穴跡がある。土層断面部分に柱穴がかかっており、土坑底面からの掘削と考えるが、柱穴の深さが８㎝であることから、上部の堆積土上面からの掘り込みの可能性が考えられる。規模は西東方向1.04ｍ、南北方向0.88ｍ、検出面からの深さは１段目が約0.10ｍ、底面が0.20ｍを測る。土坑跡の堆積土は単

SK544



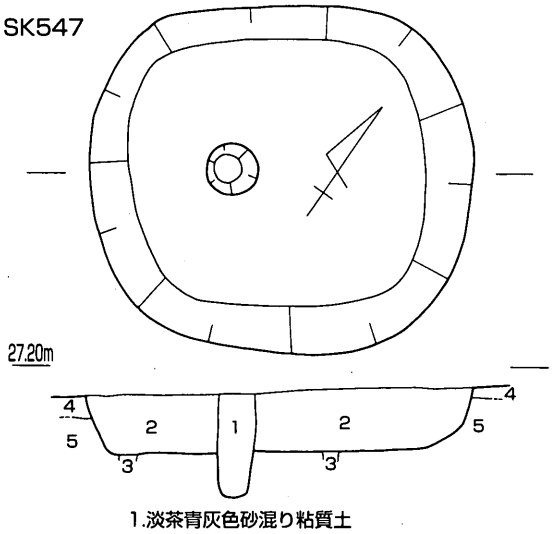

1.淡灰茶色砂混り粘質土
2.こげ茶色砂混り粘質土(ベース)
3.灰茶色砂混り粘質土(ベース)

SK545



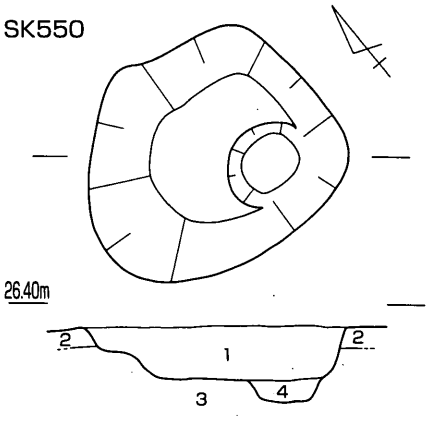

1.淡黄青灰色砂混り粘質土
2.褐茶色砂混り粘質土(バイラン土)(ベース)
3.淡茶色砂混り粘質土(バイラン土)(ベース)
4.茶青灰色粘質土(ベース)

SK547



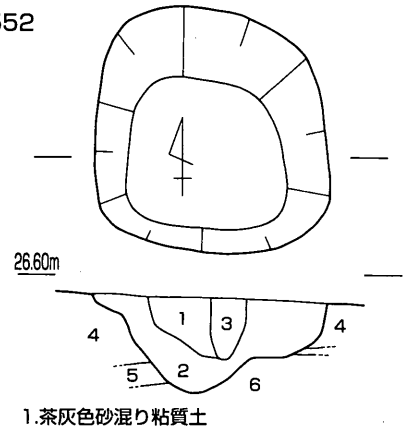

1.淡茶青灰色砂混り粘質土
2.淡灰茶色砂混り粘質土
3.青灰色砂混り粘質土
4.黄茶色砂混り粘質土(ベース)
5.灰茶色砂混り粘質土(ベース)

SK550



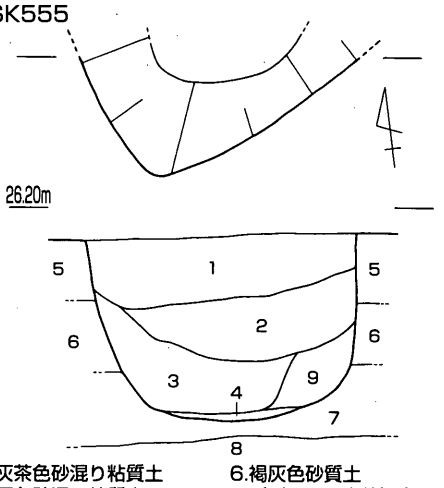

1.青灰褐色砂質土
2.灰褐色砂質土(ベース)
3.青灰茶色粘質土(ベース)
4.茶褐色粘質土(ピット)

SK552

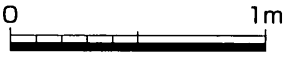



1.茶灰色砂混り粘質土
2.明灰茶色砂混り粘質土
3.濁褐灰色砂混り粘質土(柱穴か?)
4.明黄灰茶色粘質土(少量砂粒を含む)(ベース)
5.淡茶灰色粘土(ベース)
6.淡青茶色砂混り粘質土(ベース)

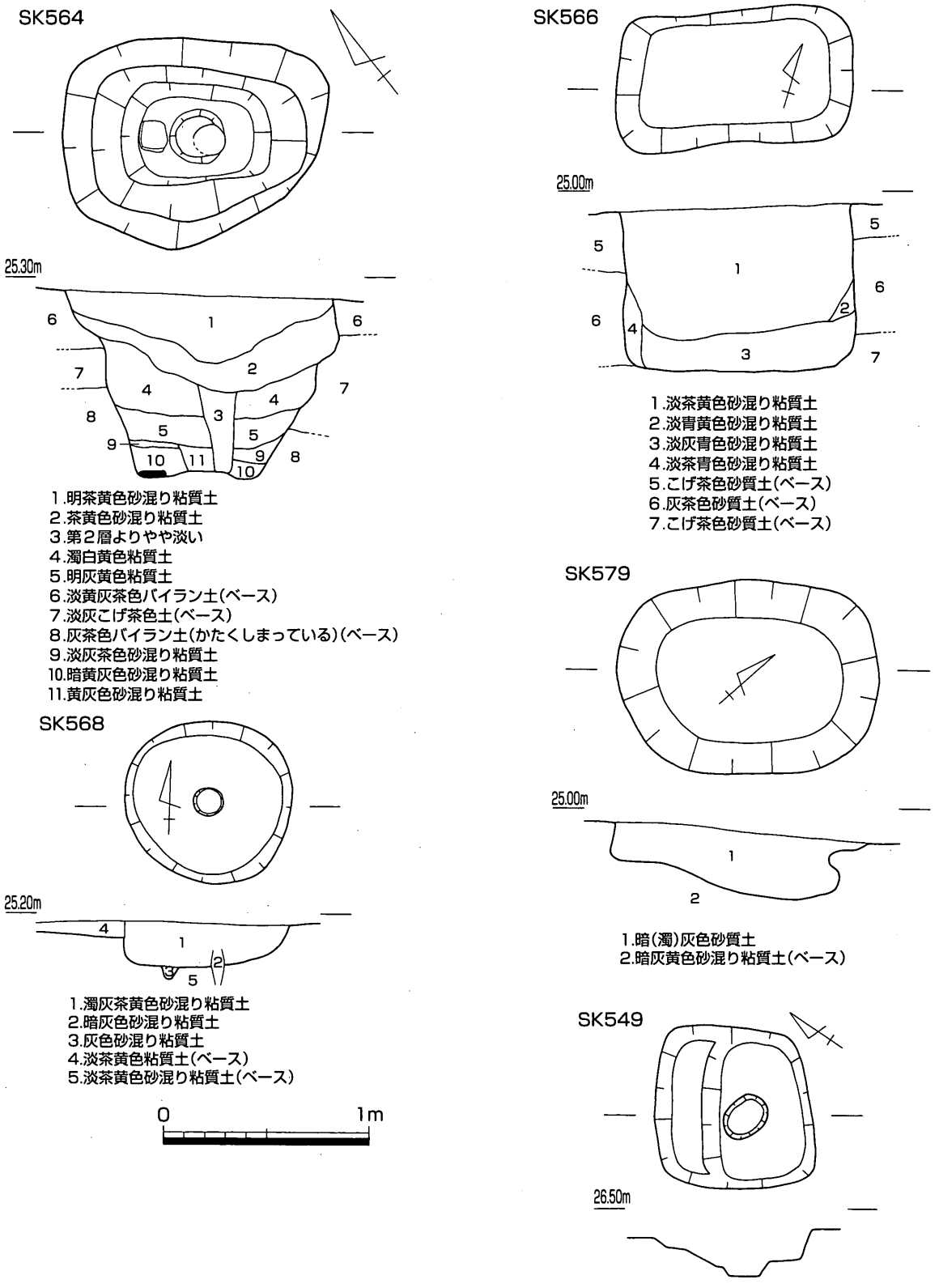
SK555




1.淡褐灰茶色砂混り粘質土
2.淡茶灰色砂混り粘質土
3.灰色砂質土
4.灰色シルト質土
5.淡褐灰茶色粘質土(ベース)
6.褐灰色砂質土(バイラン土状)(ベース)
7.褐茶色粘質土(ベース)
8.淡青灰茶色粘質土(ベース)
9.褐青灰色砂質土




第11図　ＳＫ544・545・547・550・552・555平・断面図




第12図　ＳＫ549・564・566・568・579平・断面図

層で、青灰褐色砂質土が堆積している。基盤層は２層に細分でき、上層が灰褐色砂質土、下層が青灰茶色粘質土と土坑内の堆積土とかなり近似する。柱穴の埋土は茶褐色粘質土で明瞭な差が認められる。

土坑跡内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明であるが、土坑跡内堆積土から縄文時

代と考えられる。

### ＳＫ552

ＳＫ552は第Ⅱ調査区（Ｈ－15）中央部南、東方向から西方向に約4.0ｍで、約0.20ｍの比高差を持つ傾斜地の標高26.53ｍで検出した土坑跡である。平面形態は隅丸方形を呈する。土坑跡の断面形態は不整形で、土層断面部分に柱穴がかかっており、土坑堆積土上面から掘削されている。規模は西東方向0.92ｍ、南北方向0.96ｍ、検出面からの深さは約0.37ｍを測る。土坑跡の堆積土は３層で、上層が茶灰色砂混じり粘質土、下層が明灰茶色砂混じり粘質土が堆積している。基盤層は３層に細分でき、上層が明黄灰茶色粘質土、中層が淡茶灰色粘土、下層が淡青茶色砂混じり粘質土と土坑内の堆積土とかなり近似する。柱穴の埋土（第３層）は濁褐灰色砂混じり粘質土で土坑堆積土とは明瞭な差が認められる。

土坑跡内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明であるが、土坑跡内堆積土、杭の痕跡から縄文時代と考えられる。

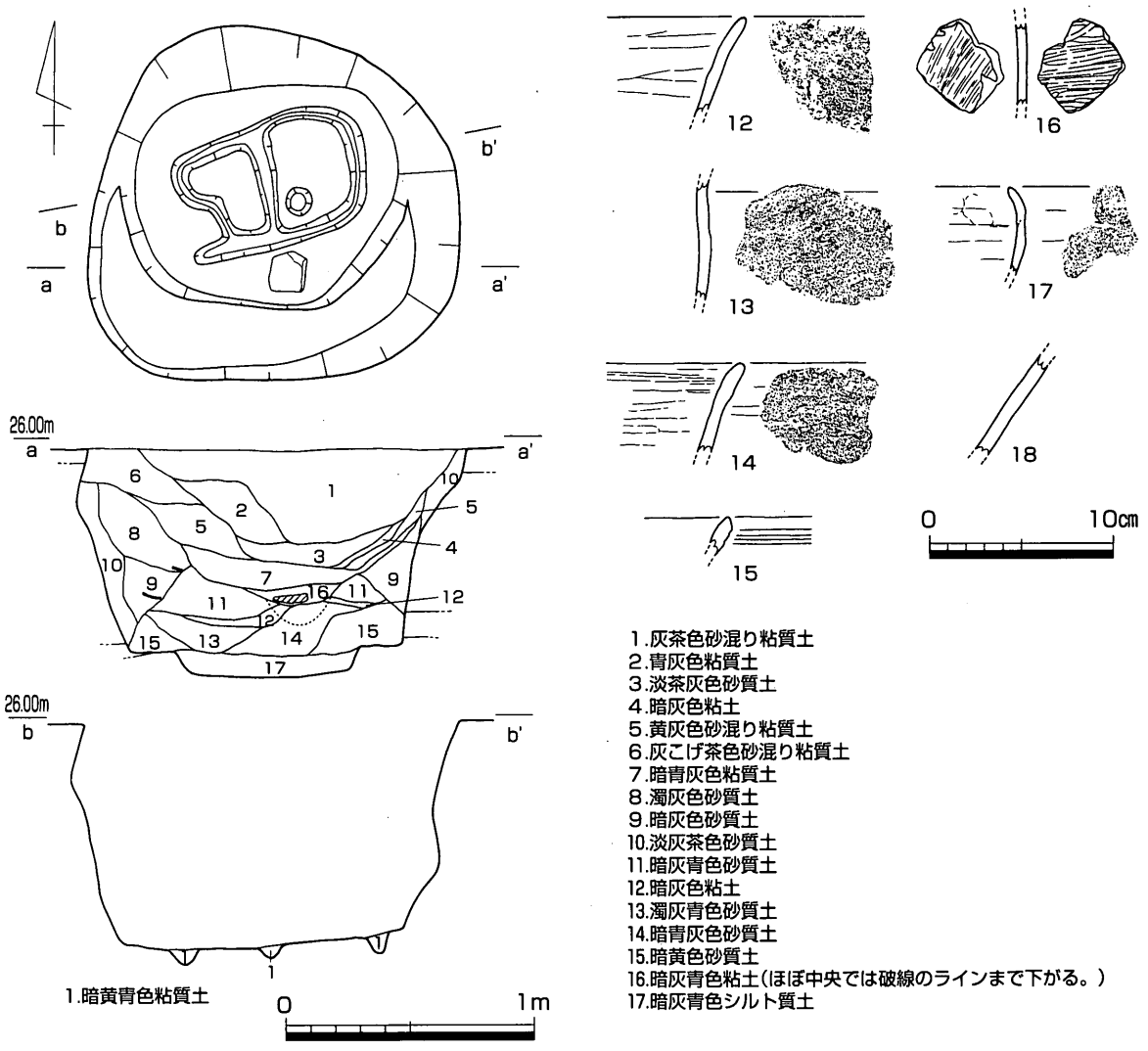
### ＳＫ554

ＳＫ554は第Ⅱ調査区（Ｇ－16）中央部北、東方向から西方向に約5.0ｍで、約0.10ｍの比高差を持つ緩傾斜地の標高25.95ｍで検出した土坑跡である。平面形態は歪な隅丸方形を呈する。底面は南側部分が高く、２段状になっており、低い部分において「日」字状の溝を、溝間に平面形態が円形で、直径0.11ｍ、深さ0.10ｍを測る柱穴跡を検出した。土坑跡の断面形態は上部がやや開く箱型になっており、その最深部で溝状遺構・柱穴跡を検出した。規模は西東方向1.50ｍ、南北方向1.39ｍ、検出面からの深さは１段目が約1.54ｍ、２段目底面が1.78ｍを測る。土坑の堆積土は17層に細分できる。土層断面からこれらの土層はⅠ層として第１～７・16層が、Ⅱ層として第８～10層が、Ⅲ層として第11～15・17層のⅠ～Ⅲ層に大別できる。Ⅰ層は下部から徐々に堆積していることから土坑廃絶後の窪みに徐々に流土が堆積したと考えられ、茶灰色系の砂混じり粘質土が主として堆積している。Ⅱ層は土坑壁面に傾斜堆積していることから土坑が廃絶するまでに壁面の崩落等により堆積した土層と考えられる。Ⅲ層は土層断面的には盛り上がった状態であるが、各土層が概ね水平堆積していることから土坑掘削時に杭等を固定するために土坑底面に盛り上げたものと考えられる。基盤層は４層に細分でき、茶色系の粘質土層で、灰色系の土坑内堆積土とは明瞭な差が認められる。

底面で検出した柱穴１基は掘削深度が10㎝程度であることから、土層から見たⅢ層で杭を固定したものと考えられるが、同じ底面で検出した溝については、深さは５～７㎝程度で、「日」状を呈しており、その性格・用途については不明である。

土坑内堆積土、第８層、第９層から縄文土器片が出土している。14～18は第８層から出土した深鉢である。口縁部は直線的に外上方に延び、口縁端部は丸く終わらせる。15は口縁部外面に２条の沈線が認められる。16は浅鉢の体部片で、内外面にヘラミガキが密に施されている。17はボウル状の鉢である。12・13は第９層から出土した深鉢である。

これらの遺物が出土した土層は、大別したⅡ層にあたり、この土坑が廃絶するまでの間に堆積した土層であることから、出土遺物がこの土坑の掘削時期を決定するまでには至らないが、ここでは




第13図　ＳＫ554平・断面図、出土遺物実測図

同時期と考え、土坑の時期を縄文時代後期前半とする。

### ＳＫ555

ＳＫ555は第Ⅱ調査区（Ｇ－16）中央部北、東方向から西方向に約5.0ｍで、約0.10ｍの比高差を持つ緩傾斜地の標高26.10ｍで検出した土坑跡である。平面形態は北部分が試掘トレンチによって削られているが、隅丸の方形を呈するものと考えられる。残存する土坑跡の断面形態は「Ｕ」字状を呈している。規模は西東方向の残存長0.96ｍ、南北方向の残存長0.60ｍ、検出面からの深さは0.72ｍを測る。土坑跡の堆積土は５層に細分でき、上部が茶灰色系の砂混じり粘質土で、下部が灰色砂質土、底面に薄い灰色シルト質土が堆積している。基盤層は４層に細分でき、上層が褐灰色粘質～砂質土で、下層が淡青灰茶色粘質土と土坑内の堆積土と明瞭な差が認められる。

土坑跡内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明であるが、土坑跡内堆積土から縄文時代と考える。

### ＳＫ558

ＳＫ558は第Ⅱ調査区（Ｇ－16）中央部北、東方向から西方向に約4.0ｍで、約0.20ｍの比高差を

持つ傾斜地の標高25.92mで検出した土坑跡である。平面形態はやや歪な円形を呈する。底面東側で平面形態が円形で、直径0.24m、底部検出面からの深さ約0.10mを測る柱穴跡を検出した。土坑跡の断面形態は箱型を呈しており、その最深部に柱穴跡がある。規模は直径0.62m、検出面からの深さは約0.19mを測る。土坑跡の堆積土は単層で、淡灰茶色砂混じり粘質土が堆積している。基盤層は2層に細分でき、上層が淡茶灰色砂混じり粘質土、下層が灰こげ茶色砂混じり粘質土と土坑内の堆積土とかなり近似する。柱穴の埋土も淡茶灰色砂混じり粘質土である。

土坑跡内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明であるが、土坑跡内堆積土から縄文時代と考える。

### ＳＫ559

ＳＫ559は第Ⅱ調査区（Ｇ－16）中央部北、東方向から西方向に約4.0mで、約0.20mの比高差を持つ傾斜地の標高25.90mで検出した土坑跡である。平面形態は隅丸方形を呈する。底面において平面形態が円形で、直径0.07m、深さ0.23mを測る柱穴跡を５基検出した。この柱穴跡は北半分のみで、南半分については試掘トレンチ等により確認できなかったが、底面全体にあったものと考えられる。この柱穴跡は全て10cm以下と小さいことから杭の痕跡と考えられる。土坑跡の断面形態は「Ｕ」字状を呈し、その最深部に柱穴が掘削されている。土層断面部分に柱穴がかかっており、土坑底面からの掘削と考える。規模は西東方向0.98m、南北方向現存長1.00m、検出面からの深さは0.24mを測る。土坑跡の堆積土は２層に細分でき、茶灰色系の粘質土が堆積している。基盤層は４層に細分でき、茶灰色系の砂混じり粘質土と土坑内の堆積土とかなり近似する。柱穴跡の埋土は灰色粘質土で明瞭な差が認められる。

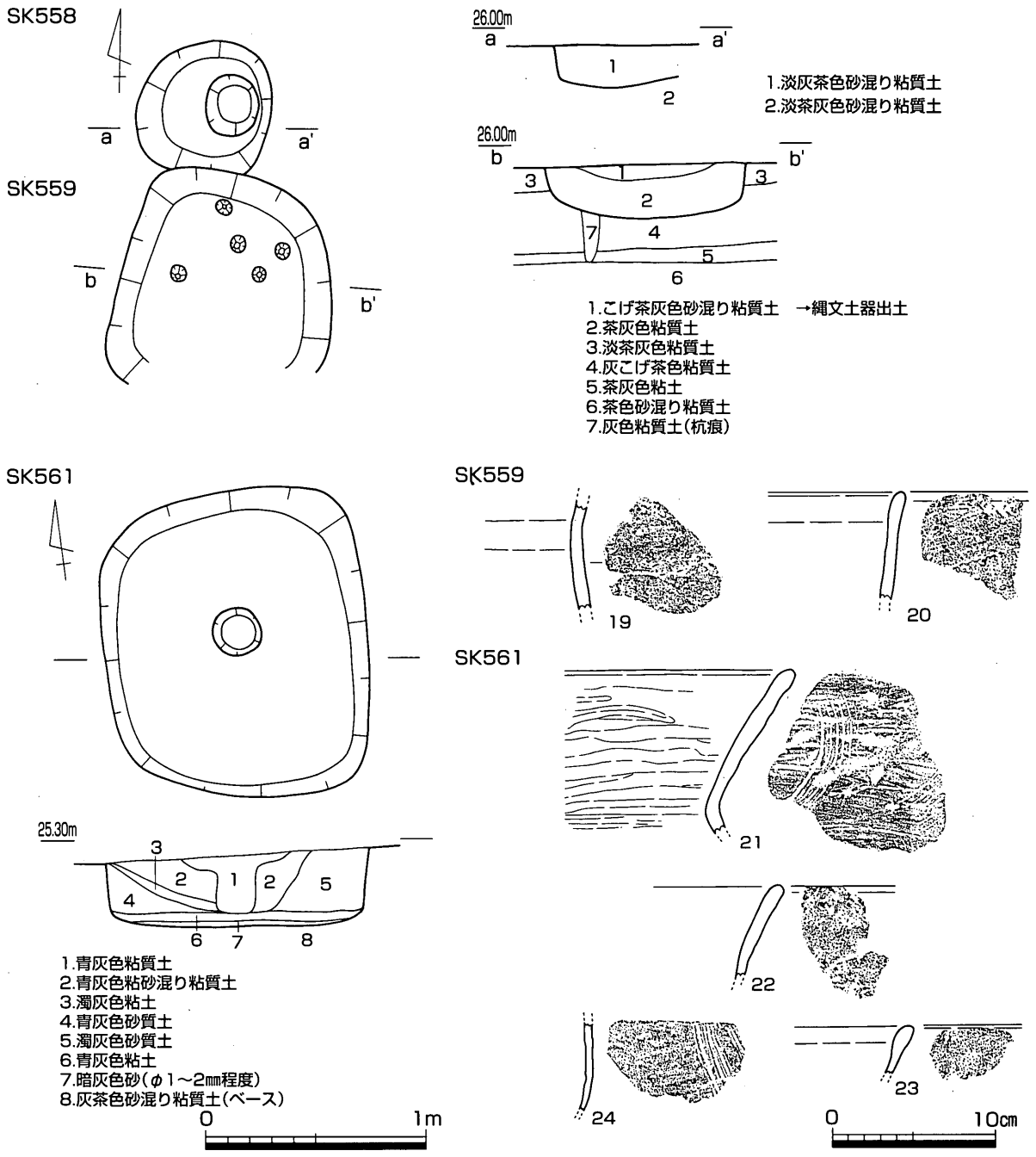
土坑跡内堆積土第１層から縄文土器片が出土している。19・20は深鉢と考えられ、頸部が緩やかに「く」の字に屈曲し、口縁部は直線的に外上方に延び、口縁端部は丸く終わらせる。

時期は縄文時代後期前半である。

### ＳＫ561

ＳＫ561は第Ⅱ調査区（Ｇ－16）中央部北、東方向から西方向に約5.0mで、約0.30mの比高差を持つ傾斜地の標高25.26mで検出した土坑跡である。平面形態は隅丸方形を呈する。平面的には検出できなかったが、土層断面からみると柱穴上部が広がるが、下位部分は平面形態が円形で、直径0.23m、深さ0.26mを測る柱穴跡を検出した。土坑跡の断面形態は箱型を呈する。土層断面部分に柱穴がかかっており、堆積土上面からの掘削と考える。規模は西東方向1.21m、南北方向1.40m、検出面からの深さは0.32mを測る。土坑跡の埋土は７層に細分でき、下位に青灰色粘土、暗灰色砂層を２～３cm均一に敷き、上面に柱を設置し、第２・３・４・５層で固定している。基盤層は単層で、灰茶色砂混じり粘質土と土坑内の堆積土と明瞭に差が認められる。柱穴跡の堆積土は青灰色粘質土で明瞭な差が認められる。

土坑跡内から縄文土器片が出土している。全て深鉢と考えられ、21・22は頸部が「く」の字に屈曲し、口縁部は直線的に外上方に延び、口縁端部は丸く終わらせる。21は口縁部外面に６条の櫛描沈線が、上方から下方に向けて「ノ」字に描かれ、櫛描沈線は体部上位にも認められる。24は深鉢の体部で、５～６条の櫛描沈線が認められる。23は口縁端部内面を丸く肥厚させ、口縁端部は丸く



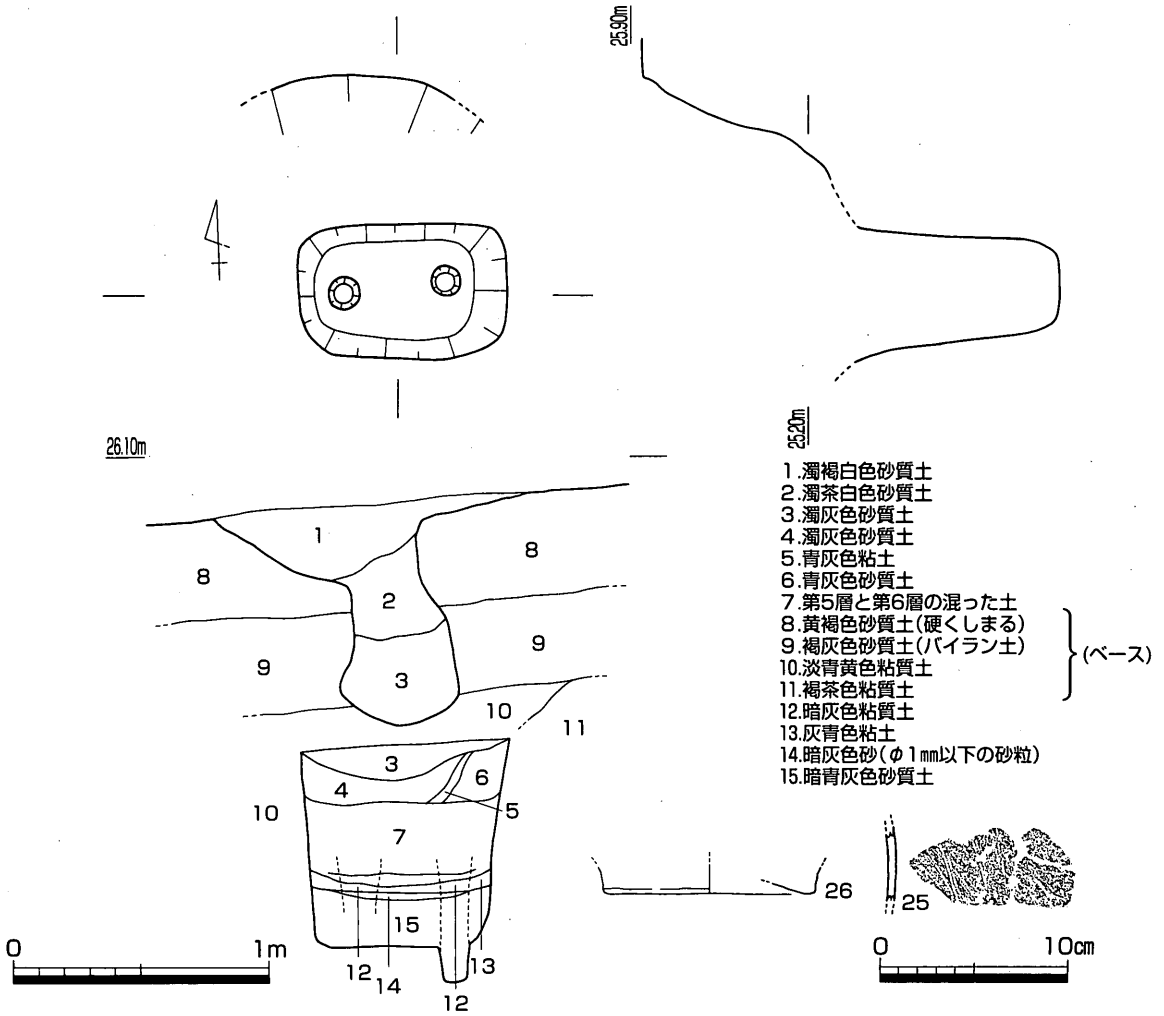

第14図　ＳＫ558・559・561平・断面図、出土遺物実測図

終わらせる。

時期は縄文時代後期前半である。

### ＳＫ563

ＳＫ563は第Ⅱ調査区（Ｇ－16）中央部北、東方向から西方向に約5.0ｍで、約0.30ｍの比高差を持つ傾斜地の標高25.96ｍで検出した土坑跡である。平面形態は上部が楕円形と推定でき、下部が隅丸長方形を呈する。底面において平面形態が円形で、直径0.12ｍ、深さ0.13ｍを測る柱穴跡を２基検出した。土坑跡の断面形態は上部がラッパ状に開く「Ｕ」字状を呈する。下部は箱型を呈し、その最深部に柱穴跡がある。土層断面部分に柱穴がかかっており、土坑下部上面（第７層上面）か




第15図　ＳＫ563平・断面図、出土遺物実測図

らの掘削と考える。規模は上部で推定約1.6m程度を測り、下部は西東方向0.83m、南北方向0.51m、検出面からの深さは上部が約0.86m、下部が0.80mを測る。土坑跡の堆積土は上部が６層、下部が５層に細分できる。上部の堆積土（第１～６層）は白色系と灰色系の砂質土層で、下部の堆積土（第７・12～15層）は青灰色系の粘質あるいは砂質土で明瞭な差が認められる。柱穴埋土は下部上面（第７層上面）まで確認できなかったが、明瞭な堆積土の差から下部の堆積土は柱穴を固定するための埋土で、上部は廃絶後の堆積土と考えられる。基盤層は４層に細分でき、上層が褐色系の砂質土層で、下層が青黄色、茶色系の粘質土層と土坑内上部の堆積土とかなり近似する。柱穴の埋土はかなり下部の堆積土と近似しており、明瞭な差が認められなかった。

土坑跡内から縄文土器片が出土している。全て深鉢と考えられ、25は下層から出土した体部片、26は第14層から出土した底部で、上げ底状を呈する。また下層から炭が出土している。

時期は縄文時代後期前半である。

### ＳＫ564

ＳＫ564は第Ⅱ調査区（Ｇ－16）中央部南、東方向から西方向に約5.0mで、約0.20mの比高差を持つ傾斜地の標高25.24mで検出した土坑跡である。平面形態は隅丸長方形を呈する。ほぼ中央底部で平面形態が円形で、直径0.26m、検出面からの深さ0.38mを測る柱穴跡を検出した。土坑跡の

断面形態は緩やかに上部が開く箱型を呈しており、上部で階段状になる部分が認められる。土層断面部分に柱穴がかかっており、ちょうど階段状になった部分に対応する土層（第４層）上面から掘削されていることが解る。規模は北西－南東方向1.28m、南西－北東方向1.01m、検出面からの深さは約0.87mを測る。土坑跡の堆積土は８層で、第４層上面から柱穴が掘削されていることから第１・２層はこの土坑の廃絶後の堆積土で、第４・５・９～11層は柱穴を固定するための堆積土であることが解る。柱穴埋土は淡茶黄色砂混じり粘質土と土坑内の上部堆積土とかなり近似する。基盤層は３層に細分でき、上層が淡黄灰茶色バイラン土、中層が淡灰こげ茶色バイラン土、下層が灰茶色バイラン土と土坑内の堆積土と明瞭な差が認められる。

土坑跡内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明であるが、土坑跡内堆積土、杭の痕跡から縄文時代と考えられる。

### ＳＫ566

ＳＫ566は第Ⅱ調査区（Ｇ－16）中央部北、東方向から西方向に約5.0mで、約0.30mの比高差を持つ傾斜地の標高24.94mで検出した土坑跡である。平面形態は隅丸長方形を呈する。土坑の断面形態は箱型を呈し、底面に柱穴等は検出していない。規模は東西（長軸）方向1.17m、南北（短軸）方向0.63m、検出面からの深さは0.77mを測る。土坑跡の堆積土は４層で、上層が淡茶黄色砂混じり粘質土層、下層が淡灰青色砂混じり粘質土の２層が主として堆積している。基盤層は３層に細分でき、上層がこげ茶色砂質土層、中層が灰茶色砂質土層、下層がこげ茶色砂質土層と土坑内の堆積土と明確に区別できる。

土坑内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明であるが、土坑内堆積土から縄文時代と考えられる。

### ＳＫ568

ＳＫ568は第Ⅱ調査区（Ｇ－17）中央部南、東方向から西方向に約3.0mで、約0.20mの比高差を持つ緩傾斜地の標高25.16mで検出した土坑跡である。平面形態はやや歪な円形を呈する。底面ほぼ中央で平面形態が円形で、直径0.15m、底部検出面からの深さ約0.14mを測る柱穴跡を１基検出した。土坑跡の断面形態は箱型を呈しており、その最深部に柱穴跡がある。規模は直径0.82m、検出面からの深さは約0.22mを測る。土坑跡の堆積土は単層で、濁灰茶黄色砂混じり粘質土が堆積している。基盤層は２層に細分でき、上層が淡茶黄色粘質土、下層が淡茶黄色砂混じり粘質土と土坑内の堆積土とかなり近似する。土坑底面では１基の柱穴しか検出できなかったが、土層断面では第２・３層として柱穴状の土層を確認した。柱穴跡の埋土は灰色系の砂混じり粘質土で、土坑堆積土と明瞭に差が認められることから、第１層が杭を固定する堆積土で、本来この土坑には杭が３本以上あったことが推定できる。

土坑跡内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明であるが、土坑跡内堆積土、杭の痕跡から縄文時代と考えられる。

### ＳＫ579

ＳＫ579は第Ⅱ調査区（Ｇ－17）中央部中央、東方向から西方向に約3.0mで、約0.30mの比高差

を持つ傾斜地の標高24.93mで検出した土坑跡である。平面形態は隅丸の長方形を呈する。土坑跡の断面形態は歪な箱型を呈し、底面に柱穴等は検出していない。規模は南西－北東（長軸）方向1.28m、北西－南東（短軸）方向0.94m、検出面からの深さは0.30mを測る。土坑跡の埋土は単層で、暗灰色砂質土が堆積している。基盤層は単層で、暗灰黄色砂混じり粘質土である。

土坑跡内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明であるが、土坑跡内堆積土から縄文時代と考えられる。

## 2．自然流路跡

### ＳＲ501

ＳＲ501は第Ⅱ調査区（Ｇ－19・20）中央部西端で検出した自然流路跡である。流路幅に対して深さがなく、かなり削平を受けているものと考えられ、東側では消滅し、西側ではＳＲ502によって切られている。流路方向は北西－南東（Ｎ－68°－Ｗ）を取る。当遺跡周辺の旧地形を前章で復元したが、その主要なウラ谷池→上池→新池→長尾池の旧流路の北側に小さい旧流路の存在が考えられ、この検出したＳＲ501はその痕跡ではないかと思われる。規模は最大幅約9.74m、深さ約0.3m、検出長約14.0mを測る。自然流路跡の堆積土は４層で、第１層が暗こげ茶灰色砂混じり粘質土、第２層が暗こげ茶灰色粘質土、第３層が暗こげ茶灰色粘質土のブロックを含む灰色砂層、第４層が白灰色砂層と上層２層が灰色系の粘質土で、下層２層が灰色系の砂質土と大別すると上下に二分できる。基盤層は淡茶黄色砂質土層である。第１層は部分的に確認できる土層であるがかなりの遺物を包含している。第２層は流路のほぼ全体に堆積しているが、遺物量は少ない。第３層は流路の中央部の窪みに堆積した土層で、第４層は流路の全体に堆積したものである。

自然流路跡の各層から弥生土器、サヌカイト製品・剥片等の多量の遺物が出土している。

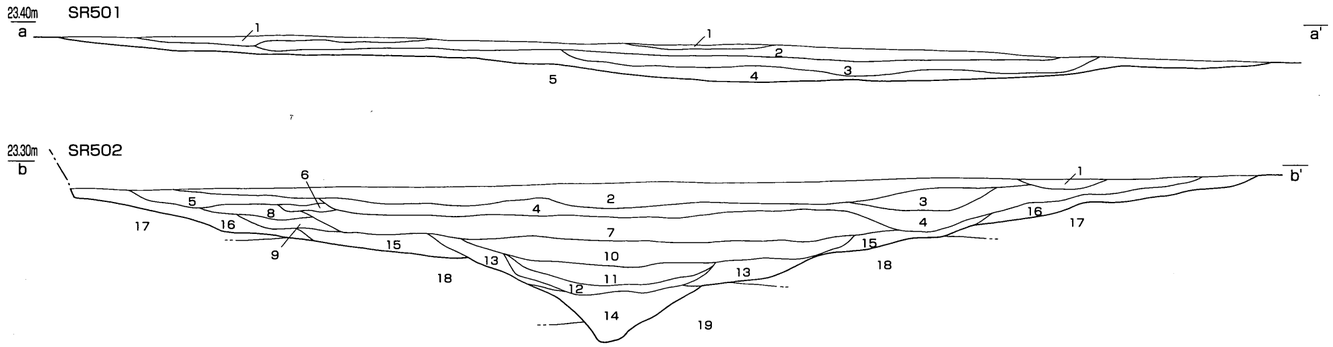
27～144は第１層から出土した弥生土器壺、甕、鉢、高坏、製塩土器、石製品である。

壺は頸部がほぼ直線的に上方に延び、口縁部がほぼ水平に屈曲する。口縁端部は僅かに拡張し、端部外面にはかなり退化した凹線が施されているものがある。これ以外には頸部が短く上方に延び、口縁部が緩やかに外方に屈曲し、口縁端部を僅かに上下に摘み出すものがある。ほとんど全てが完形ではなく、破片であるために体部の形態は不明であるが、ほとんどの壺の口縁端部はあまり拡張しないことが解る。34は頸部と体部の屈曲部外面に突帯を貼り付けるもので、大型の壺と考えられる。

甕は頸部が「く」の字に屈曲し、内面が緩やかに屈曲するもの、明瞭な稜を持つもの、1.0cm程度の平坦面を持ち、屈曲するものがある。口縁端部は頸部の形態差に関係なく、外反あるいは直線的に延び、口縁端部をそのまま終わらせるか、僅かに上方に摘み上げるものがある。調整はかなり摩滅しており、詳細は不明であるが、内面の調整は内面屈曲部以下をヘラケズリするもの（71）、平坦面から数cm以下をヘラケズリするもの（68）が認められる。74は弥生時代中期の甕である。

鉢は口径35～37cm程度の大型のものと口径14cm程度の小型のものがあり、大型のものは口縁部が内湾し、外面に３条程度の凹線を施す。小型のものは内湾する体部から口縁部が「く」の字に屈曲し、口縁端部をそのまま終わらせる。大型の鉢は口縁部が明瞭に拡張せず、外面の凹線もかなり退化しているのが特徴である。

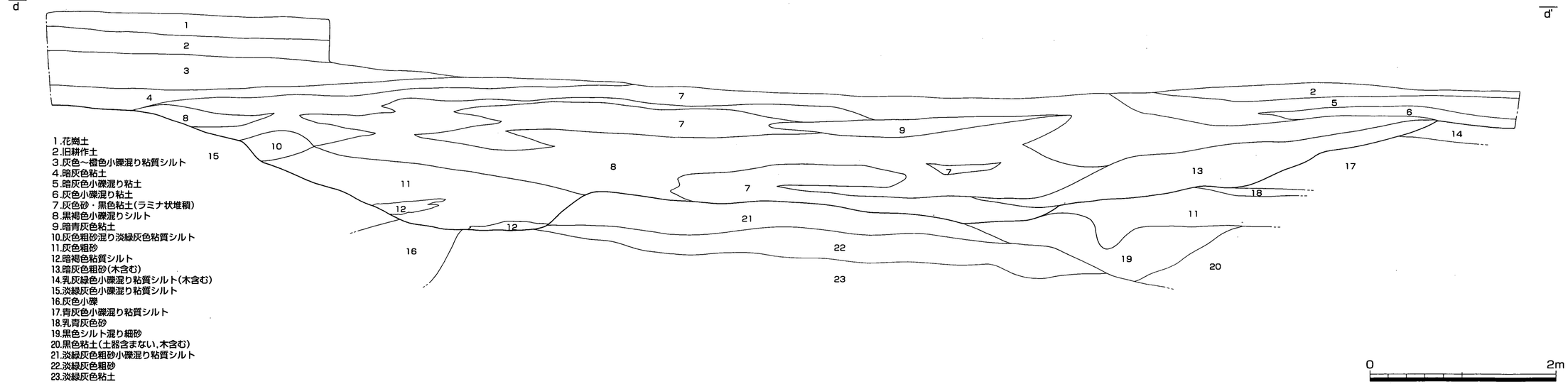
高坏は口縁部が外反し、口縁端部はそのまま丸く終わらせる。脚部には上下２段あるいは１段に




1.暗こげ茶灰色砂混り粘質土
2.暗こげ茶灰色粘質土
3.灰色砂(φ1～2mm．暗こげ茶灰色粘質土のブロック含む)
4.白灰色砂(φ1～2mm)
5.淡茶黄色砂質土

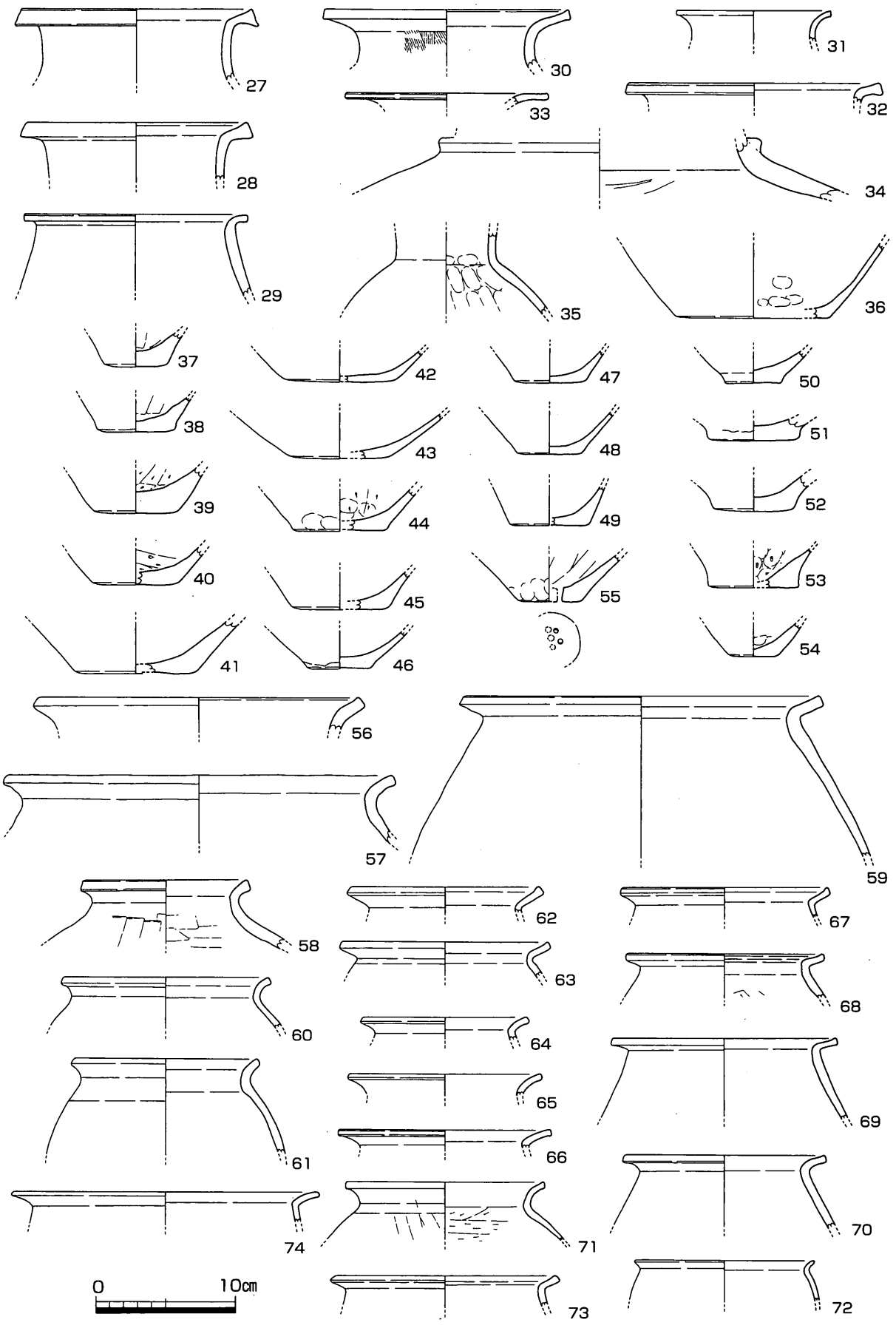
1.濁白灰色砂(φ1～2mm)
2.暗こげ茶灰色砂混り粘質土(φ1～3mm)
3.灰黒色粘質土
4.暗黒灰色砂混り粘質土(φ1～3mm)
5.第4層と同じ
6.濁灰色砂(φ1～2mm)
7.黒色粘土
8.暗茶灰色砂混り粘質土(φ1～3mm)
9.第8層よりやや淡い(同一層でもよい)
10.暗灰色砂質土(φ1～5mmを含む)
11.濁青白灰色砂(φ1～4mm)
12.青灰白シルト質土
13.暗青灰色砂質土
14.淡白茶色砂(φ1～5mm)
15.暗茶灰色砂質土
16.暗黄白灰色砂質土
17.淡茶黄色粘質土
18.淡白青色粘質土
19.淡白青色砂質土

1.黒色小礫混り砂質シルト
2.暗灰色小礫混り粗砂
3.黄色～乳緑灰色粗砂混り小礫(よくしまっている)

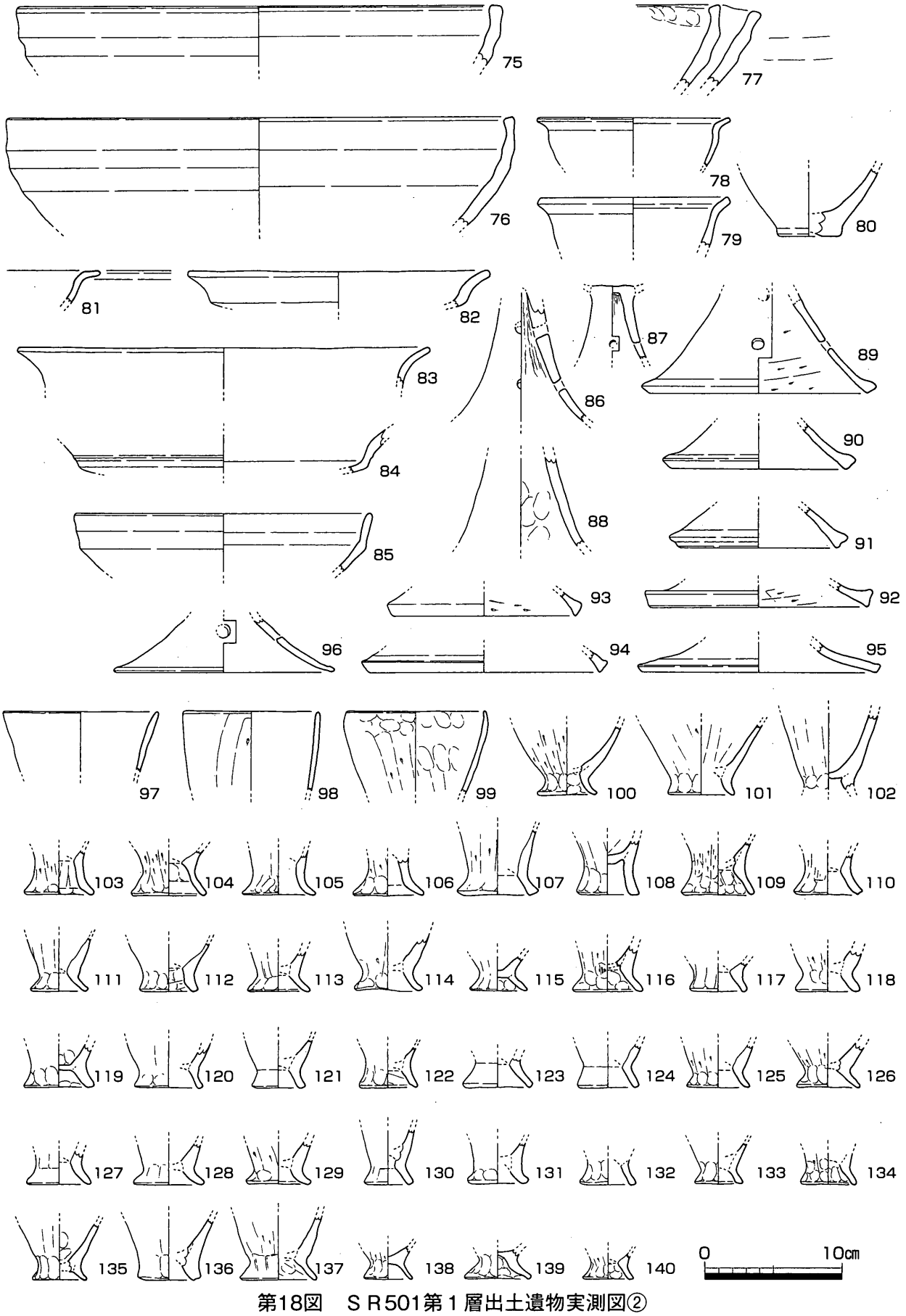



1.花崗土
2.旧耕作土
3.灰色～橙色小礫混り粘質シルト
4.暗灰色粘土
5.暗灰色小礫混り粘土
6.灰色小礫混り粘土
7.灰色砂・黒色粘土(ラミナ状堆積)
8.黒褐色小礫混りシルト
9.暗青灰色粘土
10.灰色粗砂混り淡緑灰色粘質シルト
11.灰色粗砂
12.暗褐色粘質シルト
13.暗灰色粗砂(木含む)
14.乳灰緑色小礫混り粘質シルト(木含む)
15.淡緑灰色小礫混り粘質シルト
16.灰色小礫
17.青灰色小礫混り粘質シルト
18.乳青灰色砂
19.黒色シルト混り細砂
20.黒色粘土(土器含まない,木含む)
21.淡緑灰色粗砂小礫混り粘質シルト
22.淡緑灰色粗砂
23.淡緑灰色粘土

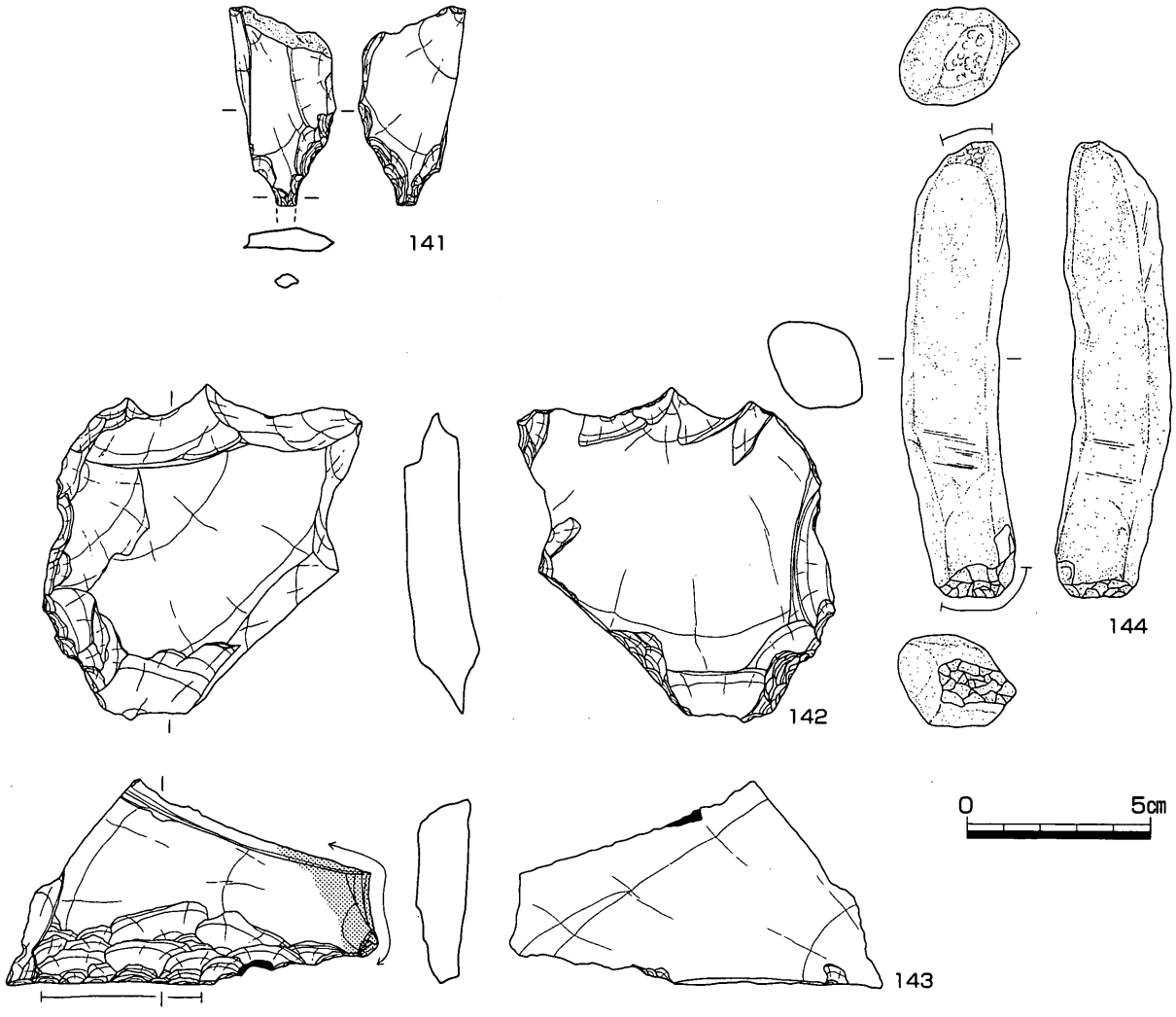
第16図　ＳＲ501・502・603・604土層断面図




第17図　ＳＲ501第１層出土遺物実測図①




第18図　ＳＲ501第１層出土遺物実測図②




第19図　ＳＲ501第１層出土遺物実測図③

穿孔が認められる。脚部端は上方を摘み出すものと下方を摘み出すものがある。脚端部外面には凹線状の窪みがあるものがあるが、量的には少ない。

製塩土器は脚部が外方に広がり、端部を方形に終わらせるものと細く、丸く終わらせるものがある。鉢部の体部はほぼ直線的に外上方に延び、そのまま終わらせるものと口縁部をやや内湾させるものがある。脚部外面には指頭痕・指ナデが、体部外面には縦方向のヘラケズリが施されている。脚部高は1.0～2.0cmで、特に脚部高の低い1.0～1.5cmのものが多量にある。

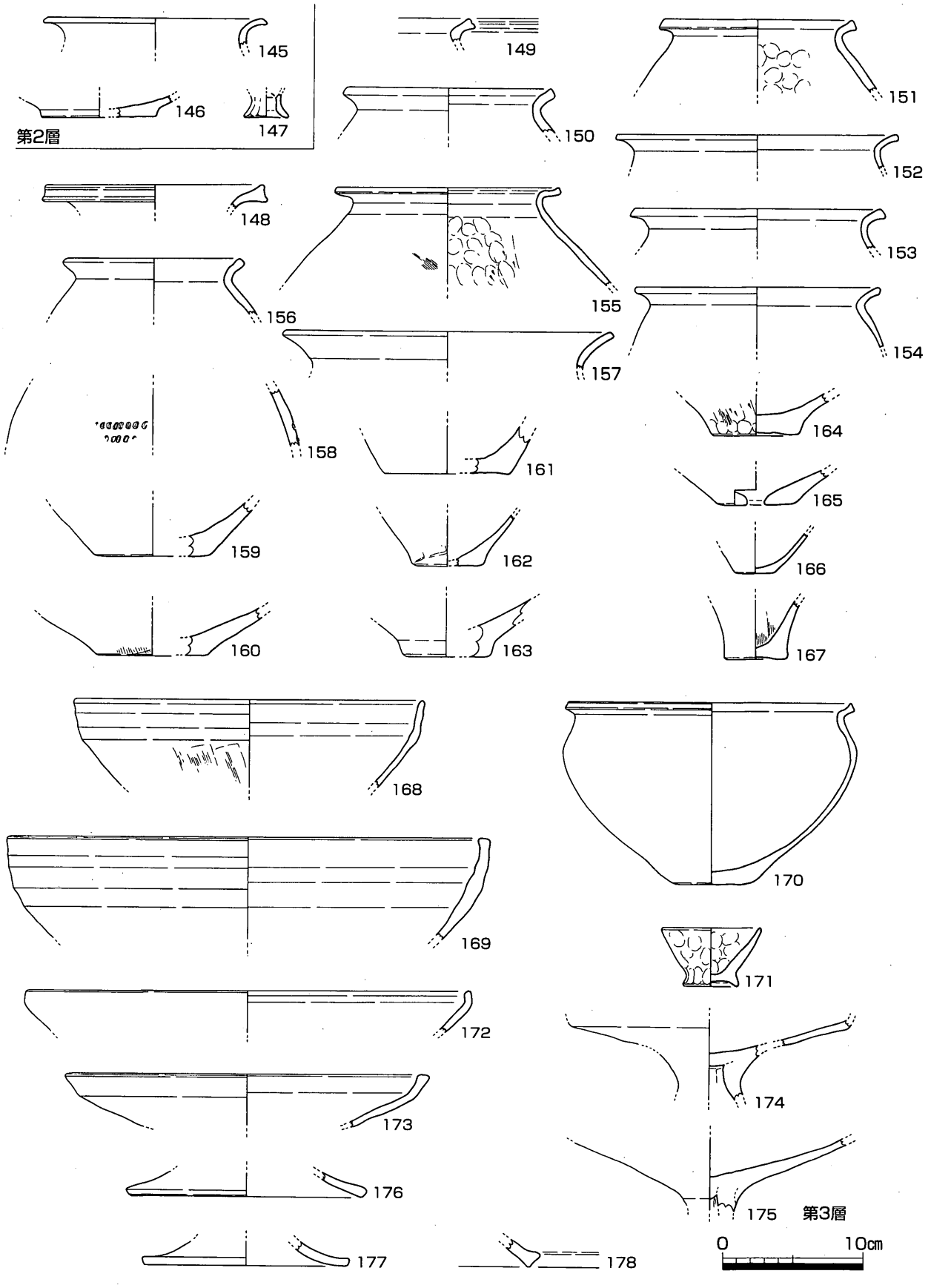
第１層から出土した遺物に角閃石を含む土器は甕である。角閃石を含む全体の割合は約5.0％である。

石製品はサヌカイト製の石錐、楔状石器、スクレイパーがあり、石錐は先端部が欠損している。また石製品に伴い剥片も出土している。サヌカイト製品以外では、砂岩製の叩き石も出土している。

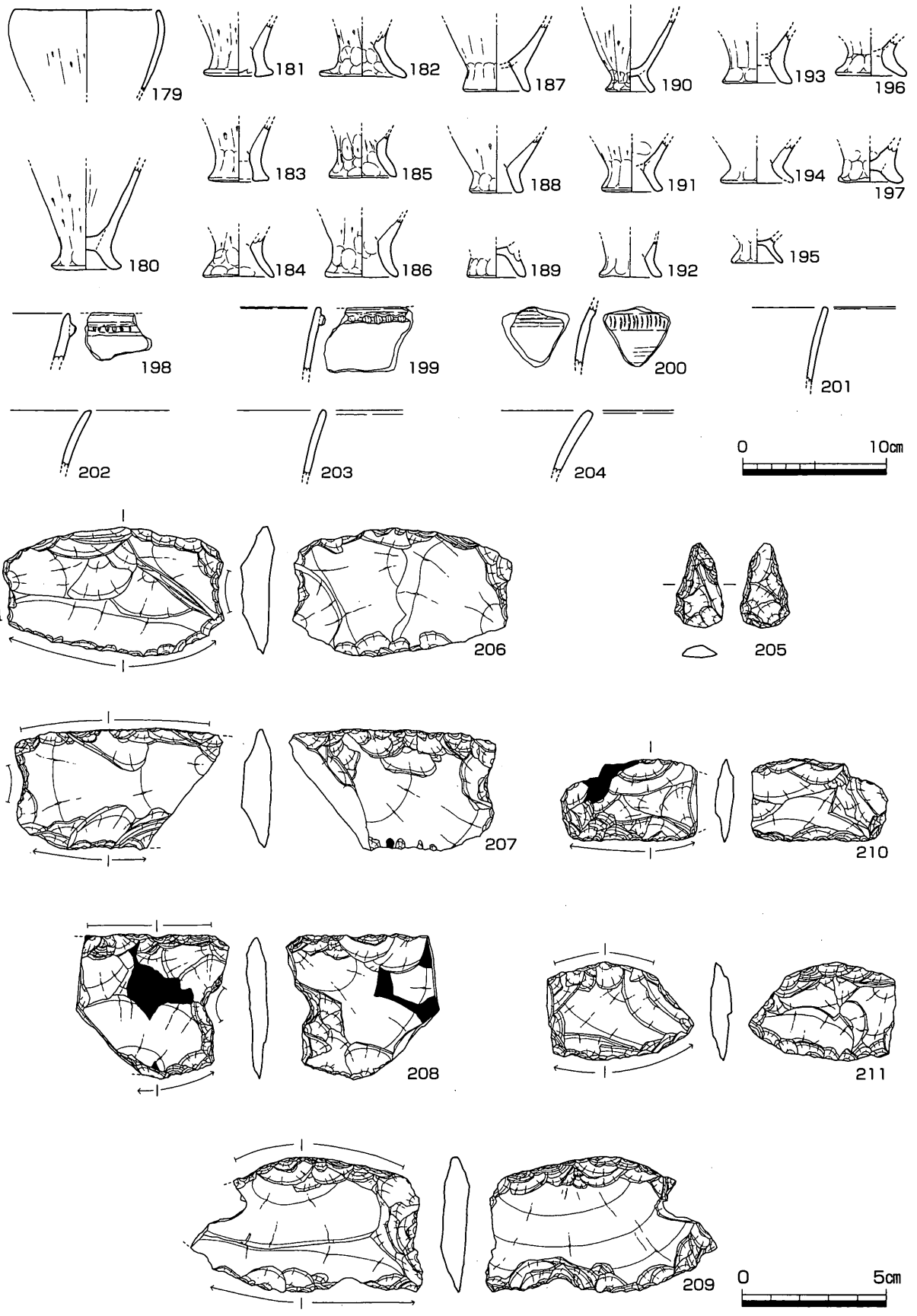
出土遺物から、第１層の時期は弥生時代後期中葉頃と考えられる。

145～147は第２層から出土した弥生土器甕、製塩土器である。

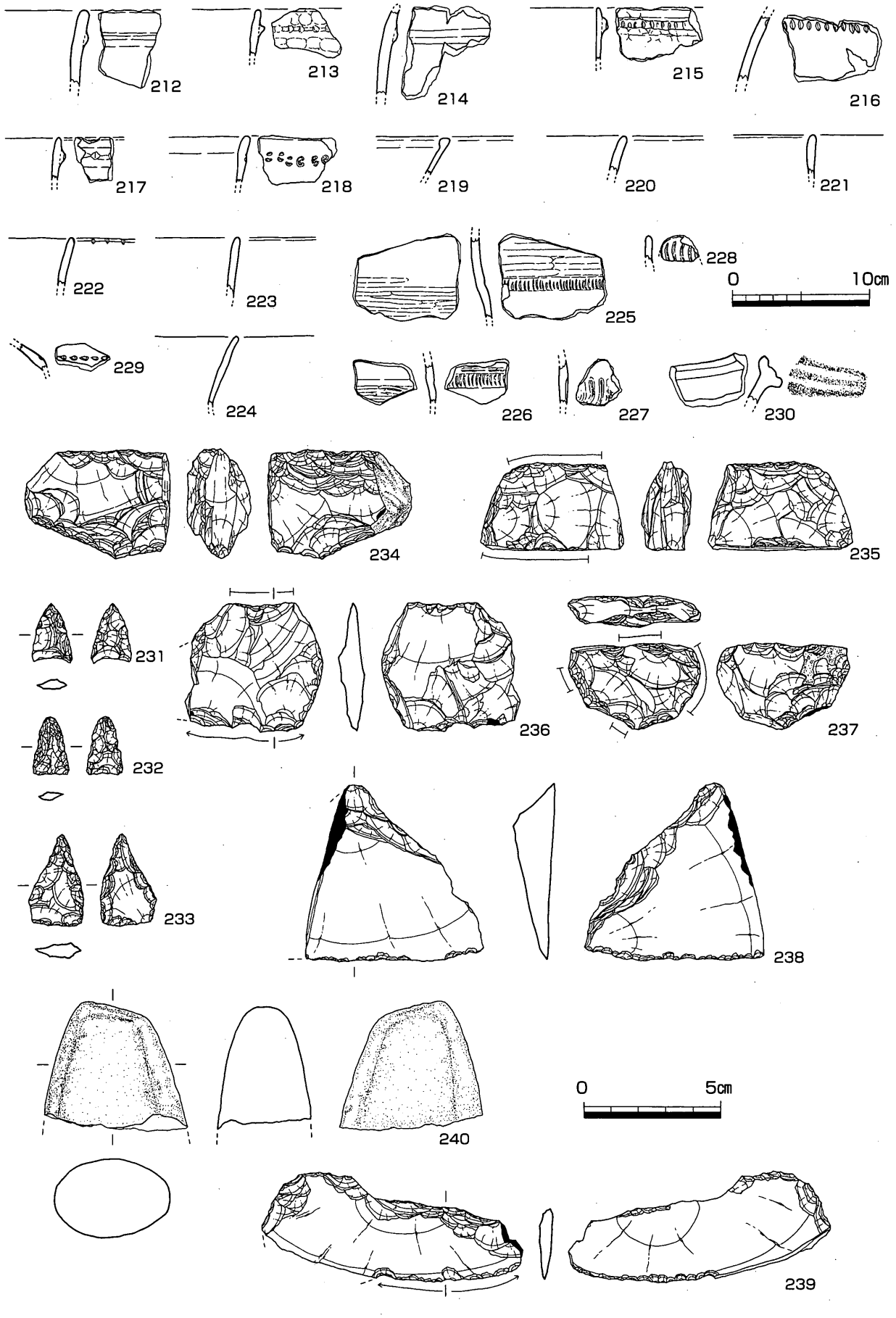
甕は頸部が「く」の字に屈曲し、内面が緩やかに屈曲する。口縁部は外反し、口縁端部をそのまま終わらせる。




第20図　ＳＲ501第２層・第３層出土遺物実測図①




第21図　ＳＲ501第３層出土遺物実測図②




第22図　ＳＲ501第４層出土遺物実測図

製塩土器は脚部が外方に広がり、丸く終わらせる。

第２層から出土した遺物に角閃石を含む土器は甕・製塩土器である。角閃石を含む全体の割合は約4.6％である。甕は器壁の厚さが２～３㎜と薄く、体部上半外面にハケ目（８～９本／cm）が、内面に指頭痕が施されている。

148～211は第３層から出土した弥生土器壺、甕、鉢、高坏、製塩土器、石製品である。

壺はほとんど出土していない。

甕は頸部が「く」の字に屈曲し、内面が緩やかに屈曲するもの、明瞭な稜を持つもの、約1.0cm程度の平坦面を持ち、屈曲するものがある。口縁端部は頸部の形態差に関係なく、外反あるいは直線的に延び、口縁端部をそのまま終わらせるか、僅かに上方に摘み上げるものがある。調整はかなり摩滅しており、詳細は不明であるが、体部内面上半に指頭痕が顕著に施されているもの（151・155）がある。第１層と同様な形態を呈しており、ほぼ同時期と考えられる。

鉢は口径34cm程度の大型のものと口径20～25cm程度の中型のものがあり、大型のものは口縁部が内湾し、外面に３条程度の凹線を施す。中型のものは大型のものと同じような形態のものと内湾する体部から口縁部が「く」の字に屈曲し、口縁端部を僅かに上方に摘み上げるものがある。また、171はミニチュアの鉢で、底部は高台状を呈し、体部は直線的に外上方に延びる。

高坏は口縁部が「く」の字に上方に屈曲し、口縁端部はそのまま終わらせる。脚部の穿孔は不明で、端部はほとんどがそのまま終わらせる。坏部と脚部の状況から円盤充填しているものと坏部に脚部を接合するものとがある。

製塩土器は脚部が外方に広がり、端部を方形に終わらせるものと細く、丸く終わらせるものがある。体部はほぼ直線的に外上方に延び、口縁部をやや内湾させる。脚部外面には指頭痕･指ナデが、体部外面には縦方向のヘラケズリが施されている。脚部高は1.0～2.0cmで、特に脚部高の低い1.0～1.5cmのものが多量にある。

第３層から出土した遺物に角閃石を含む土器は甕・高坏である。角閃石を含む全体の割合は約1.8％である。

石製品はサヌカイト製の石鏃、石包丁、楔状石器、スクレイパーが出土し、サヌカイト剥片も出土している。

出土遺物から、第３層の時期は第１層の時期と同じ弥生時代後期中葉頃と考えられる。

212～240は第４層から出土した縄文土器、石製品である。

縄文土器は口縁部外面に刻み目の施された突帯をもつものと竹管文を持つものがあり、無文のものもある。また体部と口縁部の屈曲部には、外面に爪形文を施している。230は口縁端部をかなり拡張し、外面に沈線を施す深鉢である。

石製品はサヌカイト製の石鏃、楔状石器、スクレイパーがあり、安山岩系脈岩製の石斧がある。石斧は先端部が欠損しており、基部のみである。また、多量のサヌカイト製の剥片も出土している。

実測可能遺物は縄文土器と石製品であるが、これ以外にも弥生土器片、サヌカイト剥片が多量に出土している。

弥生土器は壺、甕、高坏で、流路で土質が砂層ということもあり、器表面がかなり摩滅しており、調整は不明である。

第４層から出土した角閃石を含む土器は壺・甕である。角閃石を含む全体の割合は約0.7％であ

る。

出土遺物から、第４層の時期は弥生時代後期と考えられる。

ＳＲ501の堆積土は大別して上層（第１・２層）の粘質土と下層（第３・４層）の砂質系の土層に分かれるが、出土遺物からみると土層の質に関係なく、全て弥生時代後期中葉頃を中心として堆積したことが解る。しかし、第４層から出土した遺物に縄文時代後期～晩期にかけて土器が出土していることから、この流路跡の掘削時期は縄文時代まで遡る可能性が考えられる。

また、弥生土器中胎土に角閃石を含む土器の割合は、上層から下層になるに従い徐々に減少していることが解り、時期差になる可能性も考えられる。

### ＳＲ502

ＳＲ502は第Ⅱ調査区（Ｆ－19・20、Ｇ－20）中央部西端で検出した自然流路跡である。ＳＲ501と同様に流路幅に対して深さはあまりないが、最深部は１ｍ以上となる。流路方向は北西－南東（Ｎ－45°－Ｅ）をとる。この自然流路跡は唐池→唐戸池→唐戸下池→長尾池の谷筋で推定できる旧流路と考えられる。規模は最大幅約8.7ｍ、深さ約1.26ｍ、検出長約18.0ｍを測る。自然流路跡の堆積土は16層で、土層断面及び堆積土から大別して上下２層と肩部に堆積した土層の３つに分けられる。上層は第１～９層で、流路幅全域に深さ約0.45ｍの堆積が確認でき、ＳＲ501と同様に流路幅の割には浅い状況を呈している。堆積土は概ね濁灰色系の砂混じり粘質土である。下層は第10～14層で、幅約3.4ｍ、深さ約0.8ｍを測り、断面は「Ｖ」字状を呈する。下部に堆積する第14層は砂層で、短期間に堆積したものと考えられ、上部は濁灰色系の砂質土・砂層が約10～20㎝の層厚で堆積したことが解る。全体に１～５㎜程度の砂粒を含む土層である。肩部に堆積した土層は第15・16層で、この流路の中の堆積土では最も下位に堆積しており、暗灰色系の砂質土層である。土層断面から基盤層直上の肩部付近に堆積しており、下層によって削られた様相を呈している。

自然流路跡の各層から須恵器、弥生土器、サヌカイト等の多量の遺物が出土している。

241～252は第１層から出土した遺物で、弥生土器壺、甕、鉢、高坏、製塩土器、石製品、須恵器である。この内須恵器は１点のみで、混入の可能性も考えられる。

壺は頸部がほぼ直線的に上方に延び、口縁部がほぼ水平に屈曲する。口縁端部は僅かに拡張し、端部外面に面を持つ。

甕は頸部が「く」の字に屈曲し、内面が緩やかに屈曲する。口縁端部は外反し、口縁端部を僅かに上下方に摘み出す。調整はかなり摩滅しており、詳細は不明である。

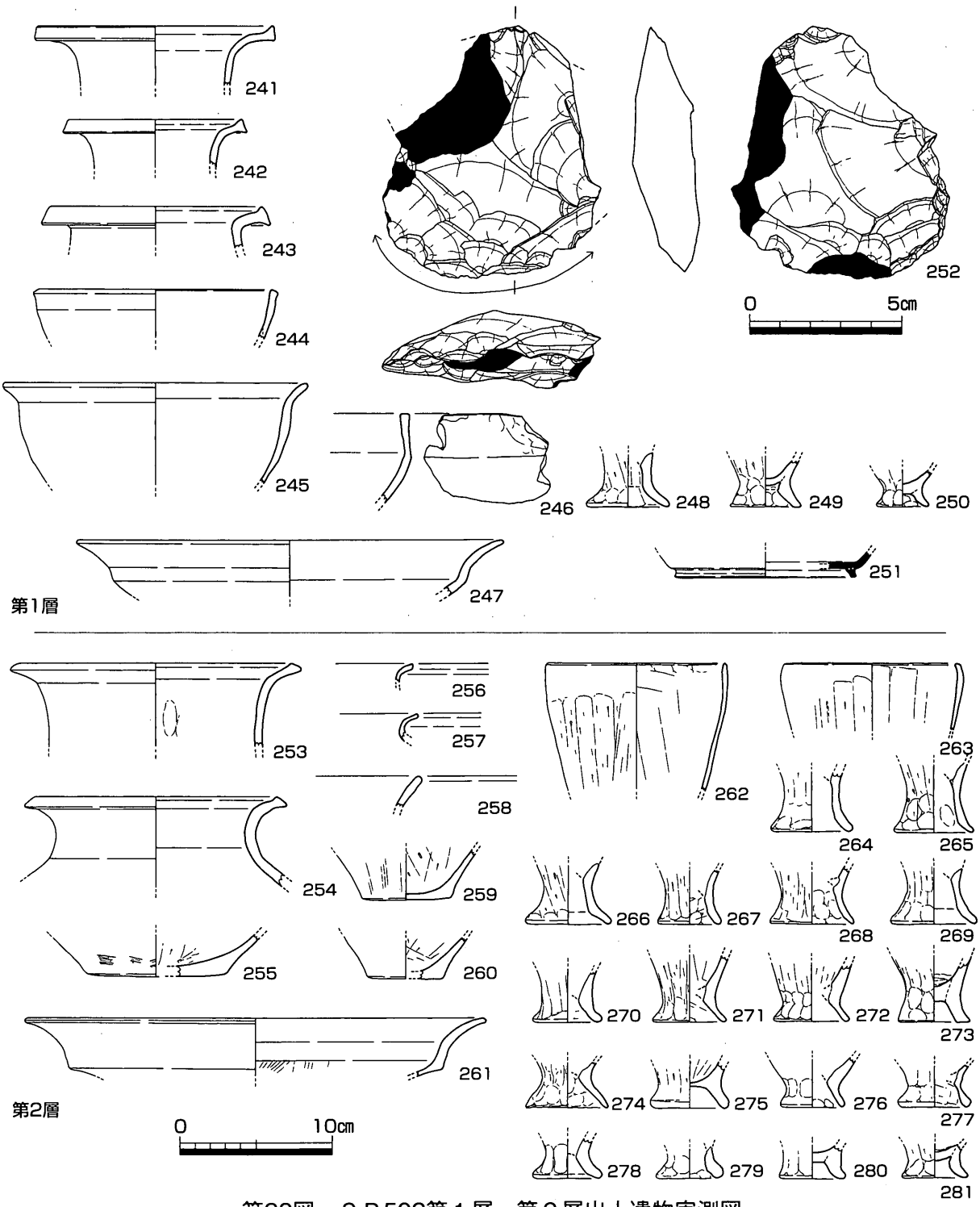
鉢は大型のものと口径16～20㎝程度の中型のものがあり、大型のものは口縁部が内湾し、外面にかなり退化した凹線を施す。中型のものは内湾する体部から口縁部が「く」の字に屈曲し、口縁端部をそのまま終わらせるものと内湾する体部から口縁端部をそのまま終わらせるものがある。

高坏は口縁部が外反し、口縁端部はそのまま丸く終わらせる。

製塩土器は脚部が外方に広がり、端部を方形に終わらせるものと細く、丸く終わらせるものがある。脚部外面には指頭痕・指ナデが、体部外面には縦方向のヘラケズリが施されている。脚部高は3.5㎝とかなり脚部が長いもの、1.7㎝程度のもの、約1.0㎝と低いものがある。

第１層から角閃石を含む土器は出土していない。

石製品はサヌカイト製の打製石斧である。製品以外にサヌカイトの剥片が出土している。




第23図　ＳＲ502第１層・第２層出土遺物実測図

須恵器は高台付坏で、底部にやや外方に踏ん張る高台が付いている。

出土遺物に須恵器が混在していることから、第１層の時期は古代と考えられるが、僅か１点のみと出土点数が少ないことから混入の可能性もある。出土遺物の大半は弥生時代後期中葉の遺物である。

253～281は第２層から出土した遺物で、弥生土器壺、甕、高坏、製塩土器、須恵器である。

壺は頸部がほぼ直線的に上方に延び、口縁部がほぼ水平に屈曲するものと緩やかに外反しながら

延びるものがある。口縁端部は僅かに拡張し、端部外面に面を持たない。

甕は頸部が「く」の字に緩やかに屈曲する。口縁部は外反し、口縁端部をそのまま終わらせる。

高坏は口縁部が外反し、口縁端部はそのまま丸く終わらせる。

製塩土器は脚部が外方に広がり、端部を方形に終わらせるものと細く、丸く終わらせるものがある。脚部外面には指頭痕・指ナデが、体部外面には縦方向のヘラケズリが、口縁端部から約1.0～2.0cm下までの範囲で施されている。脚部高は3.5cmとかなり脚部が長いもの、1.5cm程度のもの、約1.0cmと低いものがある。

第２層から出土した角閃石を含む土器は甕である。体部上半の外面にはハケ目（６本／cm）が、内面には指頭痕・指ナデが施されている。角閃石を含む全体の割合は約1.6％である。

石製品は出土していないが、サヌカイトの剥片が出土している。

須恵器は２点出土しており、坏身の底部と皿の底部と考えられるものが出土している。

出土遺物に須恵器が混在していることから、第２層の時期は古代と考えられるが、僅か２点のみと出土点数が少ないことから混入の可能性もある。出土遺物の大半は弥生時代後期中葉の遺物である。

282～463は第３・４層から出土した遺物で、弥生土器壺、甕、鉢、高坏、製塩土器である。

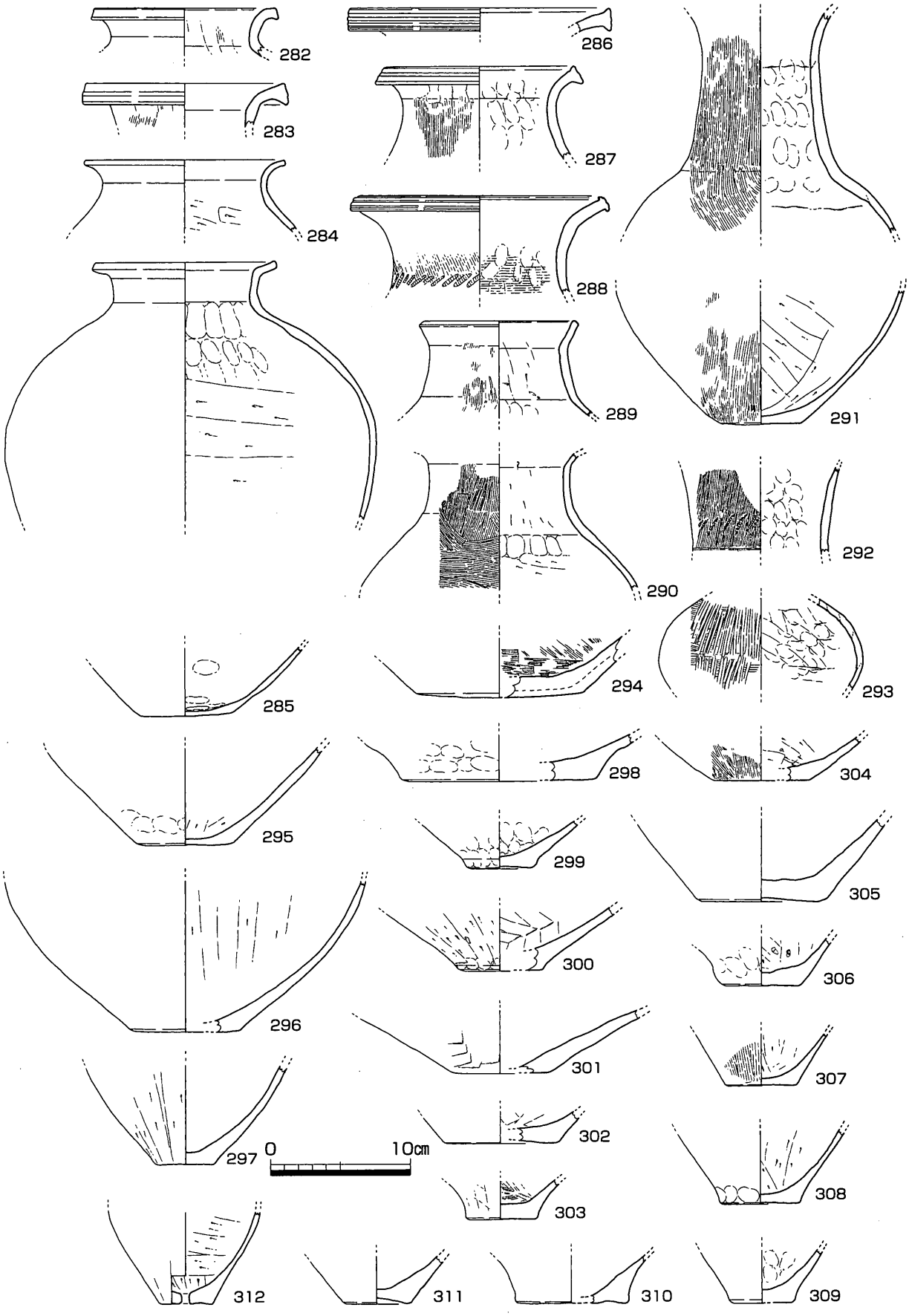
壺は頸部がほぼ直線的に上方に延び、口縁部がほぼ水平に屈曲するものと緩やかに外反しながら延びるものがある。口縁端部は僅かに拡張し、端部外面には２～３条の退化凹線が確認できるものがある。また、そのまま終わらせるものもあり、頸部の形態、口縁端部の形態に差が認められる。288･292は頸部下半外面に櫛描による刺突文がある。壺の調整は体部外面にハケ目（８～９本／cm）が、内面には指頭痕・指ナデの下側にヘラケズリが施されている。293は細頸壺の体部で、体部最大径はほぼ中央かあるいはやや下半にあり、体部外面に横方向のハケ目の後、ヘラミガキが施されている。

甕は頸部が「く」の字に屈曲し、内面が緩やかに屈曲するもの、明瞭な稜を持つもの、1.0cm程度の平坦面を持ち、屈曲するものがある。口縁端部は頸部の形態差に関係なく、外反あるいは直線的に延び、口縁端部をそのまま終わらせるか、僅かに上方あるいは下方にのみ摘み上げるものがある。調整は体部外面にハケ目（７本／cm）が、内面には上半に指頭痕・指ナデが、下半にヘラケズリが施されている。第１・２層出土弥生時代甕と同様な形態を呈しており、ほぼ同時期と考えられる。

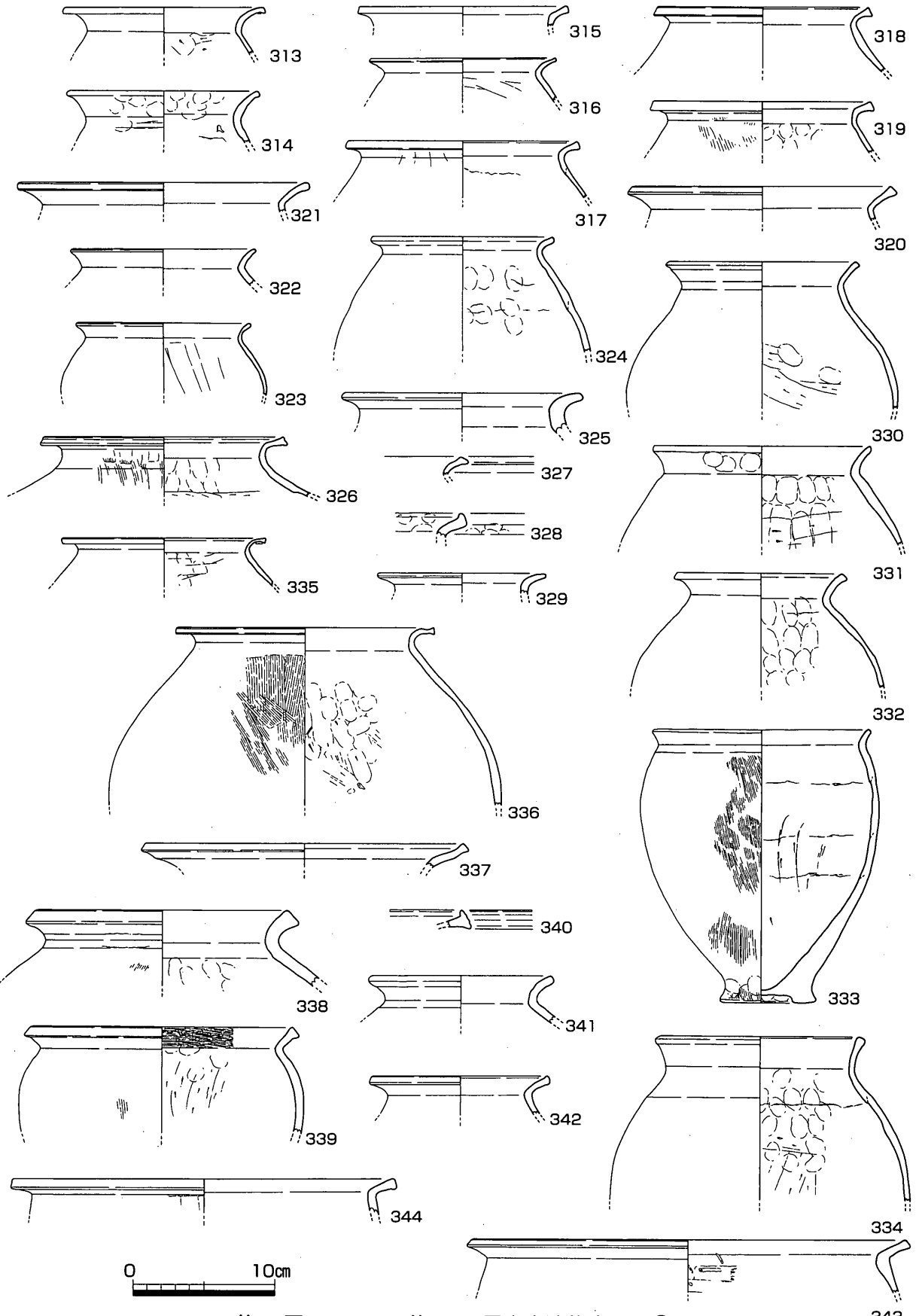
鉢は口径32～33cm程度の大型のもの、口径23～26cm程度の中型のもの、口径14～15cm程度の小型のものがあり、大型のものは口縁部が内湾し、外面に２条程度のかなり退化した凹線を施すものと口縁部が「く」の字に屈曲するものがある。中型のものは口縁部が「く」の字に屈曲するもの、口縁部外面にかなり退化した凹線を持つもの、そのまま内湾し終わらせるものがある。小型のものは口縁部を内湾させるもの、口縁部が外上方に延び、そのまま終わらせるものがある。第３・４層出土の鉢は法量、形態にかなりのバリエーションが認められ、量的にも多いことが確認できる。

高坏は口縁部が「く」の字に上方に屈曲し、口縁端部は僅かに左右に摘み出し、上面に沈線状の痕跡が確認できる。また、そのまま終わらせるものもあり、鉢と同様に坏部の形態にバリエーションがある。脚部には穿孔が確認でき、端部は上方を摘み出す形態を持つ。

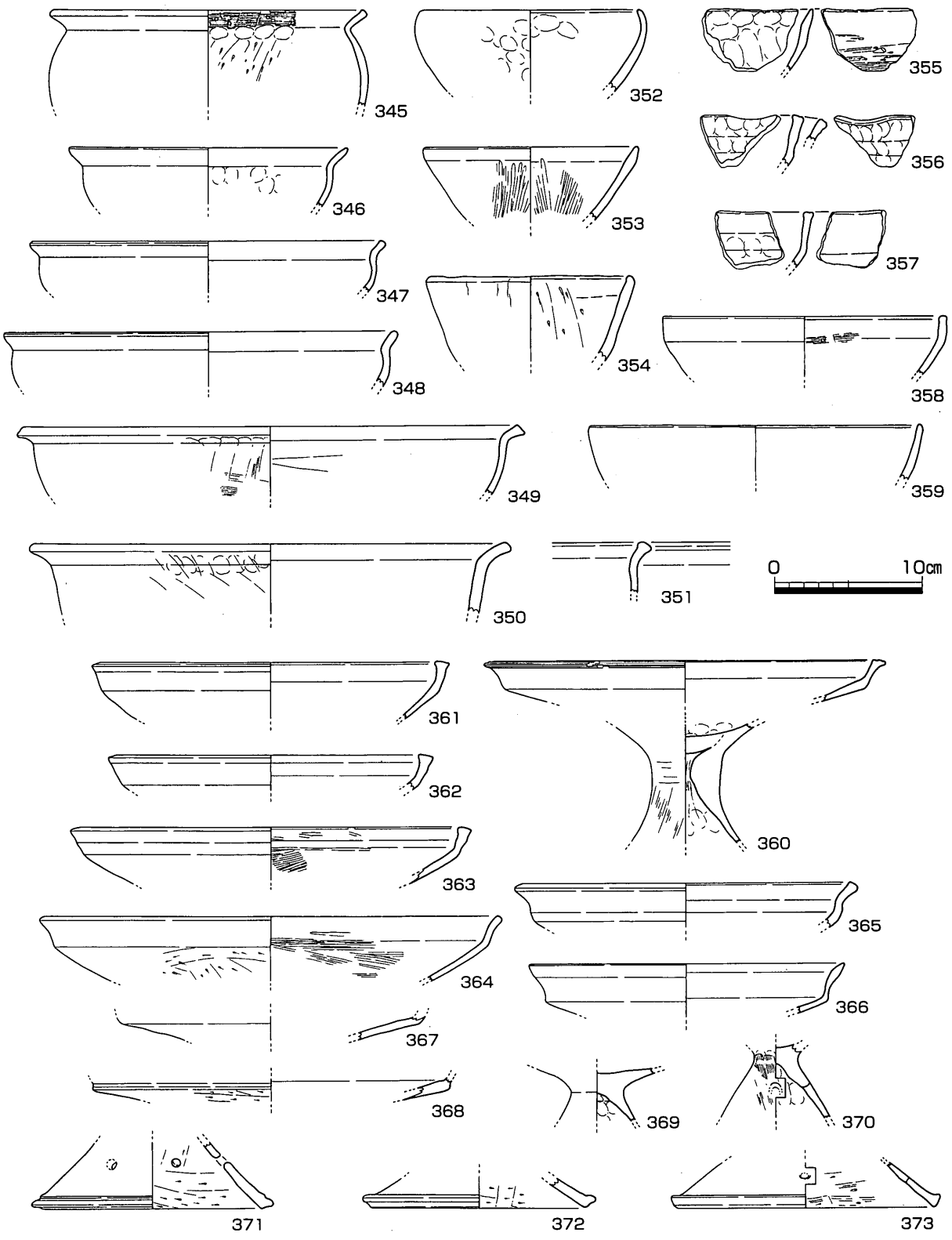
製塩土器は脚部が外方に広がり、端部を方形に終わらせるものと細く、丸く終わらせるものがあ



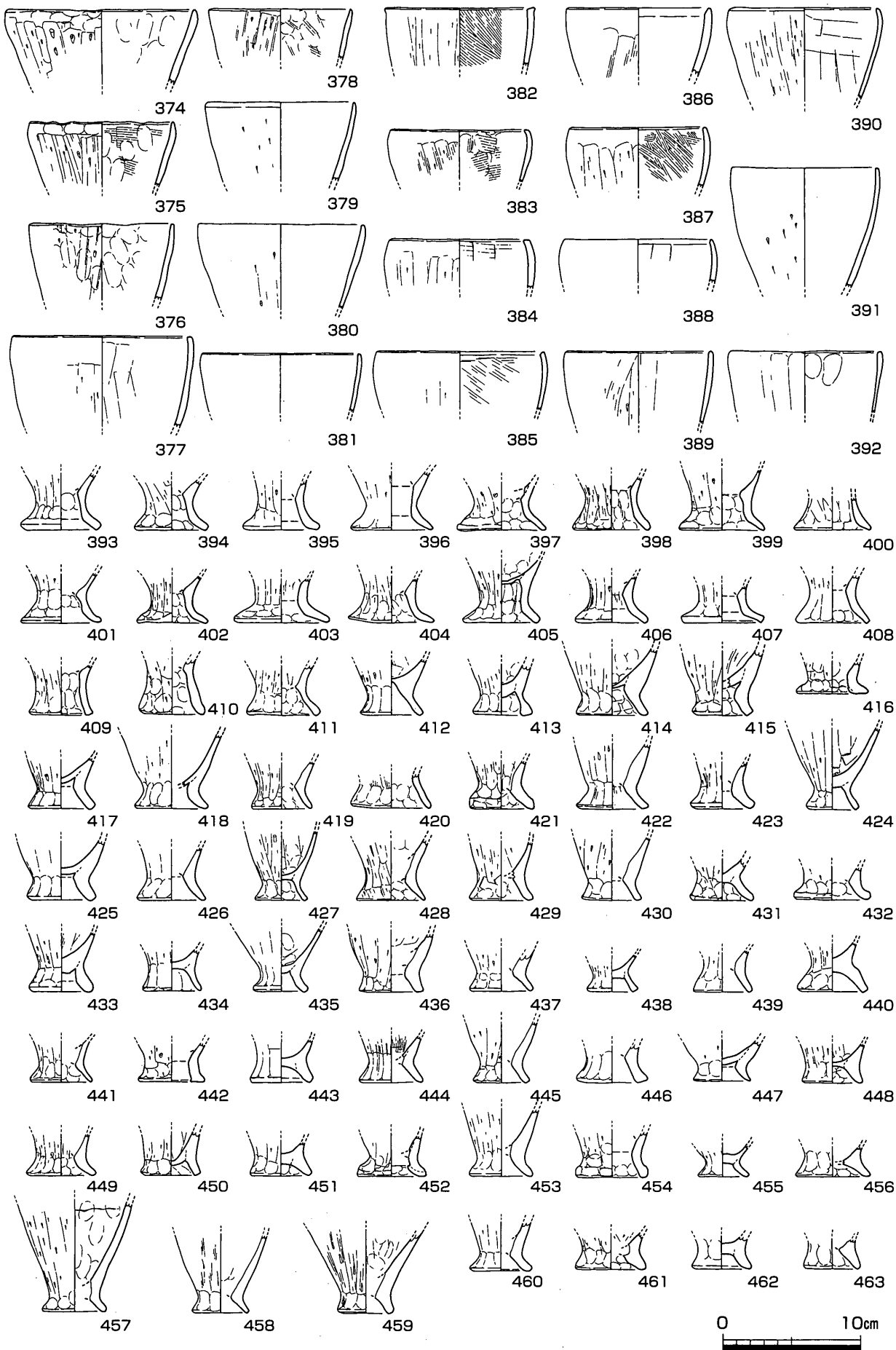

第24図　ＳＲ502第３・４層出土遺物実測図①




第25図　ＳＲ502第３・４層出土遺物実測図②




第26図　ＳＲ502第３・４層出土遺物実測図③




第27図　ＳＲ502第３・４層出土遺物実測図④

る。脚部外面には指頭痕・指ナデが、体部外面には縦方向のヘラケズリが、口縁端部から約1.0～2.0cm下までの範囲で施されているものと口縁部端まで施されているものがある。内面には横あるいは斜め方向にハケ目・板ナデが施されている。脚部高は3.0cmとかなり脚部が長いもの、2.0cm程度のもの、約1.0～1.5cmと低いものがある。

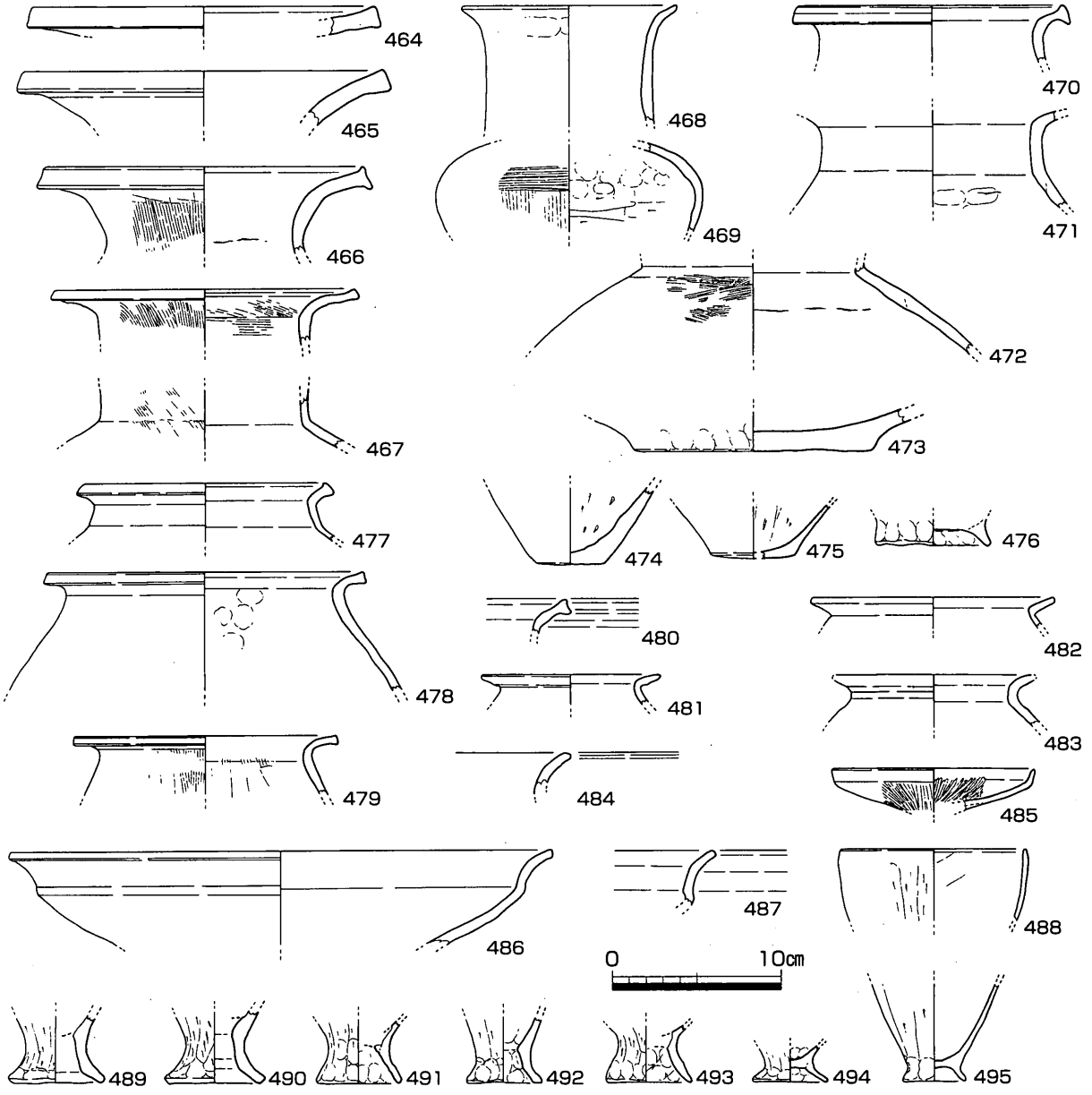
第３・４層から出土した角閃石を含む土器は甕・製塩土器である。角閃石を含む全体の割合は約5.1％である。

石製品は出土していないが、サヌカイトの剥片が出土している。

出土遺物から、第３・４層の時期は弥生時代後期中葉頃と考えられる。

464～495は第５・６・８・９層から出土した遺物で、弥生土器壺、甕、高坏、製塩土器である。

壺は頸部がほぼ直線的に上方に延び、口縁部がほぼ水平に屈曲するものと緩やかに外反しながら延びるものがある。口縁端部は上部に摘み上げるものと僅かに拡張し、端部外面には凹線を持つも




第28図　ＳＲ502第５・６・８・９層出土遺物実測図

のがある。469は細頸壺の体部で、体部最大径はほぼ中央にあり、外面にヘラミガキが、内面上半には指頭痕が、下半にはヘラケズリが施されている。

甕は頸部が「く」の字に屈曲し、内面が緩やかに屈曲するもの、明瞭な稜を持つもの、1.0cm程度の平坦面を持ち、屈曲するものがある。口縁端部は頸部の形態差に関係なく、外反あるいは直線的に延び、口縁端部をそのまま終わらせるか、僅かに上方あるいは下方にのみ摘み上げるものがある。

高坏は口縁部が「く」の字に上方に屈曲し、口縁端部はそのまま終わらせる。486は口縁部が上方に屈曲し、そのまま細く終わらせるものである。内外面にヘラミガキが施されている。

製塩土器は脚部が外方に広がり、端部を方形に終わらせるものと細く、丸く終わらせるものがある。脚部外面には指頭痕・指ナデが、体部外面には縦方向のヘラケズリが、口縁端部から約1.0cm下までの範囲で施されている。内面には横あるいは斜め方向に板ナデが施されている。脚部高は3.0cmとかなり脚部が長いもの、2.0cm程度のもの、約1.0cmと低いものがある。

第5・6・8・9層から出土した角閃石を含む土器は甕である。角閃石を含む全体の割合は約2.8%である。

石製品は出土していないが、サヌカイトの剥片が少量出土している。

出土遺物から、第5・6・8・9層の時期は弥生時代後期中葉頃と考えられる。

496～554は第7層から出土した遺物で、縄文土器と弥生土器壺、甕、鉢、高坏、製塩土器、石製品である。

縄文土器は口縁部外面に刻み目の施された突帯を持つものと体部と口縁部の屈曲部に刻み目の施された突帯を持ち、口縁部外面にヘラ描きによる沈線が施される深鉢が出土している。

壺は頸部がほぼ直線的に上方に延び、口縁部がほぼ水平に屈曲するものと緩やかに外反しながら延びるものがある。口縁端部は上部に摘み上げるものと僅かに拡張し、端部外面には凹線を持つものがある。

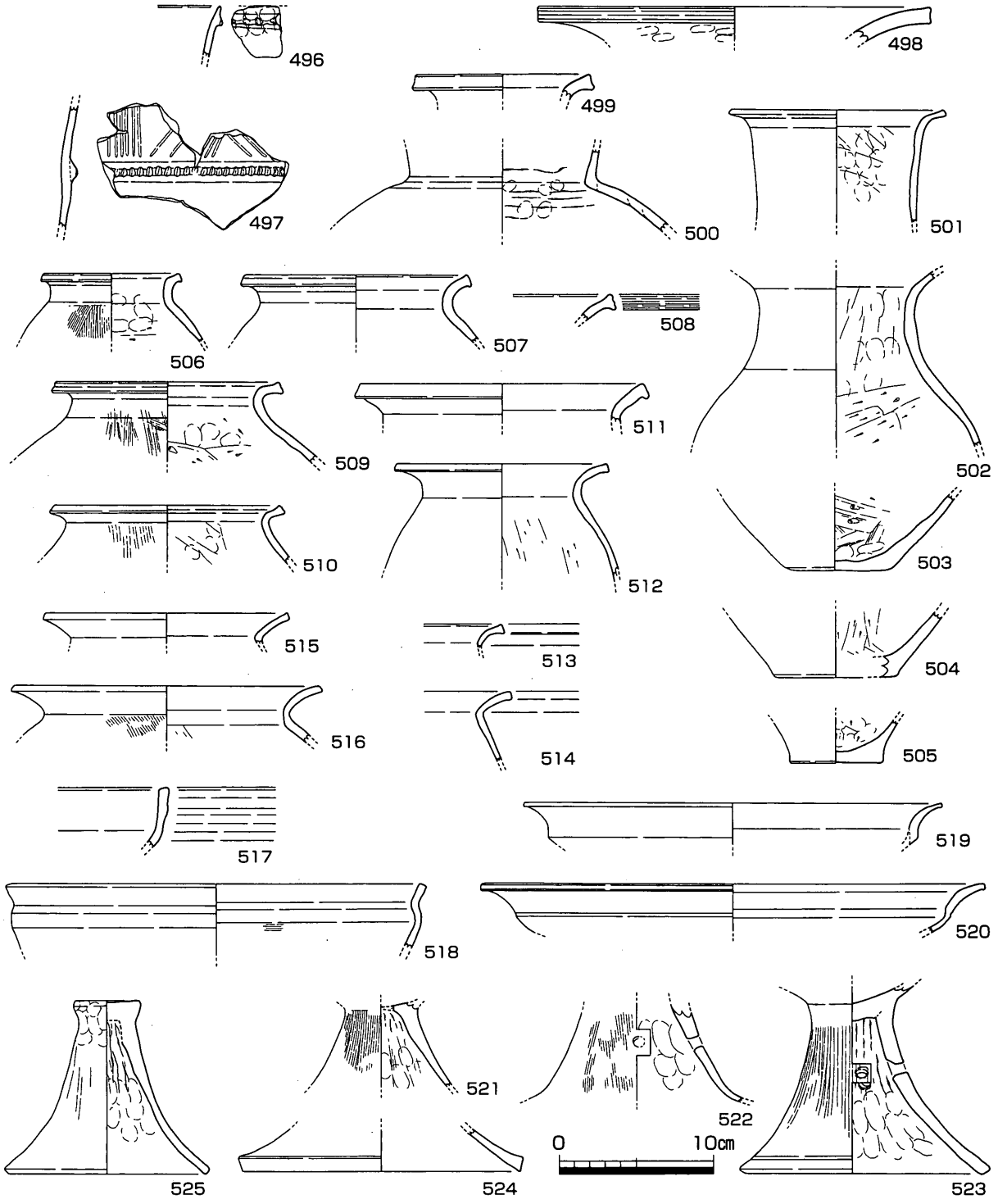
甕は頸部が「く」の字に屈曲し、内面が緩やかに屈曲するもの、明瞭な稜を持つもの、1.0cm程度の平坦面を持ち、屈曲するものがある。口縁端部は頸部の形態差に関係なく、外反あるいは直線的に延び、口縁端部をそのまま終わらせるか、僅かに上方あるいは下方にのみ摘み上げるものがある。調整は体部外面に粗いハケ目（6～7本／cm）が、内面には上半に指頭痕・指ナデが、下半にヘラケズリが施されている。

鉢は口径27cm程度の大型のものが出土している。口縁部が内湾し、外面に2条程度のかなり退化した凹線を施すものと口縁部が「く」の字に屈曲するものがある。

高坏は口縁部が「く」の字に上方に屈曲し、口縁端部はそのまま終わらせる。脚部には穿孔が確認でき、端部もそのまま終わらせる。

製塩土器は脚部が外方に広がり、端部を方形に終わらせるものと細く、丸く終わらせるものがある。脚部外面には指頭痕・指ナデが、体部外面には縦方向のヘラケズリが、口縁端部から約1.0～2.0cm下までの範囲で施されているものと口縁部端まで施されているものがある。内面には横あるいは斜め方向にハケ目・板ナデが施されている。脚部高は3.0cmとかなり脚部が長いもの、2.0cm程度のもの、約1.0～1.5cmと低いものがある。脚部高が長いものは非常に少ない傾向にある。

第7層から出土した角閃石を含む土器は甕・製塩土器である。角閃石を含む全体の割合は約1.4%




第29図　ＳＲ502第７層出土遺物実測図①

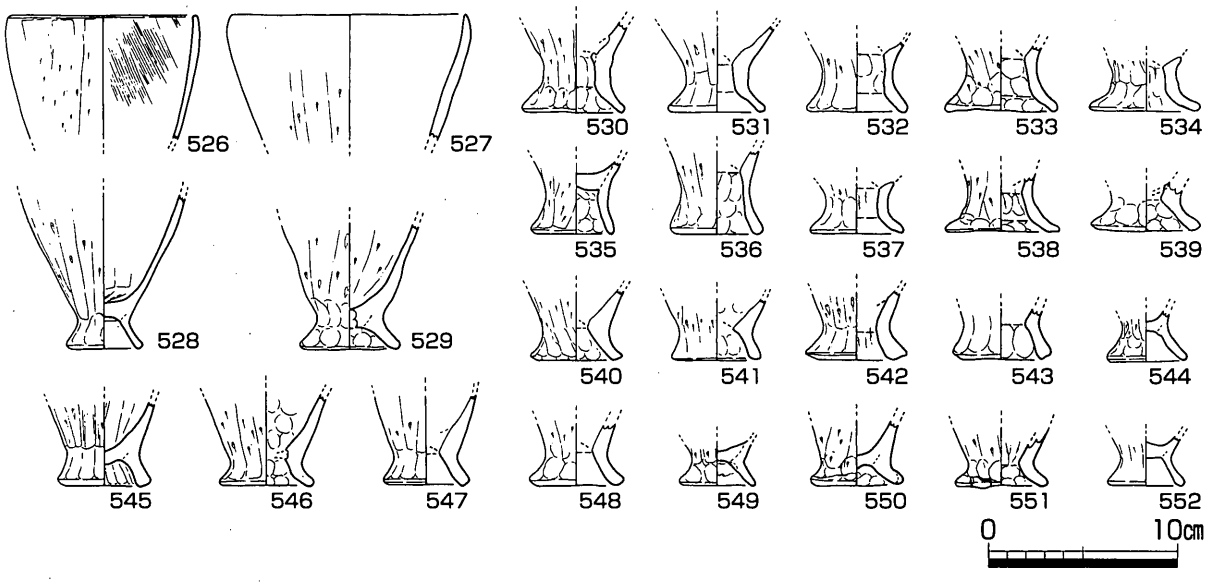
である。

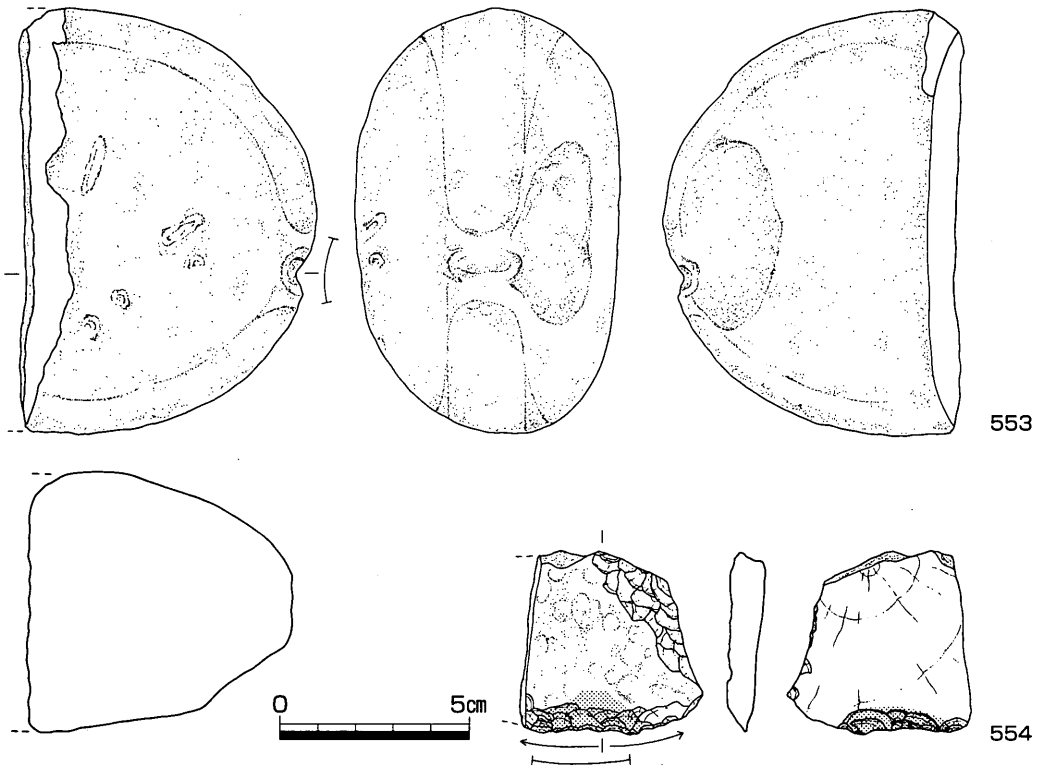
石製品は砂岩製の石錘、サヌカイト製のスクレイパーが出土している。またサヌカイトの剥片がかなりの量出土している。

出土遺物から、第７層の時期は弥生時代後期中葉頃と考えられる。

555～571は第10層から出土した遺物で、弥生土器壺、甕、鉢、製塩土器、石製品である。

壺は体部最大径が下半にあり、上半に７条の櫛描波状文とへら先による山形の刺突文が施されている。内面は上半に指頭痕が、下半に横方向の板ナデが施されている。弥生時代中期の土器である。




第30図　ＳＲ502第７層出土遺物実測図②

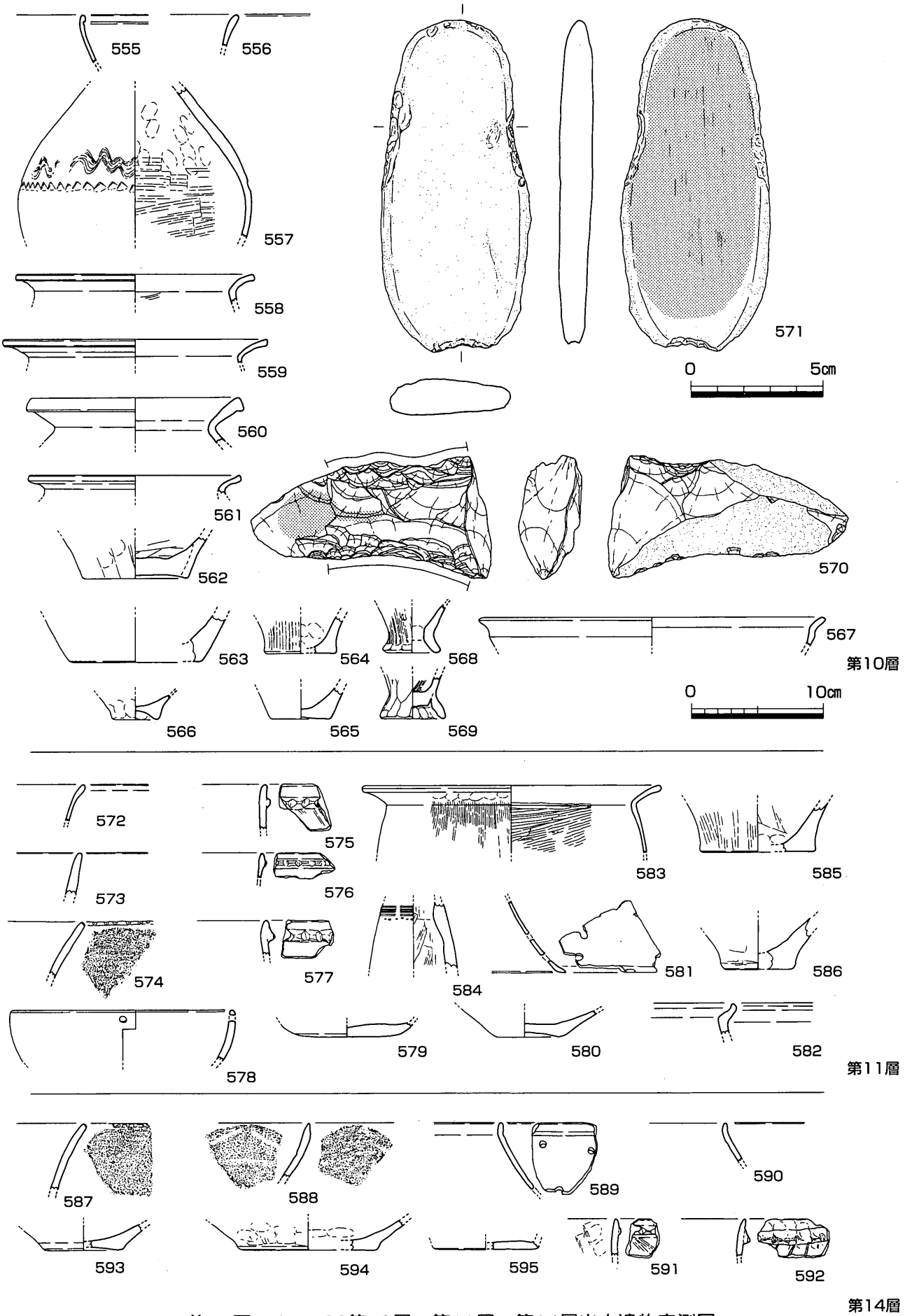
甕は頸部が「く」の字に屈曲し、明瞭な稜を持つものが出土している。口縁端部は外反あるいは直線的に延び、口縁端部をそのまま終わらせるか、僅かに上方に摘み上げるものがある。

製塩土器は脚部が外方に広がり、端部を方形に終わらせるものと細く、丸く終わらせるものがある。脚部外面には指頭痕・指ナデが、体部外面には縦方向のヘラケズリが施されている。脚部高は1.5～2.0cm程度のものである。

第10層から出土した角閃石を含む土器は甕である。角閃石を含む全体の割合は約4.3％である。

石製品は安山岩製の石錘、サヌカイト製の楔状石器が出土し、またサヌカイトの剥片がかなり出土している。

出土遺物から、第10層の時期は弥生時代後期中葉頃と考えられる。




第31図　ＳＲ502第10層・第11層・第14層出土遺物実測図

572～586は第11層から出土した縄文土器、弥生土器甕、高坏である。

縄文土器は深鉢で、口唇部に刻み目を持つ。また口縁部外面に刻み目の施された突帯をもつものがある。578はボウル状の鉢で、口縁部に穿孔が認められる。

弥生土器甕は体部があまり張らず、紡錘状になるもので、頸部は「く」の字に屈曲し、内面に明瞭な稜を持つ。体部外面にハケ目、内面にヘラミガキが施されている。

石製品は出土しておらず、多量のサヌカイト製の剥片が出土している。

第11層から角閃石を含む土器は出土していない。

出土遺物から、第11層の時期は縄文時代晩期の土器も出土しているが、それ以降の遺物から弥生時代中期と考えられる。

587～595は第14層から出土した縄文土器である。

縄文土器は口縁部が外反し、口唇部に刻み目を持つもの、口縁部が内湾するもの、体部が内傾し、口縁部で上方に屈曲させる壺がある。また口縁部外面に刻み目の施された突帯を持つものも出土している。

石製品は出土しておらず、多量のサヌカイト製の剥片が出土している。

出土遺物から、第14層の時期は縄文時代晩期と考えられる。

以上のように各層ごとに出土遺物を説明し、時期を推定した結果と最初に土層断面図から推測した３つの大別に不一致が確認できる。そこで堆積時期を考慮すると概ね第１～９層の上層と第10～12層の下層に分けられ、時期は弥生時代後期中葉である。第13・14層は縄文時代晩期に堆積した土層で、その堆積土を掘削するように第10～12層の土層が堆積した結果、縄文時代晩期の土器が包含されているものと考えられる。

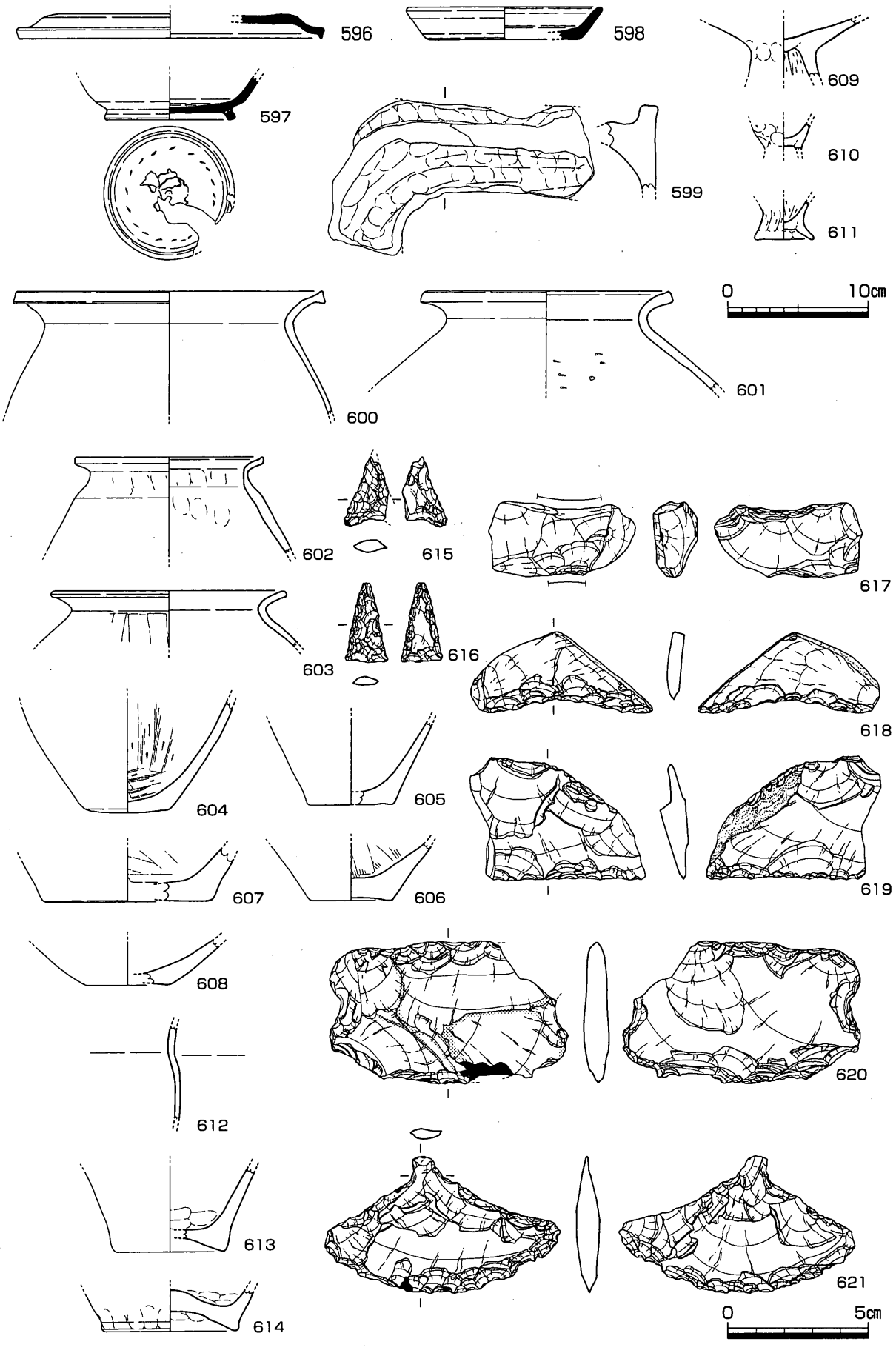
### ＳＲ603

ＳＲ603は第Ⅱ調査区（Ｆ－22・23）西部で検出した自然流路跡である。流路幅に対して深さが0.3～0.4mと浅く、検出状況からはかなり削平を受けているものと考えられる。流路内の堆積土は２層に細分でき、上層が黒色小礫混じり砂質シルトで、下層が暗灰色小礫混じり粗砂層である。検出面での平面形態はかなり歪で、流路方向は概ね西－南（Ｎ－82°－Ｅ）をとっているものの、最深部の流路が２条に分かれることや流路が蛇行するなど不規則な様相を呈している。一方この調査区の北壁土層をみると遺構面と考えられる土層の上部にかなり広い範囲で、0.1～0.2mの層厚の暗灰色小礫混じり砂質シルトが堆積している。この上部堆積層の土質とＳＲ603の堆積土層と検出平面形態、流路方向を考えるとこの流路は、小礫を含む砂質シルトがこの調査区のかなり広い範囲に堆積した時点で、部分的に深い部分ができたものと考えたい。したがってＳＲ603については調査時には自然流路としたが、検討した結果、低地部分の堆積層としたい。

調査時点でＳＲ603として取上げた遺物は、須恵器・弥生土器・縄文土器が出土している。かなり須恵器が含まれていることが解る。

図化した遺物は、第32図596～621である。

遺物には須恵器、土師器、弥生土器、縄文土器とかなり時期幅がある。597は７世紀後半～末の須恵器高台付坏、596は８世紀の須恵器蓋、598は９世紀～10世紀前半の須恵器皿である。




第32図　ＳＲ603出土遺物実測図

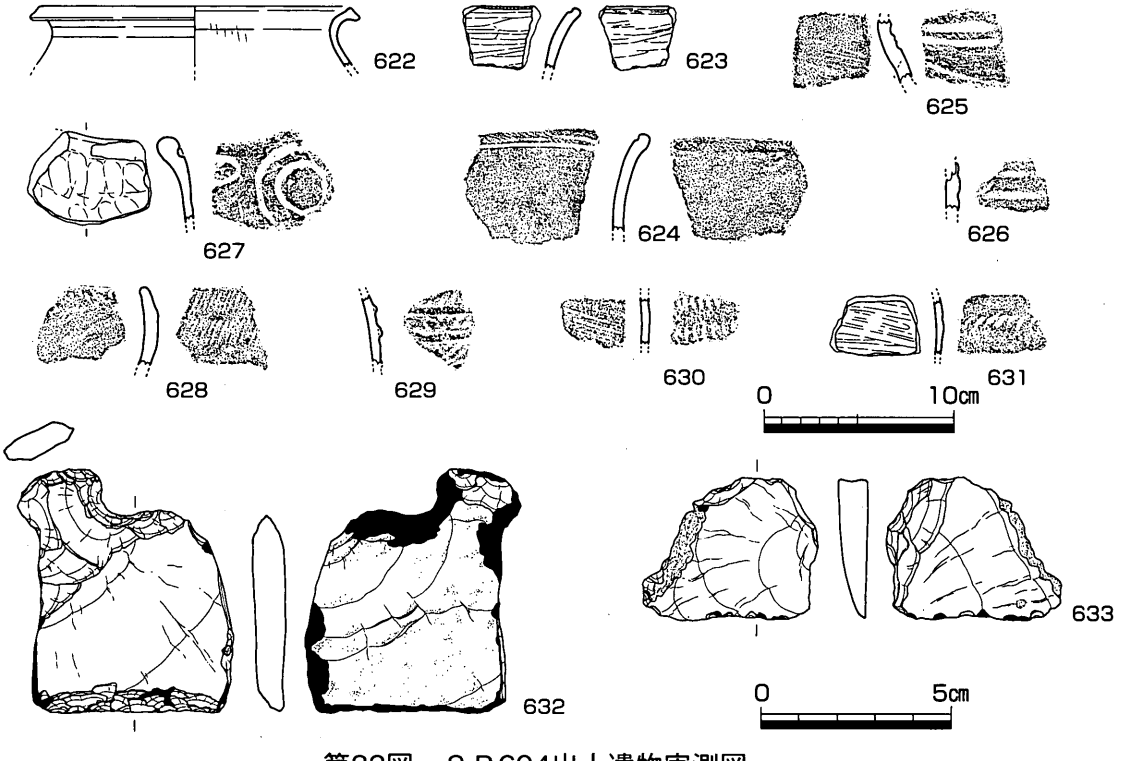
ＳＲ604

ＳＲ604は第Ⅱ調査区（Ｆ－23～25）西部で検出した自然流路跡である。ＳＲ501と同様に流路幅に対して深さはあまりないが、最深部は１ｍ以上となる。流路方向は北西－南東（Ｎ－47°－Ｗ）をとる。この自然流路跡はウラ谷池→上池→新池→長尾池の谷筋で推定できる旧流路と考えられる。規模は最大幅約14.4m、深さ約1.60m、検出長約40.0mを測る。自然流路跡の堆積土は砂層とシルト層がラミナ状に堆積していることから明確ではないが、７層程度には細分できる。大半を占める堆積土は灰色砂層が上部にあり、黒褐色小礫混じりシルトが下部に堆積する。自然流路上部には小礫が混じる暗灰色粘質シルトが堆積し、ＳＲ603の堆積土と小礫を含むという点で近似する。自然流路跡ＳＲ604から出土した遺物は非常に少なく、周辺に生活域が所在しないものと考えられる。

自然流路跡の各層から縄文土器、弥生土器、サヌカイト製品が少量出土している。

縄文土器は口縁部外面に円弧状の沈線をもつもの、口縁端部内面に沈線を持つもの、沈線を持ち口唇部に刻み目を持つもの、外面に爪形文を持つものなど縄文時代前期から後期・晩期にかけての時期幅がある。

サヌカイト製品には、石匙、スクレイパーがあり、縄文時代の所産と考えられる。




第33図　ＳＲ604出土遺物実測図

弥生時代

第Ⅱ調査区で検出した弥生時代の遺構は掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土壙墓跡、井戸跡、土坑跡、溝状遺構、不明遺構、自然流路跡である。

弥生時代の遺構は概ね第Ⅱ調査区の東部分、ちょうど緩傾斜部分で検出している。掘立柱建物跡、竪穴住居跡は概ねこの傾斜に合致するように、ちょうど等高線に併行するように検出した。溝状遺構は同様に等高線に併行するものを検出しているが、等高線に直交する溝状遺構もあり、前者は高所側の排水機能を持っているものと考えられ、後者は排水及び区画の機能を持っていたものではないかと考えられる。

検出した遺構はほとんどそれぞれが重複関係になく、単独で検出している。ちょうど調査区は丘陵の先端部に位置し、緩傾斜は調査区南側に継続することから今回の調査区は弥生時代の集落の北縁辺部に位置するものと考えられる。

1．掘立柱建物跡

第Ⅱ調査区で検出した柱穴跡は、濃淡はあるものの全域で確認しているが、後述する3棟以外に掘立柱建物を構成するには至っていない。特に集中して検出したのは東部分（高所側）で、竪穴住居跡を検出した部分と重なる。ただし調査前の地形が棚田状の水田であったため、水平にするためにかなり高所側を削平した結果、東部分で確認してはいるものの部分的に空白部分が確認でき、またほとんどの柱穴跡の検出面からの深さがあまりないことから消滅した可能性が指摘できる。

ＳＢ501

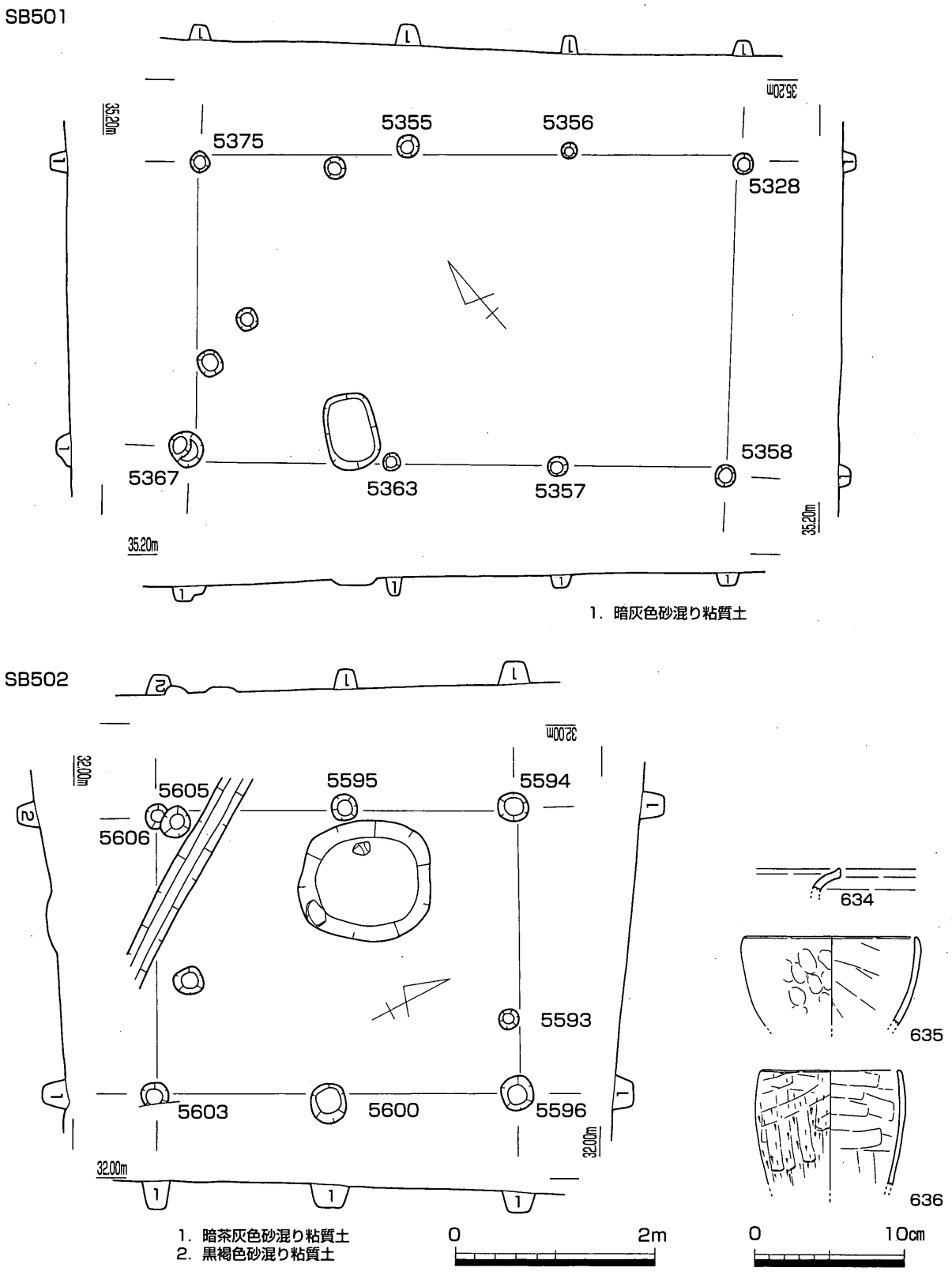
ＳＢ501は第Ⅱ調査区（Ｇ・Ｈ－10）東部、南東方向から北西方向に約3.0ｍで、約0.10ｍの比高差を持つ緩やかな傾斜地の標高34.90～35.00ｍで検出した掘立柱建物跡である。また北西側約６ｍに方形の竪穴住居跡ＳＨ505を検出しており、ＳＨ505とはほぼ主軸が同じであることから同時期の可能性が考えられる。規模は、梁間１間×桁行３間で、3.00×5.40ｍを測る。構成する柱穴跡は全て円形を呈し、直径14～31㎝と小振りで、検出面からは10～15㎝と浅い。建物は南北棟で、北西－南東方向（長軸）は真北から48.5°西を取る。

建物の長軸はちょうど検出傾斜面の等高線と概ね直交しており、地形に逆らうように造られていることが解る。

柱穴跡（ＳＰ5357・5367）から弥生時代の甕が出土していることや柱穴堆積土が暗灰色系の砂混じり粘質土であることから弥生時代と考えられる。

ＳＢ502

ＳＢ502は第Ⅱ調査区（Ｇ－12）東部、南東方向から北西方向に約3.0ｍで、約0.30ｍの比高差を持つ傾斜地の標高31.60～31.97ｍで検出した掘立柱建物跡である。ＳＤ533が東側（高所側）に近接してあり、流路を桁行と同じ方向を取ることから排水溝の可能性も考えられる。また東側約３ｍに方形の竪穴住居跡ＳＨ509、約１ｍに円形の竪穴住居跡ＳＨ510を検出しており、ＳＨ509とはほぼ主軸が同じであることから同時期の可能性が考えられる。規模は、梁間１間×桁行２間で、2.78×3.64ｍを測る。構成する柱穴跡は全て円形を呈し、直径24㎝～39㎝と小振りで、検出面からは19～




第34図　ＳＢ501・502平・断面図、ＳＢ502出土遺物実測図

22cmと浅い。建物は南北棟で、北北東－南南西方向（長軸）は真北から28.0° 東を取る。

建物の長軸はちょうど検出傾斜面の等高線と概ね併行していることから地形に制約されたように（合わせるように）造られていることが解る。

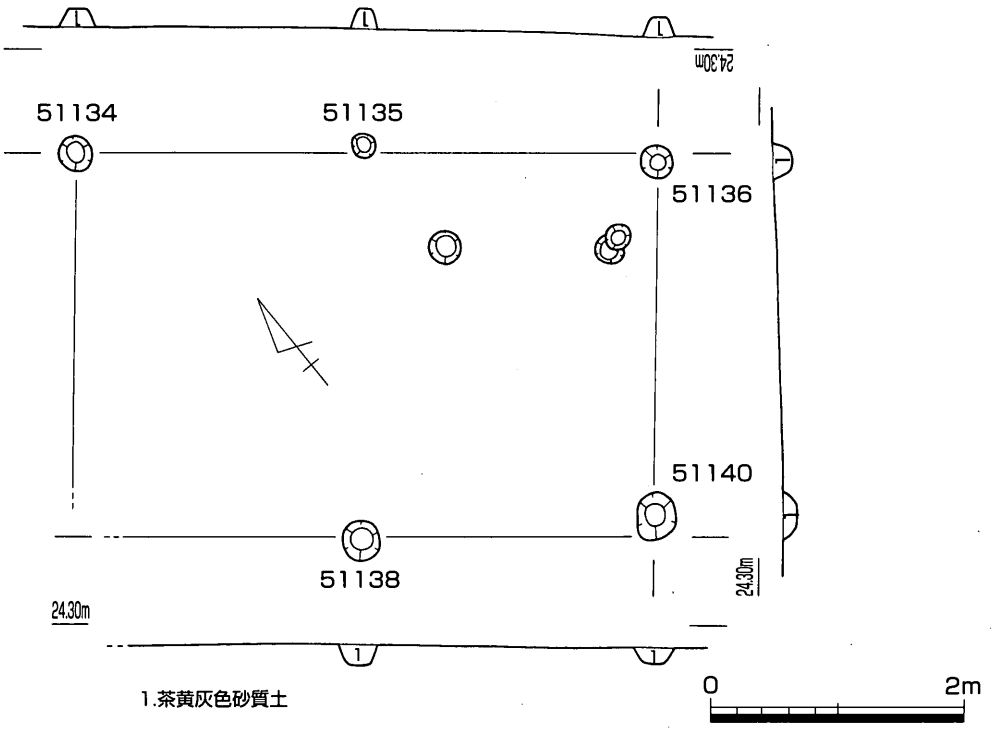
高所側の柱穴跡（ＳＰ5596・5600・5603）から弥生時代の甕・高坏・製塩土器が出土していることや柱穴堆積土が暗灰色系の砂混じり粘質土であることから弥生時代と考えられる。

### ＳＢ503

ＳＢ503は第Ⅱ調査区（Ｆ・Ｇ－19）中央部、東方向から西方向に若干の傾斜はあるもののほぼ平坦地の標高約24.00ｍで検出した掘立柱建物跡である。南東側には８ｍの間隔をあけて梁間と同じ方向に流路を取るＳＤ570がある。またこの溝状遺構の北側は北西方向に直角に屈曲し、流路を取ることから掘立柱建物跡ＳＢ503を取り囲む溝の可能性がある。北西側にはＳＲ501・502があり、区画されている。建物自体は西側隅部分の柱穴が範囲外にあるが、北西－南東方向が長いものである。規模は、梁間１間×桁行２間で、3.02×4.60ｍを測る。構成する柱穴跡は全て円形を呈し、直径20～35cmと小振りで、検出面からは12～15cmと浅い。建物は東西棟で、北西－南東方向（長軸）は真北から50.6° 西を取る。

建物の短軸（梁間）はちょうど検出傾斜面の等高線と概ね併行していることから地形に制約されたように（合わせるように）造られていることが解る。

柱穴跡から遺物が出土していないが、柱穴堆積土が暗灰色系の砂混じり粘質土であることから弥生時代の可能性が考えられる。

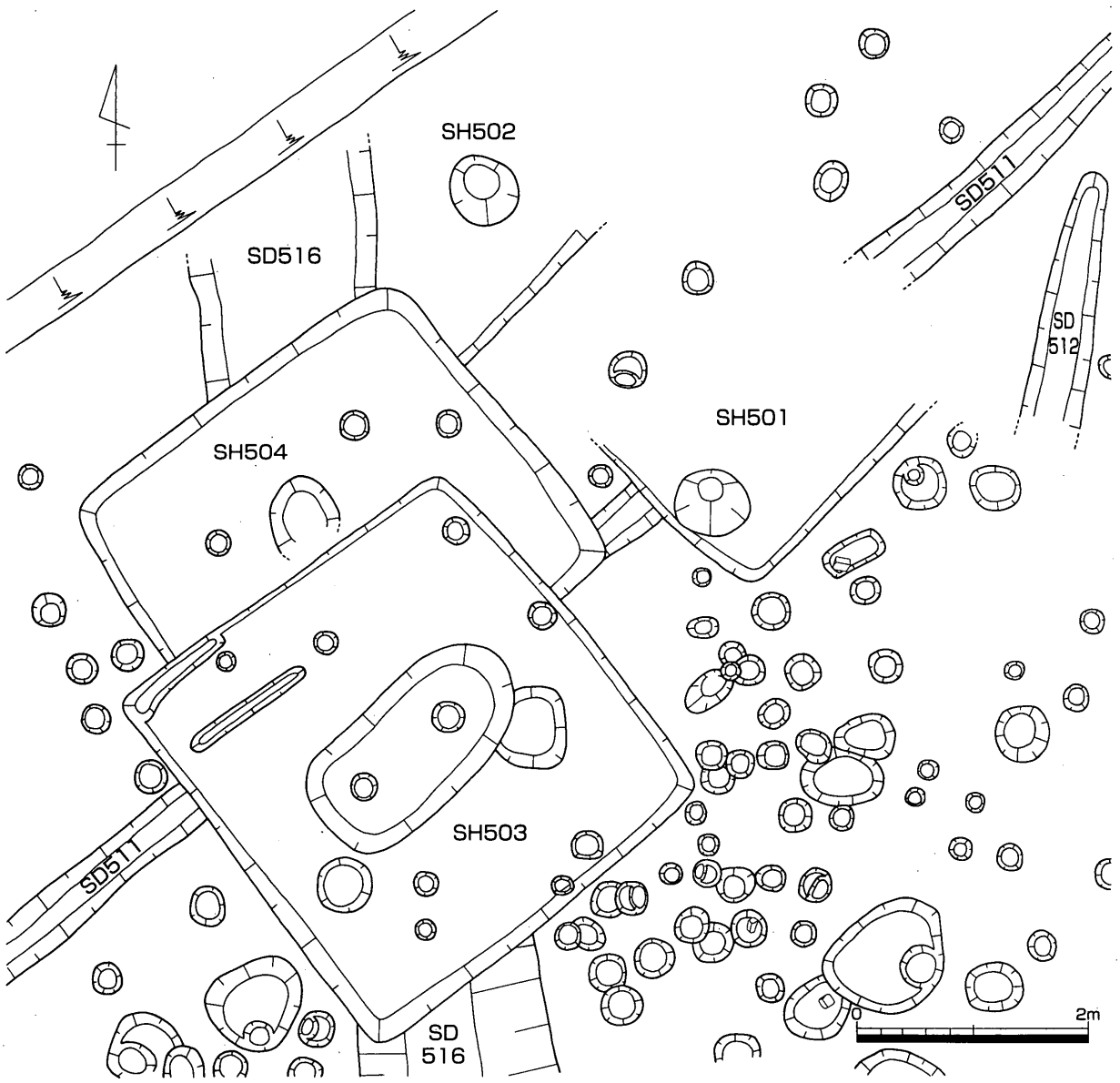



第35図　ＳＢ503平・断面図

## 2．竪穴住居跡

竪穴住居跡は総数21基（ＳＨ501～521）で、第Ⅱ調査区のほぼ全域で検出している。第Ⅱ調査区より東部にある第Ⅰ調査区で弥生時代の遺構をほとんど検出していない状況から、集落域は第Ⅱ調査区の東端がほぼ東限と考えられる。また第Ⅱ調査区西端では自然流路跡（ＳＲ502）を検出していることから、第Ⅱ調査区のほぼ全域、約220ｍの範囲が小山･南谷遺跡の集落の東西幅と考えられ、竪穴住居域はその内の東より約190ｍに広がっていることが解る。ただ第Ⅰ調査区が丘陵の縁辺部であることから高所への範囲は不明である。

竪穴住居跡は弥生時代後期初頭から中葉頃のものと考えられ、かなりの時期幅が確認できるが、重複している竪穴住居跡は21棟中４棟と少ない。竪穴住居跡中には壁溝のみの検出とかなり削平を受けているものもあり、後世の削平で消滅したものも考慮しなければならないが、検出竪穴住居跡は現状で６～14ｍの間隔をあけて検出している。更にこれを時期ごとに細分するとかなり間隔は空くことが想定できる。




第36図　ＳＨ501～504位置関係図

ＳＨ501

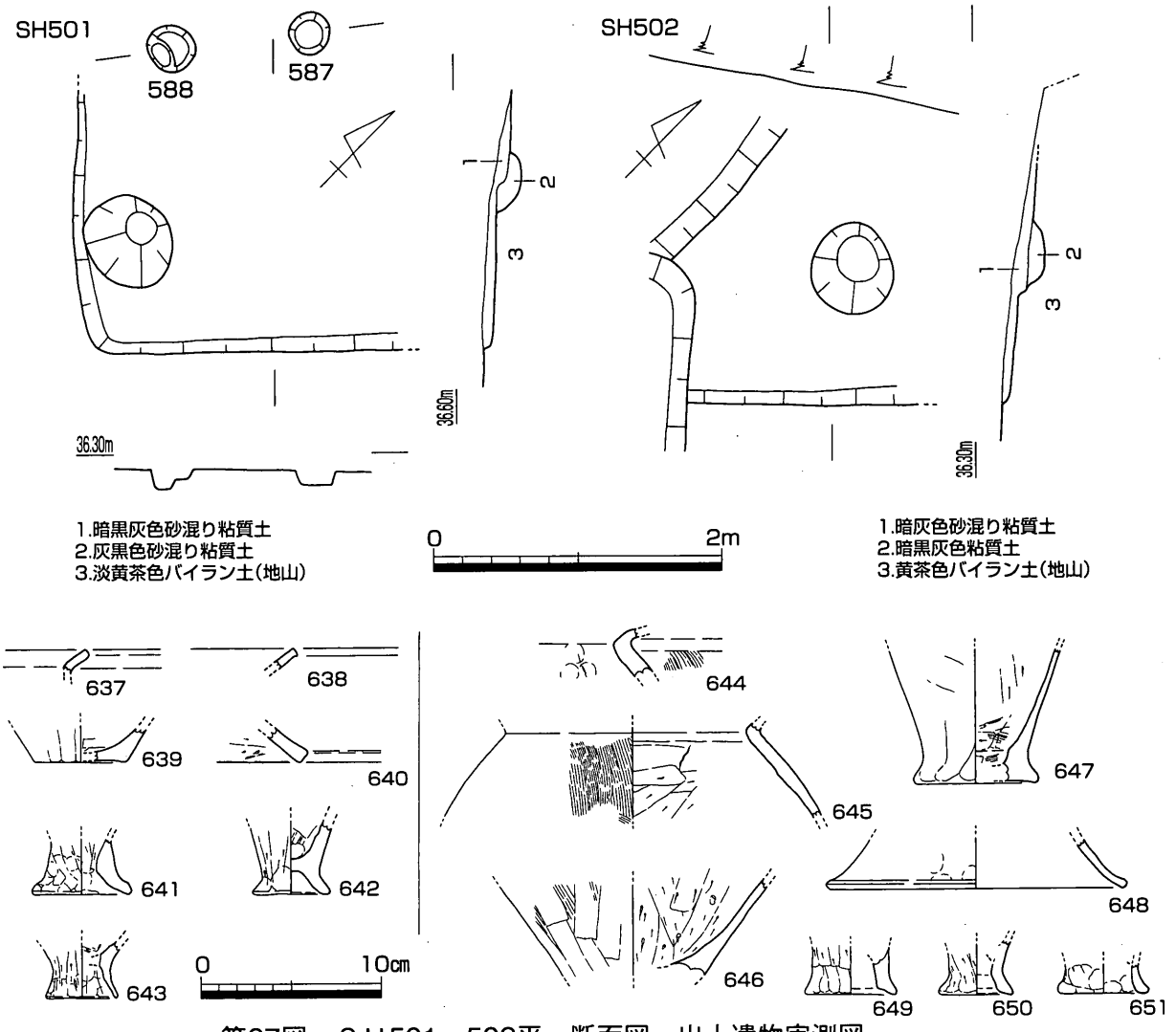
ＳＨ501は第Ⅱ調査区（Ｈ－９）東端、南方向から北方向に約4.0ｍで、約0.22ｍの比高差を持つ傾斜地の標高36.40ｍで検出した竪穴住居跡である。竪穴住居跡内の堆積土は単層で、暗黒灰色砂混じり粘質土が堆積している。北部の２／３程度が後世の削平を受けているために詳細な平面形態は不明であるが、南隅の形状から隅丸の方形を呈するものと考えられる。規模は北東－南西方向の現存長が約2.2ｍ、北西－南東方向の現存長が約1.8ｍ、検出面からの深さは約0.07ｍを測る。竪穴住居の東西方向は概ね検出傾斜面の等高線と併行しており、地形に合わせるように造られていることが解る。北西－南東方向の主軸は真北より約46.0° 西を取る。

竪穴住居内部で中央土坑、壁溝等は検出していないが、北部に柱穴跡を数基検出していることから、これらが主柱穴になる可能性がある。

竪穴住居内の床面直上からは遺物が出土しておらず、堆積土中から甕・高坏・製塩土器が出土している。

甕は口縁部、体部、底部の破片である。底部は平底で、口縁端部はほとんど拡張しない。体部外面には粗いハケ目（６本／cm）、内面にはヘラ削りが施されている。

高坏は脚部のみで、外面にヘラミガキが、内面にヘラケズリが施されている。




第37図　ＳＨ501・502平・断面図、出土遺物実測図

製塩土器は脚部のみで、外方に開く。脚部高は1.3～2.0cm、体部外面にはヘラケズリが施されている。

胎土に角閃石を含む土器は甕、高坏、製塩土器で、甕、高坏はそれぞれ１破片しか出土していない。製塩土器は３個体出土しているが、その全てにおいて角閃石を含んでいる。

時期は弥生時代後期中葉である。

### ＳＨ502

ＳＨ502は第Ⅱ調査区（Ｈ－９）東端、南方向から北方向に約3.5ｍで、約0.27ｍの比高差を持つ傾斜地の標高36.10ｍで検出した竪穴住居跡である。竪穴住居内の堆積土は単層で、暗灰色砂混じり粘質土が堆積している。北部のほとんどが後世の削平を受け、南辺の一部が残存するのみで、平面形態は不明である。そのため規模は不明で、南辺の現存長が約1.6ｍ、検出面からの深さ約0.09ｍを測るのみである。竪穴住居の東西方向は概ね検出傾斜面の等高線と併行しており、地形に合わせるように造られていることが解る。北西－南東方向の主軸は真北より約44.0°西を取る。

竪穴住居の北部に柱穴跡を1基検出しているが、主柱穴を構成するかは不明である。また土層断面から見ると南側が約６cm高くなっており、平面的には検出できなかったが、幅約80cmのベッド状遺構があった可能性が考えられる。

竪穴住居内の床面直上からは遺物が出土しておらず、堆積土中から壺・甕・高坏・製塩土器が出土している。

壺は底部のみで弥生時代中期の可能性がある。

甕は頸部、体部の破片である。頸部は「く」の字に屈曲し、内面に明瞭な稜を持つ。体部上半の内面に施されているヘラケズリは頸部内面屈曲部まで至らず、１cmほど間隔をあけている。外面には粗いハケ目（５～６本／cm）が縦方向に施されている。

高坏は坏部のみで、スカート状に広がり、端部はそのまま終わらせる。

製塩土器は脚部のみで、脚部高は約1.5～2.0cmを測り、やや高い。脚部外面は指頭痕が、体部外面には縦方向のヘラケズリが施されている。

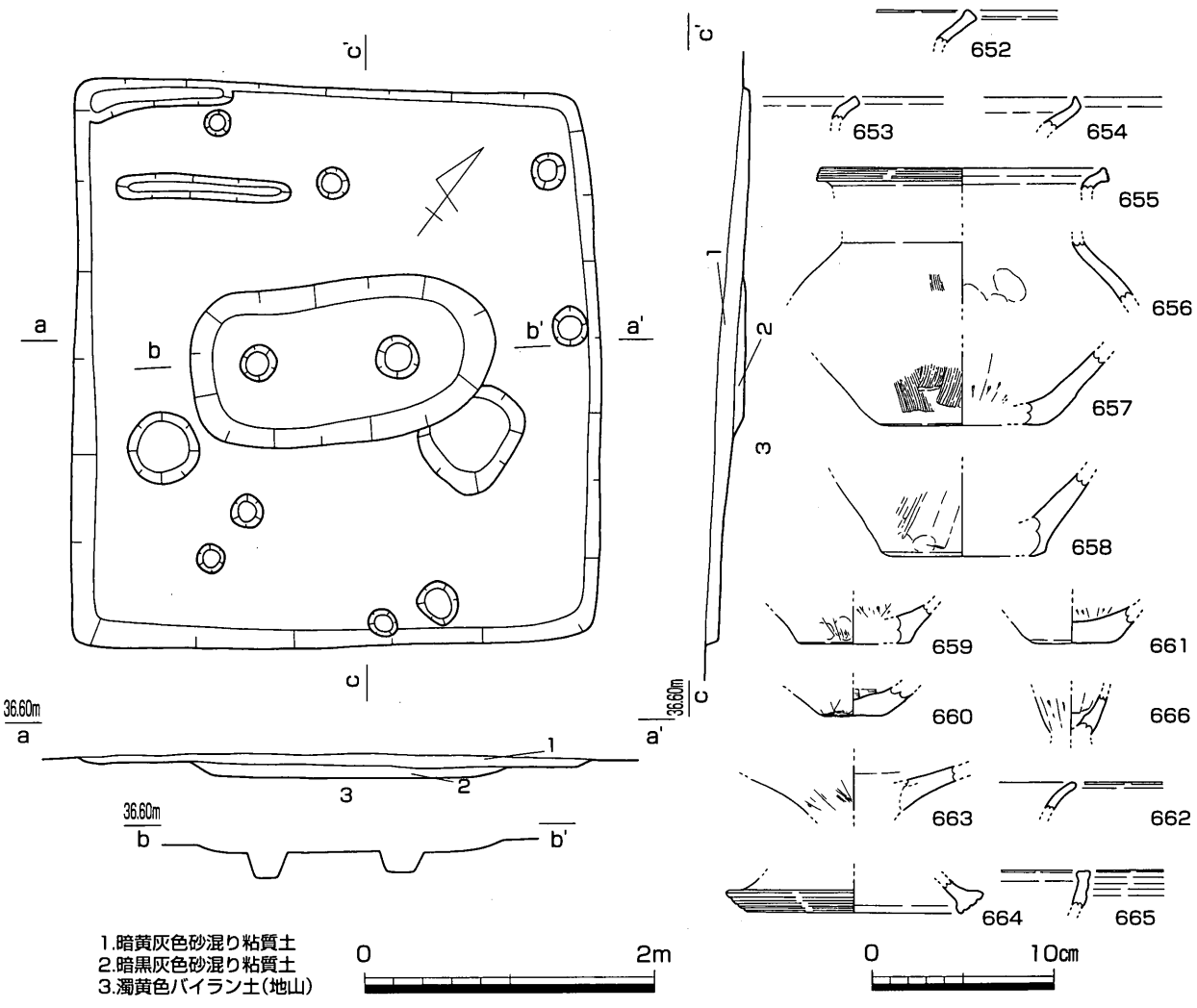
胎土に角閃石を含む土器は甕のみで、破片点数で約1.1％と低い割合で角閃石を含んでいる。

時期は弥生時代後期前半である。

### ＳＨ503

ＳＨ503は第Ⅱ調査区（Ｈ－９）東端、南方向から北方向に約3.0ｍで、約0.17ｍの比高差を持つ傾斜地の標高36.50ｍで検出した竪穴住居跡である。ＳＨ504と切り合っており、ＳＨ504埋没後に掘削された竪穴住居である。竪穴住居の堆積土は壁溝に堆積する暗灰色粘質土、中央土坑に堆積する暗黒灰色粘質土（第２層）を含む３層で、第１層の暗黄灰色砂混じり粘質土が全面に堆積している。平面形態は方形を呈する。規模は北東－南西方向が約3.63ｍ、北西－南東方向が約3.7ｍ、検出面からの深さは約0.08ｍを測る。竪穴住居の北東－南西方向はちょうど検出傾斜面の等高線に併行しており、地形に合わせるように造られていることが解る。北西－南東方向の主軸は真北より約38.0°西を取る。

竪穴住居内部は北西部の北辺に幅約20cm、床面からの深さ約11cmの壁溝を、床面ではほぼ中央に




第38図　ＳＨ503平・断面図、出土遺物実測図

土坑跡を、不規則に柱穴跡を検出した。

明確な主柱穴は確認していないが、中央土坑内に長軸主軸を合わせるように柱穴跡を２基検出した。中央土坑内で検出していることから主柱穴とは考えられない。柱穴跡の平面形態は円形で、直径24～29cm、深さ15～18cmを測る。この柱穴跡では柱痕が確認されていなため正確ではないが、柱穴心々間は1.1ｍを測る。

ほぼ中央で検出した中央土坑跡は東西に長い楕円形を呈し、東西（長軸）約2.1m、南北（短軸）約1.07m、深さ約0.06mを測る。また、北西コーナー部で幅0.15m、深さ0.07mの壁溝を1.2mの長さで検出した。この竪穴住居に伴うものとは考えられず、この部分で竪穴住居が密集していることから、ＳＨ503以外の竪穴住居に伴うものと考えられる。

竪穴住居跡内の床面直上からは遺物が出土しておらず、堆積土中から壺・甕・高坏・大型鉢・製塩土器が出土している。

壺は底部片のみで、外面に粗いハケ目（６～７本／cm）、内面にヘラケズリが施されている。

甕は口縁部、体部、底部の破片である。底部は平底で、口縁端部は上方に僅かに摘み上げる。体部上半外面にはハケ目、内面には指ナデが施されている。

高坏は口縁部が外反し、そのまま丸く終わらせるものと内面に僅かに沈線を施すものがある。脚

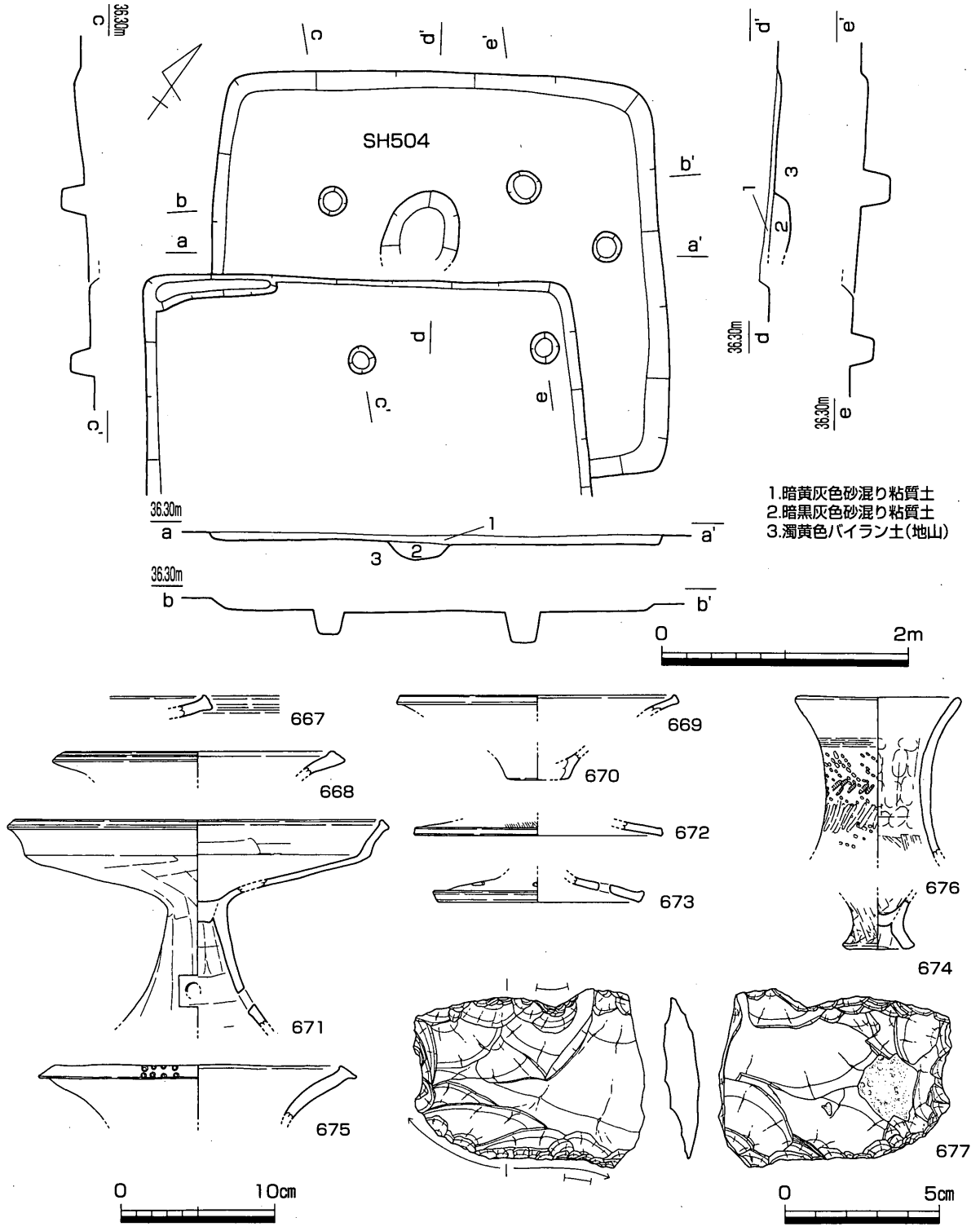
端部はかなり上下に拡張し、外面に３条の沈線を施す。

大型鉢は口縁端部のみで、外面に２～３条と考えられる凹線が施されている。

製塩土器は体部下半で外面にヘラケズリが施されている。

胎土に角閃石を含む土器は甕、高坏、製塩土器で、甕は破片点数で約11%、高坏は破片点数が少なく、50%となっている。製塩土器は1個体出土しており、角閃石を含んでいる。

時期は弥生時代後期中葉である。




第39図　ＳＨ504平・断面図、出土遺物実測図

## ＳＨ504

ＳＨ504は第Ⅱ調査区（Ｈ－９）東端、南方向から北方向に約3.0ｍで、約0.23ｍの比高差を持つ傾斜地の標高36.20ｍで検出した竪穴住居跡である。竪穴住居の堆積土は壁溝に堆積する暗灰色粘質土、中央土坑に堆積する暗黒灰色粘質土（第２層）を含む２層で、第１層の暗黄灰色砂混じり粘質土が全面に堆積している。南部分を竪穴住居跡ＳＨ503に切られて入るものの、平面形態は方形を呈する。規模は北東－南西方向が約3.66ｍ、北西－南東方向が約3.14ｍ、検出面からの深さは約0.08ｍを測る。竪穴住居の北東－南西方向はちょうど検出傾斜面の等高線に併行しており、地形に合わせるように造られていることが解る。北西－南東方向の主軸は真北より約36.5°西を取る。

竪穴住居内部にはほぼ中央に土坑跡を、その土坑跡を取り囲むように４基の柱穴跡を検出した。

主柱穴は４基で、平面形態がほぼ円形を呈し、直径23～26㎝、深さ約16～23㎝を測る。柱痕が確認されていないため正確ではないが、北西、南西柱穴心々間が約1.3ｍ、北西、北東柱穴心々間が約1.5ｍと僅かに南西－北東方向が長い長方形を呈していることが解る。

ほぼ中央北寄りで検出した中央土坑跡はやや南北に長い楕円形を呈し、東西（短軸）約0.6ｍ、南北（長軸）現存長約0.7ｍ、深さ約0.14ｍを測る。

竪穴住居内の床面直上からは遺物が出土しておらず、堆積土中から壺・甕・高坏・鉢・製塩土器・器台が出土している。

壺は口縁部片のみで、端部が僅かに上方に摘み上げ、外面には２条の退化凹線が施されている。676は弥生時代中期の直口壺である。

甕は口縁部、体部、底部の破片である。底部は平底で、口縁端部は上下に僅かに摘み出す。体部片は外面にはハケ目、指ナデが、内面にはヘラケズリが施されている。

高坏は坏部から口縁部が屈曲し、口縁端部を上下に僅かに摘み出す。脚部はスカート状に広がり、穿孔が認められる。脚部には脚部が水平に近く屈曲し、広がるもの（672・673）がある。

鉢は体部片のみで、内面には横方向の粗いハケ目（５～６本／㎝）の後、縦方向のヘラミガキが間隔をあけて施されている。

製塩土器は脚部のみで、脚部高は約1.5㎝を測り、体部外面にヘラケズリが施されている。

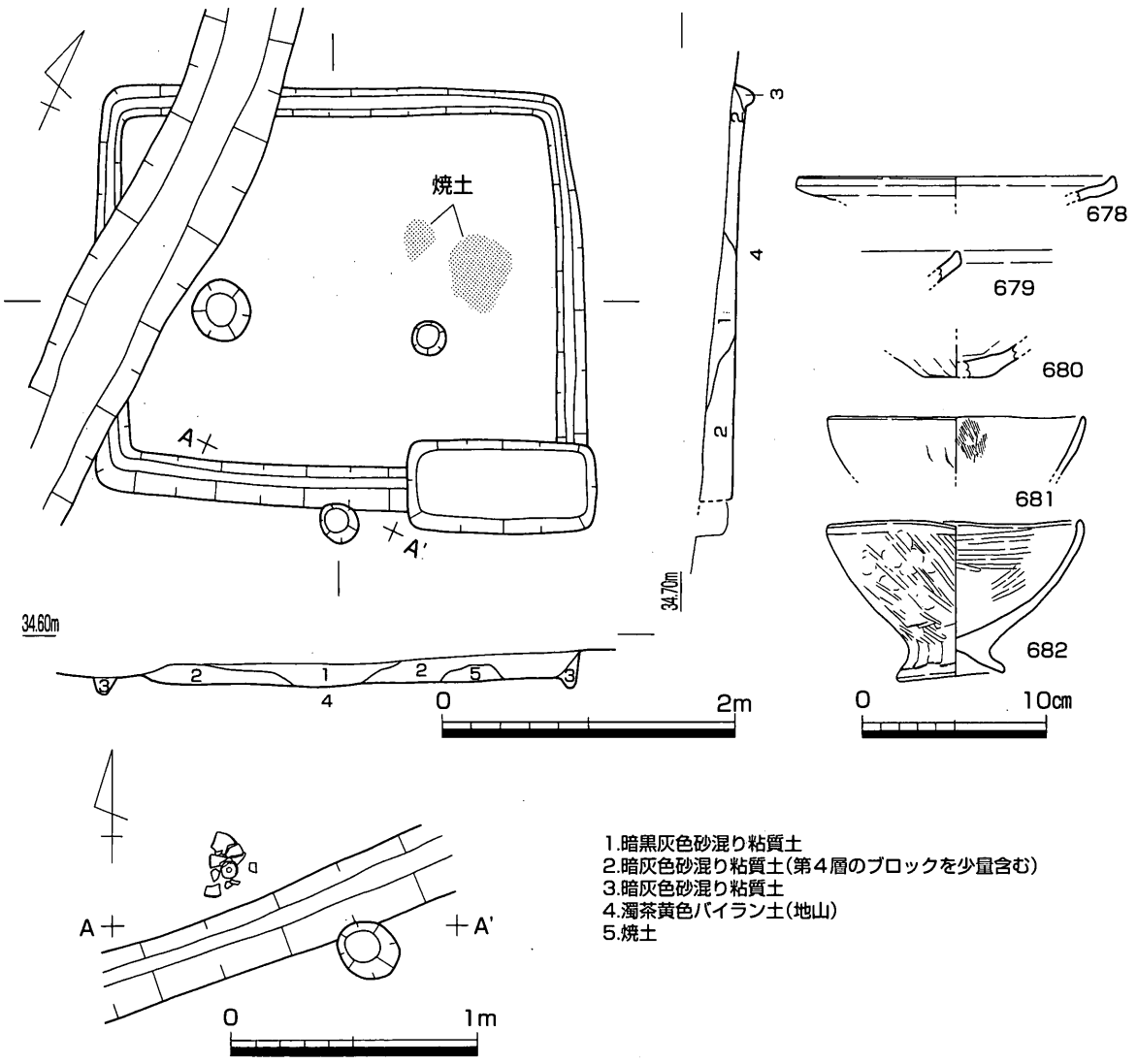
胎土に角閃石を含む土器は甕のみで、破片点数で約5.1％角閃石を含んでいる。

時期は弥生時代後期前半である。

## ＳＨ505

ＳＨ505は第Ⅱ調査区（Ｇ－10）東端、南東方向から北西方向に約3.0ｍで、約0.30ｍの比高差を持つ傾斜地の標高34.50ｍで検出した竪穴住居跡である。竪穴住居の堆積土は４層で、主として暗灰色系砂混じり粘質土が堆積している。第１層はレンズ状堆積し、第２層が全体に水平堆積している。竪穴住居北西部を溝状遺構ＳＤ523に、南東部を土壙墓跡ＳＴ505によってきられているが、平面形態は隅丸の東西方向がやや長い長方形を呈することが解る。規模は東西方向（長軸）約3.31ｍ、南北方向（短軸）約2.78ｍ、検出面からの深さは約0.20ｍを測る。

竪穴住居の東西方向（長軸）はちょうど検出傾斜面の等高線と併行していることから地形に制約されたように（合わせるように）造られていることが解る。南北方向（短軸）の主軸は真北より24.5°西を取る。




第40図　ＳＨ505平・断面図、出土遺物実測図、遺物出土状況図

竪穴住居内部は周囲に幅14～27cm、床面からの深さ６～11cmの壁溝を、床面では東西方向の南よりに東西２基の主柱穴を検出した。これらの主柱穴は平面形態が円形を呈し、西側の柱穴跡が直径約40cm、深さ約30cm、東側の柱穴が直径約20cm、深さ約21cmを測る。柱痕が確認されていなため正確ではないが、柱穴心々間は約1.4mを測る。

明確な中央土坑はなく、東側柱穴の北側において50×80cmの範囲で焼土・炭化物を検出したことから、この部分が炉跡と考えられるが、検出位置、焼土・炭化物は床面から若干浮いていること、床面も被熱していないことから、炉跡と断定するには至っていない。

竪穴住居内の床面直上からはほとんど遺物が出土しておらず、唯一南側のほぼ中央より台付鉢が出土しているのみである。台付鉢（682）はほぼ完形で、出土状況から正立して置かれていたものと考えられる。

竪穴住居堆積土からは壺・甕・鉢・台付鉢・製塩土器・細頸壺が出土している。

678は壺、679・680は甕、681・682は鉢である。

壺の底部は平底で、体部内面にハケ目（７～８本／cm）が施されている。

甕は体部内面上半に横・斜め方向のヘラケズリが、下半には縦方向のヘラ削りが施されている。体部外面は縦方向のハケ目（６～７本／cm）が施されている。口縁端部は上方に小さく摘みあげる。

鉢は内面に斜め方向のハケ目が施されている。外面は縦方向のヘラ削りが施されている。やや大型の鉢の外面には縦方向のヘラ削りの後、縦方向の板ナデが施されている。内面には斜め方向のやや粗い板ナデの後、縦方向のヘラミガキが施されている。

製塩土器の体部外面は縦方向のヘラ削りが施される。

細頸壺の頸部外面には横ナデが施されている。

胎土に角閃石を含む土器は製塩土器・細頸壺で、細頸壺の角閃石は少ない。出土遺物量が少量であるために詳細は不明である。

サヌカイトは出土していない。

時期は弥生時代後期後半である。

### ＳＨ506

ＳＨ506は第Ⅱ調査区（Ｈ－10）東部、東南東方向から西北西方向に約2.0ｍで、約0.3ｍの比高差を持つ傾斜地の標高34.75ｍで検出した竪穴住居跡である。

竪穴住居内の堆積土は単層で、暗灰色砂混じり粘質土が堆積している。

竪穴住居跡は傾斜面であるために南東部のコーナー部分を検出したのみで、全様は不明であるが、コーナー部が概ね直角に周ることから平面形態は方形を呈するものと考えられる。全体の規模は不明で、検出長は東西方向で0.70ｍ、南北方向で1.60ｍ、検出面からの深さは約0.15ｍを測る。

竪穴住居の南北方向はちょうど検出傾斜面の等高線と概ね併行しており、他の竪穴住居跡と同様に地形に制約されたように（合わせるように）造られていることが解る。南北方向（短軸）の主軸は真北より約9.5°東を取る。

竪穴住居内堆積土から甕が数点出土している。図化した甕は口縁端部を下方に拡張したもので、端部外面に凹線は認められない。体部外面にはハケ目の後ヘラミガキが、内面にはハケ目が施されている。

甕体部外面に列点文が施されている弥生時代中期甕も混じって出土している。

胎土に角閃石を含むものは確認されていない。

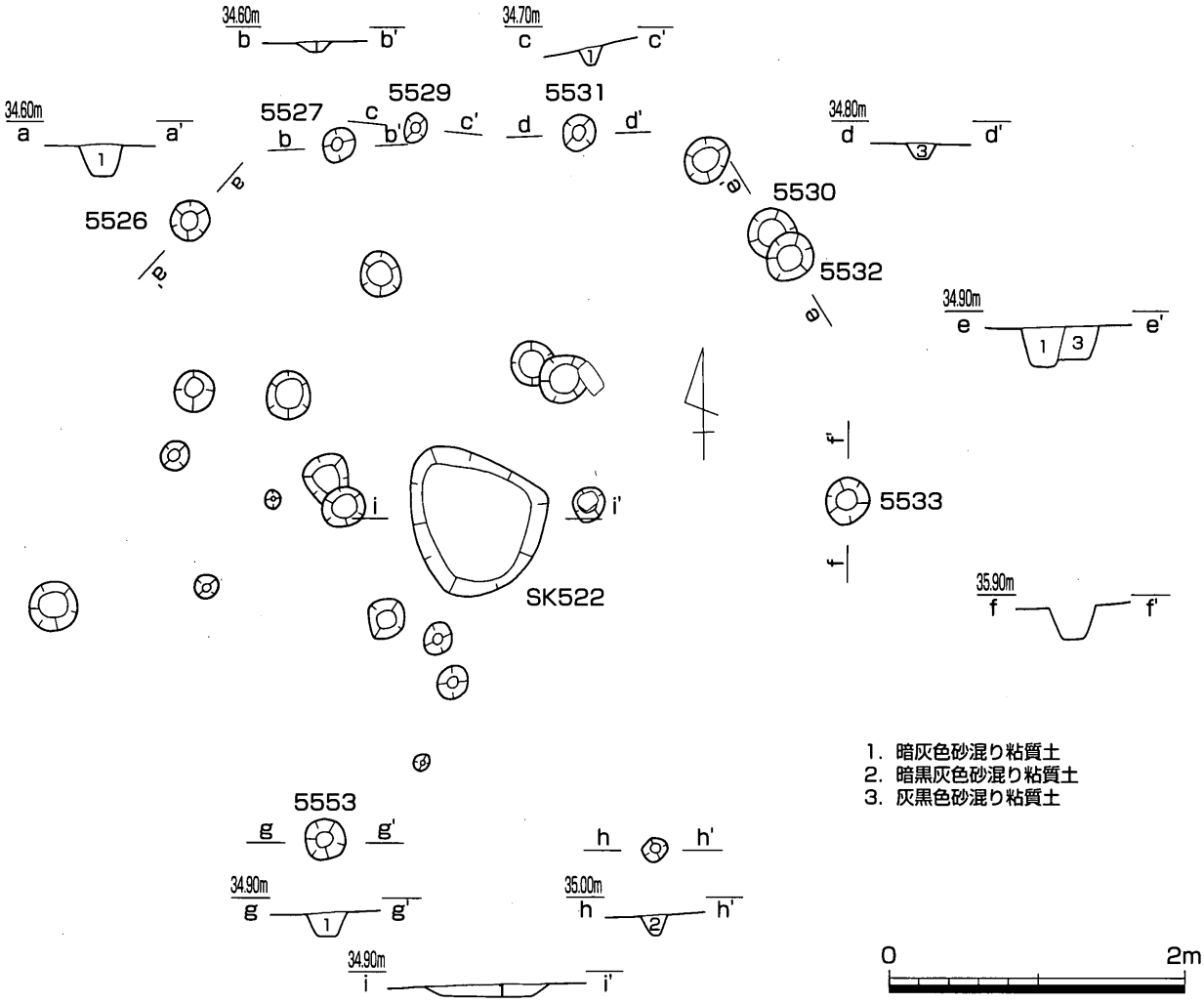
時期は出土遺物が少量であるために詳細は不明であるが、おそらく弥生時代後期と考えられる。

### ＳＨ507

ＳＨ507は第Ⅱ調査区（Ｈ－10・11）東部、南東方向から北西方向に約3.0ｍで、約0.3ｍの比高差を持つ傾斜地の標高34.88ｍで検出した竪穴住居跡である。この竪穴住居は上部を削平されているために主柱穴、中央土坑のみの検出で、竪穴住居内の堆積土は確認していない。円形に周る主柱穴から推定すると平面形態は円形を呈することがわかり、規模は直径５ｍ以上を測ることが解る。

主柱穴は推定７基以上で、平面形態がほぼ円形を呈し、直径14～30㎝、深さ約9～19㎝を測る。明確な柱痕が確認されていなため正確ではないが、柱穴心々間は1.65～2.6ｍで、概ね1.65ｍと考えられる。

中央土坑（ＳＫ522）は１基で、平面形態が歪な三角形状を呈し、長軸約1.00ｍ、短軸約0.90ｍを測る。断面形態は上部が開く「Ｕ」字状を呈し、検出面からの深さは最深部で約0.08ｍを測る。堆積土は灰黒色粘質土で、炭化物を少量含む。




第41図　ＳＨ507平・断面図

この竪穴住居に伴う遺物は壺片・甕片が出土しているが、少量である。

壺・甕ともに小片であるために器種、調整については不明である。

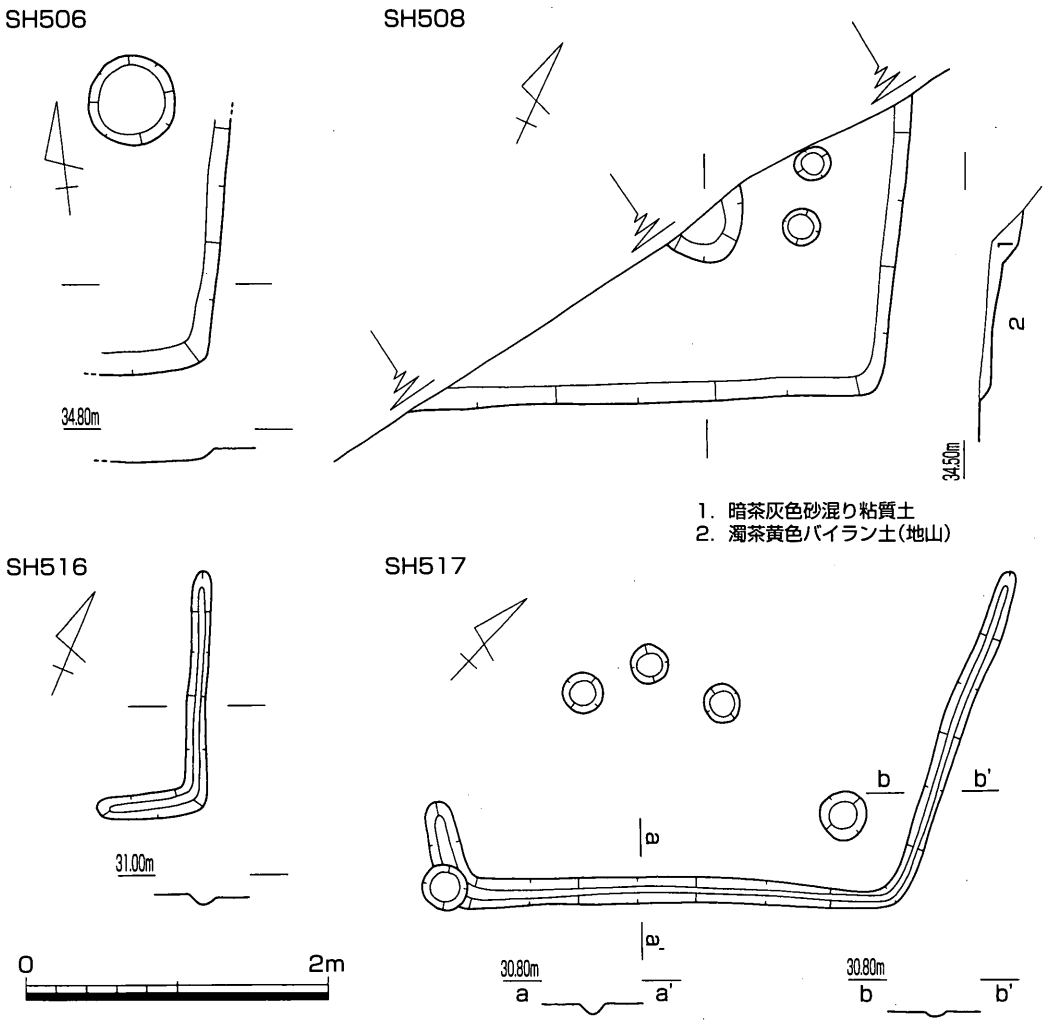
総破片点数が４点と少ないため明確には言えないが、胎土に角閃石を含む土器は出土していない。

サヌカイトは出土していない。

時期は弥生時代後期と考えられる。

### ＳＨ508

ＳＨ508は第Ⅱ調査区（Ｈ－11）東部、南東方向から北西方向に約3.5ｍで、約0.46ｍの比高差を持つ傾斜地の標高34.40ｍで検出した竪穴住居跡である。東側に近接して円形の竪穴住居ＳＨ507が所在する。竪穴住居内の堆積土は単層で、暗茶灰色砂混じり粘質土が堆積している。北西部の２／３程度が後世の地下げを受けているために詳細な平面形態は不明であるが、南東隅の形状から、方形を呈するものと考えられる。規模は南北方向の現存長が約1.95ｍ、東西方向の現存長が3.10ｍ、検出面からの深さは約0.08ｍを測る。竪穴住居の東西方向は概ね検出傾斜面の等高線と併行しており、地形に制約されたように（合わせるように）造られていることが解る。南北方向の主軸は真北より19.0°西を取る。




第42図　ＳＨ506・508・516・517平・断面図

竪穴住居内部で中央土坑、壁溝等は検出しておらず、残存する南東隅部分に主柱穴と考えられる柱穴跡１基を含む柱穴跡３基を検出した。

現存する主柱穴は１基で、北西部分が削平されているが、平面形態がおそらく円形を呈するものと考えられ、復元径は直径約60cm、深さ約10cmを測る。

竪穴住居内の床面直上からは遺物が出土しておらず、堆積土中から壺・甕・鉢・大型鉢・製塩土器が出土している。

壺の肩部が出土しており、外面にはヘラミガキが、内面はナデが施されている。

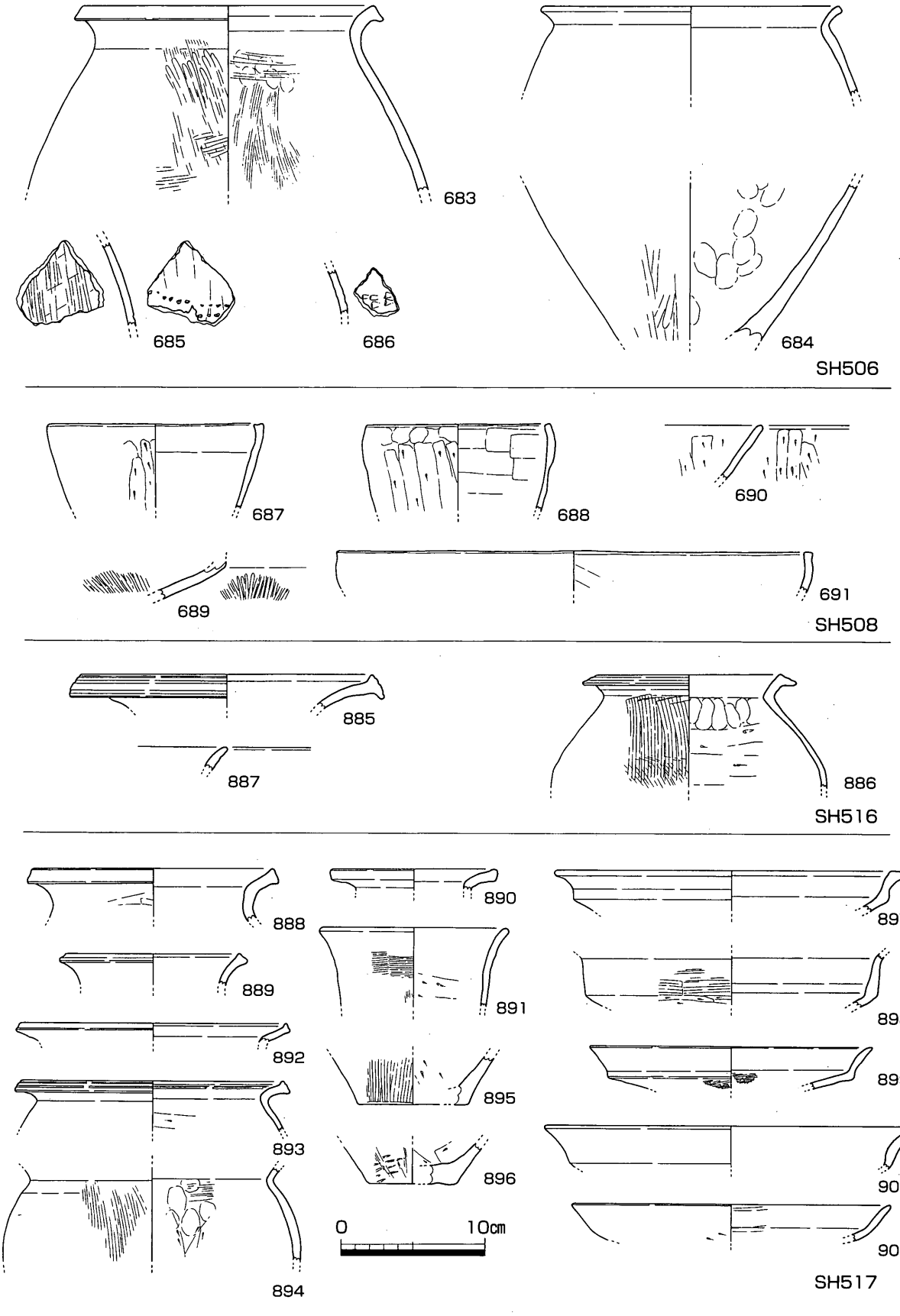
甕は体部破片のみで、外面に粗いハケ目、内面にヘラ削りが施されている。

鉢は小型のもの（690）と大型のもの（691）があり、小型の鉢は体部内外面に縦方向のヘラケズリが施されている。大型鉢は口縁端部外面の凹線がほとんど認められない。

製塩土器は体部から口縁部にかけての破片が出土しており、体部はほぼ直線的に外上方に延び、口縁部を内方に屈曲させる。体部外面には縦方向のヘラ削りが、口縁端部から約1.0cm下まで施されている。内面には横方向の板ナデが施されている。

胎土に角閃石を含む土器は甕のみと器種的に少なく、かなり低い割合となっている。

時期は弥生時代後期前半と考えられる。

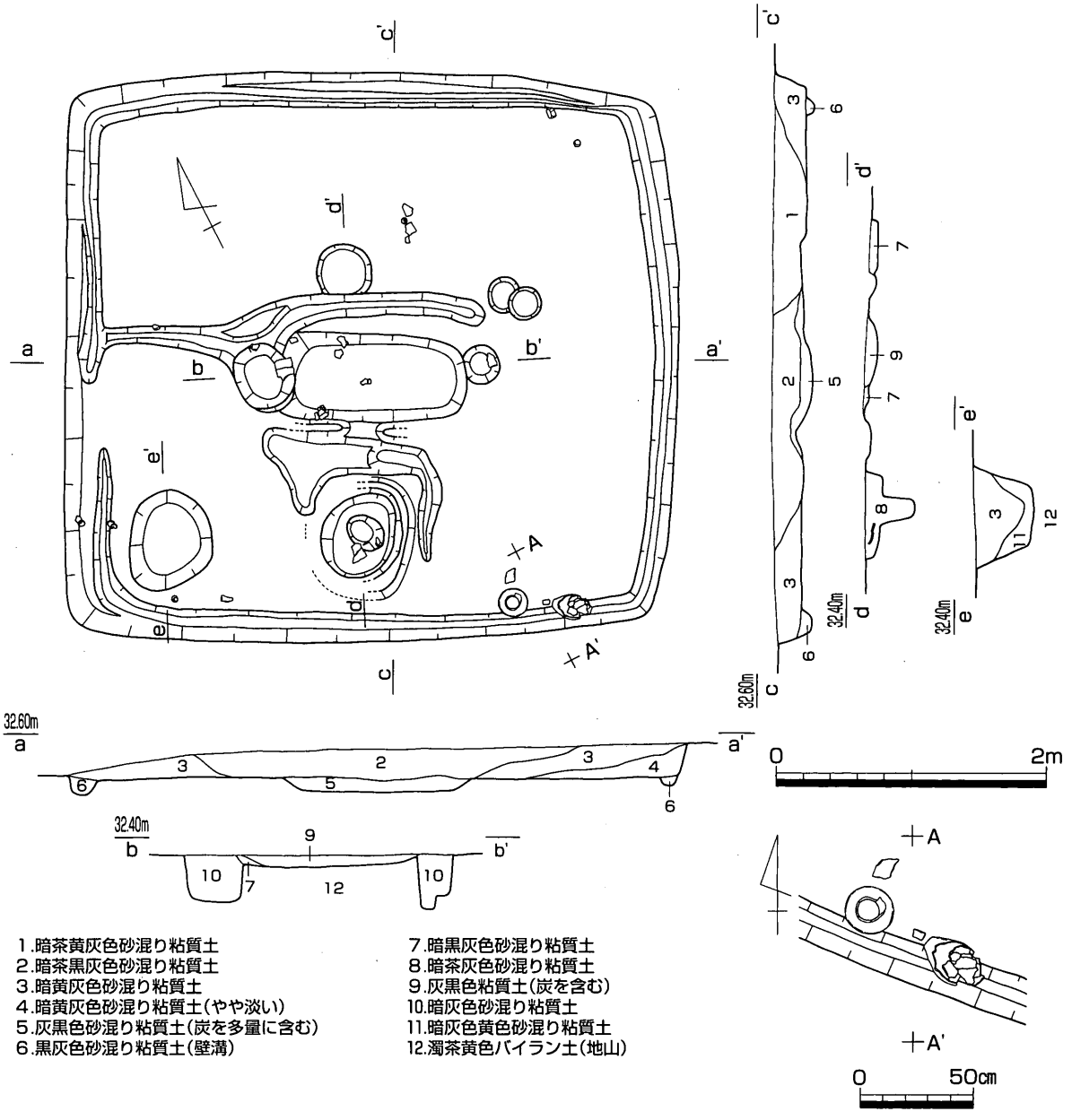



第43図　ＳＨ506・508・516・517出土遺物実測図

## ＳＨ509

ＳＨ509は第Ⅱ調査区（Ｇ－11）東部、東南東方向から西北西方向に約4.5ｍで、約0.3ｍの比高差を持つ傾斜地の標高32.53ｍで検出した竪穴住居跡である。竪穴住居内の堆積土は中央土坑、壁溝堆積土も含めると５層で、住居内は暗灰色系砂混じり粘質土がレンズ状に堆積している。竪穴住居跡の平面形態は西北西－東南東方向がやや長い長方形を呈する。規模は西北西－東南東方向（長軸）4.52ｍ、北北東－南南東方向（短軸）4.17ｍ、検出面からの深さは約0.25ｍを測る。竪穴住居の北北東－南南東方向（短軸）はちょうど検出傾斜面の等高線と併行していることから他の竪穴住居跡と同様に地形に制約されたように（合わせるように）造られていることが解る。北北東－南南東方向（短軸）の主軸は真北より27.5°東を取る。

竪穴住居内部は北西側の一辺ほぼ中央部で約50㎝の隙間があるものの、それ以外の周囲に幅10～




第44図　ＳＨ509平・断面図、遺物出土状況図

23cm、床面からの深さ３～６cmの壁溝を、ほぼ中央部には長軸に併行するように長方形の中央土坑を、その中央土坑の小口部分に近接して２基の主柱穴を、南辺側の南西隅部及び中央部で柱穴跡を検出した。

中央土坑は平面形態が隅丸の長方形を呈し、長軸約1.40m、短軸約0.66m、検出面からの深さ約0.09mを測る。西側小口部分の柱穴と中央土坑との関係は、柱穴堆積土を中央土坑堆積土が切っていることから、竪穴住居に伴う主柱穴を設置後、中央土坑を掘削・使用したことが解る。また、中央土坑北・南側の長辺側には幅10～15cm程度（高まりの下部で計測）、高さ約４cmの土手状の高まりを検出している。土手状の高まりは中央土坑の両小口部分では検出しておらず、南側のほぼ中央で途切れている。更にその外側（北側・南側）には土手状の高まりと併走するように溝が確認されている。北側の溝は幅約17cm、深さ約３cmを測り、西側は壁溝方向へと延びる。この北側の溝から高坏脚部（747）が出土している。南側の溝は幅15～27cm、深さ３～４cmを測り、北側と同様に中央土坑の長辺部分に併走するが、西側ではその途中から南方向に派生する溝を検出し、東側は先端が南方向に屈曲し、竪穴住居南辺ほぼ中央で検出した柱穴を「コ」の字に取り囲む。溝も土手状の高まりと同様に中央土坑の両小口部分では確認されていない。

中央土坑の堆積土は炭化物を多量に含む灰黒色砂混じり粘質土の単層で、土坑内全域で確認できる。遺物は堆積土上面から壺（742）・甕・製塩土器（757・758）・鉢（759）・細頸壺片（760）が出土しているのみで、堆積土内からはほとんど出土していない。甕は図化できなかったが、下川津Ｂ類甕の破片である。

主柱穴は２基で、平面形態が円形状を呈し、西側の柱穴跡が直径42～53cm、深さ約36cm、東側の柱穴跡が直径27～29cm、深さ約31cmを測る。東側柱穴上面から高坏片（753）が出土している。柱痕が確認されていなため正確ではないが、柱穴心々間は約1.6mを測る。

南辺ほぼ中央で検出した柱穴跡は平面形態がやや歪な円形を呈し、上面で径55～66cm、２段目で径24～31cm、検出面から最深部の深さ約36cm、２段目までの深さ約12cmを測る２段掘りの柱穴である。柱穴跡の周囲には東側を中心に「コ」の字状に幅約15cm（高まりの下部で計測）、高さ約３cmの土手状の高まりを検出しているが、おそらく全周していたものと考えられる。

この柱穴跡は中央土坑南側で竪穴住居内の南側中央ということから作業場と考えられ、土器製作を行うための轆轤ピットの可能性がある。

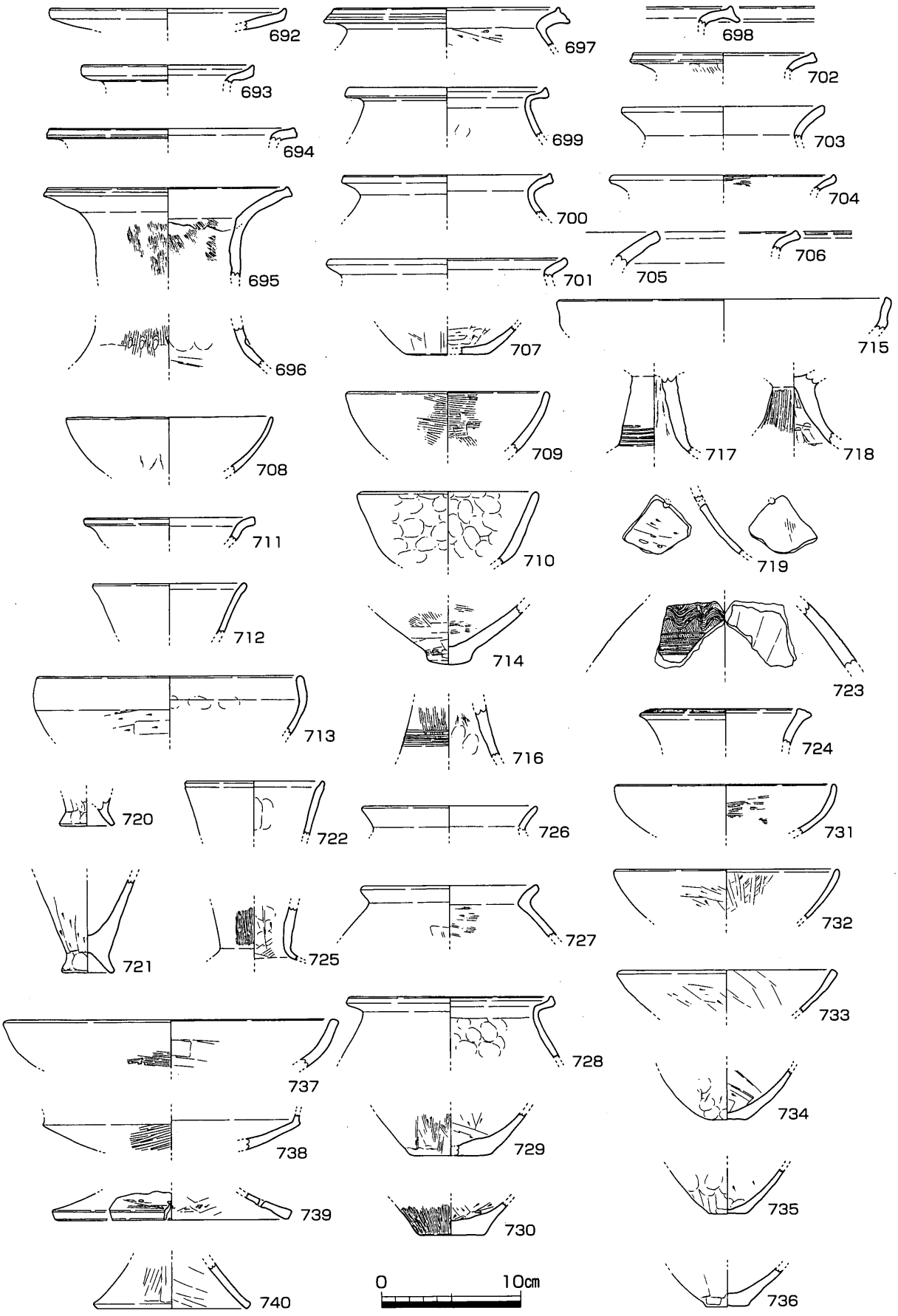
柱穴跡内から甕・製塩土器片・鉢（755）が出土している。

南西隅で検出した柱穴は平面形態がやや歪な円形を呈し、径61～76cm、深さ約44cmを測る。断面形態が逆台形状を呈し、竪穴住居床面の隅にあることから貯蔵穴の可能性が考えられる。遺物は壺形のミニチュア土器（752）・甕（754）で、炭化物等は出土していない。

竪穴住居床面直上からの出土遺物を見ると北東部で製塩土器（751）、南西隅で甕・高坏・製塩土器片（749・750）、南東隅の壁溝上で壺（741）・甕（744）が出土している。北部で出土した製塩土器（748）はほぼ完形に復元できる。南西隅の製塩土器は脚部のみである。南東隅の壺は壺頸部上半のみで、口縁端部を下に、ほぼ完形の甕は横位の状態で出土している。

竪穴住居堆積土からは壺・甕・鉢・高坏・細頸壺・製塩土器・サヌカイト・焼土が出土している。図化遺物には弥生時代中期の遺物を若干含む。

壺は二重口縁壺、頸部から口縁部が朝顔形に開く広口壺、頸部が上方に直線的に延び口縁部を外




第45図　ＳＨ509出土遺物実測図①

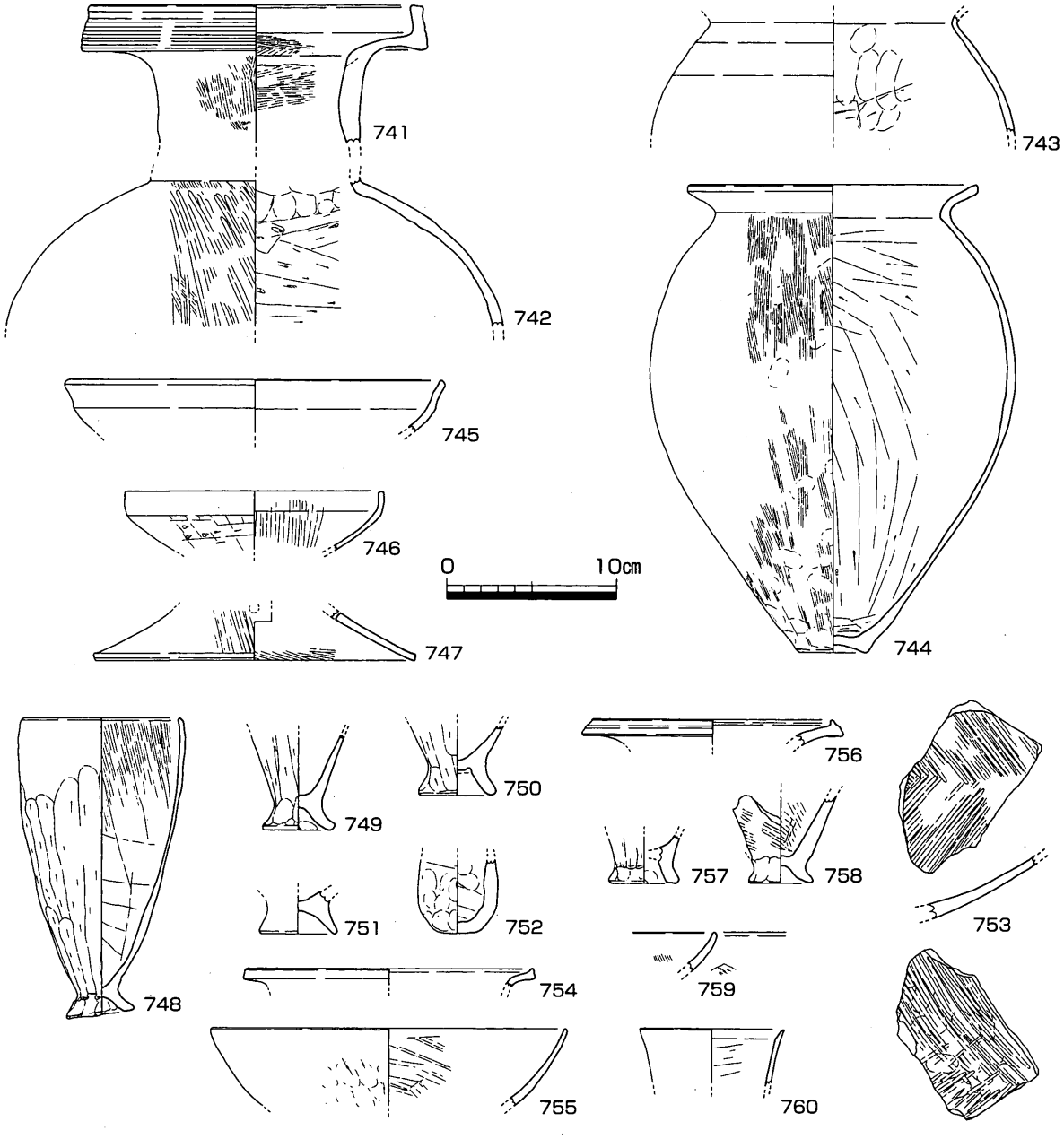
方に屈曲させる広口壺が出土している。

二重口縁壺は体部が球形を呈し、頸部は外反し、口縁端部を上下に拡張し、外面に４条の退化凹線が施されている。外面上半にハケ目（７本／cm）後縦方向のヘラミガキが、内面上半には横方向のヘラケズリが施されている。ヘラ削りは頸部屈曲部までは至らない。広口壺の口縁端部は上方に小さく摘み上げるものが認められる。

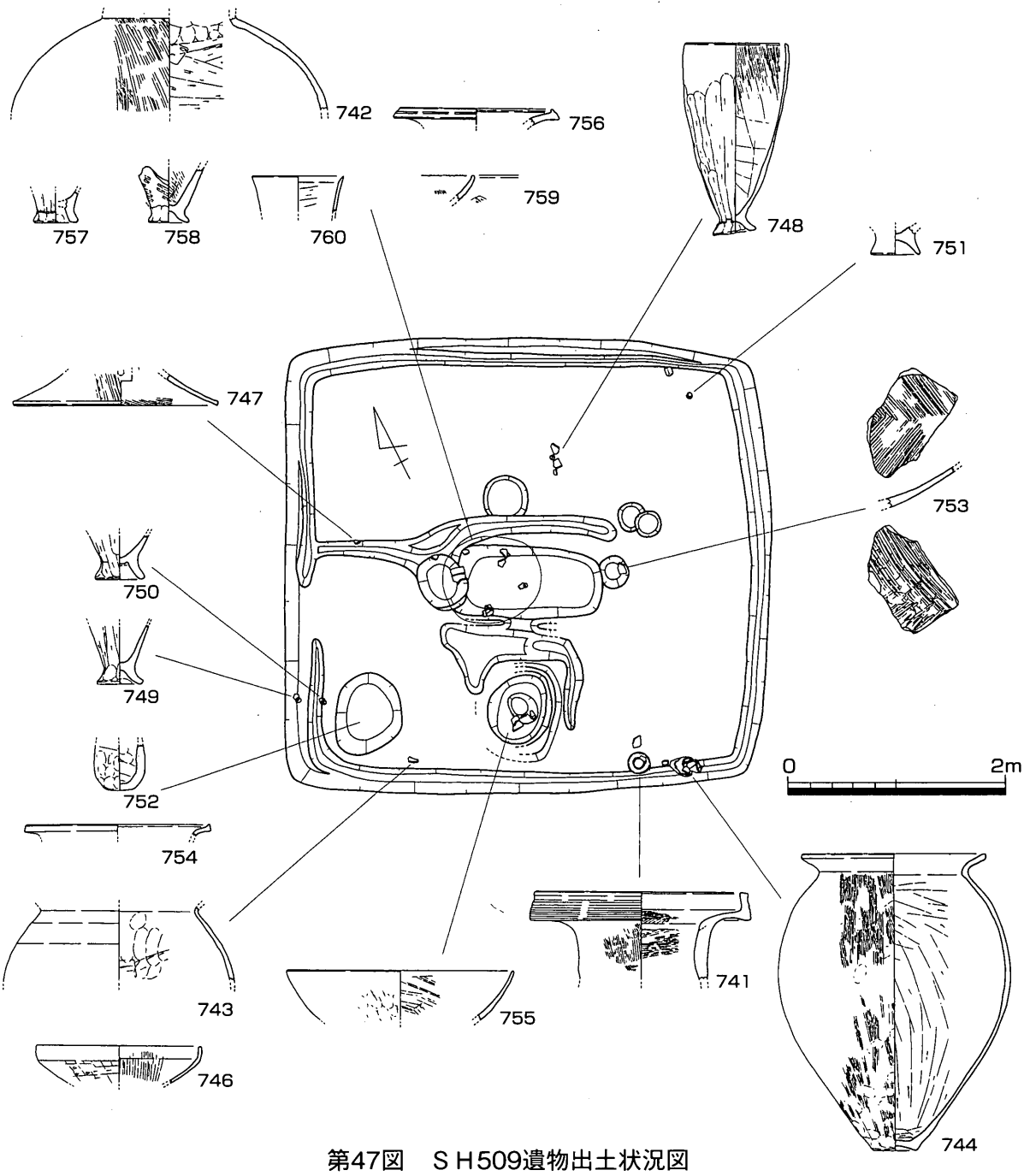
その他の壺は体部内面にハケ目（４～６本／cm）が、内面体部下半に横方向のハケ目（６本／cm）が、外面に横方向のヘラミガキが施されているものがある。また頸部屈曲部外面下半にヘラ状工具による刺突文が施されている壺もある。

甕は器壁の厚さが２～３㎜で、内面に縦方向のヘラ削りが、外面に縦方向のハケ目が施されている。口縁部は外方に屈曲し、上方に小さく摘みあげる。頸部屈曲部内面には僅かに稜を持つ。

744の底部は小さめの平底で、体部最大径は中位よりやや上方にある。頸部は外方に屈曲し、内




第46図　ＳＨ509出土遺物実測図②




第47図　ＳＨ509遺物出土状況図

面に稜を持つ。口縁部はやや外反し、口縁端部は上方に摘み上げる。体部内面下半は縦方向のヘラケズリが、上半は斜め方向のヘラケズリが施されている。体部外面には縦方向の板ナデ状のハケ目が施されている。

下川津Ｂ類土器の甕が２点あり、体部上半外面にはハケ目が、内面には指頭痕が施されている。

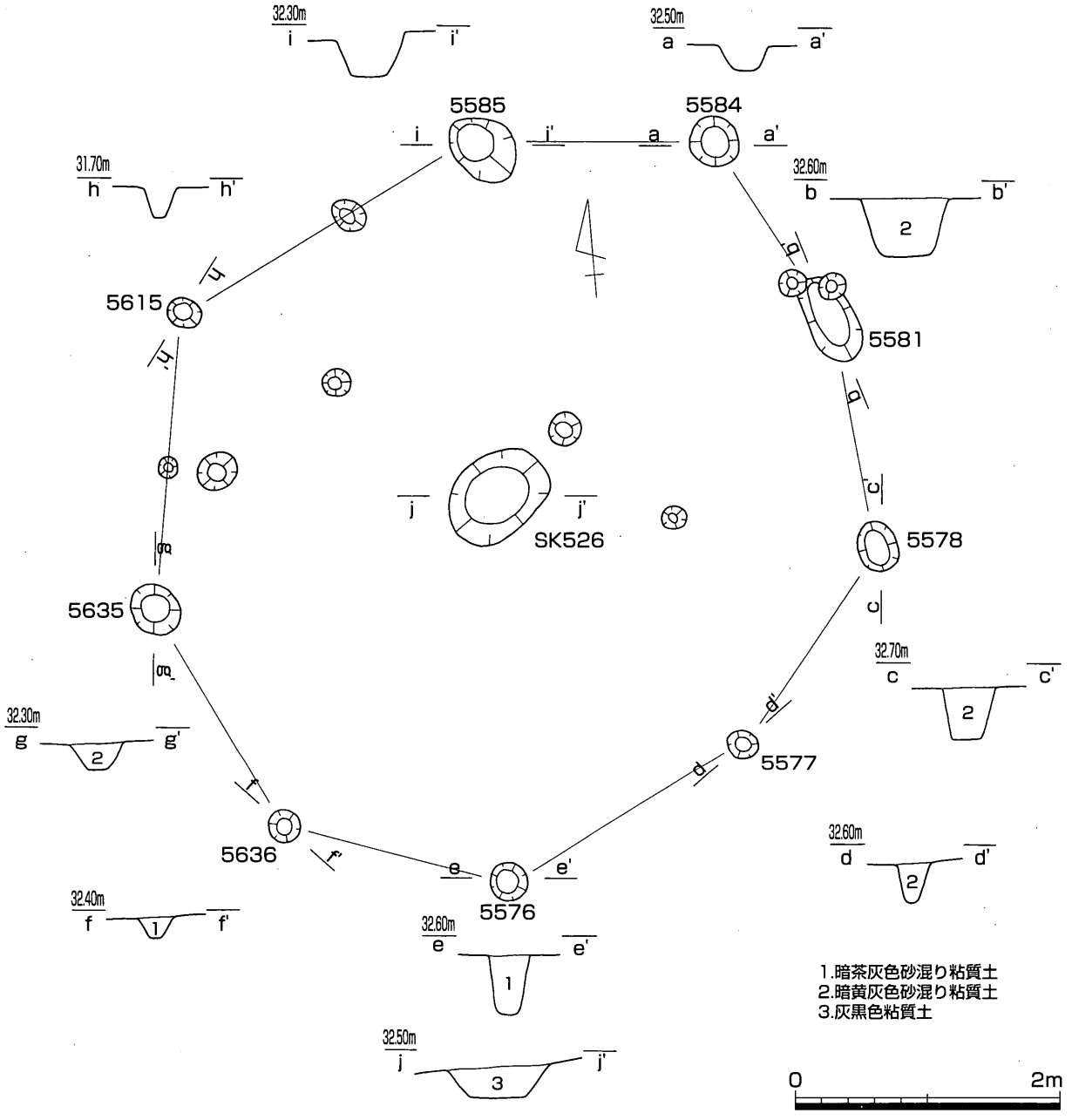
製塩土器は体部が直線的に外上方に延びるものとやや内湾気味に延びるものがある。体部外面には縦方向のヘラ削りが施されている。ヘラ削りは口縁端部まで至らず、口縁端部まで３㎝程度ヘラケズリの施されない部分がある。脚部高は全て１～1.5㎝内におさまり、脚端部は短く外方に広がる。体部内面には縦方向の板ナデ状のハケ目（７本／㎝）が施されている。製塩土器の体部外面の

調整はヘラケズリがほとんどであるが、２点ほど叩き痕が施されているものが認められる。

鉢のやや大振りのものと小振りのものがあり、図化点数だけで９点確認できる。調整は内面には斜め方向のハケ目の後、縦方向のヘラミガキが施されているもの。内面に斜め方向のハケ目・板ナデが施されているもの。内外面にハケ目（７本／cm）が施されているもの。外面には斜め方向のヘラ削りや指頭痕が施されているものがある。

高坏は脚部が短いものや長いものがあり、口縁部の形状にもバリエーションが認められる。胎土に角閃石を含む高坏は、脚部に径３㎜の穿孔があり、坏部内外面には格子状のヘラミガキが施されている。

細頸壺は頸部が直線的に外上方に延びるものとやや外反気味に外上方に延びるものがあり、前者は口縁端部内外面を僅かに窪ませる。




第48図　ＳＨ510平・断面図

胎土に角閃石を含む土器は甕・高坏・製塩土器・細頸壺で、製塩土器以外は下川津Ｂ類土器である。製塩土器は外面の調整がヘラ削りのものと叩き痕のものがあり、ヘラ削りの製塩土器の約半数に含まれ、叩き痕の残る製塩土器には含まれない。754は甕の口縁部で、胎土に角閃石を多量に含むものの下川津Ｂ類甕とは形態を異にしている。

サヌカイトは剥片が４点と非常に少ない。

時期は弥生時代後期中葉、下川津Ⅱ式併行期である。

### ＳＨ510

ＳＨ510は第Ⅱ調査区（Ｈ－11・12）東部、南東方向から北西方向に約3.0ｍで、約0.3ｍの比高差を持つ傾斜地の標高32.46ｍで検出した竪穴住居跡である。この竪穴住居は上部を削平されているために主柱穴、中央土坑のみの検出で、竪穴住居内の堆積土は確認していない。円形に周る主柱穴から推定すると平面形態は円形を呈することがわかり、規模は直径６ｍ以上を測ることが解る。主柱穴は推定９基で、平面形態がほぼ円形を呈し、直径20～50㎝、深さ約17～39㎝を測る。明確な柱痕が確認されていなため正確ではないが、柱穴心々間は1.8～2.3ｍで、概ね2.0ｍと考えられる。

中央土坑（ＳＫ526）は１基で、平面形態が東西に長い楕円形を呈し、長軸約0.80ｍ、短軸約0.60ｍを測る。断面形態は上部が開く「Ｕ」字状を呈し、検出面からの深さは最深部で約0.19ｍを測る。堆積土は灰黒色粘質土で、炭化物を少量含む。

この竪穴住居に伴う遺物は壺片、サヌカイト、炭が出土しているが、少量である。

壺片の体部内面はヘラケズリの後、指ナデが、外面はヘラミガキが施されている。

総破片点数が８点と少ないため明確には言えないが、胎土に角閃石を含む土器は出土していない。

サヌカイトは剥片が１点出土している。

時期は弥生時代後期と考えられる。

### ＳＨ511

ＳＨ511は第Ⅱ調査区（Ｈ－11）東部、後世の削平によりほぼ平坦になった標高32.58ｍで検出した小型の竪穴住居跡で、ちょうどＳＨ509から約８ｍ、南側に位置する。竪穴住居内の堆積土は６層で、暗灰色系砂混じり粘質土と濁黄色系砂混じり粘質土が概ねレンズ状に堆積している。上層２層（土層第１・２層）は竪穴住居埋没過程で、中央窪み部分に堆積した土層と考えられ、多量の土器が廃棄された状態で検出した。竪穴住居跡の平面形態は南東隅が調査区外に延びているが、隅丸の方形を呈する。規模は北東－南西方向3.25ｍ、北西－南東方向3.03ｍ、検出面からの深さは約0.37ｍを測る。竪穴住居の北東－南西方向は削平されている傾斜を復元するとちょうど復元傾斜面の等高線に概ね併行しており、他の竪穴住居跡と同様に地形に制約されたように(合わせるように)造られていることが解る。北西－南東方向の主軸は真北より21.5°西を取る。

竪穴住居内部は北側の一辺ほぼ中央部で約１ｍの長さで、幅約20㎝、床面からの深さ約５㎝の壁溝を、ほぼ中央部西よりには不定形の中央土坑を、西側・東側辺のほぼ中央部に２基の主柱穴を検出した。また、竪穴住居内の床面は東側の辺に沿って幅0.7～0.8ｍ、深さ約0.08ｍの一段低くなった部分を検出している。

中央土坑跡は一段高い部分のほぼ中央部で検出した。平面形態は不定形を呈し、長軸1.30m、短軸1.13m、検出面からの深さ0.16mを測る。平面で明確には検出していないが、土層断面より中央土坑東側に幅約25cm程度（高まりの下部で計測）、高さ約６cmの土手状の高まりが認められる。中央土坑内の最深部は中央土坑の西側よりにあり、幅約25cm、深さ８cmの溝状を呈している。中央土坑内部及び周囲には直径10～15cm、床面からの深さ７～14cmの柱穴を４基検出しており、その内のひとつの柱穴は中央土坑内に延びる突堤状部分に位置し、この柱穴を避けるように中央土坑が掘削されているように見える。中央土坑の堆積土は炭化物・焼土を含む濁灰黄色砂混じり粘質土の単層である。堆積土内からはほとんど土器は出土しておらず、サヌカイトが少量出土するのみである。堆積土上面でサヌカイト製品・被熱が認められる花崗岩が出土している。

主柱穴は２基で、平面形態がほぼ円形を呈し、西側の柱穴が直径約34cm、深さ約20cm、東側の柱穴が直径約45cm、深さ約30cmを測る。東側柱穴内から甕（761）が出土している。柱痕が確認されていなため正確ではないが、柱穴心々間は約2.5mを測る。

竪穴住居北東隅の床面直上より若干浮いた位置で、体部上半から口縁部にかけての製塩土器が口縁部を下位にした状態で出土しており、南東隅では一段低い部分のほぼ地山直上より台付鉢・大型の鉢が、南西隅では地山直上より被熱が認められる安山岩が出土している。

床面直上から出土した安山岩に人為的な加工痕は無いが、床面に安定するように置かれていた状況から、作業台的な用途で使用されていたものと考えられる。

竪穴住居出土遺物を上層（土層第１・２層）から出土した遺物と下層及び床面直上、柱穴から出土した遺物に分けて掲載した。

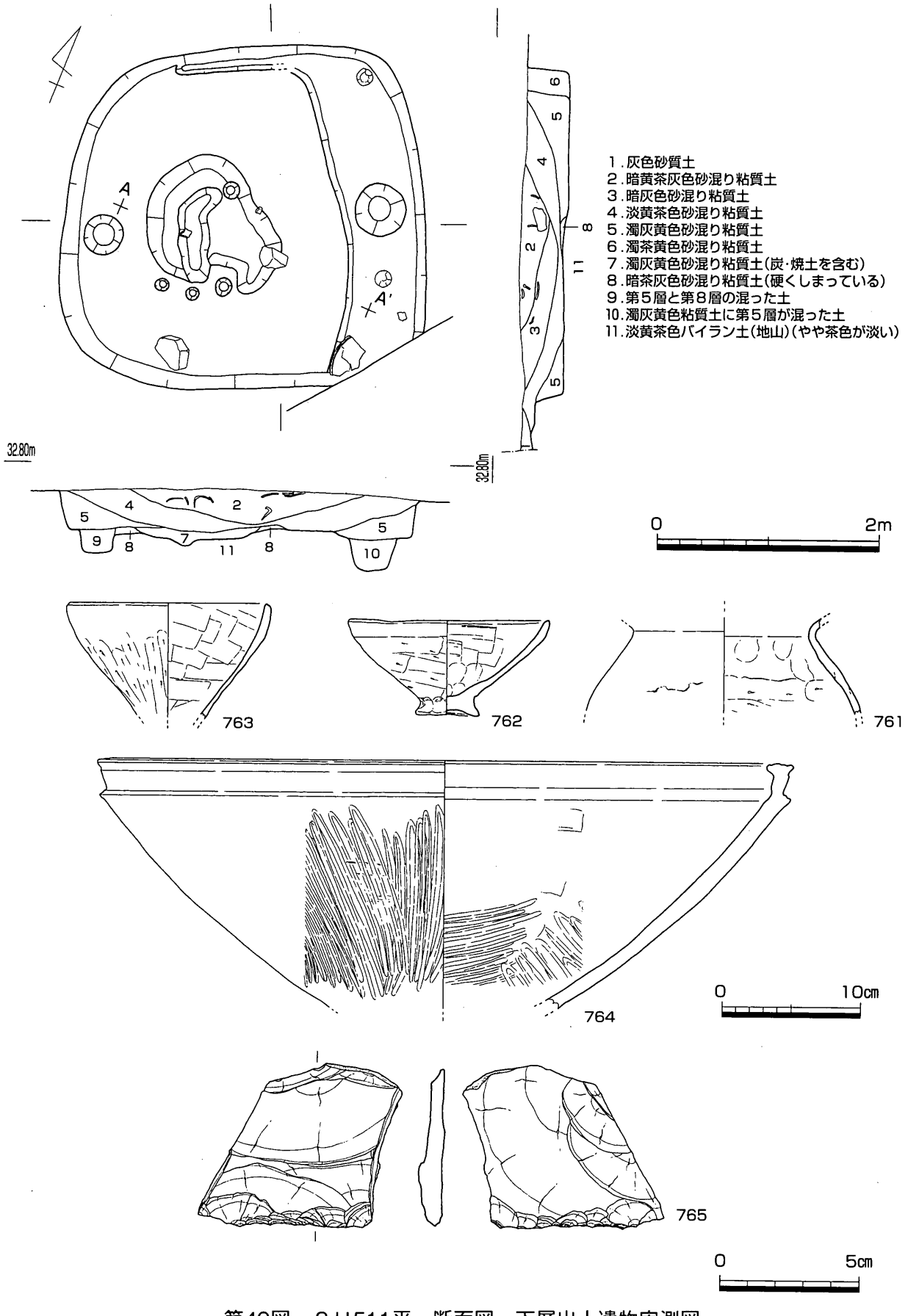
上層から出土した遺物は壺・甕・高坏・製塩土器・鉢・サヌカイトで、下層等から出土した遺物は甕・鉢・製塩土器・サヌカイトである。図化遺物には弥生時代中期の遺物を若干含む。

前述したように上層は竪穴住居埋没過程のなかで、ほぼ中央部分に窪みができ、そこに多量の土器が廃棄されたような状態で検出した。

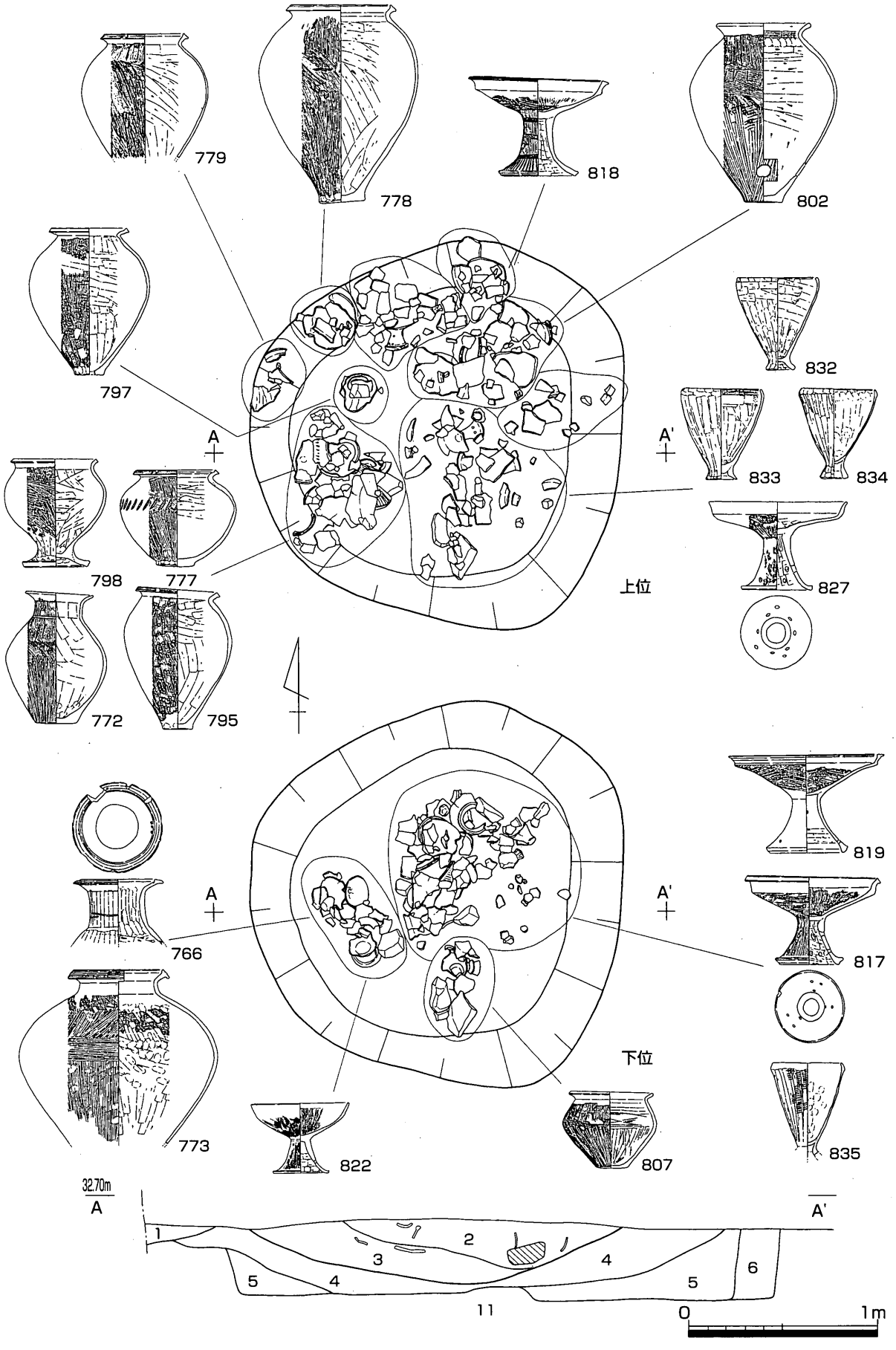
この窪みの平面形態はほぼ円形を呈し、規模は直径約2.0m、検出面からの深さは約0.40mを測る。断面形状は緩やかな擂鉢状を呈する。堆積土は上下２層あり、上層が暗黄茶灰色砂混じり粘質土（第２層）で、下層が暗灰色砂混じり粘質土（第３層）である。この窪みの堆積土は第２層が主体を占め、この層から多量の土器が出土している。また土器と共に被熱が認められる10×20cmの砂岩・花崗岩が数点出土し、土器の中にも被熱が認められる土器片が確認できる。

壺は直口壺と広口壺がある。直口壺は頸部が直線的に上方に延び、口縁部を緩やかに外反させる。広口壺は頸部から口縁部にかけて朝顔形に開くものと、短い頸部から口縁部が外反するものがある。直口壺・広口壺ともに口縁端部は斜めに面を持ち、拡張するもの、そのまま終わらせるものがある。調整は頸部外面に凹線・沈線を持つものがあり、沈線の条数は１～２条と少ない。体部外面の調整は中央から下半がヘラミガキ、上半はハケ目が施されている。

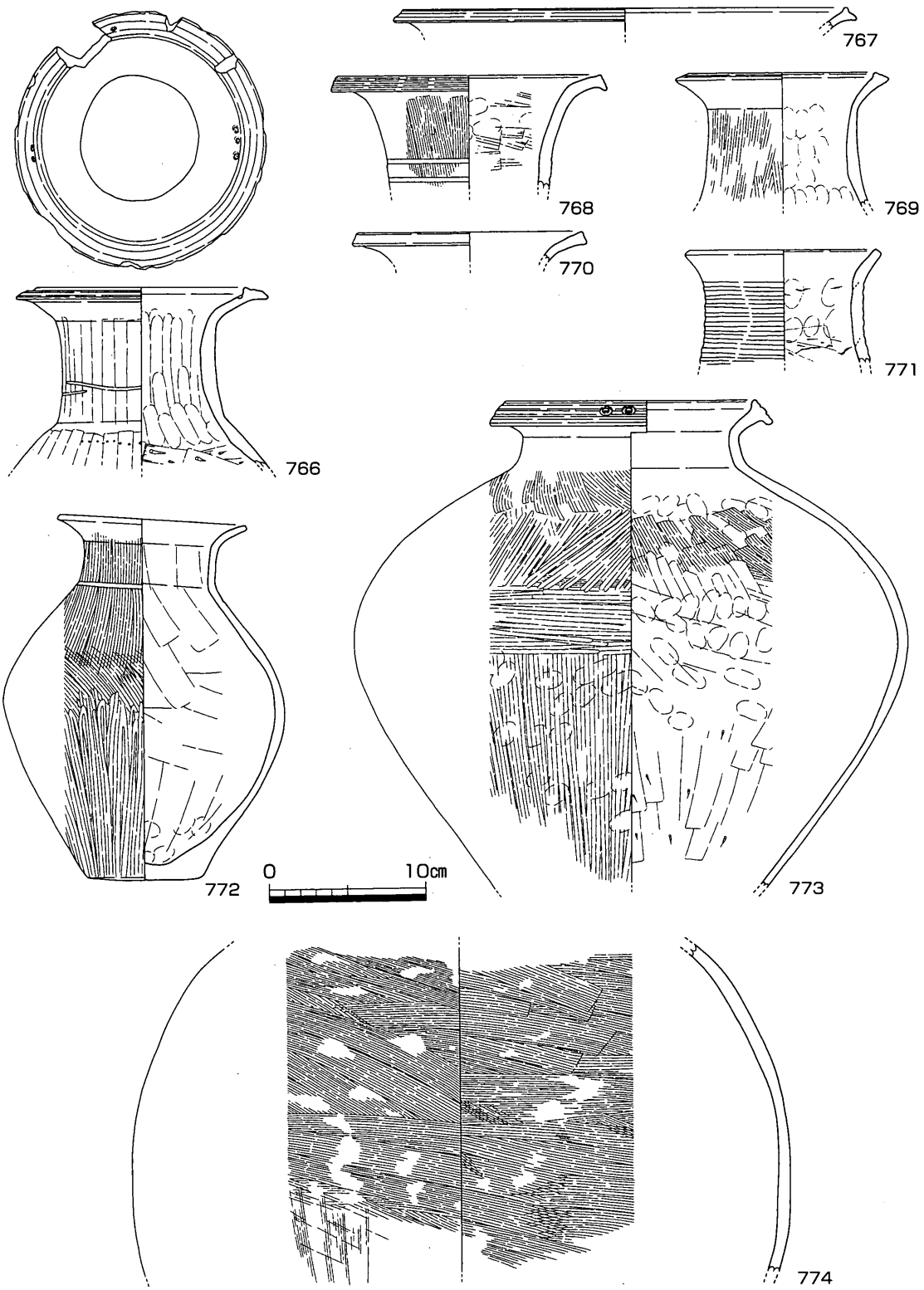
甕は頸部を外方に屈曲させるが、頸部内外面に明瞭な稜を持つものは少ない。口縁端部は斜めに面を持ち、上下に拡張するもの、下方のみに拡張するもの、上下に少し摘み出すもの、そのまま終わらせるものなどのバリエーションがある。口縁端部を拡張させるものは外面に退化した凹線が２～３条施されている。体部外面の調整はハケ目を主としており、下半、最大径部分、上半の３つに分けられ、下半から最大径部分、上半への順番で施されている。少量体部外面下半のみにヘラミガ



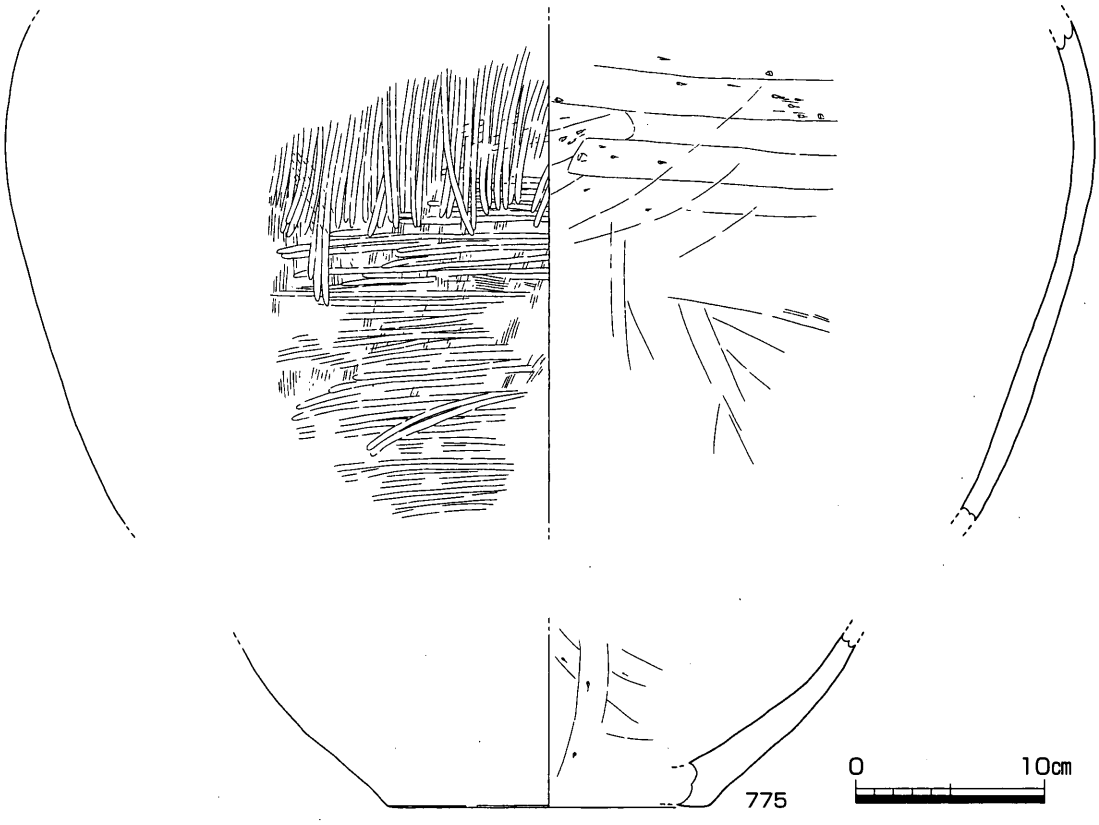

第49図　ＳＨ511平・断面図、下層出土遺物実測図




第50図　ＳＨ511上層平・断面図、遺物出土状況図




第51図　ＳＨ511上層出土遺物実測図①




第52図　ＳＨ511上層出土遺物実測図②

キを施す甕が認められる。体部外面の最大径部分に櫛先による刺突文が施されている甕が少量出土しており、全て口縁端部の拡張が上下に認められ、凹線の残りも良好である。体部内面にはヘラケズリが施されており、そのほとんどが頸部屈曲部内面の稜部分から若干下位部分でおさまるために、頸部屈曲部内面に明瞭な稜を持たない。底部は平底で、体部外面最下部に指頭痕を施すことにより、底部を明瞭にしている。

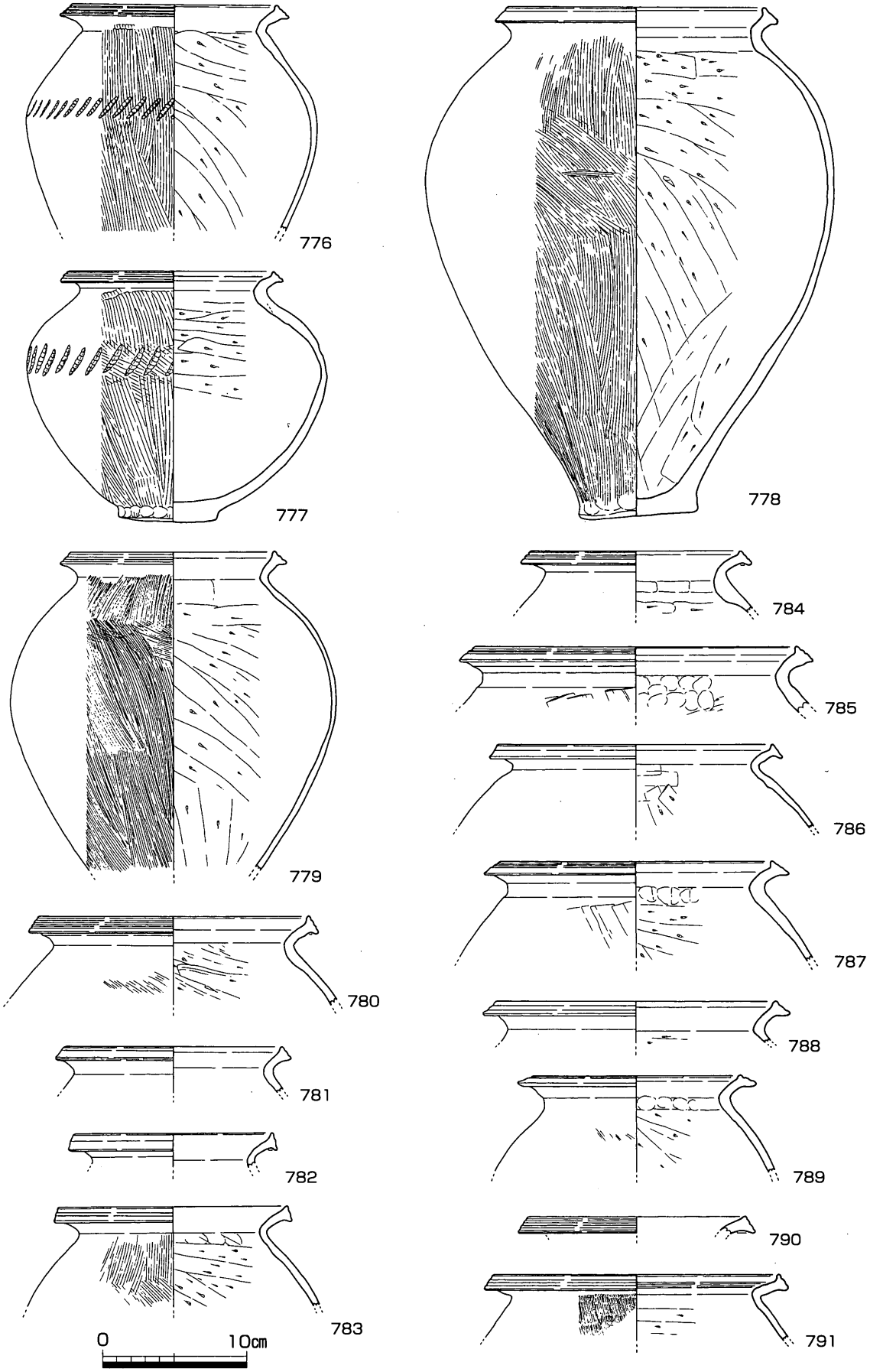
高坏は坏部・口縁部の形状にかなりのバリエーションが認められる。坏部の形状を大別すると坏部が丸椀状を呈するもの、口縁部を外上方に屈曲させるものに分けられる。更に口縁部が屈曲するものは口縁端部を拡張させるもの、そのまま終わらせるもの、若干摘み出すものなどがある。脚部の穿孔はほとんどのものがあり、規則性を持つものが少ない。坏部内外面の調整は口縁部を拡張するものは主としてヘラミガキが、拡張しないものは主としてハケ目が施されている。818は脚部外面に縦方向のヘラミガキの後、等間隔で櫛描文が施され、最下部には縦方向にヘラ先による沈線が施される。脚部外面の調整が多様なものには穿孔が認められない。

鉢は少量出土し、大型のものと小型のもの、台付鉢もある。

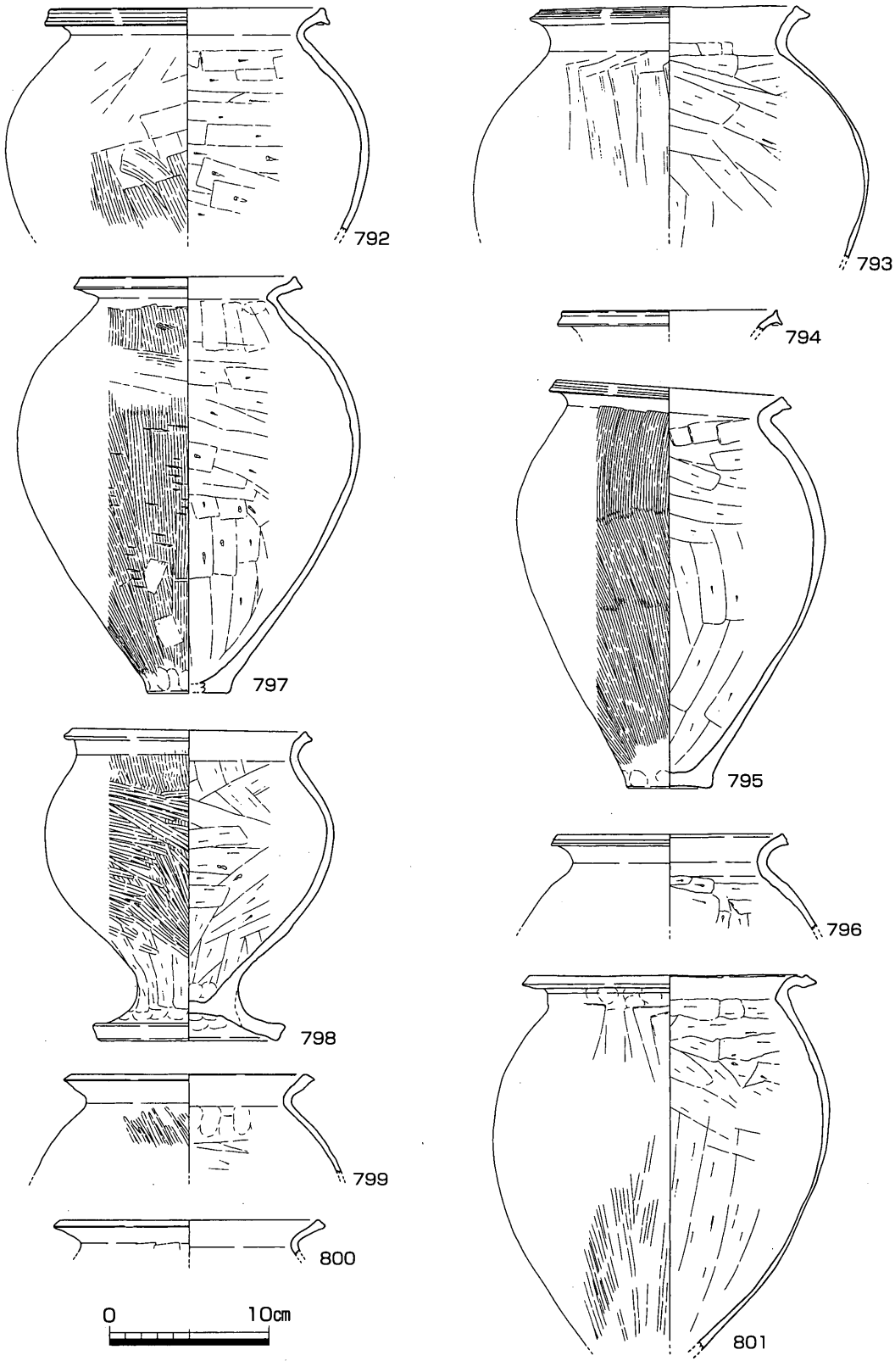
製塩土器は脚部が厚く、外方に開き、脚部高が1.5～2.5cmと高い。体部は直線的に外上方に延び、口縁部を内方に屈曲させる。脚部外面から体部外面にかけて縦方向のヘラケズリが口縁端部の屈曲部まで施されている。内面は主として板ナデが施されている。特に834・835は体部器壁の厚さが２㎜と薄く作られている。

細頸壺・器台は出土していない。

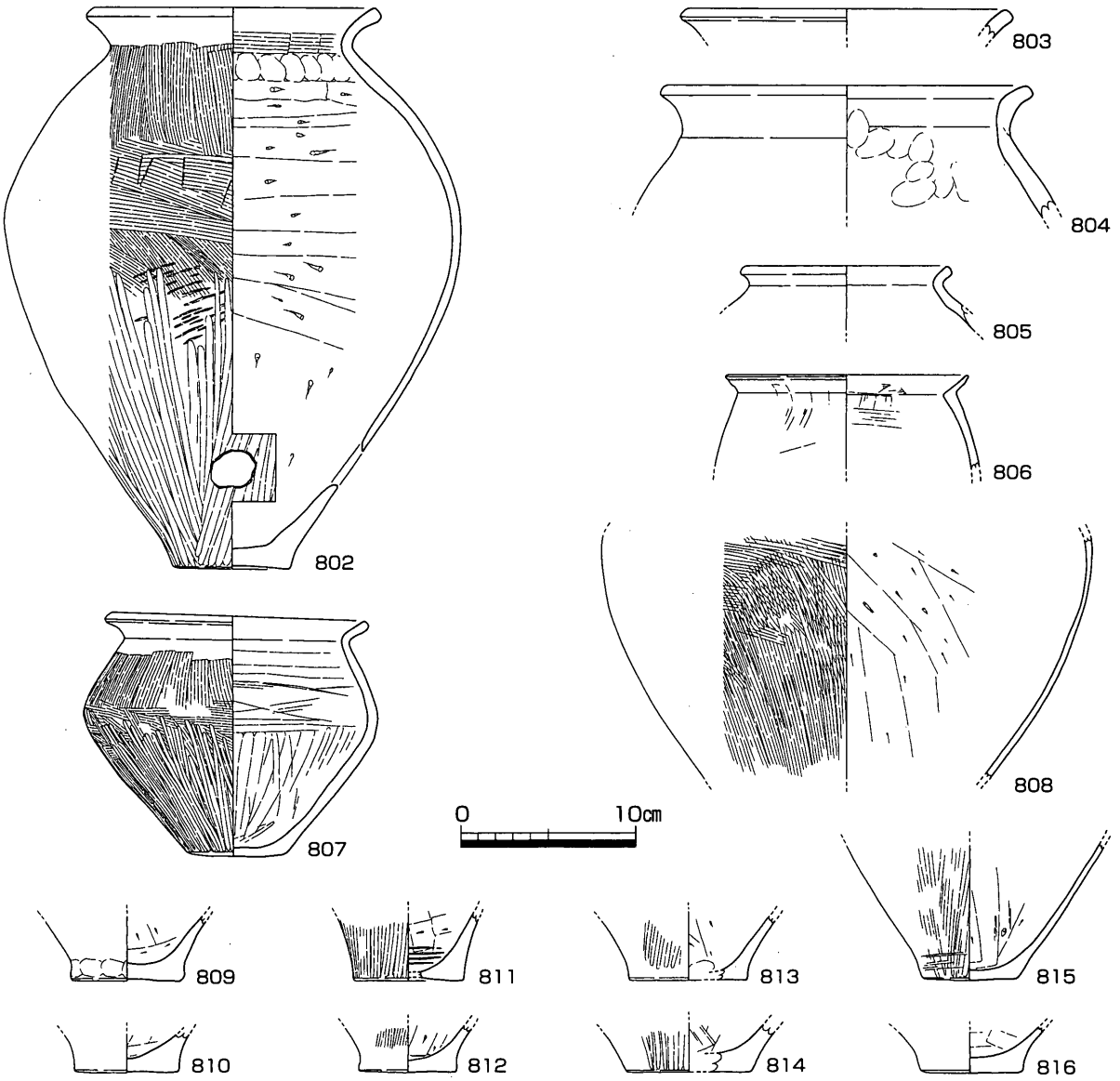
サヌカイトは剥片を含めても２点と少量である。




第53図　ＳＨ511上層出土遺物実測図③




第54図　ＳＨ511上層出土遺物実測図④




第55図　ＳＨ511上層出土遺物実測図⑤

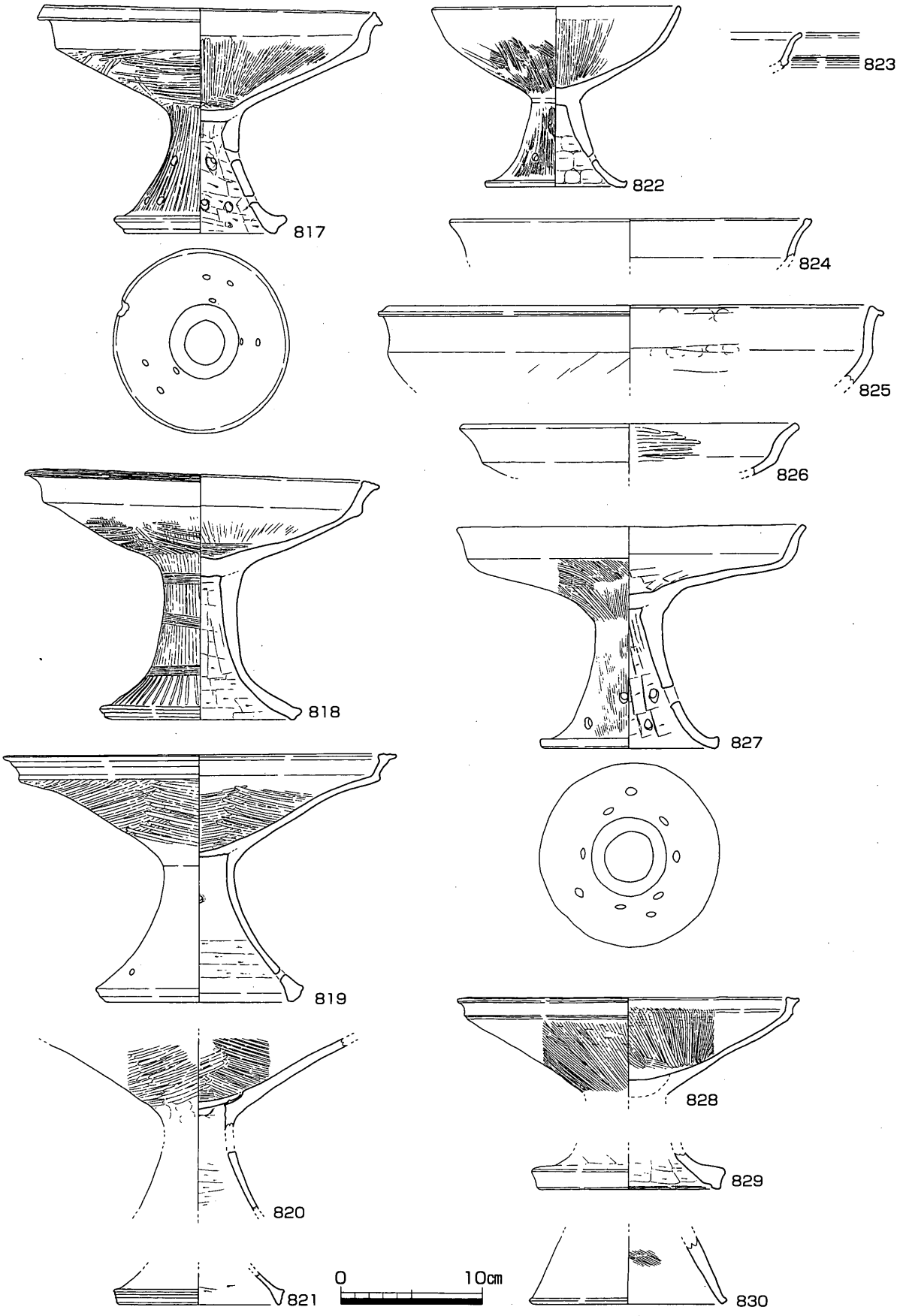
胎土に角閃石を含む土器は高坏のみと器種的には少なく、主としては上天神遺跡出土土器分類高坏Ａ１に限定される。角閃石を含む高坏以外は石英・長石などの砂粒を多量に含むという特徴があり、在地産の土器であることが解る。

竪穴住居下層及び床面直上、柱穴から出土した遺物は少量で、甕・製塩土器・台付鉢・大型鉢・サヌカイトである。

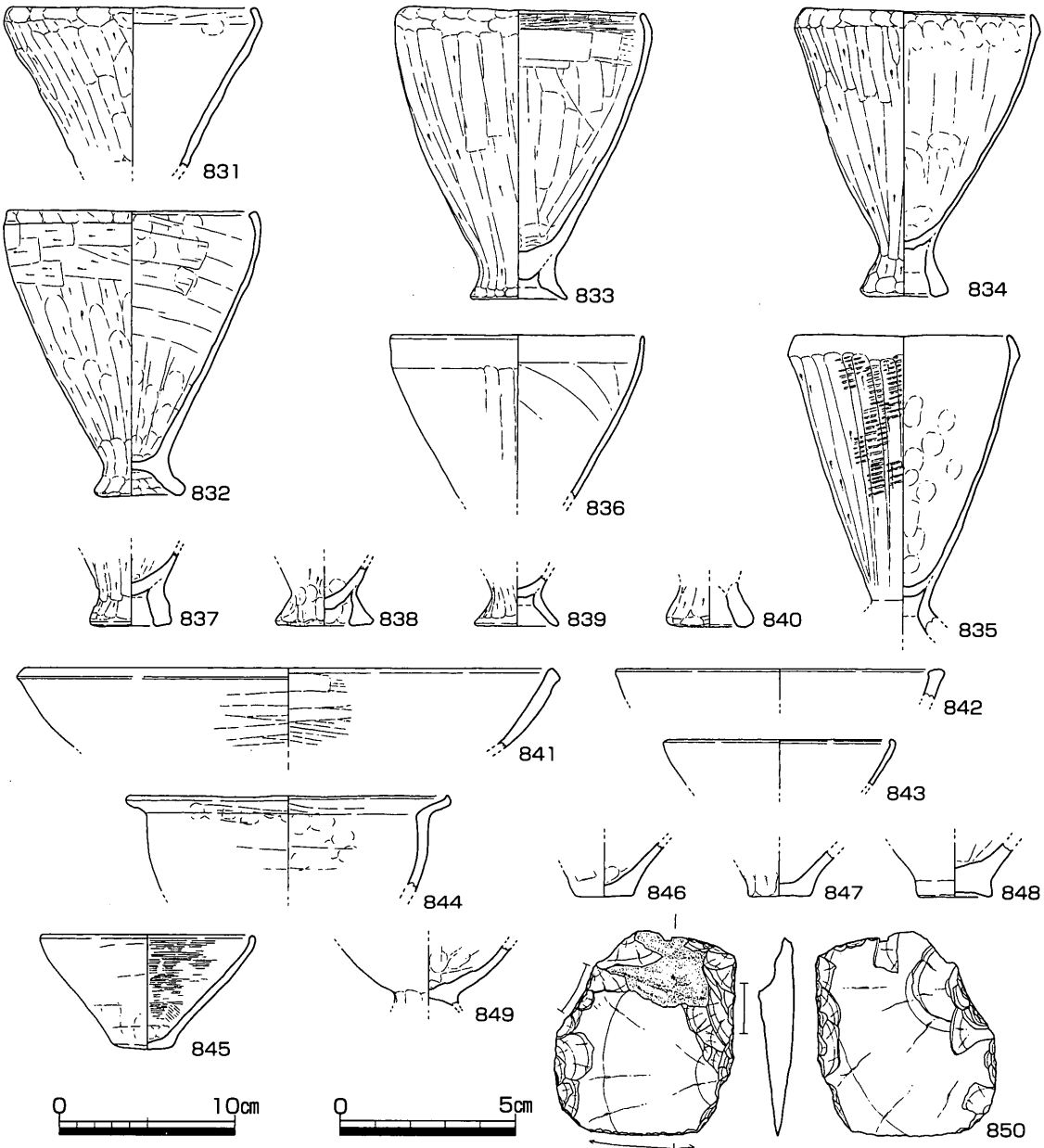
製塩土器は体部が直線的に外上方に延び、口縁部は緩やかに内湾する。体部外面には縦方向のヘラケズリが、内面は板ナデが施される。上層に比べると口縁部の屈曲度合い、体部外面のヘラケズリの範囲、器高等に若干の差が認められる。

サヌカイトは剥片も含めると６点出土している。

時期は弥生時代後期前葉である。




第56図　ＳＨ511上層出土遺物実測図⑥



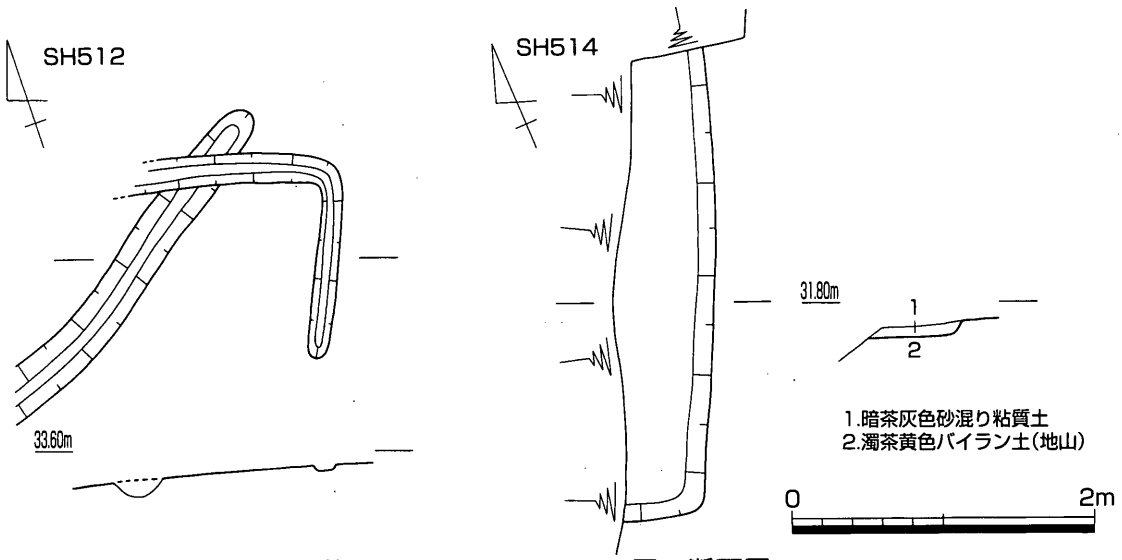

第57図　ＳＨ511上層出土遺物実測図⑦

ＳＨ512

ＳＨ512は第Ⅱ調査区（Ｈ－11）東部、東南東方向から西北西方向に約3.0ｍで、約0.32ｍの比高差を持つ傾斜地の標高33.52ｍで検出した竪穴住居跡である。竪穴住居内壁溝の堆積土は単層で、暗灰色砂混じり粘質土が堆積している。竪穴住居跡は北西のコーナー部の壁溝を検出したのみで、全様は不明であるが、コーナー部が直角に周ることから平面形態は方形を呈するものと考えられる。規模は不明で、検出長は東西方向で1.40ｍ、南北方向で1.25ｍを測る。壁溝は幅15～20㎝、検出面からの深さは約0.08ｍを測る。竪穴住居の南北方向はちょうど検出傾斜面の等高線と概ね併行しており、他の竪穴住居跡と同様に地形に制約されたように（合わせるように）造られていることが解る。南北方向の主軸は真北より24.0°東を取る。

竪穴住居壁溝から遺物は出土していない。

遺物が出土していないため時期は不明である。




第58図　ＳＨ512・514平・断面図

ＳＨ513

ＳＨ513は第Ⅱ調査区（Ｈ－12）東部、南東方向から北西方向に約4.0ｍで、約0.29ｍの比高差を持つ傾斜地の標高32.43ｍで検出した竪穴住居跡である。竪穴住居の堆積土は壁溝に堆積する暗茶灰色粘質土（第２層）を含む２層で、第１層の暗茶灰色砂混じり粘質土が全面に堆積している。平面形態は南辺が僅かに調査区外になるものの隅丸の方形を呈する。規模は南北方向約2.82ｍ、東西方向約2.81ｍ、検出面からの深さは最深部で約0.17ｍを測る。竪穴住居の南北方向はちょうど検出傾斜面の等高線に斜行しており、現地形を無視したように造られていることが解る。南北方向の主軸はほぼ真北で、1.0°東を取る。竪穴住居内部は北西部を中心に北辺と西辺部に幅18～23㎝、床面からの深さ４～７㎝の壁溝を、床面ではほぼ中央に土坑を、北側を中心に柱穴を検出し、南側ではほぼ中央で西側が低い段差がついており、ベッド状遺構となる部分を検出した。

明確な主柱穴は確認していないが、北側を中心に検出した８基の柱穴が主柱穴になる可能性がある。柱穴は直径20～40㎝、深さ10～18㎝で、平面形態が円形を呈する。中には底部に根石を持つものもある。

ほぼ中央で検出した中央土坑は東西に長い楕円形を呈し、東西（長軸）約71㎝、南北（短軸）約46㎝、深さ９～14㎝を測る。

南側で検出したベッド状遺構は東部分にあり、約10㎝の段差は中央土坑手前まで確認した。このベッド状遺構が北側に延びるかは不明であるが、北側床面は緩やかに西に傾斜し、東西それぞれにおいて南北の床面レベルが同じであることから、北側まで延びていた可能性がある。

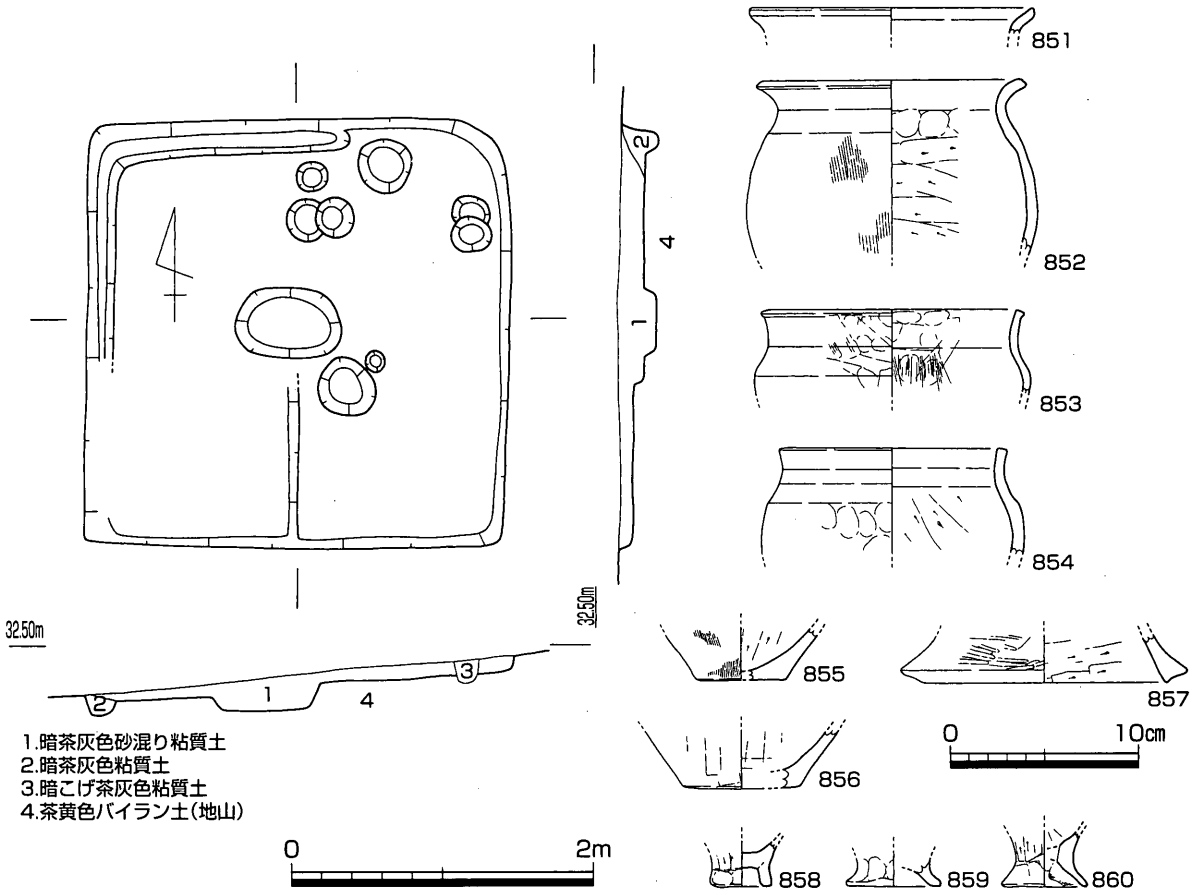
竪穴住居内の床面直上からは遺物が出土しておらず、堆積土中から甕・高坏・製塩土器が出土している。

甕は体部破片のみで、外面に粗いハケ目（６本／㎝）、内面にヘラ削りが施されている。

高坏は脚部のみで、外面にヘラミガキが、内面にヘラケズリが施されている。

製塩土器は脚部のみで、外方に開くものとほぼ直立するものがある。脚部高は1.0～1.5㎝、体部外面にはヘラケズリが施されている。

胎土に角閃石を含む土器は製塩土器のみで、出土製塩土器全てに角閃石を含んでいる。




第59図　ＳＨ513平・断面図、出土遺物実測図

時期は弥生時代後期中葉である。

### ＳＨ514

ＳＨ514は第Ⅱ調査区（Ｈ－12）東部、南東方向から北西方向に約3.5ｍで、約0.32ｍの比高差を持つ傾斜地の標高31.67ｍで検出した竪穴住居跡である。竪穴住居内の堆積土は単層で、暗茶灰色砂混じり粘質土が堆積している。北西部の２／３程度が後世の地下げを受けているために詳細な平面形態は不明であるが、南東隅の形状から、方形を呈するものと考えられる。規模は南北方向の現存長が約3.0ｍ、東西方向の現存長が0.55ｍ、検出面からの深さは約0.10ｍを測る。竪穴住居の南北方向は概ね検出傾斜面の等高線と併行しており、地形に制約されたように（合わせるように）造られていることが解る。南北方向の主軸は真北より約24.0°東を取る。

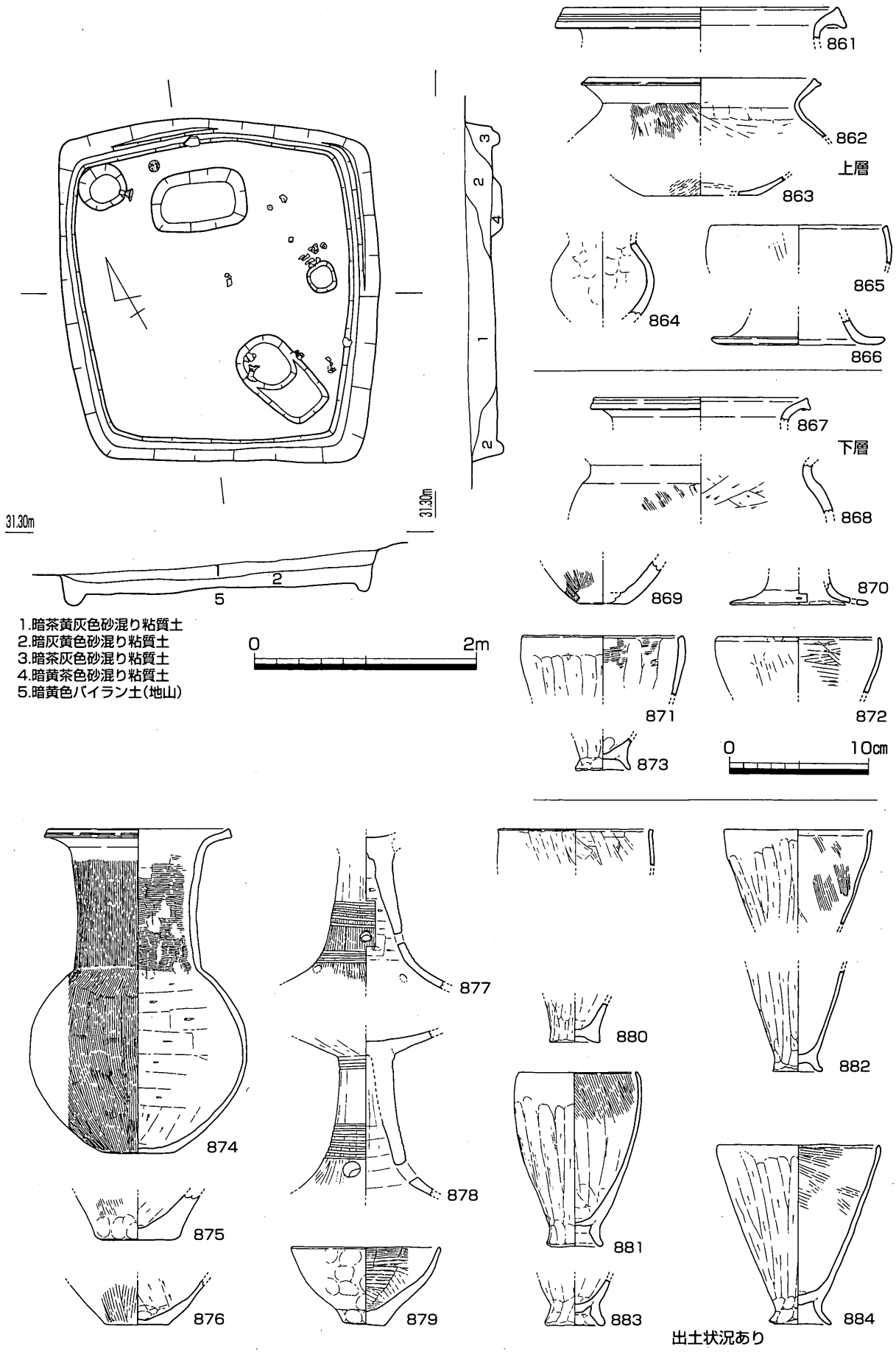
竪穴住居内部で中央土坑、壁溝等は検出していない。

竪穴住居内からは弥生土器の小破片１点しか出土していない。

遺物がほとんど出土していないため時期は不明である。

### ＳＨ515

ＳＨ515は第Ⅱ調査区（Ｈ－12）東部、東南東方向から北北西方向に約4.0ｍで、約0.25ｍの比高差を持つ傾斜地の標高31.25ｍで検出した小型の竪穴住居跡である。竪穴住居内の堆積土は３層で、暗茶黄灰色・暗灰黄色砂混じり粘質土が概ねレンズ状になる部分と水平堆積する部分とが確認でき



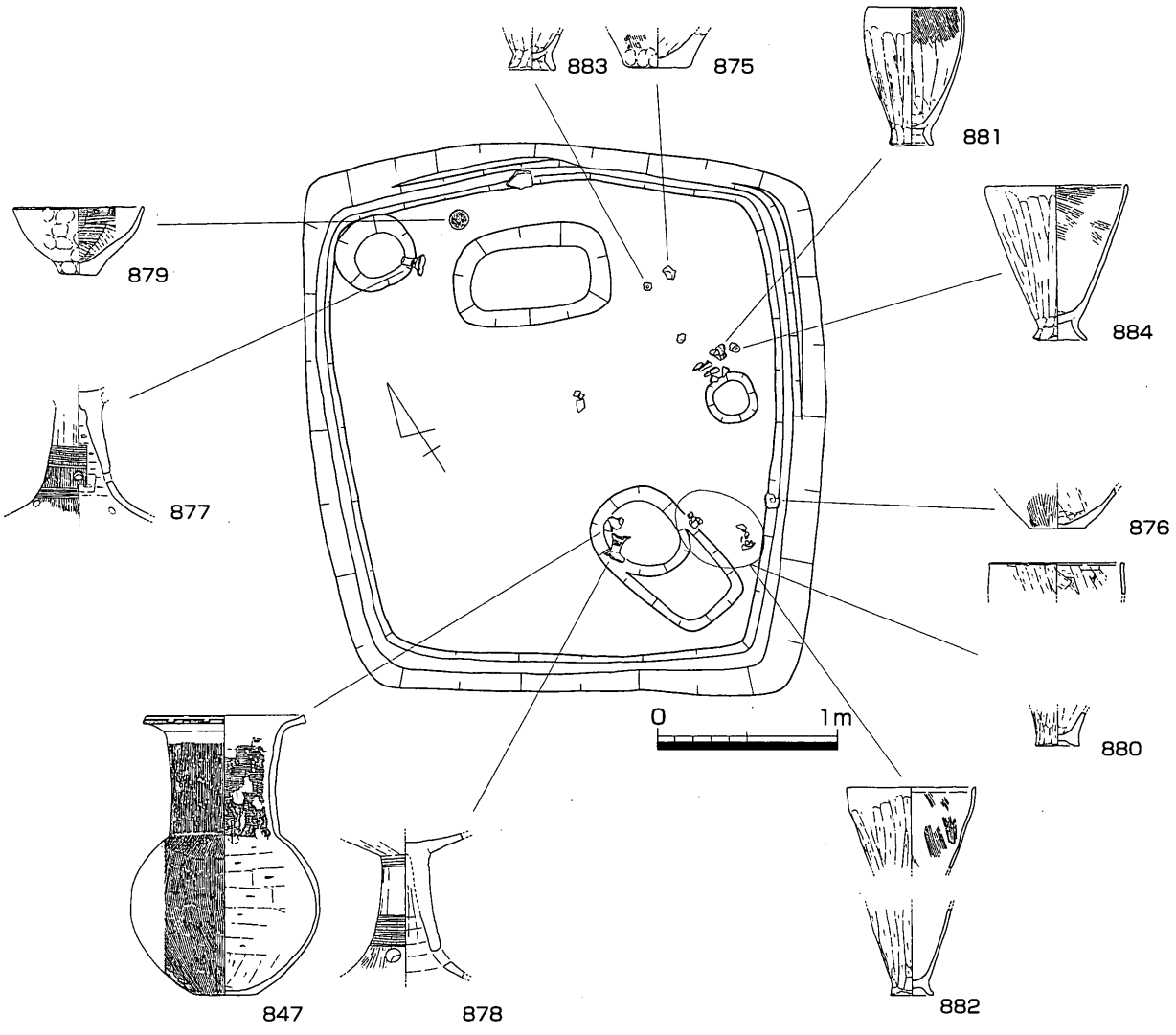

第60図　ＳＨ515平・断面図、出土遺物実測図

る。壁溝にも暗灰黄色砂混じり粘質土が堆積していることから、短時間に埋没したことが解る竪穴住居跡である。竪穴住居跡の平面形態は北東－南西方向（長軸）がやや長い長方形を呈する。規模は北東－南西方向（長軸）約3.00m、北西－南東方向（短軸）約2.35m、高所部分での検出面からの深さは約0.30mを測る。竪穴住居の南北方向（長軸）はちょうど検出傾斜面の等高線と併行しており、地形に制約されたように（合わせるように）造られていることが解る。北東－南西方向（長軸）の主軸は真北より32.0° 東を取る。竪穴住居内部は周囲に幅13～29cm、床面からの深さ３～６cmの壁溝を、床面では柱穴跡２基、土坑跡２基を検出した。

主柱穴と考えられる柱穴は南東辺際に１基しか確認していないが、おそらく北西辺にもう１基あったものと考えられる。平面形態は円形を呈し、直径約27cm、深さ約14cmを測る。

明確な中央土坑はなく、北東辺際に平面形態が長方形を呈する土坑を検出している。規模は長軸87cm、短軸54cm、深さ14cmを測る。また北側コーナー部に円形の柱穴を、南側コーナー部に平面形態が長方形を呈する土坑を検出している。長方形の土坑の規模は長軸88cm、短軸50cm、深さ４cm、最深部で８cmを測る。

竪穴住居内の床面直上からは東半分で壺・甕・高坏・鉢・製塩土器が出土している。これらの内




第61図　ＳＨ515遺物出土状況図

北東辺際で検出した土坑の北側の床面直上で完形の鉢（879）が出土しており、これ以外のものは全て破片であった。

鉢は平底の小さい底部を下にし、正位置の状態で出土している。また製塩土器はほぼ完形になるもの２点（881・884）が出土している。

この竪穴住居に伴う遺物は壺・甕・高坏・鉢・製塩土器が出土している。

壺の底部は平底で、頸部が直線的に上方に延び、口縁部が水平方向に緩やかに屈曲する。体部内外面にハケ目（８本／cm）が施されている。

甕は頸部から屈曲し、口縁部が直線的に外上方に延びるものと外反しながら延びるものがある。口縁端部は僅かに下方のみに拡張するもので、外面の凹線は認められない。体部外面にはハケ目、内面にはヘラケズリが施されている。

製塩土器は脚高が１～1.5cmと低く、外面には顕著に指頭痕が認められる。体部外面は縦方向のヘラ削りが口縁端部から１～２cm程度間隔をあけた範囲まで施されている。内面には斜め方向のハケ目が施されている。

高坏は脚柱部が細く絞まり、端部はスカート状に広がり、規則的な穿孔が認められる。脚部外面にはハケ目の後３～７条の沈線が施されている。

胎土に角閃石を含む土器は製塩土器のみと器種的には少なく、製塩土器中15.2％とかなり高い割合となっている。

時期は弥生時代後期前半である。

### ＳＨ516

ＳＨ516は第Ⅱ調査区（Ｈ－12・13）東部、東南東方向から西北西方向に約2.5ｍで、約0.20ｍの比高差を持つ傾斜地の標高30.92ｍで検出した竪穴住居跡である。竪穴住居内の堆積土は単層で、暗灰色砂混じり粘質土が堆積している。竪穴住居跡は南東のコーナー部の壁溝を検出したのみで、全様は不明であるが、コーナー部が直角に周ることから平面形態は方形を呈するものと考えられる。規模は不明で、検出長は東西方向で0.70ｍ、南北方向で1.60ｍを測る。壁溝は幅12～16cm、検出面からの深さは約0.04ｍを測る。

竪穴住居の東西方向はちょうど検出傾斜面の等高線と概ね併行しており、他の竪穴住居跡と同様に地形に制約されたように（合わせるように）造られていることが解る。南北方向（短軸）の主軸は真北より22.0°西を取る。

竪穴住居内堆積土から壺・甕・高坏片が出土している（第43図）。

壺は頸部が朝顔形に広がるもので、口縁端部を上下に拡張し、３条の退化した凹線が施されている。甕は口縁端部を下方に拡張したもので、２条の退化凹線が施されている。体部外面にはハケ目が、内面には頸部屈曲部下に指ナデが、下半に横方向のヘラケズリが施されている。

胎土に角閃石を含むものは確認されていない。

時期は出土遺物が少量であるために詳細は不明であるが、壺・甕から弥生時代後期初頭と考えられる。

## ＳＨ517

ＳＨ517は第Ⅱ調査区（Ｈ－13）東部、東南東方向から西北西方向に約2.5ｍで、約0.19ｍの比高差を持つ傾斜地の標高30.66ｍで検出した竪穴住居跡である。竪穴住居内の堆積土は単層で、暗灰色砂混じり粘質土が堆積している。竪穴住居跡は南半部の壁溝を検出したのみで、全様は不明であるが、壁溝がやや開きながら「コ」の字に周ることから平面形態は多角形を呈するものと考えられる。規模は不明で、検出長は東辺約2.3ｍ、南辺約2.9ｍ、西辺で約0.7ｍを測る。壁溝は幅12～16㎝、検出面からの深さは約0.05ｍを測る。

竪穴住居の南辺はちょうど検出傾斜面の等高線と概ね併行しており、他の竪穴住居跡と同様に地形に制約されたように（合わせるように）造られていることが解る。東辺の主軸は真北より22.0°西を取る。

この竪穴住居に伴う遺物は壺・甕・高坏・製塩土器・細頸壺が出土している（第43図）。

壺は頸部が短く、内面に稜を持ち、屈曲させるものと頸部が長く、外方に屈曲するもの、緩やかに広がり、口縁端部をそのまま終わらせるものがある。口縁端部の拡張はほとんどなく、外面に凹線は認められない。

甕は頸部内外面に稜を持つものと明瞭な稜を持たず、外方に屈曲するものがある。口縁端部は上下に僅かに拡張させ、かすかな凹線が認められる。体部外面には粗いハケ目（５本／㎝）が、内面にはヘラケズリが施されている。

その他には体部内面下位に縦方向のヘラケズリが、上位に横方向のヘラケズリが施されるものと全面指ナデが施されるものがある。外面は縦方向・やや斜め方向の粗いハケ目（５本／㎝）が施されている。底部は平底を呈する。

高坏は口縁端部を外側に拡張させるものとそのまま丸く終わるものが認められる。

製塩土器の体部外面は縦方向のヘラ削りが施されている。

甕・高坏（898・899・900）・製塩土器の胎土に角閃石を含むものがある。

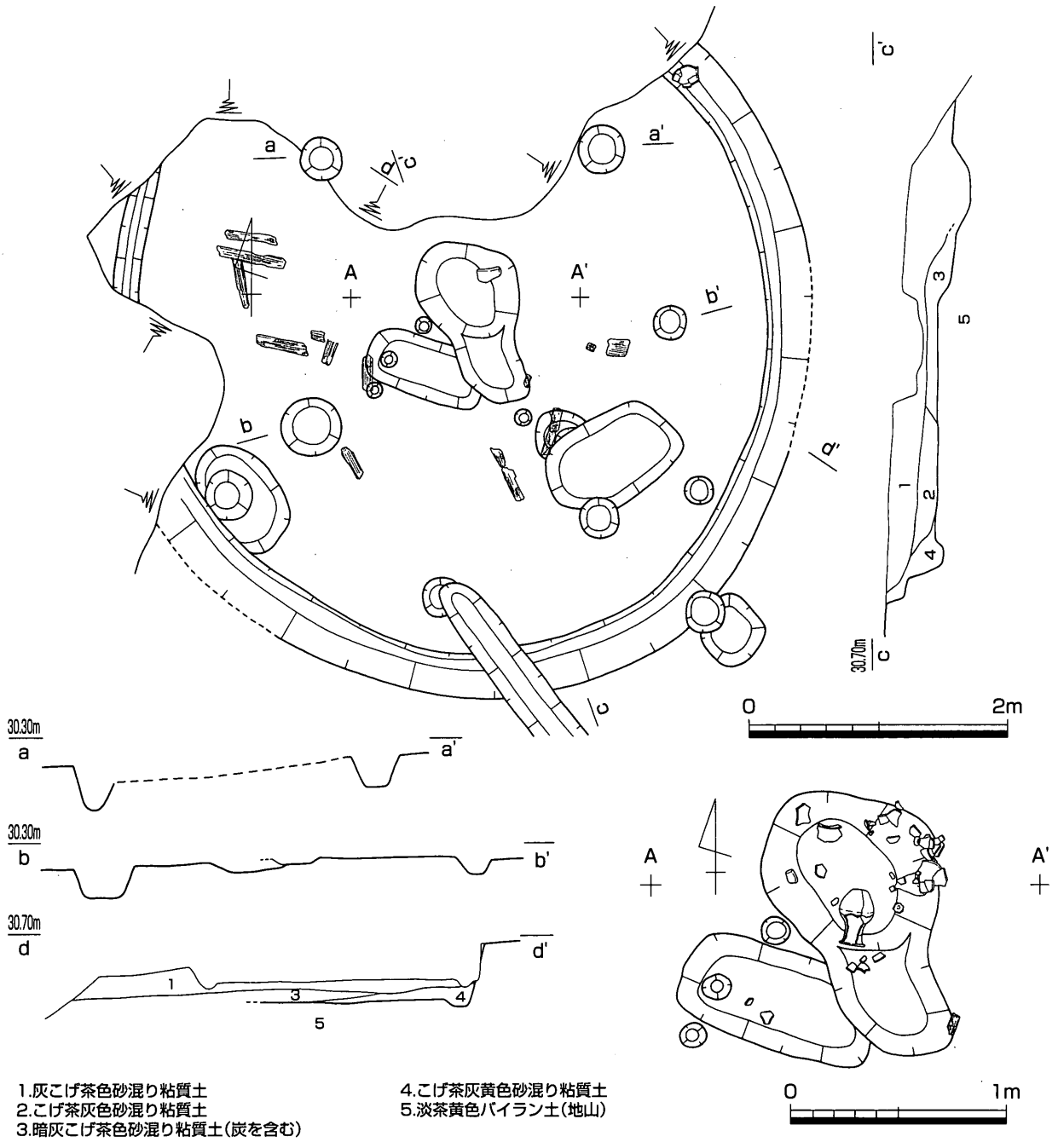
時期は弥生時代後期前半である。

## ＳＨ518

ＳＨ518は第Ⅱ調査区（Ｈ－13）東部、東南東方向から西北西方向に約3.0ｍで、約0.26ｍの比高差を持つ傾斜地の標高30.64ｍで検出した竪穴住居跡である。竪穴住居内の堆積土は４層で、第１層灰こげ茶色砂混じり粘質土がほぼ水平に堆積し、第２層こげ茶灰色砂混じり粘質土、第３層暗灰こげ茶色砂混じり粘質土は部分的に窪みを持ちながら堆積する。第３層は床面直上に堆積した土層で、下位より炭化木材を検出している。竪穴住居跡は竪穴住居跡ＳＨ519、溝状遺構ＳＤ539によって切られ、北側は後世の地下げにより削平されているものの、平面形態は円形を呈することが解る。規模は直径約5.45ｍ、検出面からの深さは約0.45ｍを測る。

竪穴住居内部は周囲に幅0.33～0.38ｍ、床面からの深さ約４㎝の壁溝を、ほぼ中央部には長方形と円形の中央土坑を、その中央土坑を囲むように４基の主柱穴を検出した。

中央土坑は２基で構成されており、南側にある１基は平面形態が隅丸の長方形を呈し、長軸約0.95ｍ、短軸約0.45ｍ、検出面からの深さ約0.17ｍを測る。堆積土は暗灰こげ茶色砂混じり粘質土で、炭化物を含む。北側にある１基は中心となる部分の平面形態が歪な円形を呈し、南側が浅く南




第62図　ＳＨ518平・断面図、炉遺物出土状況図

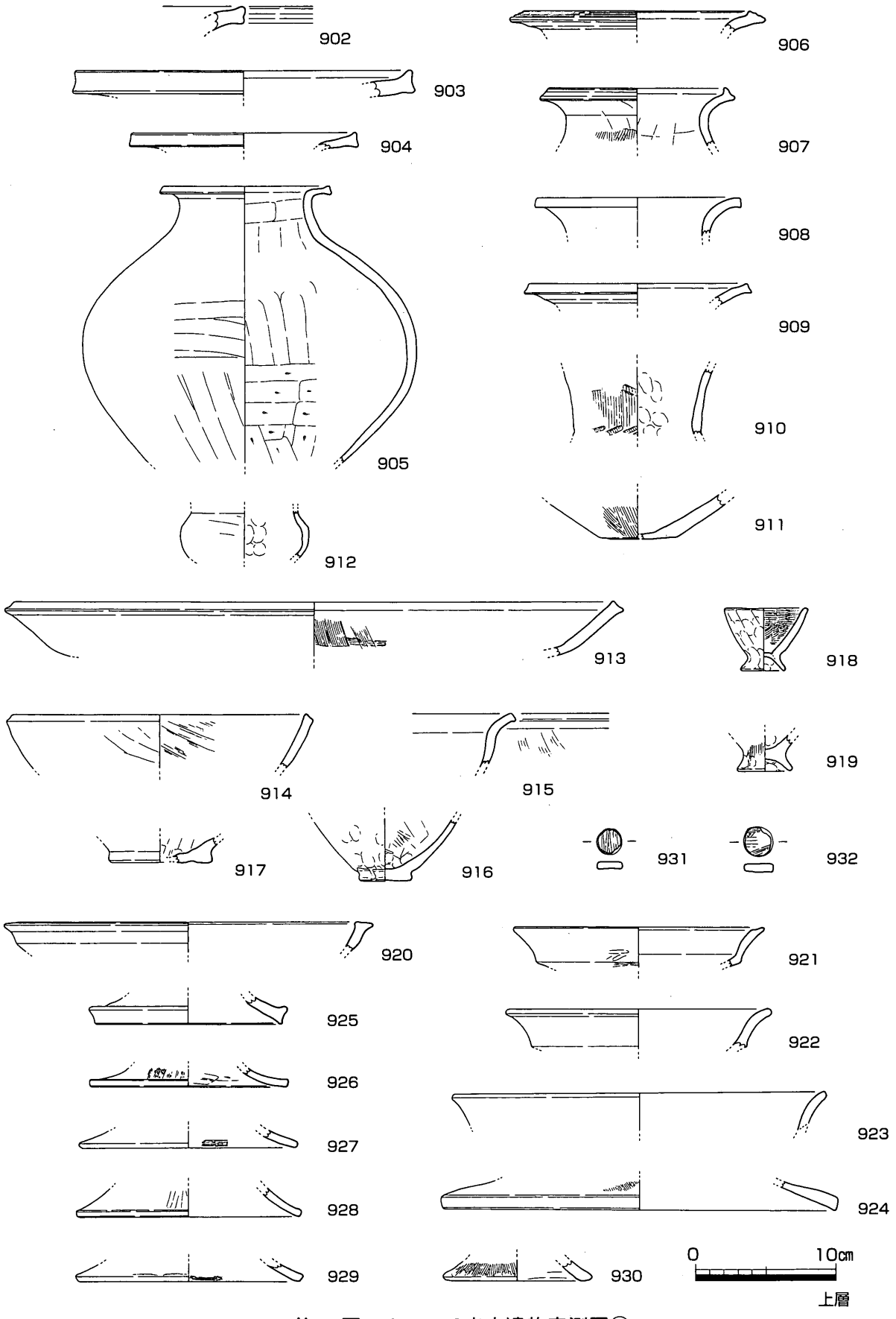
方向に延びる。規模は直径0.74～0.83m、検出面からの深さ約0.35ｍを測り、南側に延びる部分は深さ約0.05ｍを測る。堆積土は灰こげ茶色砂混じり粘質土で、炭化物を少量含む。

円形の中央土坑内から壺・甕・製塩土器などが出土している。

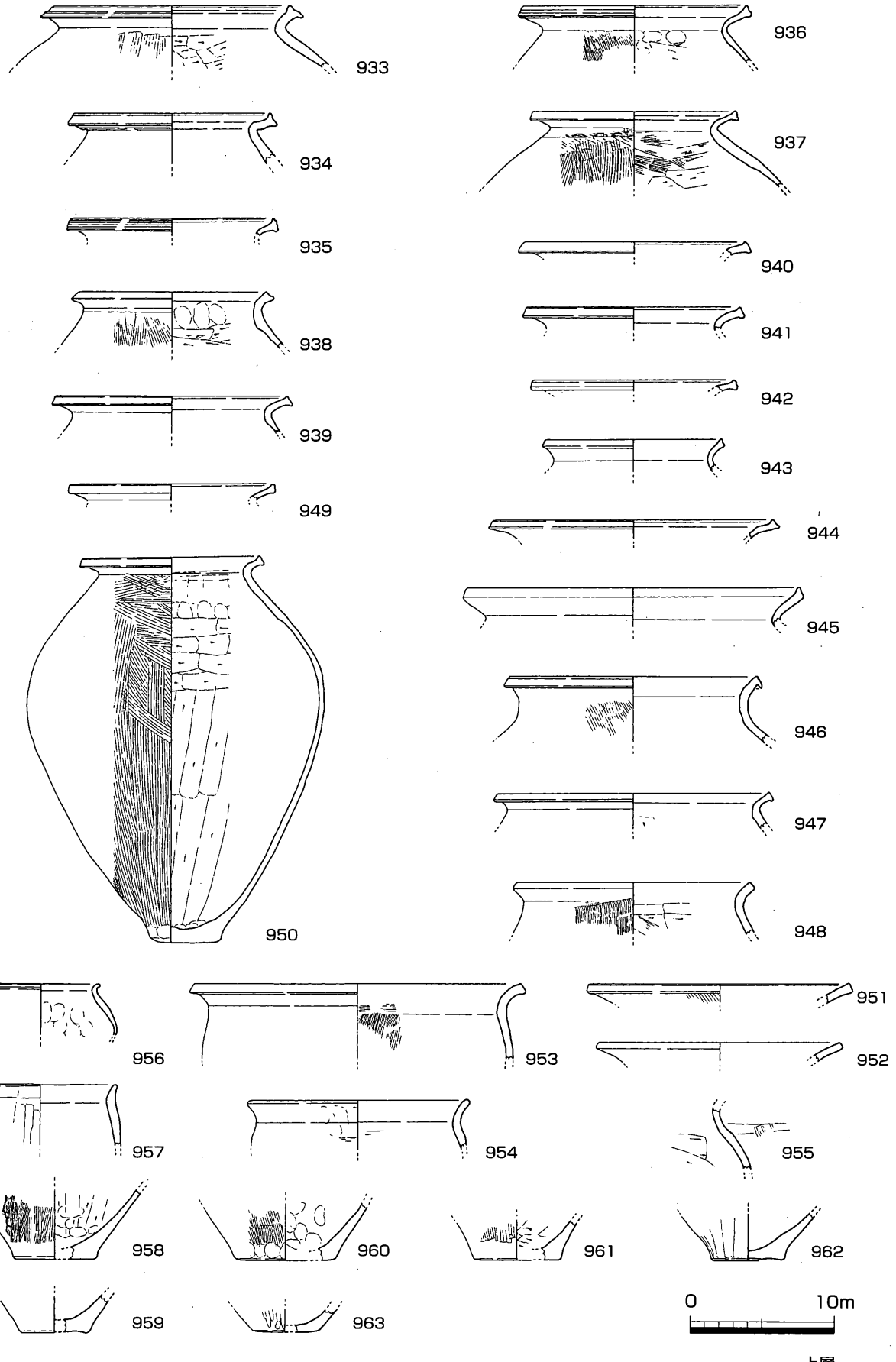
主柱穴は４基で、平面形態がほぼ円形を呈し、直径32～47㎝、深さ約24～33㎝を測る。柱痕が確認されていなため正確ではないが、柱穴心々間は2.0～2.18ｍで、概ね２ｍと考えられる。

この竪穴住居は焼失家屋で、床面直上では南・西側で炭化木材を検出した。検出幅は太いもので約15㎝、細いもので約８～９㎝、検出長は30～50㎝程度を測る。検出状況は方向が中央方向に向くものとそれに直交するものが認められる。また南東部の柱穴上でも北東部の柱穴に向いた炭化木材を検出している。これらは竪穴住居構築の垂木材・梁間材と考えられる。

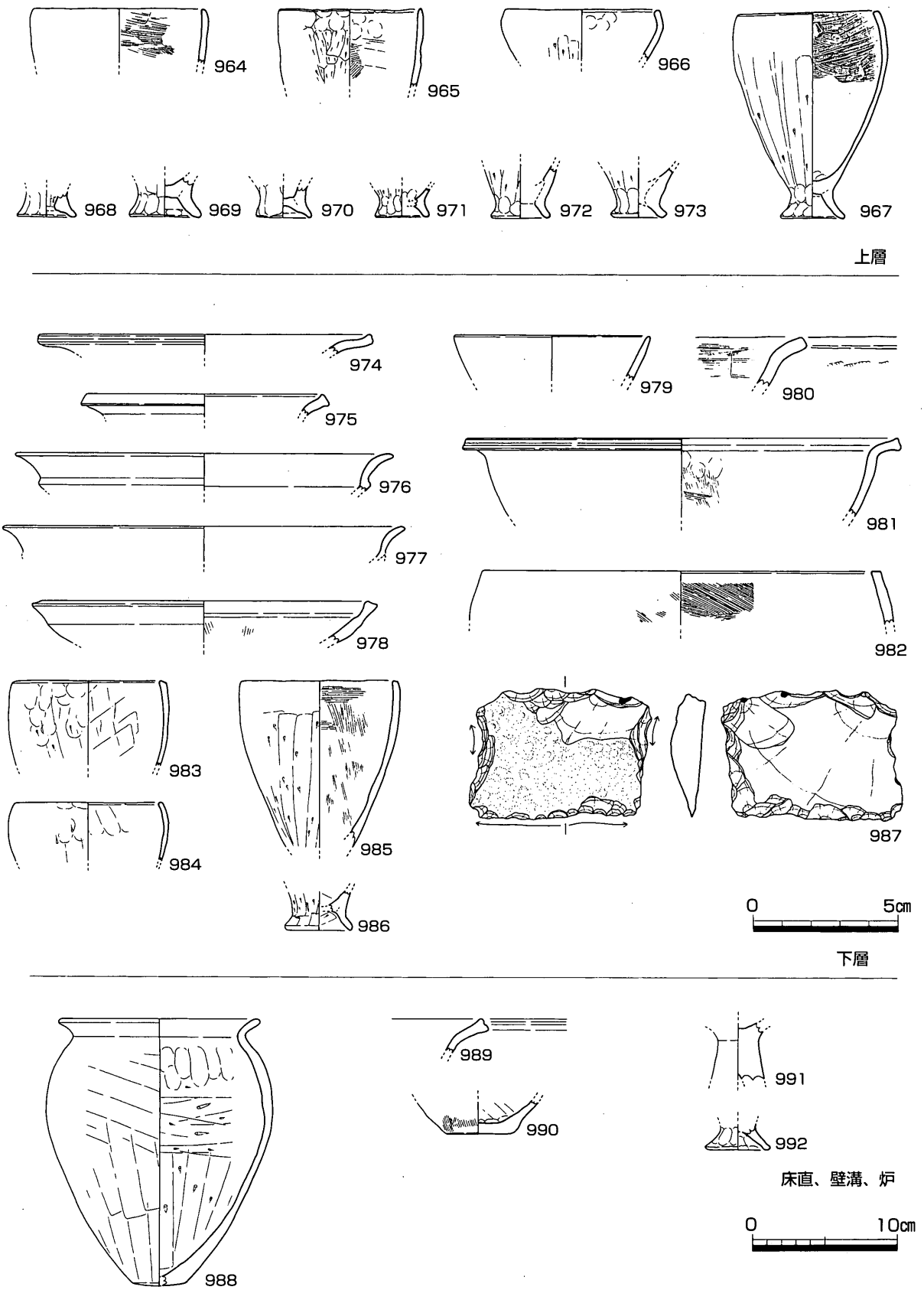
床面直上には炭化木材の他に大・小の柱穴を検出している。検出状況からは主柱穴と切りあって



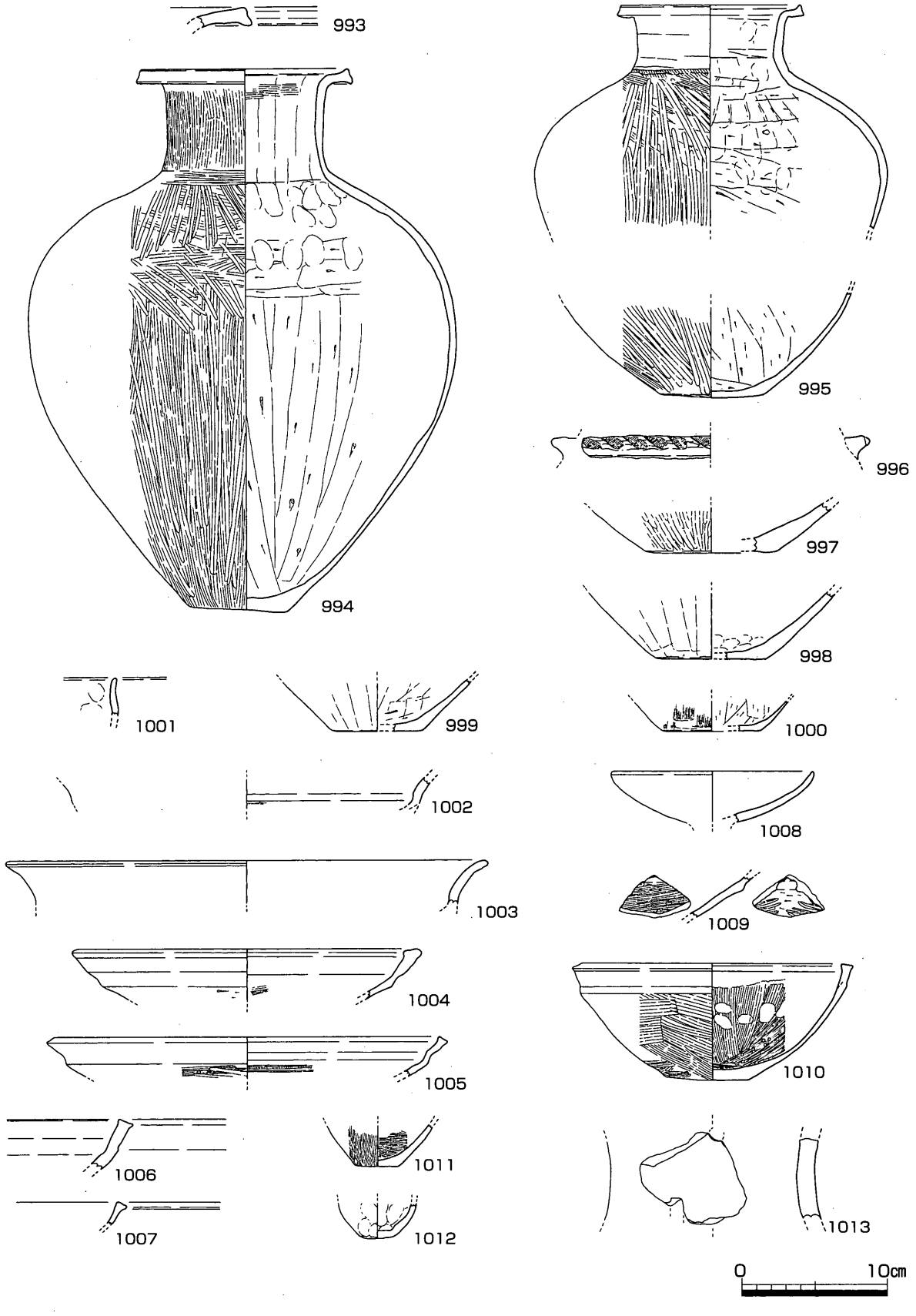

第63図　ＳＨ518出土遺物実測図①



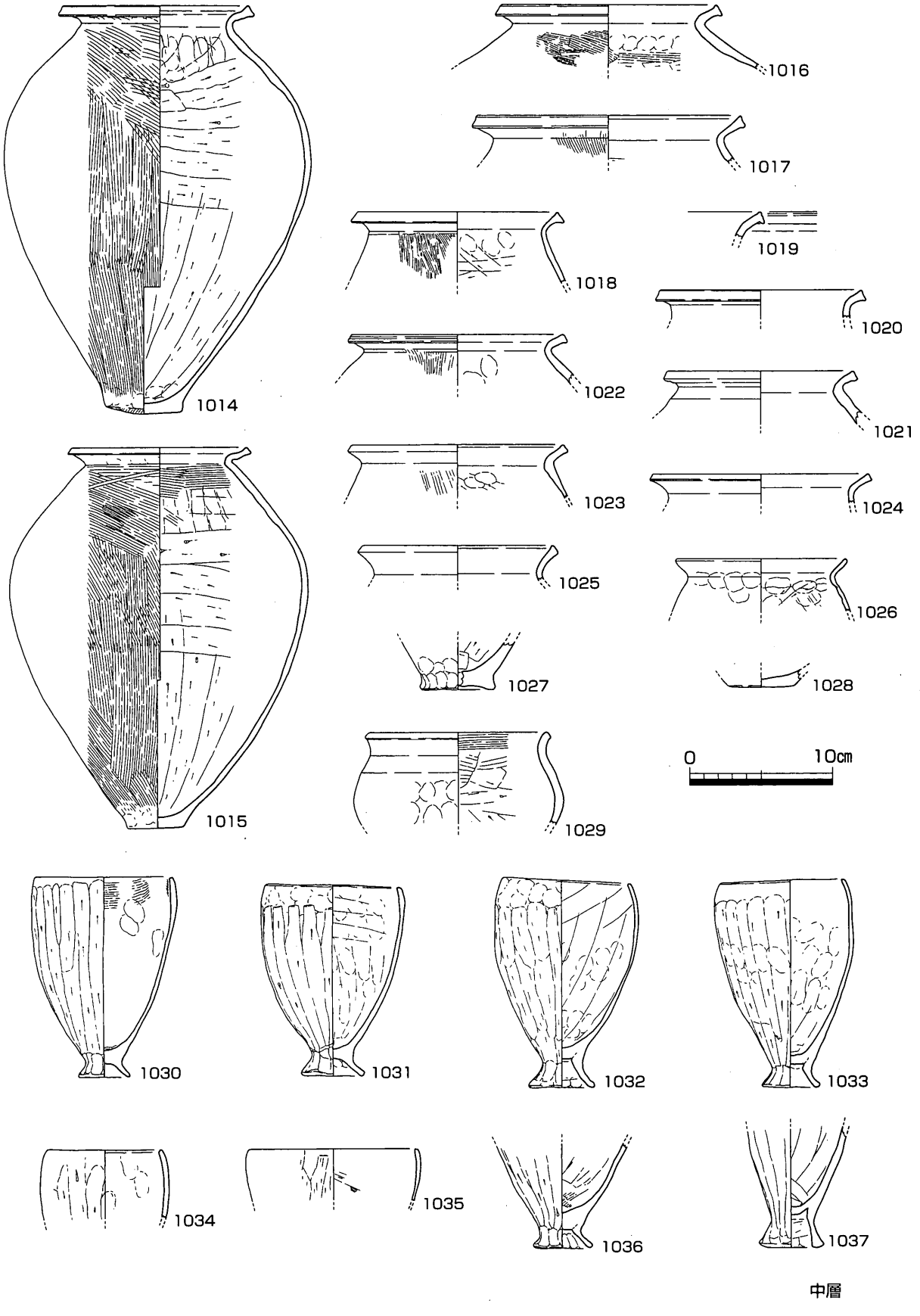

第64図　ＳＨ518出土遺物実測図②



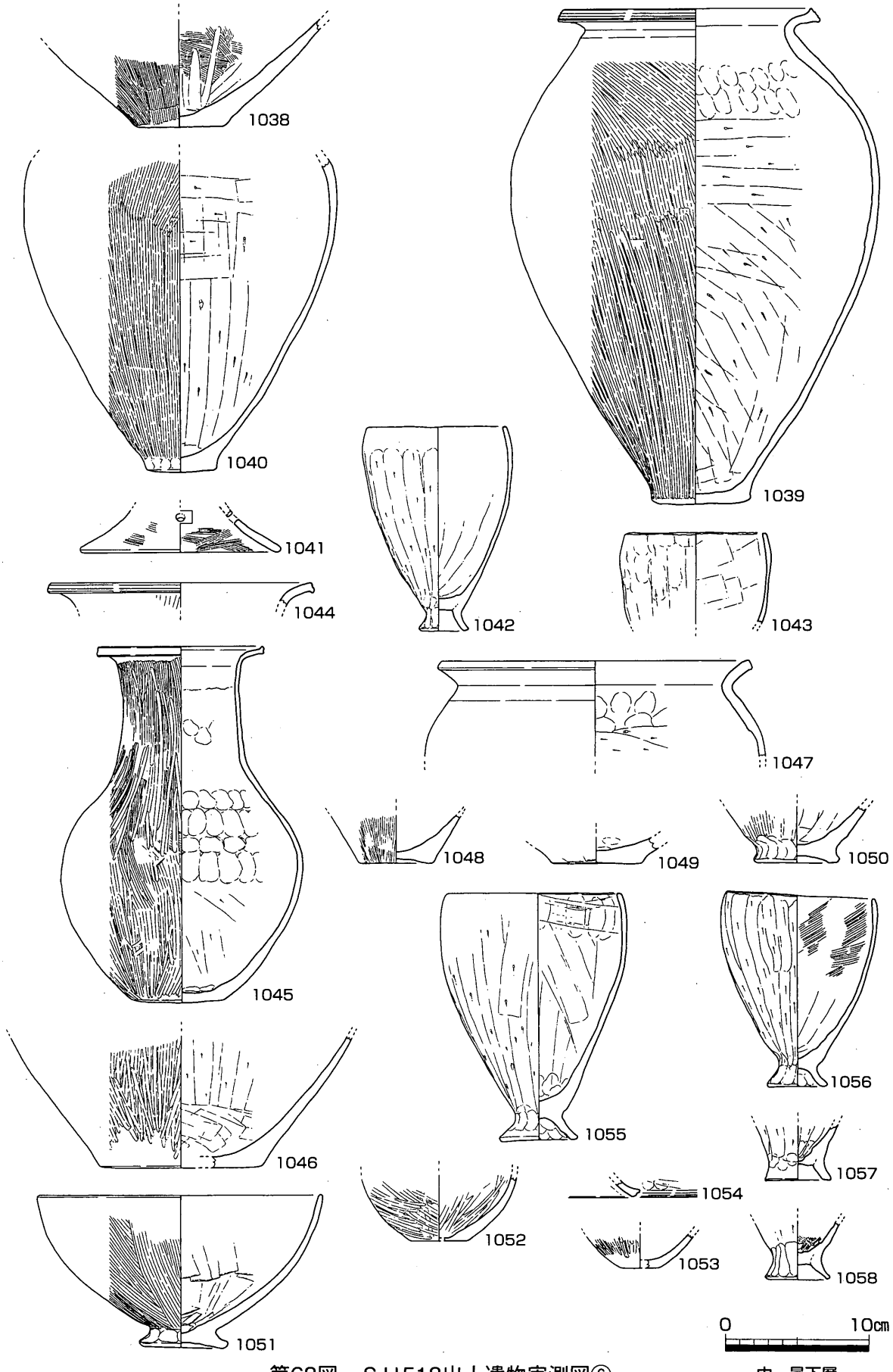

第65図　ＳＨ518出土遺物実測図③




第66図　ＳＨ518出土遺物実測図④




第67図　ＳＨ518出土遺物実測図⑤




第68図　ＳＨ518出土遺物実測図⑥　　中～最下層

いるものもあり、同時期とは考えられないものもある。

北西隅の壁溝上面から甕（988）が出土している。

この竪穴住居に伴う遺物は壺・甕・台付鉢・高坏・製塩土器・器台・焼土・サヌカイトが出土している。

壺には広口壺と長頸壺がある。広口壺は体部最大径が中位にあるもの（上層出土）と上位にあるもの（中層出土）が認められる。中位にあるものは上層から出土しており、若干の混じりがあるものと考えられる。中層から出土した広口壺（994）は底部が平底で、頸部はほぼ直に立ち上がる。口縁部は水平に屈曲し、口縁端部は僅かに上下に拡張する。体部外面には粗いハケ目（４～６本／cm）の後、ヘラミガキが施され、内面には縦・横方向のヘラケズリが施されている。

長頸壺は底部が平底で、体部最大径はほぼ中位にあり、体部から頸部にかけては緩やかに移行する。頸部はほぼ直線的に上方に延び、口縁部はほぼ水平に屈曲する。口縁端部は上方に小さく摘み上げる。体部から頸部にかけての外面には粗いハケ目（５～６本／cm）の後粗くヘラミガキが施されている。体部内面には下位にヘラミガキが、上位は指頭痕が施されている。

中層・最下部出土の甕は底部が平底で、体部最大径は上位にあり、頸部はほとんどが緩やかに外方に屈曲する。口縁端部は僅かに上下に摘み出す。端部外面は僅かに窪ませるが、退化凹線が認められるものもある。体部外面には粗いハケ目（５～６本／cm）が認められ、口縁端部に退化凹線が認められるものは体部外面下位にハケ目の後、縦方向のヘラミガキが施されている。体部内面は縦・横方向のヘラケズリが中位まで施され、上位は指頭痕が施されている。壁溝直上から出土した甕（988）は底部が平底で、体部最大径が上位にあり、頸部は緩やかに屈曲し、口縁端部はそのまま丸く終わらせる。体部外面には板ナデが、内面は下位・中位にヘラケズリが、上位に指ナデが施されている。

鉢は底部平底のものと台付鉢が認められる。底部が平底のものは内湾気味の体部からそのまま口縁端部に至り、僅かに左右に摘み出す。体部内外面には粗いハケ目（５本／cm）が施されている。

高坏は口縁部が外反し、端部を丸く終わらせるものと僅かに左右に摘み出すものがある。

製塩土器は外方に開く脚で、脚部高が1.0～2.0cm、体部はやや内湾しながら上方に延びる。体部外面には縦方向のヘラ削りが、口縁端部から約1.5cm下まで施されている。内面には指頭痕、縦・横方向の板ナデ、横方向のハケ目が施されている。

中層から器台が１点出土している。隅丸の透かしが交互に施されている。

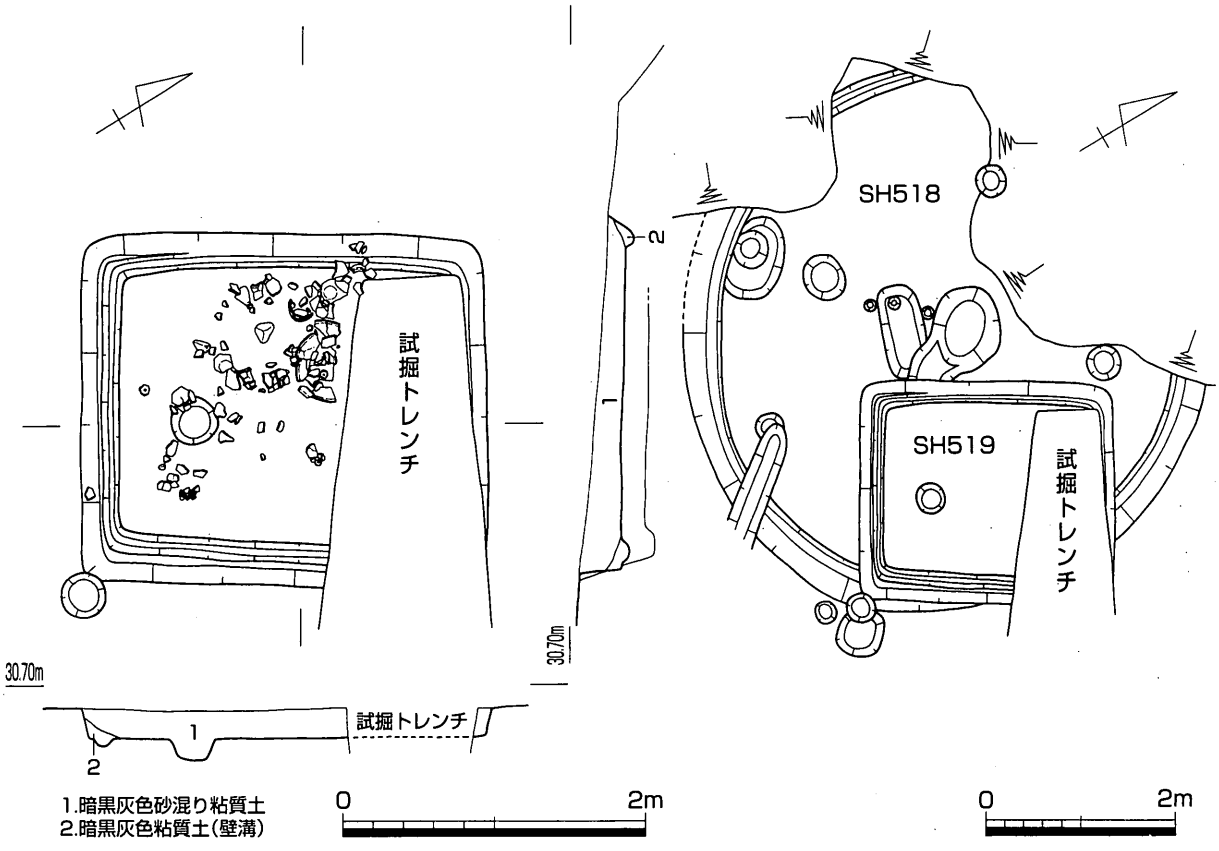
胎土に角閃石を含む土器は壺・甕・高坏・製塩土器と器種的に多く、高坏以外は5.0％以上とかなり高い割合となっている。

サヌカイトは非常に少ない。

時期は弥生時代後期中葉である。

### ＳＨ519

ＳＨ519は第Ⅱ調査区（Ｈ－13）東部、南東方向から北西方向に約3.0ｍで、約0.26ｍの比高差を持つ傾斜地の標高30.64ｍで検出した竪穴住居跡である。竪穴住居の堆積土は壁溝に堆積する暗黒灰色粘質土（第２層）を含む２層で、第１層の暗黒灰色砂混じり粘質土がほぼ全面に堆積している。平面形態は北辺部が試掘トレンチで掘削されているが、北東－南西方向が長い隅丸の長方形を呈す




第69図　ＳＨ519平・断面図、ＳＨ518・519位置関係図

る。規模は北東－南西方向（長軸）2.70m、南東－北西方向（短軸）2.24m、検出面からの深さは最大で約0.28mを測る。竪穴住居の北東－南西方向（長軸）はちょうど検出傾斜面の等高線と併行しており、地形に制約されたように（合わせるように）造られていることが解る。北東－南西方向（長軸）の主軸は真北より30.5°東を取る。

竪穴住居内部は周囲に幅11～13cm、床面からの深さ約５cmの壁溝を、床面では南北方向の南寄りに主柱穴を１基検出した。中央土坑は検出していない。

壁溝は北東辺が試掘トレンチのため確認できないが、全周していたものと考えられ、南東辺と南西辺は竪穴住居壁面から３～５cm開け、北西辺は壁面に沿って掘削されていることが解る。

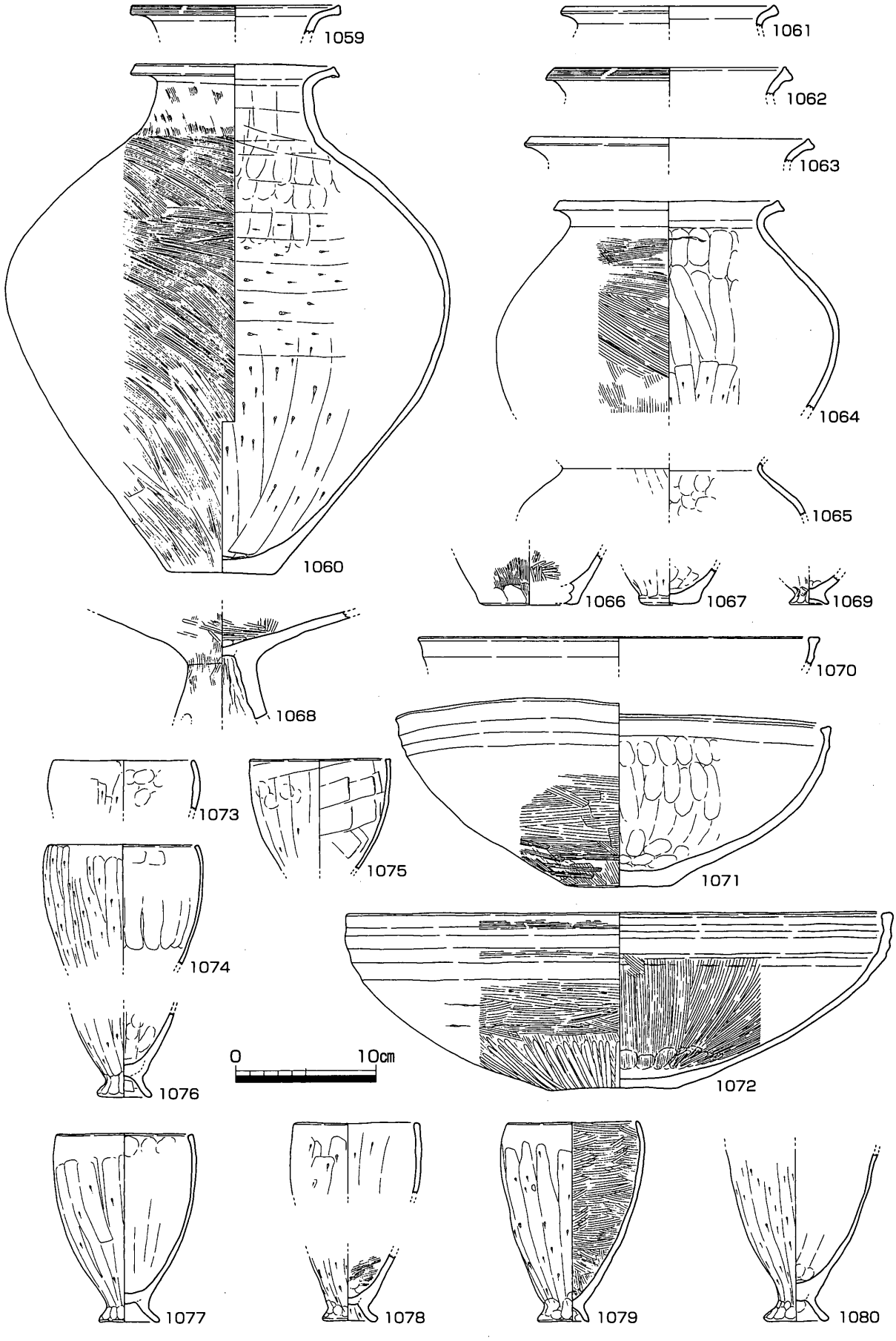
主柱穴は本来長軸方向に２基あったと思われるが、北東側の主柱穴は試掘トレンチのため消滅したと考えられる。検出した１基の主柱穴は平面形態が円形を呈し、直径約30cm、深さ約14cmを測る。北東側の主柱穴および柱痕が確認されていなため正確ではないが、柱穴心々間は推定1.2～1.3mを測るものと考えられる。

竪穴住居内の床面直上からは多量の遺物が出土している。中央北西側では大型の鉢の内部に製塩土器が納められていた状況で出土しており、製塩土器の収納方法が検証できるものと思われる。また、周囲には別の大型の鉢、製塩土器、甕が出土している。

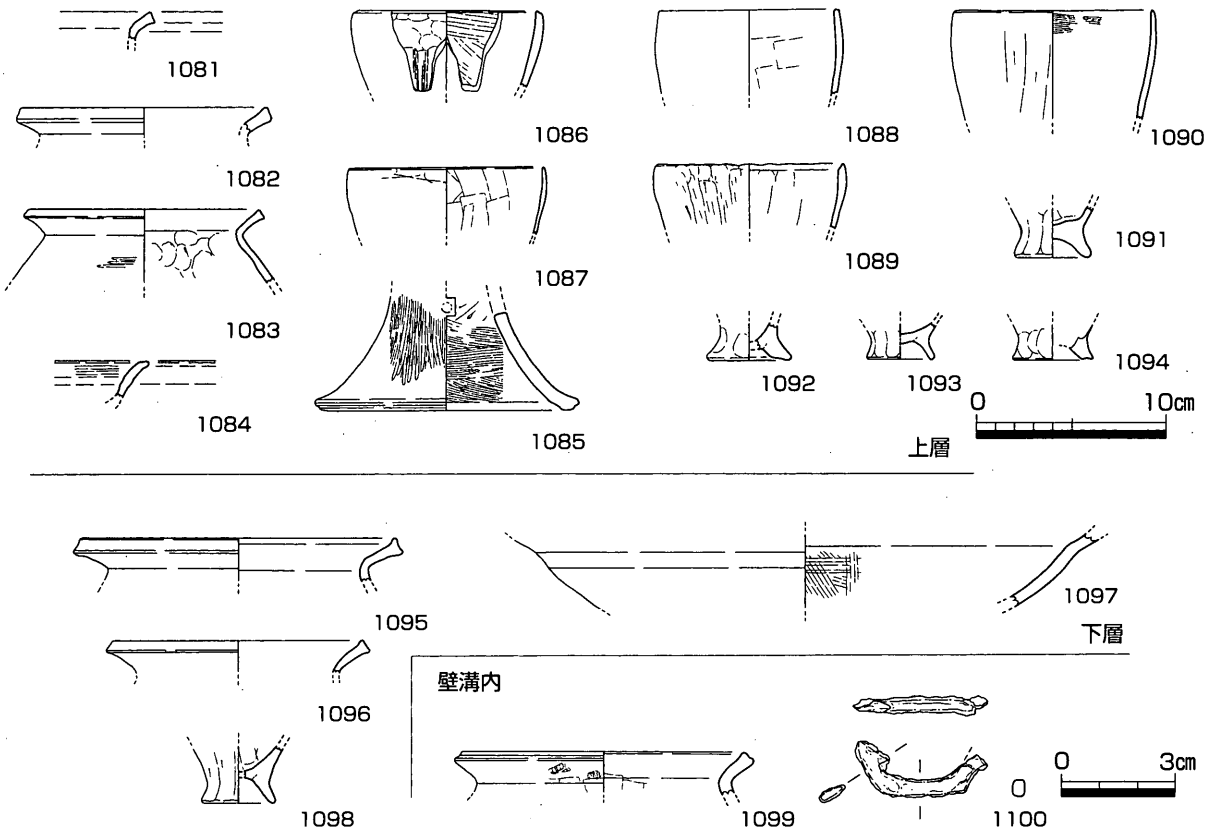
竪穴住居内の床面直上からは東半分で壺・甕・高坏・鉢・製塩土器が出土している。これらの内北側の床面直上で完形の鉢（1072）が出土しており、これ以外のものは全て破片であった。

この竪穴住居に伴う遺物は壺・甕・大型鉢・台付鉢・高坏・製塩土器が出土している。

壺は底部が平底、体部は算盤玉状に中位やや上に最大径がある。口縁部は頸部が外傾するものと




第70図　ＳＨ519出土遺物実測図①　上層




第71図　ＳＨ519出土遺物実測図②

内傾するものが認められ、口縁端部は上方あるいは下方に短く拡張する。体部外面には左上がりの板ナデ状のハケ目が、体部内面には下半に縦方向のヘラケズリ、中位に横方向のヘラケズリ、上位に指ナデが施されている。

甕は体部最大径がやや上位にあり、口縁端部は上下に拡張するものとあまり拡張しないものがある。体部外面には下位に縦方向の粗いハケ目（５～６本／cm)、上位に横方向の粗いハケ目が施されている。内面には下位に縦方向のヘラ削りが、上位は指ナデが施されている。

鉢には台付鉢と大型鉢がある。大型鉢は底部が平底で、体部はやや内湾気味に外上方に延び、口縁部はほぼ直立する。口縁部外面に３条の退化凹線が施されている。体部外面には粗いハケ目（５～６本／cm)、ヘラミガキ、内面には粗いハケ目、指ナデが施されている。

製塩土器は外方に開く脚で、脚部高が1.0～1.5cm、体部は内湾しながら上方に延びる。体部外面には縦方向のヘラ削りが、口縁端部から約1.5cm下まで施されている。内面には縦･横方向の板ナデ、横方向のハケ目が施されている。

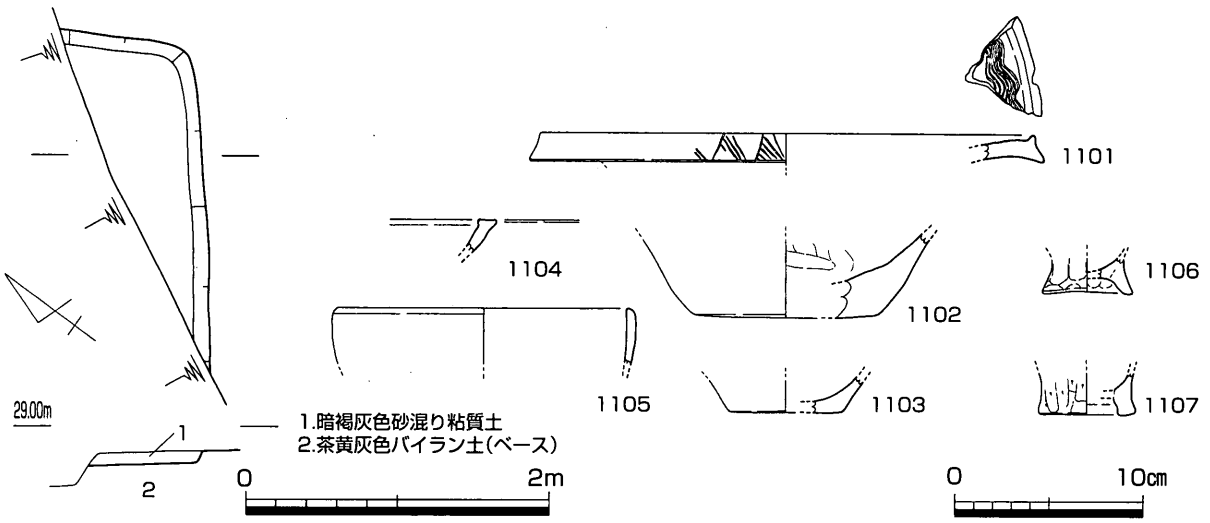
高坏は円盤充填されるもので、口縁部は外反気味に外上方に延びる。

胎土に角閃石を含む土器は製塩土器のみと器種的には少なく、製塩土器中1.0％とかなり低い割合となっている。

時期は弥生時代後期中葉である。

### ＳＨ520

ＳＨ520は第Ⅱ調査区（Ｈ－14）東部、南東方向から北西方向に約3.0ｍで、約0.1ｍの比高差を持つ緩傾斜地の標高28.94ｍで検出した竪穴住居跡である。竪穴住居内の堆積土は単層で、暗褐灰色




第72図　ＳＨ520平・断面図、出土遺物実測図

砂混じり粘質土が堆積している。北西部のほとんどが後世の地下げを受けているために詳細な平面形態は不明であるが、南東隅の形状から、方形を呈するものと考えられる。規模は南西－北東方向の現存長が約2.1m、南東－北西方向の現存長が0.9m、検出面からの深さは約0.08mを測る。

竪穴住居の南西－北東方向の辺は概ね検出傾斜面の等高線と併行しており、地形に制約されたように（合わせるように）造られていることが解る。南東－北西方向の主軸は真北より約38.5°西を取る。

竪穴住居内部で中央土坑、壁溝等は検出していない。

竪穴住居内の床面直上からは遺物が出土しておらず、堆積土中から壺・甕・高坏・鉢・製塩土器が出土している。

壺は口縁部片、底部片のみで、口縁部は端部を上方に拡張し、外面に鋸歯文、口縁部上面に櫛描きによる７条の櫛描波条文が施されている。

甕は体部、底部の破片である。底部は平底を呈する。体部片には外面にはハケ目、内面にはヘラケズリが施されている。

高坏は口縁部のみで、口縁端部を左右に僅かに摘み出す。

鉢は口縁部のみで、やや内湾しながら上方に延び、口縁端部は丸く収める。

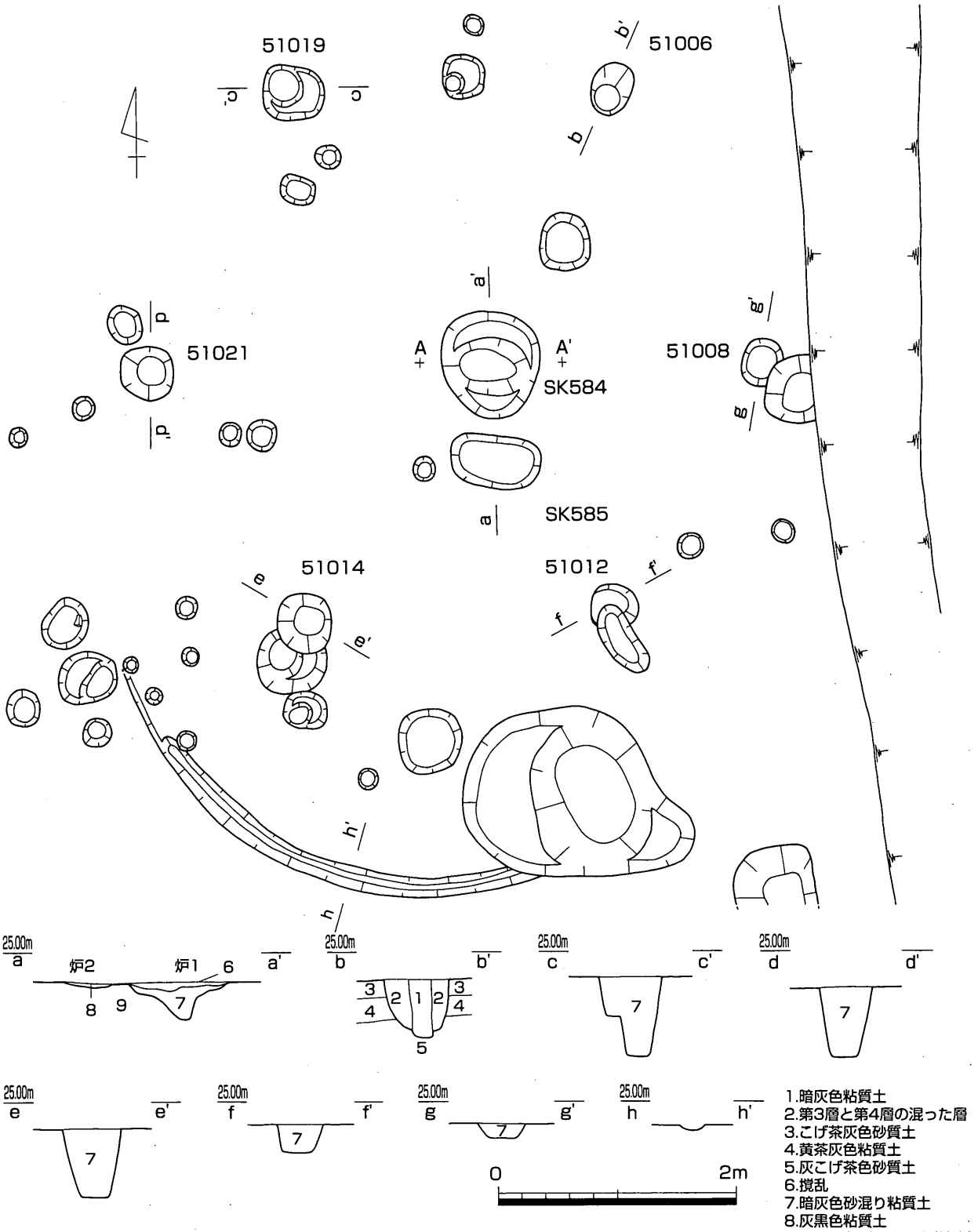
製塩土器は脚部のみで、脚部高は約1.5～2.0cmを測り、脚部外面には指頭痕が、体部外面にヘラケズリが施されている。

胎土に角閃石を含む土器は高坏、製塩土器で、両者とも１点、２点と少ないが全て角閃石を含んでいる。

時期は弥生時代後期前半である。

ＳＨ521

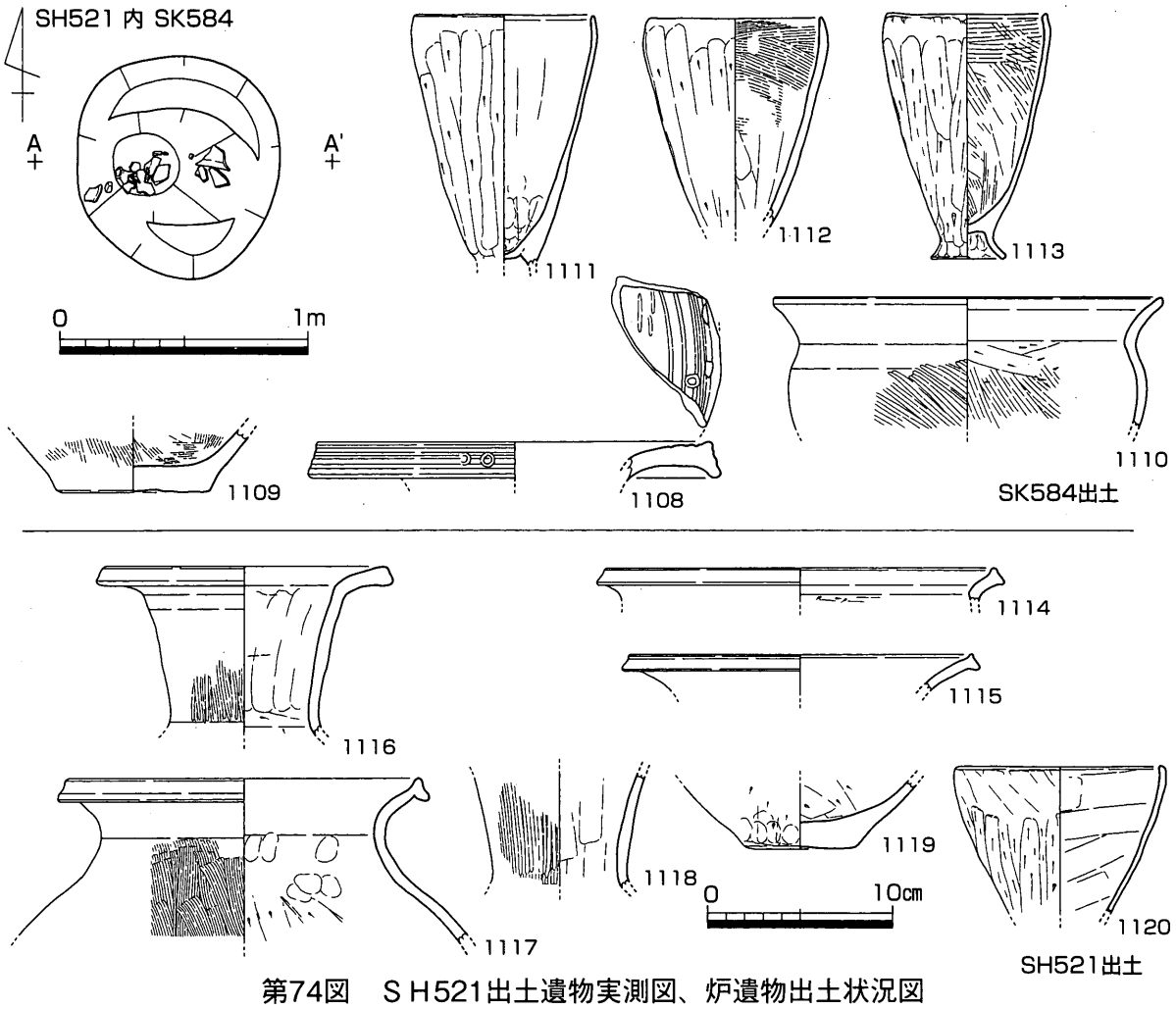
ＳＨ521は第Ⅱ調査区（Ｆ・Ｇ－18）中央部、東方向から西方向に若干の傾斜はあるもののほぼ平坦地の標高24.72mで検出した竪穴住居跡である。この竪穴住居は上部を削平されているために壁溝、主柱穴、中央土坑のみの検出で、竪穴住居内の堆積土は確認していない。壁溝から推定する




第73図　ＳＨ521平・断面図

と平面形態は円形を呈することがわかり、規模は直径8.46mを測る。しかし中央土坑を中心とした柱穴の推定円と周溝の推定円が若干ずれることから、多角形の平面形態を持つ竪穴住居の可能性が考えられる。また別の竪穴住居の可能性もあるが、伴う柱穴跡が判別できないのでここでは同一竪穴住居と考えたい。

壁溝は竪穴住居南部分で検出し、検出長は約2.5mを測る。規模は幅0.16～0.23m、床面からの深




第74図　ＳＨ521出土遺物実測図、炉遺物出土状況図

さ約５cmを測る。

主柱穴は６基で、平面形態がほぼ円形を呈し、直径34～52cm、深さ約57～66cmを測る。明確な柱痕を残すものは２基で、そのほかでは柱痕が確認されていなため正確ではないが、柱穴心々間は2.4～2.7mで、概ね2.5mと考えられる。

中央土坑は２基で構成されており、南側にある１基（ＳＫ585）は平面形態が隅丸の長方形を呈し、長軸約0.77m、短軸約0.42mを測る。断面形態は上部が開く「Ｕ」字状を呈し、検出面からの深さは最深部で約0.06mを測る。堆積土は灰黒色粘質土で、炭化物を少量含む。北側にある１基（ＳＫ584）は平面形態が歪な円形を呈し、中央部が深くなって、断面は２段状に掘り込まれている。北側の1段目から最深部に屈曲する部分は幅20cmの範囲で被熱していることが確認できる。規模は南北の直径約0.87m、東西の直径約0.84m、検出面からの深さは1段目が約0.1m、最深部が約0.32mを測る。堆積土は単層で暗灰色砂混じり粘質土である。

円形の中央土坑（ＳＫ584）内底面から壺・甕・製塩土器、柱穴（ＳＰ51006・51014）から壺・製塩土器が出土している。

この竪穴住居に伴う遺物は壺・甕・高坏・製塩土器が出土しているが、少量である。

壺は頸部が直線的に外上方に延びるものと朝顔形に開くものがある。朝顔形に開くものには頸部の長いものと短いものがあり、口縁端部は両者とも上方に小さく摘み出し、下方にやや大きく拡張する。体部外面には粗いハケ目（４～６本／cm）が施されている。体部内面にはヘラケズリが施さ

れている。1108は頸部から口縁部が水平に屈曲するもので、口縁端部は下方に拡張する。口縁端部外面には３条の沈線が認められ、間隔をあけて２個一対の竹管文が施されている。口縁部上面にも３条の沈線が認められ、ここにも間隔をあけた竹管文が施されている。

甕は口縁部のみで、端部の上下を僅かに摘み出している。

高坏は図化できるものはないが、坏部の破片が出土している。

製塩土器は外方に開く脚で、脚部高が1.0～1.5cm、体部は直線的に外上方に延びる。体部外面には縦方向のヘラ削りが、口縁端部から約1.5cm下まで施されている。内面には縦･横方向の板ナデ、横方向のハケ目（４～６本／cm）が施されている。

胎土に角閃石を含む土器は壺・高坏・製塩土器のみと器種的には少ない。壺・高坏は壺14.3%（１個体のみ）、高坏100%（破片点数として１点しか出土しておらず、その１点が胎土に角閃石を含んでいたため）とばらつきのある高い割合となっている。製塩土器では38.1%とかなり高い割合となっている。

サヌカイトは出土していない。

時期は弥生時代後期前半である。

### ３．土壙墓跡

当遺跡で検出した土壙墓跡は総数５基（ＳＴ501～505）で、第Ⅱ調査区の北西端に集中している。

ＳＴ501～503・505は後世の水田造営による削平のために傾斜方向に約4.0mの距離で、高低差約0.1m程度と、ほとんど傾斜のないほぼ水平部分で検出している。一方ＳＴ504は土壙墓掘削当時の旧地形を留めてはいないものの約4.0mで、比高差約0.4mとなる緩斜面で検出している。

第Ⅱ調査区より高所、東部分に位置する第Ⅰ調査区で、弥生時代の遺構をほとんど検出していない現状では、小山･南谷遺跡の弥生時代の集落域が、第Ⅱ調査区の東端付近を東限として形成されていることが解り、これらの土壙墓跡は集落域の最高所に位置していることが解る。

#### ＳＴ501

ＳＴ501は第Ⅱ調査区（Ｇ－９）東端、南東方向から北西方向に約1.8mで、約0.15mの比高差を持つ緩斜面地の標高34.90mで検出した土壙墓跡である。土壙墓の堆積土は２層で、暗黄色系の砂混じり粘質土が堆積している。平面形態は隅丸の南北方向が長い長方形を呈する。規模は南北方向（長軸）1.82m、東西方向（短軸）0.75m、検出面からの深さは約0.25mを測る。土壙墓の南北方向（長軸）はちょうど検出傾斜面の等高線と直交し、南北方向（長軸）の主軸は真北より45.0°西を取る。断面形態は箱型を呈する。土層断面、床面検出状況から木棺の痕跡は確認できず、埋葬方法の詳細については不明である。

土壙内からは遺物が出土しておらず、数点の炭化物（炭）の小片が出土しているのみである。

時期は堆積土出土遺物から弥生時代後期と考えられる。

#### ＳＴ502

ＳＴ502は第Ⅱ調査区（Ｇ－９）東端、南東方向から北西方向に約1.8mで、約0.15mの比高差を持つ緩斜面地の標高34.90mで検出した土壙墓跡である。土壙墓の堆積土は単層で、暗灰黄色砂混

じり粘質土が堆積している。平面形態は溝状遺構ＳＤ520・521によって北部が切られているものの南北方向が長い長方形を呈する。規模は南北方向現存長（長軸）1.45m、東西方向（短軸）0.66m、検出面からの深さは約0.12mを測る。土壙墓の南北方向（長軸）はちょうど検出傾斜面の等高線と直交し、南北方向（長軸）の主軸は真北より30.0°西を取る。

ＳＴ502はＳＴ501の西側、約1.3m地点で検出した土壙墓で、ほぼ南北主軸も同じであることから同時期に掘削されたものと考えられる。

土壙内からは遺物が出土していないが、堆積土の状況から時期は弥生時代後期と考えられる。

### ＳＴ503

ＳＴ503は第Ⅱ調査区（Ｇ・Ｈ－９）東端、南東方向から北西方向に約3.0mで、約0.04mのやや傾斜するがほぼ平坦地の標高34.95mで検出した土壙墓跡である。土壙墓の堆積土は単層で、暗灰色砂混じり粘質土が堆積している。平面形態は土壙墓ＳＴ504、ＳＰ223に切られているものの南北方向が長い長方形を呈する。規模は南北方向（長軸）1.97m、東西方向（短軸）0.70m、検出面からの深さは約0.14mを測る。土壙墓の南北方向（長軸）はちょうど検出傾斜面の等高線と直交し、南北方向（長軸）の主軸は真北より24.0°東を取る。ＳＴ503はＳＴ504に切られており、前後関係が確認できる。

土壙内からは遺物が出土していないが、堆積土の状況から時期は弥生時代後期と考えられる。

### ＳＴ504

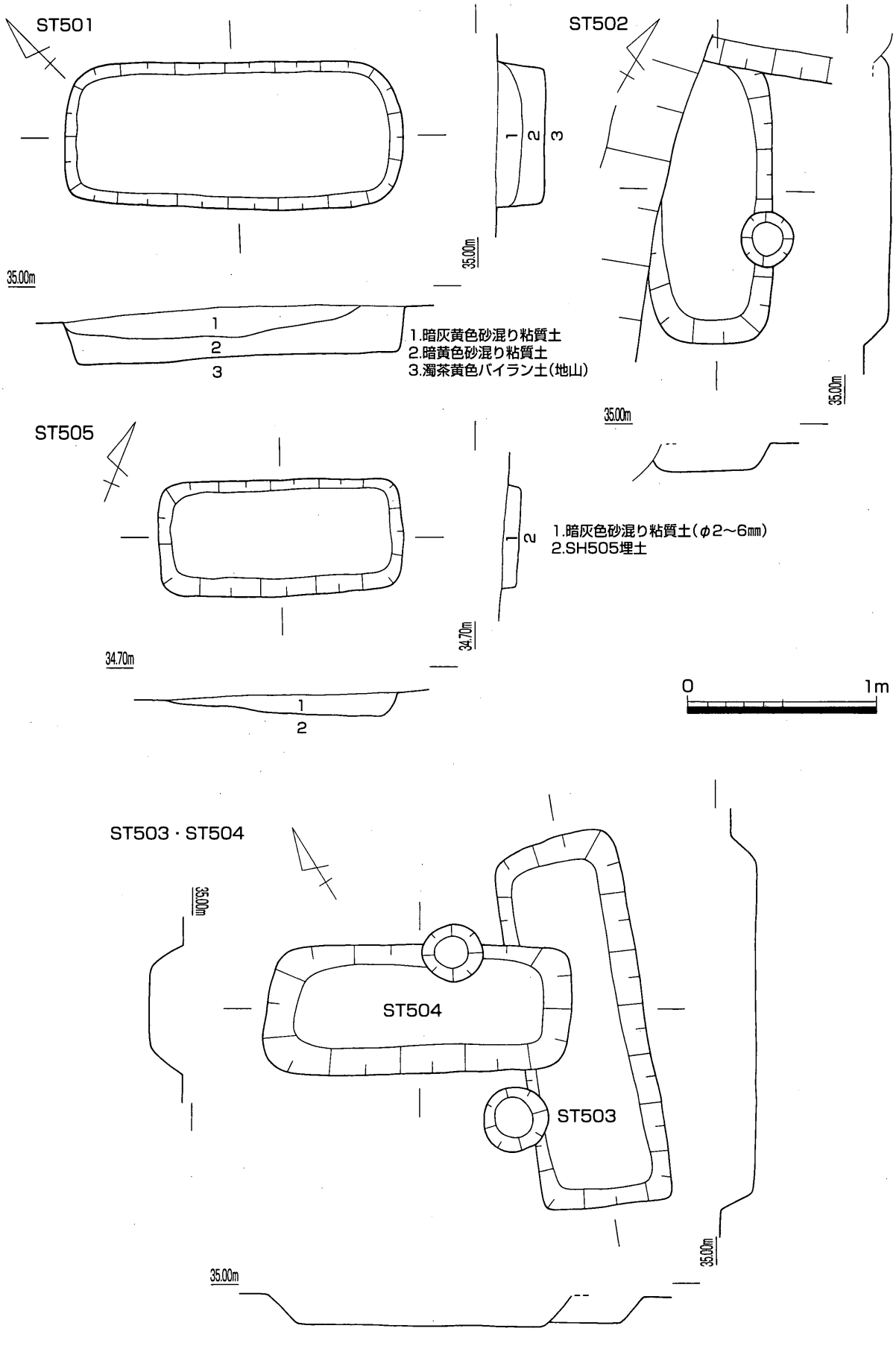
ＳＴ504は第Ⅱ調査区（Ｇ－９）東端、南東方向から北西方向に約3.0mで、約0.04mのやや傾斜するがほぼ平坦地の標高34.94mで検出した土壙墓跡である。土壙墓の堆積土は単層で、暗灰色砂混じり粘質土が堆積している。平面形態は隅丸の東西方向が長い長方形を呈する。規模は東西方向（長軸）1.62m、南北方向（短軸）0.68m、検出面からの深さは約0.18mを測る。土壙墓の南北方向（短軸）はちょうど検出傾斜面の等高線と直交し、南北方向（短軸）の主軸は真北より32.5°東を取る。断面形態は箱型を呈する。土層断面、床面検出状況から木棺の痕跡は確認できず、埋葬方法の詳細については不明である。

土壙内からは遺物が出土していないが、堆積土の状況から時期は弥生時代後期と考えられる。

### ＳＴ505

ＳＴ505は第Ⅱ調査区（Ｇ－10）東端、南東方向から北西方向に約3.0mで、約0.26mの比高差を持つ緩斜面地の標高34.54mで検出した土壙墓跡である。土壙墓の堆積土は単層で、暗灰色砂混じり粘質土が堆積している。平面形態は東西方向が長い長方形を呈する。規模は東西方向（長軸）1.30m、南北方向（短軸）0.60m、検出面からの深さは約0.12mを測る。土壙墓の東西方向（長軸）はちょうど検出傾斜面の等高線と併行し、南北方向（短軸）の主軸は真北より23.0°西を取る。断面形態は箱型を呈する。土層断面、床面検出状況から木棺の痕跡は確認できず、埋葬方法の詳細については不明である。

土壙内からは壺・甕の破片が出土している。壺は体部片で、外面には幅２～３㎜程度のヘラミガキが、内面には細かいハケ目が施されている。甕は小片で、内面の調整は不明であるが、外面のハ




第75図　ＳＴ501・502・503・504・505平・断面図

ケ目が確認できる。
時期は堆積土出土遺物から弥生時代後期と考えられる。

## 4．井戸跡

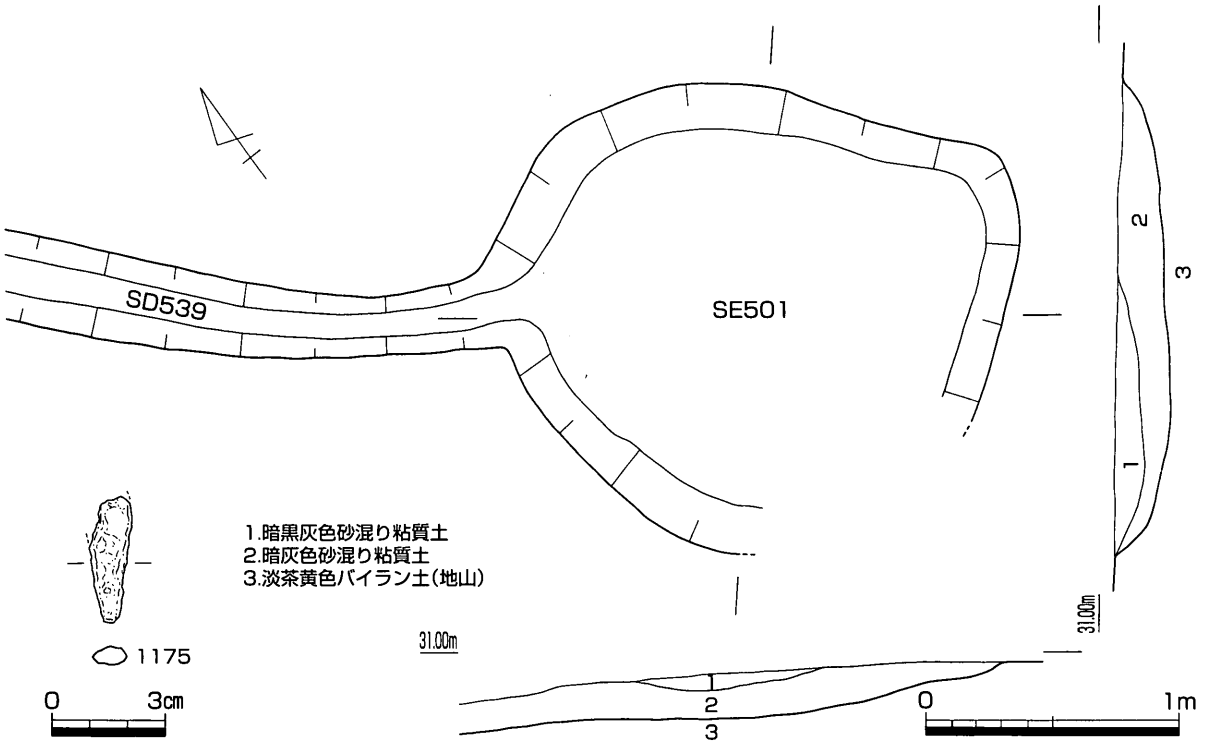
第Ⅱ調査区で検出した井戸跡は総数２基（ＳＥ501・502）で、第Ⅱ調査区の西端と中央部で検出した。

第Ⅱ調査区は丘陵先端の傾斜部分に位置し、調査区内で東側は最高所となり、西側は最低所で、丘陵先端部は終わる。東西の幅は約240ｍで、最高所（東）が標高約37.0ｍ、最低所（西）が標高約23.0ｍとその比高差は約14.0ｍを測る。

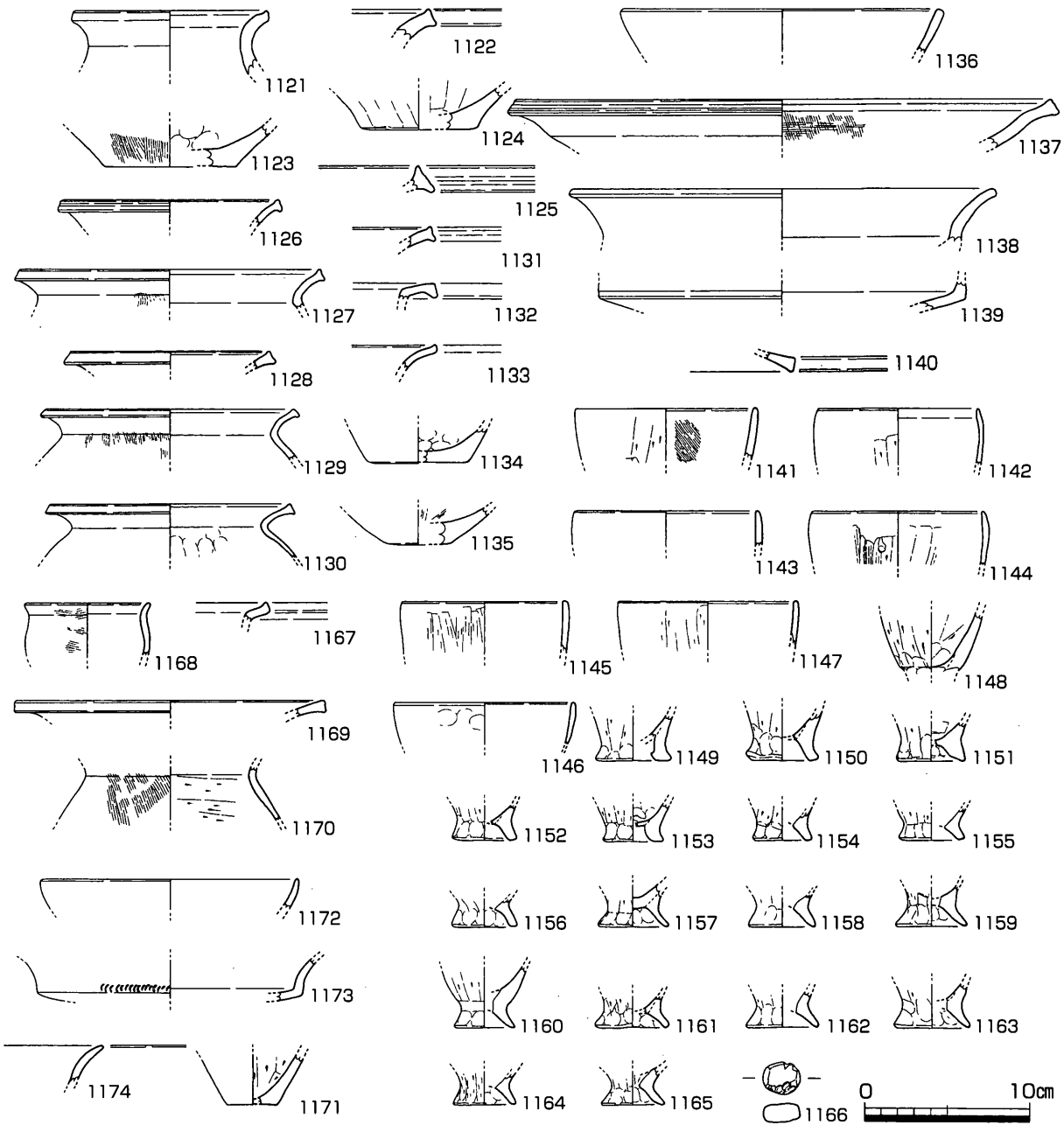
井戸跡ＳＥ501は第Ⅱ調査区西端から約150ｍの位置で、標高約31.0ｍ、ＳＥ502は西から約30ｍの位置で、標高約23.0ｍとＳＥ502が西端であることから、ＳＥ501はほぼ距離的にも、標高的にもほぼ中間地点で検出している。井戸跡間は約120ｍ、標高差約８ｍあり、ちょうどこの間隔が傾斜部分の集落の井戸のあり方を示す例になると考える。検出した井戸は全て出水状のもので、北西部から北西方向に流路を取る溝跡を伴っている。この溝はちょうど傾斜面の等高線に直行するように流路を取り、排水機能を持つものと考えられる。また、井戸跡は竪穴住居跡等に近接するが、他の遺構等との配置の規則性は認められない。

### ＳＥ501

ＳＥ501は第Ⅱ調査区（Ｈ－13）東部南、東方向から西方向に約4.0ｍで、約0.40ｍの比高差を持つ斜面地の標高約30.96ｍで検出した井戸跡である。竪穴住居跡ＳＨ518・519の南東側約２ｍの位置で検出しており、井戸跡から延びる溝跡ＳＤ539がＳＨ518を切っていることから、ＳＨ518埋没




第76図　ＳＥ501平・断面図、出土遺物実測図




第77図　ＳＥ501出土遺物実測図

後に掘削されたことが解る。溝跡ＳＤ539は幅約0.35m、深さ約0.12mで、検出長約3.8mで、北西方向に流路を取る。井戸跡の堆積土は２層で、第１層が暗黒灰色砂混じり粘質土、第２層が暗灰色粘質土で、第２層はＳＤ539の堆積土と同じであることから、同一時期に機能していたことが解る。平面形態は北西側半分が円形を、南東側半分が隅丸の方形を呈する。北西側中央部から溝跡ＳＤ539が北西方向に延びている。規模は南西－北東方向約1.78m、北西－南東方向約2.05m、検出面からの深さは約0.22mを測る。

第Ⅱ調査区中央部南もかなり湧水が確認でき、この井戸跡も湧水を利用した出水状の井戸であることが解る。

井戸跡内からは弥生時代の壺、甕、鉢、高坏、製塩土器、器台、鉄製品が出土している。

壺は頸部が緩やかに外反し、口縁端部を上方に僅かに摘み出す。底部は平底で、体部外面に縦方

向のハケ目が、内面には指頭痕・板ナデ・ハケ目等が施されている。

甕は頸部が「く」の字に屈曲し、内面には明瞭な稜を持つ。口縁部はやや外反しながら延び、口縁端部は上下に僅かに摘み出し、口縁端部外面は、僅かに窪ませる。体部破片の外面にはハケ目（８～９本／cm）が、内面には指ナデが施されている。

鉢は小型のものと大型のものが少量ある。小型のものは口径約19.0cmで、やや内湾する体部を持つ。大型のものは口径約32.0cmで、口縁部を屈曲させる。

高坏は口縁部がほぼ上方に屈曲し、外反しながら口縁端部に至る。口縁部はそのまま終わらせる。脚部端部は方形に終わらせる。

製塩土器は、脚部が外方に広がり、脚端部は方形に終わらせるものと細く延び、丸く終わらせるものがある。脚部高は両者共に約1.0～1.5cmを測る。脚部外面は指ナデ・指頭痕が、体部外面にはヘラケズリが施されている。

器台はほぼ中央の筒部分の破片が出土している。

胎土に角閃石を含む土器は甕・高坏・製塩土器である。角閃石を含む甕は体部外面に細かいハケ目、内面にはヘラケズリが施され、体部の器壁が薄いのが特徴である。角閃石を含む全体の割合は約27％である。高坏は角閃石を含むもの（1140）と含まないものが共存する。角閃石を含む製塩土器は実測点数で、25点中19点（76％）とかなりの量が認められ、また形態的にみても方形に終わらせるものと細く延び、丸く終わらせるもの両者に認められる。

井戸から溝へと延びる部分から弥生時代の壺、甕、鉢、高坏が出土している。

1168は小型の甕で、体部は球形を呈し、頸部は緩やかに「く」の字に屈曲し、口縁部はやや外反し、細く終わらせる。甕の体部外面にはやや粗いハケ目（６～７本／cm）が、内面には横方向のヘラケズリが施されている。

高坏は口縁部屈曲部外面に「C」字状の竹管文が認められる。

溝跡ＳＤ539からは弥生時代の壺、甕、高坏が出土している。

壺は体部小片が出土している。

甕は底部が平底で、体部内面にヘラケズリが施されている。

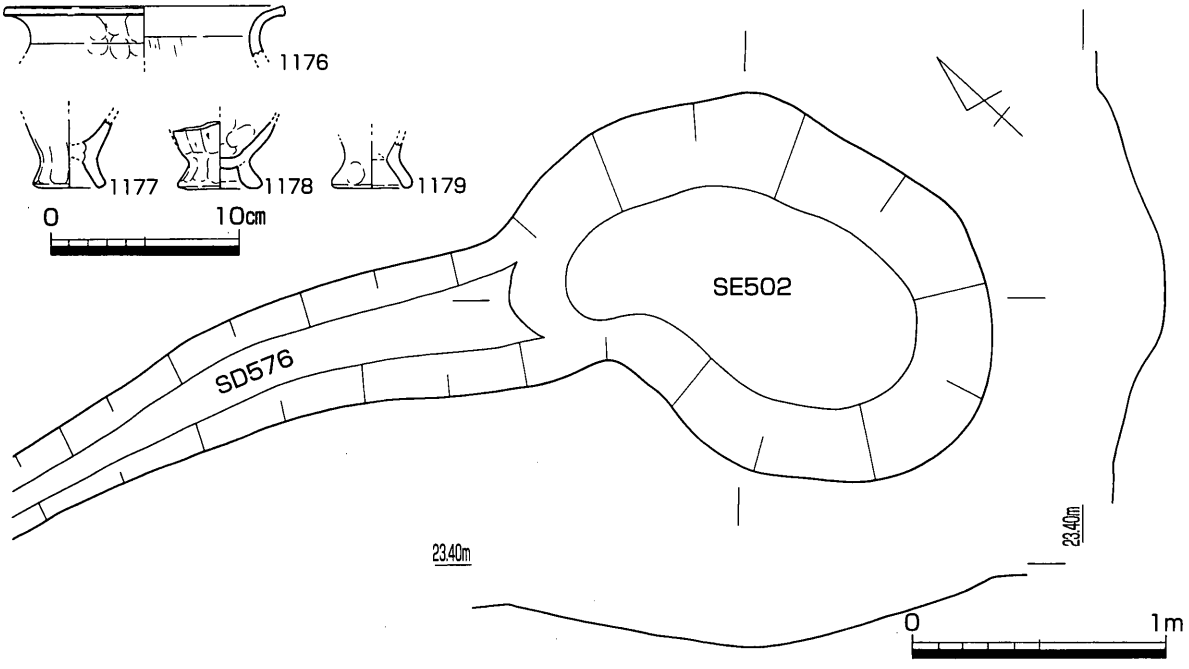
高坏は口縁部が外反し、端部は細く、丸く終わらせる。

井戸跡、溝跡共に出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＥ502

ＳＥ502は第Ⅱ調査区（Ｇ－19）中央部西端、東方向から西方向に約4.0ｍで、約0.20ｍの比高差を持つ緩斜面地の標高23.37ｍで検出した井戸跡である。ちょうどＳＲ501内から検出しており、井戸跡から延びる溝跡ＳＤ576とＳＲ501の流路方向がほぼ東から西へと同じであることから同時期に機能していたものと考えられる。溝跡ＳＤ576は幅約0.3～0.5m、深さ約0.09～0.12ｍで、約４ｍ西北西に流路を取る。井戸跡の堆積土は単層で、暗茶灰色砂混じり粘質土が堆積している。平面形態は南北に長い歪な楕円形で、北西隅から溝跡ＳＤ576が西北西方向に延びている。ＳＥ502とＳＤ576に切り合いが認められないことから、この溝跡も同時期に機能していたものと考えられる。規模は南北方向（長軸）1.88m、東西方向（短軸）1.26m、検出面からの深さは約0.29ｍを測る。

第Ⅱ調査区西端は、かなり湧水が確認でき、この井戸跡も湧水を利用した出水状の井戸であるこ




第78図　ＳＥ502平・断面図、出土遺物実測図

とが解る。

井戸跡内からは弥生時代の甕、鉢、製塩土器が出土している。

甕は頸部が緩やかに屈曲し、内面には明瞭な稜を持たない。口縁部は外反しながら延び、口縁端部は上下に僅かに摘み出し、そのまま終わらせる。

鉢は小片であるが、外面に粗いヘラケズリが施されている。

製塩土器は、脚部が外方に広がり、脚端部は方形に終わらせ、脚部高は約1.5cmを測る。脚部外面は指ナデ・指頭痕が、体部外面にはヘラケズリが施されている。

胎土に角閃石を含む土器は製塩土器に１点のみ確認できる。

溝跡ＳＤ576からは弥生時代の甕、製塩土器が出土している。

甕は小片で、詳細については不明である。

製塩土器は、脚部が外方に広がり、脚端部は丸く終わらせ、脚部高は約1.5cmを測る。脚部外面は指頭痕が施されている。

井戸跡、溝跡共に出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ５．土坑跡

当遺跡で検出した弥生時代の土坑は総数88基で、後世の水田耕作により掘削された部分では検出していないが、偏った纏まりも認められず、第Ⅱ調査区全域で検出した。平面形態は円形・楕円形・方形・長方形を中心として、歪な平面形態のものも認められる。掘削深度は全体的に浅く、かなり削平を受けているものと思われる。

#### ＳＫ506

ＳＫ506は第Ⅱ調査区（Ｈ－９）東端、標高約36.68ｍで検出した土坑跡である。近接して竪穴住居跡ＳＨ501～504がある。平面形態は隅丸の長方形で、断面形態は逆台形状を呈する。規模は南西

－北東方向（長軸）約1.18m、北西－南東方向（短軸）約0.79m、検出面からの深さは約0.24mを測る。土坑の堆積土は単層で、暗灰色系の砂混じり粘質土が堆積している。

土坑内から弥生土器甕・高坏が出土している。甕は体部内面にヘラケズリが施される。口縁端部は拡張せず、そのまま終わらせる。高坏は脚部がスカート状に広がり、端部はそのまま丸く終わらせる。

時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＫ510

ＳＫ510は第Ⅱ調査区（Ｈ－９）東端、標高約36.65mで検出した土坑跡である。北側には近接して竪穴住居跡ＳＨ501～504がある。平面形態は歪な円形で、断面形態は逆台形状を呈する。底面東側に直径約0.36m、深さ約0.08mの柱穴を検出した。規模は長軸約1.12m、短軸約1.39m、検出面からの深さは約0.08mを測る。土坑の堆積土は単層で、暗灰色系の砂混じり粘質土が堆積している。

土坑内から弥生土器壺・甕・高坏・器台が出土している。壺は細頸壺の肩部と思われる。甕は体部外面に粗いハケ目が、内面にヘラケズリが施される。高坏は軸部で内面に絞り目が顕著に認められる。

時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＫ516

ＳＫ516は第Ⅱ調査区（Ｈ－９）東端、標高約36.40mで検出した土坑跡である。東側には近接して竪穴住居跡ＳＨ501～504がある。平面形態は歪な円形で、断面形態は逆台形状を呈する。底面南西側に直径約0.34m、深さ約0.12mの柱穴を検出した。規模は南北約0.59m、検出面からの深さは約0.10mを測る。土坑の堆積土は単層で、暗灰色系の砂混じり粘質土が堆積している。

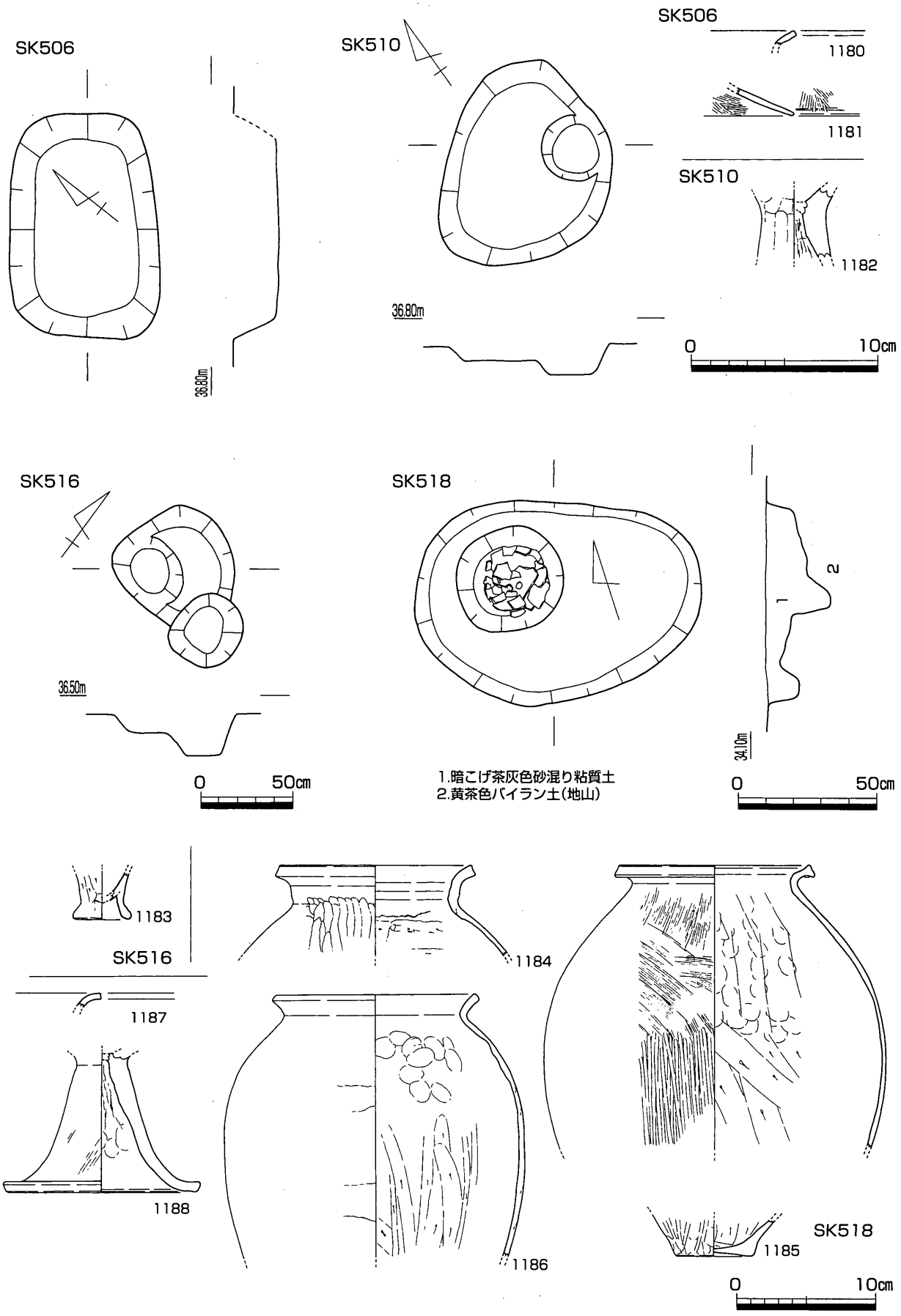
土坑内から製塩土器のみが出土している。脚部は外方に広がり、脚部高は約1.3cmを測る。脚部外面は指ナデが、体部外面にはヘラケズリが施されている。

時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＫ518

ＳＫ518は第Ⅱ調査区（Ｇ－10）東部、標高約34.10mで検出した土坑跡である。東側に近接して竪穴住居跡ＳＨ505がある。平面形態は楕円形で、断面形態は上部が逆台形状を、底面は凸凹を呈する。規模は東西方向（長軸）約1.03m、南北方向（短軸）約0.73m、検出面からの深さは約0.15mを測る。土坑の堆積土は単層で、暗こげ茶灰色砂混じり粘質土、基盤層は黄茶色バイラン土である。

土坑内の一部に纏まって弥生土器甕・高坏が出土している。甕（1185）は底部が平底で、体部の最大径は中央やや上半にある。頸部は緩やかに屈曲し、内面に面を持つ。口縁部は僅かに上下に拡張し、外面をやや窪ませる。体部外面の調整は底部際に指頭痕が、下半には縦方向のヘラミガキが、上半には斜め方向のハケ目が施されている。体部内面には下半にヘラケズリが、上半には指頭痕が施されている。その他の甕では口縁部をそのまま終わらせるものがあり、体部外面には粗いハ




第79図　ＳＫ506・510・516・518平・断面図、出土遺物実測図

ケ目が施されているものがある。

高坏は軸部からスカート状に広がり、端部を水平状に緩やかに屈曲させ、端部は上下に僅かに丸く拡張する。軸部内面には絞り目が、外面には僅かにハケ目の痕跡が認められる。

また、甕（1184）は頸部から口縁部にかけてやや直立気味に延び、口縁部を緩やかに外方に屈曲させる。口縁端部は拡張せず、そのまま終わらせる。この甕は破片がＳＫ518とＳＫ521から出土しており、接合関係にあることから両土坑は同一時期に機能していたものと考えられる。

時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

ＳＫ519

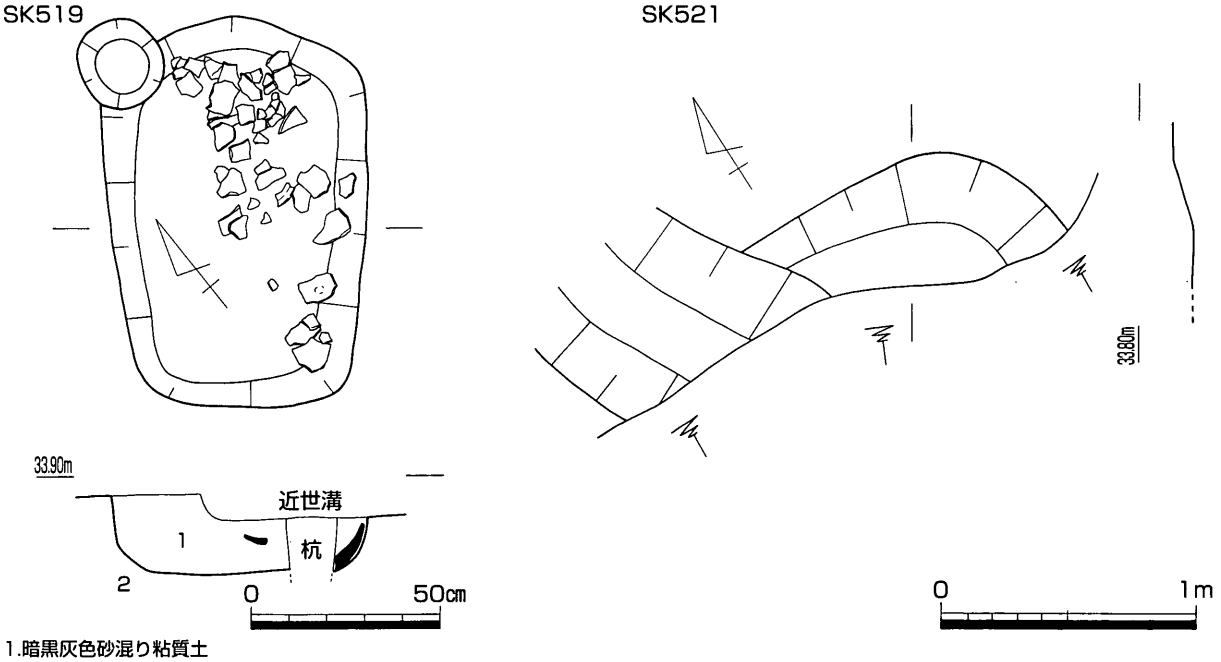
ＳＫ519は第Ⅱ調査区（Ｇ－10）東部、標高約33.90mで検出した土坑跡である。東側に近接して竪穴住居跡ＳＨ505がある。平面形態は隅丸長方形で、断面形態は緩やかなＵ字状を呈する。

規模は南西－北東方向（長軸）約1.03m、北西－南東方向（短軸）約0.68m、検出面からの深さは約0.20mを測る。土坑の堆積土は単層で、暗黒灰色砂混じり粘質土、基盤層は濁茶黄色バイラン土である。

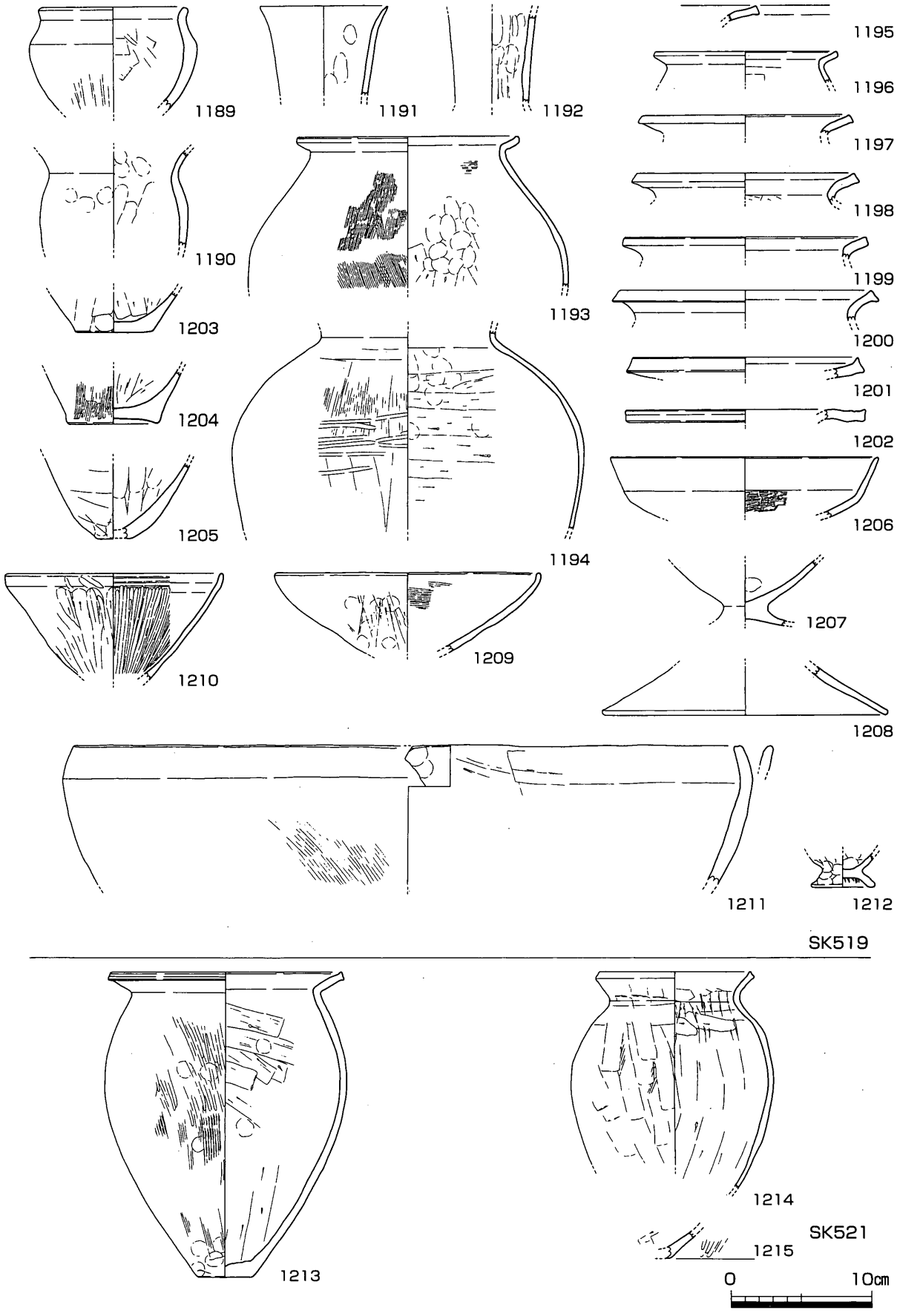
土坑内東半分から弥生土器壺・細頸壺・甕・鉢（台付鉢・大型鉢）・高坏・製塩土器が出土している。壺は口縁部のみで、ほぼ水平に開き、口縁端部を上方に摘み上げる。

細頸壺は頸部から口縁部にかけてで、下半はほぼ直線的に上方に延び、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部内面に僅かに沈線状の窪みを持つ。

甕は底部が平底で、体部の最大径はやや上半にある。頸部は緩やかに屈曲するものと内外面に稜を持ち屈曲するものが認められる。緩やかに屈曲するものは内面に面を持つ。口縁部は僅かに上下に拡張するものとそのまま終わらせるものがある。体部外面には縦方向のハケ目の後、横方向のヘラミガキが粗い間隔で施されている。甕（1193・1194）は下川津Ｂ類甕である。体部最大径は上半にある。頸部は外面が外方に「く」の字に屈曲するが、内面には面を持つ。体部外面には縦方向の




第80図　ＳＫ519・521平・断面図




第81図　ＳＫ519・521出土遺物実測図

細かいハケ目が、内面上半には指頭痕が、下半には縦方向のヘラケズリが施されている。

鉢には台付のもの（1207）があり、ＳＨ505出土の台付鉢と同様な形態を持つ。1210は体部外面に縦方向のヘラケズリが、内面には縦方向のヘラミガキが施されている。1211は大型の鉢で、口縁部が内方に屈曲する。口縁部外面には凹線を持たず、口縁端部上端に僅かに沈線を持つ。

高坏は下半がスカート状に広がり、端部はそのまま終わらせる。坏部はあまり屈曲を持たず、口縁部は直線的に外上方に延びる。

製塩土器の脚部は外方に広がり、脚部高は約1.2㎝を測る。脚部外面は指頭痕が、体部外面にはヘラケズリが施されている。

時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

ＳＫ521

ＳＫ521は第Ⅱ調査区（Ｇ－11）東部、標高33.67ｍで検出した土坑跡である。南部を現代の水路に、西側をＳＤ526によって切られている。水路・溝によって切られているために平面形態は不明である。断面形態は逆台形状を呈するものと思われる。規模は現存長軸約0.65ｍ、現存短軸約0.49ｍ、検出面からの深さは約0.07ｍを測る。土坑の堆積土は単層で、暗灰色系の砂混じり粘質土が堆積している。

土坑内から弥生土器甕が出土している。

甕は底部が平底で、体部の最大径はやや上半にある。頸部は緩やかに屈曲するものと内外面に稜を持ち屈曲するものが認められる。口縁部は僅かに上下に拡張するものと上部のみに僅かに摘み上げるものがある。1213の体部外面には縦方向の粗いハケ目の後、縦方向のヘラミガキが施されている。内面は下半に縦方向のヘラケズリが、上半は横方向の板ナデが施されている。

出土遺物がＳＫ518と接合関係にあることから同時期と考えられる。

時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

ＳＫ531

ＳＫ531は第Ⅱ調査区（Ｈ－12）東部、標高31.68ｍで検出した土坑跡である。東側に近接して竪穴住居跡ＳＨ513がある。西部を現代の水路によって切られているために詳細な平面形態は不明であるが、おそらく楕円形を呈し、断面形態は逆台形状を呈する。規模は東西現存長約0.63ｍ、南北約0.70ｍ、検出面からの深さは約0.17ｍを測る。土坑の堆積土は単層で、暗灰色系の砂混じり粘質土が堆積している。

土坑内から弥生土器壺・甕・高坏・鉢が出土している。

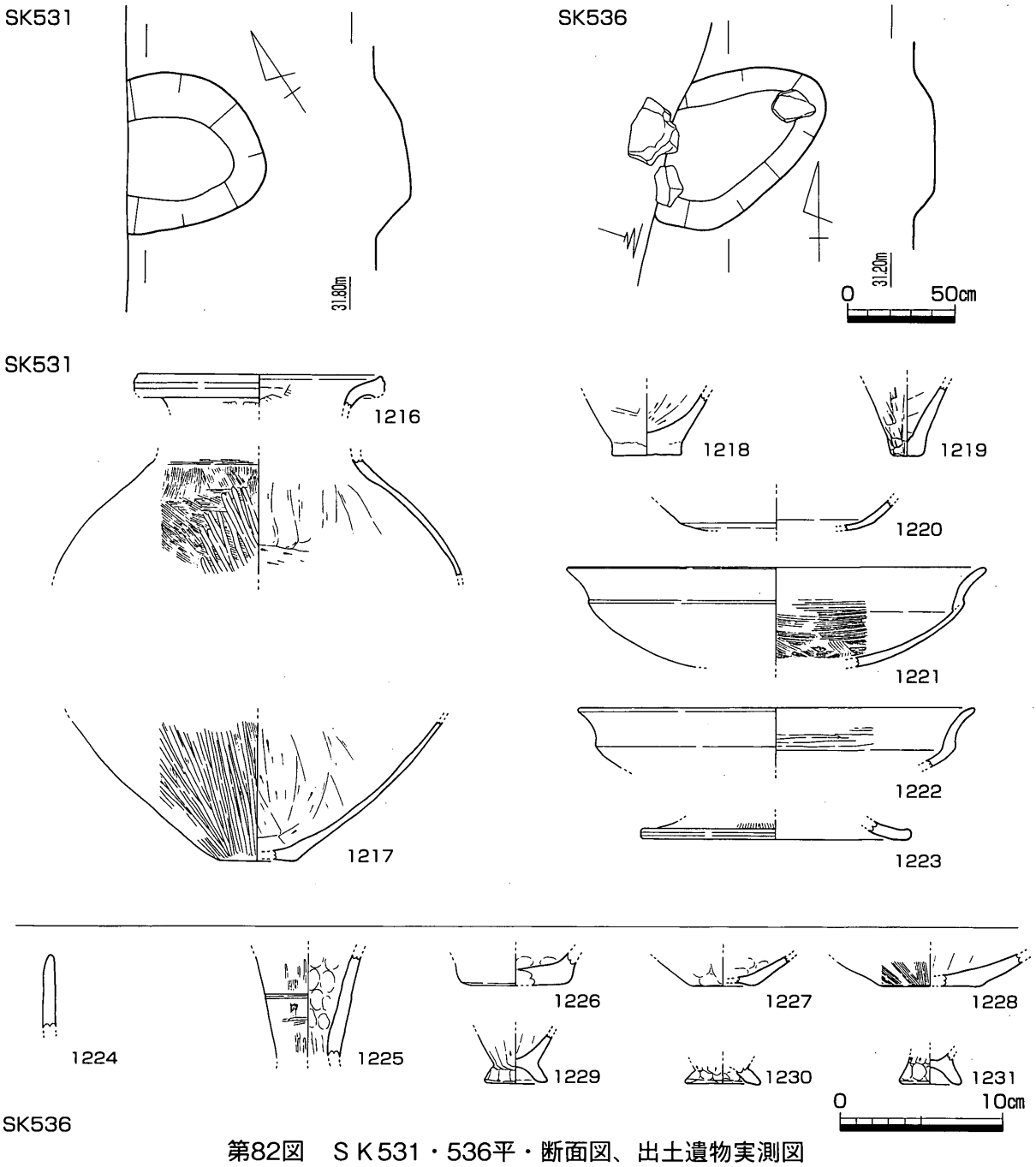
壺は底部が平底で、推定すると体部最大径はほぼ中位にあるものと考えられる。口縁部は外方に緩やかに屈曲し、ほぼ水平方向に延びる。口縁端部は上下に摘み出し、端部外面には２～３条の沈線が施されている。体部外面は上半にハケ目が、下半に縦方向のヘラミガキが施され、内面は上半に縦方向の指ナデが、下半に縦方向のヘラケズリが施されている。器壁が薄く、底部が僅かに突出させる壺の底部（1217）もある。

鉢は底部が小さく、やや外反しながら外上方に延びるものがある。

高坏は坏部が２点出土しており、坏底部から口縁部が内方に屈曲し、口縁部は外反しながら、外

上方に延び、口縁端部はそのまま丸く終わらせる。脚端部はほぼ水平状に外方に延び、口縁端部は丸く終わらせる。端部外面には僅かに沈線が施されている。

時期は弥生時代後期中葉と考えられる。




第82図　ＳＫ531・536平・断面図、出土遺物実測図

ＳＫ536

ＳＫ536は第Ⅱ調査区（Ｈ－13）東部、標高31.10mで検出した土坑跡である。西側に近接して井戸跡ＳＥ501、竪穴住居跡ＳＨ518・519がある。西部を現代の水路によって切られているために詳細な平面形態は不明であるが、おそらく歪な楕円形を呈し、断面形態は逆台形状を呈する。規模は東西現存長約0.80m、南北約0.65m、検出面からの深さは約0.10mを測る。土坑の堆積土は単層で、暗灰色系の砂混じり粘質土が堆積している。

土坑内から縄文土器片、弥生土器壺・細頸壺・甕・製塩土器が出土している。

壺は底部片のみで、平底を呈し、外面にはハケ目が施されている。

細頸壺は頸部が出土しており、ほぼ直線的に外上方に延びる。外面には１条の沈線が認められる。

製塩土器の脚部は外方に広がり、脚部高は1.0～1.5cmを測る。脚部外面は指頭痕が、体部外面にはヘラケズリが施されている。

時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

ＳＫ543

ＳＫ543は第Ⅱ調査区（Ｇ－15）中央部、標高約27.49ｍで検出した土坑跡である。北側と西側に近接してＳＸ504が、南側にはＳＤ543が東西方向に流路を取る。平面形態は南側が隅丸の長方形で、北側が歪な円形となった歪な形態となっている。断面形態はかなり削平を受けているが、逆台形状を呈する。規模は南北（長軸）約1.53m、南側で東西（短軸）約0.66m、北側で東西（短軸）約0.91m、検出面からの深さは南側で約0.06m、北側で0.09ｍを測り、北側が若干深くなっていることが解る。土坑の堆積土は単層で、暗黒灰色系の砂混じり粘質土が堆積している。

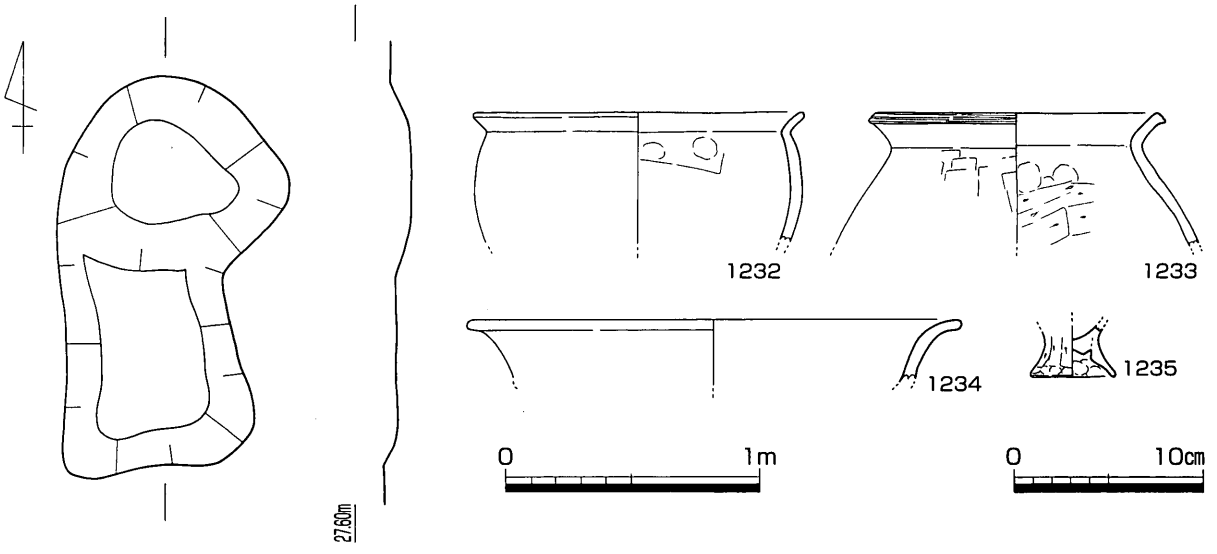
土坑内から弥生土器甕・高坏・製塩土器が出土している。

甕は頸部が「く」の字に屈曲し、口縁部はやや外反気味に外上方に延びる。口縁端部は僅かに下方に摘み出し、端部外面に２条の沈線を持つ。体部外面上半には縦方向の板ナデが、内面には頸部屈曲部から２cm程度指頭痕が認められ、それ以下は横方向のヘラケズリが施されている。体部内面下半にはヘラケズリが施されている。

高坏は口縁部が外反し、口縁端部はそのまま丸く終わらせる。

製塩土器の脚部は外方に広がり、脚部高は約1.9cmを測る。脚部外面は指頭痕及びヘラケズリが施されている。

時期は弥生時代後期中葉と考えられる。



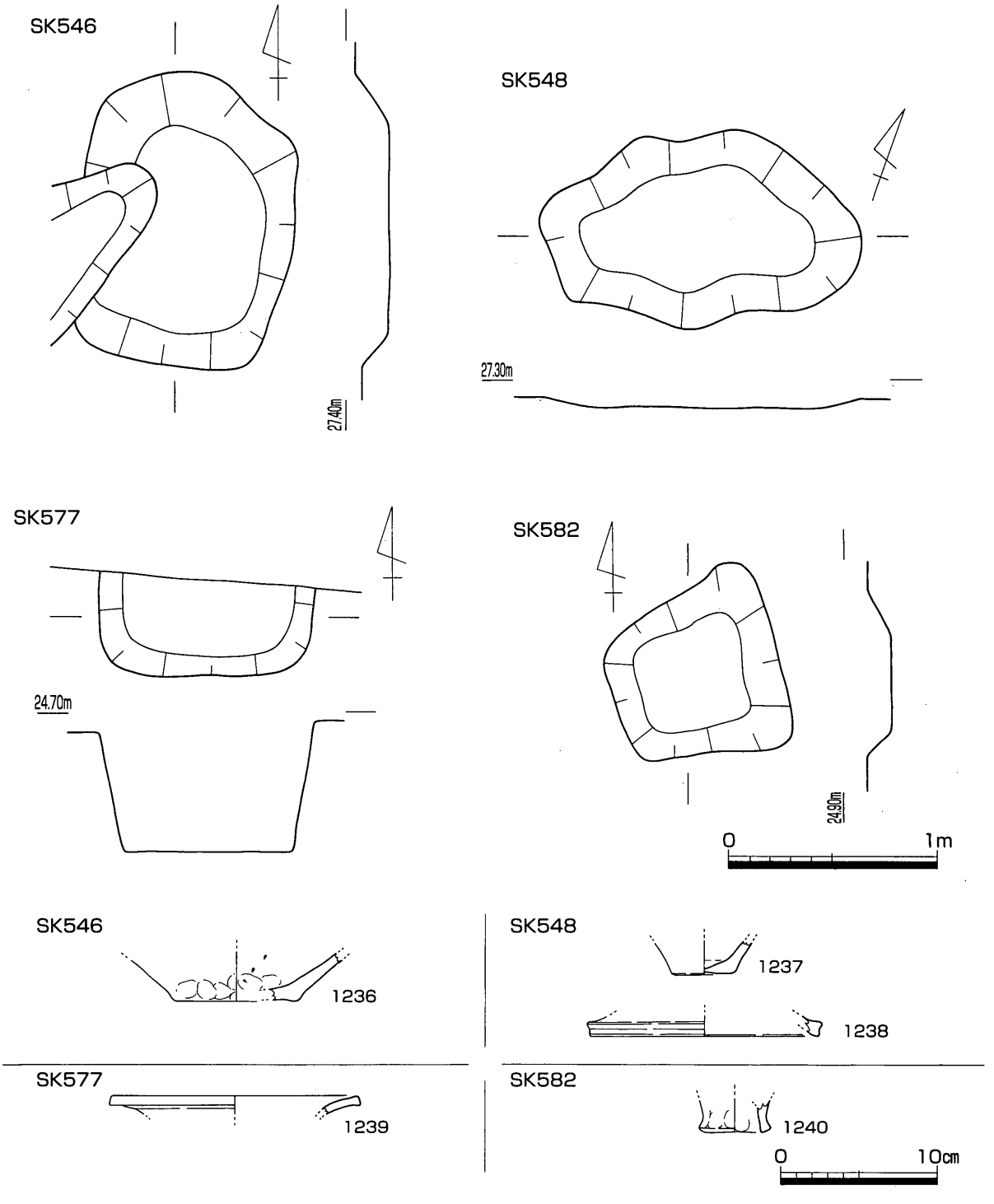

第83図　ＳＫ543平・断面図、出土遺物実測図

ＳＫ546

ＳＫ546は第Ⅱ調査区（Ｇ－15）中央部、標高約27.23ｍで検出した土坑跡である。西側をＳＸ505に切られている。平面形態は北側が歪であるが、隅丸の長方形を呈し、断面形態は逆台形状を呈する。規模は南北（長軸）約1.35ｍ、東西（短軸）約1.02ｍ、検出面からの深さは約0.13ｍを測る。土坑の堆積土は単層で、暗黒灰色系の砂混じり粘質土が堆積している。

土坑内から弥生土器壺・甕が出土している。

壺は底部が平底で、体部外面最下部に指頭痕が、内面にはヘラケズリが施されている。




第84図　ＳＫ546・548・577・582平・断面図、出土遺物実測図

甕は小片で、調整不明。

時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＫ548

ＳＫ548は第Ⅱ調査区（Ｇ－15）中央部、標高約27.22ｍで検出した土坑跡である。平面形態は歪な楕円形状を呈し、断面形態は歪な逆台形状を呈する。規模は東西（長軸）約1.55ｍ、南北（短軸）約0.86ｍ、検出面からの深さは約0.06ｍとかなり削平を受けている。土坑の堆積土は単層で、暗黒灰色系の砂混じり粘質土が堆積している。

土坑内から弥生土器甕・高坏が出土している。

甕は底部が平底を呈する。体部片は小片で調整は不明である。

高坏は脚端部で、端部外面を僅かに窪ませる。

時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＫ577

ＳＫ577は第Ⅱ調査区（Ｈ－17）中央部、標高約24.66ｍで検出した土坑跡である。平面形態は北側に現水路があり、詳細は不明であるが隅丸の方形を呈するものと考えられる。断面形態は逆台形状を呈する。規模は東西約1.05ｍ、南北現存長約0.45ｍ、検出面からの深さは約0.63ｍとかなり深い。土坑の堆積土は単層で、暗黒灰色系の砂混じり粘質土が堆積している。

土坑内からは弥生土器甕が１点出土しているのみである。

甕は口縁部が外反し、端部は僅かに上下に摘み出す。

時期は弥生時代後期中葉と考えられ、掘立柱建物跡を構成する柱穴の可能性も考えられる。

### ＳＫ582

ＳＫ582は第Ⅱ調査区（Ｇ－18）中央部、標高約24.78ｍで検出した土坑跡である。平面形態は歪な方形で、断面形態は逆台形状を呈する。規模は東西約0.82ｍ、南北約0.77ｍ、検出面からの深さは約0.13ｍを測る。土坑の堆積土は単層で、暗黒灰色系の砂混じり粘質土が堆積している。

土坑内からは弥生土器甕・製塩土器が出土している。

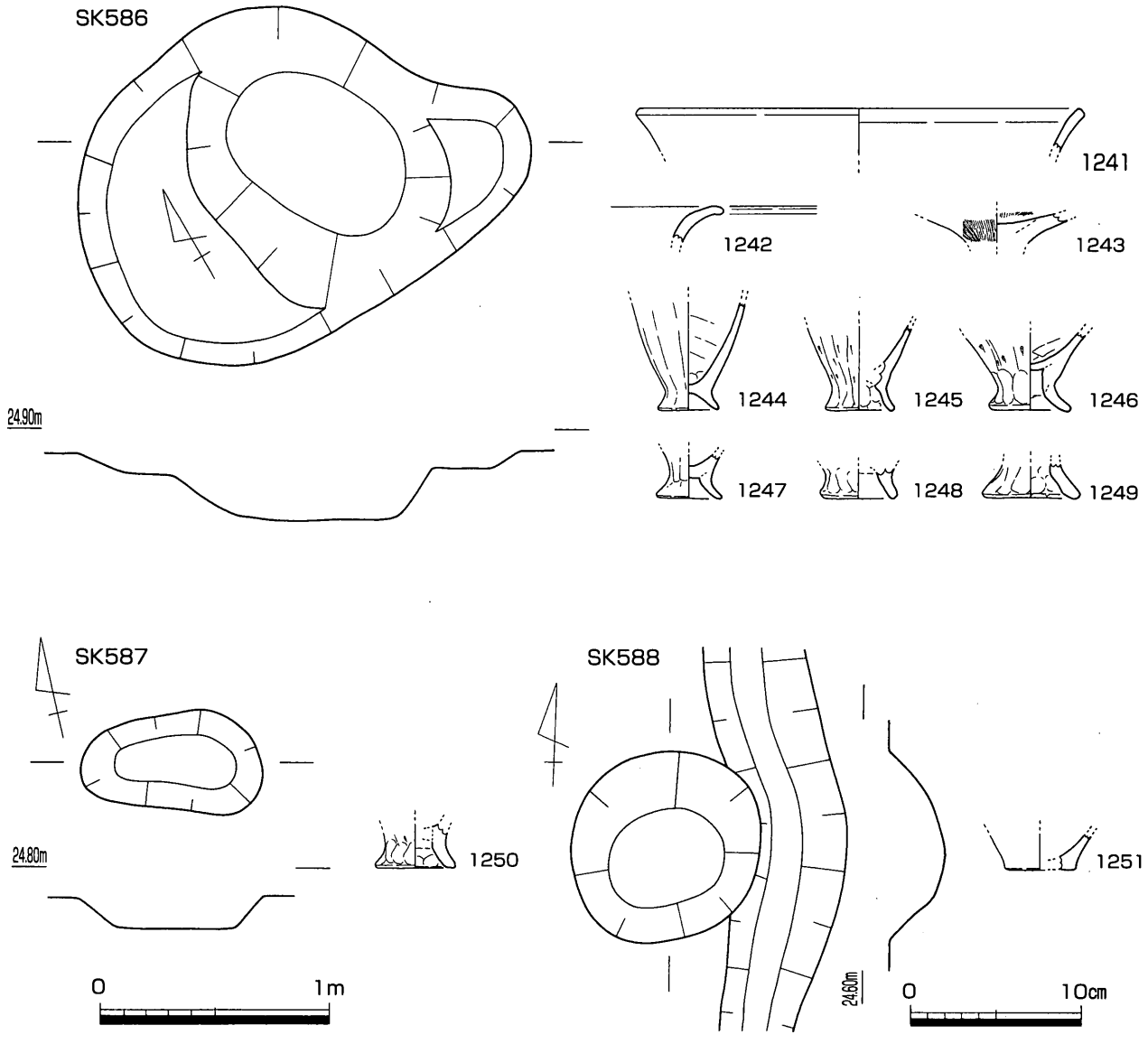
甕は小片で、内面にヘラケズリが認められる。

製塩土器の脚部は僅かに外方に広がり、脚部高は約1.5㎝を測る。脚部外面は指頭痕が施されている。

時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＫ586

ＳＫ586は第Ⅱ調査区（Ｇ－18）中央部、標高約24.79ｍで検出した土坑跡である。近接して北側に竪穴住居跡ＳＨ521があり、この土坑が竪穴住居跡の壁溝を切っていることから、竪穴住居跡より土坑が新しいことが解る。平面形態は東側に突出部があるが、それ以外は楕円形を呈し、断面形態は２段の逆台形状を呈する。規模は東西最長部約1.48ｍ、南北約1.38ｍ、検出面からの深さは１段目が約0.08ｍ、２段目（最深部）が0.29ｍを測る。ちょうど平面的に見ると中央に直径１ｍの深




第85図　ＳＫ586・587・588平・断面図、出土遺物実測図

い部分があり、両側に浅い部分がある形状となっている。土坑の堆積土は単層で、暗黒灰色系の砂混じり粘質土が堆積している。

土坑内からは弥生土器壺・甕・鉢・高坏・製塩土器が出土している。

壺・甕は小片で、詳細は不明である。

鉢は大型のもので、口縁部が僅かに外方に屈曲する。

高坏は口縁部が緩やかに外方に屈曲し、口縁端部は丸く終わらせる。坏部と脚部の接合部外面にはハケ目が施されている。

製塩土器の脚部は外方に広がり、脚部高は約1.0～1.5cmを測り、1249は脚部高がやや高く約2.0cmを測る。脚部外面は指頭痕が、体部外面には縦方向のヘラケズリが施されている。

時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＫ587

ＳＫ587は第Ⅱ調査区（Ｆ－18）中央部、標高約24.68ｍで検出した土坑跡である。南側には溝跡

ＳＤ562が南北に流路を取る。平面形態は東西に長い楕円形で、断面形態は逆台形状を呈する。規模は東西約0.80m、南北約0.42m、検出面からの深さは約0.14mを測る。土坑の堆積土は単層で、暗黒灰色系の砂混じり粘質土が堆積している。

土坑内からは弥生土器甕・製塩土器が出土している。

甕は小片で、内面にヘラケズリが認められる。

製塩土器の脚部は外方に広がり、脚部高は約1.5cmを測る。脚部外面は指頭痕が、体部外面にはヘラケズリが施されている。

時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＫ588

ＳＫ588は第Ⅱ調査区（Ｇ－18）中央部、標高約24.48mで検出した土坑跡である。近接して東側に溝跡ＳＤ565があり、土坑が溝跡を切っている。平面形態は円形で、断面形態は「Ｕ」字状を呈する。規模は直径約0.82m、検出面からの深さは約0.24mを測る。土坑の堆積土は単層で、暗黒灰色系の砂混じり粘質土が堆積している。

土坑内からは弥生土器甕・サヌカイトが出土している。

甕は体部・底部が出土しており、体部は小片で詳細は不明である。底部は平底を呈する。

時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＫ591

ＳＫ591は第Ⅱ調査区（Ｆ－19）中央部西端、標高約23.60mで検出した土坑跡である。近接して西側に自然流路ＳＲ502が、東側に溝跡ＳＤ574がある。平面形態は隅丸方形を呈し、断面形態は逆台形状を呈する。規模は北東－南西約0.93m、北西－南東約0.81m、検出面からの深さは約0.08mを測る。土坑の堆積土は単層で、暗黒灰色系の砂混じり粘質土が堆積している。

土坑内からは弥生土器壺・甕・鉢・高坏・製塩土器が出土している。

壺の体部上半は球形で、頸部は直線的に上方に延び、口縁部はほぼ水平に外方に屈曲する。口縁端部は上下に拡張し、外面をやや窪ませる。体部外面には僅かにハケ目が認められ、内面はヘラケズリが施されている。底部は平底を呈する。

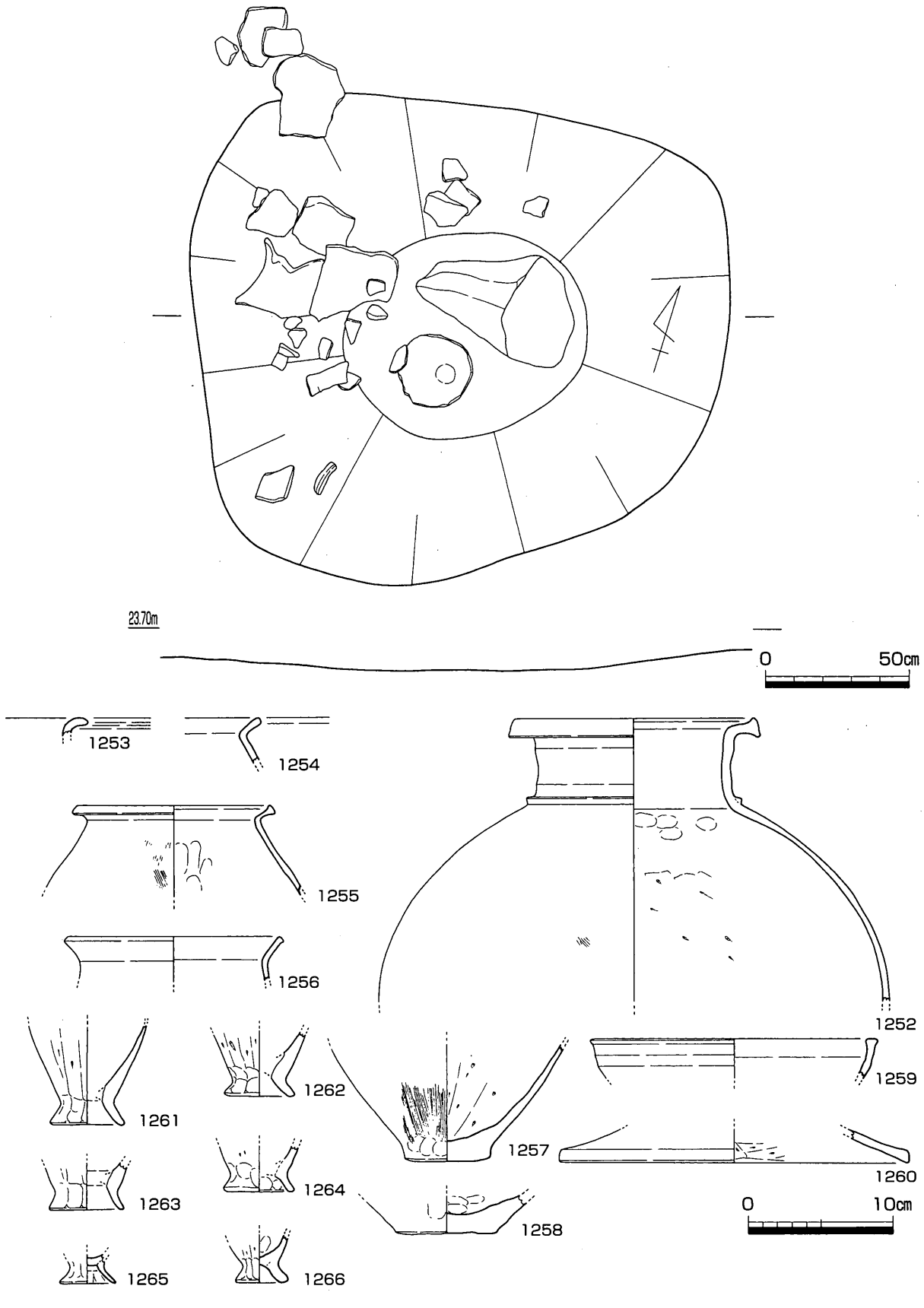
甕は頸部が「く」の字に屈曲し、口縁端部をそのまま終わらせる。体部最下段外面には指頭痕が施される。体部外面には粗いハケ目が、内面にはヘラケズリが施されている。1255は下川津Ｂ類甕で、口縁端部を僅かに上方に摘み上げる。体部外面には細かいハケ目が、内面には上半に指頭痕が顕著に認められる。

鉢は大型のもので、口縁部が僅かに内方に屈曲する。口縁部外面には２条の退化凹線が認められ、端部は僅かに左右に摘み出す。

高坏は脚部がスカート状に広がり、内面にヘラケズリが施されている。

製塩土器の脚部は外方に広がり、脚部高は約1.0～1.5cmを測る。脚部外面は指頭痕が、体部外面には縦方向のヘラケズリが施されている。

時期は弥生時代後期中葉と考えられる。




第86図　ＳＫ591平・断面図、出土遺物実測図

## 6．溝状遺構

第Ⅱ調査区で検出した溝状遺構は総数74条（ＳＤ507～580）で、第Ⅱ調査区全域で検出している。

溝状遺構は概ね南東から北西に向けて傾斜する部分については、等高線に併行するように流路（南西－北東方向）をとるものとほぼ等高線に直交するように流路（南東－北西方向）をとるものが確認できる。また、第Ⅱ調査区西半（標高28m付近から西側）では傾斜が東から西へとなり、この部分についても基本的には等高線に併行するように流路（南－北方向）をとるものと等高線に直行するように流路（西－東方向）をとるものが確認できる。ほとんどの溝状遺構はほぼ直線的に延びるものであるが、中には弧状に流路を取るもの、直角に屈曲するものが認められる。

### ＳＤ507

ＳＤ507は第Ⅱ調査区（Ｈ－９）東端、調査区際で検出した溝状遺構で、北西側には方形の竪穴住居跡ＳＨ501～504があり、流路の方向が竪穴住居跡の南辺方向とほぼ一致する。この溝はＳＤ509・510と同様に高所側からの雨水から竪穴住居を守るための排水溝と考えられる。流路方向は北東－南西（Ｎ－40°－Ｅ）をとり、等高線に併行する。規模は最大幅約0.44m、深さ約0.12m、検出長約2mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明である。

### ＳＤ508

ＳＤ508は第Ⅱ調査区（Ｈ－９）東端、調査区際で検出した溝状遺構で、北端で直角に西に屈曲し、南端でもやや西方に短く屈曲しかける。西側には方形の竪穴住居跡ＳＨ501～504があり、北端では土坑ＳＫ507を切り、南端部では溝状遺構ＳＤ509を切っている。この溝は南北で、西方に屈曲することから周溝状を呈しているが、溝西側に伴う遺構が確認できないことから、性格については不明である。流路方向は北北西－南南東（Ｎ－20°－Ｗ）をとる。規模は最大幅約1.74m、深さ約0.17m、検出長約5.4mを測る。溝内堆積土は２層で、上層が暗黄灰色砂混じり粘質土、下層が暗灰色砂混じり粘質土で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内より弥生土器甕、高坏、製塩土器が出土している。

甕は頸部が「く」の字に屈曲し、内面に明瞭な稜を持つ。口縁部は外反し、端部は上方に僅かに摘み出す。1268は口縁端部を上下に拡張し、外面に２状の凹線を持つ。若干古相の甕である。体部外面に粗いハケ目（５～６本／cm）が、内面にはヘラケズリが施されている。

高坏は脚部が筒状に延び、下方で外方に緩やかに屈曲し、広がり、口縁端部は細く終わらせる。坏部はほぼ直線的に外上方に延び、口縁部で上方に屈曲させ、端部を短く外方に屈曲させる。かなり雑なつくりである。脚部外面には粗いハケ目（５本／cm）が、内面下半にも同様なハケ目が施されている。坏部外面には僅かにヘラミガキが認められる。

製塩土器は、脚部が外方に広がり、方形に終わらせる。脚部高は約1.0～1.3cmを測る。脚部外面は指ナデ・指頭痕が、体部外面にはヘラケズリが施されている。

胎土に角閃石を含む土器は甕・製塩土器である。角閃石を含む全体の割合は約6.2％である。

出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＤ509

ＳＤ509は第Ⅱ調査区（Ｈ－９）東端、調査区際で検出した溝状遺構で、北西側には方形の竪穴住居跡ＳＨ501～504があり、流路の方向が竪穴住居跡の南辺方向とほぼ一致する。この溝は高所側からの雨水から竪穴住居を守るための排水溝と考えられる。溝の東側ではＳＤ508、ＳＫ520によって切られており、これらより先行する遺構であることがわ解る。流路方向は北東－南西（Ｎ－50°－Ｅ）をとる。規模は最大幅約0.66m、深さ約0.04m、検出長約6.14mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内より弥生土器甕、鉢、高坏、製塩土器、器台が出土している。

甕は底部が平底で、頸部が「く」の字に屈曲し、内面に明瞭な稜を持つものと緩やかに屈曲するものがある。口縁部は外反し、端部は上方に僅かに摘み出す。体部外面に粗いハケ目（６～７本／cm）が、内面には頸部屈曲際約１cm程度に指ナデが、それより下はヘラケズリが施されている。

鉢は小型のもので、口径約12.4cmで、やや内湾する体部を持つ。1284は中型の鉢で、内面に横方向のヘラミガキが施されている。

高坏は脚軸部の破片が出土している。

製塩土器は、脚部が外方に広がり、細く延び、丸く終わらせる。脚部高は約1.5cmを測る。脚部外面は指ナデ・指頭痕が、体部外面にはヘラケズリが施されている。

器台は小型のものと大型のものがある。小型のものは口縁部が外反しながら外上方に延び、口縁端部を上下に拡張する。端部外面には３条の退化凹線が施され、部分的に２個１組の竹管文が施されている。また、口縁部内面には３条の波状文が、外面には縦方向のハケ目が施されている。大型のものは脚部で、緩やかに外方に広がり、端部を上下に僅かに摘み出す。脚部には方形の透かしが認められる。脚端部外面に３条の退化凹線が、上方には縦方向のハケ目（７～８本／cm）が、内面には横方向のハケ目（７～８本／cm）が施されている。

胎土に角閃石を含む土器は甕・製塩土器である。角閃石を含む甕は体部外面に細かいハケ目、内面にはヘラケズリが施され、体部の器壁が薄いのが特徴である。角閃石を含む全体の割合は約11.5％である。

出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＤ510

ＳＤ510は第Ⅱ調査区（Ｈ－９）東端、ＳＤ509の北側に隣接して検出した溝状遺構で、北西側には方形の竪穴住居跡ＳＨ501～504があり、流路の方向が竪穴住居跡の南辺方向とほぼ一致する。この溝もＳＤ509と同様に高所側からの雨水から竪穴住居を守るための排水溝と考えられる。流路方向は北東－南西（Ｎ－60°－Ｅ）をとる。規模は最大幅約0.68m、深さ約0.07m、検出長約2.62mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内より弥生土器甕、製塩土器が出土している。

甕は頸部が「く」の字に屈曲し、内面に明瞭な稜を持つ。口縁部は外反し、端部は上方に摘み出

す。体部外面に粗いハケ目（６～７本／cm）が、内面には頸部屈曲際約1.3cm程度に指ナデが、それより下はヘラケズリが施されている。

製塩土器は、脚部が外方に広がり、細く延び、丸く終わらせる。脚部高は約0.8cmを測る。脚部外面は指頭痕が、体部外面にはヘラケズリが施されている。体部外面のヘラケズリは口縁端部近くまで施され、内面は横方向のハケ目（10～11本／cm）が施されている。

胎土に角閃石を含む土器は甕の小片である。角閃石を含む全体の割合は約7.1％である。

出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＤ511

ＳＤ511は第Ⅱ調査区（Ｈ－９）東端で検出した溝状遺構（第36図）で、方形の竪穴住居跡ＳＨ501・503・504によって切られており、ＳＨ503の西側でこの溝の延長を検出している。溝状遺構の性格はＳＤ509と同様に高所側からの雨水から竪穴住居を守るための排水溝と考えられ、この当たりに群集する竪穴住居群ＳＨ501～504の中で、ＳＨ502との関係が考えられる。流路方向は北東－南西（Ｎ－40°－Ｅ）をとる。規模は最大幅約0.48m、深さ約0.18m、検出長約17.0mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内より弥生土器甕、高坏、製塩土器が出土している。

甕は頸部が「く」の字に屈曲し、内面に明瞭な稜を持つ。口縁部は外反し、端部は下方に若干摘み出す。体部最大径は中央からやや上方にある。体部外面に指ナデが、内面には上半に指頭痕が、下半にヘラケズリが施されている。1293は甕で、ＳＤ526・ＳＰ5511と接合関係が認められ、これらの遺構は同時期と考えられる。

高坏は脚端部と脚部と坏部の境部分が出土している。脚端部はスカート状に外方に広がり、端部は方形に終わらせる。脚部には穿孔が認められる。境部分の高坏は、坏部外面にヘラケズリが施されている。

製塩土器は、体部外面にヘラケズリが施されている。

胎土に角閃石を含む土器は甕と製塩土器である。角閃石を含む全体の割合は約4.1％である。

出土遺物から時期は弥生時代後期前半と考えられる。

### ＳＤ512

ＳＤ512は第Ⅱ調査区（Ｈ－９）東端、方形の竪穴住居跡ＳＨ501～504の東側で検出した溝状遺構である。流路方向は等高線に斜行し、概ね北－南（Ｎ－10°－Ｅ）をとる。規模は最大幅約0.54m、深さ約0.05m、検出長約1.94mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

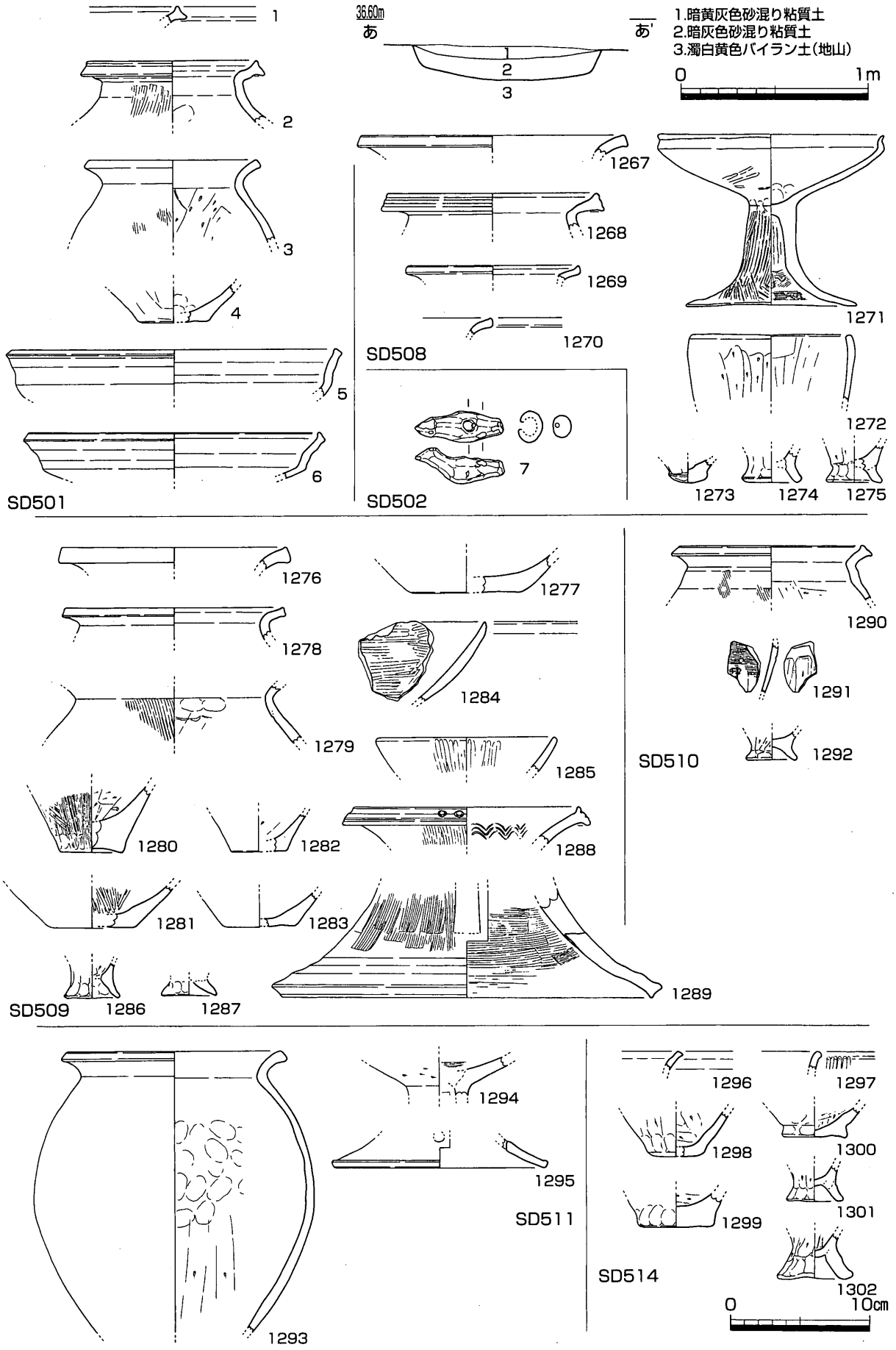
溝内より弥生土器甕の小片が出土している。

甕は体部外面にハケ目が、内面にはヘラケズリが施されている。

出土遺物から時期は弥生時代と考えられる。

### ＳＤ513

ＳＤ513は第Ⅱ調査区（Ｈ－９）東端、調査区際で検出した溝状遺構で、北西側には方形の竪穴




第87図　ＳＤ501・502・508～511・514出土遺物実測図、ＳＤ508土層断面図

住居跡ＳＨ501～504があり、流路の方向が竪穴住居跡の南辺方向とほぼ一致する。この溝はＳＤ509・510と同様に高所側からの雨水から竪穴住居を守るための排水溝と考えられる。流路方向は北東－南西（Ｎ－50°－Ｅ）をとり、等高線に併行する。おそらくＳＤ510の延長と考えられる。規模は最大幅約0.58m、深さ約0.04m、検出長約0.7mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内より弥生土器甕の破片が出土していることから弥生時代後期と考えられる。

### ＳＤ514

ＳＤ514は第Ⅱ調査区（Ｈ－９）東端、調査区際で検出した溝状遺構で、北西側には方形の竪穴住居跡ＳＨ501～504がある。流路方向は西－東（Ｎ－90°－Ｅ）をとる。規模は最大幅約0.44m、深さ約0.02m、検出長約1.9mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内より弥生土器壺、甕、鉢、製塩土器が出土している。

壺は体部片で、外面にハケ目（８本／cm）が、内面にヘラケズリが施されている。

甕は底部が平底で、口縁部はやや外反気味に延び、端部はそのまま終わらせる。体部外面に板ナデ状のハケ目が、内面にはヘラケズリが施されている。

鉢は底部のみで、端部を高台状に摘み出す。

製塩土器は、脚部が外方に広がり、端部は方形状に終わらせる。脚部高は約1.1cmと2.3cmを測る。脚部外面は指ナデ・指頭痕が、体部外面にはヘラケズリが施されている。

胎土に角閃石を含む土器は甕・製塩土器である。角閃石を含む全体の割合は約18.2％である。

出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

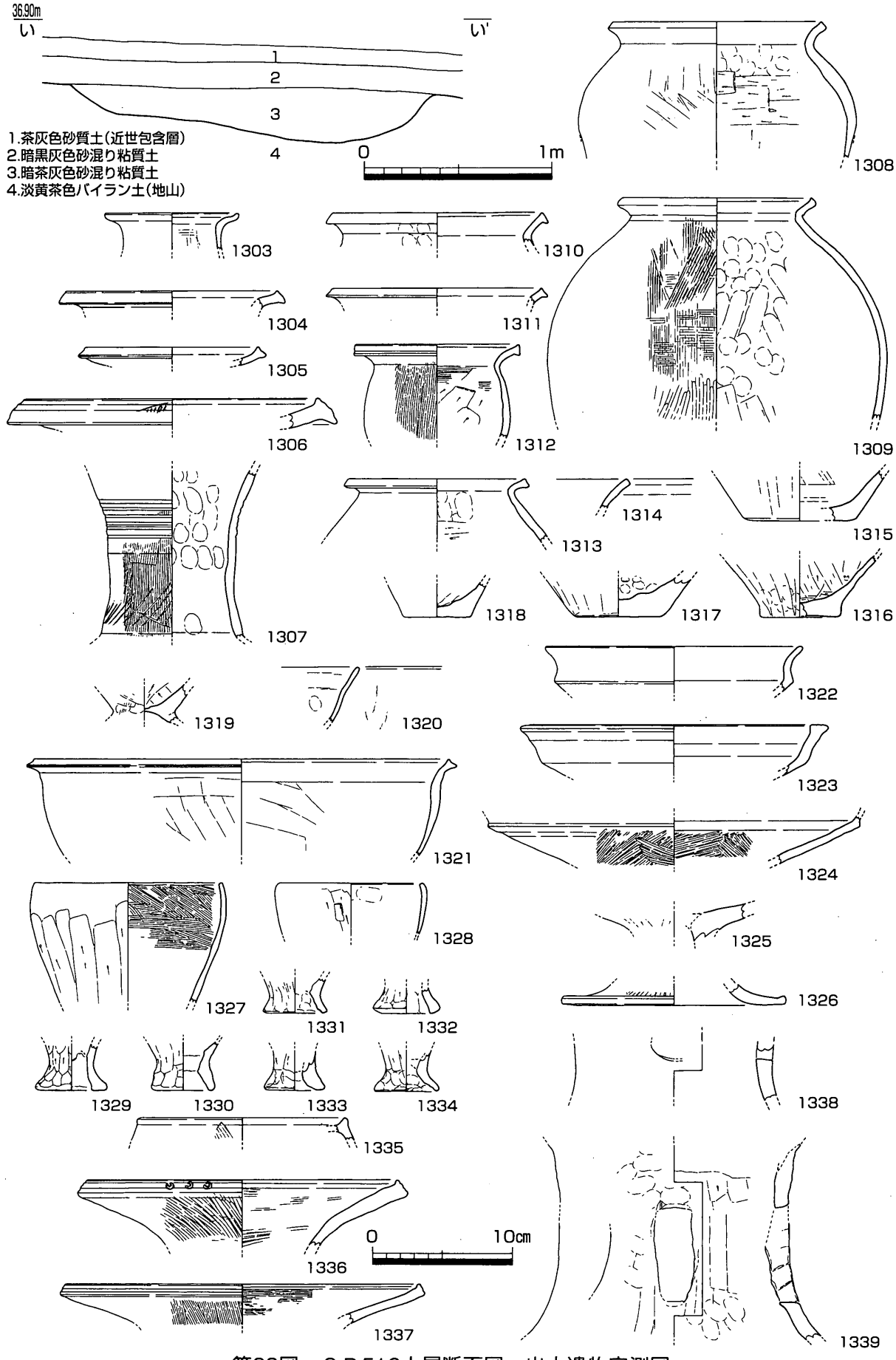
### ＳＤ515

ＳＤ515は第Ⅱ調査区（Ｈ－９）東端、調査区際で検出した溝状遺構で、北西側には方形の竪穴住居跡ＳＨ501～504があり、流路の方向が竪穴住居跡の南辺方向とほぼ一致する。この溝はＳＤ509・510と同様に高所側からの雨水から竪穴住居を守るための排水溝と考えられる。流路方向は北東－南西（Ｎ－40°－Ｅ）をとり、等高線に併行する。おそらくＳＤ507の延長と考えられる。規模は最大幅約0.38m、深さ約0.04m、検出長約4.1mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明である。

### ＳＤ516

ＳＤ516は第Ⅱ調査区（Ｈ－９）東端で検出した溝状遺構（第36図）で、南側には方形の竪穴住居跡ＳＨ501～504がある。これら竪穴住居群との切り合いは、ＳＨ502との関係は不明であるが、ＳＨ503・504には切られていることがわかる。流路方向は北西－南東（Ｎ－5°－Ｗ）をとり、等高線に直交している。北方向約８ｍの間隔をあけて、流路方向を同じに取るＳＤ521があり、同一の溝と考えられる。規模は最大幅約1.94m、深さ約0.28m、検出長約8mを測る。溝内堆積土は暗茶灰色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が緩やかに開く「Ｕ」字状を呈している。




第88図　ＳＤ516土層断面図、出土遺物実測図

溝内より弥生土器壺、甕、鉢、高坏、製塩土器、器台が出土している。

壺は長頸壺の口縁部で、ほぼ水平に屈曲し、端部を僅かに上下に拡張するものが認められる。1307は長頸壺で、頸部外面には上半に６条の退化凹線が、下半には縦方向のハケ目（７～８本／cm）の後、ヘラ先による斜め方向の沈線が施されている。

甕は底部が平底で、頸部が「く」の字に屈曲し、内面に明瞭な稜を持つものと緩やかに屈曲し、６㎜程度の平坦面をもつものがある。口縁部は外反し、端部は上方に僅かに摘み出すものと上方のみに摘み出すもの、そのまま終わらせるものがある。体部外面に粗いハケ目（６～７本／cm）が、内面には頸部屈曲際約２cm程度に指ナデが、それより下はヘラケズリが施されている。1309は体部外面上半に叩きの後ハケ目（６～７本／cm）が、下半に縦方向のヘラミガキが施されている。体部内面は上半に指頭痕･指ナデが、下半にヘラケズリが施されている。

鉢は小型のものと大型のものがあり、大型のものは口径約29.7cmを測る。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は上下に拡張する。体部内外面に板ナデが施されている。

高坏は口縁部が外反するものと直線的に延びるものがあり、前者は端部を丸く収め、後者は左右に拡張し、上面に２条の沈線が施されている。

製塩土器は、脚部が外方に広がり、端部は方形に終わらせる。脚部高は約1.2cmを測るものもあるが、ほとんどは1.5～2.0cmを測る。脚部外面は指ナデ・指頭痕が、体部外面にはヘラケズリが施されている。体部外面のヘラケズリは口縁端部から２cm程度下まで施され、内面上半には横方向のハケ目が施されている。

器台は口縁部が緩やかに外反しながら外上方に延び、端部は上方に僅かに摘み出す。端部外面には２条の沈線が確認できる。口縁部外面には粗いハケ目（５～６本／cm）が施されている。軸部ほぼ中央には長方形の透かしが確認できる。

胎土に角閃石を含む土器は甕である。角閃石を含む全体の割合は約13.9％である。

出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＤ517

ＳＤ517は第Ⅱ調査区（Ｈ－10）東部で検出した溝状遺構で、北東側には方形の竪穴住居跡ＳＨ501～504がある。流路方向は等高線に直交し、北西－南東（Ｎ－55°－Ｗ）に流路をとる。規模は最大幅約1.20m、深さ約0.22m、検出長約5.8mを測る。溝内堆積土は第１層暗茶灰色砂混じり粘質土、第２層暗黄灰色砂混じり粘質土の２層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

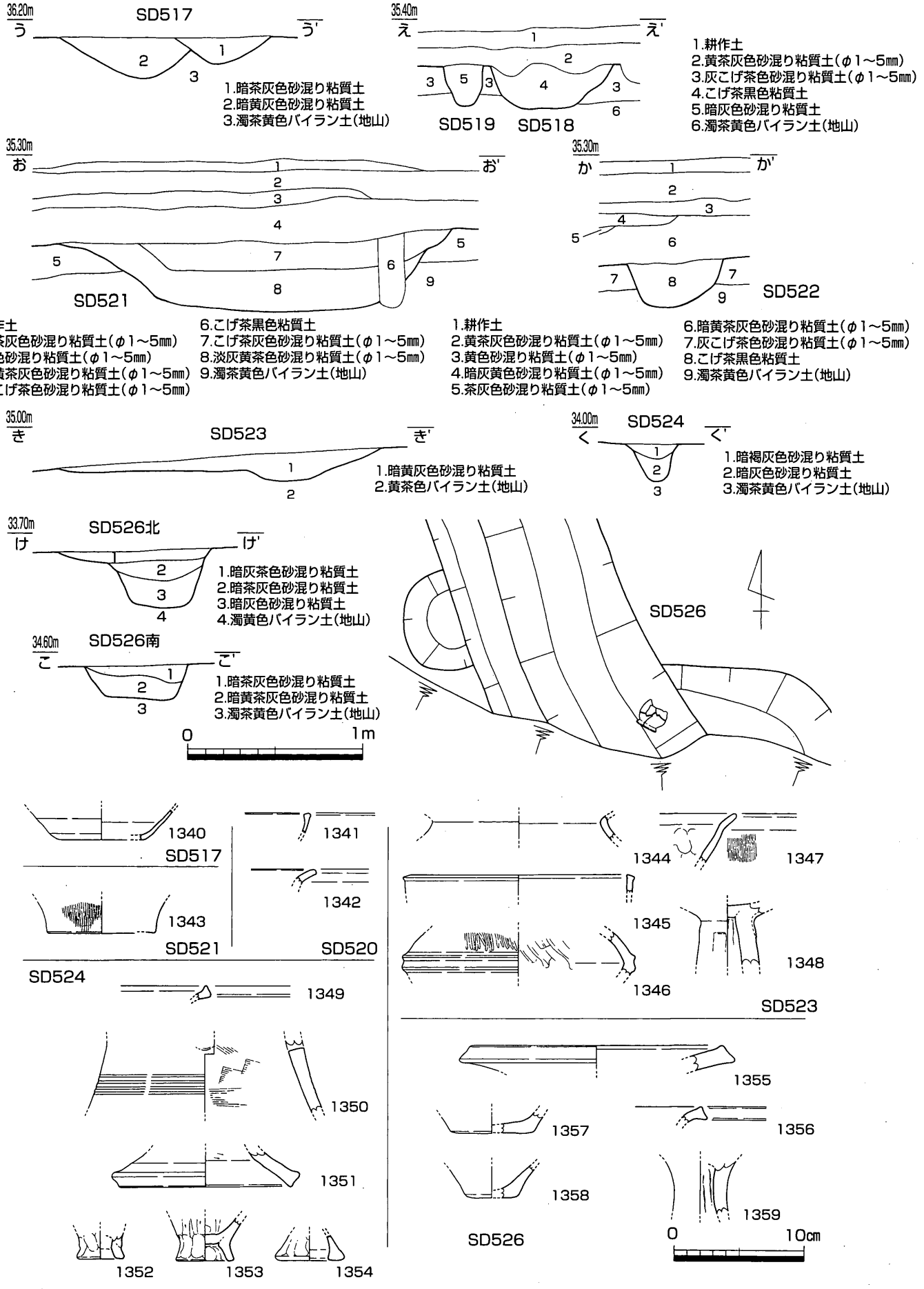
溝内より弥生土器小片、土師器坏が出土している。

土師器坏は底部が平底で、体部は直線的に外上方に延びる。

出土遺物から時期は中世と考えられる。

### ＳＤ518

ＳＤ518は第Ⅱ調査区（Ｇ－９）東端、調査区際で検出した溝状遺構で、ＳＤ519によって切られている。流路方向は等高線に斜行し、北西－南東（Ｎ－55°－Ｗ）をとる。規模は最大幅約0.3m、深さ約0.08m、検出長約1.4mを測る。溝内堆積土はこげ茶黒色粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。




第89図　ＳＤ517～519・521～524・526土層断面図、ＳＤ526遺物出土状況図、
ＳＤ517・520・521・523・524・526出土遺物実測図

溝内より遺物が出土していないので、詳細な時期は不明であるが、ＳＤ519よりは先行することが解る。

### ＳＤ519

ＳＤ519は第Ⅱ調査区（Ｇ－９）東北端、調査区際で検出した溝状遺構で、ほぼ南北に流路を取り、南部で南西方向に屈曲する。ちょうどこの屈曲部分内側にはＳＫ517があり、この土坑を区画するように掘削された溝と考える。北東隅で溝状遺構ＳＤ518を切っている。流路方向は北北西－南南東（Ｎ－10°－Ｗ）をとる。規模は最大幅約0.3m、深さ約0.04m、検出長約6.3mを測る。溝内堆積土は暗灰色砂混じり粘質土の単層で、断面は「Ｕ」字状を呈している。

溝内より遺物は出土していない。

時期は、ＳＫ517と同時期と考えられることから、弥生時代後期と考える。

### ＳＤ520

ＳＤ520は第Ⅱ調査区（Ｇ－10）東部で検出した溝状遺構で、ＳＤ521によって切られており、東西に延びる。東側ではＳＴ502を切っていることから、ＳＤ521より古く、ＳＴ502より新しいことが解る。流路は概ね等高線に併行しており、東北東－西南西（Ｎ－80°－Ｅ）をとる。規模は最大幅約0.46m、深さ約0.13m、検出長約1.96mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内より弥生土器甕、鉢、製塩土器が出土している。

甕は口縁部が外反し、端部はそのまま終わらせる。体部外面にハケ目（７～８本／cm）が、内面にはヘラケズリが施されている。

鉢は小型のもので、口縁部が内湾し、端部は外方に僅かに摘み出す。

製塩土器は体部片が出土しており、外面にヘラケズリが施されている。

胎土に角閃石を含む土器は甕・製塩土器である。角閃石を含む全体の割合は約16.7％である。

出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＤ521

ＳＤ521は第Ⅱ調査区（Ｇ－９）東部で検出した溝状遺構で、溝東側で土壙墓ＳＴ502、溝状遺構ＳＤ520を切っている。流路は、等高線にほぼ直交するように延びる。流路方向は北北西－南南東（Ｎ－20°－Ｗ）をとる。規模は最大幅約1.32m、深さ約0.23m、検出長約5.96mを測る。溝内堆積土は２層で、上層がこげ茶灰色砂混じり粘質土、下層が淡灰黄茶色砂混じり粘質土で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内より弥生土器甕、サヌカイトが出土している。

甕は小片のため、詳細は不明である。

胎土に角閃石を含む土器は甕である。角閃石を含む全体の割合は約11.1％である。

出土遺物及び掘り込み面から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＤ522

ＳＤ522は第Ⅱ調査区（Ｇ－10）東部で検出した溝状遺構で、北西側には方形の竪穴住居跡ＳＨ505があり、流路の方向は南側で等高線に斜行するが、北側では概ね併行する。流路方向は北北東－南南西（Ｎ－30°－Ｅ）をとる。規模は最大幅約0.55m、深さ約0.22m、検出長約10.0mを測る。溝内堆積土はこげ茶黒色粘質土の単層で、断面は「Ｕ」字状を呈している。

溝内より弥生土器甕が出土している。

甕は体部外面にハケ目（７～８本／cm）が、内面にも同様なハケ目が施されている。

胎土に角閃石を含む土器は含まれていない。ただし、全出土点数が２点と少ないため詳細は不明である。

出土遺物から時期は弥生時代後期と考えられる。

### ＳＤ523

ＳＤ523は第Ⅱ調査区（Ｇ・Ｈ－10）東部で検出した溝状遺構で、北側で方形の竪穴住居跡ＳＨ505を切っている。流路の方向は等高線に斜行する。流路方向は北－南（Ｎ－5°－Ｅ）をとる。規模は最大幅約2.1m、深さ約0.18m、検出長約7.0mを測る。溝内堆積土は暗黄灰色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。南部では東側で最深部が溝状に確認でき、西側は緩やかに浅い堆積となる。

溝内より弥生土器細頸壺、甕、鉢、高坏、製塩土器が出土している。

細頸壺は体部が算盤玉状を呈し、最大径部分に断面「Ｍ」状の突帯を貼り付けている。突帯外面の窪みには赤色顔料が塗布されており、大空遺跡出土資料に類例が確認できる。

甕は頸部が「く」の字に屈曲し、内面に明瞭な稜を持つ。体部内面にヘラケズリが施されている。

鉢は口縁部が直立気味になるものと外上方に延び、口縁部で「く」の字に屈曲するものがある。

高坏は脚軸部の破片が出土している。

製塩土器は体部の破片が少量出土している。

胎土に角閃石を含む土器は製塩土器である。角閃石を含む全体の割合は約11.4％である。

出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＤ524

ＳＤ524は第Ⅱ調査区（Ｇ・Ｈ－10）東部で検出した溝状遺構である。流路の方向は等高線に直交する。流路方向は北西－南東（Ｎ－30°－Ｗ）をとる。規模は最大幅約0.34m、深さ約0.1m、検出長約14.0mを測る。溝内堆積土は２層で、上層は暗褐灰色砂混じり粘質土、下層は暗灰色砂混じり粘質土で、断面は「Ｕ」字状を呈している。

溝内より弥生土器甕、製塩土器、器台、サヌカイト片が出土している。

甕は口縁端部を上方に僅かに摘み出す。体部外面に粗いハケ目（６本／cm）が、内面にヘラケズリが施されている。

製塩土器は、脚部が外方に広がり、方形に終わらせる。脚部高は約1.0～1.5cmを測るものが多いが、2.0cmを超えるものも１点（1354）出土している。脚部外面は指ナデ・指頭痕が、体部外面にはヘラケズリが施されている。

器台は小型のものと大型のものがある。大型のものは体部に円形か、短辺が丸みを持つ長方形の透かしが認められる。脚部外面に４条の沈線が施されている。

胎土に角閃石を含む土器は甕である。角閃石を含む全体の割合は約2.8％である。

出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＤ525

ＳＤ525は第Ⅱ調査区（Ｈ－10）東部で検出した溝状遺構で、北西側には方形の竪穴住居跡ＳＨ506があり、竪穴住居跡を切っている。流路方向はＳＤ524と同じ方向で、北西－南東（Ｎ－42°－Ｗ）をとる。規模は最大幅約0.6m、深さ約0.12m、検出長約6.4mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明である。

### ＳＤ526

ＳＤ526は第Ⅱ調査区（Ｇ－11、Ｈ－10・11）東部で検出した溝状遺構で、東側に５ｍの間隔をあけてＳＤ524が併走する。流路方向はＳＤ524と同様に等高線に直交し、北西－南東（Ｎ－25°－Ｗ）をとる。規模は最大幅約0.75m、深さ約0.18m、検出長約6.66mを測る。溝内堆積土は、北側土層で見ると３層となり、南側土層で見ると２層となる。北側土層の第２層と南側土層の第１層が暗茶灰色砂混じり粘質土と共通する。北側土層の第１層は暗灰茶色砂混じり粘質土、第３層が暗灰色砂混じり粘質土、南側土層の第２層は暗黄茶灰色砂混じり粘質土で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。北側土層断面及び検出状況から第１層の埋没時には流路の幅がかなり広がっていることが確認できる。

溝内より弥生土器壺、甕、高坏、器台が出土している。

壺は体部破片が出土している。外面に粗いハケ目（６本／cm）が、内面には指ナデが施されている。

甕は底部が平底で、口縁部は外反し、端部は上方に僅かに摘み出す。体部外面に細かいハケ目（14本／cm）が、内面にはヘラケズリが施されている。

高坏は脚軸部の破片が出土している。

器台は小型のものである。口縁部が外上方に延び、口縁端部を上下に僅かに拡張する。

胎土に角閃石を含む土器は甕である。小片であるために詳細は不明である。角閃石を含む全体の割合は約12.1％である。

出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＤ527

ＳＤ527は第Ⅱ調査区（Ｇ・Ｈ－11）東部で検出した溝状遺構で、現代の水路によって切られており、詳細は不明である。

### ＳＤ528

ＳＤ528は第Ⅱ調査区（Ｈ－11）東部で検出した溝状遺構で、ＳＤ529を切っている。流路方向は

等高線に直交し、北西－南東（N－25°－W）に流路をとる。約12mの間隔をあけた北西方向に同方向に流路を取るＳＤ531があることから、同一の溝の可能性が考えられる。規模は最大幅約0.4m、深さ約0.11m、検出長約2.6mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈している。

溝内より弥生土器甕の破片が出土している。

胎土に角閃石を含む土器は出土していない。

出土遺物から時期は弥生時代後期と考えられる。

ＳＤ529

ＳＤ529は第Ⅱ調査区（H－11）東部で検出した溝状遺構で、ＳＤ528、ＳＨ512の壁溝によって切られている。流路方向は等高線に併行し、北東－南西（N－55°－E）に流路をとる。規模は最大幅約0.3m、深さ約0.12m、検出長約7.5mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈している。

溝内より弥生土器壺、甕、鉢、製塩土器が出土している。

壺は長頸壺の頸部で、外面に細かいハケ目が施されている。

甕は体部小片で、内面にヘラケズリが確認できる。

鉢はミニチュアの小鉢である。

製塩土器は口縁部の破片で、外面には口縁端部近くまで縦方向のヘラケズリが施されている。

胎土に角閃石を含む土器は出土していない。

出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

ＳＤ530

ＳＤ530は第Ⅱ調査区（H－11）東部で検出した溝状遺構ある。流路方向は等高線に直交し、北西－南東（N－35°－W）に流路をとる。約８mの間隔をあけた北西方向に同方向に流路を取るＳＤ532・534があることから、同一の溝の可能性が考えられる。規模は最大幅約0.25m、深さ約0.05m、検出長約0.7mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈している。

溝内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明である。

ＳＤ531

ＳＤ531は第Ⅱ調査区（G・H－12）東部で検出した溝状遺構で、北東側には方形の竪穴住居跡ＳＨ509がある。流路は等高線に直交しており、流路方向は北西－南東（N－34°－W）をとる。

規模は最大幅約0.35m、深さ約0.04m、検出長約6.3mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈している。

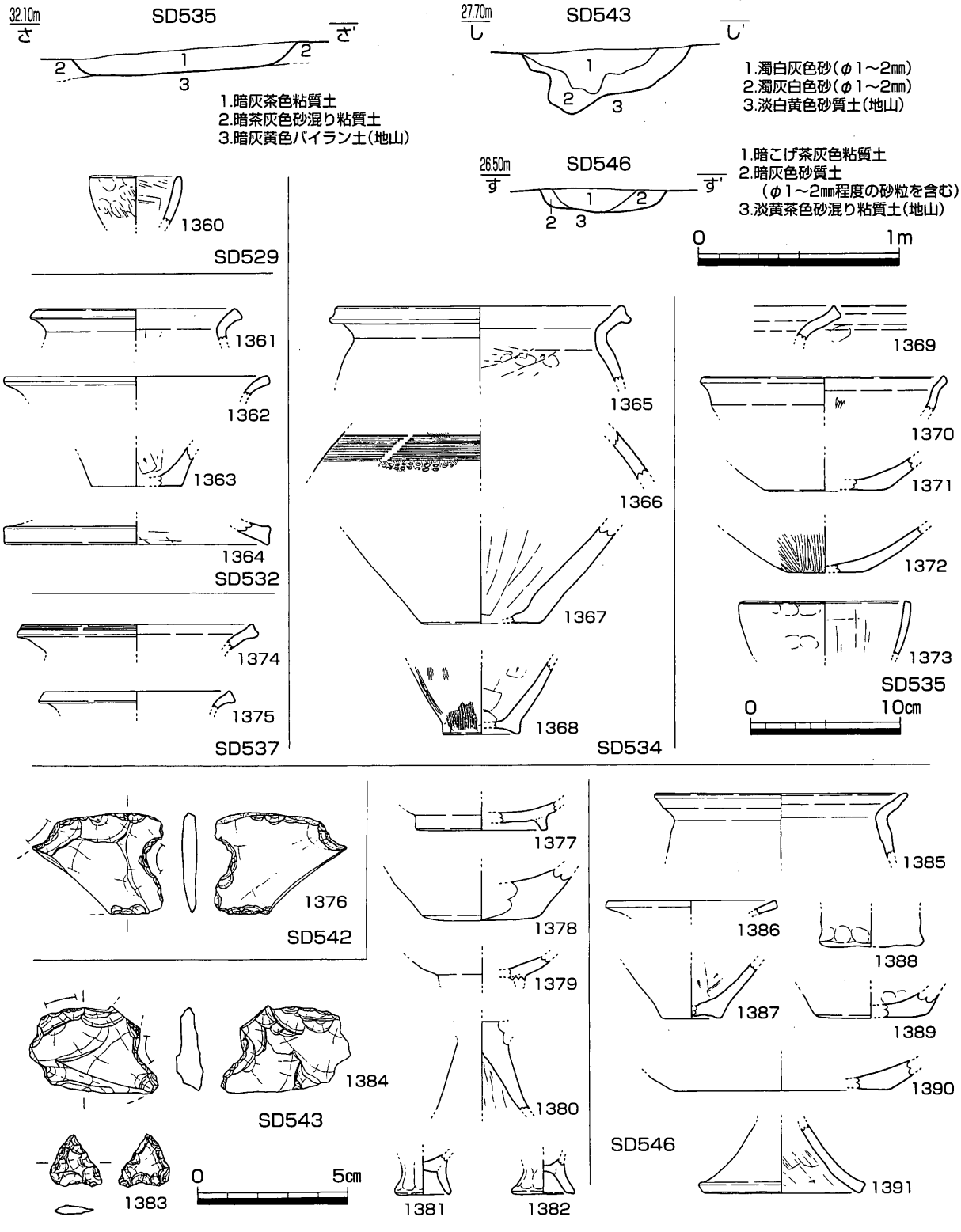
溝内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明である。

ＳＤ532

ＳＤ532は第Ⅱ調査区（G・H－12）東部で検出した溝状遺構で、北東側には方形の竪穴住居跡

ＳＨ509が、南東には方形の竪穴住居跡ＳＨ511がある。流路は等高線と直交しており、流路方向は北西－南東（Ｎ－35°－Ｗ）をとる。規模は最大幅約0.35m、深さ約0.13m、検出長約7.6mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内より弥生土器甕、高坏、器台が出土している。




第90図　ＳＤ535・543・546土層断面図、ＳＤ529・532・534・535・537・542・543・546出土遺物実測図

甕は底部が平底で、頸部が「く」の字に屈曲し、内面に明瞭な稜を持つ。口縁部は外反し、端部はそのまま終わらせる。体部外面に細かいハケ目（８～９本／cm）が、内面にはヘラケズリが施されている。

高坏は脚軸部の破片、脚端部が出土している。

器台は筒部が出土しており、長方形の透かしが確認できる。

胎土に角閃石を含む土器は出土していない。

出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＤ533

ＳＤ533は第Ⅱ調査区（Ｈ－12）東部で検出した溝状遺構で、北東側には方形の竪穴住居跡ＳＨ509があり、流路の方向が竪穴住居跡の北西辺方向とほぼ一致する。溝状遺構はＳＤ531・532・534を切っており、これらより後に掘削された遺構であることが解る。流路方向は北東－南西（Ｎ－45°－Ｅ）をとる。規模は最大幅約0.65m、深さ約0.06m、検出長約7.1mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内より弥生土器甕の破片が出土している。

甕は小片のために詳細は不明であるが、体部外面に粗いハケ目（６～７本／cm）が施されている。

胎土に角閃石を含む土器は確認されていない。

出土遺物から時期は弥生時代後期と考えられる。

### ＳＤ534

ＳＤ534は第Ⅱ調査区（Ｇ・Ｈ－12）東部で検出した溝状遺構で、北東側には方形の竪穴住居跡ＳＨ509が、南東には方形の竪穴住居跡ＳＨ511がある。流路はＳＤ532と幅約50cmの間隔をあけ、併走しており、流路方向は北西－南東（Ｎ－35°－Ｗ）をとり、等高線と直交する。規模は最大幅約0.25m、深さ約0.07m、検出長約15.0mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内より弥生土器壺、甕、鉢が出土している。

壺は底部が平底で、体部は球形を呈するものと思われ、外面に細かいハケ目（９本／cm）が上半で縦方向に、中位で横方向に施されている。内面は外面と同様なハケ目が不定方向に施されている。

甕は頸部が「く」の字に屈曲し、屈曲部内面に1.4cm程度の平坦な面を持ち、横ナデが施されている。口縁部は直線的に外上方に延び、端部は特に下方に拡張する。端部外面には凹線状の窪みを持つ。体部内面には屈曲部内面の平坦部分直下からヘラケズリが施されている。また、別の個体には体部外面下半に縦方向のヘラミガキが、内面に縦方向のヘラケズリが施されているものもある。

鉢は小型のもので、底端部を摘み出し、上げ底状を呈する。体部外面に細かいハケ目が、内面にはハケ目が施されている。

１点弥生時代中期の土器が出土しているが、混入と考えられる。

胎土に角閃石を含む土器は出土していない。

出土遺物から時期は弥生時代後期前半と考えられ、ＳＤ532に先行する溝である。

SD535

SD535は第Ⅱ調査区（H－12）東部で検出した溝状遺構で、南側には方形の竪穴住居跡SH513がある。流路方向は北東－南西（N－45°－E）をとり、等高線に併行している。北東方向約6mの間隔をあけて、流路方向を同じに取るSD533があり、同一の溝と考えられる。規模は最大幅約1.1m、深さ約0.09m、検出長約6.6mを測る。溝内堆積土は暗灰茶色粘質土の単層で、断面は上部が緩やかに開く「U」字状を呈している。

溝内より弥生土器壺、甕、鉢、製塩土器が出土している。

壺は底部が平底で、体部はかなり外開きに延びる。体部外面には縦方向のヘラミガキが、内面にはヘラケズリが施されている。

甕は口縁部が外反し、端部は上方に僅かに摘み出す。体部片が出土しており、内面にヘラケズリが施されている。

鉢は小型のもので、口径約16.0cmで、やや内湾する体部から口縁部は外反する。

製塩土器は小片で、体部外面にヘラケズリが施されている。

胎土に角閃石を含む土器は甕・製塩土器である。角閃石を含む全体の割合は約16.7%である。

出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

SD536

SD536は第Ⅱ調査区（G－12）東部で検出した溝状遺構で、流路は周溝状に弧を描く。溝状遺構の内側には竪穴住居を構成すると考えられる柱穴は確認されていない。南側には方形の竪穴住居跡SH515がある。流路方向は弧を描くが、概ね北東－南西（N－38°－E）をとる。規模は最大幅約0.3m、深さ約0.07m、検出長約4.5mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈している。

溝内より弥生土器甕の小片が出土している。

胎土に角閃石を含む土器は出土していない。

出土遺物が少量のため、詳細な時期は不明である。

SD537

SD537は第Ⅱ調査区（G－13）東部で検出した溝状遺構である。流路方向は北東－南西（N－30°－E）をとる。規模は最大幅約0.8m、深さ約0.13m、検出長約2.2mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈している。

溝内より弥生土器甕が出土している。

甕は口縁部が外反しながら延び、端部は僅かに上下に摘み出す。体部外面に粗いハケ目（6～7本／cm）が、内面にはヘラケズリが確認できる。

胎土に角閃石を含む土器は出土していない。

出土遺物から時期は弥生時代後期と考えられる。

SD538

SD538は第Ⅱ調査区（G－13）東部で検出した溝状遺構で、SD537と併走する。流路方向は北

東－南西（N－25°　－E）をとる。規模は最大幅約0.25m、深さ約0.13m、検出長約1.3mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は「U」字状を呈している。

溝内より遺物は出土していない。

溝状遺構内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明である。

### ＳＤ539

ＳＤ539は第Ⅱ調査区（H－13）東部で検出した溝状遺構で、井戸跡ＳＥ501から北西に延びる。流路方向は北西－南東（N－45°　－W）をとり、等高線に直交している。北西では竪穴住居跡ＳＨ518を切っている。規模は最大幅約0.35m、深さ約0.12m、検出長約3.8mを測る。溝内堆積土は暗灰色粘質土の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈している。

溝内より弥生時代の壺、甕、高坏が出土している。

壺は体部小片が出土している。

甕は底部が平底で、体部内面にヘラケズリが施されている。

高坏は口縁部が外反し、端部は細く、丸く終わらせる。

胎土に角閃石を含む土器は甕片である。角閃石を含む全体の割合は約9.6％である。

井戸跡、溝状遺構共に出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＤ540

ＳＤ540は第Ⅱ調査区（H－14）東部で検出した溝状遺構である。流路方向は北東－南西（N－50°　－E）をとり、等高線に併行している。規模は最大幅約0.4m、深さ約0.08m、検出長約6.2mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈している。

溝内より弥生土器甕が１点出土している。

甕は頸部の小片である。胎土に角閃石を含んでいる。

出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＤ541

ＳＤ541は第Ⅱ調査区（G－14、H－15）東部で検出した溝状遺構である。流路方向は若干弧を描くが、概ね北東－南西（N－15°・45°　－E）をとり、等高線に併行する。規模は最大幅約0.4m、深さ約0.16m、検出長約9.2mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈している。

溝内より弥生土器甕片が３点、サヌカイト剥片が出土している。

甕は体部の小片で、２点の胎土中に角閃石を含んでいる。

出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＤ542

ＳＤ542は第Ⅱ調査区（H－15）東部南で検出した溝状遺構である。流路方向は北－南（N－5°　－E）をとり、等高線に概ね併行する。規模は最大幅約0.6m、深さ約0.11m、検出長約2.4mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈してい

る。

溝内より器表面がかなり摩滅した弥生土器片が少量と石包丁・サヌカイト剥片が出土している。

石包丁はサヌカイト製で、片方の抉り部分が確認できる。

溝状遺構内から出土した遺物が少量で、かなり摩滅していることから、詳細な時期は不明である。

### ＳＤ543

ＳＤ543は第Ⅱ調査区（Ｇ－14・15）中央部で検出した溝状遺構である。流路方向は等高線に直交し、東－西（Ｎ－87°　－Ｅ）をとるが、東端では若干北東方向に曲がる。規模は最大幅約1.0m、深さ約0.20m、検出長約15.3mを測る。溝内堆積土は上層が濁白灰色砂、下層が濁灰白色砂の２層で、断面は底面が歪ではあるが、上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内よりかなり器表面の摩滅した弥生土器、須恵器、土師器、サヌカイト剥片が出土している。

弥生土器には壺、甕、高坏、製塩土器が出土している。

須恵器は提瓶の体部片と考えられる内外面横ナデされた小片が出土している。

土師器は内面のみに炭素を吸着させた黒色土器Ａ類椀が出土している。

サヌカイトは石包丁と石鏃である。

時期は黒色土器椀から12世紀と考えられる。

### ＳＤ544

ＳＤ544は第Ⅱ調査区（Ｇ－15）中央部で検出した溝状遺構である。流路方向はほぼ南北に流路をとり、等高線に併行する。規模は最大幅約0.2m、深さ約0.05m、検出長約3.5mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明である。

### ＳＤ545

ＳＤ545は第Ⅱ調査区（Ｈ－15）中央部南の調査区際で検出した溝状遺構である。流路方向は東西に流路を取り、等高線に直交する。規模は最大幅約0.4m、深さ約0.08m、検出長約2.4mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内より器表面がかなり摩滅した弥生土器片、サヌカイト剥片が出土している。出土した遺物がかなり摩滅していることから、詳細な時期は不明である。

### ＳＤ546

ＳＤ546は第Ⅱ調査区（Ｇ－15・16、Ｈ－15）中央部で検出した溝状遺構である。流路方向は北西－南東（Ｎ－20°　－Ｗ）をとり、等高線に概ね併行する。規模は最大幅約0.8m、深さ約0.2m、検出長約28.2mを測る。溝内堆積土は上層が暗こげ茶灰色粘質土、下層が暗灰色砂質土の２層で、断面は逆台形状を呈している。

溝内よりやや器表面が摩滅した弥生土器甕、高坏、サヌカイト剥片が出土している。

甕は底部が平底で、頸部が「く」の字に屈曲し、内面に明瞭な稜を持つ。口縁部はほぼ直線的に延び、端部はそのまま終わらせる。

高坏はスカート状に開く脚部が出土しており、内面にヘラケズリ・板ナデが施されている。

胎土に角閃石を含む土器は甕である。角閃石を含む全体の割合は約2.4%である。

出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＤ547

ＳＤ547は第Ⅱ調査区（Ｇ－16）中央部で検出した溝状遺構である。流路方向は北西－南東（Ｎ－18°－Ｗ）をとり、等高線に直交する。規模は最大幅約0.15m、深さ約0.05m、検出長約3.0mを測る。

溝内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明である。

### ＳＤ548

ＳＤ548は第Ⅱ調査区（Ｇ－16）中央部で検出した溝状遺構である。流路方向は北西－南東（Ｎ－48°－Ｗ）をとり、等高線に直交する。規模は最大幅約0.22m、深さ約0.08m、検出長約2.7mを測る。

溝内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明である。

### ＳＤ549

ＳＤ549は第Ⅱ調査区（Ｇ－16・17）中央部で検出した溝状遺構で、北西部でＳＤ550に合流し、ＳＤ551によって切られている。流路方向は北西－南東（Ｎ－61°－Ｗ）をとる。規模は最大幅約0.76m、深さ約0.08m、検出長約4.6mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内より弥生土器甕小片が出土している。

胎土に角閃石を含む土器は出土していない。

出土遺物から時期は弥生時代と考えられる。

### ＳＤ550

ＳＤ550は第Ⅱ調査区（Ｇ－17）中央部で検出した溝状遺構で、ＳＤ551と重複しながら北東－南西（Ｎ－37°－Ｅ）に流路をとる。規模は最大幅約0.66m、深さ約0.12m、検出長約18mを測る。

溝内堆積土は２層で、上層が暗茶灰色砂混じり粘質土、下層が茶灰色砂混じり粘質土で、断面は上部が緩やかに開く「Ｕ」字状を呈している。

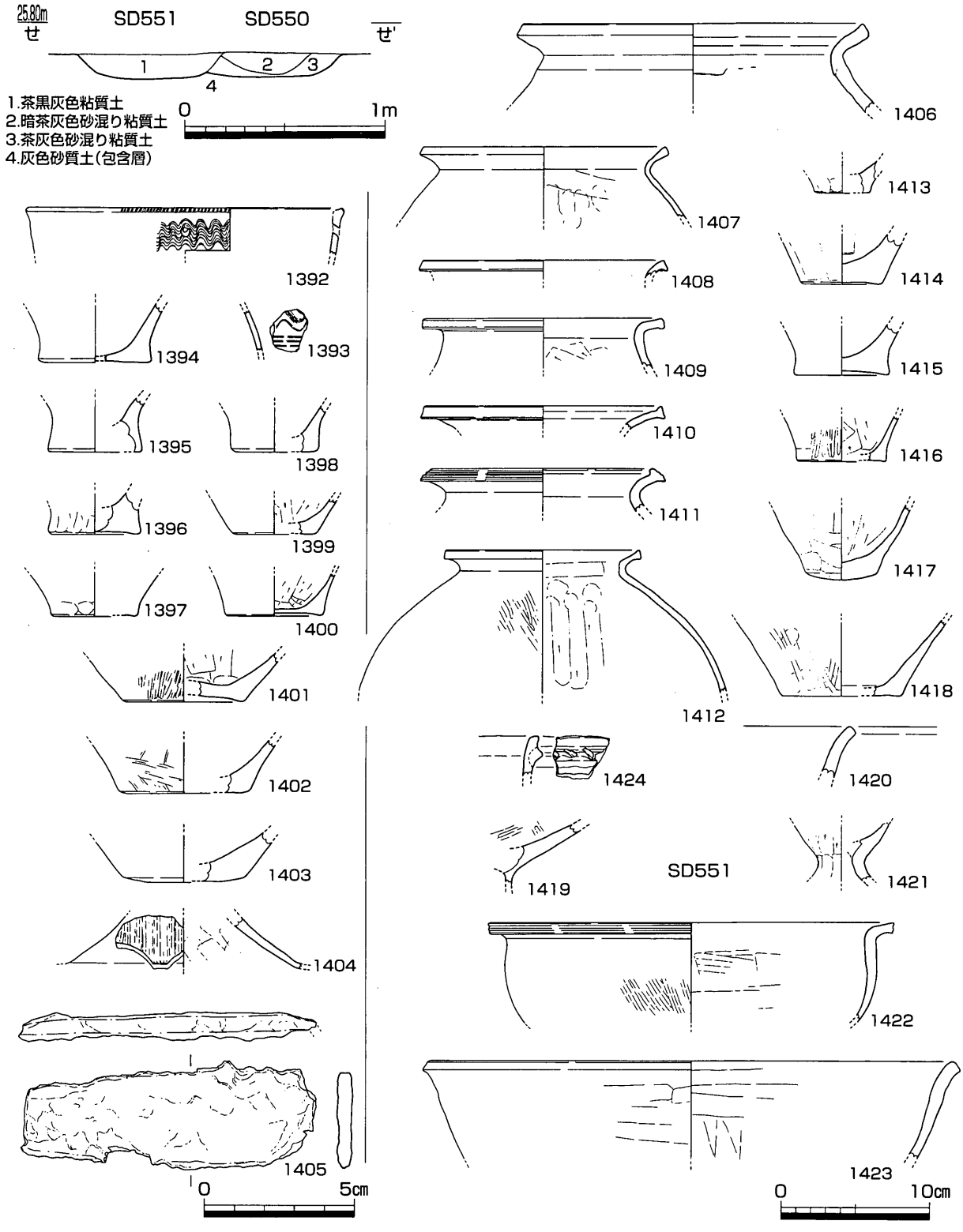
溝内より弥生土器壺、甕、高坏、鉄製品が出土している。

壺は体部片と底部が出土している。底部は平底を呈し、外面にヘラミガキが施されている。体部は外面にヘラミガキが、内面には指ナデが施されている。

甕は底部が平底で、突出した底部をもつものが多数を占める。体部外面には３条の沈線と波状文が施される破片が出土している。1392は甕の口縁部で、穿孔があり、外面に波状文が、端部に刻み目が施されている。

高坏は脚部片で、内外面に縦方向の板ナデが施されている。

胎土に角閃石を含む土器は壺・甕である。角閃石を含む全体の割合は約14.0%である。




第91図　ＳＤ550・551土層断面図、出土遺物実測図①

1405は鉄鎌である。

出土遺物から時期は弥生時代後期と考えられる。

ＳＤ551

ＳＤ551は第Ⅱ調査区（Ｇ－17）中央部で検出した溝状遺構で、ＳＤ550と重複しながら、南部では併走する。流路方向は北東－南西（Ｎ－35°－Ｅ）をとる。規模は最大幅約0.84m、深さ約0.11m、検出長約21mを測る。溝内堆積土は茶黒灰色粘質土の単層で、断面は上部が緩やかに開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内より弥生土器壺、甕、鉢、高坏、製塩土器が出土している。

壺は底部が平底で、体部は直線的に外上方に延びる。体部外面には縦方向のヘラミガキが施されている。

甕は底部が平底で、体部最下部に指頭痕が施されている。頸部が「く」の字に屈曲し、屈曲部内面は緩やかに屈曲する。口縁部は外反し、端部は上下に拡張するものとそのまま終わらせるもの、上方あるいは下方にのみ摘み出すものがある。口縁端部を拡張するものの端部外面には３条の沈線が認められる。1412は屈曲部内面に1.0cm程度の平坦な面を持ち、横ナデされている。体部外面にヘラミガキが、内面には平坦面から1.0cm程度の間隔をあけて、下位には縦方向のヘラケズリが施されている。

鉢は大型のもので、口径約34.8cmで、やや内湾する体部から口縁部は外反する。1422は口径約27cmを測り、口縁部はほぼ直角に外方に屈曲する。口縁端部外面には２条の沈線が施されている。

高坏は脚から坏の接合部片が出土している。坏部内面にはヘラミガキが施されている。

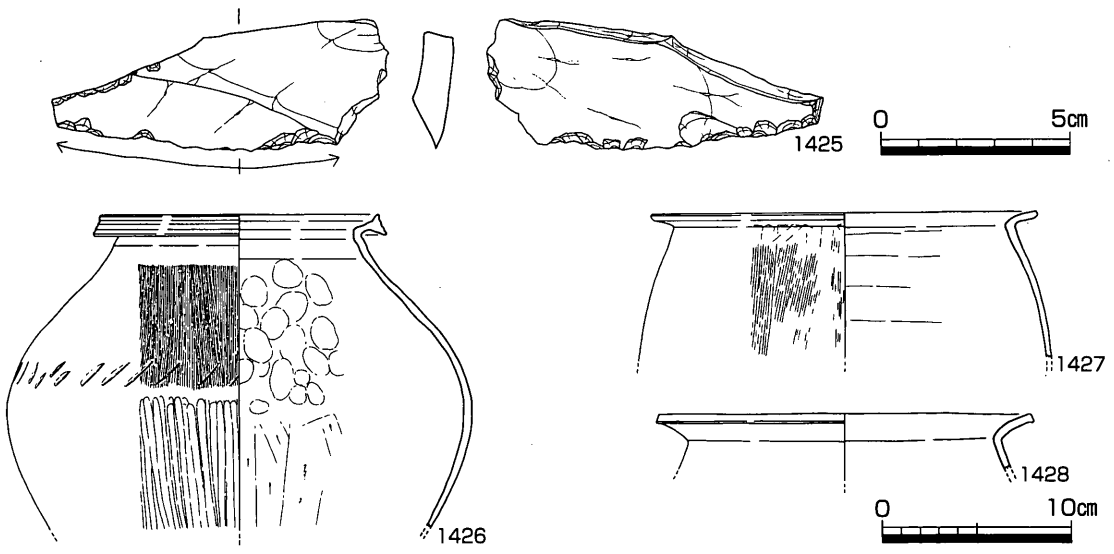
製塩土器は、脚部が外方に広がり、脚部外面は指ナデが、体部外面にはヘラケズリが施されている。

1424は弥生時代前期の甕で、口縁部外面に刻み目のある突帯が付けられている。

胎土に角閃石を含む土器は甕・製塩土器である。角閃石を含む全体の割合は約1.4％である。

出土遺物から時期は弥生時代後期前半と考えられる。

1425～1428はＳＤ550・551から出土した遺物である。1427は弥生時代中期の甕で、体部は紡錘状に細く絞まり、頸部は「く」の字に屈曲する。内面には明瞭な稜を持ち、口縁部は外方に延びる。体部外面には細かいハケ目（８～９本／cm）が、内面には板ナデが施されている。1426は弥生時代




第92図　ＳＤ550・551出土遺物実測図②

後期初頭の甕で、体部最大径が上位にあり、頸部は「く」の字に屈曲し、内面に５㎜程度の平坦面を持ち、指ナデされている。口縁端部は上下に拡張し、外面に３条の退化凹線が確認できる。体部外面の最大径部分を境に上位に縦方向のハケ目が、下位に縦方向のヘラミガキが施されている。更に最大径部分には櫛描刺突文が施されている。内面は外面と同じ部分を境に上位は指ナデ・指頭痕が、下位には縦方向のヘラケズリが施されている。1428は弥生時代後期中葉の甕で、頸部が「く」の字に屈曲し、口縁部はやや外反気味に延び、端部は下方に僅かに摘み出す。

ＳＤ552

ＳＤ552は第Ⅱ調査区（Ｇ－17）中央部で検出した溝状遺構で、北部で東方向に直角に屈曲し、南部で２条に分離する。流路方向は北東－南西（Ｎ－95°－Ｅ）をとり、等高線に併行する。規模は最大幅約2.7m、深さ約0.7m、検出長約8.3mを測る。溝内堆積土は上層が第１層、下層が第２～７層で、上層は灰茶褐色砂混じり粘質土で、下層は上部が灰色系の砂質土で、下部が灰色系の砂層である。上層は深さ0.1m程度と浅く、南側で２条に分岐する。下層は断面「Ｖ」字状を呈し、しっかりした流路を持つ。

溝内より弥生土器壺、甕、高坏、製塩土器、サヌカイト剥片が出土している。

壺は体部片と底部片が出土している。底部は平底で、体部外面にヘラミガキ、ハケ目（６～７本／㎝）が、体部内面にはヘラケズリが施されている。

甕は体部片で、外面にハケ目が、内面は上位に指頭痕・指ナデが、下位にヘラケズリが施されている。1432は甕の体部で、体部最大径より上部に斜め方向のヘラ描きが、下部に縦方向のヘラミガキが施されている。

高坏は脚部と坏部の境部分で円盤充填の痕跡が確認できる。

製塩土器は、脚部が外方に広がり、丸く終わらせる。脚部高は約1.5㎝を測る。脚部外面は指ナデ・指頭痕が、体部外面にはヘラケズリが施されている。

胎土に角閃石を含む土器は甕である。角閃石を含む全体の割合は約9.8％である。

出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

ＳＤ553

ＳＤ553は第Ⅱ調査区（Ｇ－17）中央部で検出した溝状遺構で、西側で南に屈曲する。流路方向は北西－南東（Ｎ－50°－Ｗ）をとる。この溝はＳＤ551・552・557によって切られている。規模は最大幅約0.36m、深さ約0.17m、検出長約3.8mを測る。溝内堆積土は上層が暗茶褐灰色粘質土で、下層が灰褐色砂混じり粘質土の２層で、断面は上部が緩やかに開く「Ｕ」字状を呈している。

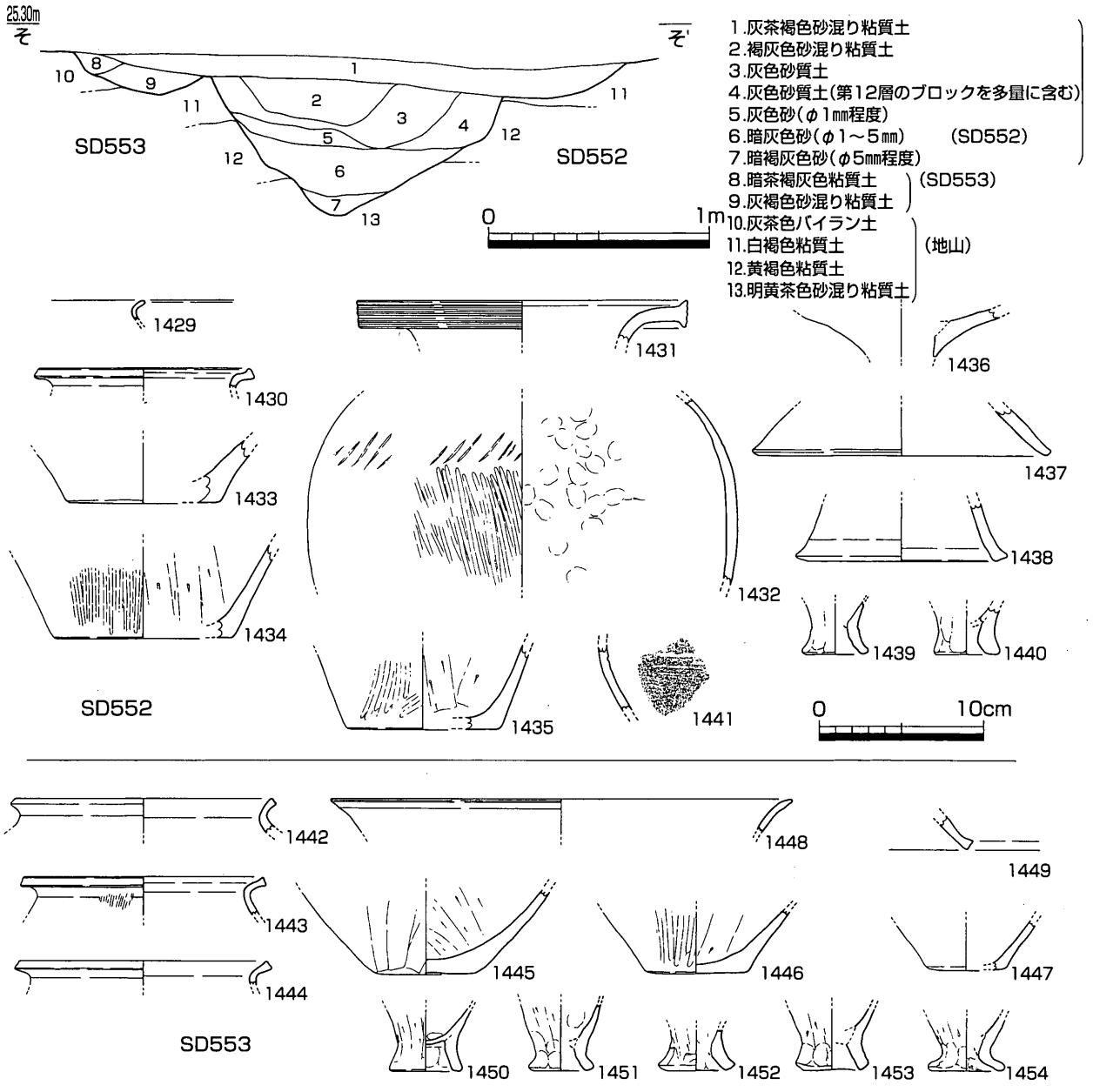
溝内より弥生土器壺、甕、高坏、製塩土器が出土している。

壺は底部片のみで、底部が平底を呈し、体部外面に板ナデが、内面にヘラケズリが施されている。

甕は底部が平底で、頸部が「く」の字に屈曲し、内面に緩やかな稜を持つ。口縁部は外反し、端部は上方に僅かに摘み出す。体部外面にハケ目（６～７本／㎝）が、内面にはヘラケズリが施されている。

高坏は脚端部の破片が出土している。

製塩土器は、脚部が外方に広がり、方形に丸く終わらせる。脚部高は約1.0～1.5㎝を測る。脚部




第93図　ＳＤ552・553土層断面図、出土遺物実測図

外面は指ナデ・指頭痕が、体部外面にはヘラケズリが施されている。

胎土に角閃石を含む土器は甕・製塩土器である。角閃石を含む全体の割合は約8.4％である。

出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＤ554

ＳＤ554は第Ⅱ調査区（Ｈ－17）中央部南の調査区際で検出した溝状遺構で、２条の溝が重複している。北東側にはこの溝と同一と考えられるＳＤ552・553がある。流路方向は北東－南西（Ｎ－32°－Ｅ）をとり、等高線と併行する。規模は最大幅約1.3m、深さ約0.45m、検出長約1.3mを測る。溝内堆積土は灰茶褐色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が緩やかに開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内より弥生土器片、サヌカイト剥片が出土している。

胎土に角閃石を含む土器は甕である。角閃石を含む全体の割合は約8.3%である。

出土遺物から時期は弥生時代後期と考えられる。

### ＳＤ555

ＳＤ555は第Ⅱ調査区（Ｈ－17）中央部南の調査区際で検出した溝状遺構で、ＳＤ554の西側に位置する。流路方向は北東－南西（Ｎ－26°－Ｅ）をとり、等高線に併行する。規模は最大幅約0.8m、深さ約0.34m、検出長約1.2mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明である。

### ＳＤ556

ＳＤ556は第Ⅱ調査区（Ｆ・Ｇ－17）中央部で検出した溝状遺構で、東側には４mの間隔をあけ、ＳＤ550・551が同じ流路方向で併走する。流路方向は北東－南西（Ｎ－40°－Ｅ）をとる。規模は最大幅約0.4m、深さ約0.09m、検出長約12.0mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内より弥生土器壺、甕、鉢、高坏、製塩土器、石匙が出土している。

壺は頸部が直線的に上方に延び、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は上下に僅かに摘み出す。

甕は底部が平底で、頸部が「く」の字に屈曲し、内面に明瞭な稜を持つものと緩やかに屈曲するものがある。口縁部は外反し、端部は下方に僅かに摘み出すものとそのまま終わらせるものがある。体部外面にハケ目が、内面は上半に指頭痕・指ナデが施されている。内面にはヘラケズリが施されている破片が確認できる。

鉢は大型のもので、口径約25.0cmで、口縁部が上方に屈曲する。口縁部外面には２条の退化凹線が僅かに認められる。口縁端部は外方に摘み出す。

高坏は坏部破片が出土し、外面にはヘラケズリが、内面には放射状のヘラミガキが施されている。

製塩土器は、脚部が外方に広がり、細く延び、丸く終わらせる。脚部高は約1.0～1.5cmを測る。脚部外面は指ナデ・指頭痕が、体部外面にはヘラケズリが、内面には横方向のハケ目が施されている。

胎土に角閃石を含む土器は甕・製塩土器である。角閃石を含む全体の割合は約3.0%である。

1476はサヌカイト製の石匙である。刃部が欠損しているが、横長を呈する。

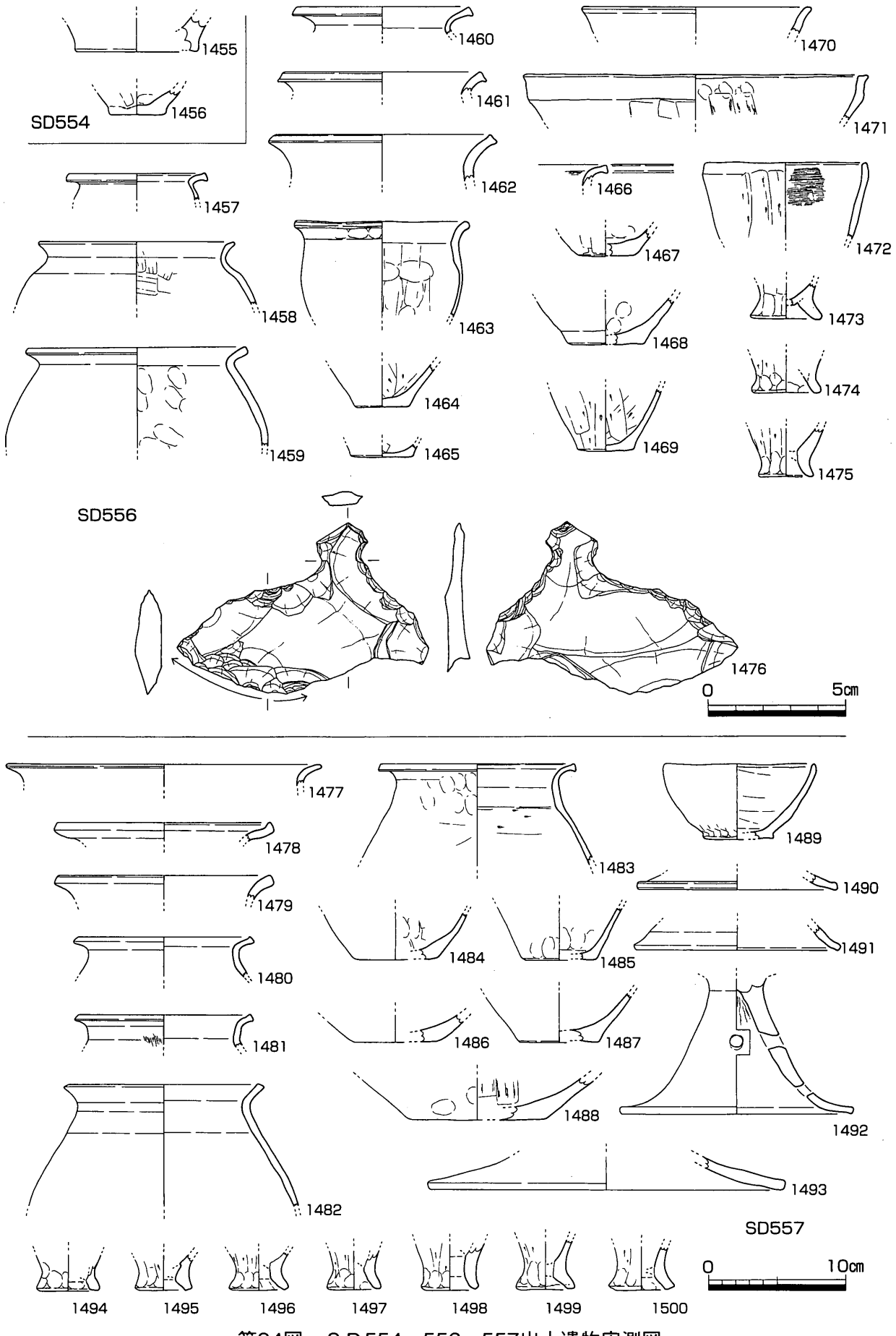
出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＤ557

ＳＤ557は第Ⅱ調査区（Ｇ－17）中央部で検出した溝状遺構で、部分的にＳＤ559と重複する。流路方向は東－西（Ｎ－77°－Ｅ）をとり、等高線に直交する。規模は最大幅約1.46m、深さ約0.07m、検出長約8.3mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内より弥生土器壺、甕、鉢、高坏、製塩土器、サヌカイト剥片が出土している。

壺は底部片で、底部は平底を呈し、体部内面に板ナデが施されている。




第94図　ＳＤ554・556・557出土遺物実測図

甕は底部が平底で、頸部が「く」の字に屈曲し、屈曲部内面に1.0～1.5cm程度の平坦面を持つものがある。口縁部は外反し、端部は上方に僅かに摘み出す。体部外面にハケ目（６～７本／cm）が、内面にはヘラケズリが施されている。

鉢は小型のもので、口径約10.8cmで、やや内湾する体部を持つ。

高坏は脚部の破片で、上下２段に穿孔が認められる。

製塩土器は、脚部が外方に広がり、方形に終わらせる。脚部高は約1.5cmを測る。脚部外面は指ナデ・指頭痕が、体部外面にはヘラケズリが施されている。

胎土に角閃石を含む土器は甕・製塩土器である。角閃石を含む全体の割合は約3.0％である。

出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

ＳＤ558

ＳＤ558は第Ⅱ調査区（Ｇ－17）中央部で検出した溝状遺構で、東側には３ｍの間隔をあけ、ＳＤ556が同じ流路方向で併走する。流路方向は北東－南西（Ｎ－30°－Ｅ）をとる。規模は最大幅約0.22ｍ、深さ約0.04ｍ、検出長約7.38ｍを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内より縄文土器浅鉢底部、弥生土器破片が出土している。

溝状遺構内から出土した遺物が破片であるために、詳細な時期は不明である。縄文土器浅鉢底部は混入と考えられる。

ＳＤ559

ＳＤ559は第Ⅱ調査区（Ｇ－17・18）中央部で検出した溝状遺構で、北西側で南に屈曲し、南東側で途中から南に分流する。その間は約20ｍで、おそらく区画溝になるものと考えられる。流路方向は北西－南東（Ｎ－49°－Ｗ）をとり、等高線に直交する。規模は最大幅約0.8ｍ、深さ約0.07ｍ、検出長約18.4ｍを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が緩やかに開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内より弥生土器壺、甕、鉢、高坏、製塩土器、縄文土器、サヌカイト剥片が出土している。

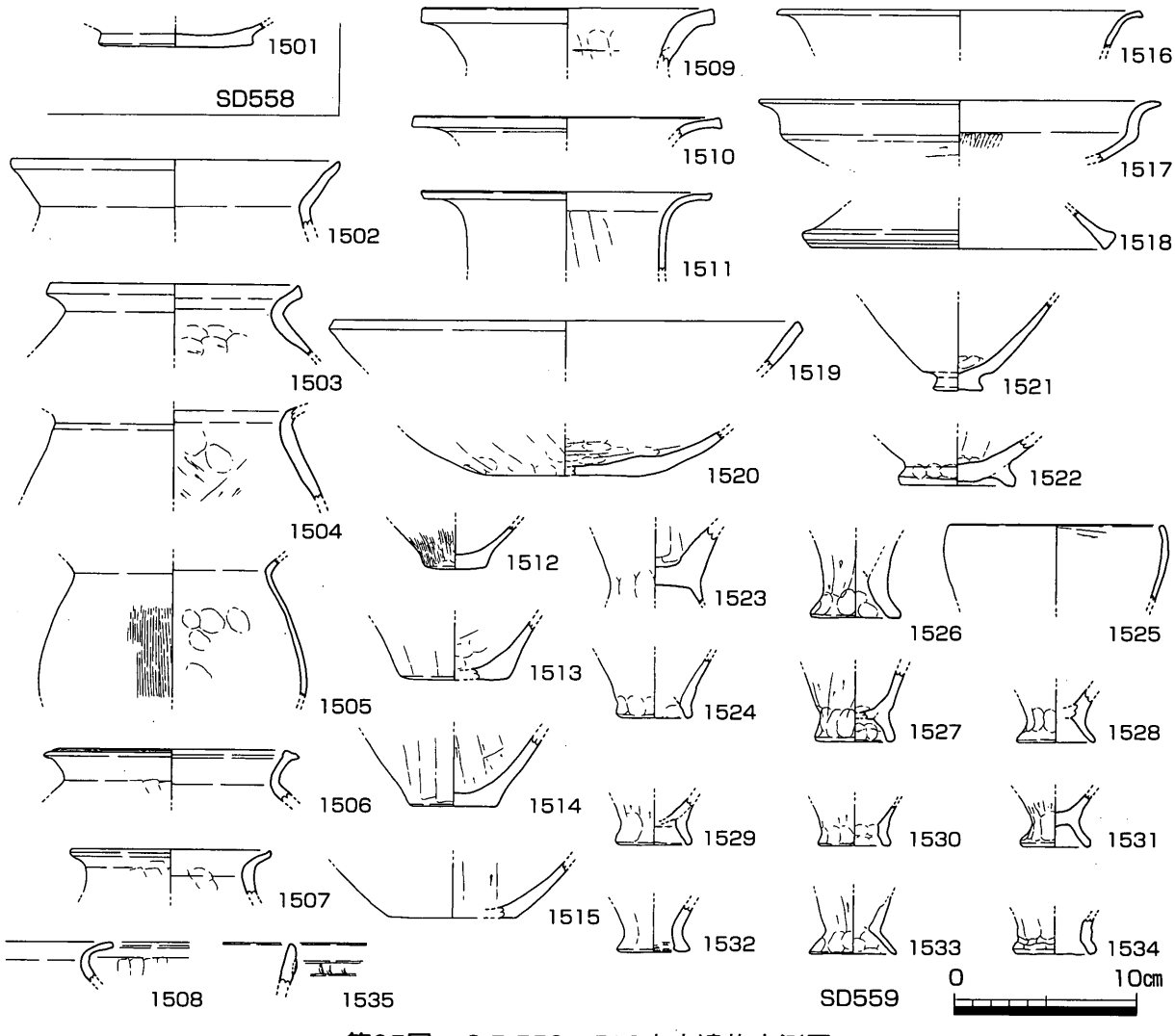
壺は頸部が直立し、口縁部が緩やかに外反するもので、口縁端部は僅かに上方に摘み出す。底部は平底で、内外面に板ナデが施されている。

甕は底部が平底で、外面に板ナデ・ハケ目が、内面にヘラケズリが施されている。頸部が「く」の字に屈曲し、内面に緩やかな稜を持つ。口縁部は外反し、端部は上方に僅かに摘み出す。体部外面に粗いハケ目（６～７本／cm）が、内面には頸部屈曲際約１cm程度に指ナデが、それより下はヘラケズリが施されている。1506は口縁端部を拡張し、１条の凹線が施されている。

鉢は小型のものと大型のものがあり、小型のものは底部が高台状を呈している。1522は高台を貼り付け、1521は突出させている。

高坏は坏部と脚部の破片である。坏部は口縁部が外反し、端部は細く、丸く終わらせる。脚端部はやや肥厚させ、外面に１条の退化凹線が認められる。

製塩土器は、脚部が外方に広がり、細く延び、丸く終わらせるものと方形に終わらせるものがある。脚部高は約1.0～1.5cmを測る。脚部外面は指ナデ・指頭痕が、体部外面にはヘラケズリが施さ




第95図　ＳＤ558・559出土遺物実測図

れている。口縁部は内湾し、体部外面には屈曲部分までヘラケズリが施されている。

縄文土器は口縁部の貼り付け突帯に刻み目が施されている。

胎土に角閃石を含む土器は甕・製塩土器である。角閃石を含む全体の割合は約4.4％である。

出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＤ560

ＳＤ560は第Ⅱ調査区（Ｆ－18）中央部で検出した溝状遺構である。流路方向は北－南（Ｎ－15°－Ｅ）をとる。約６ｍ南にあるＳＤ563と同一の溝と考えられる。規模は最大幅約0.2m、深さ約0.04m、検出長約2.4mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明である。

### ＳＤ561

ＳＤ561は第Ⅱ調査区（Ｇ－18）中央部の調査区際で検出した溝状遺構である。流路方向は北東－南西（Ｎ－22°－Ｅ）をとる。規模は最大幅約0.3m、深さ約0.07m、検出長約2mを測る。溝内

堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈している。

溝内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明である。

### SD562

SD562は第Ⅱ調査区（F・G－18）中央部で検出した溝状遺構で、SD564・572を切っている。流路方向は北－南（N－7°－E）をとる。検出した位置は東から西に向けて緩やかに傾斜し、等高線に併行する。規模は最大幅約0.8m、深さ約0.18m、検出長約17.8mを測る。溝内堆積土は茶黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が緩やかに開く「U」字状を呈している。

溝内より弥生土器壺、甕、高坏、製塩土器、サヌカイト剥片が出土している。

壺は長頸壺で、口縁部が内湾しながら外上方に延びる。

甕は頸部が「く」の字に屈曲し、内面に緩やかな稜を持つ。口縁部は外反し、そのまま終わらせる。1536は口縁端部を上下に拡張し、外面に3条の退化凹線が確認できる。

高坏は口縁部の破片が出土しており、口縁部は外反していることが解る。

製塩土器は、脚部が外方に広がり、細く延び、丸く終わらせる。脚部高は約1.0～2.0cmを測る。脚部外面は指ナデ・指頭痕が、体部外面にはヘラケズリが施されている。体部外面のヘラケズリは、口縁端部から1cm下まで施されている。

胎土に角閃石を含む土器は甕・製塩土器である。角閃石を含む全体の割合は約11.1％である。

出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### SD563

SD563は第Ⅱ調査区（G－18）中央部で検出した溝状遺構で、SD562の西側にあり、同じ流路方向を取る。流路方向は北東－南西（N－5°－E）をとる。規模は最大幅約0.6m、深さ約0.05m、検出長約12.5mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈している。

溝内より弥生土器甕片が出土している。

胎土に角閃石を含む土器は出土していない。

出土遺物から時期は弥生時代後期と考えられる。

### SD564

SD564は第Ⅱ調査区（G－18）中央部で検出した溝状遺構で、流路は蛇行する。ほぼ全域でSD561～563・565・566によって切られている。流路方向は概ね北西－南東（N－36°－W）をとる。

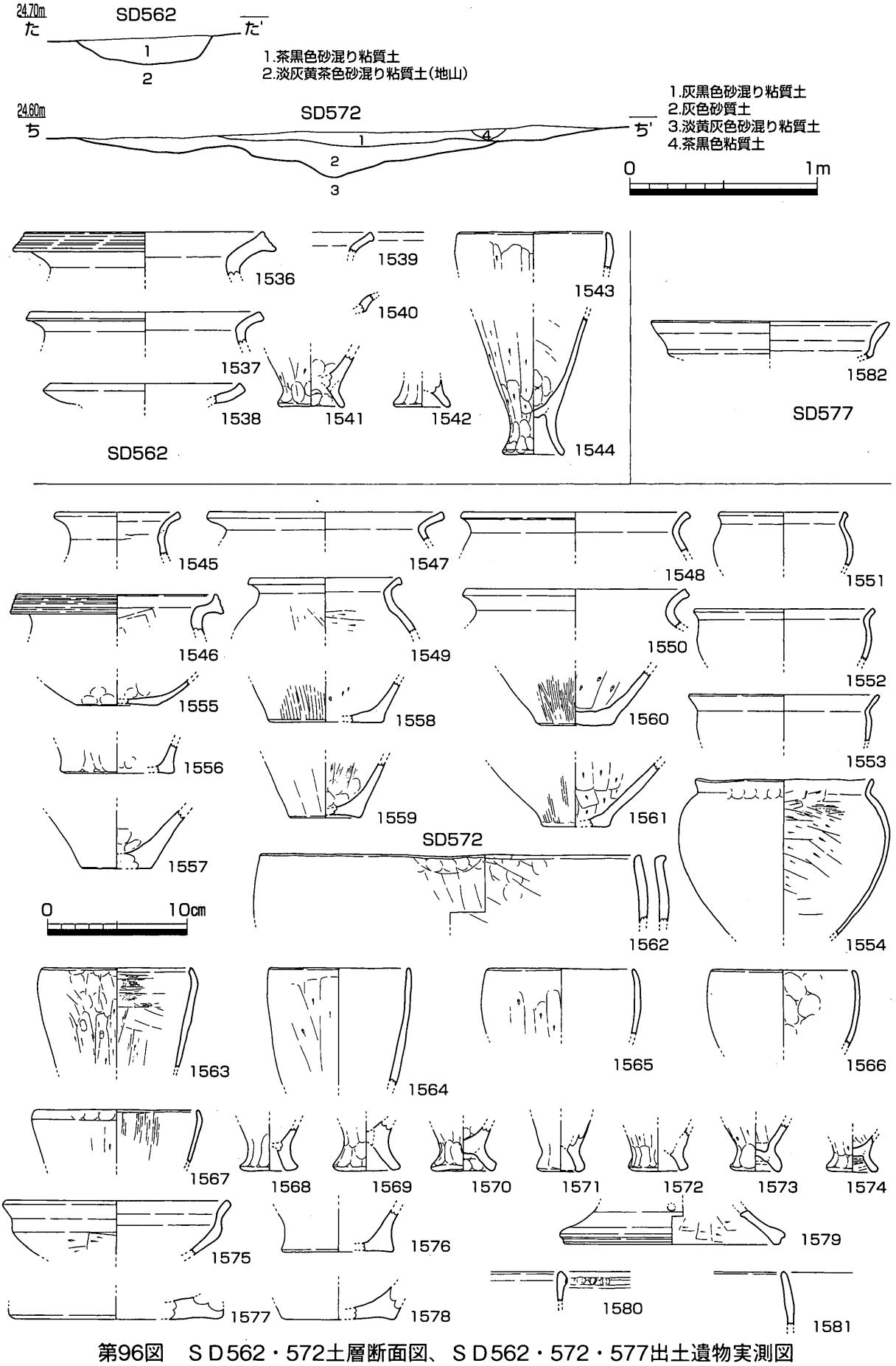
規模は最大幅約0.5m、深さ約0.08m、検出長約8.2mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈している。

溝内より遺物は出土していない。

溝状遺構内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明である。

### SD565

SD565は第Ⅱ調査区（G－18）中央部で検出した溝状遺構で、SD563の西側にあり、同じ流路




第96図　ＳＤ562・572土層断面図、ＳＤ562・572・577出土遺物実測図

方向を取る。流路方向は北東－南西（N－2°－E）をとる。規模は最大幅約0.5m、深さ約0.06m、検出長約12.7mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈している。

溝内よりサヌカイト剥片が出土している。

溝状遺構内から遺物がほとんど出土していないので、詳細な時期は不明である。

### SD566

SD566は第Ⅱ調査区（G－18）中央部で検出した溝状遺構で、SD565の西側にあり、同じ流路方向を取る。流路方向は北東－南西（N－5°－E）をとる。規模は最大幅約0.2m、深さ約0.06m、検出長約5.5mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈している。

溝内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明である。

### SD567

SD567は第Ⅱ調査区（G－18）中央部南の調査区際で検出した溝状遺構である。流路方向は北東－南西（N－85°－W）をとる。規模は最大幅約0.24m、深さ約0.06m、検出長約2.54mを測る。

溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈している。

溝内よりサヌカイト剥片が出土している。

溝状遺構内から遺物がほとんど出土していないので、詳細な時期は不明である。

### SD568

SD568は第Ⅱ調査区（G－18）中央部で検出した溝状遺構で、SD567の北側で同じ流路方向を取る。流路方向は北東－南西（N－81°－W）をとる。規模は最大幅約0.26m、深さ約0.09m、検出長約3.86mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈している。

溝内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明である。

### SD569

SD569は第Ⅱ調査区（G－18）中央部で検出した溝状遺構で、SD566の西側にあり、同じ流路方向を取る。流路方向は北東－南西（N－7°－E）をとる。規模は最大幅約0.3m、深さ約0.07m、検出長約5.7mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈している。

溝内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明である。

### SD570

SD570は第Ⅱ調査区（G－18・19）中央部で検出した溝状遺構で、SD572の西側にあり、同じ流路方向を取る。北部では北西方向に屈曲する。流路方向は北東－南西（N－45°－E）をとる。規模は最大幅約0.4m、深さ約0.06m、検出長約13.8mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土

の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈している。

溝内より弥生土器甕小片、サヌカイト剥片が出土している。

胎土に角閃石を含む土器は出土していない。

出土遺物から時期は弥生時代後期と考えられる。

### ＳＤ571

ＳＤ571は第Ⅱ調査区（Ｇ－18・19）中央部の調査区際で検出した溝状遺構で、西側でＳＤ572を切り、東側でＳＤ568によって切られている。流路方向は東－西（Ｎ－77°－Ｗ）をとる。規模は最大幅約0.5m、深さ約0.12m、検出長約8.1mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈している。

溝内より弥生土器甕片が出土している。

胎土に角閃石を含む土器は出土していない。

出土遺物から時期は弥生時代後期と考えられる。

### ＳＤ572

ＳＤ572は第Ⅱ調査区（Ｇ－17・18・19）中央部で検出した溝状遺構で、北東－南西方向に流路を取るが、途中で南東方向に屈曲する。部分的にＳＤ557・559によって切られている。流路方向は北東－南西（Ｎ－35°－Ｅ）、北西－南東（Ｎ－60°－Ｗ）をとる。規模は最大幅約3.2m、深さ約0.25m、検出長約39mを測る。溝内堆積土は上層が灰黒色砂混じり粘質土、下層が灰色砂質土の２層で、断面は浅く、広がる。

溝内より弥生土器壺、甕、鉢、高坏、製塩土器、縄文土器、サヌカイト剥片が出土している。

壺は底部が平底で、頸部がやや内傾気味に延び、口縁部は緩やかに外反する。1546は口縁端部を拡張し、３条の沈線を施す。

甕は底部が平底で、頸部が「く」の字に屈曲し、内面に明瞭な稜を持つものと緩やかに屈曲するものがある。口縁部は外反し、端部はそのまま終わらせる。体部外面に粗いハケ目（６～７本／cm）が、内面には頸部屈曲際約1.5cm程度に指ナデが、それより下はヘラケズリが施されている。

鉢は小型のもので、頸部が「く」の字に屈曲する。1562は大型の鉢で、口縁部はやや内湾する。

高坏は坏部片で、口縁部が外反し、端部はそのまま終わらせる。

製塩土器は、脚部が外方に広がり、細く延び、丸く終わらせる。脚部高は約1.3～2.0cmを測る。脚部外面は指ナデ・指頭痕が、体部外面にはヘラケズリが施されている。

胎土に角閃石を含む土器は甕・製塩土器である。角閃石を含む全体の割合は約3.4％である。

出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＤ573

ＳＤ573は第Ⅱ調査区（Ｆ－19）中央部で検出した溝状遺構で、南側には掘立柱建物跡ＳＢ503があるが、流路方向と建物主軸は合致していない。流路方向は東－西（Ｎ－83°－Ｗ）をとる。規模は最大幅約0.8m、深さ約0.08m、検出長約2.2mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「U」字状を呈している。

溝内よりかなり摩滅した弥生土器甕片が出土している。

出土遺物から詳細な時期は不明である。

### ＳＤ574

ＳＤ574は第Ⅱ調査区（Ｆ－19）中央部で検出した溝状遺構である。流路方向は北－南（Ｎ－3°－Ｅ）をとる。規模は最大幅約0.6m、深さ約0.09m、検出長約6.5mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内より弥生土器の破片が出土している。

出土遺物から時期は弥生時代後期と考えられる。

### ＳＤ575

ＳＤ575は第Ⅱ調査区（Ｇ－19）中央部で検出した溝状遺構で、西側には近接してＳＲ501がある。流路方向は北－南（Ｎ－10°－Ｗ）をとり、等高線に併行する。ちょうど北側に約６mの間隔をあけてＳＤ574があり、方向・規模から同一の溝と考えられる。規模は最大幅約0.1m、深さ約0.05m、検出長約6.2mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内より弥生土器片が少量出土している。

溝状遺構内から出土した遺物が小片であるために、詳細な時期は不明である。

### ＳＤ576

ＳＤ576は第Ⅱ調査区（Ｇ－19）中央部で検出した溝状遺構で、ＳＥ502から西北西方向に延びる。ＳＥ502との切り合いが認められないことから、同一時期に機能していたものと考えられる。流路方向は西北西－東南東（Ｎ－66°－Ｗ）をとる。規模は最大幅約0.5m、深さ約0.12m、検出長約４mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内より弥生時代の甕、製塩土器が出土している。

甕は小片で、詳細については不明である。

製塩土器は、脚部が外方に広がり、脚端部は丸く終わらせ、脚部高は約1.5cmを測る。脚部外面は指頭痕が施されている。

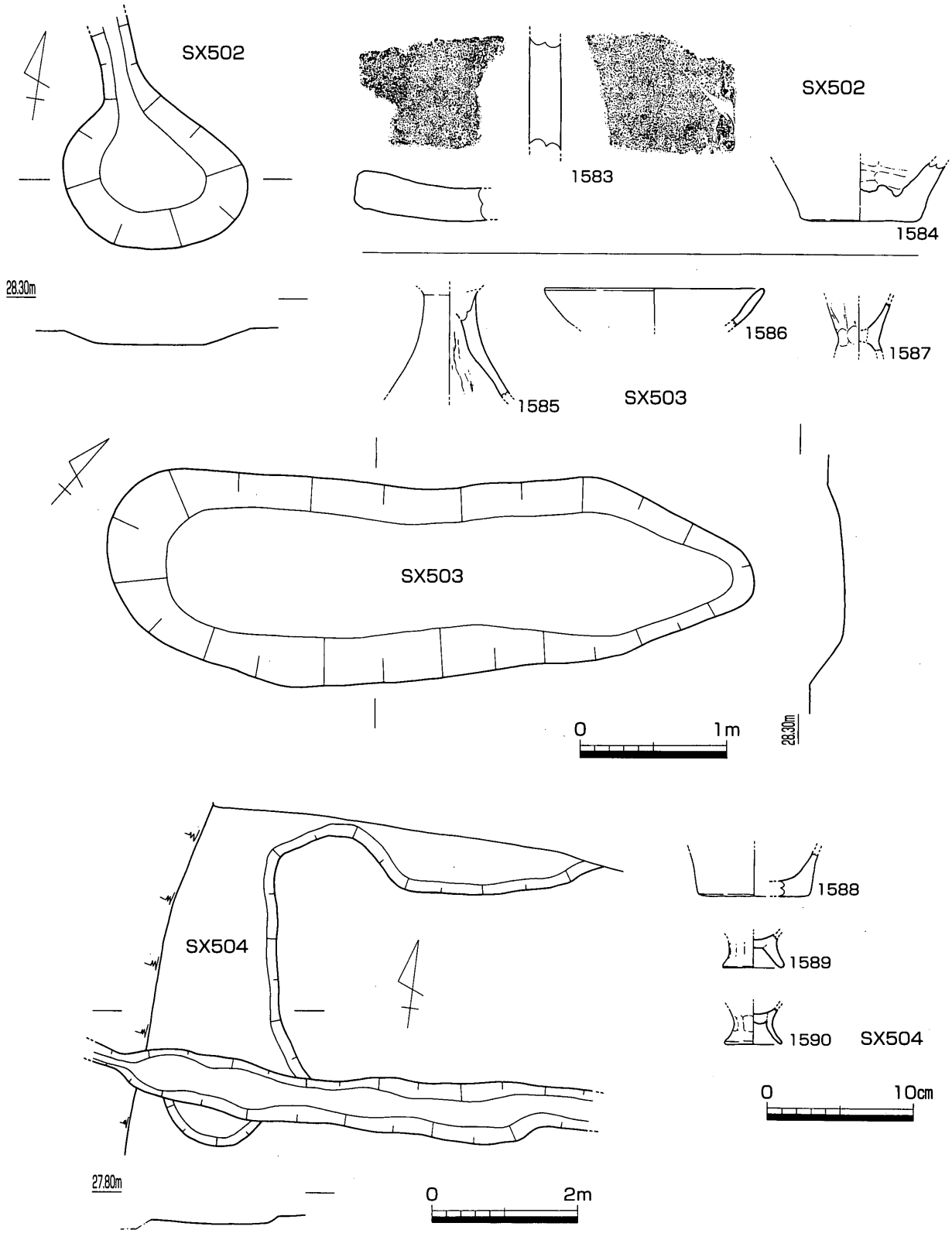
出土遺物から時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＤ577

ＳＤ577は第Ⅱ調査区（Ｆ－20）中央部西端、調査区際で検出した溝状遺構で、ちょうどＳＲ502上面にある。流路方向は東－西（Ｎ－83°－Ｗ）をとる。検出面は弥生時代の遺構面より上層の中世の遺構面から掘削されていることが解る。規模は最大幅約0.3m、深さ約0.06m、検出長約6.5mを測る。溝内堆積土は灰色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内より弥生土器甕の小片と高坏が出土している。

出土遺物からみると、時期は弥生時代と考えられるが、検出面が中世の面であることから、溝の




第97図　ＳＸ502・503・504平・断面図、出土遺物実測図

時期は中世とする。

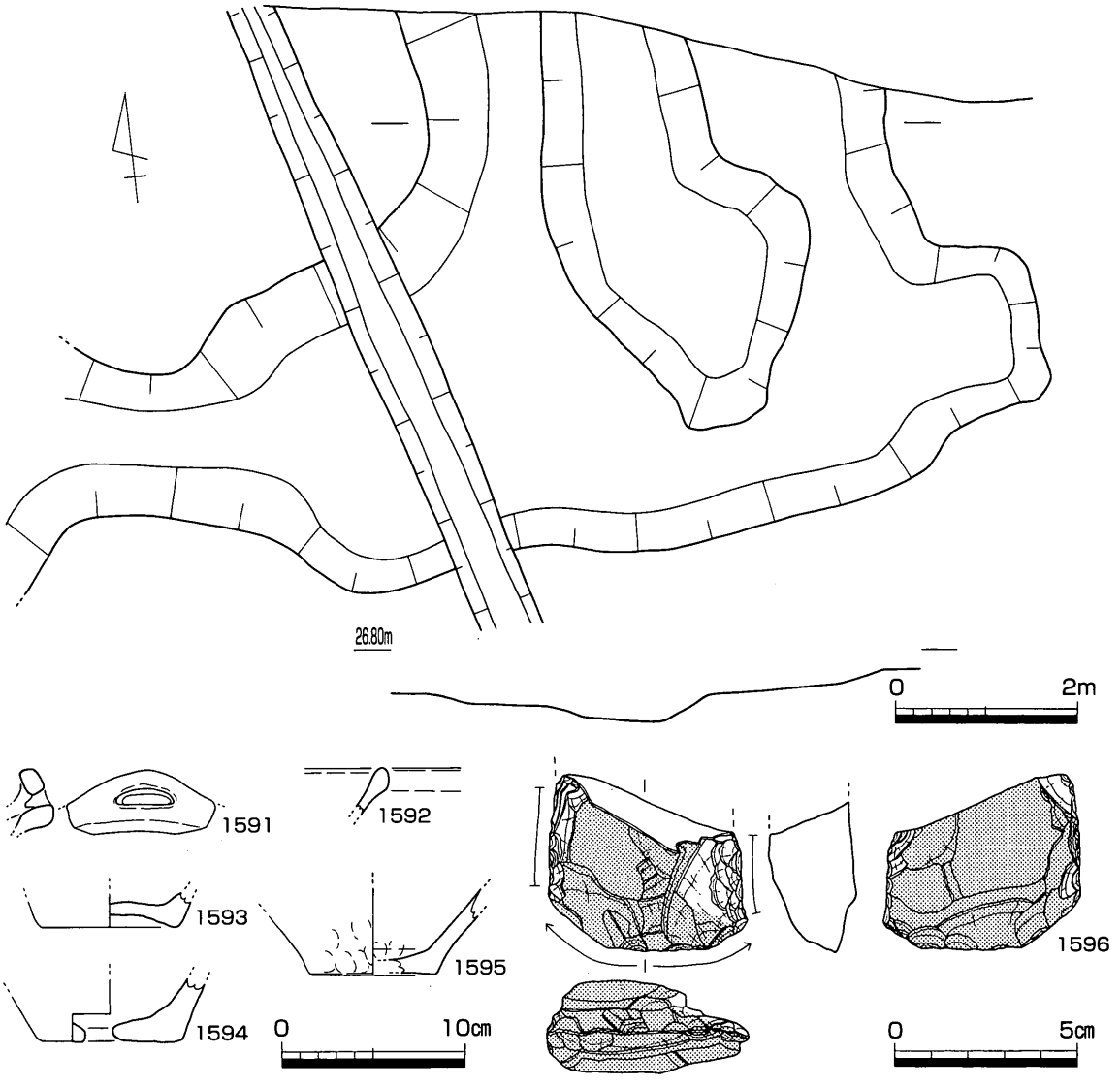
### ＳＤ578

ＳＤ578は第Ⅱ調査区（Ｆ－20）中央部西端、調査区際で検出した溝状遺構で、南東側に近接してＳＲ502があり、併走する。流路方向は北東－南西（Ｎ－50°－Ｅ）をとる。規模は最大幅約0.3m、深さ約0.10m、検出長約2.0mを測る。溝内堆積土は灰黒色砂混じり粘質土の単層で、断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

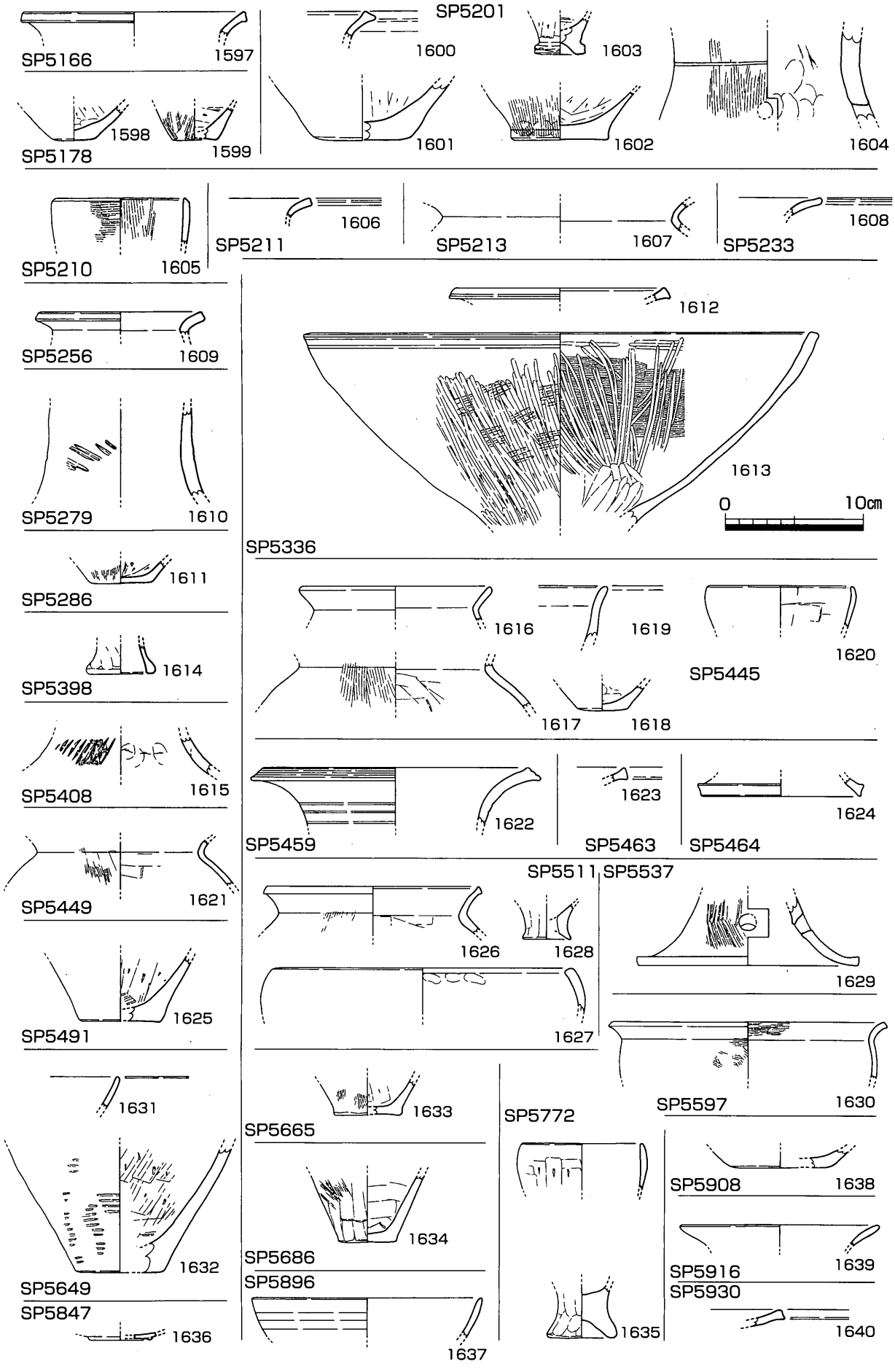
溝内から遺物が出土していないので、詳細な時期は不明である。

## 7．不明遺構

当調査区で検出した不明遺構は総数38基（ＳＸ501～538）で、第Ⅱ調査区西半分で検出している。平面形態はかなり歪な円形・楕円形・方形・長方形を中心とした土坑状のものと溝状のものが確認できる。




第98図　ＳＸ507平・断面図、出土遺物実測図




第99図　第Ⅱ調査区柱穴出土遺物実測図①

### ＳＸ501

ＳＸ501は第Ⅱ調査区（Ｇ－14）中央部で検出した。北半分が調査区外にあるために、平面形態は不明である。

堆積土中から弥生土器鉢、高坏、製塩土器が出土している。

出土遺物から弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＸ503

ＳＸ503は第Ⅱ調査区（Ｇ－14）中央部で検出した。平面形態は溝状を呈し、方向は北東－南西（Ｎ－50°－Ｅ）をとる。規模は長軸約4.4m、短軸約1.34m、検出面からの深さ約0.2mを測る。

堆積土中から弥生土器鉢、高坏、製塩土器が出土している。

出土遺物から弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＸ504

ＳＸ504は第Ⅱ調査区（Ｇ－14）中央部北側で検出した。平面形態は溝状を呈し、屈曲する。

堆積土中から弥生土器底部、製塩土器が出土している。

製塩土器は、脚部が外方に広がり、脚部外面は指ナデが、体部外面にはヘラケズリが施されている。

出土遺物から弥生時代後期中葉と考えられる。

### ＳＸ507

ＳＸ507は第Ⅱ調査区（Ｇ－15・16）中央部で検出した。平面形態は溝状を呈し、北側では２条に分岐する。

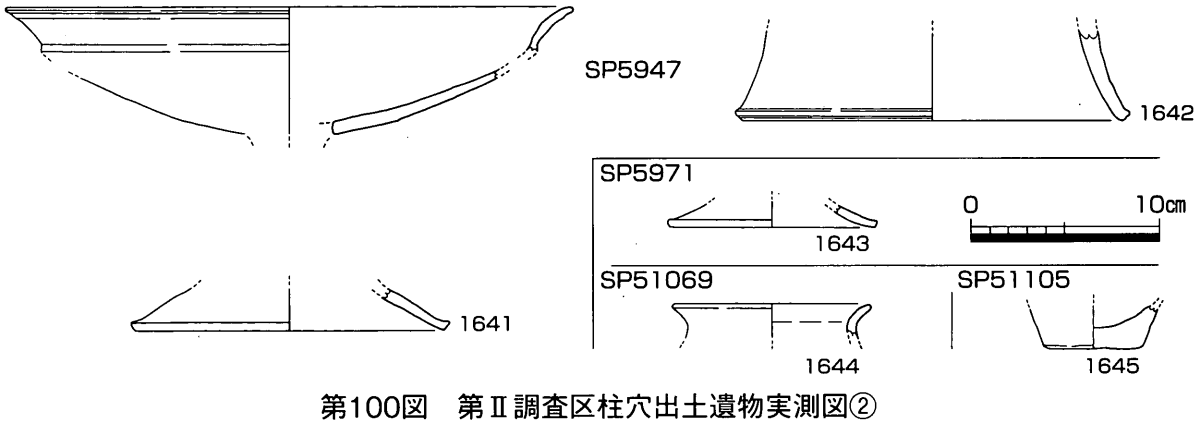
堆積土中から弥生土器底部、縄文土器の底部、打製石斧が出土している。

打製石斧はサヌカイト製で、両面がかなり摩滅している。

出土遺物から弥生時代と考えられる。

## ８．柱穴跡

当調査区で検出した柱穴跡は総数1068基（ＳＰ138～1205）で、ほぼ調査区全域で検出しているが、特に高所側（東半分）で多く検出している。平面形態は概ね円形を呈しており、直径は約20～30cm




第100図　第Ⅱ調査区柱穴出土遺物実測図②

を測る。その中で、出土遺物等から確実に弥生時代と断定できるものは135基で、それ以外は中世と断定できるものと出土遺物がなく、時期が不明のものである。

弥生時代は竪穴住居跡と同時期の後期前半を中心とする時期で、遺物も壺、甕、鉢、高坏、製塩土器、器台が出土している。

ＳＰ5336から出土した1613は大型の鉢で、体部がやや内湾し、口縁端部をそのまま方形に終わらせる。口縁部外面には１条の浅い凹線があり、内外面には縦方向のヘラミガキが施されている。かなり丁寧に作られた鉢である。

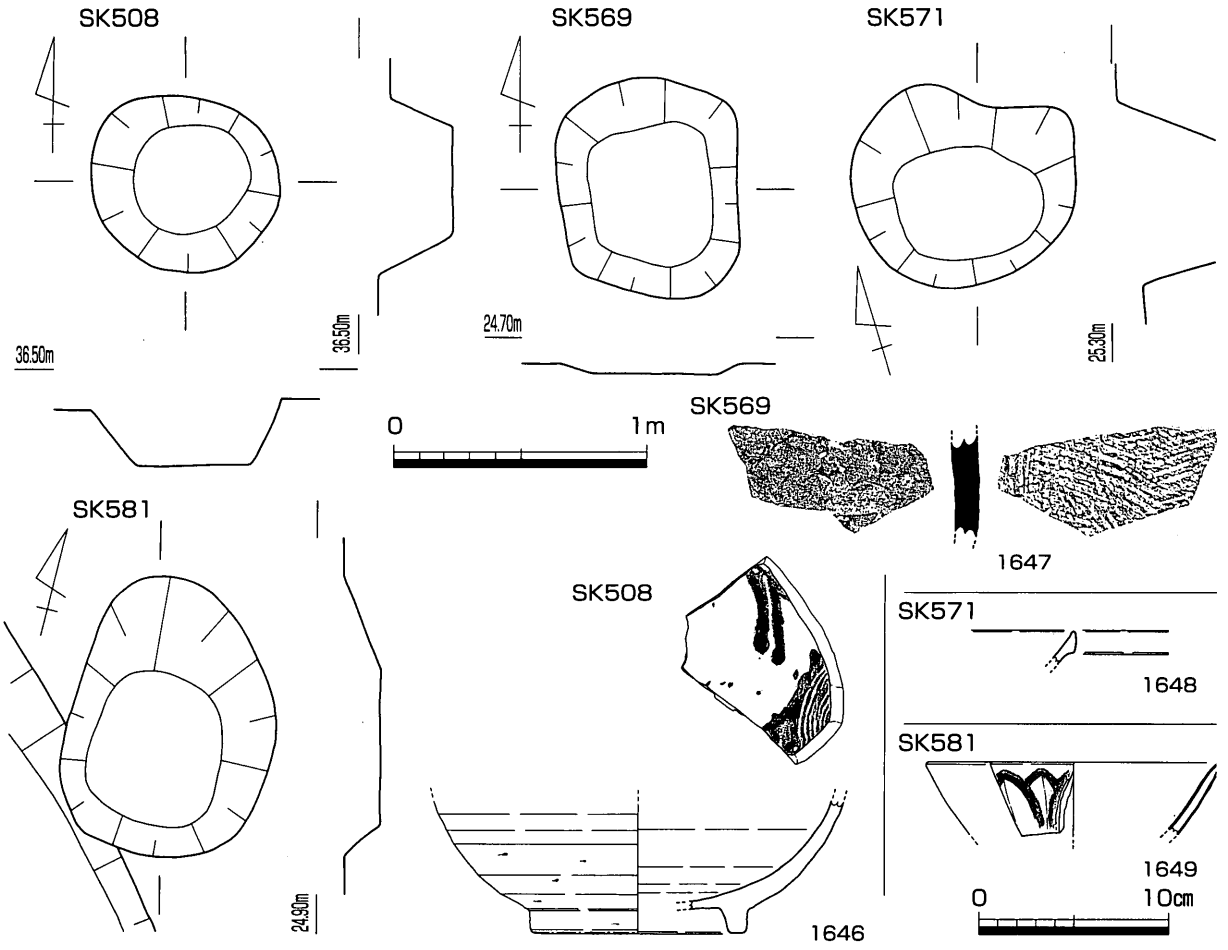
### 弥生時代以降

第Ⅱ調査区で検出した弥生時代以降の遺構は土坑跡、不明遺構跡、柱穴である。

土坑跡は調査区の中央部に位置するが散在的で、特に集中箇所も認められない。また不明遺構跡及び柱穴も部分的にしか検出しておらず、検出遺構数も少ないことから、弥生時代以降の集落があったとは考えられない。

### １．土坑跡

当調査区で検出した弥生時代以降の土坑は総数71基で、後世の水田耕作により掘削された部分では検出していないが、偏った纏まりも認められず、第Ⅱ調査中央部で検出した。平面形態は円形・




第101図　ＳＫ508・569・571・581平・断面図、出土遺物実測図

楕円形・方形を中心として、歪な平面形態のものも認められる。掘削深度は全体的に浅く、かなり削平を受けているものと思われる。

SK508

SK508は第Ⅱ調査区（H－9）東端、標高約36.38mで検出した土坑跡である。近接して同時期の遺構は検出していない。平面形態は円形で、断面形態は逆台形状を呈する。規模は直径約0.69m、検出面からの深さは約0.26mを測る。

土坑内から陶器鉢が出土している。

時期は近世と考えられる。

SK569

SK569は第Ⅱ調査区（H－17）中央部南側、標高約24.6mで検出した土坑跡である。近接して土坑を9基確認している。平面形態は隅丸の方形で、断面形態は浅い逆台形状を呈する。規模は南北（長軸）約0.85m、東西（短軸）約0.73m、検出面からの深さは約0.05mを測る。

土坑内から須恵器甕が出土している。

時期は中世と考えられる。

SK571

SK571は第Ⅱ調査区（G－17）中央部南側、標高約25.28mで検出した土坑跡である。平面形態は歪な円形で、断面形態は逆台形状を呈する。規模は南北約0.81m、検出面からの深さは約0.43mを測る。

土坑内から東播系須恵器こね鉢が出土している。

時期は中世で、13世紀初頭頃と考えられる。

SK581

SK581は第Ⅱ調査区（G－18）中央部、標高約24.79mで検出した土坑跡である。平面形態は歪な方形で、断面形態は浅い逆台形状を呈する。規模は南北約1.09m、東西約0.83m、検出面からの深さは約0.15mを測る。

土坑内から外面に鎬蓮弁がある青磁椀が出土している。

時期は中世で、13世紀頃と考えられる。

2．不明遺構

当遺跡で検出した不明遺構は総数38基（SX501～538）で、第Ⅱ調査区西半分で検出している。平面形態はかなり歪な円形・楕円形・方形・長方形を中心とした土坑状のものと溝状のものが確認できる。

SX502

SX502は第Ⅱ調査区（G－14）中央部で検出した。平面形態は土坑状の部分が歪な円形を呈し、

北西部から北西方向に溝が延びている。溝の流路方向は北西－南東（N－24°－W）をとる。出水状の遺構と考えられる。この調査区内には同様な形態のＳＥ501・502があり、出土遺物から弥生時代と考えている。

堆積土中から弥生土器底部、瓦片が出土している（第97図）。

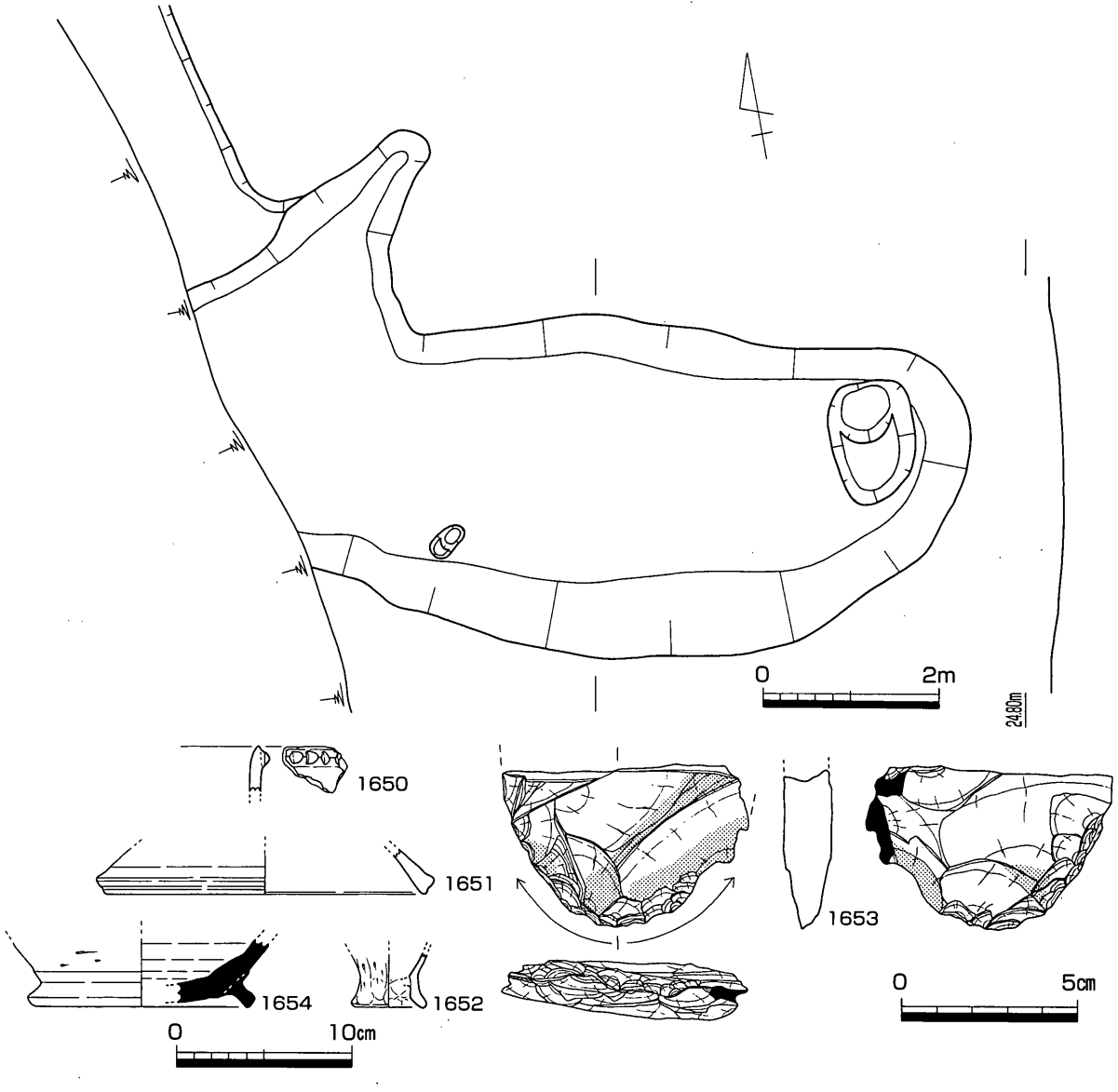
出土遺物から中世と考えられる。

### ＳＸ512

ＳＸ512は第Ⅱ調査区（Ｆ－18･19）中央部で検出した。平面形態は溝状を呈し、方向は東－西（N－51°－E）（N－68°－E）をとる。

堆積土中から縄文土器、弥生土器高坏、製塩土器、須恵器、打製石斧が出土している。

出土遺物から古代と考えられる。




第102図　ＳＸ512平・断面図、出土遺物実測図

### 3．包含層出土遺物

包含層出土遺物として図化したものは、機械掘削時、遺構面精査段階で出土したものである。

遺物には縄文土器、弥生土器、須恵器、土師質土器、輸入陶磁器、石製品がある。

縄文土器は口縁部内側を肥厚させ、２条の沈線を施す縁帯文土器や肥厚させず内面に１条の沈線を施すものがある。時期は縄文時代後期・晩期である。

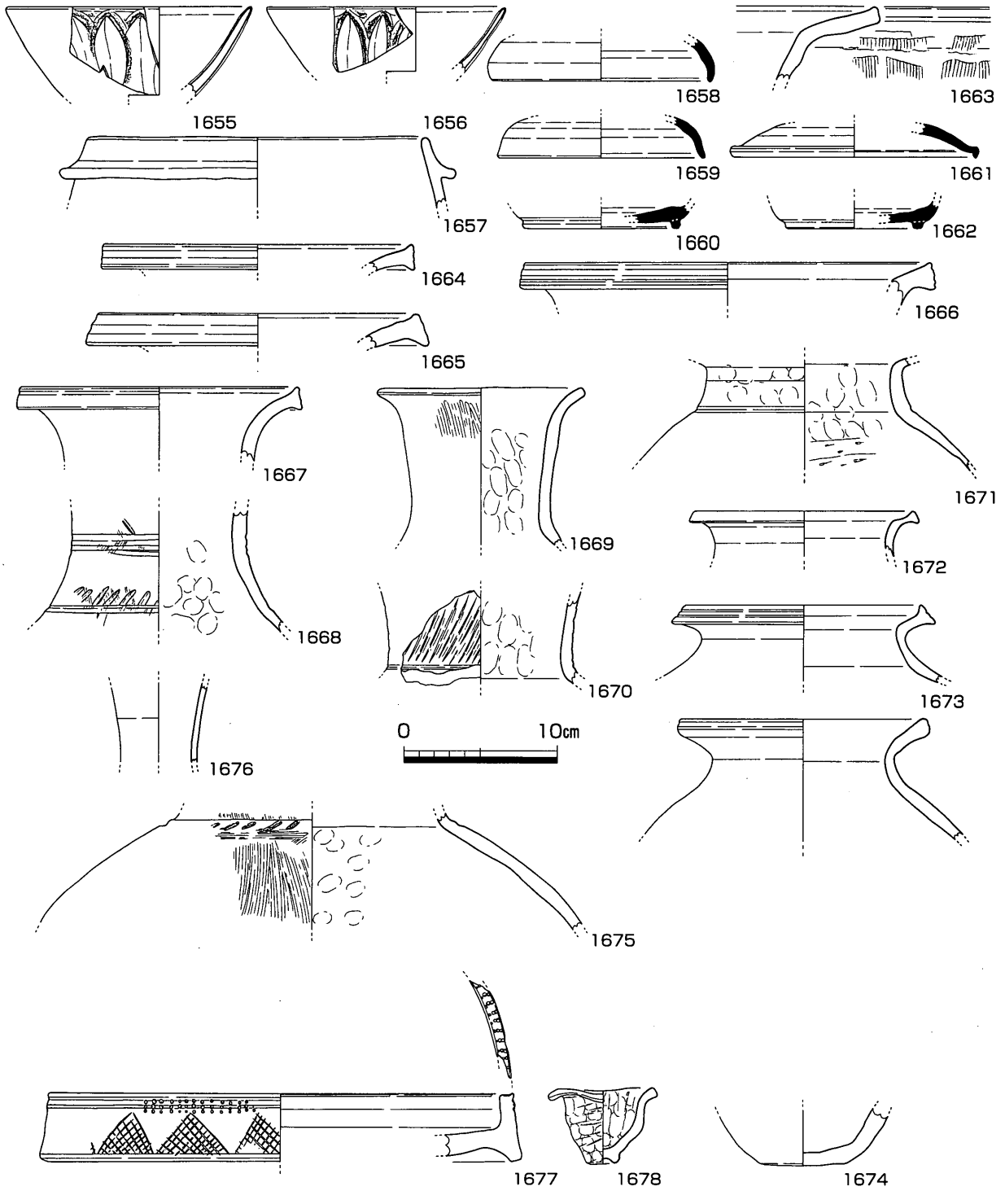
弥生土器は壺、甕、鉢、高坏、製塩土器、器台と各器種が揃って出土している。そのほとんどが同調査区で検出した掘立柱建物、竪穴住居と同時期の弥生時代後期前半のものである。1679～1681は弥生時代中期の遺物で、壺は体部外面に櫛描による波状文が施され、甕は体部外面にヘラ先による刺突文が施されている。

須恵器は坏蓋、高台付坏の身･蓋が出土している。時期は７～８世紀のもので、この時期の遺構は検出しておらず、調査区外に遺構の存在が想定される。

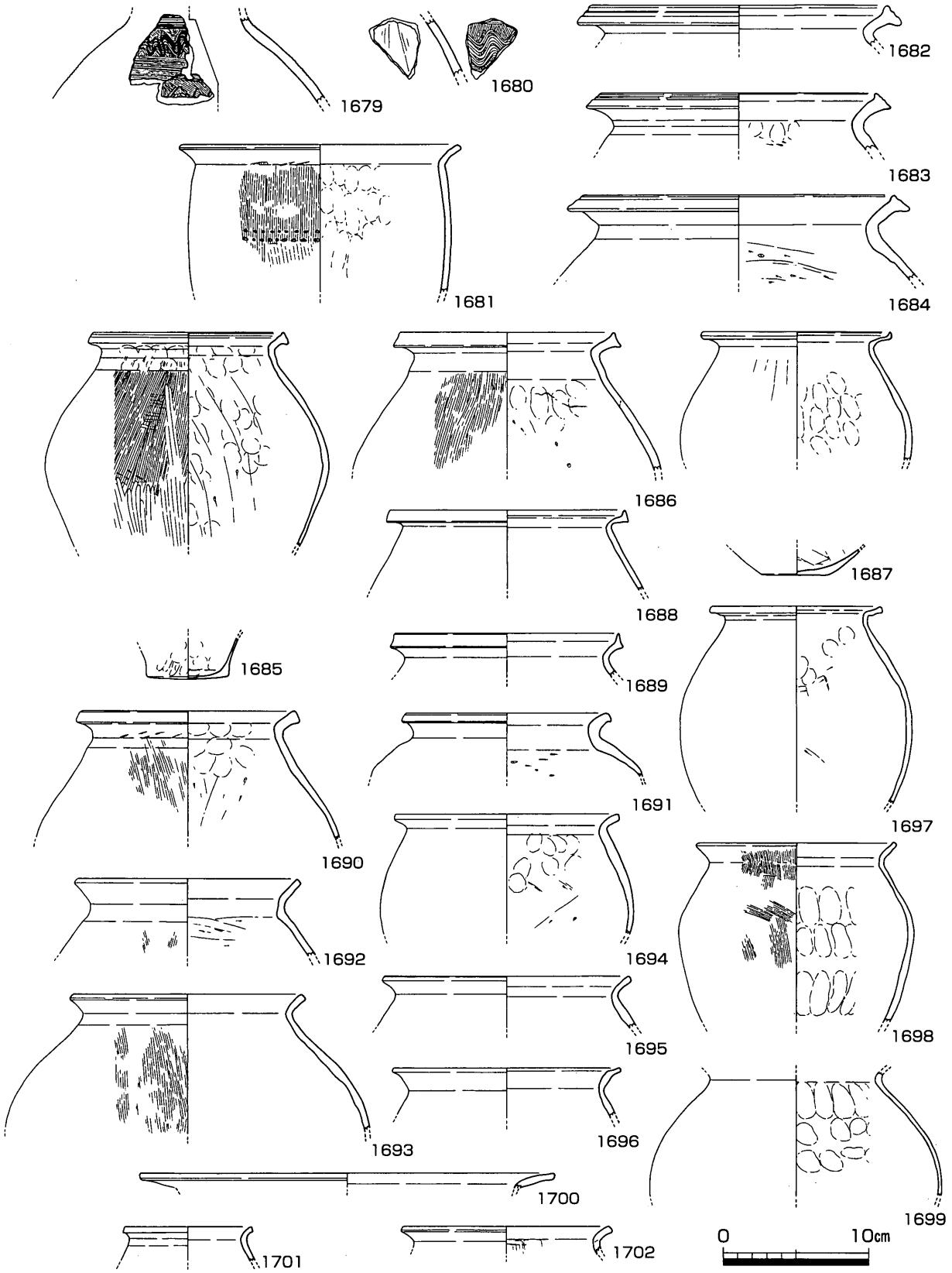
土師質土器は鍋が出土している。

輸入陶磁器は青磁椀で、体部外面に鎬蓮弁がある。

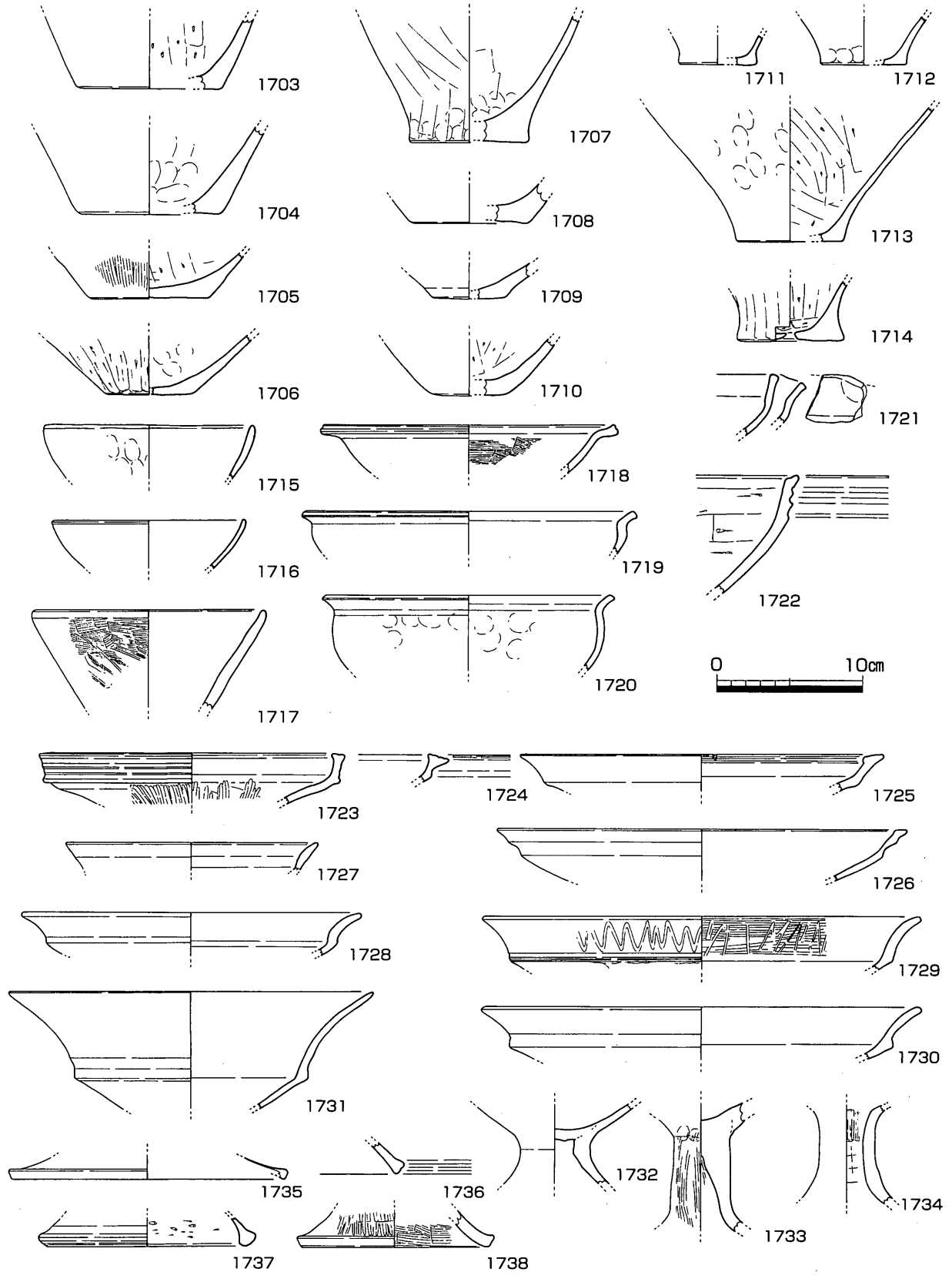
石製品は石鏃、石包丁、スクレイパー、砥石が出土している。ほとんどがサヌカイト製であるが、1775は結晶片岩製の石包丁で、1783は砂岩製の砥石である。



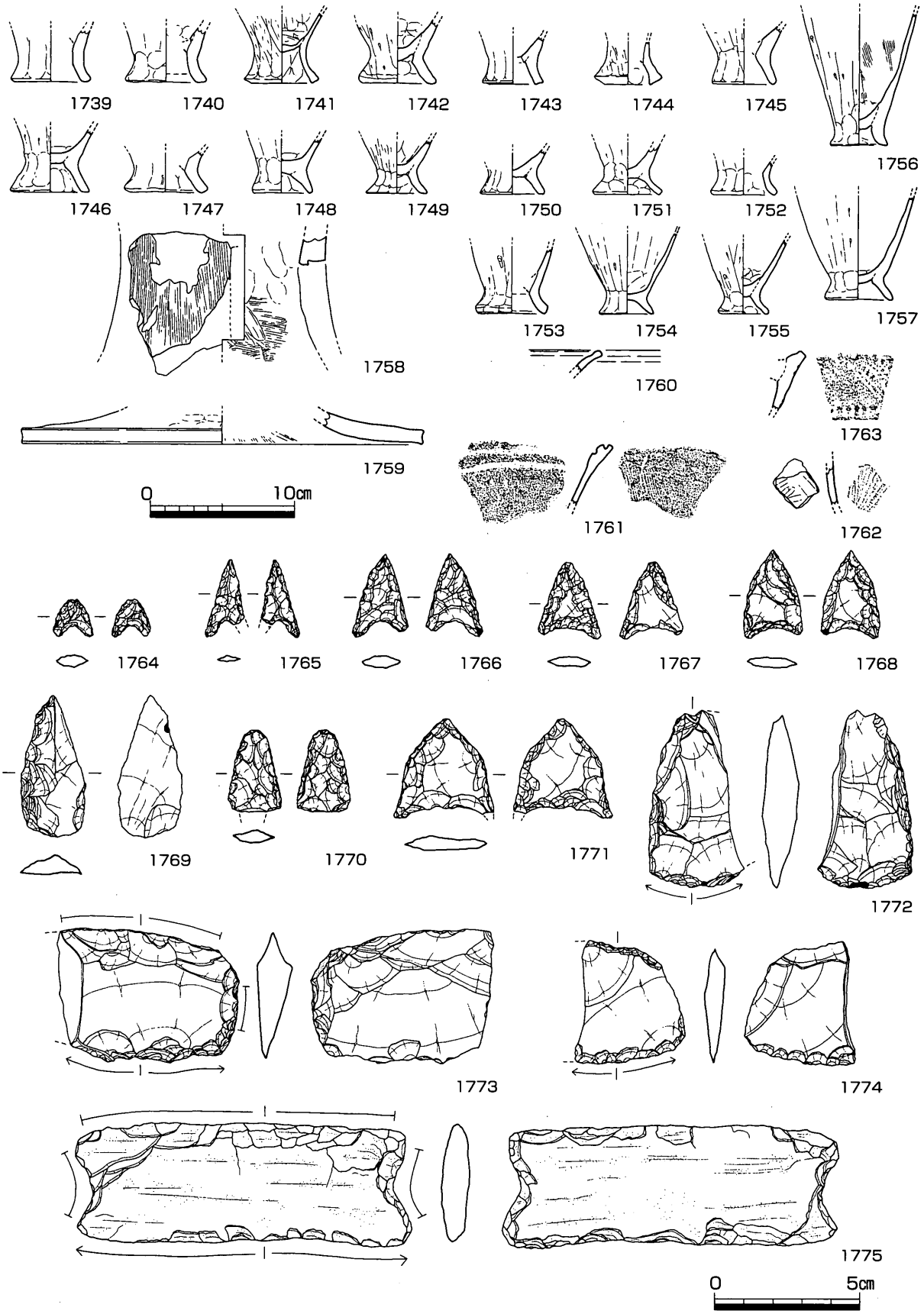

第103図　第Ⅱ調査区包含層出土遺物実測図①



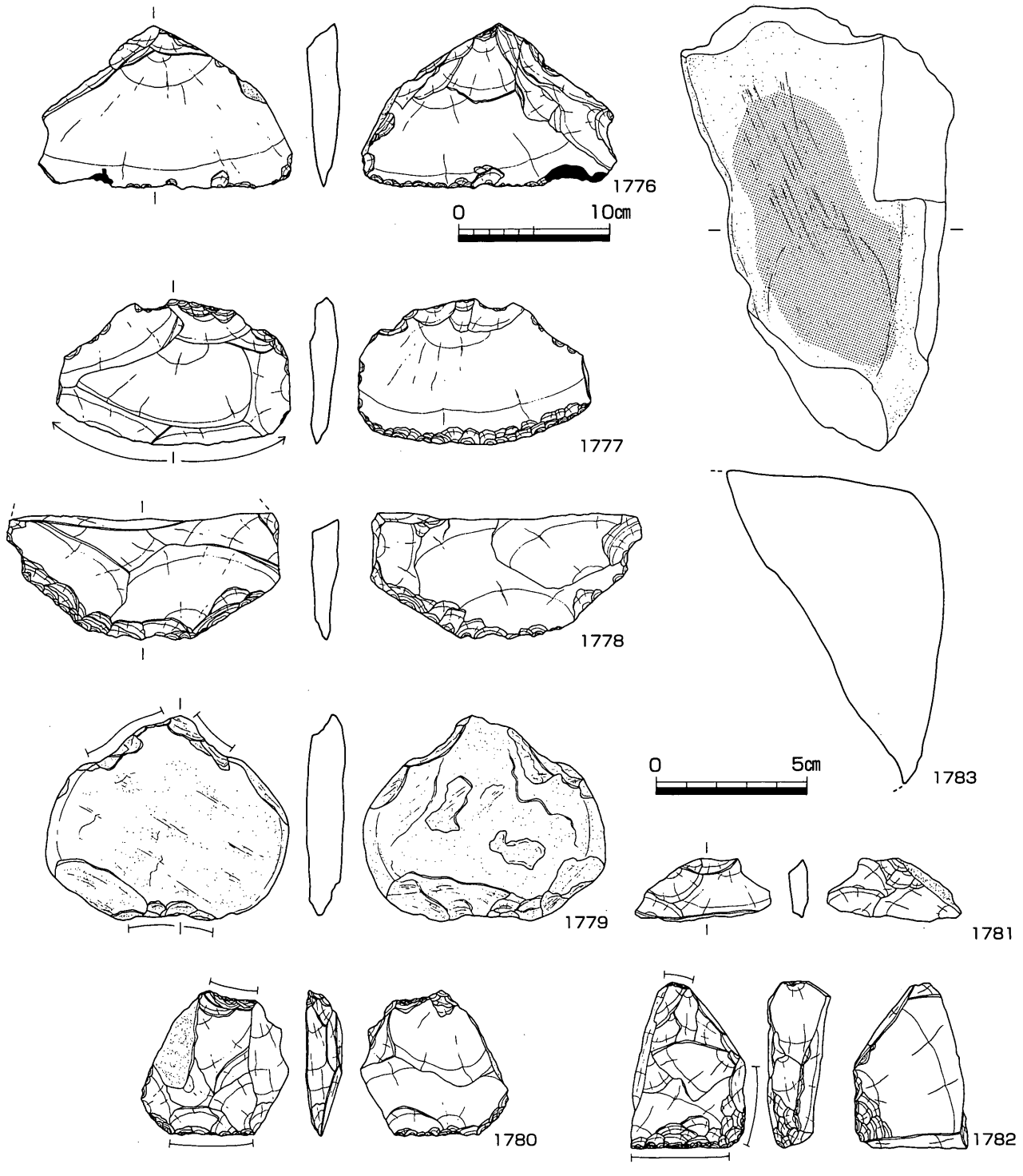

第104図　第Ⅱ調査区包含層出土遺物実測図②



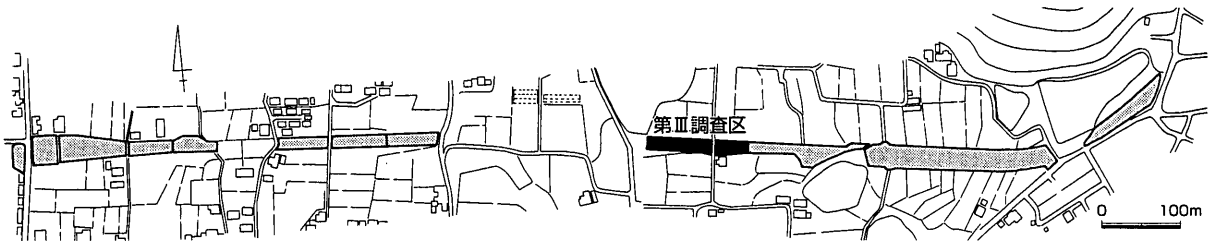

第105図　第Ⅱ調査区包含層出土遺物実測図③




第106図　第Ⅱ調査区包含層出土遺物実測図④




第107図　第Ⅱ調査区包含層出土遺物実測図⑤




第108図　第Ⅲ調査区位置図

### 第Ⅲ調査区

第Ⅲ調査区は東西に長い小山・南谷遺跡の中央部に位置し、東端は第Ⅱ調査区と隣接し、西は長尾池までで、更に第Ⅳ調査区とは約250mの位置にある（第108図）。現況からの地形復元（第６図）の結果、調査区周辺はほとんど高低差が確認できない。

推定旧地形からみると立石山山塊から北西に延びる丘陵のひとつの先端部に位置し、調査区北側と東側には明確な旧流路が復元できる。東側の旧流路はちょうど第Ⅱ－２調査区の中央部ほぼ全域に当たり、調査の結果からも自然流路跡ＳＲ603・604を検出した。

調査区は南北幅約17m、東西幅約120mと東西に細長い調査区で、溝状遺構、自然流路跡、不明遺構、柱穴跡を検出した。

第Ⅲ調査区では、遺構面は１面である。

遺構面は土層柱状図（第７図　柱状図⑭）でみると第１層耕作土下に第２層茶灰色粘質土層、第３層褐灰色粘質土層、第４層灰褐色粘質土層、第５層濁黄白色粘質土層があり、地表面から約50cm下で確認した。基盤層は第６層暗青灰黄色砂混じり粘質土層で、これより下位は粘土層、砂質土層などの互層である。一方第Ⅱ－２調査区の基盤層も土層柱状図（第７図　柱状図⑧～⑬）でみると粗砂・小礫混じりの砂質･粘質シルト層と安定した層ではなく、常に丘陵部から流水により、断続的な堆積を受けた部分と考えられ、その隣接地ということと基盤層を見ると第Ⅲ調査区も不安定な部分であることが解る。

検出した遺構は、土坑跡４基、溝状遺構１条、自然流路跡１条、不明遺構20基、柱穴跡15基である。検出した遺構は土坑跡、溝状遺構、不明遺構で、いずれも調査区内で散在的に検出した。出土遺物も小片のみで、明確に時期決定を行うことができなかった。柱穴も部分的に纏まりはあるものの、掘立柱建物、竪穴住居などを構成するには至っていない。検出遺構の散在的な検出状況、基盤層の不安定さから、第Ⅲ調査区で集落が形成されていたとは考えられない。

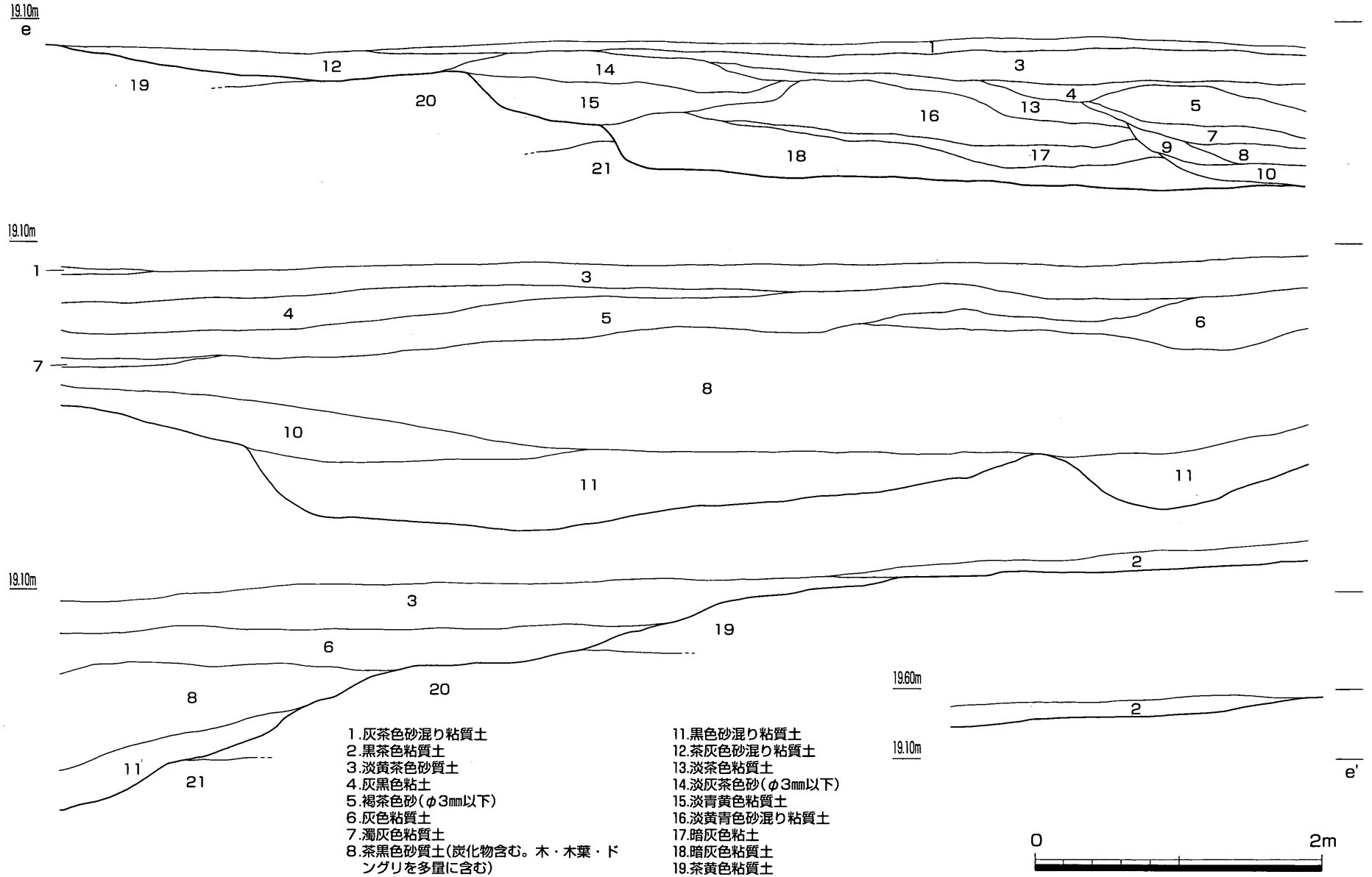
### 縄文時代

第Ⅲ調査区で検出した縄文時代の遺構は自然流路跡である。しかしこの流路出土遺物は少量で、縄文土器から須恵器まで出土しており、明確な時期決定はできないが、機能していた時期を縄文時代からとし、縄文時代と区分した。

#### １．自然流路跡

#### ＳＲ505

ＳＲ505は第Ⅲ調査区（Ｅ－28・29）東端で検出した自然流路跡である。流路方向は北北西－南南東（Ｎ－７°－Ｗ）をとる。規模は最大幅約28.8m、深さ約1.92m、検出長約19.0mを測る。自

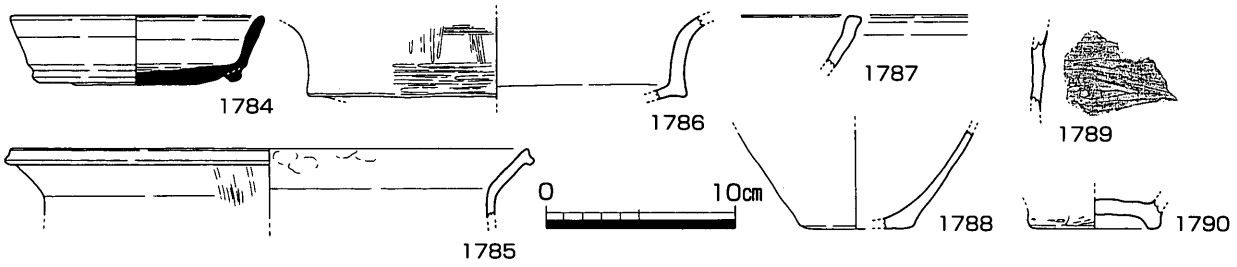



第109図　ＳＲ505土層断面図

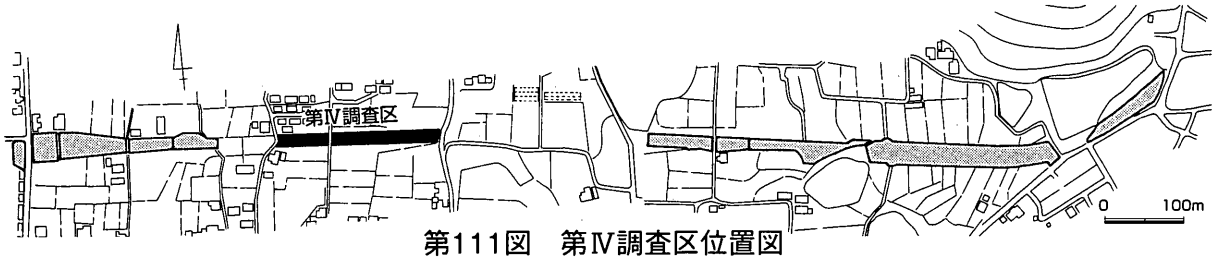
然流路の堆積土は18層で、土層断面及び堆積土から大別して上下層の２つに分けられる。上層は第１～11層で、流路幅の中心部約９ｍ幅に深さ約1.93ｍの堆積が確認でき、堆積土は第５・９層に砂層が混じるが、ほとんどは粘質土層である。特に堆積層のほぼ中央部に約0.94ｍの堆積が確認できる第８層からは炭化物、木葉、木、ドングリが多量に出土している。下層は第12～18層で、上層とした堆積層に切られるように西側で確認した。上層に比べると灰・青・黄色系が強く、全体に淡い土色である。土質的には粘質土層を中心とするが、砂質土層、砂層が混在する。

自然流路跡の各層から須恵器、土師質土器、弥生土器、縄文土器が出土しているが、出土量は少ない。

須恵器高台付坏、土師質土器甕は８世紀頃と考えられ、東側に接する第Ⅱ調査区では同時期の遺構を検出していない。弥生土器は弥生時代後期前半と考えられ、第Ⅱ調査区で同時期の遺構を検出している。




第110図　ＳＲ505出土遺物実測図




第111図　第Ⅳ調査区位置図

第Ⅳ調査区

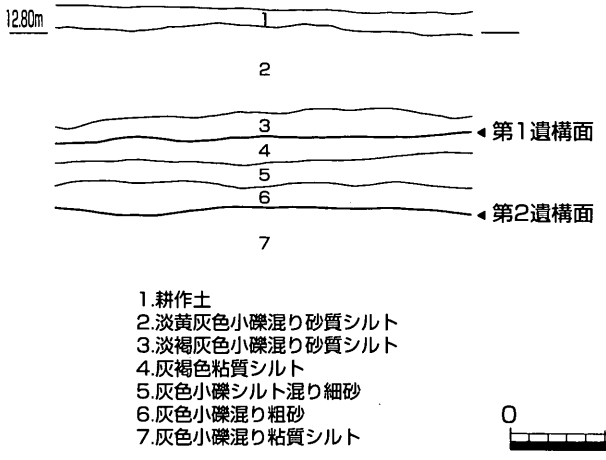
第Ⅳ調査区は東西に長い小山・南谷遺跡の西側に位置し、ほぼ中央に位置する第Ⅲ調査区西端から西に約250m、第Ⅴ調査区東端から約80mの位置にある(第111図)。現況からの地形復元(第６図)の結果、調査区周辺は南東から北西に向けての緩傾斜地となっている。現地盤の標高差を見ると南北方向は調査区の南北幅が約16mと狭いことからほとんど高低差が認められないが、東西方向は東西幅が約206mと長いこともあり、約1.46mの高低差が確認できる。

推定旧地形からみると第Ⅳ調査区は立石山山塊から北西に延びる丘陵、ちょうど岡山小古墳群が立地する丘陵から更に延びる微高地の北側縁辺部に位置する。また調査区東には明確な旧流路が復元でき、調査区内にも南の丘陵部からの谷地形（自然流路）が想定できる。

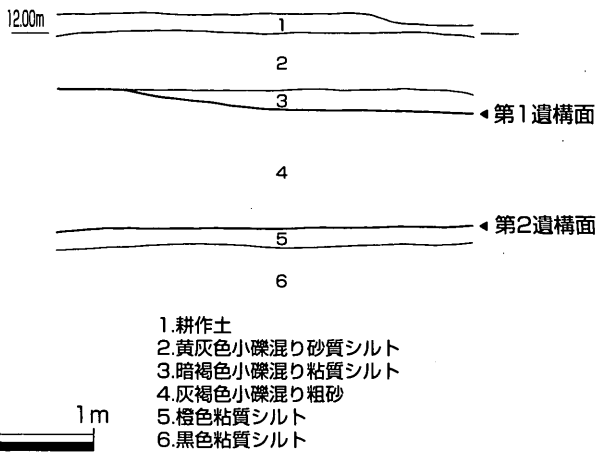
調査区は東西幅約206m、南北幅約16mと東西に細長い調査区で、溝状遺構、自然流路跡を中心とした遺構を検出した。

第Ⅳ調査区では、遺構面を２面確認した。

第１遺構面は第Ⅳ－１調査区では第１層耕作土下に第２層淡黄灰色小礫混じり砂質シルト層、第３層淡褐灰色小礫混じり砂質シルト層があり、地表面から約60～70cm下で確認した。第Ⅳ－２調査区では第１層耕作土下に第２層黄灰色小礫混じり砂質シルト層、第３層に暗褐色小礫混じり粘質シルト層があり、地表面から約50cm下で確認した。小調査区ごとに色･質ともに若干異なっているが、ほぼ同系色でシルト層は同じであり、第Ⅳ調査区全域において第１遺構面上にシルト層が堆積していることとなる。第２遺構面は第Ⅳ－１調査区では第１遺構面下に第４層灰褐色粘質シルト層があ




第112図　第Ⅳ－１調査区土層柱状図⑮




第113図　第Ⅳ－２調査区土層柱状図⑯

り、第５層灰色小礫・シルト混じり細砂層、第６層灰色小礫混じり粗砂層があり、約40cm下で確認した。第Ⅳ－２調査区では第４層灰褐色小礫混じり粗砂層があり、約40～70cm下で確認した。どちらの小調査区でも第４層が第１遺構面の基盤層となる。第Ⅳ－１調査区では第７層灰色小礫混じり粘質シルト層が第２面の基盤層となる（第112図）。第Ⅳ－２調査区では第５層橙色粘質シルト層が第２面の基盤層となり、更に第６層黒色粘質シルト層となる（第113図）。第Ⅳ－３調査区でもほぼ同様な土層序となる。

それぞれの遺構面を形成する基盤層は土質が粗砂層、シルト層と安定した土層ではなく、不安定なものである。この砂層・シルト層からなる不安定な基盤層及び各遺構面間のシルト層を中心とした厚い堆積土層から、旧流路の氾濫による堆積がかなり頻繁にあり、安定した時期に遺構が掘削されたものと考えられる。

第Ⅳ－１・２・３調査区は全体にほぼこの土層序となり、全面において２面の遺構面を確認した。検出した遺構は溝状遺構、自然流路跡を主として、僅かに土坑跡、不明遺構を検出した。掘立柱建物跡など柱穴跡等を検出していないことから居住域としては適していない地区である可能性が高い。

第１遺構面で確認した遺構は、溝状遺構45条、土坑跡７基、不明遺構３基である。

溝は西から第Ⅴ調査区を横断し、第Ⅳ－２調査区まで延びるＳＤ6128が、ほぼ調査区南辺を東西に横断する。このＳＤ6128と同じ方向に流路を取る溝状遺構が僅かに２条確認でき、それ以外は流路を南北に取る。

第２遺構面で確認した遺構は、溝状遺構９条、土坑跡２基、自然流路跡６条である。

検出した溝状遺構、自然流路跡ともに北－南あるいは北西－南東方向に流路を取り、地形の傾斜と合致する。居住域に関係する遺構は検出していない。

### １．溝状遺構

第Ⅳ調査区で検出した溝状遺構は総数53条（ＳＤ681～6133）で、調査区全域の第１遺講面及び第２遺構面で検出している。溝状遺構はほとんどが南北に流路を取る。

ＳＤ6128は第Ⅳ調査区から第Ⅴ調査区まで確認できることから、掘立柱建物跡を多数検出し、溝状遺構と関係の深い第Ⅴ－４調査区で説明する。

#### ＳＤ681

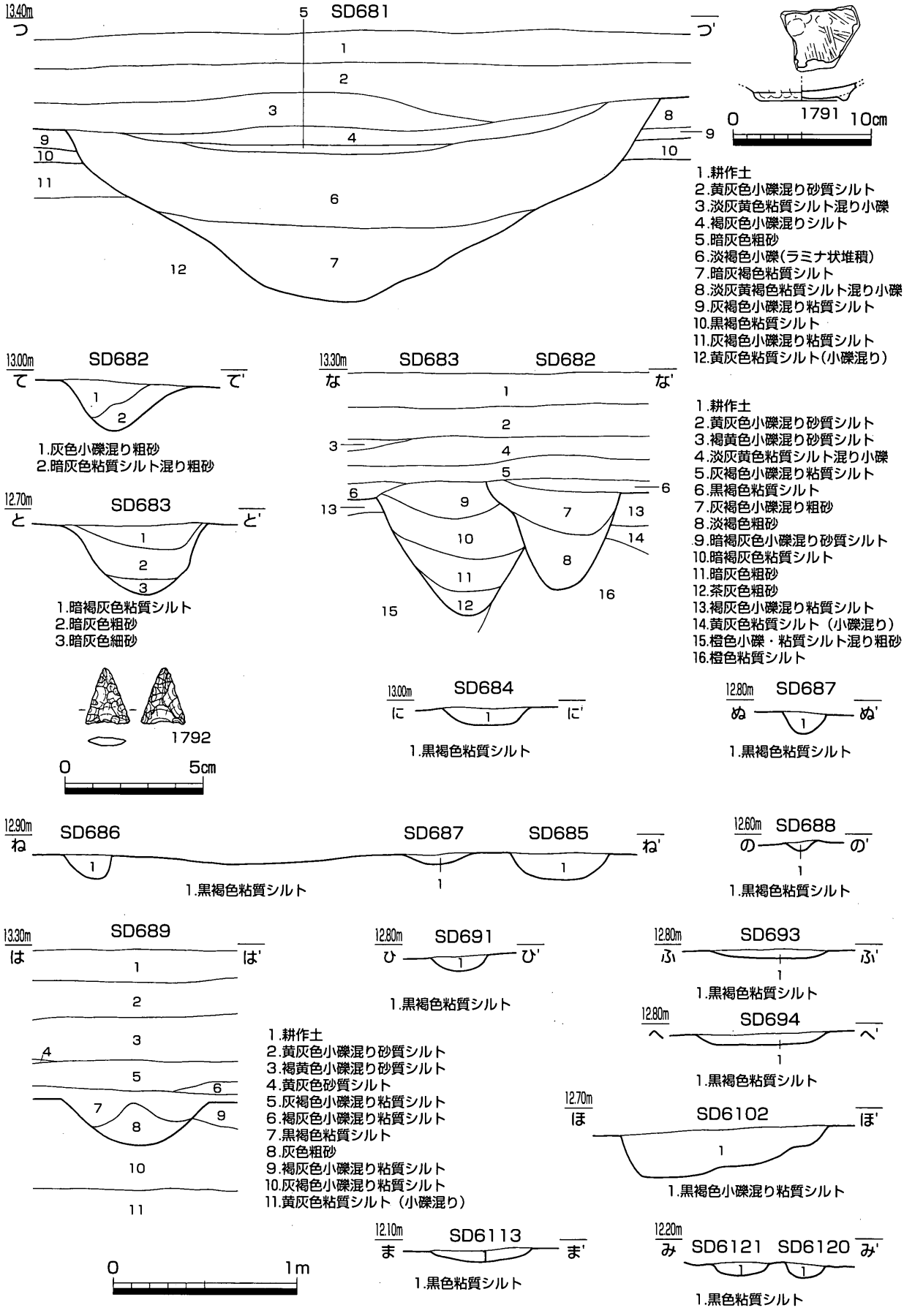
ＳＤ681は第Ⅳ－１調査区（Ｃ－47）東端、調査区際で検出した溝状遺構である。

第Ⅳ調査区では遺構面を２面検出しているが、この溝状遺構は更に上部、第１遺構面上に第８・９層が堆積した後に掘削されたもので、部分的には遺構面が３面確認できる。流路方向は西北西－東南東（Ｎ－62°－Ｗ）をとり、規模は最大幅約1.7m、深さ約0.94m、検出長約3.1mを測る。溝内堆積土は４層で、シルト層、小礫層、粗砂層などが堆積し、第６層は淡褐色小礫層がラミナ状に堆積する。断面は上部が緩やかに開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内堆積土より黒色土器、土師器片、サヌカイト剥片が出土している。

黒色土器はＡ類椀で、底部断面にかまぼこ状の高台が付き、内面にはヘラミガキが施されている。

出土遺物から時期は12世紀後半と考えられる。




第114図　ＳＤ681～689・691・693・694・6102・6113・6120・6121土層断面図、
ＳＤ681・683出土遺物実測図

ＳＤ685・686・687・688・690・692・696～6105・6113～6115・6120・6121・6123・6125・6126

ＳＤ685は第Ⅳ－１調査区（Ｃ－48）東部で検出した溝状遺構である。東側に近接してＳＤ682、ＳＤ683、ＳＤ684があり、切り合いからみるとＳＤ682が最も新しく、ＳＤ683→ＳＤ682と古くなる。ＳＤ684との関係は不明である。この流路は途中で分流し、流路幅を広げるが、最深部の流路は東側に確認できる。またほぼ中央部で西方向に分流し、さらに途中で南方向に分流する。それぞれをＳＤ687、686、690としたが、これらは全て同一の溝と考える。

第Ⅳ調査区では遺構面を２面検出しているが、この溝状遺構は第１遺構面で検出した。流路方向はほぼ北－南（Ｎ－4.5°－Ｅ）をとり、規模は最大幅約1.4m、深さ約0.13m、検出長約15.0mを測る。溝内堆積土は単層で、黒褐色粘質シルト層が堆積する。断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内堆積土より弥生土器片、土師器片が少量出土している。

出土遺物が小は片であるために時期は不明である。

ＳＤ687の流路方向はほぼ西－東（Ｎ－85°－Ｗ）をとり、規模は最大幅約0.24m、深さ約0.12m、検出長約12.0mを測る。溝内堆積土は単層で、ＳＤ685と同じ黒褐色粘質シルト層が堆積する。断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

出土遺物が出土していないため時期は不明である。

ＳＤ688の流路方向はほぼ北－南（Ｎ－9°－Ｅ）をとり、規模は最大幅約0.25m、深さ約0.13m、検出長約2.7mを測る。溝内堆積土は単層で、ＳＤ685と同じ黒褐色粘質シルト層が堆積する。断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

出土遺物が出土していないため時期は不明である。

ＳＤ690の流路方向はほぼ北－南（Ｎ－1°－Ｅ）を取り、規模は最大幅約0.36m、深さ約0.12m、検出長約2.4mを測る。溝内堆積土は単層で、ＳＤ685と同じ黒褐色粘質シルト層が堆積する。断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

出土遺物が出土していないため時期は不明である。

第Ⅳ調査区内（Ｃ－48～52）で規模・流路方向が上記と同様な溝状遺構は、ＳＤ692、ＳＤ688、ＳＤ696～6105、ＳＤ6113～6115、ＳＤ6121、ＳＤ6120、ＳＤ6123、ＳＤ6125、ＳＤ6126がある。これらの溝状遺構はほとんどが南北方向～約５°東偏する方向に流路を取り、幅20～30㎝の溝で、細く延びる。

南北方向に流路を取り、やや幅の広いＳＤ685を基準として、距離を測るとＳＤ686までが約2.5m、ＳＤ692までが約8.3m、ＳＤ690までが約9.6m、ＳＤ688までが約10.6m、ＳＤ696までが約19.0m、ＳＤ697までが約20.0m、ＳＤ698までが約20.4m、ＳＤ699までが約25.7m、ＳＤ6110までが約27.3m、ＳＤ6101までが約29.1m、ＳＤ6102までが約29.7m、ＳＤ6103までが約37.0m、ＳＤ6104までが約39.5m、ＳＤ6105までが約40.3m、ＳＤ6113までが約58.8m、ＳＤ6114までが約59.7m、ＳＤ6115までが約60.0m、ＳＤ6120までが約70.7m、ＳＤ6121までが約71.2m、ＳＤ6123までが約77.5m、ＳＤ6125までが約90.6m、ＳＤ6126までが約92.5mを測る。

この中で南北の検出長が長く、しっかりした溝状遺構の間隔を見るとＳＤ685とＳＤ6102間が約29.7m、ＳＤ6102とＳＤ6113間が約29.1m、ＳＤ6113とＳＤ6125間が約31.8mと約30.0mの間隔で溝状遺構が掘削されていることが解る。更にＳＤ685から細く延びた西側の支流とＳＤ686間が約1.9

m、ＳＤ699～ＳＤ6101それぞれの間隔が約1.7m、約1.9mと約1.8m間隔で、幅約20cm前後の小規模な溝状遺構が掘削されている。またＳＤ6102とＳＤ6103間は約7.3mと1.8mの約４倍となっていることが解る。

このように同規模・同方向の溝が規則的な間隔の基に掘削されているということは、これらの溝状遺構は水田区画に伴う水路と考えられ、約30m間隔で、幹線水路があり、約1.8m間隔で、水田間の小区画に伴う支水路が掘削されていたものと考えられる。

東西方向に延びる溝状遺構の南北の間隔は不明であるが、ＳＤ685から西方向に延びるＳＤ687は取水溝と考えられる。

### ＳＤ682

ＳＤ682は第Ⅳ－１調査区（Ｃ－47）東部で検出した溝状遺構である。西側に近接してＳＤ685があり、ＳＤ685によって切られている。第Ⅳ調査区では遺構面を２面検出しているが、この溝状遺構は土層断面（な－な´）の土層第13層が第１遺構面の基盤層で、その上部から掘削されている。第２遺構面は第14層を基盤層とする。流路方向は蛇行するもののほぼ北－南(Ｎ－2°　－W)をとり、規模は最大幅約1.05m、深さ約0.53m、検出長約14.8mを測る。溝内堆積土は２層で、部分的に色調が異なるが、全て粗砂層である。断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内堆積土より弥生土器片、土師器片が少量出土している。

出土遺物が小片であるために時期は不明である。

### ＳＤ683

ＳＤ683は第Ⅳ－１調査区（Ｃ－48）東部で検出した溝状遺構である。両側に近接してＳＤ685とＳＤ682があり、ＳＤ682によって切られている。この溝状遺構は土層断面（な－な´）の土層第13層が第１遺構面の基盤層で、その上部から掘削されている。流路方向はほぼ北－南（Ｎ－1°　－Ｅ）をとり、規模は最大幅約0.72m、深さ約0.72m、検出長約3.4mを測る。溝内堆積土は土層断面（な－な´）で４層、土層断面（と－と´）で３層である。それぞれの堆積土層に若干の差が認められるが、前者の第10層と後者の第１層が同じであることから、概ね合致するものと考える。断面は底面がやや尖り気味になり、上部が開く「Ｖ」字状を呈している。

溝内堆積土よりサヌカイト片が少量出土している。

出土遺物が小片であるために時期は不明である。

### ＳＤ689

ＳＤ689は第Ⅳ－１調査区（Ｃ－48）東部で検出した溝状遺構である。ＳＤ694の東側に近接してＳＤ689があり、一部で、ＳＤ687を切っている。南北方向に流路を取り、４分割しているが同一の溝と考える。流路方向はほぼ北－南(Ｎ－５°　－Ｅ)をとり、規模は最大幅約0.53m、深さ約0.23m、検出長約14.0mを測る。溝内堆積土は単層で、灰色粗砂層である。

溝内堆積土より遺物が出土していないために時期は不明である。

ＳＤ694・693

ＳＤ694・693は第Ⅳ－１調査区（Ｃ－48）東部で検出した溝状遺構である。東側に併行してＳＤ689があり、ＳＤ693はＳＤ694のほぼ中央部から南東方向に流路方向を取る。第Ⅳ調査区では遺構面を２面検出しているが、この溝状遺構は第１遺構面の上部から掘削されている。ＳＤ694の流路方向はほぼ北－南（Ｎ－５°－Ｅ）をとり、規模は最大幅約0.80m、深さ約0.06m、検出長約11.3mを測る。溝内堆積土は単層で、黒褐色粘質シルト層である。断面は浅い皿状を呈している。

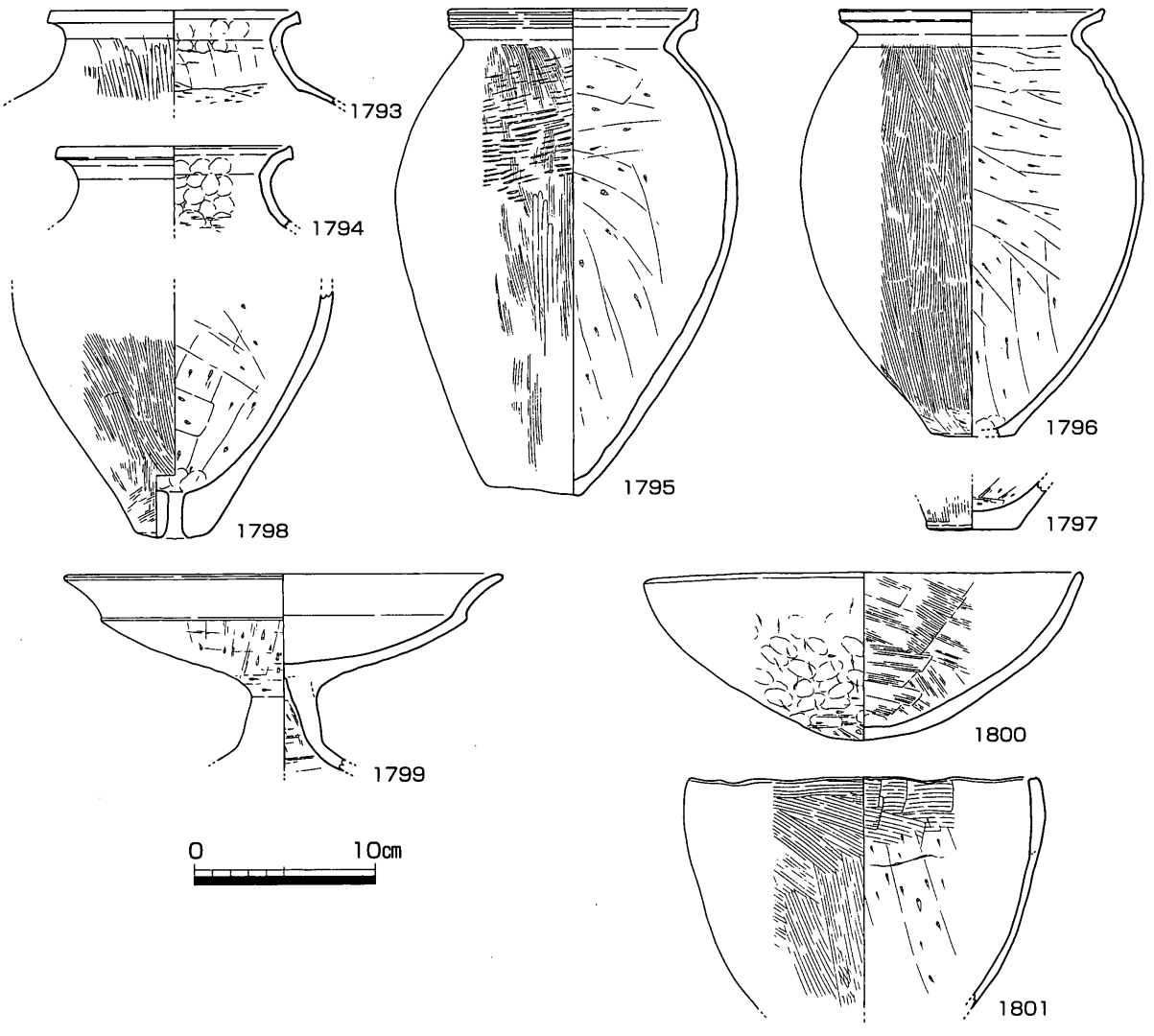
溝内堆積土より弥生土器片、土師器片が少量出土している。

出土遺物が小片であるために時期は不明である。

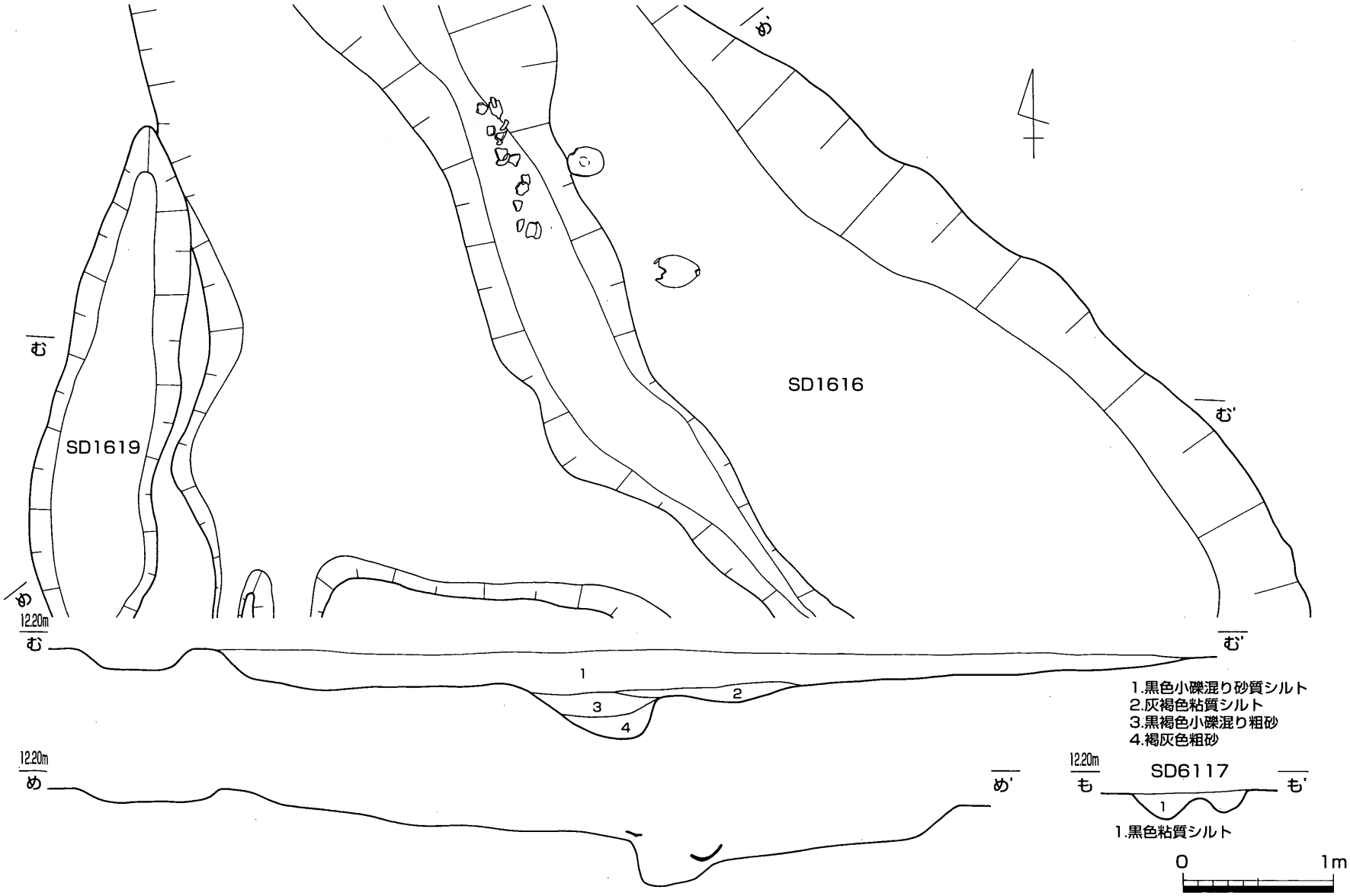
ＳＤ693の流路方向はほぼ北西－南東（Ｎ－59°－Ｗ）をとり、規模は最大幅約0.91m、深さ約0.06m、検出長約12.0mを測る。溝内堆積土は単層で、黒褐色粘質シルト層である。断面は浅い皿状を呈している。

溝内堆積土より弥生土器片、土師器片が少量出土している。

出土遺物が小片であるために時期は不明である。




第115図　ＳＤ6116出土遺物実測図




第116図　ＳＤ6116・6117・6119平・断面図

## ＳＤ6116

ＳＤ6116は第Ⅳ－２調査区（Ｃ－51）中央部で検出した溝状遺構である。かなり幅の広い溝で、ほぼ中央部が深くなる、２段掘りである。流路方向はほぼ北西－南東（Ｎ－35°－Ｗ）をとり、規模は最大幅約6.30m、深さ約0.60m、検出長約10.5mを測る。溝内堆積土は土層断面（む－む′）で４層、第１・２層がシルト層、第３・４層に粗砂層が堆積している。

溝内堆積土よりコンテナ３箱分の弥生土器壺、甕、鉢、高坏、甑が出土している。特にほぼ中央部では弥生土器壺・甕・高坏がまとまって出土した。

壺は内傾する頸部から口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は僅かに上下に摘み出す。

甕は底部が平底で、体部最大径がやや上位にあり、頸部は内面に明瞭な稜を持ち屈曲するものと丸みを持つものがある。前者は外反した口縁部から端部を上方に拡張させ、外面に２条の退化凹線を施す。体部外面の調整は上半には叩きの後縦方向のハケ目が、下半にはハケ目の後縦方向のヘラミガキが施されている。体部内面は上半が横方向、下半が縦方向のヘラケズリが施されている。後者は口縁端部の上方への拡張が短く、外面は僅かに窪ませるのみで、凹線は認められない。体部外面の調整は縦方向のハケ目が施され、内面には上半に横方向の、下半に縦方向のハケ目が施されている。

高坏は脚部のほぼ中央部で屈曲部を持ち、広がる。坏部は上半で屈曲し、外反する口縁部を持つ。口縁端部は拡張せず、そのまま丸く終わらせる。

鉢は両者とも大型のものである。特に1801は器高が深い。

出土遺物より時期は弥生時代後期中葉である。

## ＳＤ6122

ＳＤ6122は第Ⅳ－２調査区（Ｃ－51）中央部で検出した溝状遺構である。２条の流路が東に向かい弧を描きながら併走する。北部では３条に分かれるが、溝内堆積土が同じであることから同一溝とした。この溝状遺構は土層断面（や－や′）の土層第５・６層が第１遺構面の基盤層で、その上部から掘削されている。流路方向はほぼ北西－南東（Ｎ－20°－Ｗ）をとり、規模は最大幅約0.72m、深さ約0.45m、検出長約11.4mを測る。断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

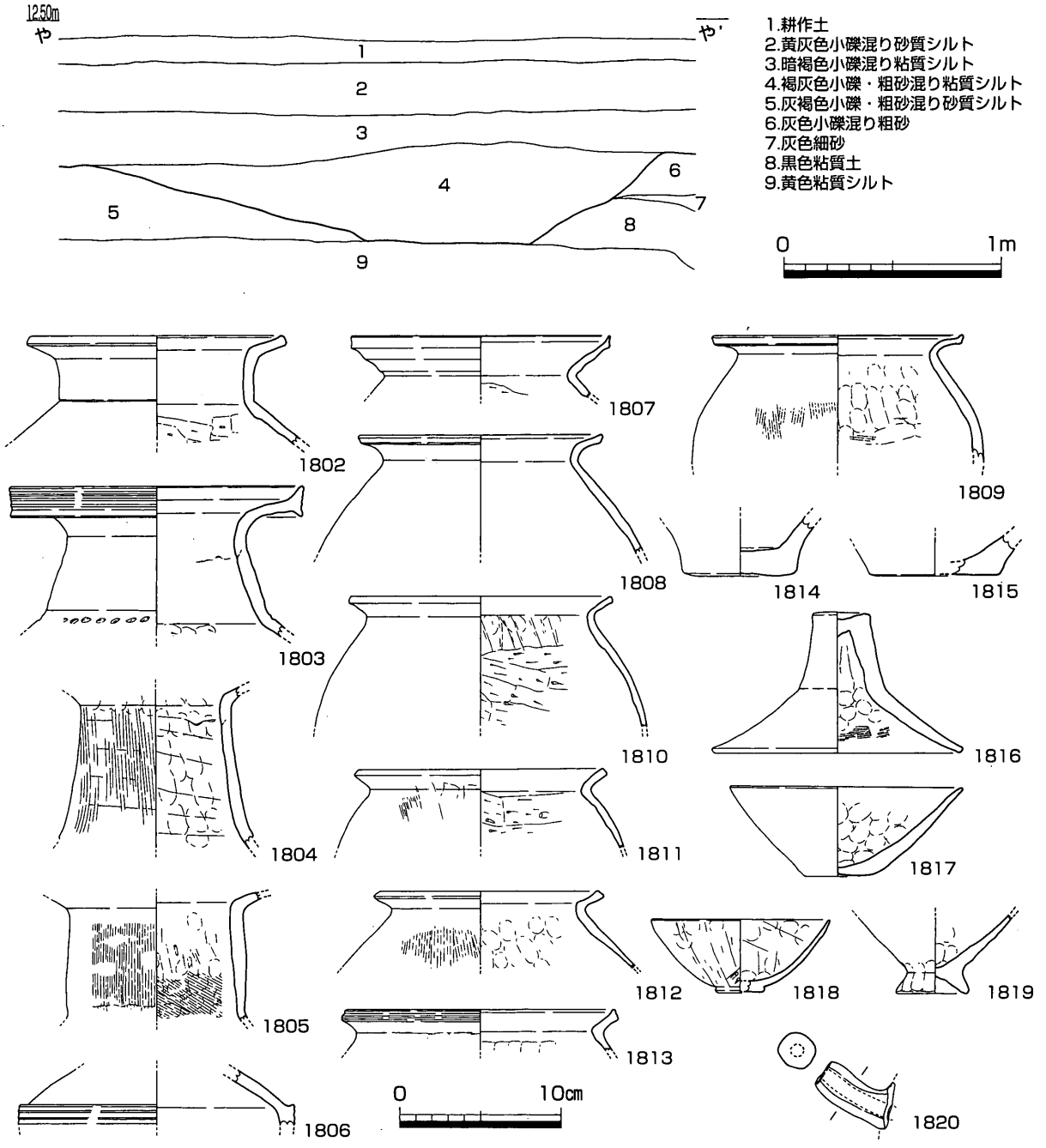
溝内堆積土より弥生土器壺、甕、蓋、鉢、高坏、製塩土器、サヌカイト片が多量に出土し、縄文土器も少量出土している。

壺は頸部が直線的に上方に延びるものとやや内傾するものがある。前者の頸部には長いものと短いものがある。両者とも口縁部はほぼ水平に開き、口縁端部をそのまま終わらせるものと上下に拡張するものがある。拡張したものは外面に４条の退化凹線が認められる。1806は体部最大径部分に外面に３条以上の退化凹線を施す突帯がある。細頸壺の体部と考えられる。

甕は頸部内面に明瞭な稜を持ち、口縁部は直線的に延びるものとやや外反するものがある。口縁端部はそのまま終わらせるものと上端を摘み上げるものがある。1813は口縁端部外面に２条の退化凹線を持つもので、他の甕より若干古くなる可能性がある。体部外面の調整は縦方向のハケ目、内面は横方向のヘラケズリあるいは指頭痕が施されている。

鉢は小型のもので、底部に脚が付くものと付かないものがある。

高坏は口縁部がそのまま細く終わらせ、端部を僅かに上方に曲げる。




第117図　ＳＤ6122土層断面図、出土遺物実測図

製塩土器は、脚部高が１cm以下とかなり低い。体部外面にはヘラケズリが施される。

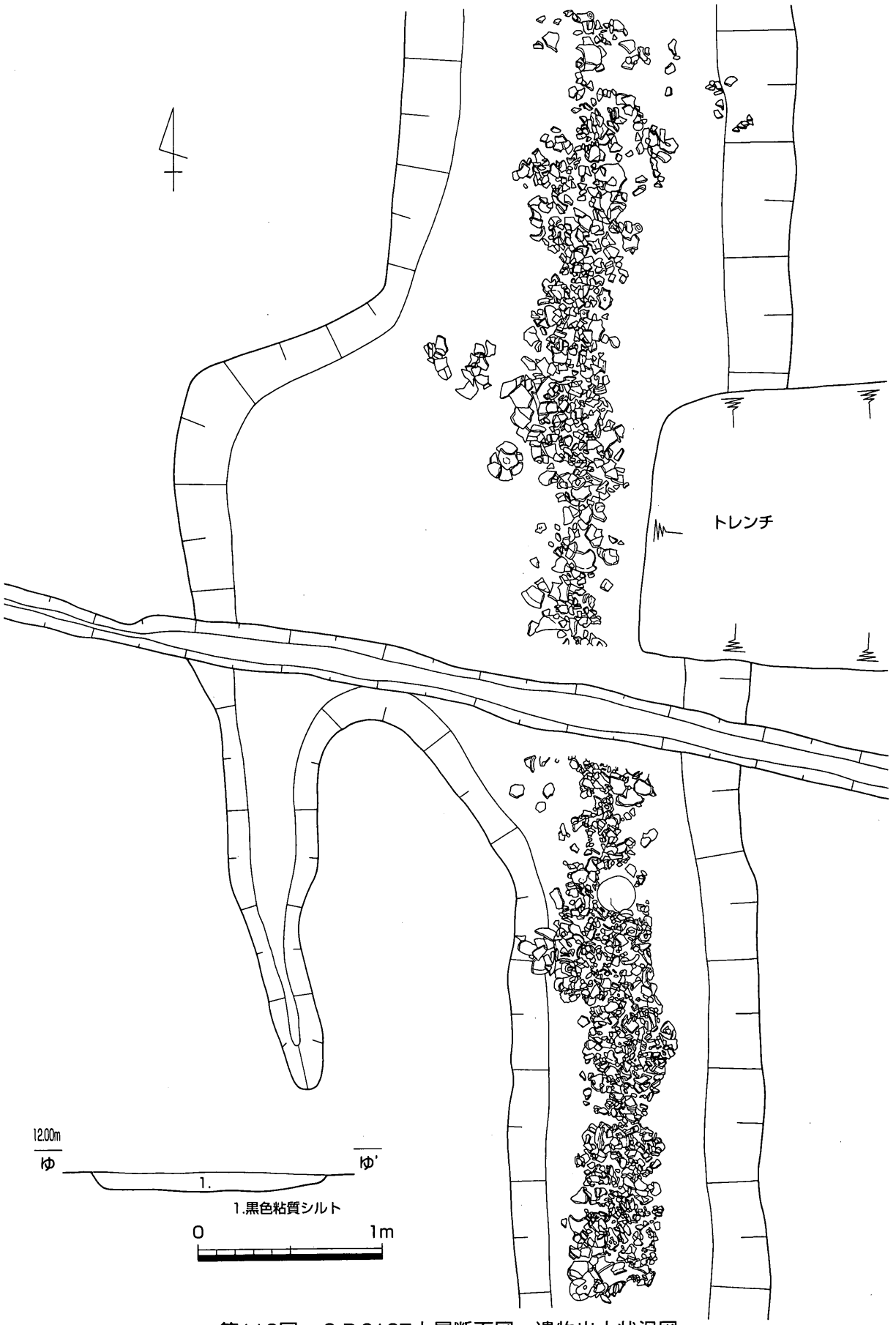
1820は縄文土器の注口土器の口である。

出土遺物より時期は弥生時代後期中葉である。

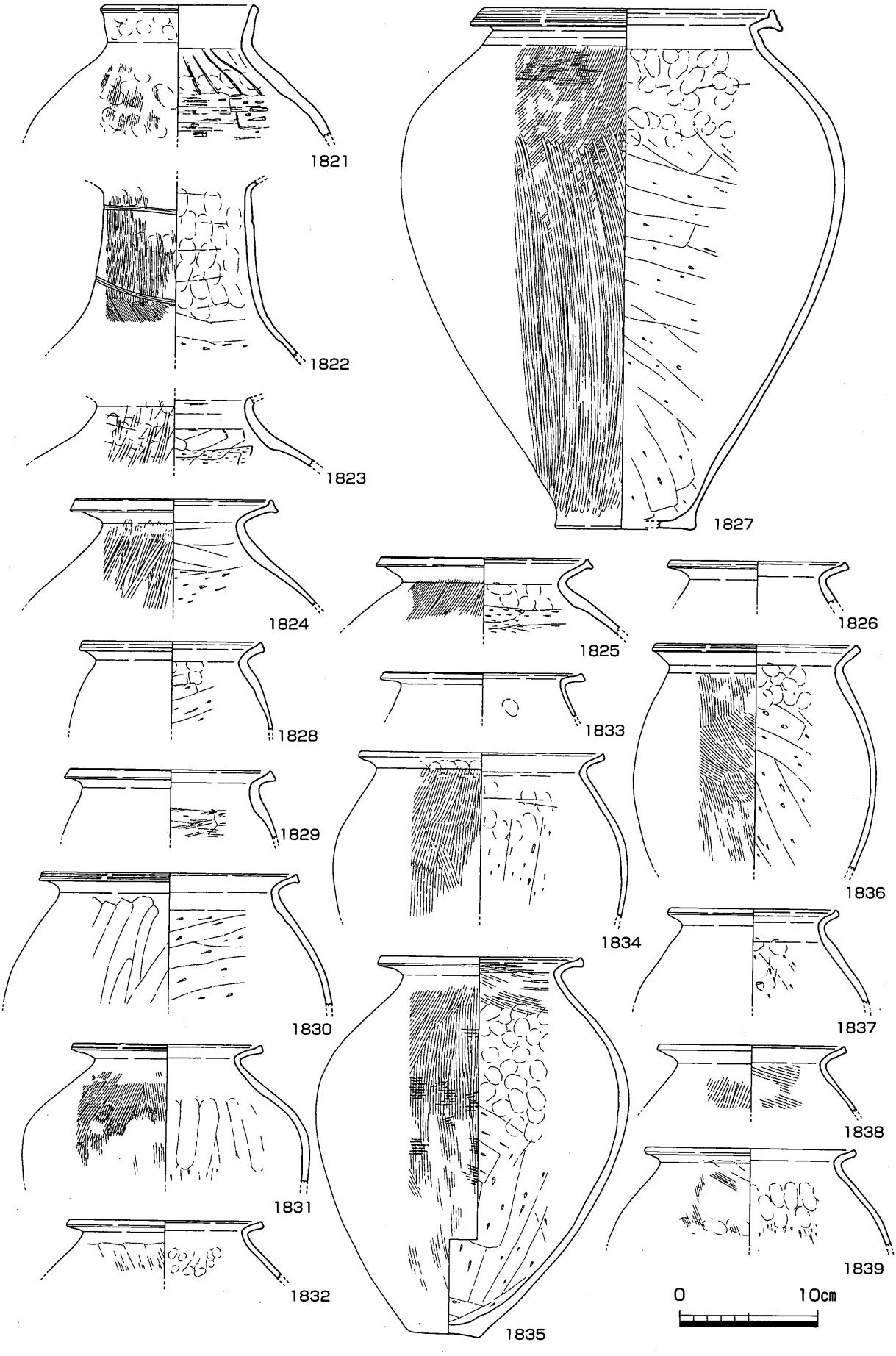
### ＳＤ6124

ＳＤ6124は第Ⅳ－１調査区（Ｃ－52）西部で検出した溝状遺構である。この溝はＳＸ649から西方向に細く延びる。この溝はＳＤ6125、ＳＤ6127を切っている。流路方向はほぼ北西－南東（Ｎ－80°－Ｗ）をとり、規模は最大幅約0.38m、深さ約0.06m、検出長約12.7mを測る。

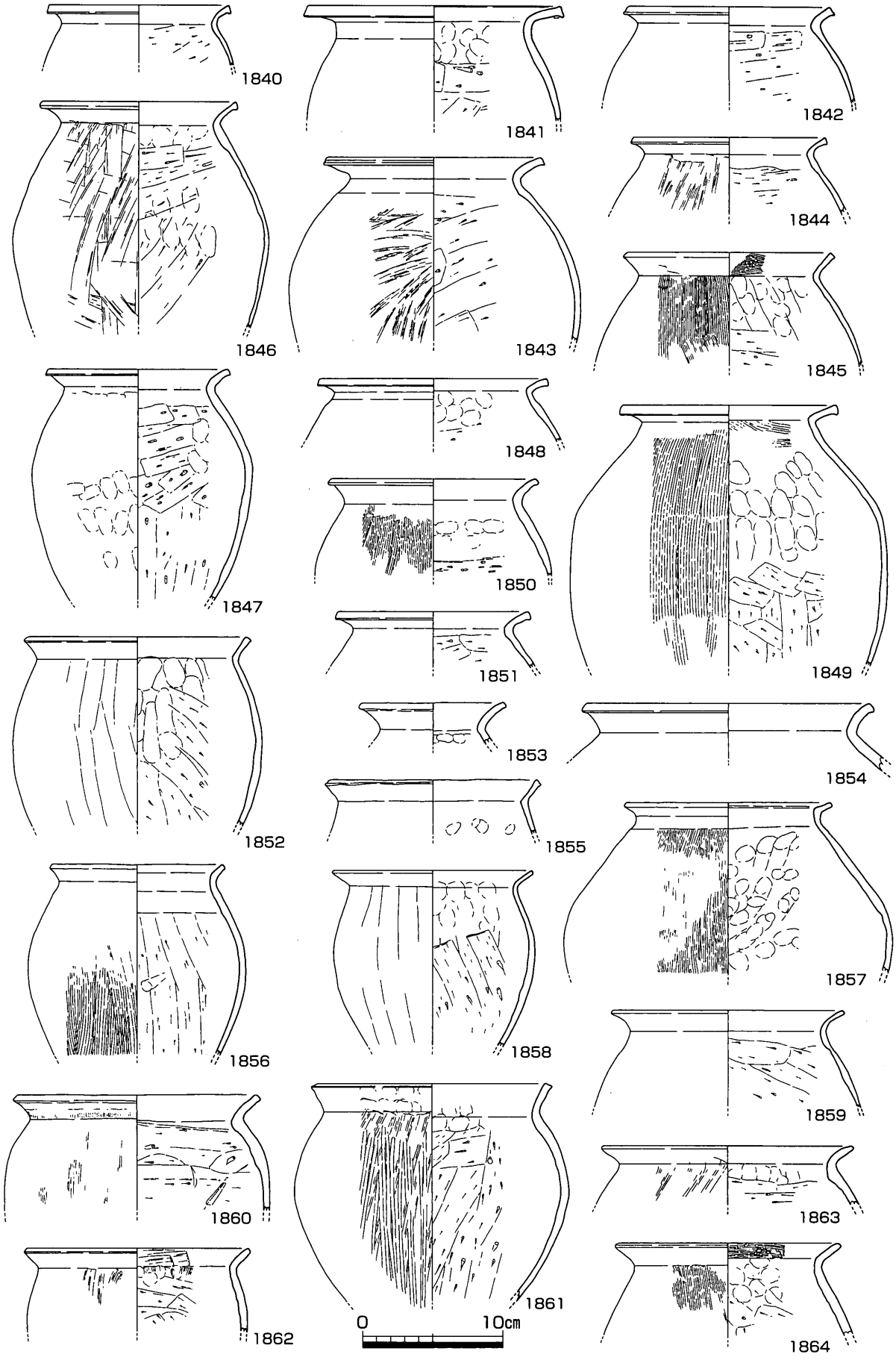
溝内堆積土より遺物が出土していないために時期は不明である。




第118図　ＳＤ6127土層断面図、遺物出土状況図



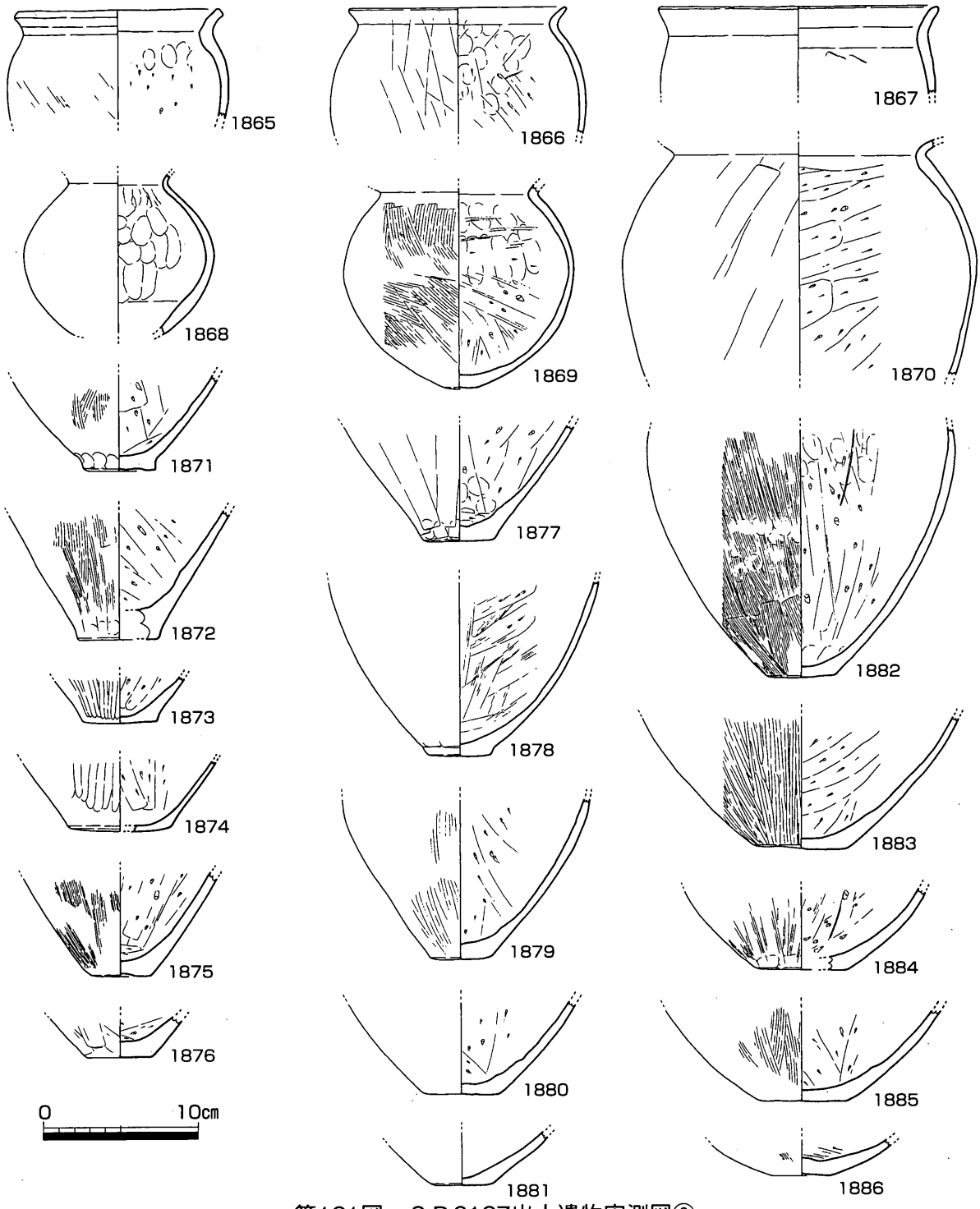

第119図　ＳＤ6127出土遺物実測図①



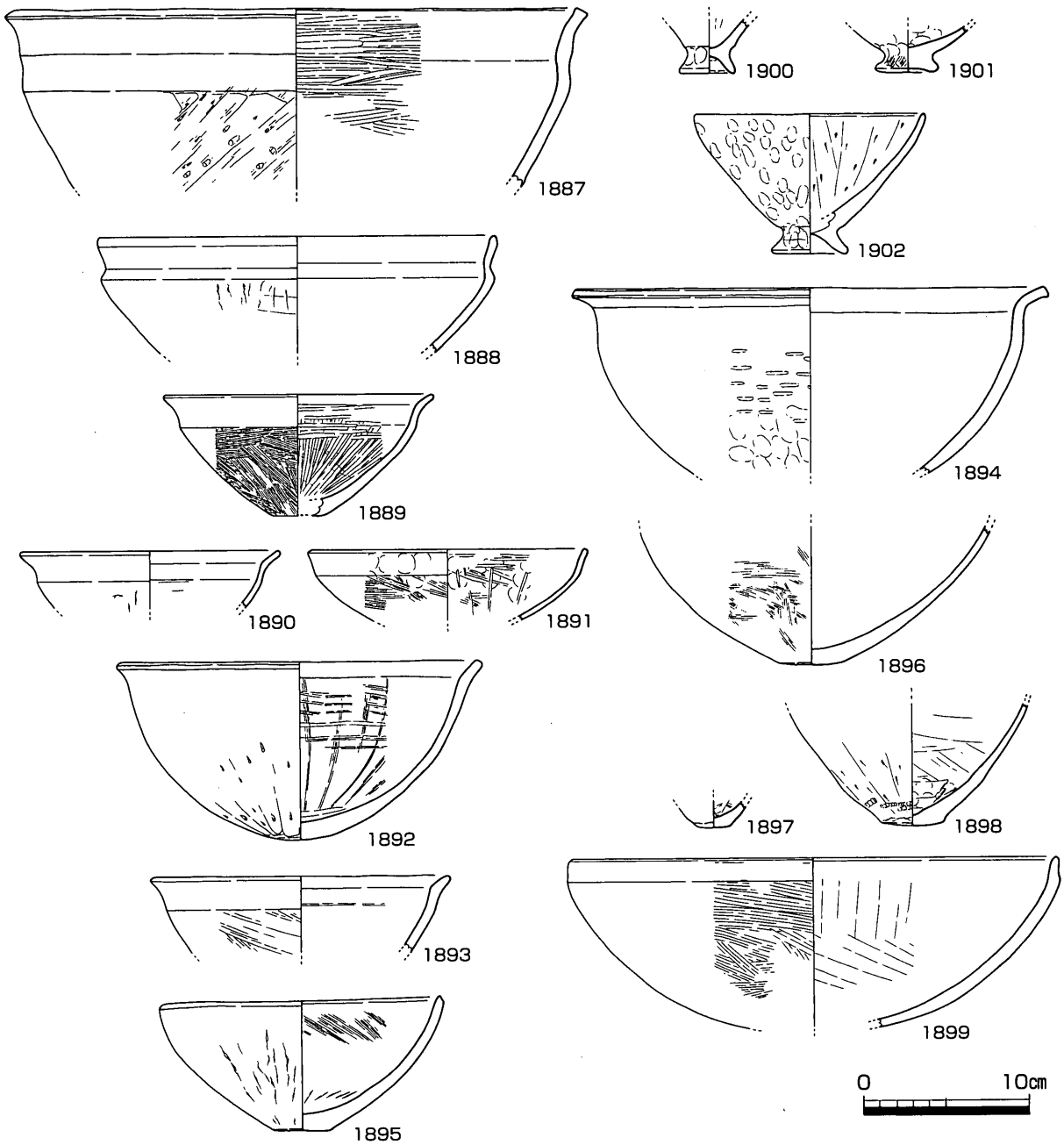

第120図　ＳＤ6127出土遺物実測図②

## ＳＤ6127

ＳＤ6127は第Ⅳ－２調査区（Ｃ－52）西部で検出した溝状遺構である。流路方向はほぼ南北に取り、北部では幅が広がる。南端は古代の溝ＳＤ6128によって切られている。この溝状遺構は土層断面（第113図　柱状図⑯）の土層第４層が第１遺構面の基盤層で、その上部から掘削されている。流路方向はほぼ南北方向をとり、規模は南側の最大幅約1.37m、北側の最大幅約4.3m、深さ約0.27m、検出長約10.6mを測る。断面は浅く、上部が開く「Ｕ」字状を呈している。




第121図　ＳＤ6127出土遺物実測図③

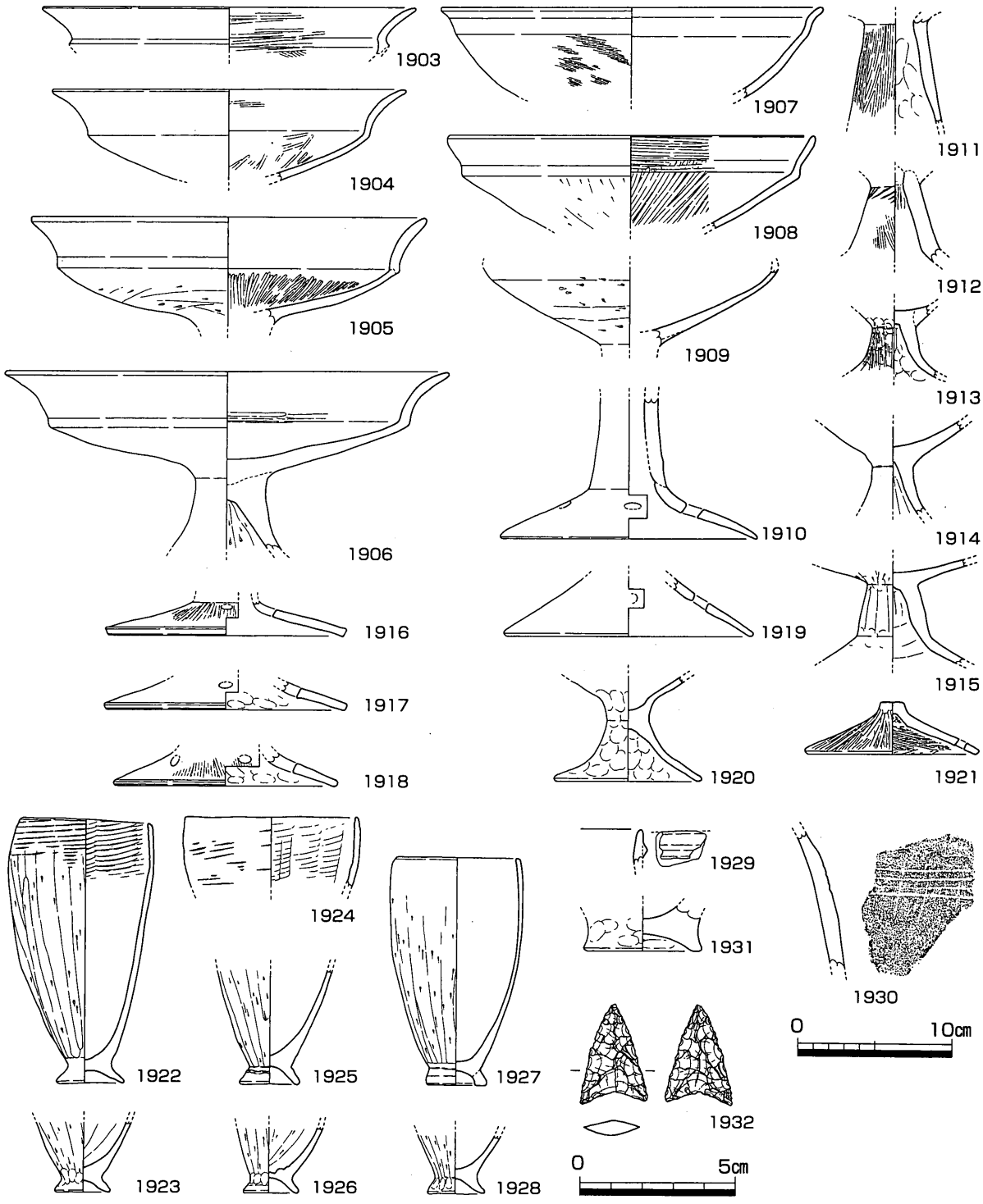



第122図　ＳＤ6127出土遺物実測図④

溝内の最深部から弥生土器が多量に出土している。堆積土より出土した遺物は、弥生土器壺、甕、蓋、鉢、サヌカイト片である。

壺は頸部が直線的にやや外開きの上方に短く延びるもの、長く延びるもの、短く内傾するものがある。1821は外開きで短く延びるものでそのまま口縁端部となる。1822は頸部が長く延びる長頸壺で、頸部外面に１条の沈線が螺旋状に施されている。1824は頸部が短く内傾するもので、口縁端部は上下に拡張し、外面を窪ませる。

甕は底部が平底で、頸部が「く」の字に屈曲し、屈曲部内面は緩やかに屈曲するものと明瞭な稜を持つものがある。口縁部は外反し、端部は上下に拡張するものとそのまま終わらせるもの、上方あるいは下方にのみ摘み出すものがある。1827は口縁端部を拡張するもので、端部外面には３条の退化凹線が認められる。また体部外面の調整は口縁部を拡張するものは体部最大径から下半にヘラ




第123図　ＳＤ6127出土遺物実測図⑤

ミガキ、上半にハケ目が施されているが、そのまま終わらせるものはハケ目が全体に施されている。内面の調整は体部最大径から上半に指頭痕が、下半にヘラケズリが施されているのが主であるが、内面全域にヘラケズリが施されているものも認められる。

鉢には口径約34.0cmの大型のもの、口径約24.0cmの中型のもの、口径約17.0cmの小型のものがある。底部は平底あるいは丸底で、中には脚をつけるものがある。口縁部を屈曲させるものは全てに認められるが、大型のものの口縁部外面には退化凹線が施されている。

高坏は坏部が上半で屈曲し、口縁部は外反しながら外上方に延び、口縁端部は丸くそのまま終わらせる。脚部はほぼ中央部で外方に屈曲し、下半部はかなり広がる。下半部のみに３～４個の穿孔が認められる。坏部内面にはヘラミガキが、脚部外面にはハケ目が施されている。

製塩土器は、脚部が外方に広がり、体部はやや内湾気味に上方に延びる。脚部外面は指ナデが、体部外面にはヘラケズリが口縁端部から約２㎝下まで施されている。体部・口縁部内面に横方向のハケ目を施すもの（1922・1924）も認められる。

1921は蓋で、内外面にハケ目の後ヘラミガキが施されている。端部際に穿孔が認められる。

1930は弥生時代前期の壺で、体部外面に４条の沈線が施されている。

胎土に角閃石を含む土器は甕・高坏、製塩土器である。甕は下川津Ｂ類土器で、体部内面には体部最大径より上半に指ナデ、指頭痕が、下半に縦方向のヘラケズリが施され、外面には縦方向を主とするハケ目（８～９本／㎝）が施されている。製塩土器は脚部の屈曲までの高さが１㎝程度で、体部外面に縦方向のヘラケズリが施される。高坏が少量、製塩土器はおそらく数個体で、甕が多数を占めている。

出土遺物から時期は弥生時代後期前半の土器も含むが、概ね後期中葉と考えられる。

### ＳＤ6109

ＳＤ6109は第Ⅳ－１調査区（Ｃ－47・48）東部で検出した溝状遺構である。流路方向は東から北西方向に円弧を描くように湾曲し、東部では幅が広がる。第Ⅳ調査区で検出した溝状遺構は全て流路方向を南－北あるいは地形の傾斜方向である南東－北西方向を取っているが、この溝状遺構はこれらの溝との関係が全くない。北部分が調査区外で全様は不明であるが、周溝墓の周溝の可能性も考えられる。ほぼ中央部では第１遺構面で検出したＳＤ682によって切られ、東側ではＳＤ6108を切っている。この溝状遺構は土層断面（第112図　柱状図⑮）の土層第７層が第２遺構面の基盤層で、その上部から掘削されている。流路方向はほぼ西－東で、湾曲し、規模は最大幅約2.70m、深さ約0.16m、検出長約19.0mを測る。断面は浅く、上部が緩やかに開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内堆積土は土層断面（ら－ら´）でみると単層で、茶褐色粘質シルトが堆積する。

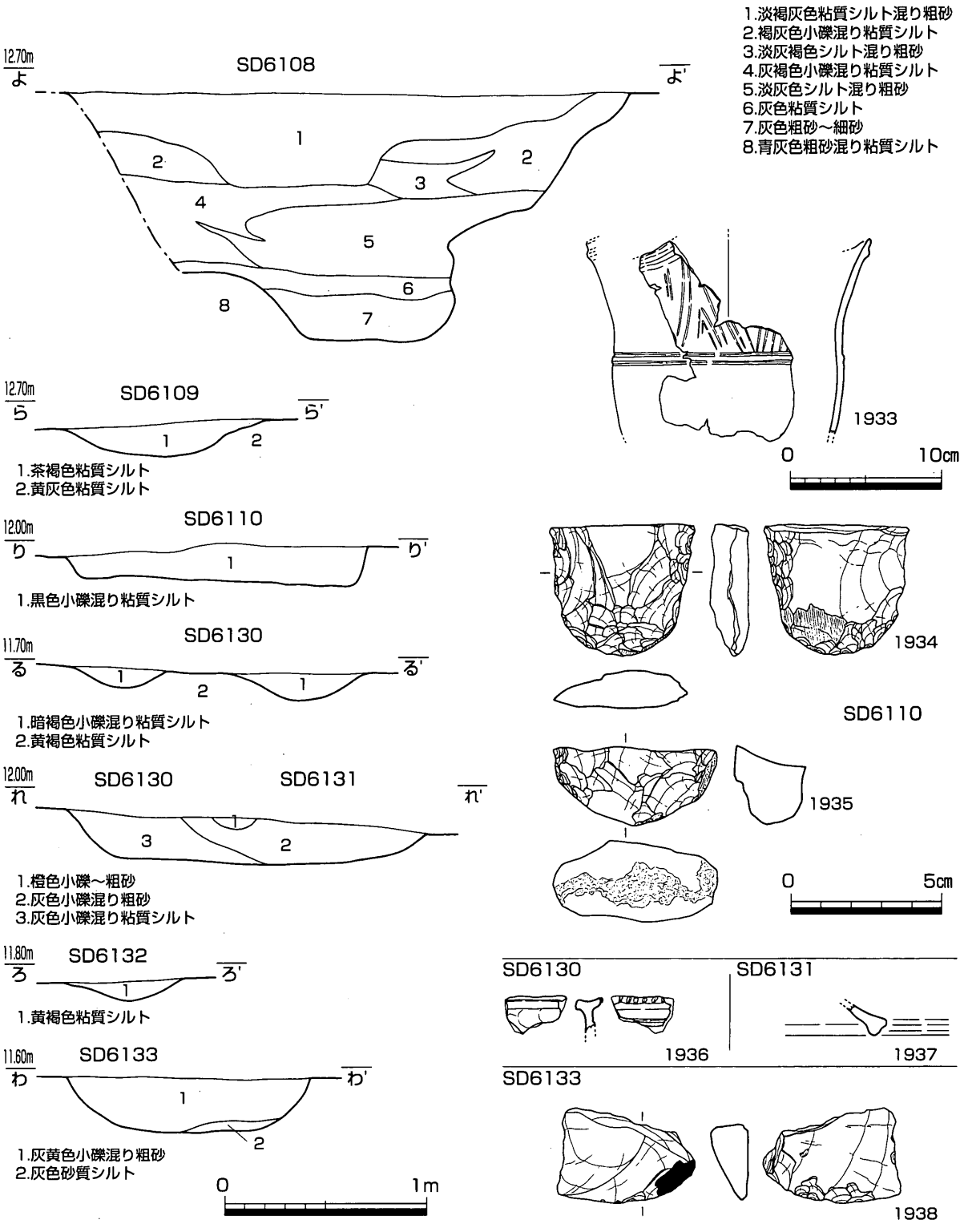
溝内から遺物が出土しておらず、時期は不明である。

### ＳＤ6108

ＳＤ6108は第Ⅳ－１調査区（Ｃ－47）東部で検出した溝状遺構である。流路方向はやや東側に湾曲しながら、ほぼ南北に取る。北部でＳＤ6109によって切られている。この溝状遺構は土層断面（第112図　柱状図⑮）の土層第７層が第２遺構面の基盤層で、その上部から掘削されている。流路方向はほぼ北－南（Ｎ－18°－Ｗ）をとり、規模は最大幅約3.20m、深さ約1.15m、検出長約10.0mを測る。断面は上部が開く「Ｕ」字状を呈している。溝内堆積土は土層断面（よ－よ´）でみると７層で、粗砂層とシルト層の互層である。

溝内から縄文土器が出土している。縄文土器は深鉢で、口縁部が波状口縁を呈し、口縁部外面に突帯を持つ。頸部外面には鋸歯文状にヘラ描きによる沈線を施す。体部と頸部の境には２条のヘラ描き沈線が施され、明確に区分する。

時期は縄文土器が出土していることから、縄文時代晩期とする。




第124図　ＳＤ6108～6110・6130～6133土層断面図、ＳＤ6110・6130・6131・6133出土遺物実測図

ＳＤ6110

ＳＤ6110は第Ⅳ－１調査区（Ｃ－50）西部で検出した溝状遺構である。流路方向はやや北西方向に流路を取る。この溝状遺構は土層断面（第112図　柱状図⑮）の土層第７層が第２遺構面の基盤層で、その上部から掘削されている。流路方向はほぼ北－南（Ｎ－30°－Ｗ）をとり、規模は最大幅約1.50m、深さ約0.20m、検出長約15.0mを測る。断面は上部が開く箱型を呈している。溝内堆

積土は土層断面（り－り´）でみると単層で、黒色小礫混じり粘質シルトが堆積する。

溝内から弥生土器片、サヌカイト製の打製石斧が出土している。

時期は出土遺物が少量のため、不明である。

### ＳＤ6130

ＳＤ6130は第Ⅳ－２調査区（Ｃ－50）東部で検出した溝状遺構である。流路方向はやや蛇行しながら北北東に流路を取る。南部でＳＤ6131によって切られている。この溝状遺構は土層断面（第112図　柱状図⑮）の土層第７層が第２遺構面の基盤層で、その上部から掘削されている。流路方向はほぼ北－南（Ｎ－18°－Ｅ）をとり、規模は最大幅約1.23m、深さ約0.23m、検出長約12.3mを測る。断面は上部が開く浅い「Ｕ」字状を呈している。溝内堆積土は土層断面（る－る´）でみると単層で、暗褐色小礫混じり粘質シルトが堆積する。

溝内から弥生土器が出土している。弥生土器は甕で、口縁端部を内外に拡張し、外面端部には刻み目を持つ。口縁部下にはヘラ描き沈線が施されている。

時期は弥生時代前期の甕も出土しているが、後期の土器も出土していることから弥生時代後期とする。

### ＳＤ6129・6131

ＳＤ6129・6131は第Ⅳ－２調査区（Ｃ－50・51）東部で検出した溝状遺構である。南部では同一の溝がＳＤ6129は北北東方向に、ＳＤ6131は北西方向に分岐する。ＳＤ6131は北西部でＳＲ607によって切られている。この溝状遺構は土層断面（第112図　柱状図⑮）の土層第７層が第２遺構面の基盤層で、その上部から掘削されている。流路方向はほぼ北－南（Ｎ－31°－Ｗ）をとり、規模はＳＤ6129が最大幅約1.60m、深さ約0.08m、検出長約8.0m、ＳＤ6131が最大幅約2.20m、深さ約0.23m、検出長約8.0m測る。断面は上部が緩やかに開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内から弥生土器の甕、高坏が出土している。

時期は出土遺物の胎土から前期の土器も出土しているが、弥生時代後期の甕、高坏が出土していることから弥生時代後期とする。

### ＳＤ6132

ＳＤ6132は第Ⅳ－２調査区（Ｃ－51）東部で検出した溝状遺構である。流路方向はやや蛇行しながら北西に流路を取る。南東部でＳＲ608によって切られている。この溝状遺構は土層断面（第112図　柱状図⑮）の土層第７層が第２遺構面の基盤層で、その上部から掘削されている。流路方向はほぼ北－南（Ｎ－60°－Ｗ）をとり、規模は最大幅約0.80m、深さ約0.04m、検出長約5.50mを測る。断面は上部が開く浅い「Ｕ」字状を呈している。溝内堆積土は土層断面（ろ－ろ´）でみると単層で、黄褐色粘質シルトが堆積する。

時期は出土遺物が少量のため、不明である。

### ＳＤ6133

ＳＤ6133は第Ⅳ－２調査区（Ｃ－52）中央部で検出した溝状遺構である。流路方向は北西方向に

流路を取る。北部でＳＲ609によって切られている。この溝状遺構は土層断面(第112図　柱状図⑮)の土層第７層が第２遺構面の基盤層で、その上部から掘削されている。流路方向はほぼ北－南（Ｎ－53°　－Ｗ）をとり、規模は最大幅約1.60m、深さ約0.24m、検出長約5.4mを測る。断面は上部が緩やかに開く「Ｕ」字状を呈している。溝内堆積土は土層断面（わ－わ´）でみると単層で、灰黄色小礫混じり粗砂が堆積する。

溝内からサヌカイト製品が出土している。

時期は出土遺物が少量のため、不明である。

## ２．自然流路跡

第Ⅳ調査区で検出した自然流路跡は総数４条（ＳＲ606～609）で、調査区の東部を中心に、第２遺構面で検出している。溝状遺構はほとんどが南北に流路を取る。

### ＳＲ606

ＳＲ606は第Ⅳ調査区（Ｃ－49）東部で検出した自然流路跡である。流路方向は地形の傾斜方向である北西－南東（Ｎ－24°　－Ｗ）を取る。この自然流路跡は土層断面（第112図　柱状図⑮）の土層第７層が第２遺構面の基盤層で、その上部から掘削されている。この部分では第１遺構面と第２遺構面間に第５・６層しかなく、特に第６層は自然流路内の窪んだ部分にも堆積している。規模は最大幅約5.20m、深さ約0.74m、検出長約17.0mを測る。自然流路の堆積土は単層で、青灰色～橙色粗砂混じり小礫層が堆積している。

自然流路跡から出土した遺物は少量で、土器片とサヌカイト片が数点出土したのみである。

出土遺物が少量のためから、時期は不明である。

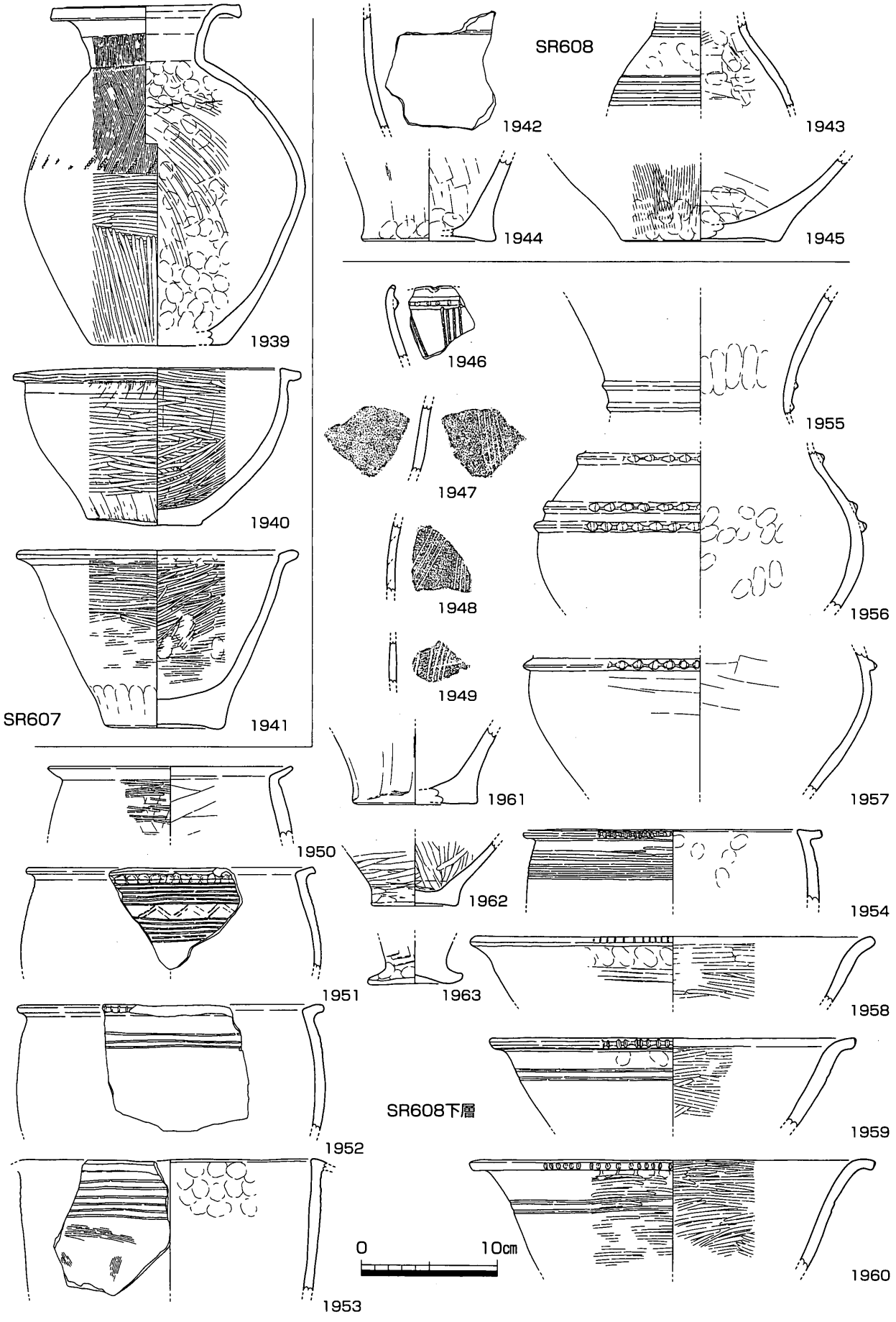
### ＳＲ607

ＳＲ607は第Ⅳ調査区（Ｃ－50・51）中央部で検出した自然流路跡である。南から北に向けて流路を持つもので、ほぼ中央部で左右、２条に分かれる。右側（東側）の流路は北部で溜り状に膨らむ。左側（西側）の流路はＳＲ608を切り、北流する。流路方向は分流するが、概ね北－南を取る。

規模は南側で最大幅約5.60m、分流した部分では幅約2.40～2.60mと約半分程度となり、深さ約2.50m、検出長約14.0mを測る。北壁土層（ｈ－ｈ´）で見ると左側（西側）流路の堆積土は９層で、第４～12層に相当する。流路堆積土は灰色系の粗砂層を中心としており、第６・８・10層はラミナー状堆積している。右側（東側）堆積土は10層で、第14～22層に相当する。これらの堆積土は更に第14～19層と第20～22層に大別でき、それぞれに最深部があることから流路を東から西に変えるようである。流路を変えたことにより、北部では溜り状の検出状況となったと考えられる。流路堆積土は灰色系の粗砂層を中心としており、第19層は細砂～粗砂層で、層厚約1.3mを測り、ラミナー状堆積している。

自然流路跡から弥生土器、サヌカイト製品・剥片等の遺物が出土している。

1939は弥生土器壺で、底部が平底、体部は算盤球状を呈し、頸部から口縁部にかけて朝顔状に開く。口縁端部はあまり拡張せず、そのまま終わらせる。体部外面には最大径以下に横・縦方向のヘラミガキが、上半から頸部にかけてハケ目が施されている。最大頸部分には櫛先刺突文が施されて




第125図　ＳＲ607・608出土遺物実測図

いる。体部内面には指頭痕が顕著に認められ、部分的にハケ目が施されている。

1940・1941は甕で、平底の庭部から体部はやや内湾気味に延びるものと直線的に延びるものがあり、前者は口縁部外面に、突帯を持つ。後者は外方に屈曲させる。内外面共にヘラミガキが顕著に施されている。

出土遺物から、時期は弥生時代中期前半頃と考えられる。

## ＳＲ608

ＳＲ608は第Ⅳ調査区（Ｃ－51）中央部で検出した自然流路跡である。南から北に向けて流路を持つもので、流路方向は、概ね北－南を取る。北部ではＳＲ607によって切られている。規模は最大幅約2.30m、深さ約0.35m、検出長約8.0mを測る。土層（ｉ－ｉ′）で見ると自然流路の堆積土は４層で、灰色系の砂層・シルト層・粗砂層が堆積している。

自然流路跡から縄文土器、弥生土器が出土している。

1946～1960は自然流路底面から出土した遺物で、縄文土器、弥生土器が出土している。

縄文土器は内傾に延びる頸部から口縁部が外反するもので、口縁部外面、口縁端部から約１㎝下に突帯を持つ。口縁端部と突帯には刻み目が施され、頸部外面には沈線が４～５本１単位で施されている。

これらは沢田式と呼称されているもので、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけてのものである。

弥生土器は壺、甕、鉢が出土している。壺は体部が算盤状を呈し、頸部は朝顔状に開くものである。体部最大径部分、体部上半、頸部下半に刻み目突帯を持つ。弥生時代中期のものである。甕は内湾する体部から口縁部を外方に屈曲させるもので、突帯状に屈曲するものと折り曲げ状に屈曲するものがある。口縁端部には刻み目を持つものと持たないものがある。外面には３、６、７条のヘラ描き沈線が施されている。1951は外面に６条のヘラ書き沈線を２段に施し、その間に２条で鋸歯文を施している。

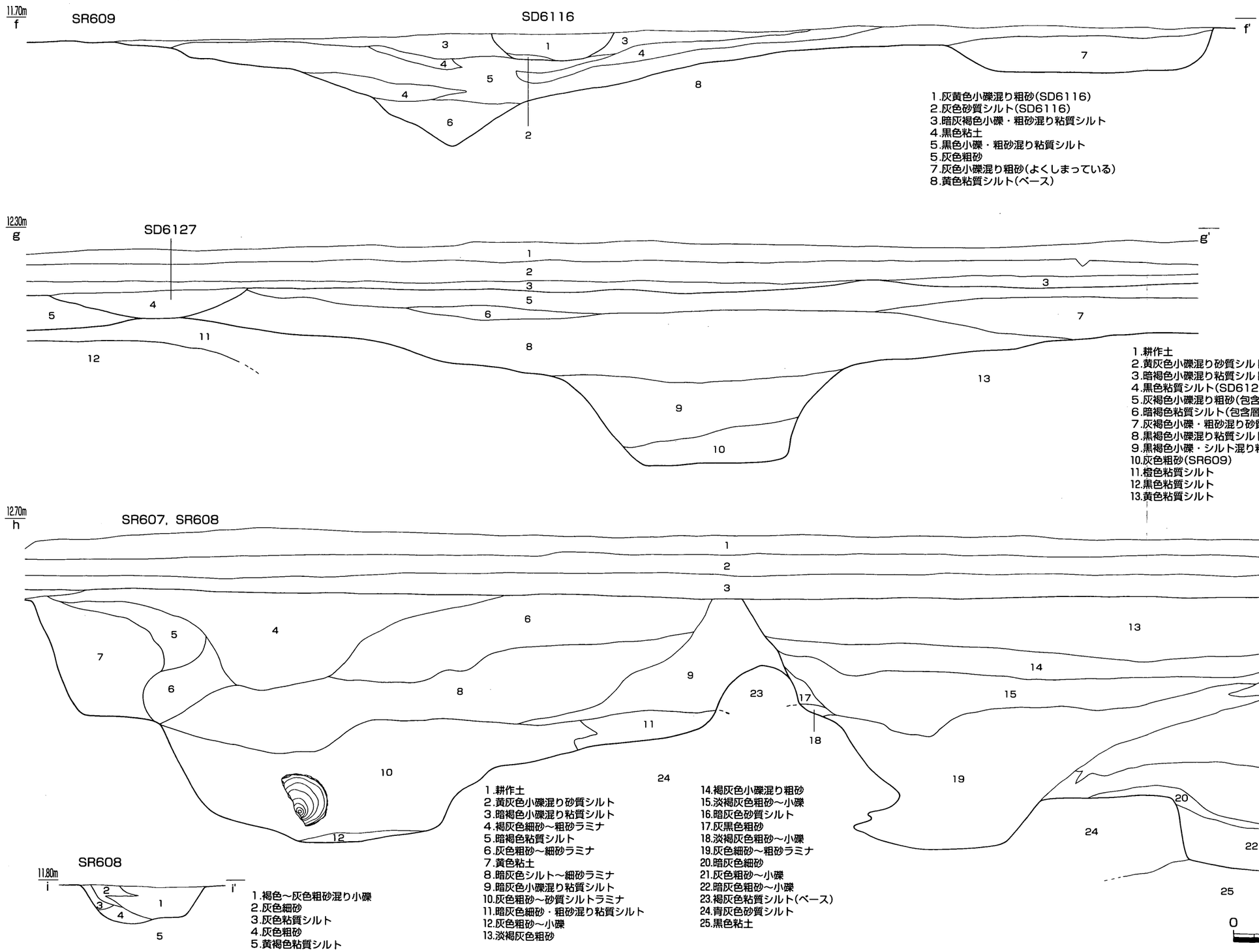
鉢は外傾する体部から口縁部を折り曲げ状に屈曲させるもので、口縁端部に刻み目を持つ。外面には２条のヘラ描き沈線が施されている。鉢は特に内外面にヘラミガキが密に施されている。

出土遺物から、時期は弥生時代前期末～中期前半頃と考えられる。

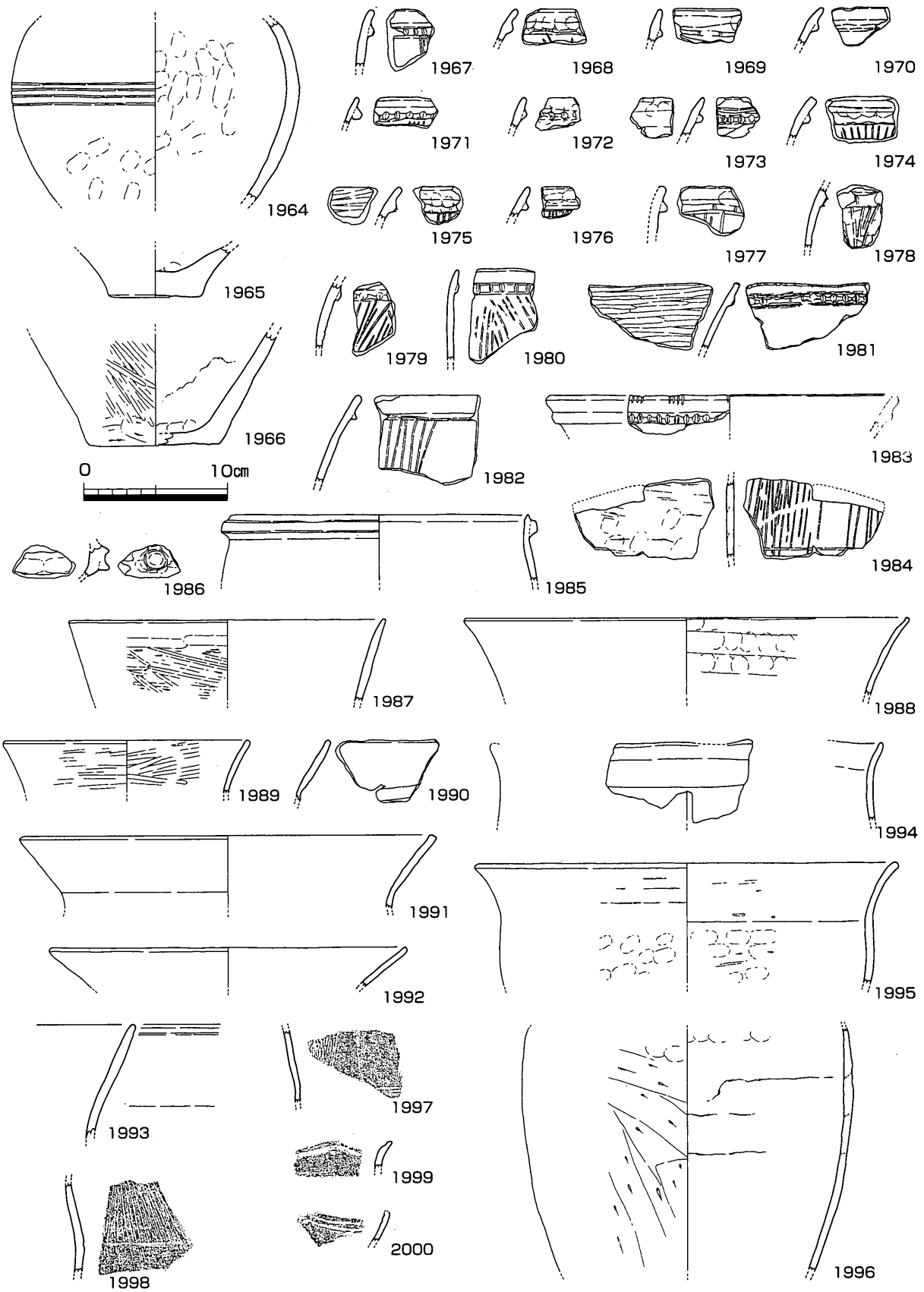
## ＳＲ609

ＳＲ609は第Ⅳ調査区（Ｃ－51・52）中央部で検出した自然流路跡である。流路幅・最深部ともに一定していない。南から２条で延びる流路跡が北部で合流する。右側（東側）の流路は途中で途切れ、左側(西側)の流路も南端部では細くなる。流路方向は東側流路が北西－南東(Ｎ－50°－Ｗ)をとり、西側流路が北－南（Ｎ－18°－Ｅ）をとる。規模は最大幅約10.80m、深さ約1.50m、検出長約20.0mを測る。

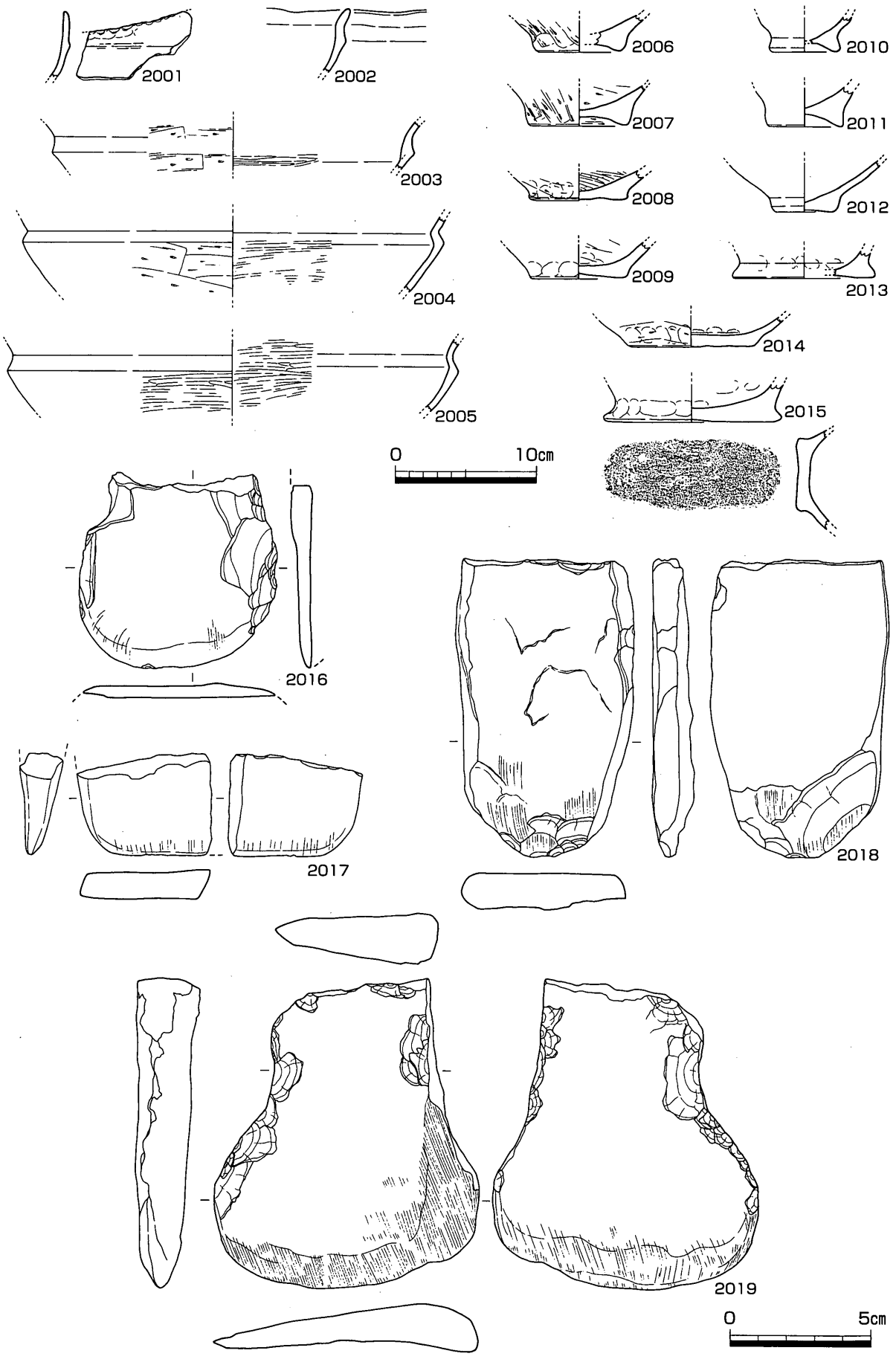
自然流路の堆積土は土層（ｆ－ｆ′）で４層、（ｇ－ｇ′）で３層となる。土層（ｆ－ｆ′）から大別して上下層に分けられる。上層は第３～５層で、小礫・粗砂混じり粘質シルト層を中心に部分的に第４層の黒色粘土が堆積する。下層は第６層で最深部に堆積した灰色粗砂層である。断面は上部が緩やかに傾斜し、開く「Ｖ」字状を呈する。土層（ｇ－ｇ′）でも同じように上下層に別れ、上層は第８層粘質シルト層で、下層第９・10層粗砂層が堆積する。断面は下部が箱型を呈し、形態



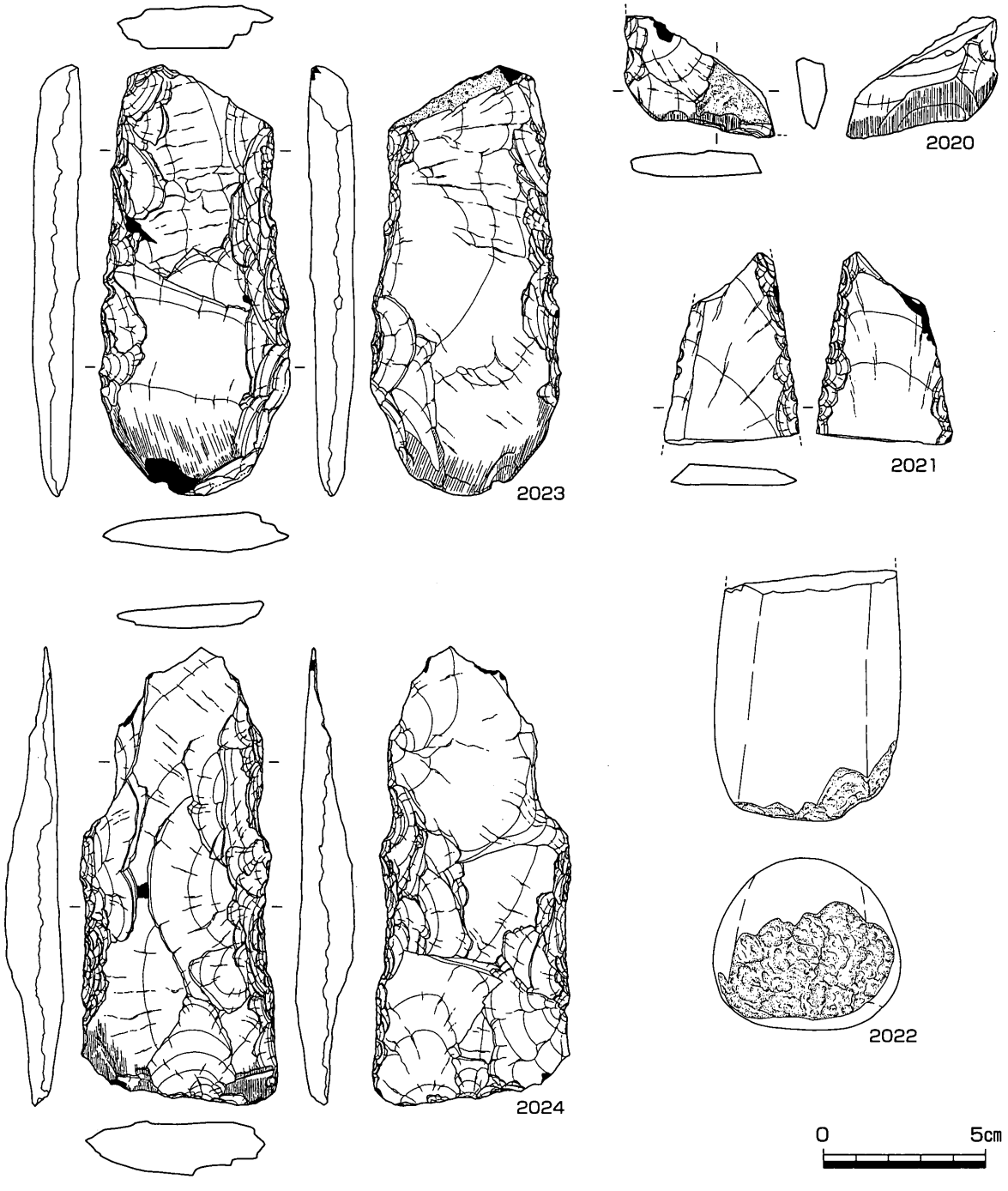

第126図　ＳＲ607・608・609土層断面図




第127図　ＳＲ609出土遺物実測図①




第128図　ＳＲ609出土遺物実測図②



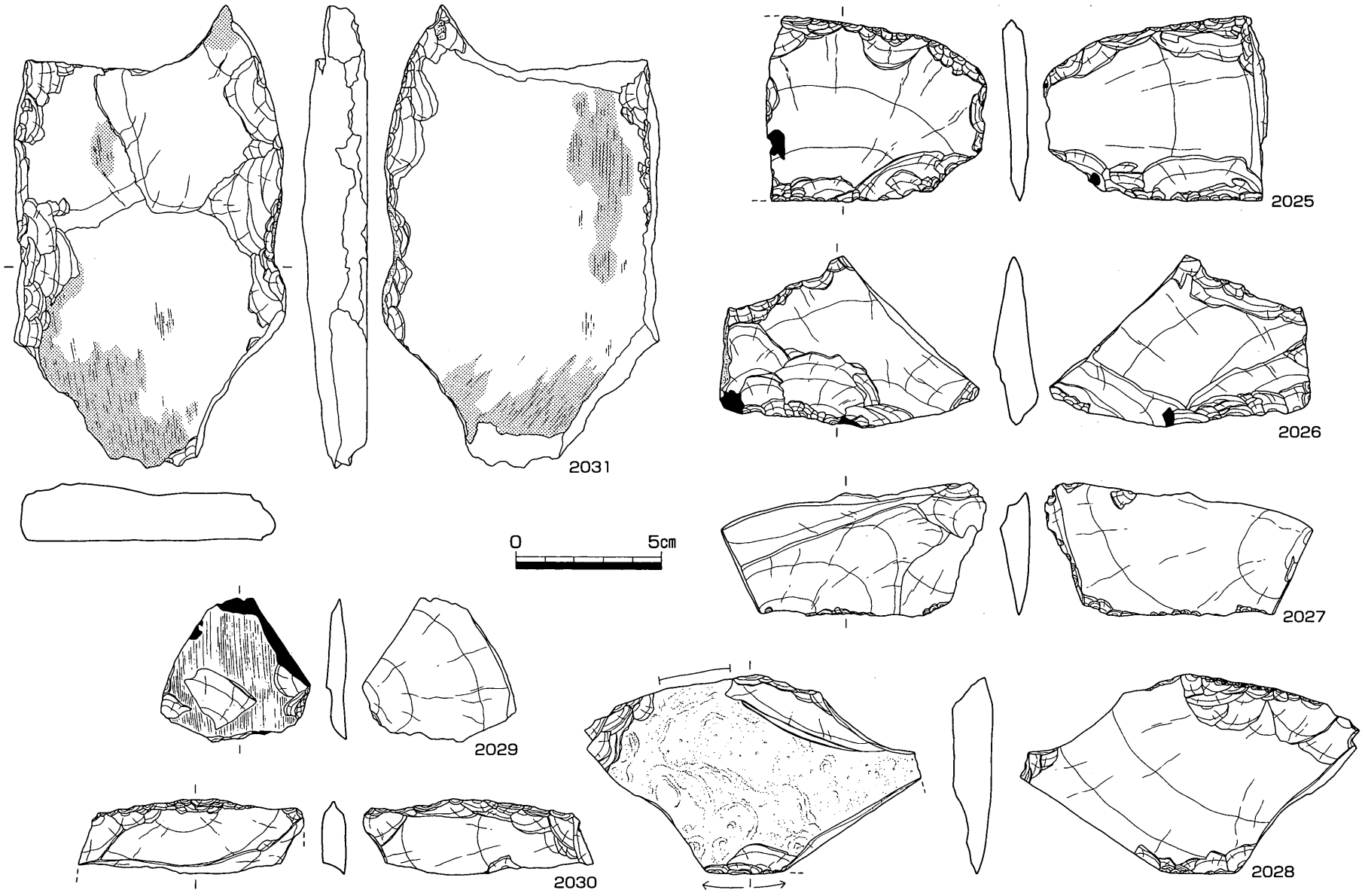

第129図　ＳＲ609出土遺物実測図③

が違うが、これは土層（ｇ－ｇ´）がちょうど合流地点であることから、流路断面の形態が変わったものと考えられる。

自然流路跡から縄文土器、弥生土器、サヌカイト製品・剥片等の多量の遺物が出土している。

1964～1966は弥生土器壺である。底部は平底で、体部外面にヘラミガキが施されている。1964は体部が球形を呈し、最大径部分に４条のヘラ描き沈線が施されている。弥生土器は少量で、ほとんどが縄文土器である。

縄文土器には深鉢、浅鉢があり、深鉢は口縁部外面に突帯を持つものと持たないものがある。突帯を持つ深鉢には、口縁端部は丸く収め、端部から約１㎝下の外面に１条の突帯を持ち、突帯には




第130図　ＳＲ609出土遺物実測図④

刻み目を持つものと持たないもの（1982・1985）がある。突帯下の外面には縦方向のヘラ描き沈線が施され、鋸歯文状に施されているものもある。口縁端部には1981以外刻み目を施すものは確認できなかった。2001～2015は浅鉢で、口縁部が波状を呈し、口縁端部内面に１～２条の沈線が施されている。2015は底部が楕円形を呈するもので、浅鉢の底部と考えられる。1998は壺の体部で、外面に縦方向のヘラ描き沈線、体部最大径部分に１条の沈線が施されている。

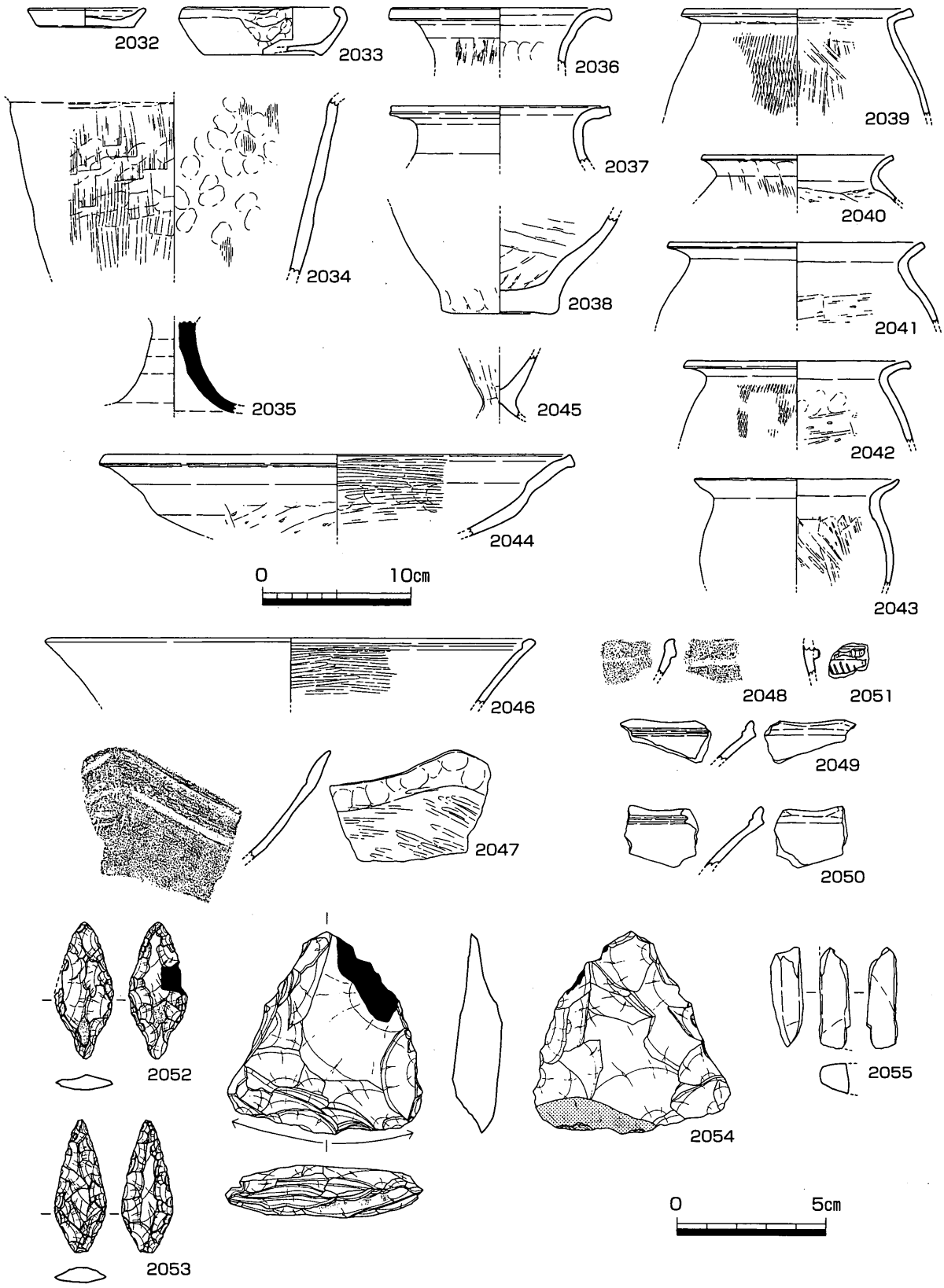
これら縄文土器の時期は津島岡大～沢田式のものと思われる。

石製品はサヌカイト製の石鏃、楔状石器、スクレイパーがある。石斧は先端部が欠損しており、基部のみである。また、多量のサヌカイト製の剥片も出土している。

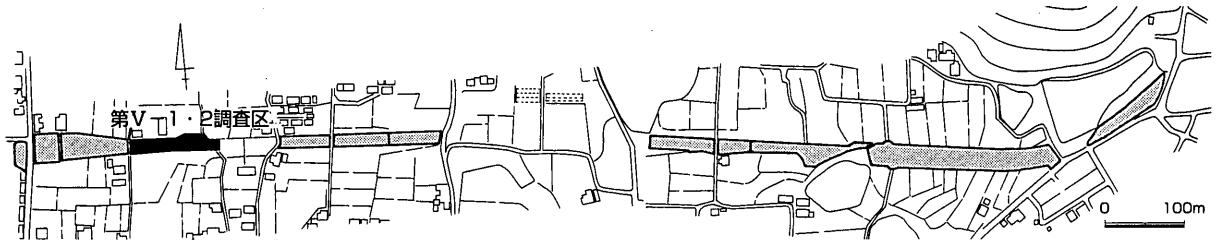
実測可能遺物は縄文土器と石製品であるが、これ以外にも弥生土器片、サヌカイト剥片が多量に出土している。

### ３．包含層

包含層出土遺物として図化したものは機械掘削時、遺構面精査段階で出土したものである。遺物には土師器小皿、小型鉢、土師質長胴甕、須恵器高坏、弥生土器、縄文土器、サヌカイト製品があり、時期は中世、古代（７世紀）、弥生時代後期、縄文時代晩期と概ね検出遺構と同時期のものである。




第131図　第Ⅳ調査区包含層出土遺物実測図




第132図　第Ⅴ－１・２調査区位置図

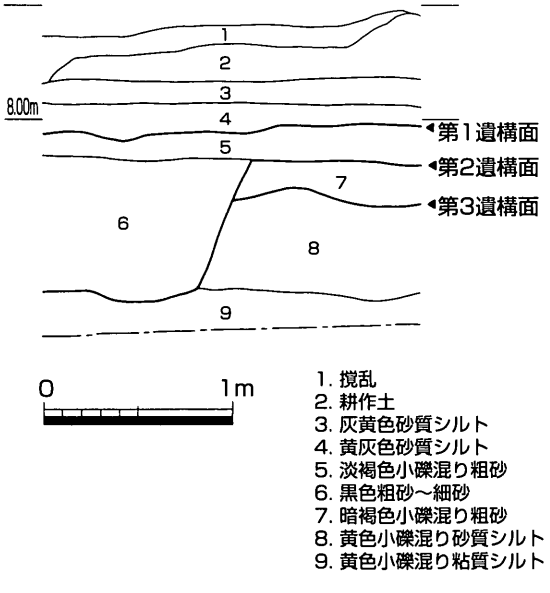
## 第Ⅴ調査区

第Ⅴ調査区は東西に長い小山・南谷遺跡の西端に位置し、第Ⅳ調査区西端から西に約80mの位置にある（第132図）。現況からの地形復元（第６図）の結果、調査区周辺は東南東から西北西に向けての緩傾斜地となっている。現地盤の標高差を見ると調査区の南北幅が約16mと狭いことから南北方向はほとんど高低差が認められないが、東西方向は東西幅が約236mと長いこともあり、約3.90mの高低差が確認できる。

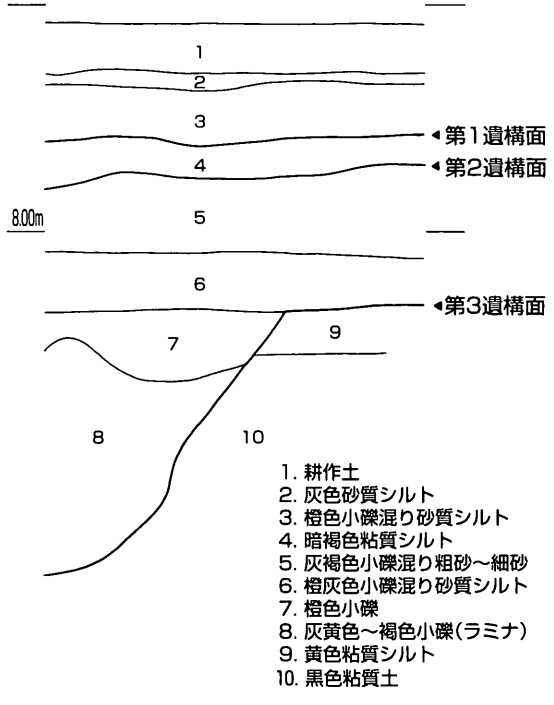
推定旧地形からみると第Ⅴ調査区は立石山山塊から北西に延びる丘陵、ちょうど岡山小古墳群が立地する丘陵から更に延びる微高地の先端に位置する。また西側は新川、春日川の三角州（河口）、北側には唐池→唐戸池→唐戸下池→長尾池から新川、春日川によって形成された三角州（河口）へと流れ込む旧流路が推定でき、この調査区を西限、北限として南側向かって安定するものと考えられる。推定旧地形からは、調査区内の旧流路を推定できなかった。

調査区は東西幅約236m、南北幅約16～35mと東西に細長い調査区で、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑跡、溝状遺構、自然流路跡を中心とした遺構を検出した。

第Ⅴ調査区は平成７年度に発掘調査を実施した第Ⅴ－３調査区（平成８年報告書刊行）を挟むことから、ここでは第Ⅴ－１・２調査区と第Ⅴ－４調査区を分けて遺構の説明をする。




第133図　第Ⅴ－２調査区土層柱状図⑰




第134図　第Ⅴ－２調査区土層柱状図⑱

①第Ⅴ－１・２調査区

第Ⅴ－１・２調査区では、遺構面を３面確認した。

第１遺構面は土層断面（第134図　柱状図⑱）でみると、第１層耕作土下に第２層灰色砂質シルト層、第３層橙色小礫混じり砂質シルト層があり、地表面から約60cm下で確認した。第２遺構面は第１遺構面下に第４層暗褐色粘質シルト層があり、約20cm下で確認した。この第４層は第１遺構面の基盤層となる。第３遺構面は第２遺構面下に第５層灰褐色小礫混じり粗砂～細砂層、第６層橙灰色小礫混じり砂質シルト層があり、約70cm下で確認した。第５層は第２遺構面の基盤層となる。第９層黄色粘質シルト層が第３遺構面の基盤層となり、更に第10層黒色粘質土層となる。土層断面（第133図　柱状図⑰）でも遺構面間の堆積層に多少の差が認められるが、堆積層の土質はほぼ近似しており、基準とした土層断面の位置による差とする。

それぞれの遺構面を形成する基盤層は土質が粗砂層、細砂層、シルト層と安定した土層ではなく、不安定なものである。この砂層・シルト層からなる不安定な基盤層及び各遺構面間のシルト層を中心とした厚い堆積土層から、小山･南谷遺跡の立地する当たりが扇状地という地形区分に加え、更に旧流路の氾濫による堆積がかなり頻繁にあったものと考えられる。

第Ⅴ－１・２調査区は全体にほぼこの土層序となり、東側を除き３面の遺構面を確認した。検出した遺構は溝状遺構、自然流路跡を主として、僅かに土坑、柱穴を検出した。掘立柱建物跡などを構成する柱穴を検出していないことから居住域としては適していない地区であることが解る。第Ⅴ－２調査区ほぼ中央部で、井戸跡を１基確認したが、この調査区の不安定な土層内に流れる地下水（伏流水）を目的に掘削されたものと考えられる。

第１遺構面で確認した遺構は、溝状遺構14条、土坑跡１基、柱穴跡11基である。

溝状遺構は西から第Ⅴ－４調査区、第Ⅴ－３調査区を横断し、この調査区及び第Ⅳ調査区まで延びるＳＤ6128が、ほぼ調査区中央を東西に横断する。このＳＤ6128と同じ方向に流路を取る溝状遺構が４条確認でき、それ以外は流路を南北に取り、ほとんどがＳＤ6128によって切られている。柱穴は北西部に集中して検出したが、調査区内で掘立柱建物を構成するに至っていない。

第２遺構面で確認した遺構は、溝状遺構13条、土坑跡１基、井戸跡１基、柱穴跡３基である。

遺構は第Ⅴ－１調査区では検出できず、全て第Ⅴ－２調査区でのみ検出している。溝ＳＤ6156は第１遺構面で検出したＳＤ6128の南の位置で、ほぼ併行するもので、それ以外の溝状遺構は第１遺構面同様に流路を南北に取るＳＤ6153～6155があるが、それ以外は流路方向が一定しておらず、人為的な溝の可能性が低い。井戸跡はＳＤ6128に切られ、第Ⅴ－２調査区のほぼ中央部で検出したが、付随する居住域は確認できなかった。

第３遺構面で確認した遺構は、自然流路跡14条、土坑跡４基である。

検出した自然流路跡は流路方向を北－南あるいは北西－南東方向に流路を取り、地形の傾斜と合致する。土坑跡は第Ⅴ－１調査区のほぼ中央部南で集中して検出した。

１．井戸跡

第Ⅴ調査区で検出した井戸跡は総数２基（ＳＥ603・604）で、第Ⅴ－２調査区のほぼ中央部で検出したＳＥ603と第Ⅴ－４調査区ほぼ中央部で検出したＳＥ604である。ＳＥ603は周囲に掘立柱建物跡等を確認しておらず、居住域内の位置関係については不明である。ＳＥ604は掘立柱建物跡が

密集し、それらを区画溝によって画された居住域の南東部にあり、掘立柱建物跡の時期とも合致する。

ＳＥ603

ＳＥ603は第Ⅴ－２調査区ほぼ中央部、第２遺構面の標高約7.94ｍで検出した井戸跡である。掘り方上面は試掘トレンチ、古代～中世の溝ＳＤ6128で削られており、南西部を残すのみである。

土層断面（第135図）から見ると基盤層として第６層黄灰色小礫混じり粘質シルト層があり、自然流路ＳＲ622が掘削され、埋没後第４層灰黄色細砂層が堆積し、第４層を基盤層として井戸ＳＥ603が掘削され、埋没後溝ＳＤ6128が掘削されたものと考えられる。古い順から第６層→ＳＲ622→第４層→ＳＥ603→ＳＤ6128となる。井戸跡内の堆積土は３層で、第１・２層が井戸廃絶後に堆積した土層で、第３層が裏込め土である。第１層は黒色小礫・粗砂混じり粘質シルト層、第２層が黒色小礫混じり細砂層とどちらにも小礫を含む。第３層黒色粘質シルト層は井戸掘り方と曲げ物間に裏込めされた土層である。

平面形態は残存する南西部分から推定すると円形を呈していたと考えられ、掘り方は平面・断面から上面から30cm下で、幅20～25cm程度の平らな面を持つ２段掘りを呈していることが解る。規模は掘り方平面の推定直径約2.10ｍ、検出面からの深さは約1.20ｍを測る。

井戸内のほぼ中央部から円形の曲げ物が出土している。

曲げ物は井筒として転用され、現状で２段確認できる。１段目の曲げ物はほぼ完全な状態で検出し、直径約50cm、高さ約45cm、厚さ約５㎜を測る。下側口縁の外側に６cmほどの補強板が確認できる。本来は上下口縁の外側に補強板がまかれていたと考えられるが、２段目を重ねるために上側口縁の外側補強材は取り外している。２段目の曲げ物は半分程度、高さ約20cmが残存する。北側はＳＤ6128によって削られており、南半分は主として第２層中から出土していることから廃絶時に朽ちたものが曲げもの内に落ち込んだものと考えられる。２段目の曲げ物は１段目の曲げ物の外側に上端と下端を８cmほど重複させ、積み上げており、２段目の曲げ物の直径の方が１段目の曲げ物の直径より若干大きいものと考えられる。

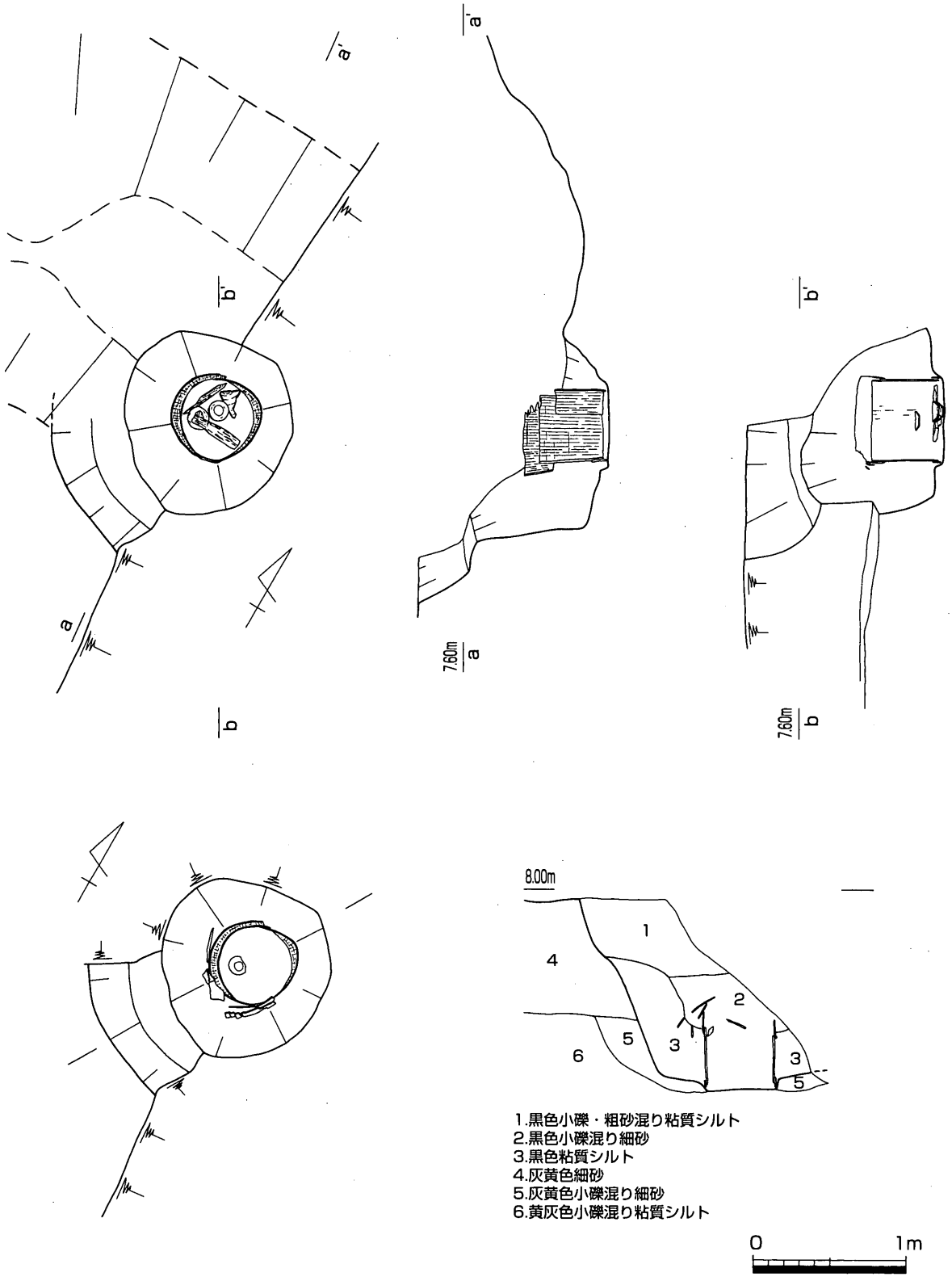
１段目の曲げ物は井戸掘り方のほぼ中央部を曲げ物の直径（約50cm）とほぼ同じ大きさに６～７cm程度掘り窪め、設置されている。ちょうど補強板が埋まる程度である。また１段目の上端と第３層の裏込め土の上端、更に１段目曲げ物の上端の高さが同じであることから、土坑底面に１段目の曲げ物を設置し、第３層を裏込め土とし、おそらく２段目の曲げ物を設置し、更に上位の裏込め土を入れたものと考えられる。検出状況からは２段目の裏込め土は確認されておらず、曲げ物を何段に設置したのかは不明であるが、曲げ物と裏込め土の関係（構築方法）は曲げ物１段ごとに裏込め土を入れたものと考えられる。

曲げ物内底部からかなりの湧水があり、第６層が湧水層と考えられる。

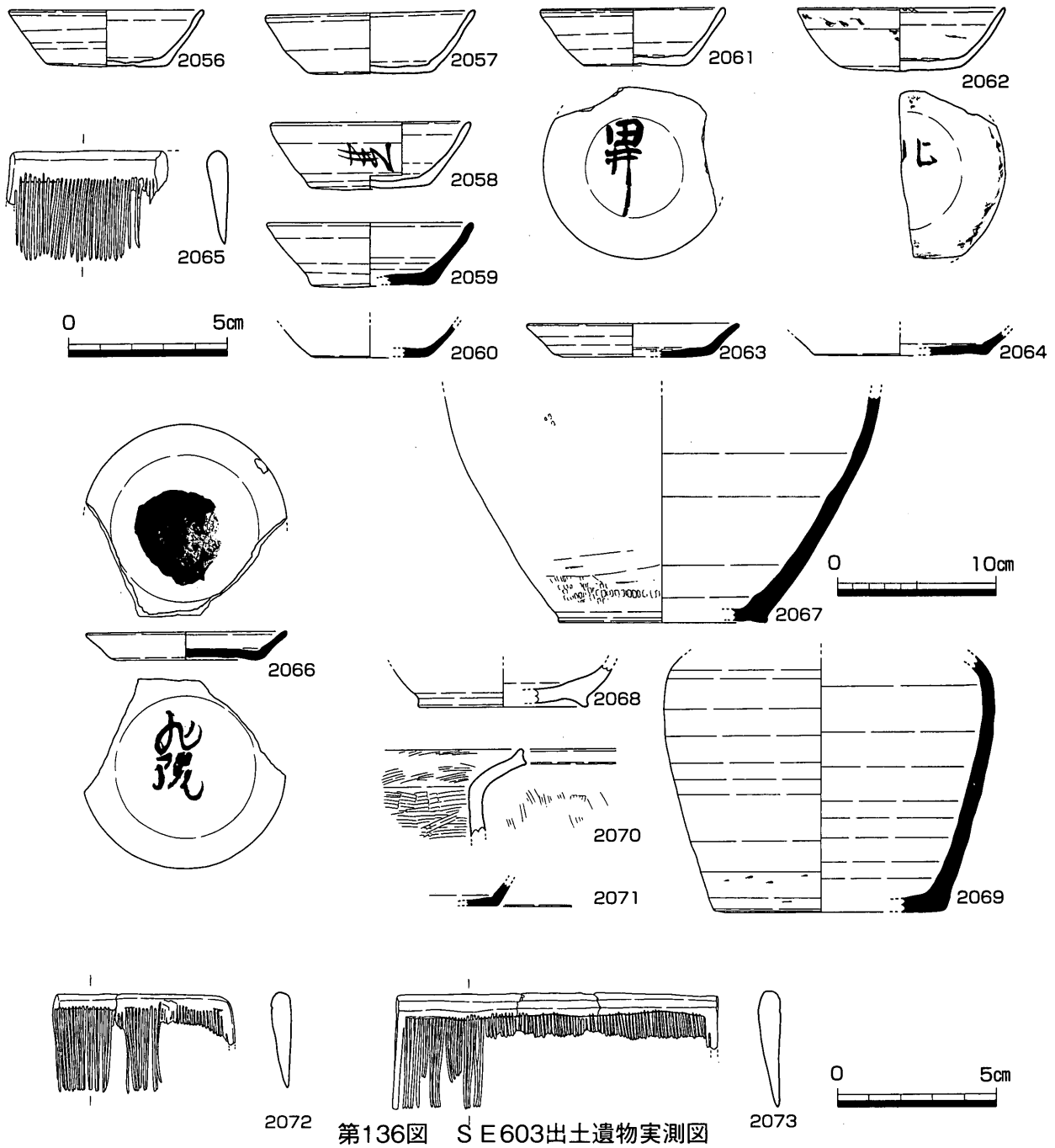
井戸跡内からは須恵器、土師器、土師質土器、木製品、獣骨が出土している。

2057～2067は１段目曲げ物内底部から出土した遺物である。

2057・2058・2061・2062は土師器坏で、計４点出土している。底部はヘラ切りで、底部と体部の境に稜を持ち、体部は若干内湾気味のもの（2062）もあるが、ほとんどが直線的に外上方に延びる。そのうち2058・2061・2062の３点は体部外面及び底部に墨書が認められ、判読できるものは、




第135図　ＳＥ603平・断面図、井戸枠出土状況図




第136図　ＳＥ603出土遺物実測図

2061が「田井」、2062が「北」で、2058については不明である。

2059・2060は須恵器坏で、計２点出土している。土師器坏と形態・調整が同じで、焼成のみが須恵器焼成されたものである。

2063・2064・2066は須恵器皿で、計３点出土している。底部はヘラ切りで、低部と体部の境に稜を持ち、体部は直線的に外上方に延びる。口径は12.5～13.2cmで、小型の皿である。2066の底部には「九院」の可能性がある墨書が認められる。

2067は須恵器壺の底部で、底部にかなり低い高台が付く。体部はやや内湾気味に外上方に延び、体部外面には格子目叩きが施され、僅かに痕跡が確認できる。体部内面は横ナデが施されている。

2065は木製の櫛で、現存長５cm、歯も含め3.4cmの幅を持つ。

これらの遺物は１段目曲げ物内底面から出土しており、坏・皿類が口縁部を上にしていることから井戸廃絶時あるいは掘削時、使用時に何らかの行為に際し、置かれたものの可能性が高い。

2056・2068～2073は廃絶後の堆積層と考えた第１・２層から出土した遺物である。

黒色土器椀、土師質長胴甕、須恵器坏、須恵器壺、木製櫛が出土している。

獣骨は馬中筋骨である。

時期は曲げ物内から出土した2057～2067は９世紀末～10世紀前半にかけてのもので、廃絶後の堆積層から出土した2056・2068～2073は９～11世紀とやや時期幅がある。

出土遺物から井戸跡の時期は９世紀末～10世紀前半である。

## ２．土坑跡

第Ⅴ－１・２調査区で検出した土坑跡は総数６基で、１基は第２遺構面で、それ以外は第３遺構面で検出した。特に第３遺構面で検出した４基、ＳＫ6118～6121は第Ⅴ－１調査区中央部南側に集中しており、近接して確認したＳＲ612・614との関係が注目される。

### ＳＫ6118

ＳＫ6118は第Ⅴ－１調査区（Ｂ－63）中央部南寄りで、ＳＲ612の南に近接し、検出している。平面形態はほぼ円形を呈し、直径約1.25m、検出面からの深さ約0.36mを測る。土坑内堆積土は３層で、第１層が黒色粘土層、第２層が黒色小礫混じり粘質シルト層、第３層が暗灰色小礫混じり細砂層である。土坑の断面形態は緩やかに上部が開く箱型を呈している。

土坑内から縄文土器、サヌカイト製品が出土している。縄文土器は深鉢である。

時期は出土遺物より縄文時代晩期である。

### ＳＫ6119

ＳＫ6119は第Ⅴ－１調査区（Ｂ－63）中央部南寄りで、ＳＲ612に近接し、検出している。平面形態は推定で円形を呈し、直径約1.09m、検出面からの深さ約0.68mを測る。土坑内堆積土は６層で、第１層が黒色小礫混じり粘質シルト層、第２層が黒色粘土層、第３層が灰黄色小礫混じり砂質シルト層、第４層が灰黄色小礫混じり砂質シルト混じり暗灰色小礫混じり砂質シルト層、第５層が灰黄色粘土層、第６層が黒色小礫混じり細砂層である。土坑の断面形態は上部が開く「Ｕ」字状で、下部は部分的に袋状を呈している。貯蔵穴の可能性が考えられる。

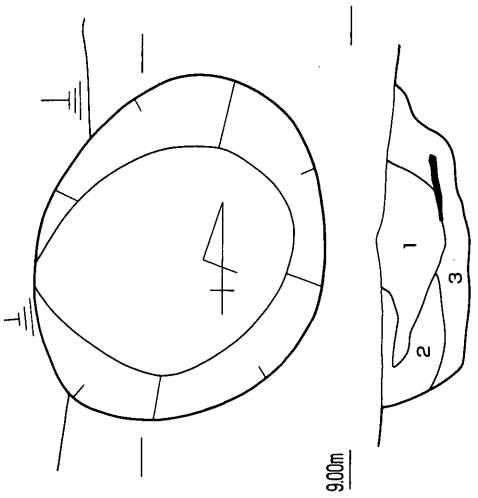
土坑内から遺物が出土していないので、時期は不明である。

### ＳＫ6120

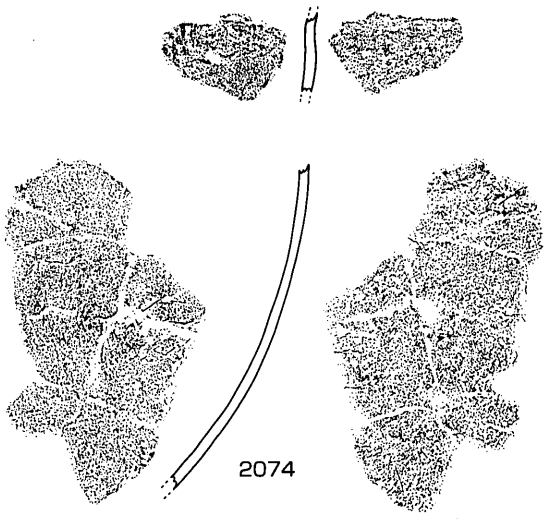
ＳＫ6120は第Ⅴ－１調査区（Ｂ－63）中央部南寄りで検出している。平面形態は円形を呈し、直径約0.70m、検出面からの深さ約0.34mを測る。土坑内堆積土は４層で、第１層が黒色小礫混じり砂質シルト層、第２層が暗灰黄色小礫混じり砂質シルト層、第３層が黒色粘土層、第４層が暗灰色小礫混じり砂質シルト層である。土坑の断面形態は上部が開く箱型を呈している。

土坑内から遺物が出土していないので、時期は不明である。

SK6118

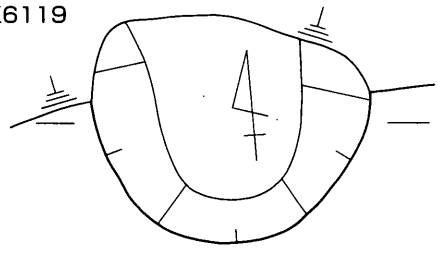


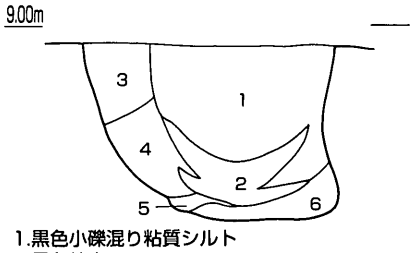

1.黒色粘土
2.黒色小礫混り粘質シルト
3.暗灰色小礫混り細砂(よくしまっている)



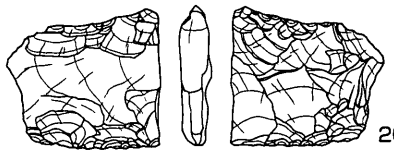

0 10cm

SK6119



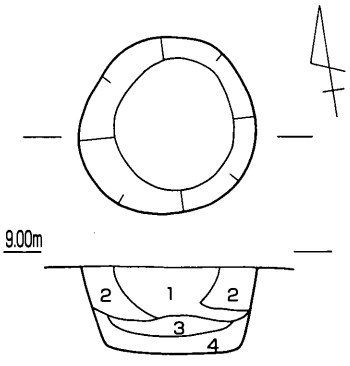



1.黒色小礫混り粘質シルト
2.黒色粘土
3.灰黄色小礫混り砂質シルト
4.灰黄色小礫混り砂質シルト混り暗灰色小礫混り砂質シルト
5.灰黄色粘土
6.黒色小礫混り細砂(よくしまっている)



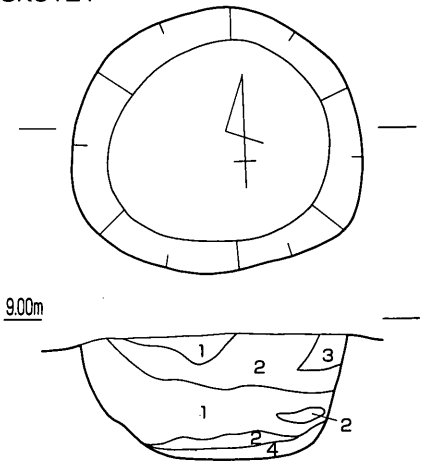

0 5cm

SK6120




1.黒色小礫混り砂質シルト
2.暗灰黄色小礫混り砂質シルト
3.黒色粘土
4.暗灰色小礫混り砂質シルト

SK6121




1.暗灰色小礫混り砂質シルト
2.黒色粘土
3.灰黄色小礫混り砂質シルト
4.暗灰色小礫混り細砂

0 1m

第137図　ＳＫ6118～6121平・断面図、ＳＫ6118出土遺物実測図

### ＳＫ6121

ＳＫ6121は第Ｖ－１調査区（Ｃ－63）中央部南寄りで、ＳＲ614に近接し、検出している。平面形態は円形を呈し、直径約1.14m、検出面からの深さ約0.49mを測る。土坑内堆積土は４層で、第１層が暗灰色小礫混じり砂質シルト層、第２層が黒色粘土層、第３層が灰黄色小礫混じり砂質シルト層、第４層が暗灰色小礫混じり細砂層である。土坑の断面形態は緩やかに上部が開く「Ｕ」字状を呈している。

土坑内から遺物が出土していないので、時期は不明である。

## ３．溝状遺構

第Ｖ－１・２調査区で検出した溝状遺構は総数27条（ＳＤ6137～6159）で、調査区全域の第１遺構面及び第２遺構面で検出している。溝状遺構は東西に流路を取る溝状遺構と直行するように南北に流路を取る溝状遺構がある。

### ＳＤ6134

ＳＤ6134は第Ｖ－１調査区（Ｂ・Ｃ－61）東部で検出した溝状遺構である。流路は僅かに「く」字状に屈曲する。第Ｖ－１調査区では遺構面を３面検出し、第１面でこの溝状遺構を検出している。流路方向はほぼ北－南（Ｎ－２°－Ｗ）をとり、規模は最大幅約0.96m、深さ約0.21m、検出長約8.2mを測る。溝内堆積土は単層で、暗灰色粘土層が堆積する。

溝内堆積土より土師器、須恵器が出土している。

須恵器は高台付坏身・蓋と坏が出土しており、時期は８世紀と９世紀後半のものである。

土師器は土師器坏が出土している。口縁端部が外方に屈曲し、明確ではないが内面に沈線状の窪みを持つ。時期は８世紀～９世紀前半のものである。

### ＳＤ6135

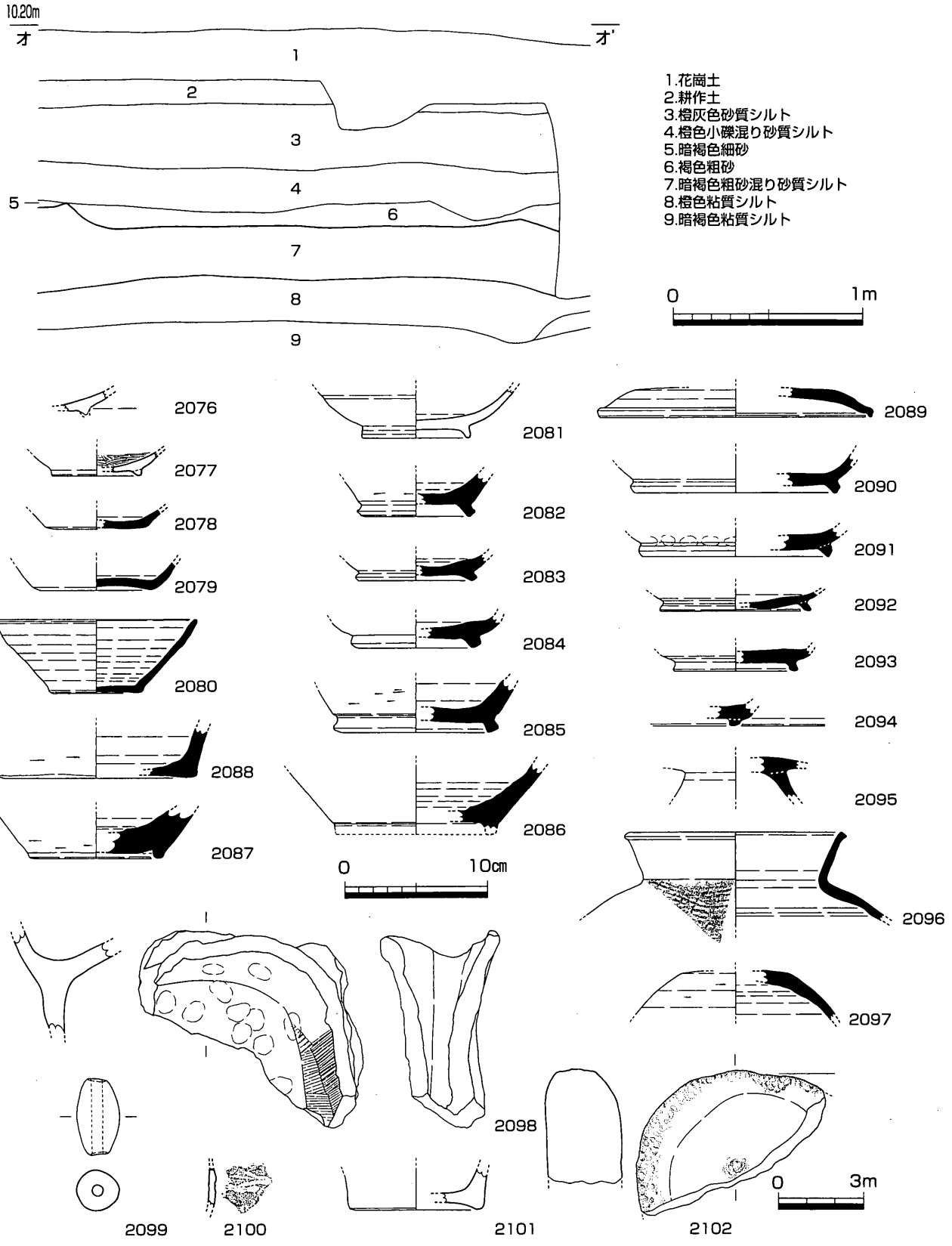
ＳＤ6135は第Ｖ－１調査区（Ｃ－62～64）で検出した溝状遺構である。調査区南部で、東西に長く延び、東部で下方に僅かに屈曲する。北側には同方向に流路を取るＳＤ6128があり、約３～４ｍの間隔を開け併走する。この溝の西側ではほぼ同方向のＳＤ6138を検出しており、同一溝の可能性が考えられる。第Ｖ－１調査区では遺構面を３面検出し、第１面でこの溝状遺構を検出している。流路方向はほぼ西－東（Ｎ－85°－Ｗ）をとり、規模は最大幅約1.65m、深さ約0.17m、検出長約29.6mを測る。

溝内堆積土より縄文土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、土錘、土師質土器、石製品、瓦が出土している。

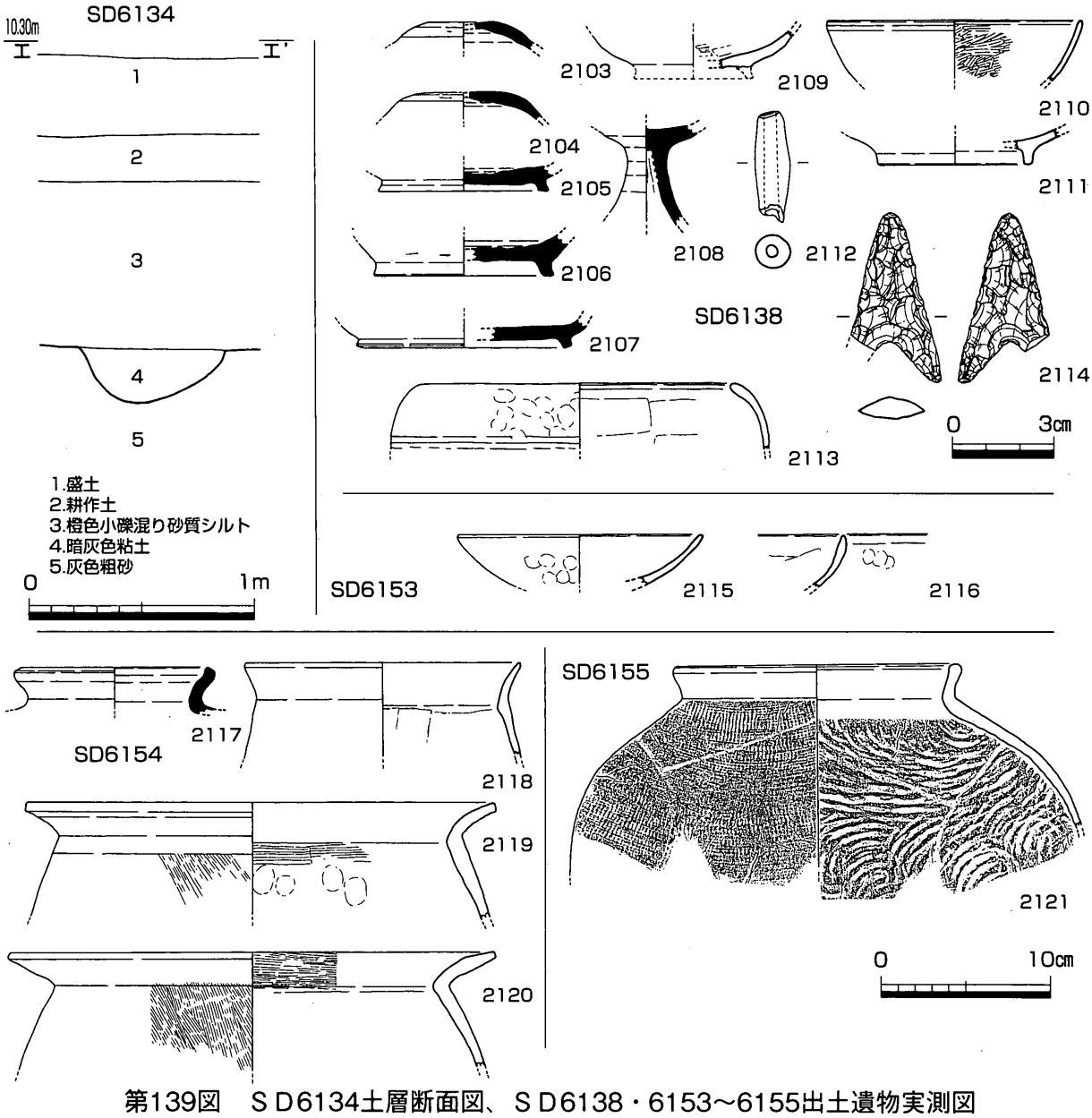
土師器は黒色土器の内面のみに炭素を吸着させたＡ類椀が出土している。時期は10世紀頃と考えられる。

須恵器には坏、高台付坏身・蓋、高坏、甕が出土している。坏は９世紀、高台付坏は７～８世紀、高坏は８世紀と考えられる。甕は頸部が直線的に外上方に延び、口縁端部を外方に僅かに摘み出す。口縁端部は明瞭な稜を持ち、収める。

緑釉陶器（2081）は底部が削り出しの輪高台で、体部は内湾しながら外上方に延びる。全面に淡




第138図　ＳＤ6135土層断面図、出土遺物実測図




第139図　ＳＤ6134土層断面図、ＳＤ6138・6153～6155出土遺物実測図

緑色の釉がかかっている。京都産と考えられる。時期は10世紀と考えられる。

出土遺物は非常に少ないが、全体的に時期幅があり、特にどの時期にも偏っていないことから溝の機能していた時期は特定できない。

### ＳＤ6138

ＳＤ6138は第Ⅴ－２調査区（Ｂ－64・65）で検出した溝状遺構である。調査区南部で、東西に長く延び、西部で下方に屈曲する。北側には同方向に流路を取るＳＤ6128があり、約３ｍの間隔を開け併走する。この溝の東側ではほぼ同方向のＳＤ6135を検出しており、同一溝の可能性が考えられる。第Ⅴ－２調査区では遺構面を３面検出し、第１面でこの溝状遺構を検出している。流路方向はほぼ西－東（Ｎ－85°－Ｗ）をとり、規模は最大幅約0.78m、深さ約0.34m、検出長約16.3mを測る。第Ⅴ－１調査区のＳＤ6138も含めると検出長は約45.9mを測る。

溝内堆積土より土師器、須恵器、土錘、瓦質羽釜、石製品が出土している。

土師器は土師器椀、黒色土器椀が出土している。黒色土器椀には内面にのみ炭素を吸着させたA類椀と内外面に炭素を吸着させたB類椀がある。時期は10～11世紀頃と考えられる。

須恵器には坏蓋、高台付坏、高坏が出土している。坏蓋は6～7世紀、高台付坏は7～8世紀、高坏は7世紀と考えられる。

瓦質羽釜は近世のもので、混入の可能性がある。

出土遺物は非常に少ないが、全体的に時期幅があり、特にどの時期にも偏っていないことから溝の機能していた時期は特定できない。

### SD6139・6140・6141・6162・6143・6144・6145

これらの溝は、第V－2調査区で検出した溝状遺構である。全て南北方向に流路を取り、SD6128によって切られている。SD6139・6140が近接し、SD6141～6145が近接して検出している。それぞれの間隔は約19m程度で、水田区画溝の可能性が考えられる。第V－2調査区では遺構面を3面検出し、第1面でこれらの溝状遺構を検出している。流路方向はほぼ西－東（N－10～13°－E）をとり、規模は最大幅約0.44～1.5m、深さ約0.8～11m、検出長約14.0mを測る。

溝内堆積土は単層で、橙色小礫混じり砂質シルト層が堆積する。

溝内堆積土より遺物が出土していないので、時期は不明である。

### SD6153

SD6153は第V－2調査区（B－66）で検出した溝状遺構で、SD6128によって切られている。第V－2調査区では遺構面を3面検出し、第2面でこの溝状遺構を検出している。流路方向はほぼ北－南をとり、規模は最大幅約0.76m、深さ約0.6m、検出長約3.5mを測る。溝内堆積土は単層で、暗褐色粘質シルト層が堆積する。断面は上部が緩やかに開く「U」字状を呈している。

溝内堆積土より黒色土器椀、土師器椀が出土している。黒色土器は内面のみに炭素を吸着させたA類椀である。

黒色土器椀は12世紀頃、土師器椀は7世紀頃のものと考えられる。

### SD6154

SD6154は第V－2調査区（B－66）で検出した溝状遺構で、SD6128と切り合いがある。第V－4調査区では遺構面を3面検出し、第2面でこの溝状遺構を検出している。流路方向はほぼ北－南をとり、規模は最大幅約3.20m、深さ約0.40m、検出長約4.3mを測る。溝内堆積土は単層で、暗褐色粘質シルト層が堆積する。

溝内堆積土より須恵器甕、土師質土器甕が出土している。

### SD6155

SD6155は第V－2調査区（B－66）で検出した溝状遺構で、SD6128と切り合いがある。南はSD6156と繋がっており、北方向に派生した溝状遺構である。第V－4調査区では遺構面を3面検出し、第2面でこの溝状遺構を検出している。流路方向はほぼ北－南をとり、規模は最大幅約3.20m、深さ約0.40m、検出長約4.3mを測る。

溝内堆積土より須恵器甕が出土している。

### ＳＤ6156

ＳＤ6156は第Ｖ－２調査区（Ｂ－64～67）で検出した溝状遺構である。調査区南部で、東西に長く延び、東側で南方に屈曲するようである。土層断面（第134図　柱状図⑱）でみると、土層第９層を基盤層として掘削されており、第３遺構面に相当する。この溝状遺構は平成７年度の第Ｖ－３調査区で検出したＳＤ702あるいはＳＤ715と同一の溝と考えられる。第Ｖ－２調査区では遺構面を３面検出し、第２面でこの溝状遺構を検出している。流路方向はほぼ西－東（Ｎ－86°－Ｗ）をとり、規模は最大幅約3.80m、深さ約0.82m、検出長約51.5mを測る。溝内堆積土は土層（カ－カ´）で第６層の単層となり、黒色粗砂～細砂層が堆積する。第Ｖ－３調査区で検出したＳＤ702、ＳＤ715の堆積土は砂混じりのシルト層が中心であることから、別の溝の可能性も考えられる。

溝内堆積土より土師器、土師質土器、須恵器、瓦が出土している。

土師器は黒色土器椀が出土している。体部は内湾しながら外上方に延び、丸椀を呈する。体部内面には放射状のヘラミガキが、内底面には平行ヘラミガキが密に施されている。体部外面には横方向のヘラミガキが粗く施されている。時期は10世紀後半頃と考えられる。

須恵器は坏、高台付坏身、蓋、壺、甕が出土している。2123・2124は須恵器坏である。底部はヘラ切りされ、体部は直線的に外上方に延びる。底部と体部の境は稜を持つもの（2123）と丸く移行するもの（2124）がある。2126・2127は高台付き坏で、底部に断面方形の高台が外方に踏ん張るように付くもの（2126）と真っ直ぐ付くもの（2127）がある。時期は８世紀と考えられる。2125は壺で、９世紀頃のものである。

2131～2135は土師質長胴甕、甕である。

2136は瓦で、凹面に布目痕が、凸面に縄目の叩き痕が確認できる。

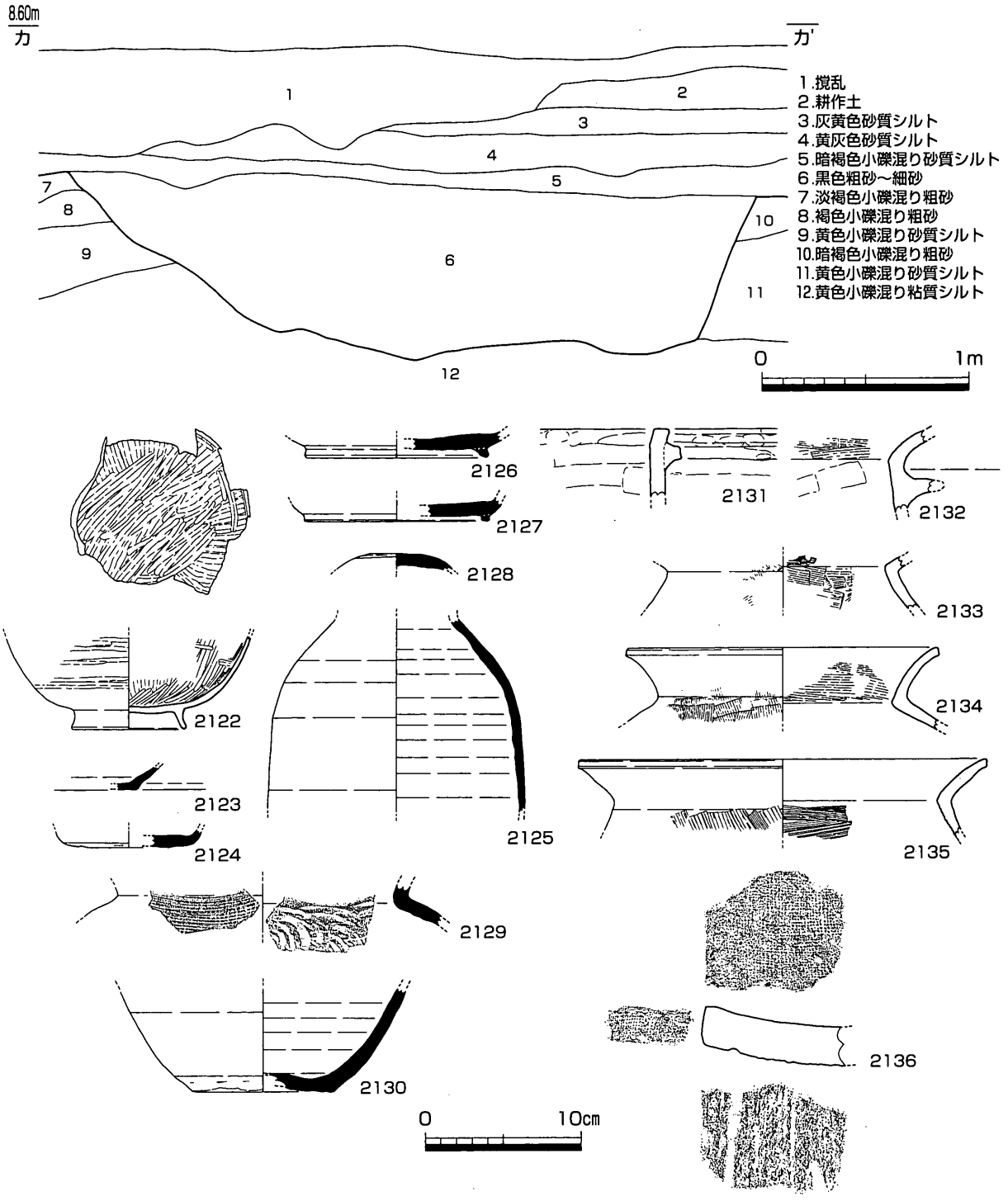
出土遺物には全体的に時期幅があり、特にどの時期にも偏っていないことから溝の機能していた時期は特定できない。ただ上限は８世紀に遡り、下限は10世紀後半と考えられる。第Ｖ－３調査区で検出したＳＤ702・715でも同様に時期幅のある遺物が出土しており、ほぼ同じ時期に比定しているが、これらの溝には切り合い関係があり、ＳＤ715が新しいことから、ＳＤ715と同時期の可能性が高い。

## ４．自然流路跡

### ＳＲ611

ＳＲ611は第Ｖ－１調査区（Ｂ－61・62）東端で検出した自然流路跡である。流路方向は地形の傾斜方向と直交する北東－南西（Ｎ－50°－Ｅ）をとる。流路自体は蛇行するようで、北端部では別の流路と交わるようであるが、詳細については不明である。ほぼ中央部でＳＲ612と切り合いがあり、ＳＲ612によって切られている。規模は最大幅約7.0m、深さ約1.33m、検出長約10.0mを測る。この自然流路跡は土層断面（ｋ－ｋ´）でみると単層で、乳灰色粗砂層が堆積する。断面は上部が開く箱型を呈している。

自然流路跡から縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、瓦器、須恵器、輸入陶磁器、瓦、石製品が出土している。




第140図　ＳＤ6156土層断面図、出土遺物実測図

縄文土器は深鉢と浅鉢がある。深鉢は口縁部外側を肥厚させ、縄文を施す。

浅鉢は体部がボール状を呈し、口縁部外面に細い沈線を施す。部分的に縄文が確認できる。

底部は上げ底状を呈する。

これらの縄文土器は口縁部の肥厚が顕著でなく、浅鉢外面に施された沈線も細くなっていることから彦崎Ｋ２式期と考えられる。

土師器は小皿、皿がある。小皿は口径約９cm、器高約1.5cmを測り、底部はヘラ切りされている。

13世紀頃と考えられる。土師器皿は底部が手持ちヘラケズリされており、底部と体部の境には稜を持たず、屈曲する。８世紀頃と考えられる。

瓦器椀は体部外面に指頭痕の後ヘラミガキが施され、体部内面には密にヘラミガキが施されている。これらは和泉型瓦器椀で、Ⅱ－２期と考えられ、時期は12世紀中葉である。

須恵器は高台付坏身・蓋である。2143は口径が約7.5cmと小さいことから壺の蓋の可能性が考えられる。８世紀頃と考えられる。

2151は白磁椀で、口縁部が玉縁のⅣ類（大宰府分類）である。

2165はサヌカイト製の縦長石匙である。

出土遺物にかなり時期幅があり、時期の特定はできない。

### ＳＲ612

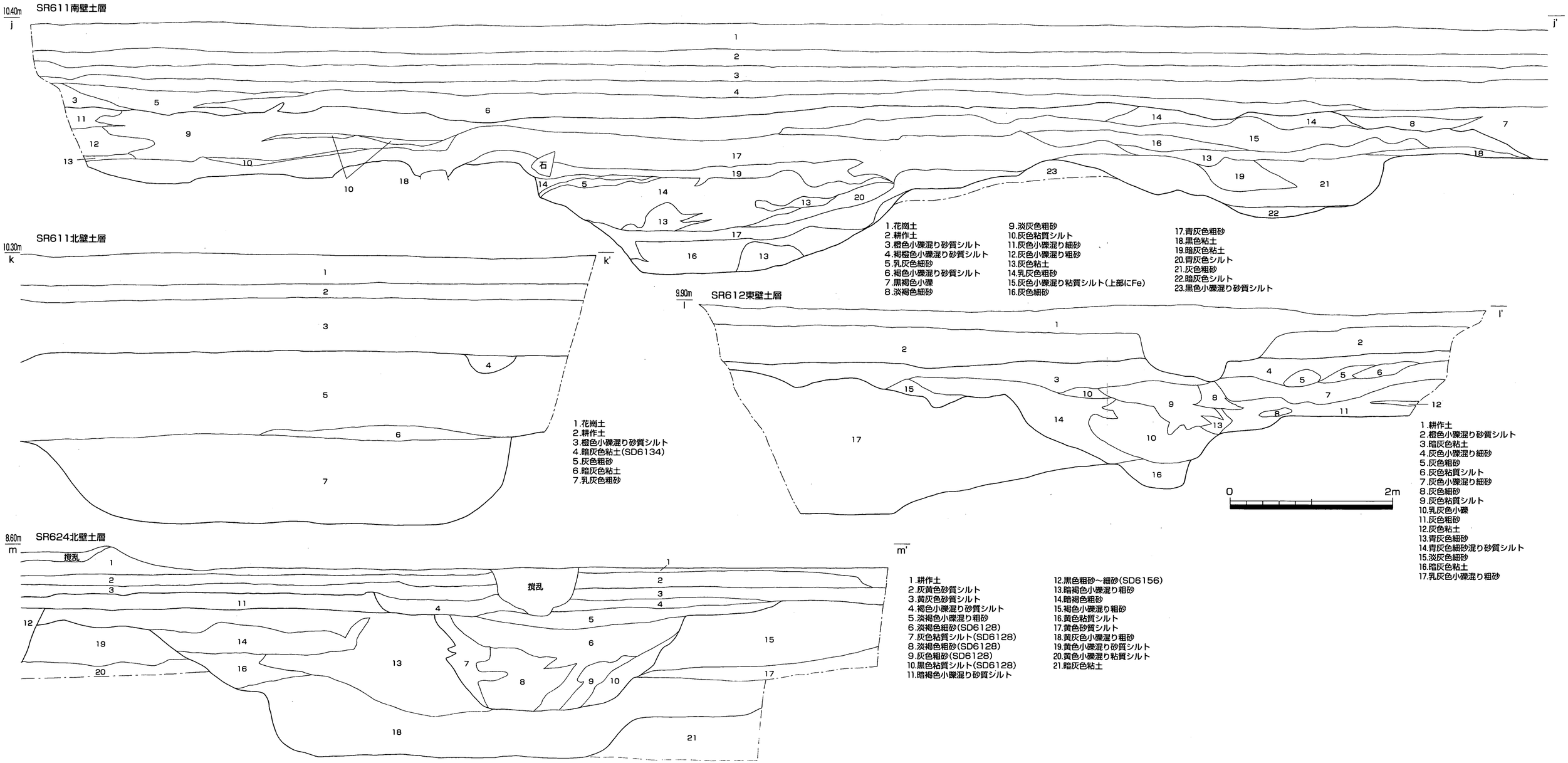
ＳＲ612は第Ⅴ－１調査区（Ｂ－61～63）で検出した自然流路跡で、蛇行しながらほぼ東西に流路を取る。東部でＳＲ611を切っており、また北側をＳＲ613が近接して併走し、部分的にＳＲ613を切っている。流路方向は西北西－東南東（Ｎ－79°－Ｗ）を取る。規模は最大幅約6.2m、深さ約1.33m、検出長約44.3mを測る。この自然流路跡は土層断面（１－１´）でみると10層で、細砂・シルトの互層で、部分的に粘土層が堆積する。第16層が暗灰色粘土層として最下部に堆積する。断面は上部が開き、下部が尖り気味の「Ｖ」字状を呈している。

自然流路跡から土師器、瓦器、須恵器、土師質土器、瓦、土錘、弥生土器、縄文土器、石製品、獣骨が出土している。

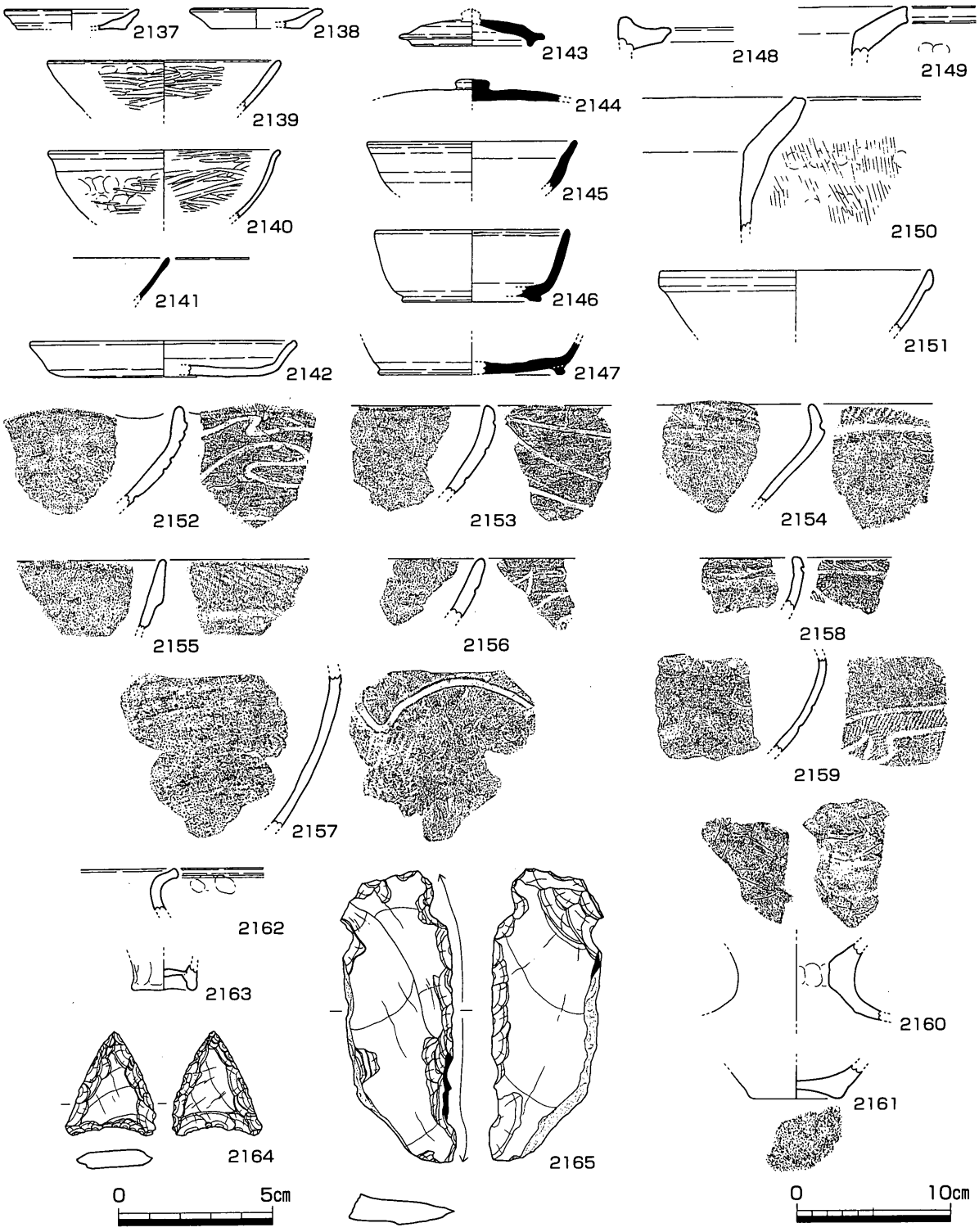
土師器は小皿、坏、椀、黒色土器椀（Ａ・Ｂ類椀）が出土している。土師器小皿、坏の底部はヘラ切りのものと回転糸切りのものが認められる。土師器椀は在地産の土師器椀と吉備系土師器椀があり、2185は吉備系土師器椀と考えられ、胎土に大粒の石英・長石を含む。時期は13世紀と考えられる。黒色土器椀は底部にしっかりした高台が付き、体部は内湾しながら外上方に延びる。体部外面には３～４㎜のヘラミガキが間隔をあけて平行に施され、内面にはヘラミガキが密に施されている。2214は内面のヘラミガキが分割されており、器高も深いことから若干古い様相を呈している。内面のみに炭素を吸着させたＡ類椀である。時期は2214が11世紀と古く、それ以外は12世紀中葉頃と考えられる。

瓦器には皿と椀があり、多量に出土している。瓦器椀は主として和泉型瓦器椀であるが、2209のみ楠葉型瓦器椀で、内面に１㎜以下のヘラミガキが密に施されている。外面はかなり摩滅しており、ヘラミガキの有無は確認できない。和泉型瓦器椀はⅡ－２期～Ⅲ－２期までのものが出土しており、時期は12世紀中葉～13世紀前半と時期幅が広い。楠葉型瓦器椀はⅠ期と考えられ、時期は11世紀後半～12世紀初頭である。

須恵器は坏、皿、坏蓋、高台付坏身・蓋、甕、こね鉢が出土している。須恵器坏は底部がヘラ切りされ、体部は直線的に外上方に延び、口縁部を外反させる。時期は８世紀後半頃と考えられる。須恵器皿は口径約17cmと大型のもので、９世紀頃のものである。甕は直線的な頸部から口縁端部を下方に摘み出し、シャープな作りである。時期は10世紀頃と考えられる。須恵器こね鉢は底部が平底、体部が直線的に外上方に延び、口縁部が僅かに屈曲するもので、12世紀後半頃のものである。




第141図　ＳＲ611・612・624土層断面図

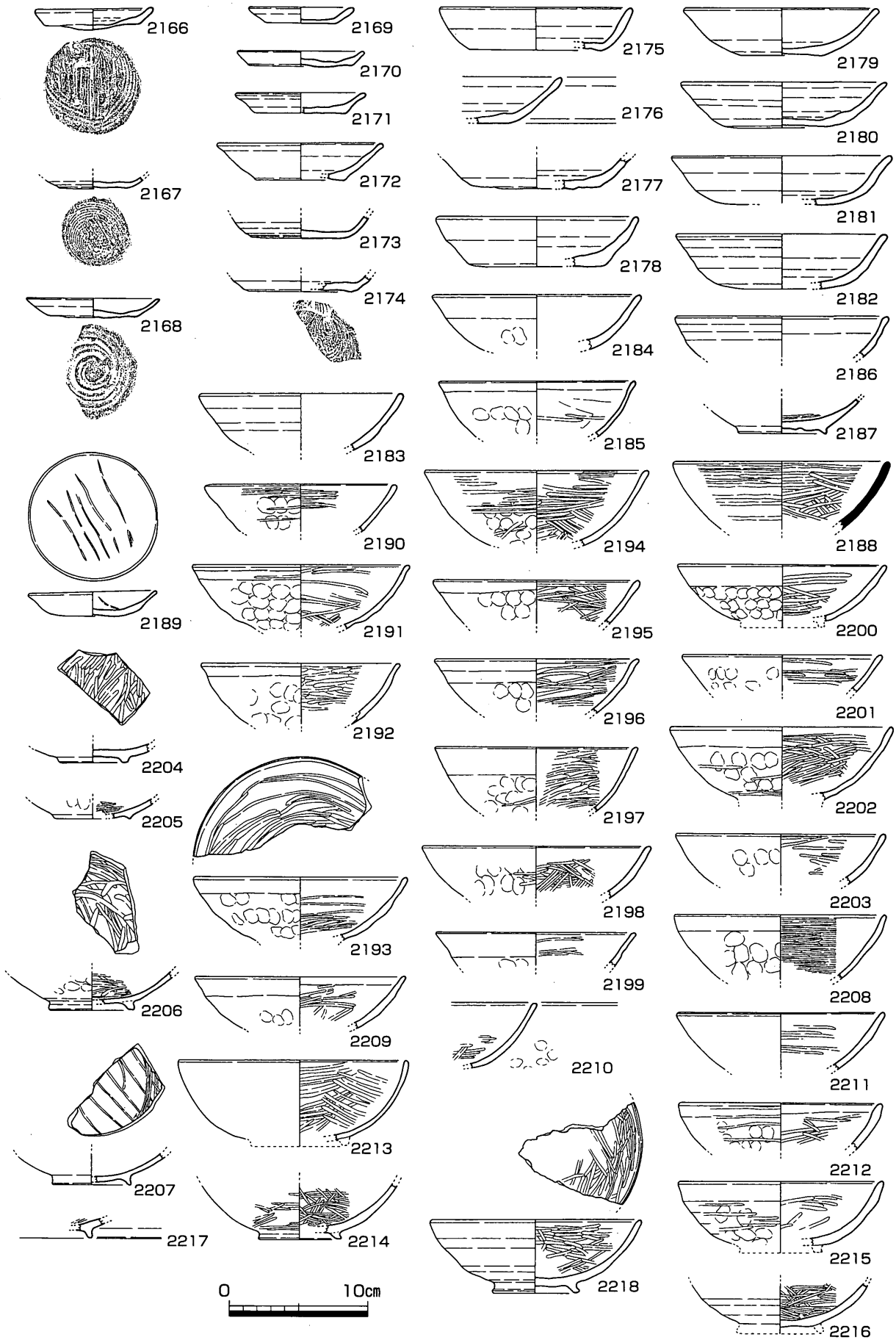



第142図　ＳＲ611出土遺物実測図

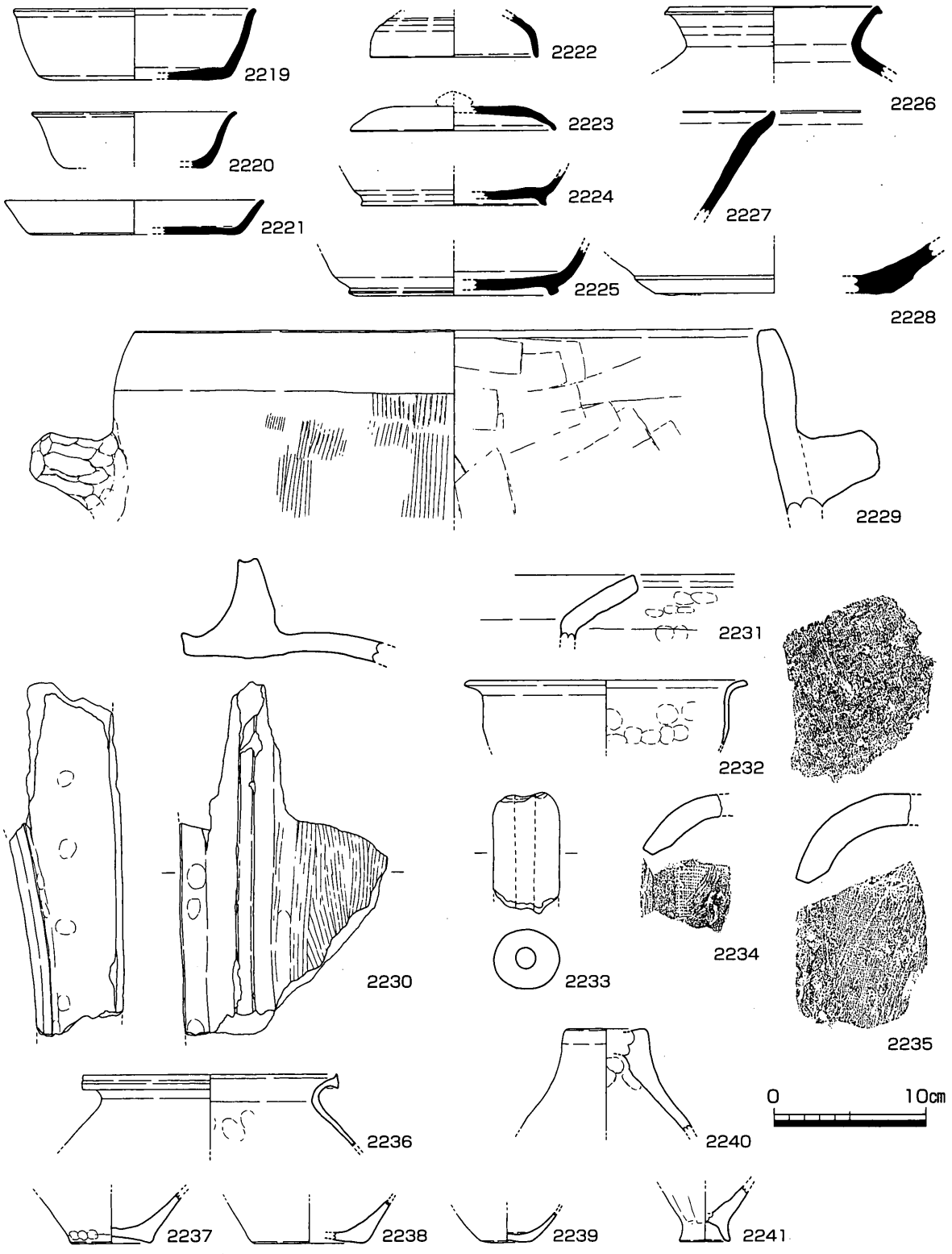
土師質土器は長胴甕、移動式竈が出土している。

瓦は丸瓦で、凹面に布目が認められる。

縄文土器は深鉢と浅鉢がある。深鉢には体部上半に同心円文様、縄文が施されている。浅鉢は口縁部がやや内湾するもので、外面に縄文と太い沈線が施されている。底部はやや上げ底気味のものと高台状を呈したものがある。




第143図　ＳＲ612出土遺物実測図①




第144図　ＳＲ612出土遺物実測図②

これらの縄文土器は外面に施される沈線が太いことから縄文時代後期と考えられる。

弥生土器は甕、蓋、製塩土器が少量出土しており、時期は第Ⅱ調査区で検出した弥生時代後期中葉頃で、同時期の集落の広がりを想定できるものである。

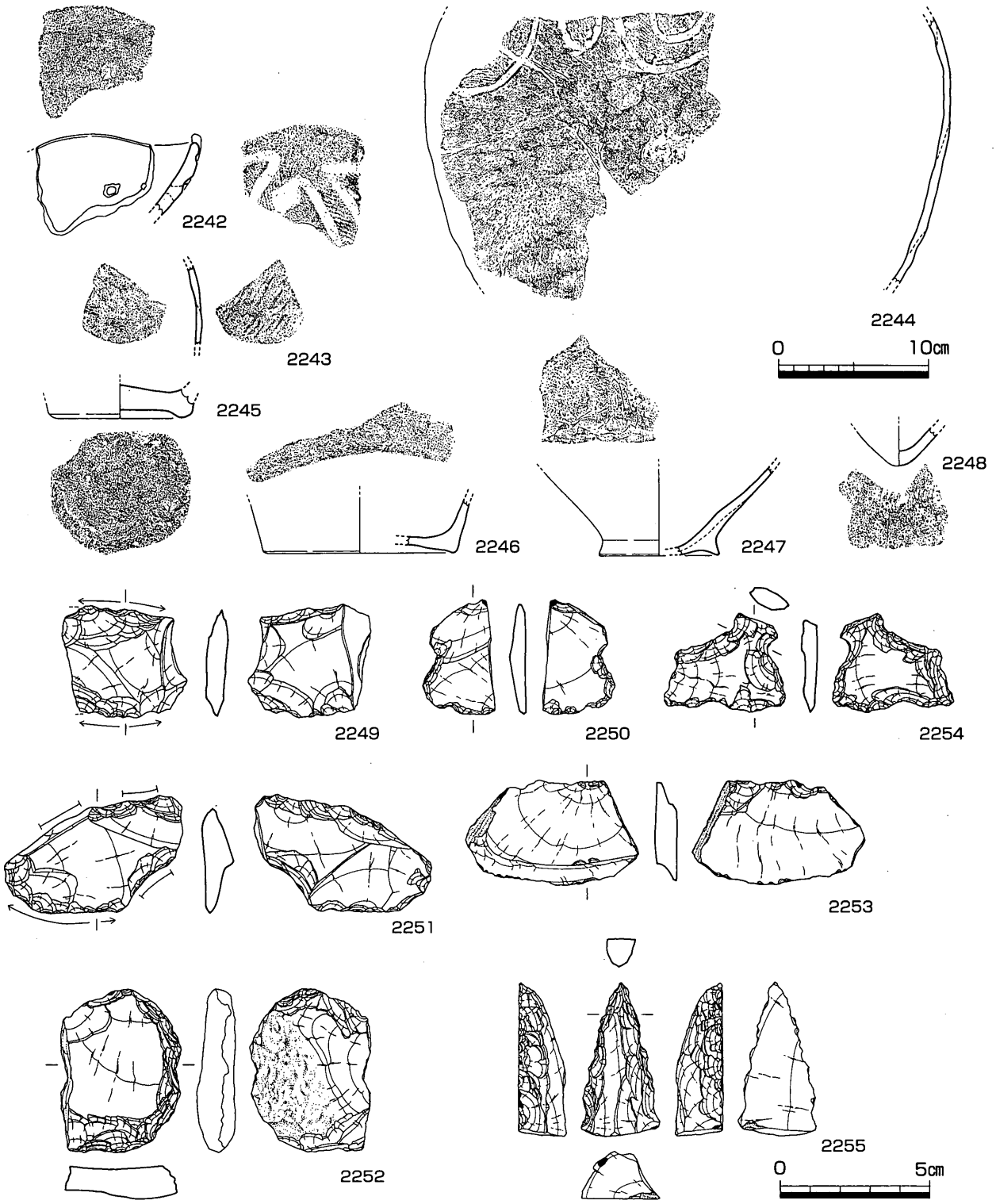
石製品は全てサヌカイト製で、角錐状石器、石包丁、石匙、スクレイパーが出土している。

獣骨は鹿下顎左側第２第３後臼歯、馬上顎臼歯、牛左上顎臼歯である。

出土遺物にかなり時期幅があり、時期の特定はできない。

## ＳＲ613

ＳＲ613は第Ⅴ－１調査区（Ｂ－62・63）で検出した自然流路跡で、蛇行しながらほぼ東西に流路を取る。ＳＲ612の北側で検出した自然流路で、部分的にＳＲ612によって切られている。流路方




第145図　ＳＲ612出土遺物実測図③

向は西北西－東南東（N－80°－W）を取る。規模は現存幅約1.7m、深さ約0.7m、検出長約28.0mを測る。この自然流路跡は単層で、淡灰橙色粗砂～小礫層で、ラミナー状に堆積する。断面は緩やかな箱型を呈する。

自然流路跡から黒色土器、土師質土器、須恵器、土馬、瓦、弥生土器、石製品が出土している。

黒色土器は少量出土しており、内面のみに炭素を吸着させるA類椀である。時期は12世紀である。

須恵器は高台付坏身、平瓶、壺、甕が出土している。高台付坏は底部端に断面逆台形状の高台や逆三角形状の高台が付き、体部は直線的に外上方に延びる。平瓶は頸部のみで、やや内湾する。壺は底部が平底で、高台が付く。甕は頸部外面を3条の沈線で4段に区分し、上3段に波状文を、また口縁部外面は外側を肥厚させ、上部に波状文を施す。

土馬は胴部のみの出土で、竹管文を施した粘土紐で、手綱・尻繋を表現している。また粘土紐で鞍も表現しており、後輪が確認できる。

時期は出土遺物より主としては8世紀後半と考えられるが、少量12世紀の遺物が出土していることから、8～12世紀の時期幅を考えたい。

### SR615

SR615は第V－1調査区（B－63・64）で検出した自然流路跡で、南側でほぼ南北に延びる流路が、北側で東西に広がる。流路方向は概ね北－南を取る。規模は南部の流路で最大幅約4.0m、深さ約0.98m、検出長約13.0mを測る。

自然流路跡から縄文土器、石製品が出土している。

縄文土器は深鉢と浅鉢がある。深鉢は口縁端部外側を肥厚させ、口縁部外面に2状の沈線を施す。縁帯文土器である。浅鉢はボール状を呈し、口縁部外面に沈線を施す。底部はやや上げ底気味を呈する。

時期は縄文土器が縁帯文土器であることから縄文時代後期前半と考えられる。

### SR616・617

SR616・617は第V－2調査区（B－64・65）で検出した自然流路跡で、南部で同一の流路であったものが、2条の流路に分かれ、東側の流路SR616はほぼ北方向に、西側の流路SR617は北西方向に流路を取る。流路方向はSR616が北－南（N－2°－W）を、SR617が北西－南東（N－42°－W）を取る。規模はSR616が最大幅約5.2m、深さ約0.81m、検出長約13.4mを、SR617が最大幅約2.48m、深さ約1.12m、検出長約18.5m測る。この自然流路跡SR616は土層断面（n－n´）でみると単層で、灰色粗砂～細砂層が堆積する。自然流路跡SR617は土層断面（o－o´）でみると単層で、灰褐色小礫混じり粗砂層が堆積する。断面は上部が開く「U」字状を呈している。

自然流路跡SR616から縄文土器が出土している。

縄文土器は深鉢と浅鉢がある。深鉢には体部上半に同心円文様、縄文が施されている。浅鉢は口縁部がやや内湾するもので、外面に縄文と太い沈線が施されている。底部はやや上げ底気味のものと高台状を呈したものがある。

これらの縄文土器は外面に施される沈線が太いことから縄文時代後期と考えられるが、出土遺物には土師質土器片、弥生前期土器片が出土しており、明確な時期決定は避けたい。

### ＳＲ618

ＳＲ618は第Ⅴ－２調査区（Ｂ－65・66）北部で検出した自然流路跡である。

自然流路跡から縄文土器が出土し、時期は縄文時代後期と考えられる。

### ＳＲ621・622

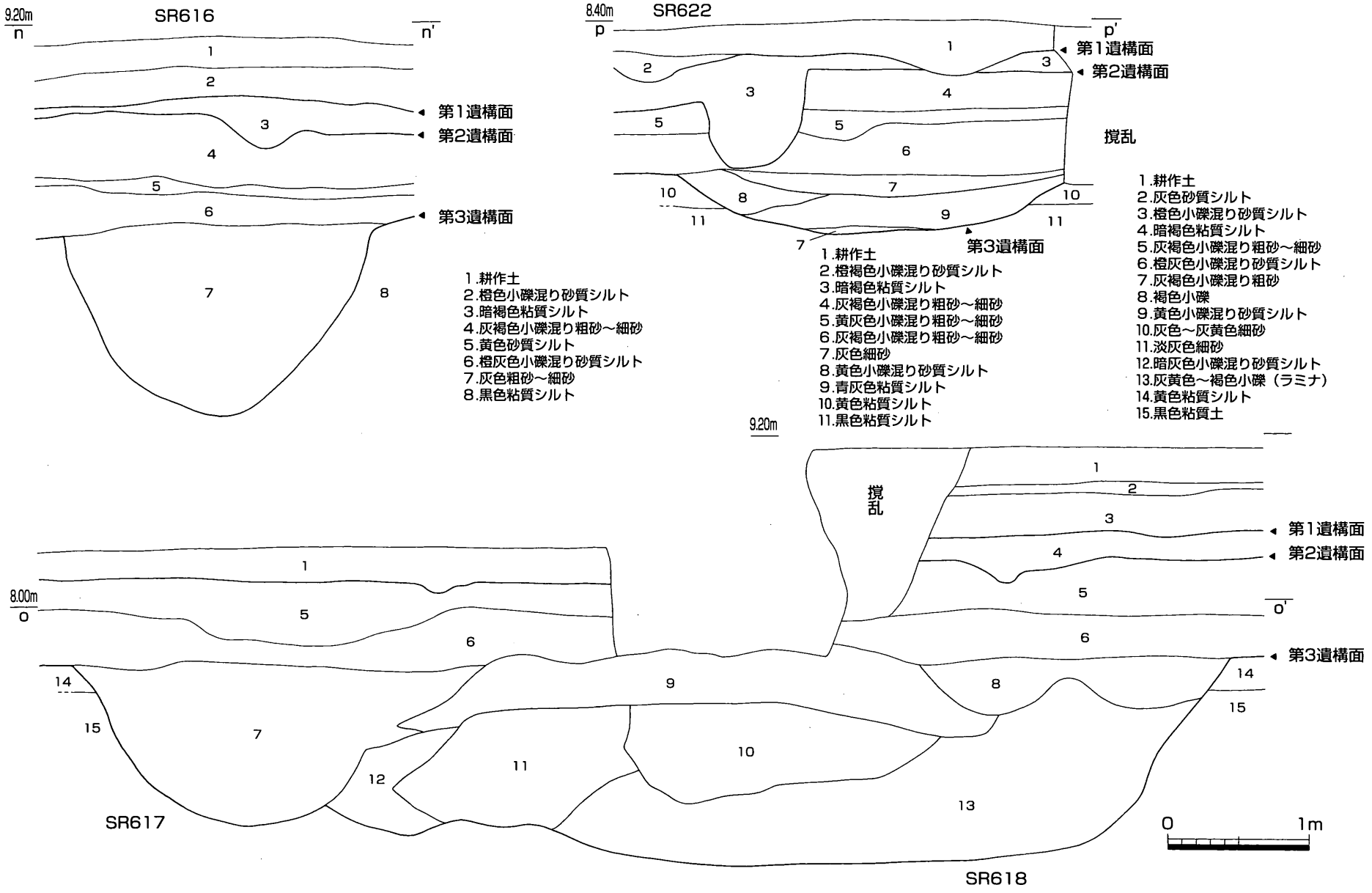
ＳＲ621・622は第Ⅴ－２調査区（Ｂ－65・66）で検出した自然流路跡で、やや蛇行しながら南北に流路を取るＳＲ622の南部で、ＳＲ621が派生し、東方向に延びる。流路方向はＳＲ622が概ね北－南を、ＳＲ621が概ね西－東を取る。規模はＳＲ621が最大幅約1.5m、深さ約0.25m、検出長約12.4mを、ＳＲ622が最大幅約2.67m、深さ約0.46m、検出長約13.9m測る。この自然流路跡ＳＲ622は土層断面（ｐ－ｐ′）でみると３層で、第１層が灰色細砂層、第２層が黄色小礫混じり砂質シルト層、第３層が青灰色粘質シルト層である。断面は浅い「Ｕ」字状を呈している。

遺物は土師質土器片が少量出土しているが、時期決定までは至っていない。

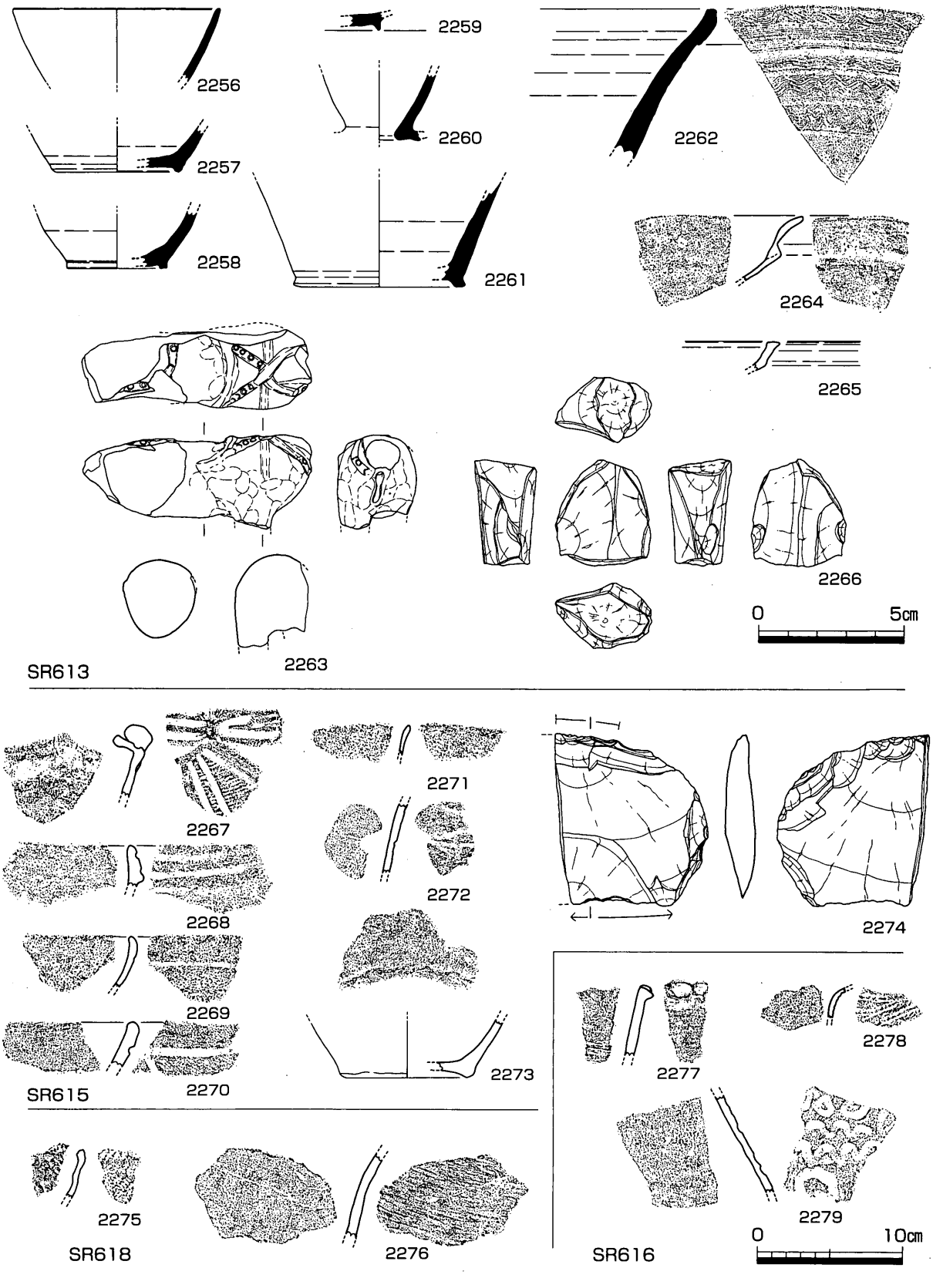
### ＳＲ624

ＳＲ624は第Ⅴ－２調査区（Ｂ－66・67）で検出した自然流路跡で、旧地形復元の傾斜方向と同様に北西方向に流路を取る。流路方向は北西－南東（Ｎ－35°－Ｗ）を取る。規模はＳＲ624が最大幅約6.0m、深さ約1.39m、検出長約16.4mを測る。この自然流路跡ＳＲ624は土層断面（第141図ｍ－ｍ′）でみると６層で、粗砂～細砂層が堆積する。断面は箱型を呈する。

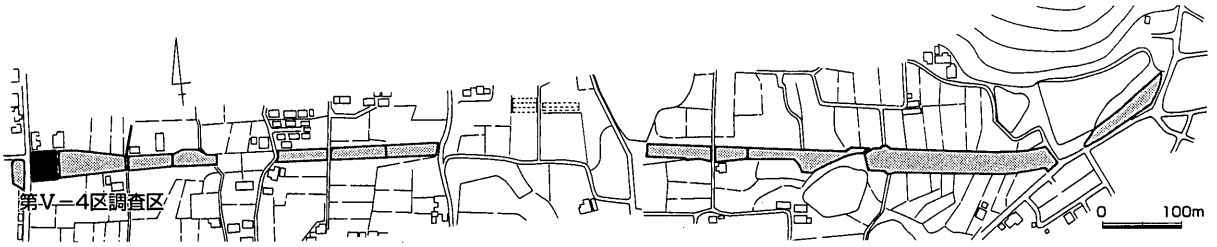
遺物は弥生土器片が少量出土しているが、時期決定までは至っていない。




第146図　ＳＲ616～618・622土層断面図




第147図　ＳＲ613・615・616・618出土遺物実測図




第148図　第Ｖ－４調査区位置図

②第Ｖ－４調査区

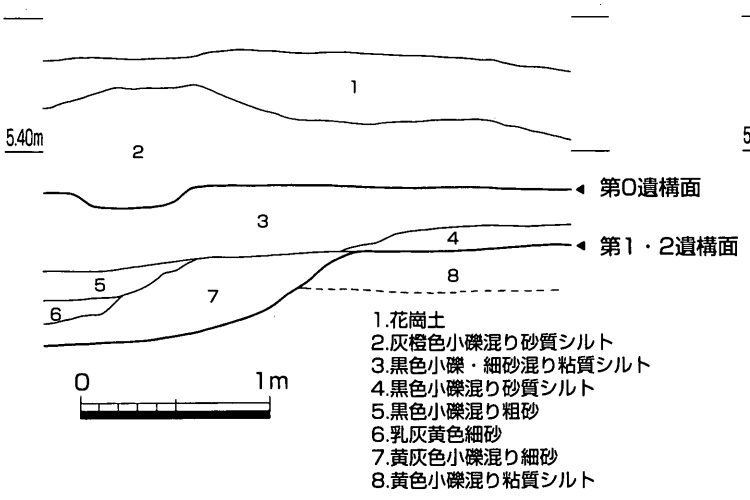
第Ｖ－４調査区では、遺構面を３面確認した。

第０遺構面は土層断面（第149図　柱状図⑲）でみると、花崗土を主とした後世の整地土下に第２層灰橙色小礫混じり砂質シルト層があり、地表面から約70cm下で確認した。第１遺構面は第０遺構面下に第３層黒色小礫・細砂混じり粘質シルト層があり、約30cm下で確認した。第３層下には部分的に第４層として黒色小礫混じり砂質シルト層が確認できるが、全域にはない。第２遺構面は第１遺構面と同一面で確認した。第８層黄色小礫混じり粘質シルト層が第１・２遺構面の基盤層となる。

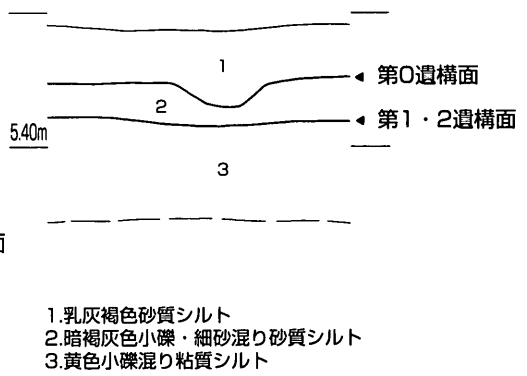
また土層断面(第150図　柱状図⑳)でみると、第０遺構面は第１層乳灰褐色砂質シルト層があり、約30cm下で確認した。第１遺構面は第０遺構面下に第２層暗褐灰色小礫・細砂混じり砂質シルト層があり、約20cm下で確認した。第３層が第１遺構面の基盤層となる。第２遺構面は第１遺構面と同一面で確認した。第３層黄色小礫混じり粘質シルト層が第１・２遺構面の基盤層となる。

それぞれの遺構面を形成する基盤層は第Ｖ－１・２調査区と同様に、土質がシルト層と安定した土層ではなく、不安定なものである。やはり各遺構面間の厚い堆積土層から旧流路の氾濫による堆積がかなり、安定した時期に遺構が掘削されたものと考えられる。

第Ｖ－４調査区は全体にほぼこの土層序となり、第１・２遺構面が同一面ではあるが、全面において３面の遺構面を確認した。検出した遺構は掘立柱建物跡、井戸跡、土坑跡、溝状遺構、自然流路跡である。第Ｖ－１・２調査区よりは安定していたものと考えられ、掘立柱建物跡などが多数確認でき、居住域として適していたものと考えられる。




第149図　第Ｖ－４調査区土層柱状図⑲




第150図　第Ｖ－４調査区土層柱状図⑳

第０遺構面で確認した遺構は、溝状遺構６条、柱穴10基である。

溝はほとんどが東西方向に流路を取るもので、なかでもＳＤ6161は第Ⅴ－３調査区で報告したＳＤ707と同一の溝で、ＳＤ701から分流し、ちょうどＳＤ701で検出した井堰部分から分流することから取水溝と考える。柱穴は北側中央の約６ｍの範囲内に集中しているが、建物を構成していない。

第１遺構面で確認した遺構は、掘立柱建物跡11棟、井戸跡１基、土坑跡２基、溝状遺構６条、不明遺構２基、柱穴跡である。

遺構は全て東西に流路を取るＳＤ6128、ＳＤ6170より以北で検出しており、この２条の溝が南限であることが解る。掘立柱建物跡はほぼ南北に主軸を取っており、数棟が重複するものの規則的な配置が認められる。井戸跡はちょうど掘立柱建物跡がない部分、南東隅にあり、掘立柱建物跡と同時期と考えられる。ＳＤ6128、ＳＤ6170の東西に流路を取る溝以外は南北に流路を取るもので、ＳＤ6169はちょうど２棟の掘立柱建物跡の間で検出していることから、小区画を意識した溝の可能性が指摘できる。

第２遺構面で確認した遺構は、自然流路跡３条である。

第２遺構面は第１遺構面と同一遺構面であるが、遺構の時期によって古代～中世の遺構と縄文時代の自然流路の遺構とに細分できることから２面とした。

自然流路は調査区南東隅から北西の方向に流路を取るもので、かなり蛇行している。

古代

１．掘立柱建物跡

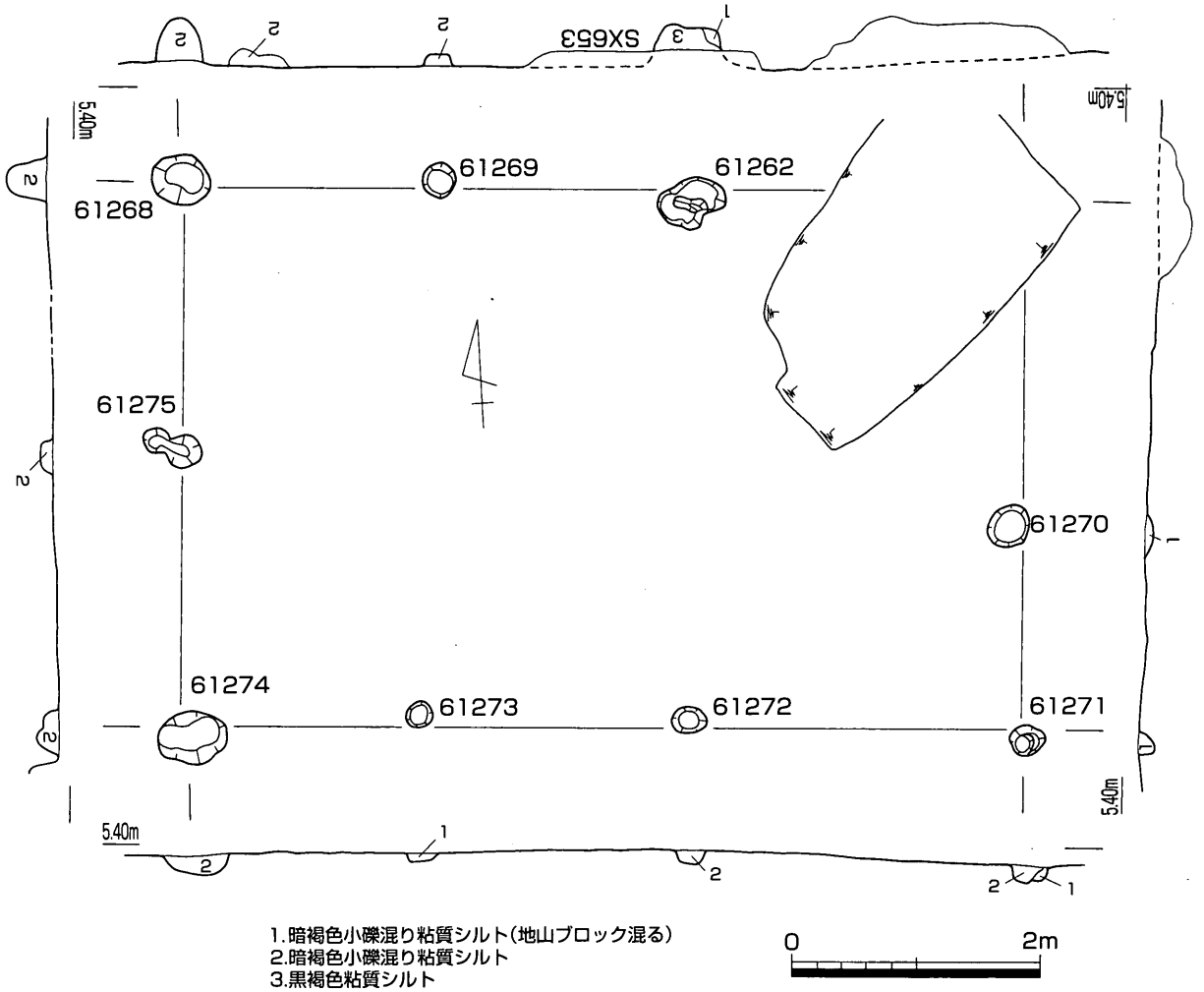
第Ⅴ調査区で検出した柱穴は、第Ⅴ－４調査区に集中しており、第Ⅴ－１・２調査区では検出していない。平成７年度に発掘調査（平成８年度に整理）を実施した第Ⅴ－３調査区では西側部分、特にＳＤ713、ＳＤ714を境にして西部分のみに柱穴は集中する。おそらく平成７年度調査のＳＤ702（東西溝）、ＳＤ715（東西溝）、ＳＤ713（南北溝）、ＳＤ714（南北溝）、平成６年度調査のＳＤ6170（東西溝）、ＳＤ6128（東西溝）を区画溝として、その中で柱穴が多数検出したことになる。

この区画溝内で検出した掘立柱建物跡は総数15棟で、南北主軸を６～12°西偏させる掘立柱建物跡２棟（ＳＢ702、ＳＢ706）を除く掘立柱建物跡13棟（ＳＢ703、ＳＢ704、ＳＢ604～ＳＢ614）は、全て約２～６°東偏する。区画溝とした東西溝・南北溝も約３～５°東偏することからこれらの溝と東偏する掘立柱建物跡群は同一時期と考えられる。

今回報告する掘立柱建物跡は平成６年度の発掘調査で検出したもので、ＳＢ604～ＳＢ614の総数11棟である。

ＳＢ604

ＳＢ604は第Ⅴ－４調査区（Ｃ－72）北東部、第１遺構面の標高約5.30ｍで検出した掘立柱建物跡である。ＳＢ605・ＳＢ606・ＳＢ608と重複するが、新旧関係は不明である。不明遺構ＳＸ653とＳＰ61262に切り合いが確認でき、不明遺構ＳＸ653の方が新しいことが解る。規模は、梁間２間×桁行３間で、4.24×6.78ｍを測る。構成する柱穴は全て歪な円形を呈し、直径22㎝～40㎝と小振りで、検出面からは6～32㎝と浅い。



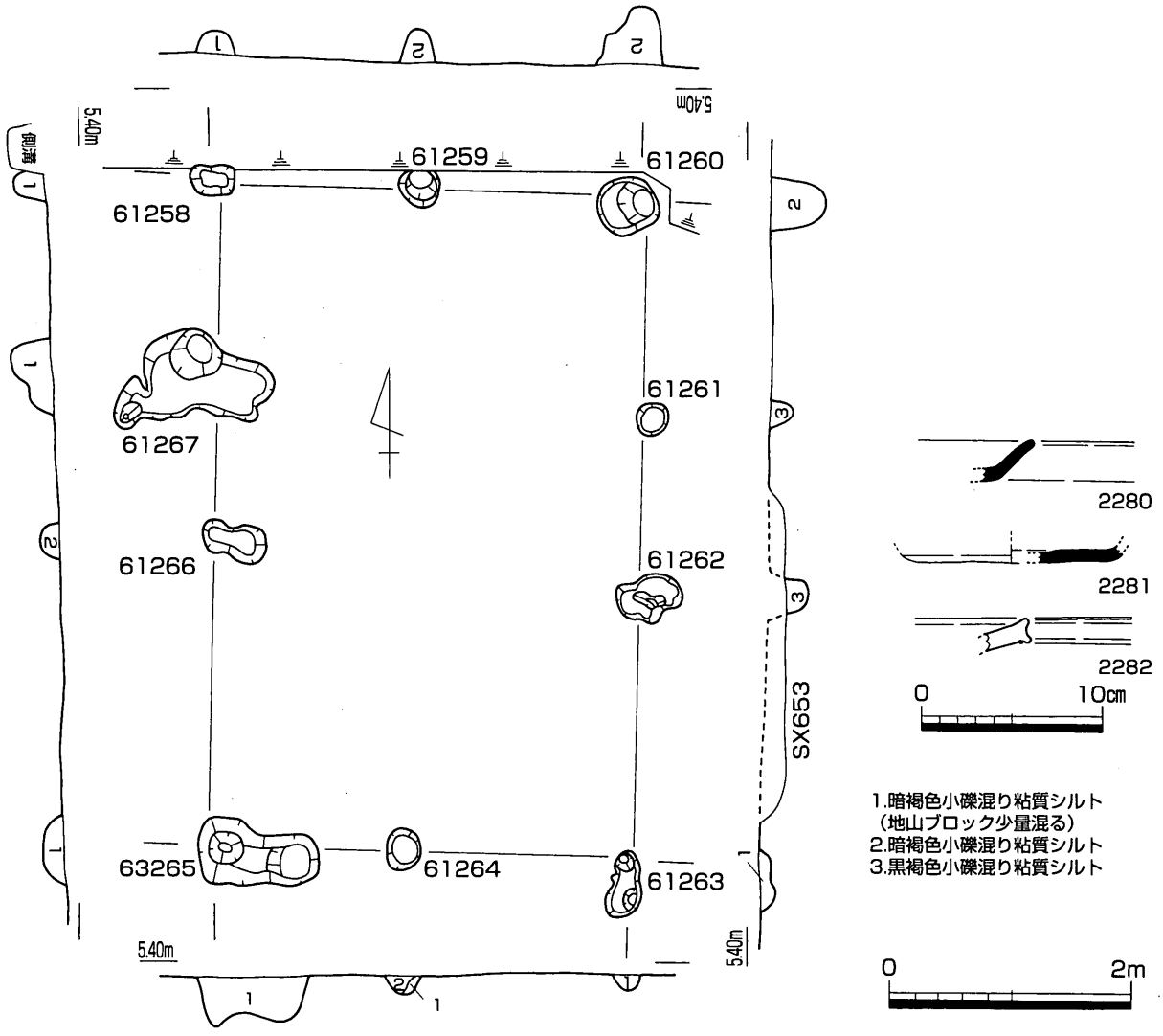

第151図　ＳＢ604平・断面図

建物の桁行の柱穴間は、東側１間分がやや広く、約2.7ｍを測り、西側２間分はほぼ等間隔で、１間約2.04ｍを測る。梁間の柱穴間は西梁間でほぼ等間隔の約2.12ｍを測るが、東梁間ではＳＰ61270がやや南側にあり、等間隔とはなっていない。この柱穴を基準とすると西梁間の柱穴はＳＰ61291となるが、ここでは西梁間の柱穴はほぼ等間隔となるＳＰ61275とする。建物は東西棟で、北－南方向（短軸）は真北から4.0°東を取る。

遺物はＳＰ61268・ＳＰ61269・ＳＰ61262から出土した。いずれも土師器小片が数点出土しただけで、図化が不可能であったため、時期は不明である。

### ＳＢ605

ＳＢ605は第Ⅴ－４調査区（Ｃ－72）北東部、第１遺構面の標高約5.30ｍで検出した掘立柱建物跡である。南側で掘立柱建物跡ＳＢ604、ＳＢ606と重複しており、ＳＢ604とはＳＰ61262を、ＳＢ606とはＳＰ61265を共有する。土層断面からの前後関係は不明である。また不明遺構ＳＸ653とＳＰ61262に切り合いが確認でき、不明遺構ＳＸ653の方が新しいことが解る。規模は、梁間２間×桁行３間で、3.53×5.28ｍを測る。構成する柱穴は全て歪な円形を呈し、直径25㎝～48㎝を測り、検出面からは15～44㎝を測る。建物は南北棟で、北－南方向（長軸）は真北から1.5°東を取る。




第152図　ＳＢ605平・断面図、ＳＰ61260出土遺物実測図

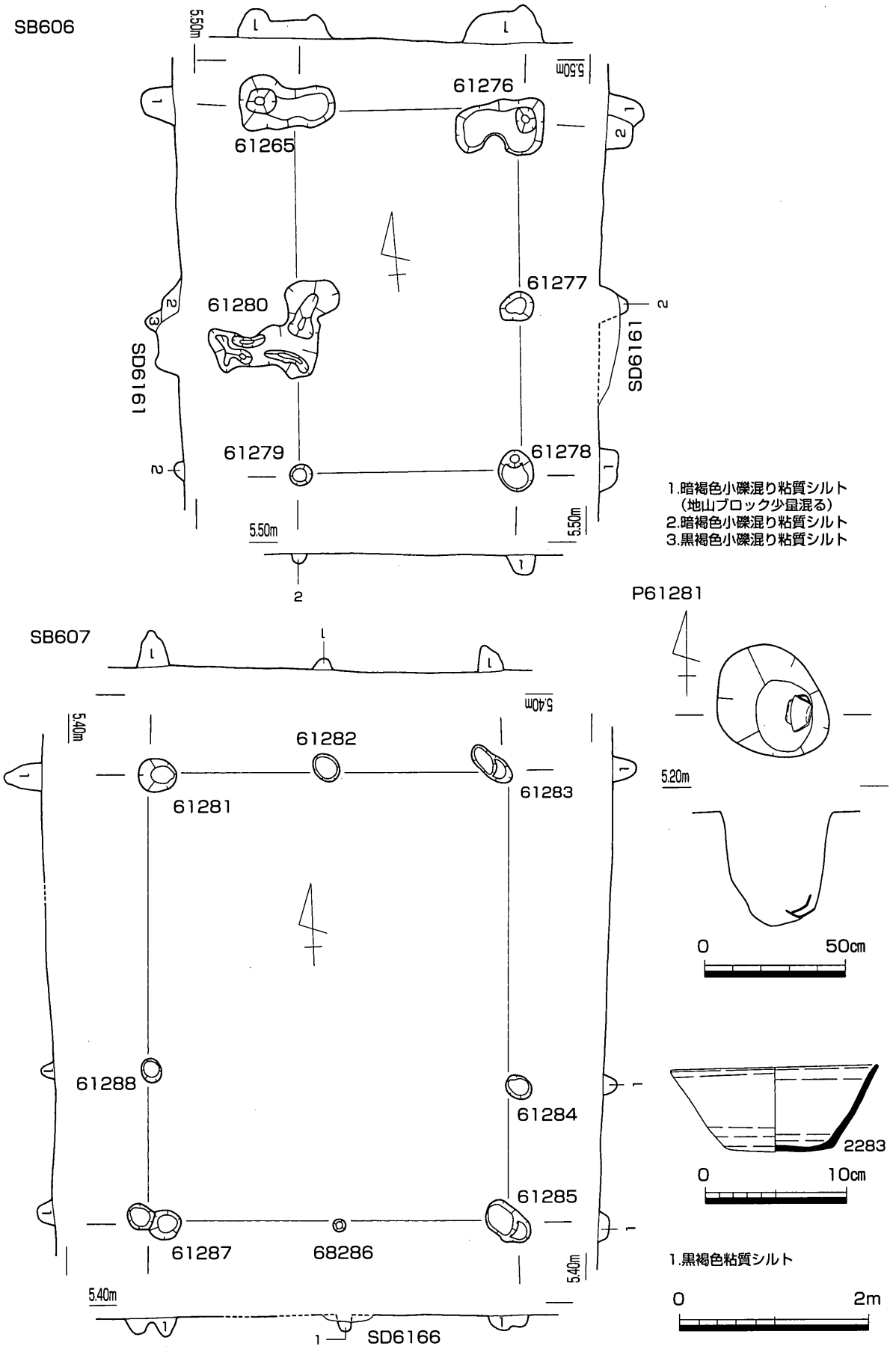
建物の桁行の柱穴間は、南側１間分がやや広く、約2.1ｍを測り、北側２間分はほぼ等間隔で、１間約1.6ｍを測る。梁間の柱穴間はほぼ等間隔の約1.77ｍを測る。

遺物は柱穴ＳP61258から土師器片１、須恵器片１、ＳＰ61259から土師器片１、須恵器片１、ＳＰ61260から須恵器皿（2280・2281）、土師器長胴甕の口縁部（2282）ほか須恵器・土師器片少量、ＳＰ61264・61266・61267から土師器片少量が出土した。

時期は柱穴出土遺物から９世紀後半から10世紀前半と考えられる。

### ＳＢ606

ＳＢ606は第Ⅴ－４調査区（Ｃ－72）北東部、第１遺構面の標高5.40ｍで検出した掘立柱建物跡である。北側で掘立柱建物跡ＳＢ604・605と重複しており、ＳＢ605とはＳＰ61265を共有するが、土層断面からの前後関係は不明である。またＳＰ61277、ＳＰ61280は溝状遺構ＳＤ6161と切り合い関係があり、これらの柱穴は溝によって切られていることが解る。規模は、梁間１間×桁行２間で、2.36×3.75ｍを測る。構成する柱穴は全て歪な円形を呈し、直径23㎝～37㎝を測り、検出面からは10～39㎝を測る。建物は南北棟で、北－南方向（長軸）は真北から4.0°東を取る。




第153図　ＳＢ606・607平・断面図、ＳＰ61281平・断面図、ＳＰ61281出土遺物実測図

建物の桁行の柱穴間はほぼ等間隔で、１間約1.8ｍを測る。

遺物はＳＰ61265・ＳＰ61276・ＳＰ61280から出土した。いずれも土師器小片が数点出土しただけで、図化は不可能のため時期は確定できないが、切り合い関係のあるＳＤ6161が９世紀末～10世紀前半と考えられ、これ以前の掘立柱建物跡と考える。ただＳＤ6161は平成７年度調査時に検出したＳＤ707（報告書番号）と同一の溝で、報告時溝状遺構の時期を出土遺物から11世紀末～12世紀初頭と考えているので、ＳＤ6161（ＳＤ707）の出土遺物に時期幅があるものとし、ここでは11世紀末～12世紀初頭以前であると考えたい。

### ＳＢ607

ＳＢ607は第Ⅴ－４調査区（Ｃ－72）北東部、第１遺構面の標高約5.30ｍで検出した掘立柱建物跡である。ＳＢ608と重複するが、新旧関係は不明である。またＳＰ61286は溝状遺構ＳＤ6166と切り合い関係があり、これらの柱穴は溝によって切られていることが解る。規模は、梁間２間×桁行２間で、3.81×4.69ｍを測る。構成する柱穴は全て歪な円形を呈し、直径13㎝～38㎝と小振りで、検出面からは15～38㎝と浅い。

建物の桁行の柱穴間は、北側１間分がやや広く、約3.2ｍを測り、南側は１間約1.5ｍを測る。梁間の柱穴間はほぼ等間隔の約1.90ｍを測る。建物は南北棟で、北－南方向（長軸）は真北から2.5°東を取る。

遺物はＳＰ61281から須恵器坏（2283）が出土している。

時期は柱穴出土遺物から９世紀後半頃と考えられる。

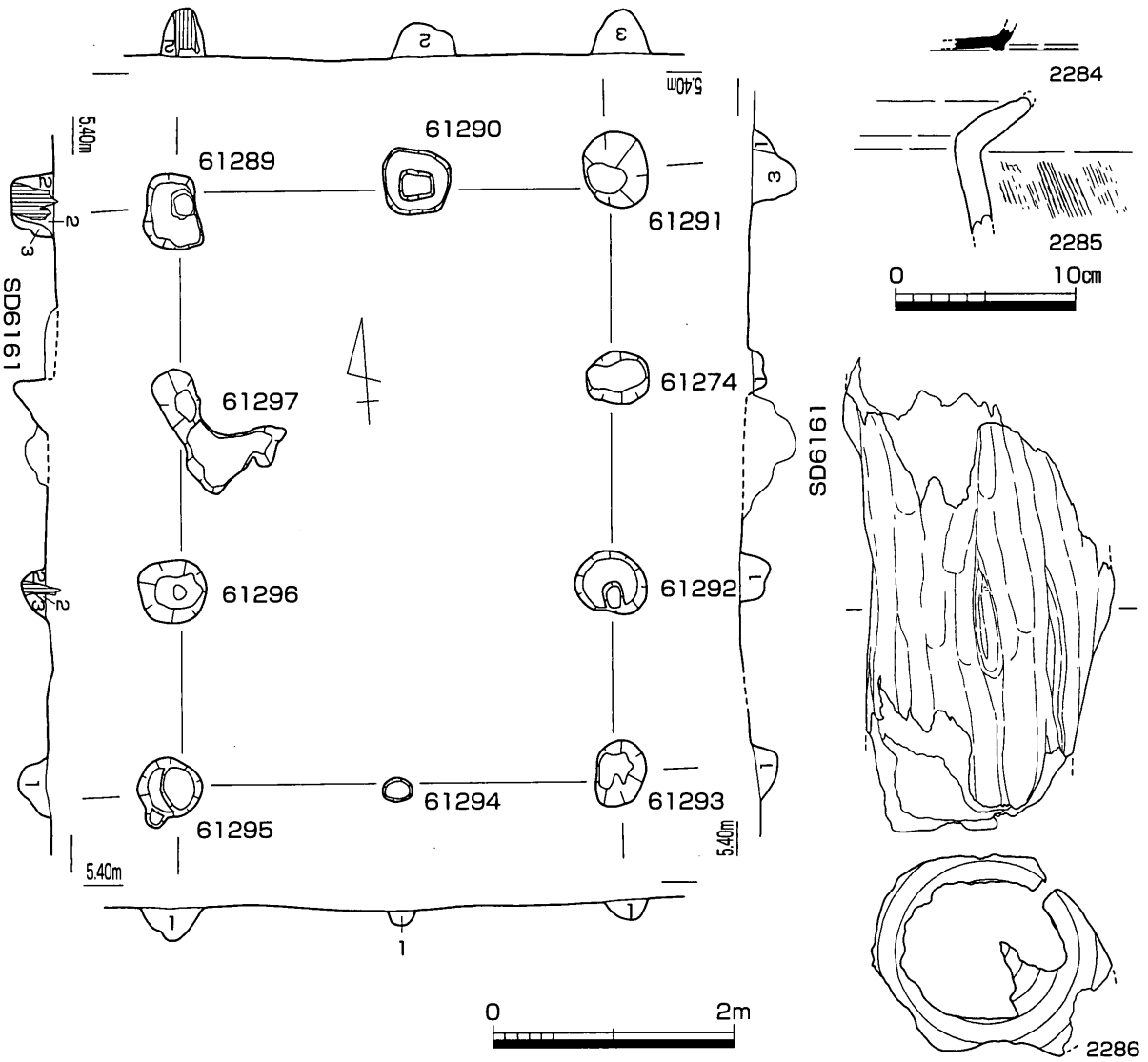
### ＳＢ608

ＳＢ608は第Ⅴ－４調査区（Ｃ－72）北東部、第１遺構面の標高約5.30ｍで検出した掘立柱建物跡である。北側がＳＢ604・607と重複し、ＳＢ604とはＳＰ61274を共有するが、土層断面等から新旧関係は不明である。またＳＰ61274・61297は溝状遺構ＳＤ6161と切り合い関係があり、これらの柱穴は溝によって切られていることが解る。規模は、梁間２間×桁行３間で、3.58×4.81ｍを測る。構成する柱穴はＳＰ61289、ＳＰ61290が一辺約50㎝の隅丸方形を呈するが、それ以外は全て歪な円形を呈し、直径50㎝～60㎝を測り、検出面からは11～38㎝を測る。ＳＰ61289・61296からは柱材が出土しており、特にＳＰ61289から出土した柱材は残りがよく、断面円形で、直径約20㎝を測る。元来断面円形を呈する柱材であったのか、方形を呈していたのかは不明である。建物は南北棟で、北－南方向（長軸）は真北から4.0°東を取る。

建物の桁行の柱穴間はほぼ等間隔で、１間約1.6ｍを測る。梁間の柱穴間はほぼ等間隔の約1.79ｍを測る。

遺物はＳＰ61289・ＳＰ61290・ＳＰ61291・ＳＰ61274・ＳＰ61293・ＳＰ61295・ＳＰ61296・ＳＰ61297から出土した。ＳＰ61289からは柱材（2286）、須恵器（2284）、土師器（2285）のほか土師器・須恵器小片が数点出土した。ＳＰ61290からはサヌカイト製の剥片が出土した。そのほかは土師器・須恵器小片が数点ずつ出土しただけである。

時期は柱穴出土遺物から８世紀後半から９世紀前半と考えられる。



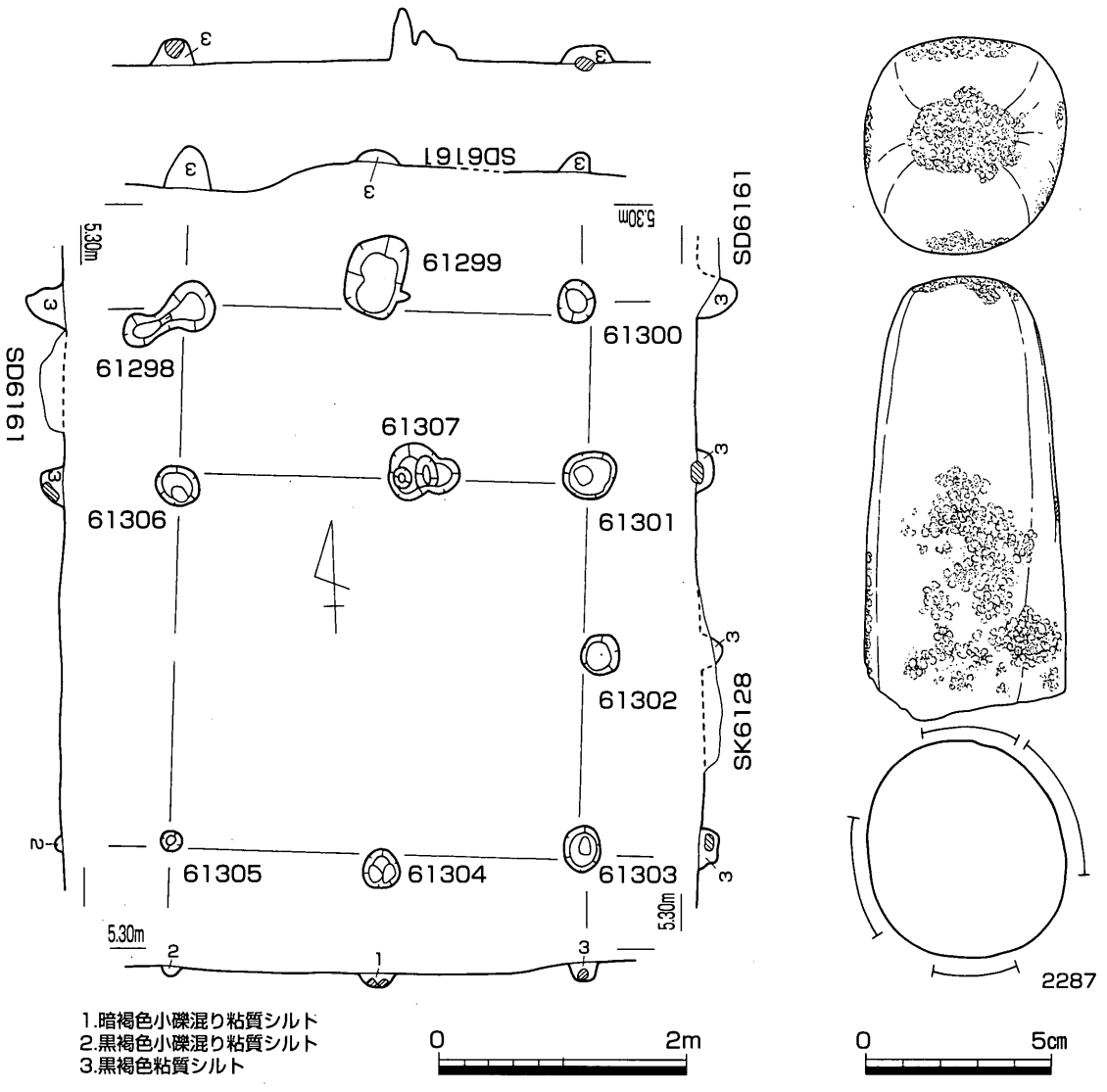

第154図　ＳＢ608平・断面図、ＳＰ61289出土遺物実測図

ＳＢ609

ＳＢ609は第Ⅴ－４調査区（Ｃ－72）北部、第１遺構面の標高5.20ｍで検出した掘立柱建物跡である。ＳＢ610とほぼ主軸を同じくし、北側に隣接して検出している。またＳＰ61299・61300は溝状遺構ＳＤ6161と、ＳＰ61302は土坑跡ＳＫ6128と、ＳＰ61298・61303・61304・61306は自然流路跡ＳＲ625と切り合い関係があり、これらの柱穴は溝・土坑によって切られ、自然流路を切っていることが解る。規模は、梁間２間×桁行３間で、4.23×3.30ｍを測る。構成する柱穴は全て歪な円形を呈し、直径17㎝～35㎝を測り、検出面からは8～34㎝を測る。建物は南北棟で、北－南方向（長軸）は真北から3.5°東を取る。

建物の桁行の柱穴間は北側１間分がやや狭く、１間約1.31ｍを測り、南側２間分はほぼ等間隔で、１間約1.46ｍを測る。北側１間分の梁間方向中央部には束柱が確認できる。梁間はほぼ等間隔で、１間約1.65ｍを測る。

遺物はＳＰ61298・ＳＰ61301・ＳＰ61306から出土した。ＳＰ61298からは土師器小片と須恵器小



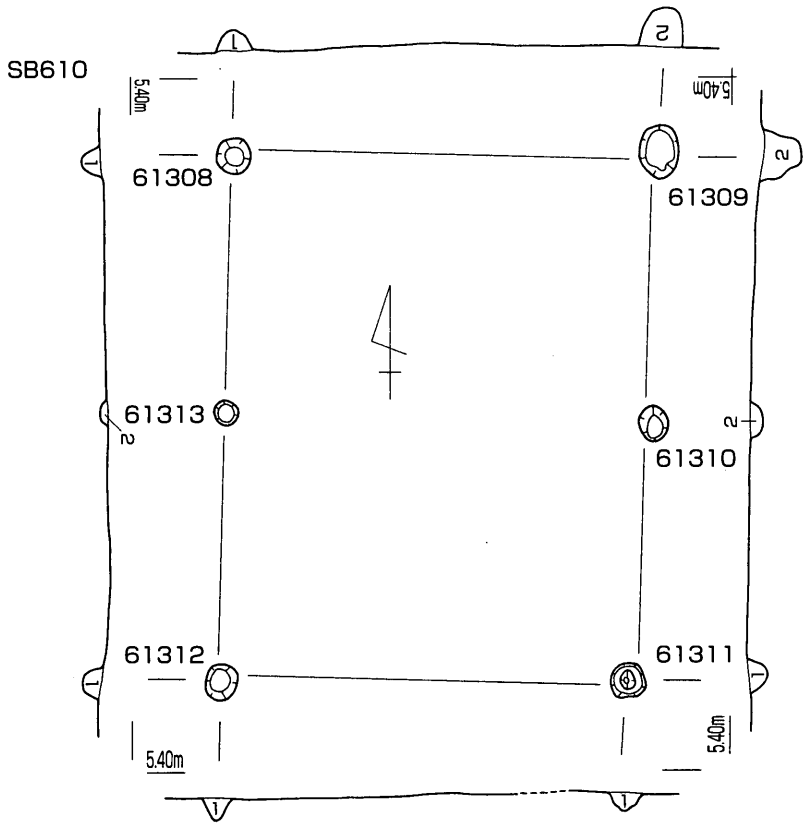

第155図　ＳＢ609平・断面図、ＳＰ61306出土遺物実測図

片、ＳＰ61301からは土師器小片、ＳＰ61306からは砂岩製の叩き石が出土し、それ以外にはサヌカイトではない石片・土師器小片が２点出土したが、いずれも図化は不可能であった。

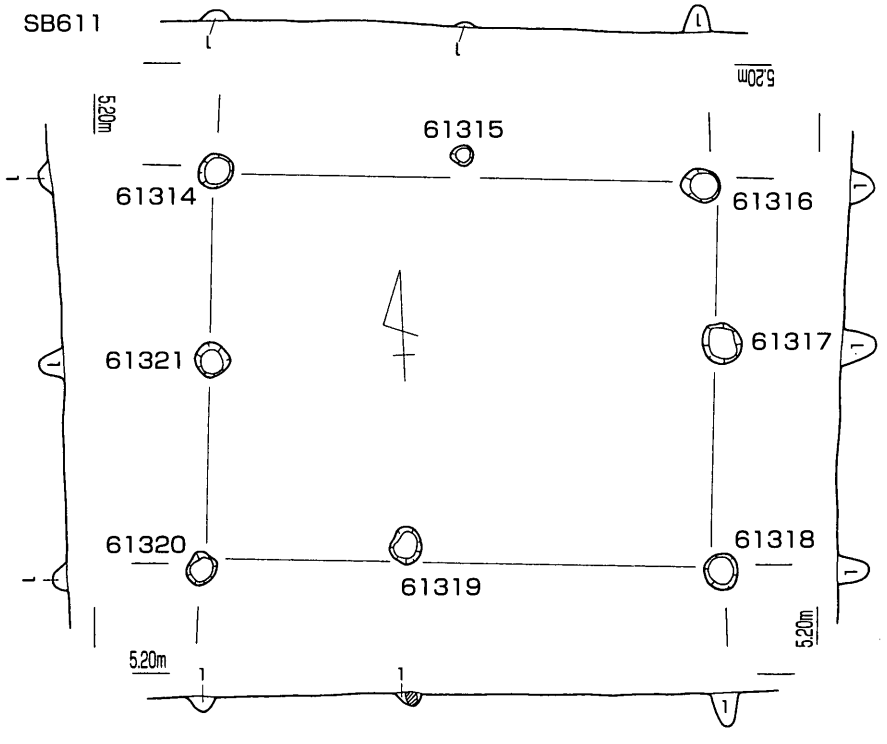
時期は小片のため不明であるが、切り合い関係のあるＳＤ6161が９世紀末～10世紀前半と考えられ、これ以前の掘立柱建物跡と考える。ただＳＤ6161は平成７年度調査時に検出したＳＤ707（報告書番号）と同一の溝で、報告時溝状遺構の時期を出土遺物から11世紀末～12世紀初頭と考えているので、ＳＤ6161（ＳＤ707）の出土遺物に時期幅があるものとし、ここでは11世紀末～12世紀初頭以前と考えたい。

### ＳＢ610

ＳＢ610は第Ⅴ－４調査区（Ｃ・Ｂ－72）中央部、第１遺構面の標高約5.30ｍで検出した掘立柱建物跡である。ＳＢ609の南側に位置し、主軸をそろえる。それぞれの建物の間隔は0.5ｍと狭い。またＳＰ61309は自然流路跡ＳＲ625と切り合い関係があり、柱穴は自然流路を切っていることが解る。規模は、梁間１間×桁行２間で、3.34×4.10ｍを測る。構成する柱穴は全て歪な円形を呈し、直径20cm～30cmと小振りで、検出面からは6～30cmと浅い。




1.暗褐色小礫混り粘質シルト(地山ブロックが少量混る)
2.黒褐色小礫混り粘質シルト




1.暗褐色小礫混り粘質シルト(地山ブロック少量混る)

0 2m

第156図　ＳＢ610・611平・断面図

建物の桁行の柱穴間はほぼ等間隔で、１間約2.05mを測る。建物は南北棟で、北－南方向（長軸）は真北から3.0°東を取る。

遺物はＳＰ61308から須恵器片、ＳＰ61310から土師器片、ＳＰ61311から土師器片が出土した。いずれも図化は不可能で、時期は不明である。

### ＳＢ611

ＳＢ611は第Ⅴ－４調査区（Ｃ－72・73）北西部、第１遺構面の標高約5.10mで検出した掘立柱建物跡である。南西側がＳＢ612と重複するが、新旧関係は不明である。ＳＰ61314～61318は自然流路跡ＳＲ625と切り合い関係があり、これらの柱穴は自然流路を切っていることが解る。規模は、梁間２間×桁行２間で、3.04×4.00mを測る。構成する柱穴は全て円形を呈し、直径18cm～33cmを測り、検出面からは10～28cmを測る。建物は東西棟で、北－南方向（短軸）は真北から3.5°東を取る。

建物の桁行の柱穴間はほぼ等間隔で、１間約2.0mを測る。梁間の柱穴間はほぼ等間隔の約1.52mを測る。

遺物はＳＰ61318から土師器片、ＳＰ61321から土師器片、須恵器片が出土した。いずれも図化は不可能で、時期は不明である。

### ＳＢ612

ＳＢ612は第Ⅴ－４調査区（Ｃ－72・73）北西部、第１遺構面の標高5.10mで検出した掘立柱建物跡である。北東側がＳＢ611と、西側がＳＢ613と重複するが、新旧関係は不明である。またＳＰ61324～ＳＰ61327は自然流路跡ＳＲ625と切り合い関係があり、これらの柱穴は自然流路を切っていることが解る。規模は、梁間２間×桁行３間で、3.44×5.53mを測る。構成する柱穴は全て歪な円形を呈し、直径18cm～36cmを測り、検出面からは4～30cmを測る。Ｐ61329で柱痕が確認でき、約20cmを測る。建物は東西棟で、北－南方向（短軸）は真北から1.5°東を取る。

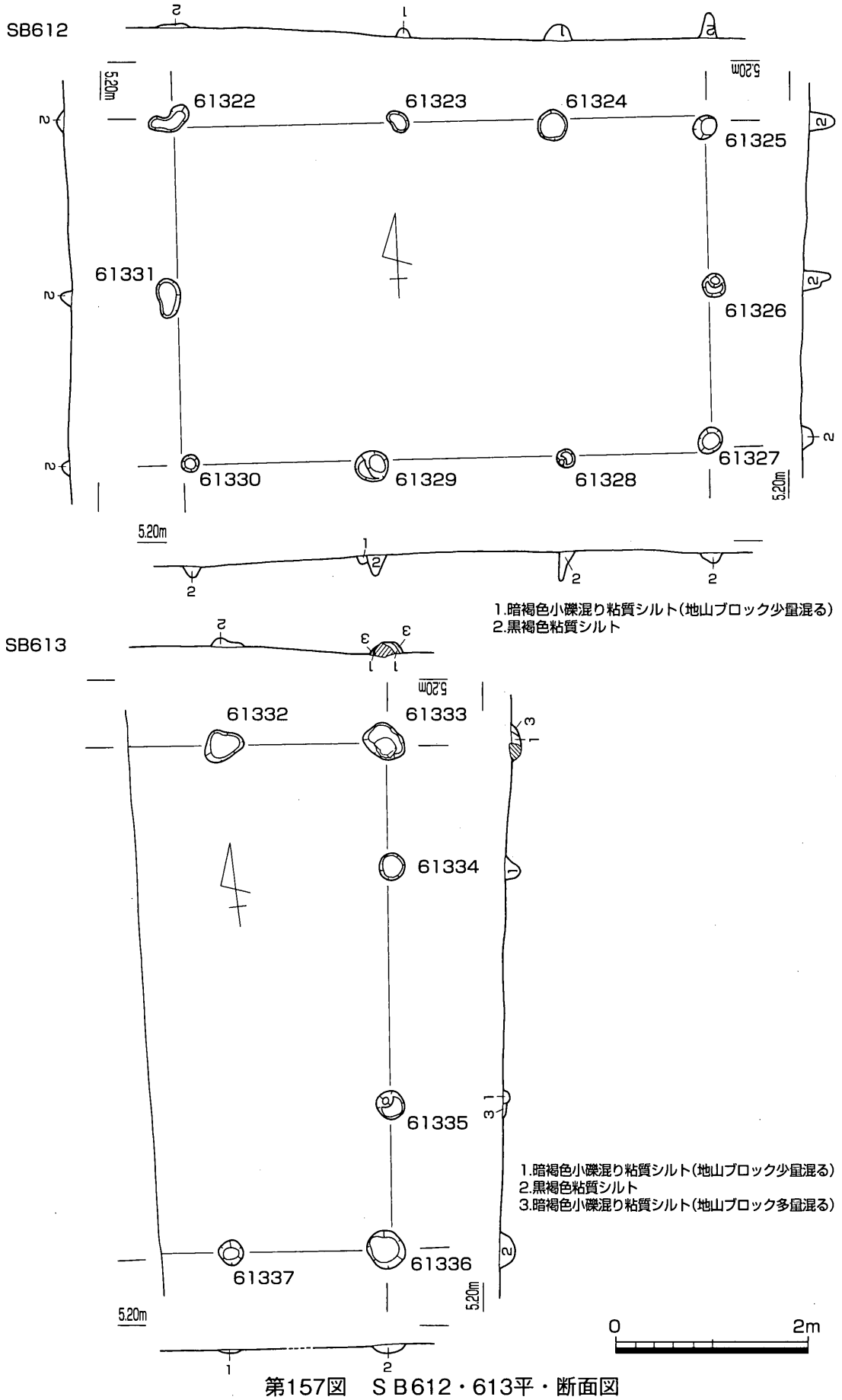
建物の桁行の柱穴間は、東側１間分がやや狭く、1.5～1.6mを測り、西側２間分はほぼ等間隔で、約2.0mを測る。梁間はほぼ等間隔で、１間約1.72mを測る。

遺物は柱穴ＳＰ61325から出土したが、いずれも土師器小片で、図化は不可能で、時期は不明である。

### ＳＢ613

ＳＢ613は第Ⅴ－４調査区（Ｃ－73）北西部、第１遺構面の標高約5.00mで検出した掘立柱建物跡である。北東部でＳＢ612と重複するが、新旧関係は不明である。規模は、梁間（２）間×桁行３間で、(2.70)×5.24mを測る。構成する柱穴は全て歪な円形を呈し、直径26cm～30cmと小振りで、検出面からは4～16cmと浅い。

建物の桁行の柱穴間は、中央部の１間分がやや広く、約2.5mを測り、北側・南側の１間分がほぼ等間隔で、１間1.3～1.4mを測る。梁間は西側が調査区外に延びるために不明であるが、１間分は約1.7mを測る。建物はおそらく南北棟で、北－南方向（長軸）は真北から6.0°東を取る。
柱穴から遺物は出土しておらず、時期は不明である。




第157図　ＳＢ612・613平・断面図

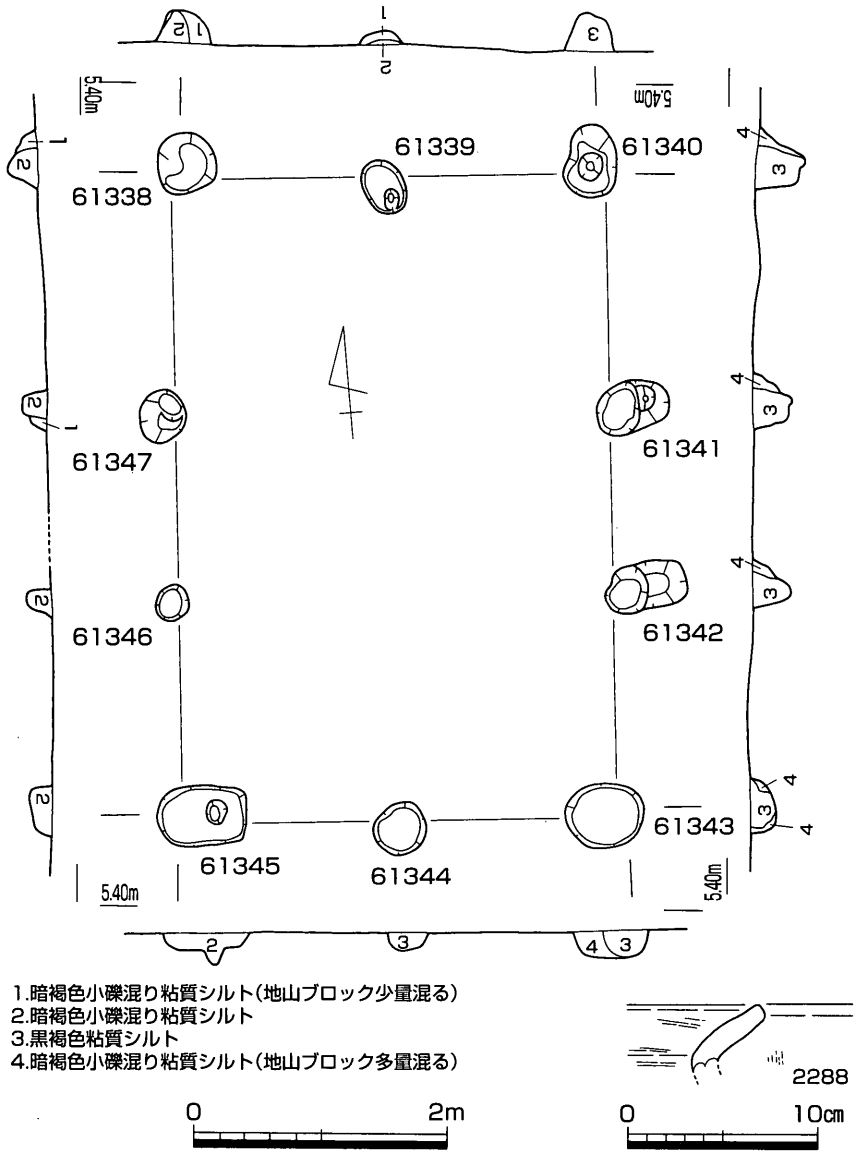
ＳＢ614

ＳＢ614は第Ｖ－４調査区（Ｃ－73）北西部、第１遺構面の標高約5.30ｍで検出した掘立柱建物跡である。またＳＰ61345は自然流路跡ＳＲ626と切り合い関係があり、柱穴は自然流路を切っていることが解る。規模は、梁間２間×桁行３間で、3.44×5.04ｍを測る。構成する柱穴は全て歪な円形を呈し、直径26㎝～62㎝を測り、検出面からは20～40㎝を測る。建物は南北棟で、北－南方向（長軸）は真北から4.0°東を取る。

建物の桁行の柱穴間は、中央部の１間分がやや狭く、約1.5ｍを測り、北側・南側の１間分がほぼ等間隔で、１間約1.7ｍを測る。梁間の柱穴間はほぼ等間隔の約1.72ｍを測る。

遺物は柱穴ＳＰ61340・ＳＰ61342・ＳＰ61343・ＳＰ61346から出土した。土師質甕（2288）はＳＰ61342から出土したものである。

時期は柱穴出土遺物から９世紀頃と考えられる。




第158図　ＳＢ614平・断面図、ＳＰ61342出土遺物実測図

## 2．井戸跡

### ＳＥ604

ＳＥ604は第Ⅴ－４調査区（Ｂ－72）ほぼ中央部、第１遺構面の標高約5.30ｍで検出した井戸跡である。掘り方上面は東側の一部が試掘トレンチで削られているが、平面形は確認できる。

土層断面から見ると基盤層として第８・９層があり、その上面で検出する。同時期と考えられるＳＤ6170の北側に約1.5ｍと近接して確認している。また井戸跡北側には同時期の掘立柱建物跡があり、ちょうど溝ＳＤ6170、ＳＤ702・713・714（平成７年度報告遺構番号）によって区画された部分の南側に井戸跡ＳＥ604は位置している。

井戸跡内の堆積土は７層で、第１～６層が井戸廃絶後に堆積した土層で、第７層が整地土である。第１層は暗灰色小礫混じり砂質シルト層、第２～６層は黒色小礫混じりの細砂層や粘質シルト層で、ほぼ同じ土層である。第７層は井戸枠を組み上げるときに水平にするために整地した土層で、第２～６層と同じ様相を呈している。

平面形態は上面掘り方が隅丸で若干歪な方形を呈しており、底面が方形を呈し、底面中央部に曲げ物を設置する円形の掘り方を持つことから、３段に掘り込まれている。掘り方断面は上面から約90cm下で一辺約1.1ｍの底面があり、そのほぼ中央部に曲げ物設置坑が掘削されている。

規模は掘り方平面が、東西約1.62m、南北約1.72m、検出面からの最深部の深さは約1.15ｍを測る。

井戸内底面の壁際に木枠が井桁状に組まれ、ほぼ中央部から円形の曲げ物が出土している。

井桁状に組まれた木枠は、まず北辺と南辺に長さ約90cm、幅約９cm、厚さ６cmの木枠を置き、西辺と東辺には北辺と南辺に使用した木枠と同様な木枠でそれぞれ先端付近を重ね、井桁状に設置する。更にそれぞれの木枠の交差する四隅の部分には長さ約６cm、幅約４cmの臍穴を開け、検出状況から長さ45cm程度の木材を臍穴に差し込むことにより上下の木枠を固定している。井桁状に組まれた木枠の内法は約50～54cmを測り、曲げ物設置坑の直径とほぼ同じ大きさを持つ。

井桁状に組まれた木枠の上部には南北辺に長さ約１m、幅約20cm、厚さ２cm程度の板材を四隅の木材に接するように、東西辺には板材を挟み込むような状態で裏込め土を入れ、井戸枠を構築したものと考えられる。そうすると第５・６層は井戸枠構築時の裏込め土と考えたい。

したがって井戸枠は下部を木枠で井桁状に構築し、上部を板材で構築したものと考えられる。出土状況からは板材が１段分しか残存していないことから、更に上部に何段あったかは不明である。推測すると下部の木枠上面までの深さが約70cmであることから、約20cmの板材とすると３段程度は上部にあったことが解る。

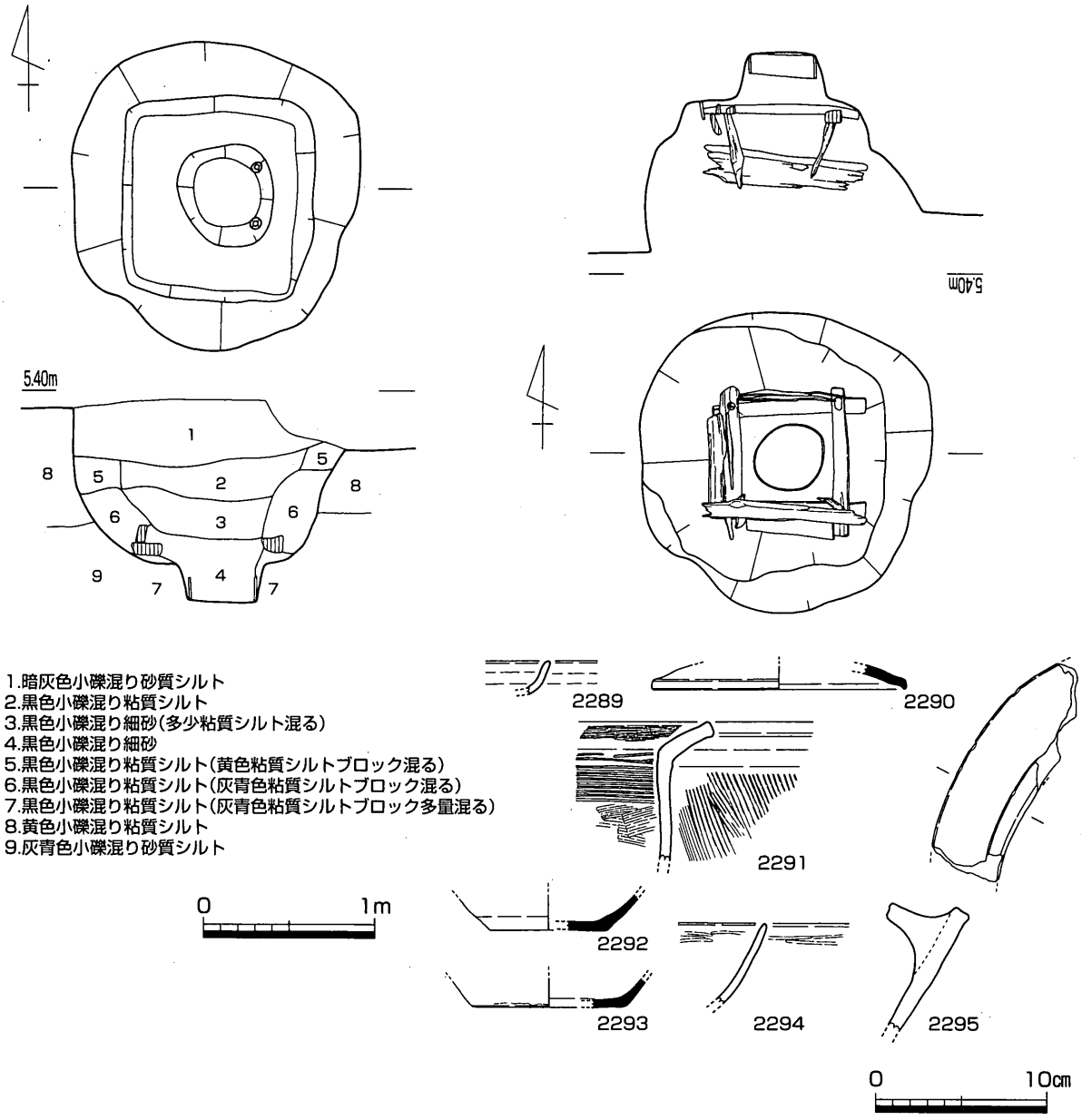
底面中央の曲げ物設置坑は平面形態が歪な円形を呈し、断面逆台形状を呈する。規模は上面の直径が約55cm、下面の直径が約38cm、深さ約25cmを測る。この設置坑内に直径約38cm、深さ約13cmの曲げ物を設置している。曲げ物設置坑の直径と曲げ物の直径がほぼ同じであることから、曲げ物の大きさに合わせるように、曲げ物設置坑を掘削したものと考えられる。

曲げ物内底部から湧水があり、第９層が湧水層と考えられる。

井戸跡内及び掘り方内から須恵器、土師器、土師質土器が出土している。

2289は掘り方内から出土した土師器皿で、内外面とも色調が茶白色を呈している。

2290～2295は井戸枠内からの出土で、2290は須恵器高台付坏の蓋、2292・2293は須恵器坏、2291は土師質長胴甕、2295は竈、2294は黒色土器Ａ類椀である。




第159図　ＳＥ604平・断面図、出土遺物実測図、井戸枠出土状況図

時期にはかなり幅があり、８世紀末～９世紀前半のものから12世紀のものまで出土している。しかし、裏込め出土の土師器皿から、この井戸跡の時期を９世紀前半頃としたい。

### ３．土坑跡

第Ⅴ－４調査区で検出した古代の土坑跡は総数２基で、ＳＤ6128の北側、南側でそれぞれ１基検出している。

#### ＳＫ6126

ＳＫ6126は第Ⅴ－４調査区（Ｂ－73）中央部西寄りで、ＳＢ614の北梁間の北側で検出している。平面形態は円形を呈し、直径約0.71ｍ、検出面からの深さ約0.74ｍを測る。土坑の断面形態は緩や

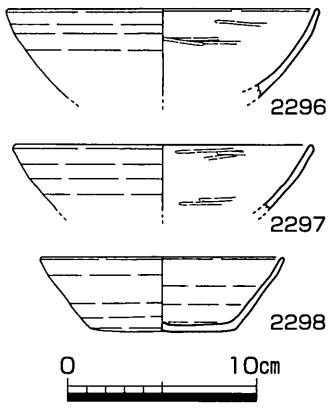
かに上部が開く「U」字状を呈している。

土坑内から黒色土器椀、土師器坏が出土している。

黒色土器椀は内面のみに炭素を吸着させたA類椀で、体部が内湾しながら外上方に延びる。体部内面には横方向のヘラミガキが認められる。

土師器坏は底部がヘラ切りで、体部は直線的に外上方に延びる。

時期は出土遺物より10世紀前半と考えられる。




第160図　ＳＫ6126出土遺物実測図

4．溝状遺構

ＳＤ6160

ＳＤ6160は第Ⅴ－４調査区（Ａ－72）北部で検出した溝状遺構である。調査区北部際ではやや東西に延びるが全様は不明である。その東西の溝のほぼ中央部から南に溝が延びる。

第Ⅴ－４調査区では遺構面を３面検出し、第０遺構面でこの溝状遺構を検出している。調査区際を除き、流路方向はほぼ西－東（Ｎ－80°－Ｅ）をとり、規模は最大幅約0.30m、深さ約0.19m、検出長約2.33mを測る。溝内堆積土は単層で、黒色小礫・細砂混じり粘質シルト層が堆積する。

溝内堆積土より土師器坏、須恵器高台付坏身・蓋、須恵器坏が出土している。

時期は出土遺物より、８世紀から９世紀と考えられる。

ＳＤ6161

ＳＤ6161は第Ⅴ－４調査区（Ｂ－71～73）で検出した溝状遺構である。調査区北部で、東西に長く延び、ほぼ中央部で南に屈曲する。ＳＤ6170は平成７年度の第Ⅴ－３調査区で検出したＳＤ707と同一の溝である。

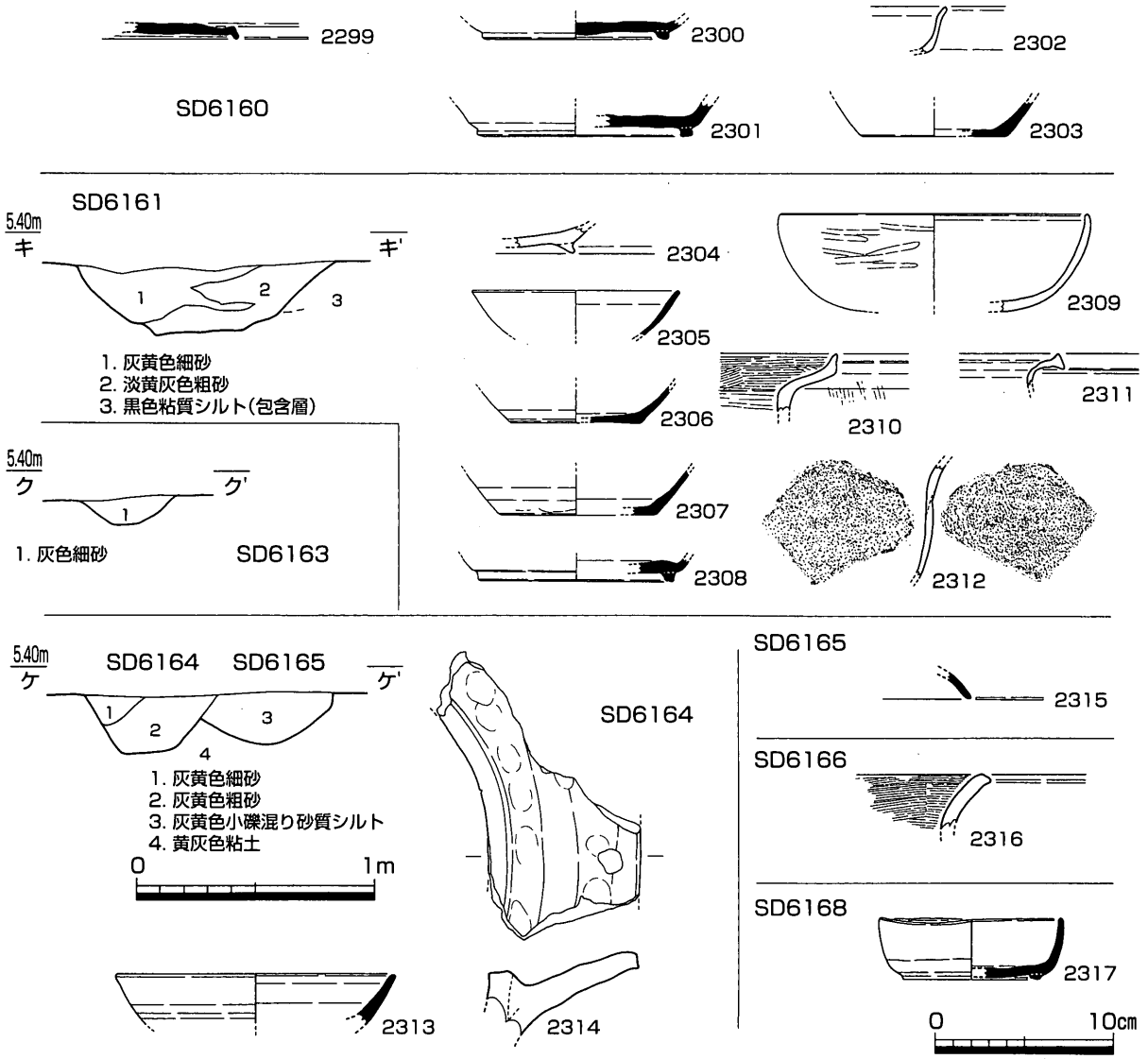
第Ⅴ－４調査区では遺構面を３面検出し、第０遺構面でこの溝状遺構を検出している。流路方向はほぼ西－東（Ｎ－85°－Ｗ）（Ｎ－65°－Ｅ）をとり、規模は最大幅約1.08m、深さ約0.24m、検出長約29.5mを測る。第Ⅴ－３調査区も含めると検出長は約89.0mを測る。

溝内堆積土は土層（キ－キ´）でみると２層となり、上層が灰黄色細砂層、下層が淡黄灰色粗砂層で、第Ⅴ－３調査区で検出したＳＤ707と検出幅、堆積土質、流路の方向等から見ても同一の溝を裏付けている。

溝内堆積土より縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、須恵器が出土している。

土師器は坏、黒色土器Ａ類椀が、須恵器は高台付坏、坏が出土している。８世紀～９世紀にかけてのものである。

出土遺物は非常に少ないが、全体的に時期幅があり、特にどの時期にも偏っていないことから溝の機能していた時期は特定できない。ただ上限は土師器坏（2309）、須恵器坏蓋が出土していることから７世紀中葉に遡り、下限は９世紀後半と考えられる。しかし第Ⅴ－３調査区で検出したＳＤ707では11世紀末～12世紀前半の遺物を出土していることから、ＳＤ6161も同様の時期の可能性が考えられる。




第161図　ＳＤ6161・6163～6165土層断面図、ＳＤ6160・6161・6163～6166・6168出土遺物実測図

ＳＤ6163

ＳＤ6163は第Ⅴ－４調査区（Ａ－72）北部で検出した溝状遺構である。

第Ⅴ－４調査区では遺構面を３面検出し、第０遺構面でこの溝状遺構を検出している。流路方向はほぼ西－東（Ｎ－9°　－Ｗ）をとり、規模は最大幅約0.48m、深さ約0.10m、検出長約8.92mを測る。溝内堆積土は単層で、灰色細砂層が堆積する。

溝内堆積土より土師器、土師質土器、須恵器の小片が出土している。

溝内からの出土遺物が小片のため、時期は不明である。

ＳＤ6164

ＳＤ6164は第Ⅴ－４調査区（Ｂ－72・73）で検出した溝状遺構で、ＳＤ6165と切り合いがある。

第Ⅴ－４調査区では遺構面を３面検出し、第０遺構面でこの溝状遺構を検出している。流路方向はほぼ北－南（Ｎ－76°　－Ｗ）をとり、規模は最大幅約0.54m、深さ約0.22m、検出長約12.6mを測る。溝内堆積土は２層で、上層が灰黄色細砂層で、下層が灰黄色粗砂層が堆積する。

溝内堆積土より土師質土器、須恵器、瓦が出土している。
時期は9世紀頃のものである。

### SD6165

SD6165は第Ⅴ－4調査区（B－72・73）で検出した溝状遺構で、SD6164と切り合いがある。第Ⅴ－4調査区では遺構面を3面検出し、第0遺構面でこの溝状遺構を検出している。流路方向はほぼ北－南（N－72°－W）をとり、規模は最大幅約0.70m、深さ約0.21m、検出長約9.2mを測る。溝内堆積土は単層で、灰黄色小礫混じり砂質シルト層が堆積する。
溝内堆積土より須恵器、土師器、土師質土器が出土している。

### SD6166～6168

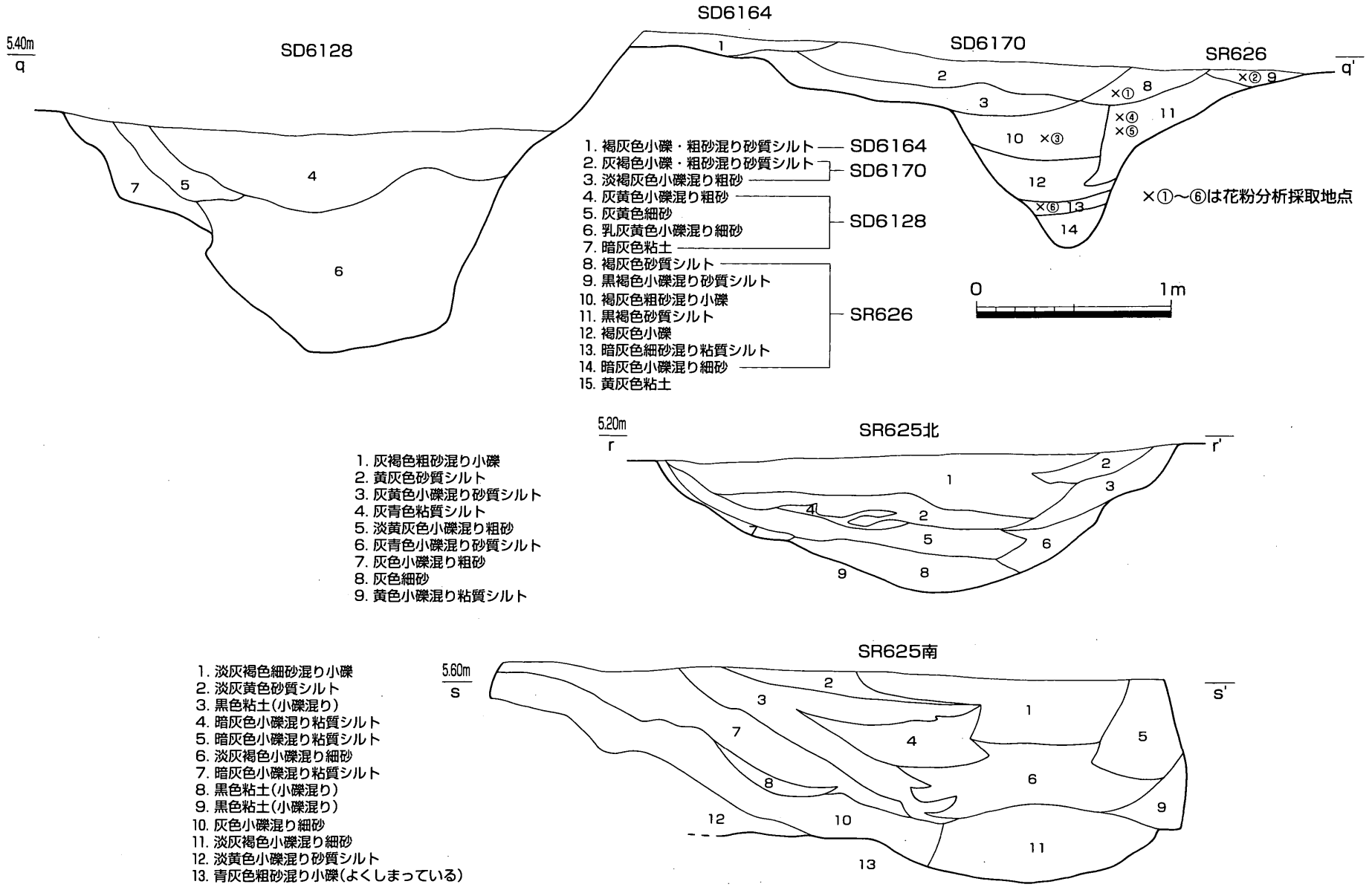
SD6166～6168は第Ⅴ－4調査区（A－72）で検出した溝状遺構で、SB607と切り合いがあり、溝が掘立柱建物を切っている。またSD6168はSB608に切られている。これら3条の溝はほぼ南北に流路を取り、併走する。北部では同様にほぼ直角に西方向に屈曲し、SD6166とSD6167に切り合いはあるもののほぼ同時期に機能していたものと考えられる。周辺に掘立柱建物はなく、雨落ち溝あるいは区画溝の可能性は低い。
第Ⅴ－4調査区では遺構面を3面検出し、第1遺構面でこの溝状遺構を検出している。流路方向は南部ではほぼ北－南（N－5°－W）をとり、規模は最大幅約0.30～0.50m、深さ約0.20m、検出長約5.5～9.0mを測る。溝内堆積土は単層で、灰黄色小礫混じり砂質シルト層が堆積する。
溝内堆積土より須恵器、土師器、黒色土器、土師質土器が出土している。

### SD6169

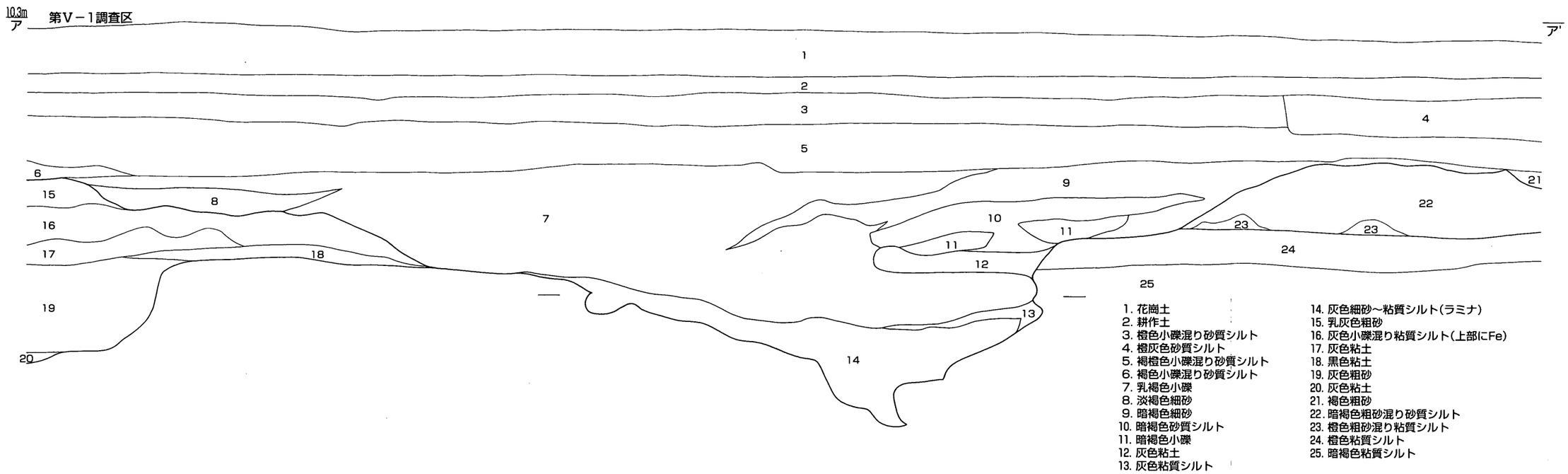
SD6169は第Ⅴ－4調査区（A－72）で検出した溝状遺構で、溝SD6161と切り合いがある。流路方向はほぼ南北を取り、北部では2条に分流する。SB607とSB611のほぼ中間の位置にあり、掘立柱建物群を小区画する溝の可能性が考えられる。
第Ⅴ－4調査区では遺構面を3面検出し、第1面でこの溝状遺構を検出している。流路方向は南部ではほぼ南北をとり、規模は最大幅約1.8m、深さ約0.16m、検出長約8.0mを測る。溝内堆積土は単層で、黒色小礫・細砂混じり粘質シルト層が堆積する。
溝内堆積土より須恵器、土師器が出土している。
時期は出土遺物より、古代と考えられる。

### SD6128

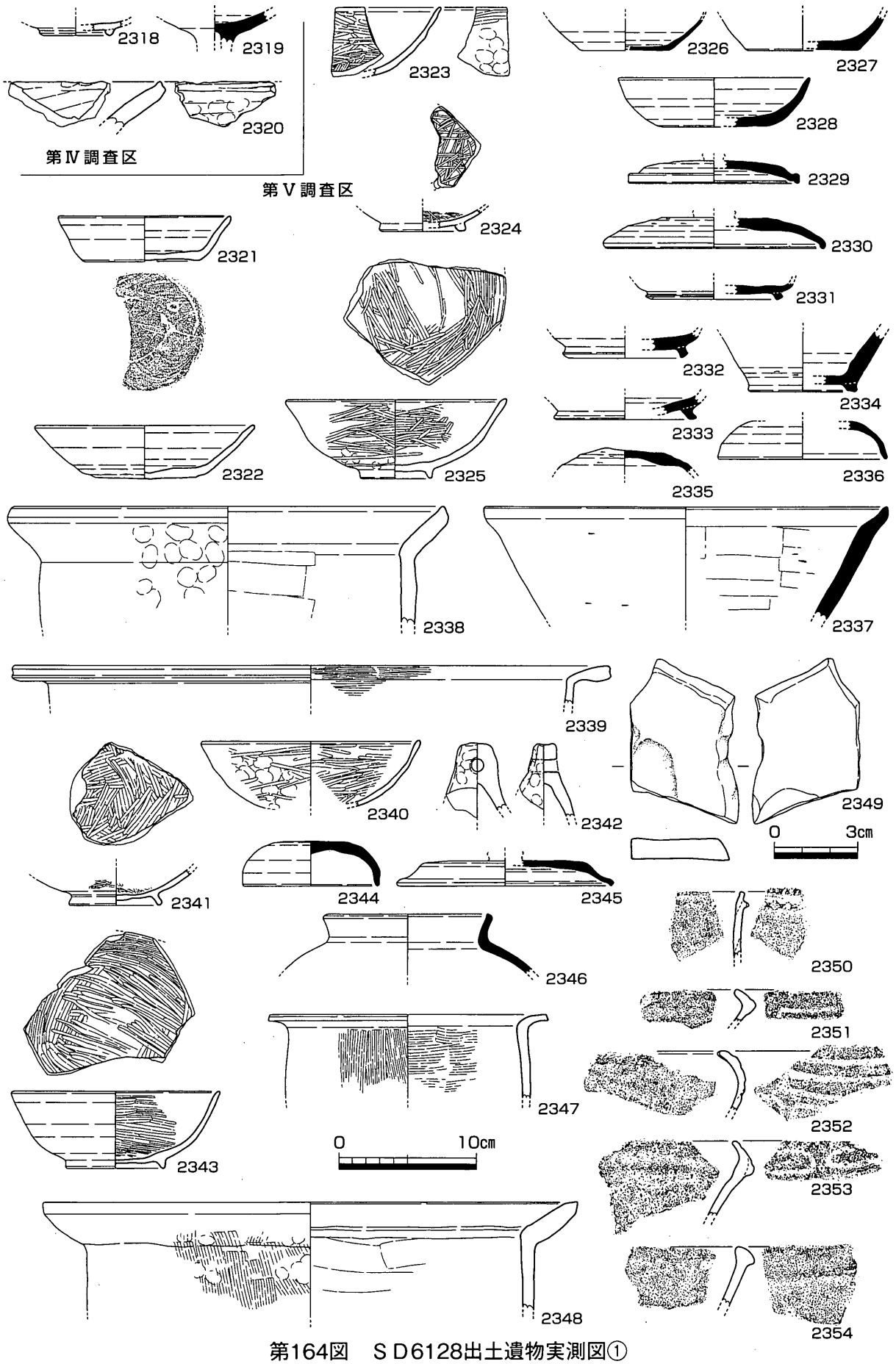
SD6128は第Ⅳ－2・3（C－51～57）、Ⅴ－1～4調査区（B－62～73）で検出した溝状遺構である。東西に長く延びるもので、第Ⅳ・Ⅴ調査区で検出し、東西の流路方向が西北西－東南東を取ることから第Ⅳ調査区ではC列であったものが、第Ⅴ調査区では20m北のB列内で検出している。
第Ⅳ調査区では遺構面を2面検出し、第1遺構面で、第Ⅴ－1・2調査区では遺構面を3面検出し、第1遺構面で、第Ⅴ－4調査区では遺構面を3面検出し、第1遺構面でこの溝状遺構を検出し



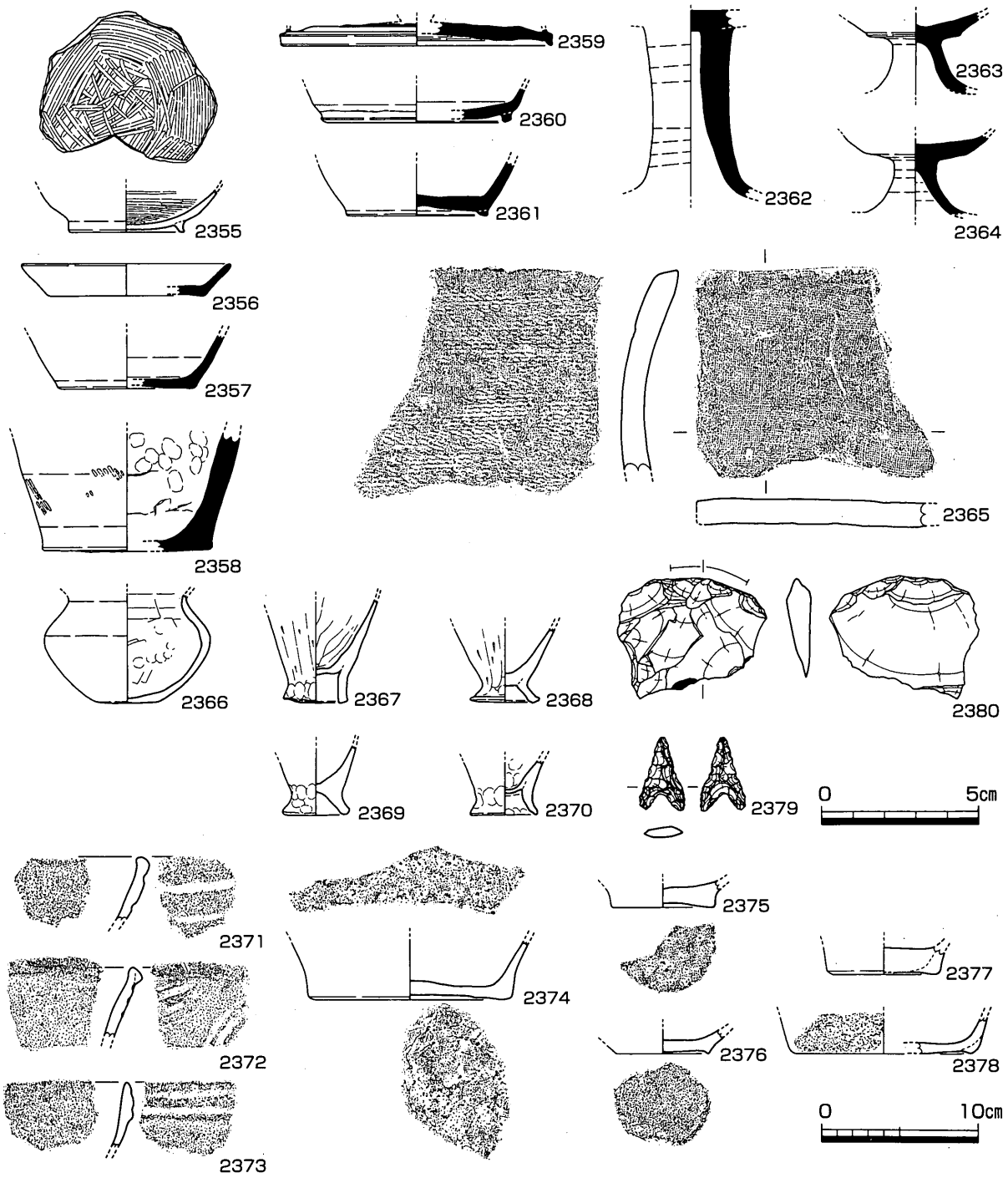

第162図　ＳＤ6128・ＳＲ625・626土層断面図




第163図　ＳＤ6128土層断面図



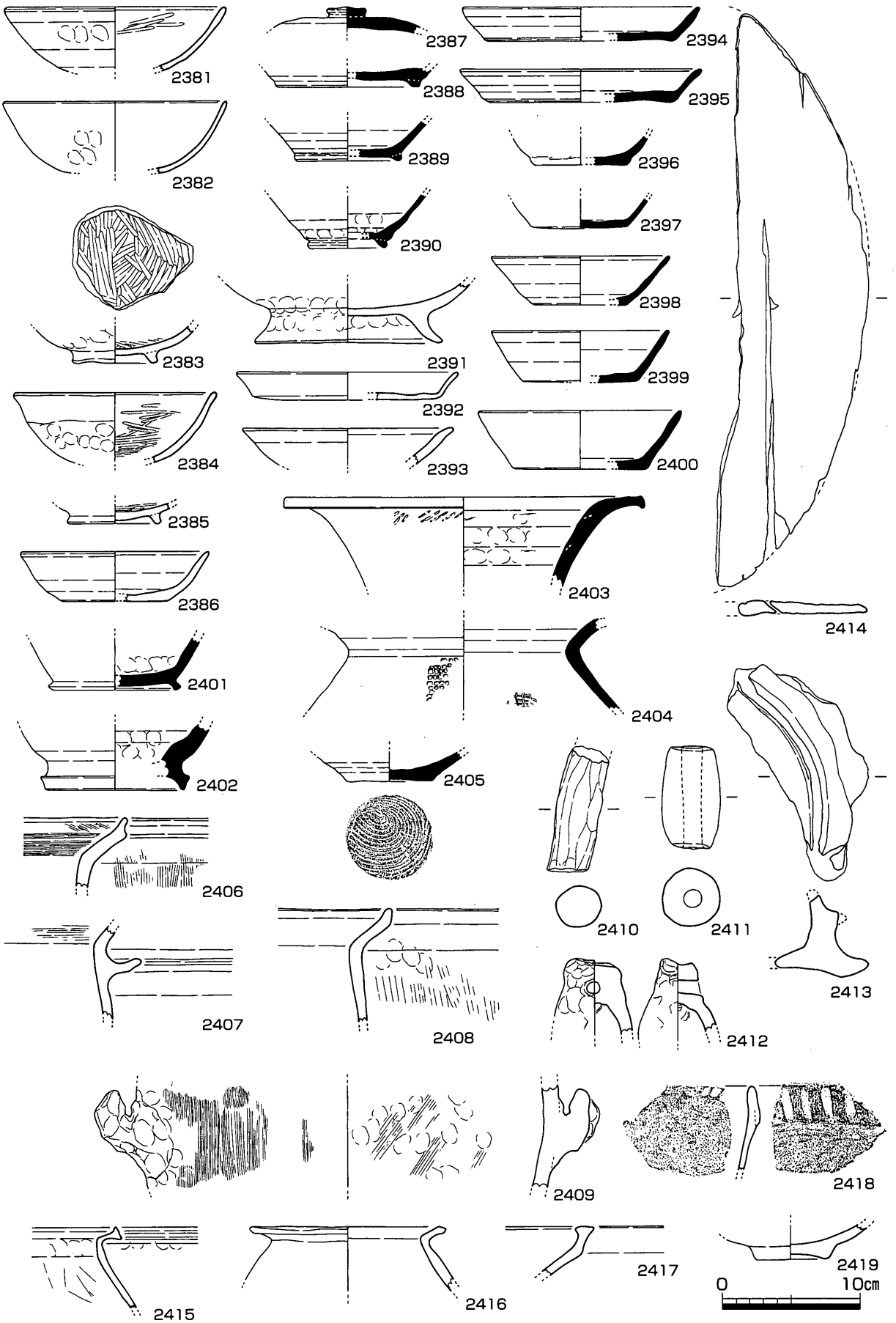

第164図　ＳＤ6128出土遺物実測図①



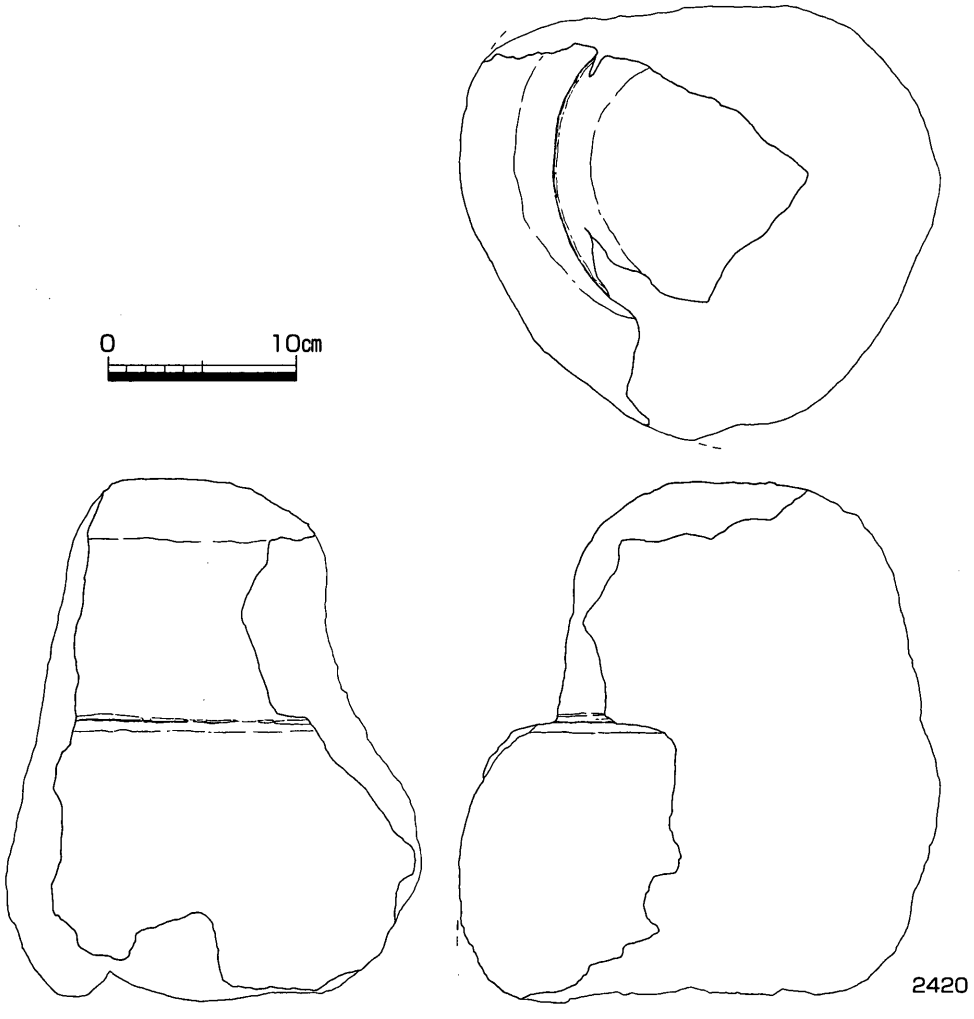

第165図　ＳＤ6128出土遺物実測図②

ている。それぞれの第１遺構面が同一時期である。

第Ⅳ調査区では調査区南端部で、溝の北半分を検出しており、南半分は調査区外となり、検出していない。第Ⅴ－３調査区を含めた第Ⅴ調査区では全域で溝を検出している。検出状況を見ると第Ⅴ調査区東端では南に屈曲しており、第Ⅳ・Ⅴ調査区間は路線外に延びるものと考えられる。この東端の屈曲と同様な屈曲は第Ⅴ－３調査区中央部でも確認でき、ちょうど第Ⅴ－１調査区（Ｂ－62）から第Ⅴ－３調査区（Ｂ－70）までの間、約156ｍの範囲で北に７～11ｍほど流路を併行に移




第166図　ＳＤ6128出土遺物実測図③




第167図　ＳＤ6128出土遺物実測図④

動しているものと考えられる。溝はほとんど蛇行しておらず、平行移動した間も、井堰を検出した部分はやや蛇行し、溝幅も膨らむが、それ以外はほぼ同じ幅で真っ直ぐ延びる。

流路方向はほぼ西－東（Ｎ－85.5°　－Ｗ）をとり、規模は最大幅約3.6m、深さ約1.43m、第Ⅳ調査区で検出長約119.0m、第Ⅴ調査区で検出長約219.0mを測る。第Ⅳ・Ⅴ調査区間が約80mあることから総延長は約418mにも及ぶ溝状遺構である。

溝内堆積土は東から土層（ア－ア´）で８層、土層（ウ－ウ´）で７層、土層（イ－イ´）で５層、土層（ｑ－ｑ´）で４層となる。溝内堆積状況はほとんどが細砂・粗砂・小礫の砂礫層を中心に堆積しており、それぞれの堆積土において類似する粘土層、シルト層が確認できることから同一溝であることが解る。溝内の砂礫層は第Ⅳ・Ⅴ調査区の遺構面上の堆積土に類似することから、この溝は徐々に埋没したものではなくて、短期間に堆積したものと考えられ、若干残存する粘土層、シルト層が溝本来の堆積層と考えられる。断面は上部が緩やかに開く「Ｕ」字状を呈している。

溝内堆積土より縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、須恵器、瓦器、石製品、獣骨が出土している。

第Ⅳ調査区で検出した溝状遺構からは土師器、土師質土器、須恵器が出土している。出土遺物は７世紀～13世紀のものである。

第Ⅴ－１調査区で検出した溝状遺構からは縄文土器、土師器、土師質土器、須恵器、黒色土器、

石製品が出土している。これらの遺物は上部堆積層出土遺物（2321～2339・2349～2352）と底面出土遺物（2340～2348・2353・2354）に分けられる。上部堆積層出土遺物は縄文時代後・晩期の深鉢、７世紀の須恵器坏蓋、須恵器高台付坏、９世紀前半の須恵器坏蓋、10世紀前半の須恵器坏、12世紀の土師器坏、土師質長胴甕、黒色土器椀、瓦器椀、須恵器こね鉢などとかなり時期幅があり、時期の特定はできない。底面出土遺物も同様な時期幅が確認できる。2343は黒色土器Ａ類椀で、体部は腰部分がやや張り、直線的に外上方に口縁部は延びる。体部内面に４分割のヘラミガキを施した後、見込み部分にヘラミガキを施す。底部高台内にはヘラケズリの痕跡が確認できる。時期は10世紀後半頃と考えられる。

第Ⅴ－２調査区で検出した溝状遺構からは縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦、石製品が出土している。８世紀の須恵器高坏が出土している。瓦は凹面に布目、凸面に縄目の叩き痕が認められる。

第Ⅴ－４調査区で検出した溝状遺構からは縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、黒色土器、瓦器、土馬、土錘、蛸壺、木製品が出土している。

時期は混入と考えられる縄文土器、弥生土器を除くと７世紀末～12世紀の遺物が出土している。2405は須恵器鉢で、篠窯産の鉢である。底部は回転糸切りされた平底で、体部下半は直線的に外上方に延びる。色調は灰白色を呈し、胎土に0.5～1.5㎜程度の砂粒を含む。2414は曲げ物の底板と考えられる。

2420は凝灰岩製の宝塔軸部である。上部に突出部があり、かなり全体に欠損しているが、横断面が円形を呈し、下部直径約26.8㎝、上部直径約16.5㎝を測る。県内で宝塔が遺構から出土した事例はなく、石造物研究に良好な資料と考える。

獣骨は馬の下顎で、左第３後臼歯である。

全体的に時期ごとの遺物量、時期幅があり、特にどの時期にも偏っていないことから溝の機能していた時期は特定できない。ただ上限は７世紀に遡り、下限は12世紀と考えられる。

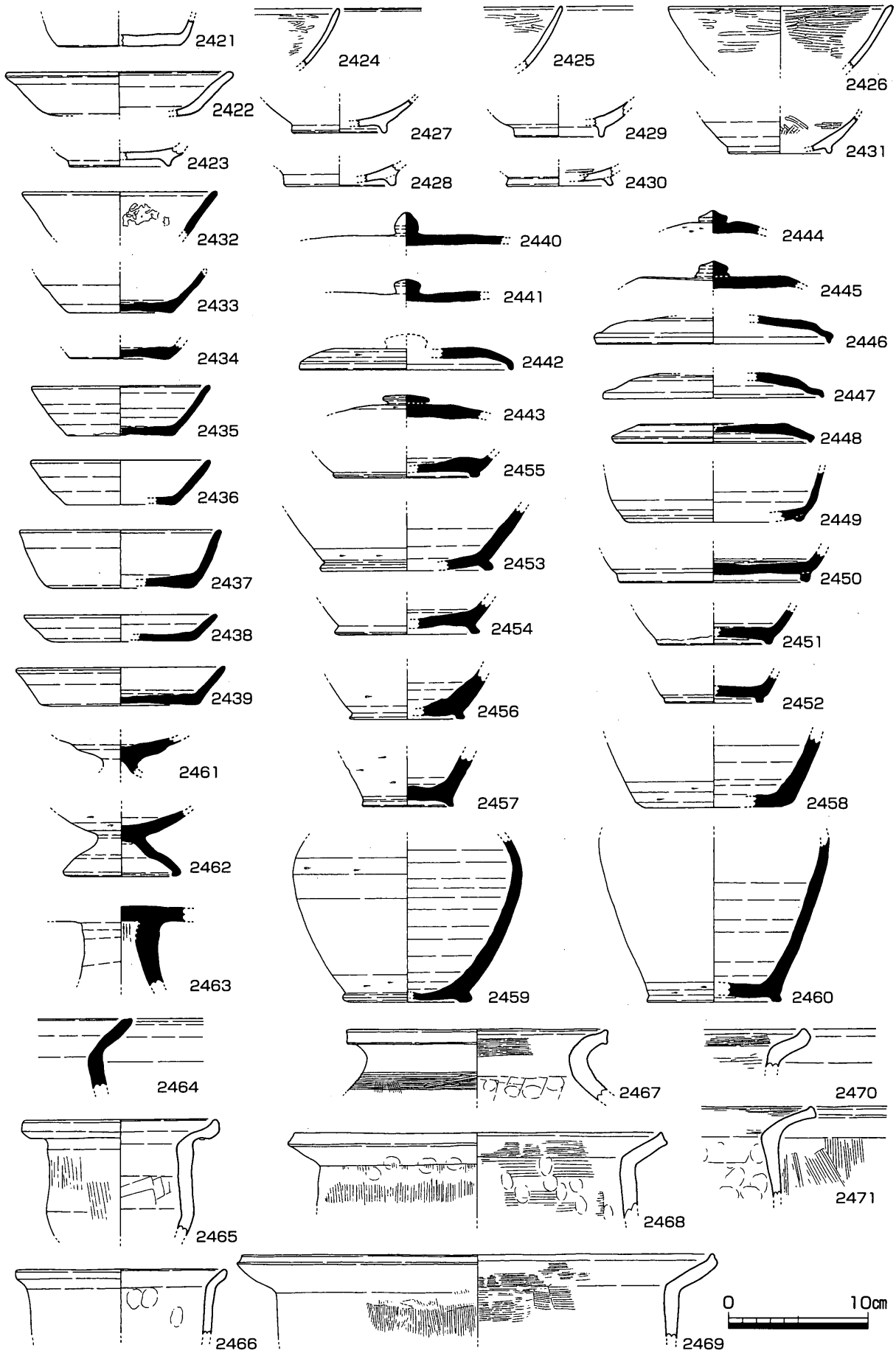
### ＳＤ6170

ＳＤ6170は第Ⅳ－４調査区（Ｂ－72・73）で検出した溝状遺構である。調査区南部で、東西に長く延び、ＳＤ6128によって部分的に切られている。土層断面（ｑ－ｑ´）でみると、ＳＤ6128との関係は不明であるが、新しい溝状遺構からＳＤ6164→ＳＤ6170→ＳＲ626となることが解る。ＳＤ6170は平成７年度の第Ⅴ－３調査区で検出したＳＤ702と同一の溝である。

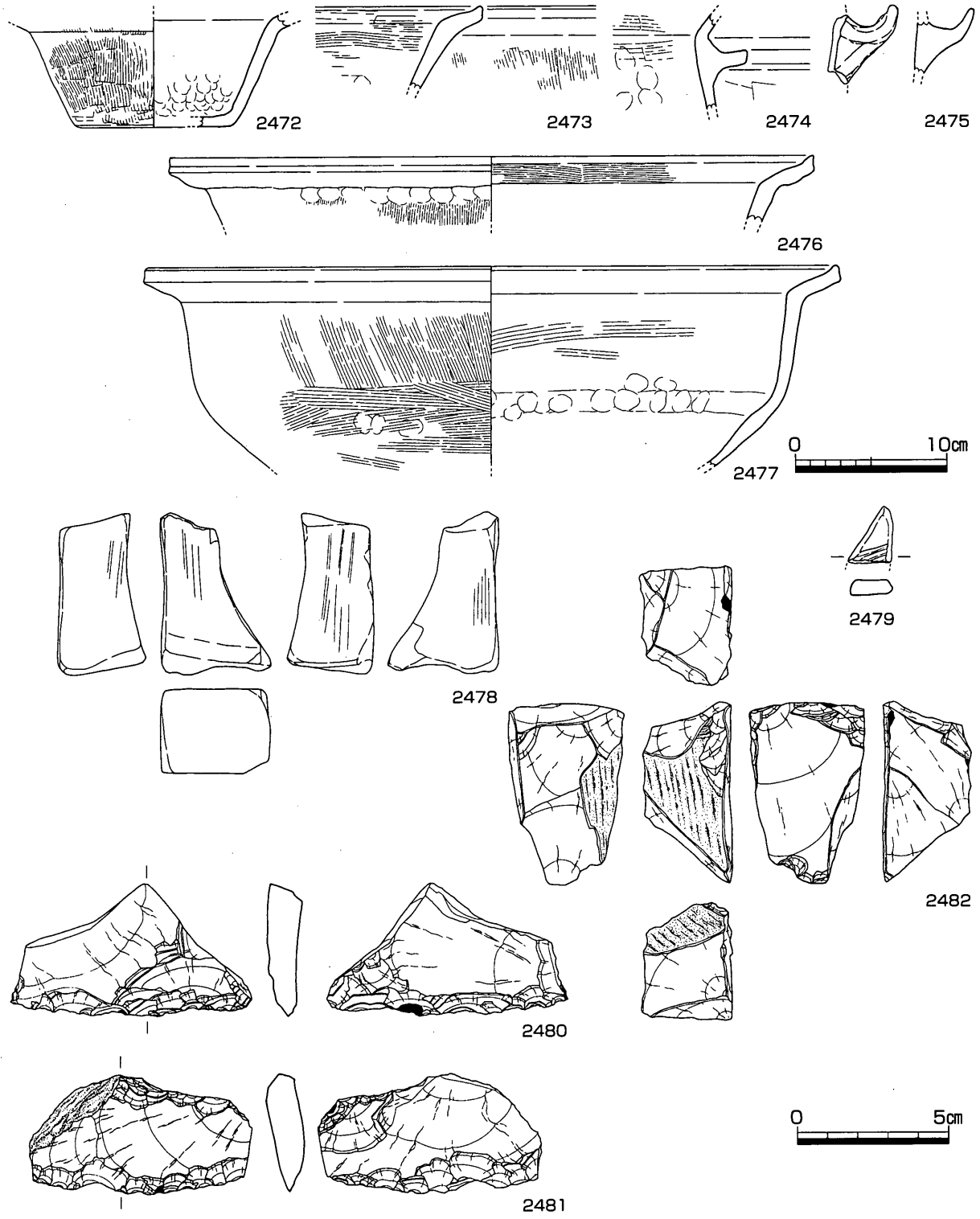
第Ⅴ－４調査区では遺構面を３面検出し、第１遺構面でこの溝状遺構を検出している。流路方向はほぼ西－東（Ｎ－85.5°－Ｗ）をとり、規模は最大幅約2.55m、深さ約0.29m、検出長約28.0mを測る。第Ⅴ－３調査区も含めると検出長は約110.0mを測る。溝内堆積土は土層（ｑ－ｑ´）で第２・３層の２層となり、上層が灰褐色小礫・粗砂混じり砂質シルト層、下層が淡褐灰色小礫混じり粗砂層で、第Ⅴ－３調査区で検出したＳＤ702と検出幅、堆積土質、流路の方向等から見ても同一の溝を裏付けている。

溝内堆積土より土師器、土師質土器、須恵器、鞴の羽口、石製品が出土している。

土師器は土師器坏、椀と黒色土器椀が出土している。土師器坏は体部が上方に立つもの、緩やかに開くものがある。2424～2431は内面に炭素を吸着させた黒色土器Ａ類椀で、体部の器厚が均一




第168図　ＳＤ6170出土遺物実測図①




第169図　ＳＤ6170出土遺物実測図②

で、薄く作られており、やや内湾するが直線気味に外上方に延びる。底部には断面方形のしっかりした高台が付く。時期は９世紀末～10世紀前半である。

須恵器は坏、皿、高台付坏身・蓋、壺が出土している。2432～2437は須恵器坏である。2432～2436の体部は薄く、やや開き気味に外上方に延びる。時期は９世紀後半～10世紀初頭と考えられる。2437は直立気味に延びるもので、やや器壁は厚く作られている。時期は８世紀後半～９世紀前

半と考えられる。2438・2439は須恵器皿で、口径が14cm前後の中型の皿である。時期は９世紀頃と考えられる。2440～2448は須恵器坏蓋である。天井部に付くつまみの形態には宝珠形のものから扁平になったものまでがある。天井部は緩やかに盛り上がるものから平たく、ヘラ切りの痕跡が確認できるものまである。口縁端部の形態は明確に下方に屈曲し、屈曲部に稜をもつもの、緩やかに下方に屈曲するものがある。このように坏蓋はその細部に様々な形態差を持ち、それに時期差を確認する。時期は８世紀～９世紀前半と考えられる。2449～2452は須恵器高台付坏である。底部端に断面方形の高台付く。時期は８世紀後半～９世紀前半と考えられる。2453～2460は須恵器壺である。底部に高台が付くもの平底のものがあり、時期は８世紀後半～９世紀前半と考えられる。

2465～2477は土師質甕、長胴甕、鍋である。

2478～2482は石製品で、2478は流紋岩製の砥石である。

出土遺物には全体的に時期幅があり、特にどの時期にも偏っていないことから溝の機能していた時期は特定できない。ただ上限は８世紀後半に遡り、下限は10世紀前半と考えられる。第Ⅴ－３調査区で検出したＳＤ702でも同様に時期幅のある遺物が出土しており、ほぼ同じ時期に比定していることから、ＳＤ6170の時期を８世紀後半～10世紀前半とする。

### ５．自然流路跡

第Ⅴ－４調査区で検出した自然流路跡は総数２条（ＳＲ625・626）で、第２遺構面で検出している。２条ともに流路跡は南東から北西に流路を取る。

### ＳＲ625

ＳＲ625は第Ⅴ－４調査区（Ａ・Ｂ－72）で検出した自然流路跡である。流路方向は地形の傾斜方向である北西－南東（Ｎ－42°－Ｗ）をとる。流路自体はかなり蛇行しており、途中からＳＲ626が分岐する。

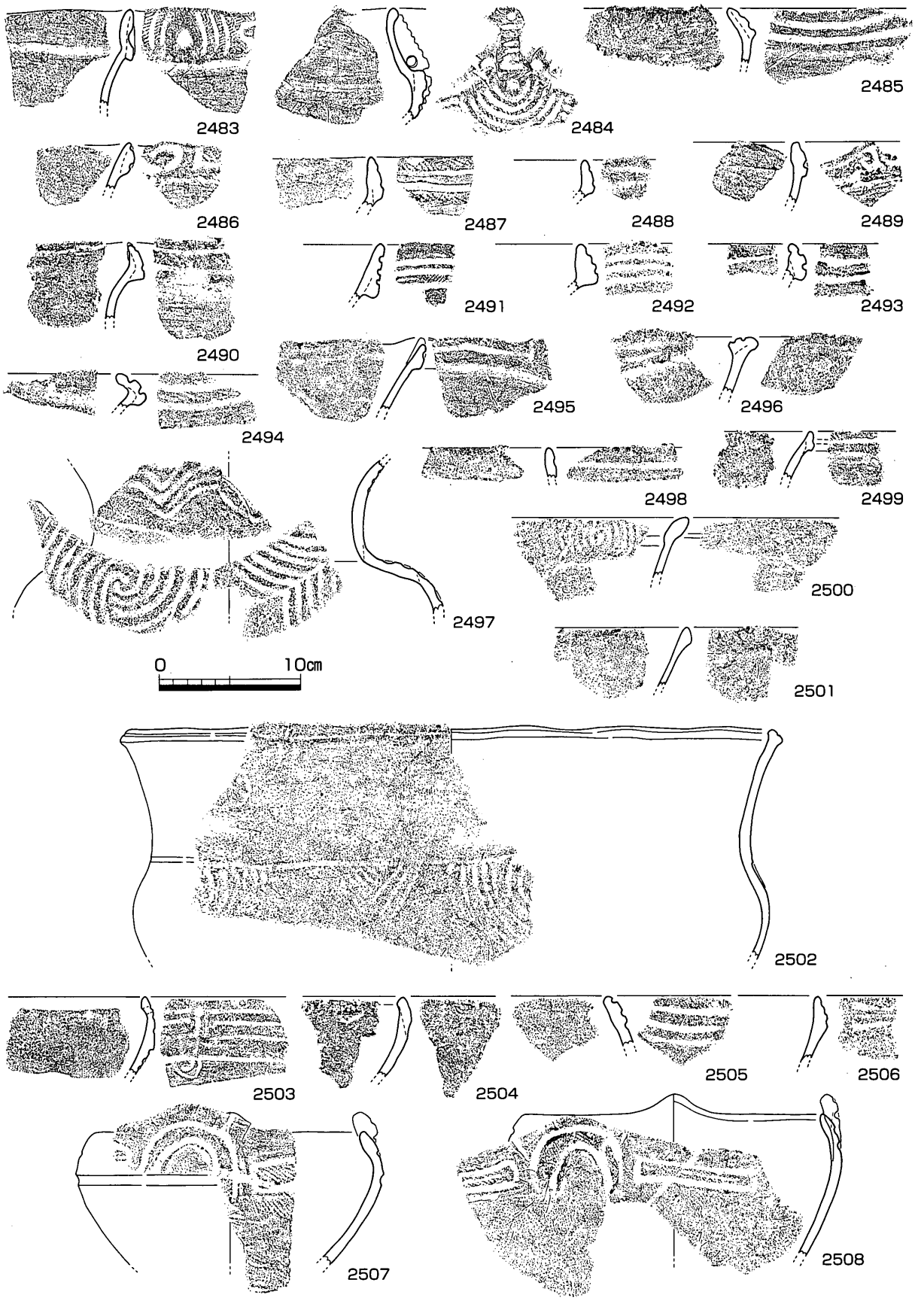
この自然流路跡は土層断面（第149図　柱状図⑲）の土層第８層が第１・２面の基盤層で、その上部から掘削されている。断面は上部が緩やかに開く「Ｕ」字状を呈している。規模は最大幅約3.50ｍ、深さ約1.08ｍ、検出長約46.0ｍを測る。

自然流路の堆積土は土層（ｒ－ｒ´）で８層、土層（ｓ－ｓ´）で11層となり、堆積土はシルト層と細砂・粗砂層の互層となる。

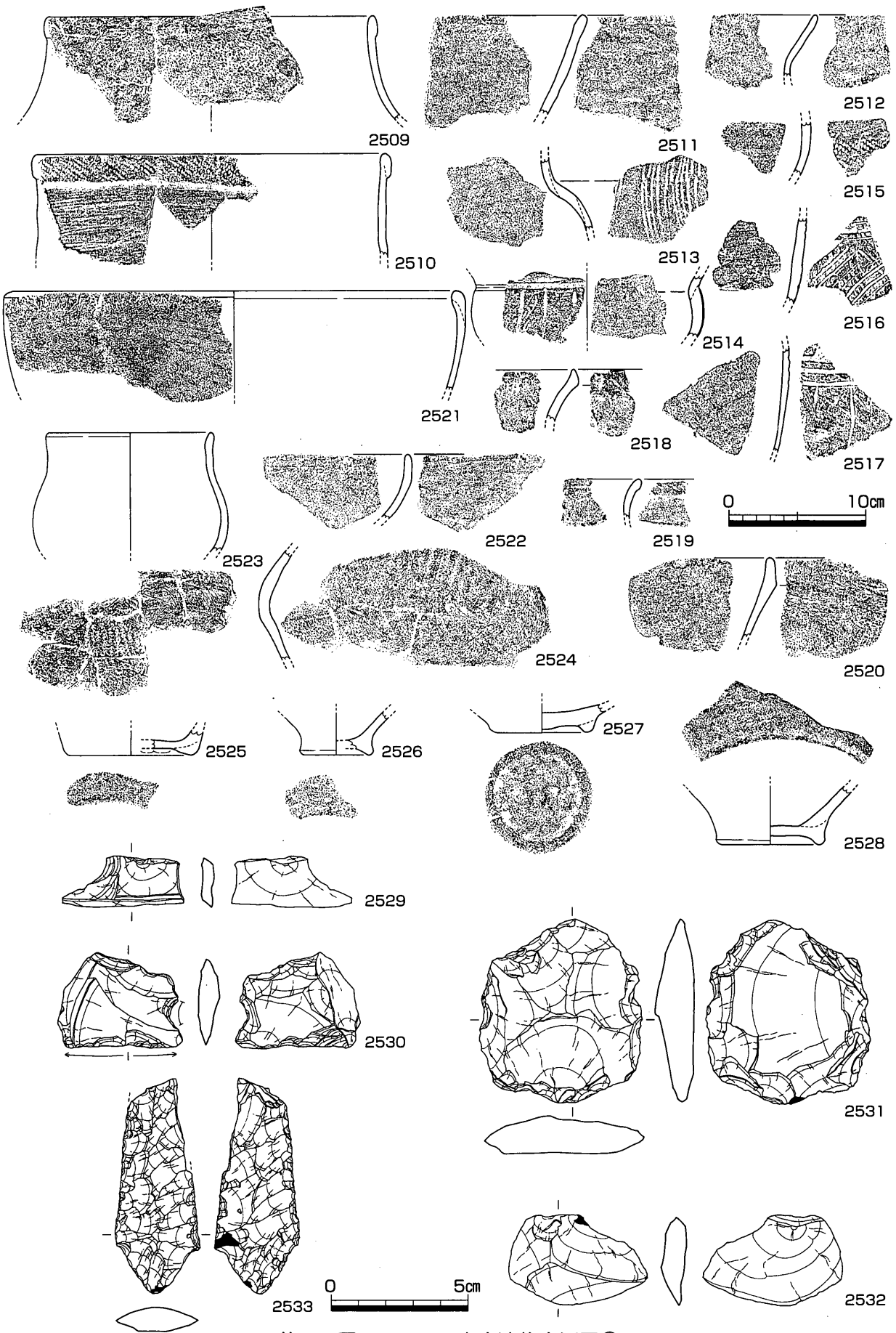
自然流路跡から多量の縄文土器、石製品が出土している。

縄文土器は深鉢と浅鉢がある。深鉢には体部と頸部の境に屈曲部が明瞭に認められ、外反する頸部から口縁部外側が主として肥厚し、肥厚した外面に沈線及び縄文を施す有文深鉢、所謂縁帯文土器や口縁部に縄文を施すのみで、それ以外は無文の深鉢がある。また少量ではあるが口縁部内側を肥厚させる深鉢もあり、同心円文様の沈線を施す。

有文深鉢の文様は口縁部外面に主として２条の沈線を施し、３条の沈線や同心円文様などの沈線を施す場合は肥厚の幅が広い。逆に１条の沈線の場合は狭く、縄文の場合も同様に狭い。頸部外面には有文と無文があり、2497の頸部外面には３条一単位で波状の沈線が施されている。また体部外面には渦巻状、矢羽状、鋸歯文状の沈線が施されている。2484は口縁部が波状口縁の有文深鉢で波頂部外面中央を突出させ、外面に６条の沈線を、突出部上端に刺突文、下位には刺突文を中心とし




第170図　ＳＲ625出土遺物実測図①




第171図　ＳＲ625出土遺物実測図②

て同心円文様の沈線を施す。その同心円文状の左右には３個程度の刺突文を施し、更に数条の沈線が施されているものと思われる。

浅鉢は体部がボール状を呈し、口縁部外側を肥厚させ、口縁部外面に沈線及び縄文を施す有文浅鉢がある。

有文浅鉢の文様は口縁部外面を肥厚させ、その外面に２～３条の沈線で構成される。2508は口縁部が内湾し、口縁部外側を肥厚させ、外面に沈線で長方形の区画を作り、その区画の中央に沈線を施すことで３条の沈線となる。区画端と区画端の間の上部に穿孔を施す。また口縁部外面の肥厚下に沈線を、区画間部分の沈線下位に小さい同心円文様の沈線を施す。2507・2508は口縁部が波状口縁の有文浅鉢で、波頂部外面に２条の同心円文様の沈線を施し、左右に沈線で長方形の区画された文様を施す。それぞれ沈線間及び沈線下部には縄文が施されている。

底部は高台状を呈する。

これらの縄文土器は口縁部外側を肥厚させる縁帯文土器であり、外面に施される沈線が同心円文様を中心とした曲線的文様であることから津雲Ａ式とする。

石製品は全てサヌカイト製で、2533は有舌尖頭器である。

時期は縄文土器が津雲Ａ式であることから、縄文時代後期前半と考えられる。

### ＳＲ626

ＳＲ626は第Ⅴ－４調査区（Ｂ－72・73）で検出した自然流路跡で、ＳＲ625の南部西側から派生する。平面検出時及び土層的にも切り合い関係は確認できず、同一の自然流路が２条になったものである。流路方向は北西－南東（Ｎ－73°－Ｗ）を取る。

この自然流路跡は土層断面（第149図　柱状図⑲）の土層第８層が第１・２遺構面の基盤層で、その上部から掘削されている。断面は上部が開き、下部が尖り気味の「Ｖ」字状を呈している。規模は最大幅約3.85m、深さ約0.98m、検出長約22.0mを測る。

自然流路は土層（ｑ－ｑ´）でみるとＳＤ6170によって切られており、堆積土は第８～14層の７層となり、堆積土はシルト層と細砂・小礫層の互層である。

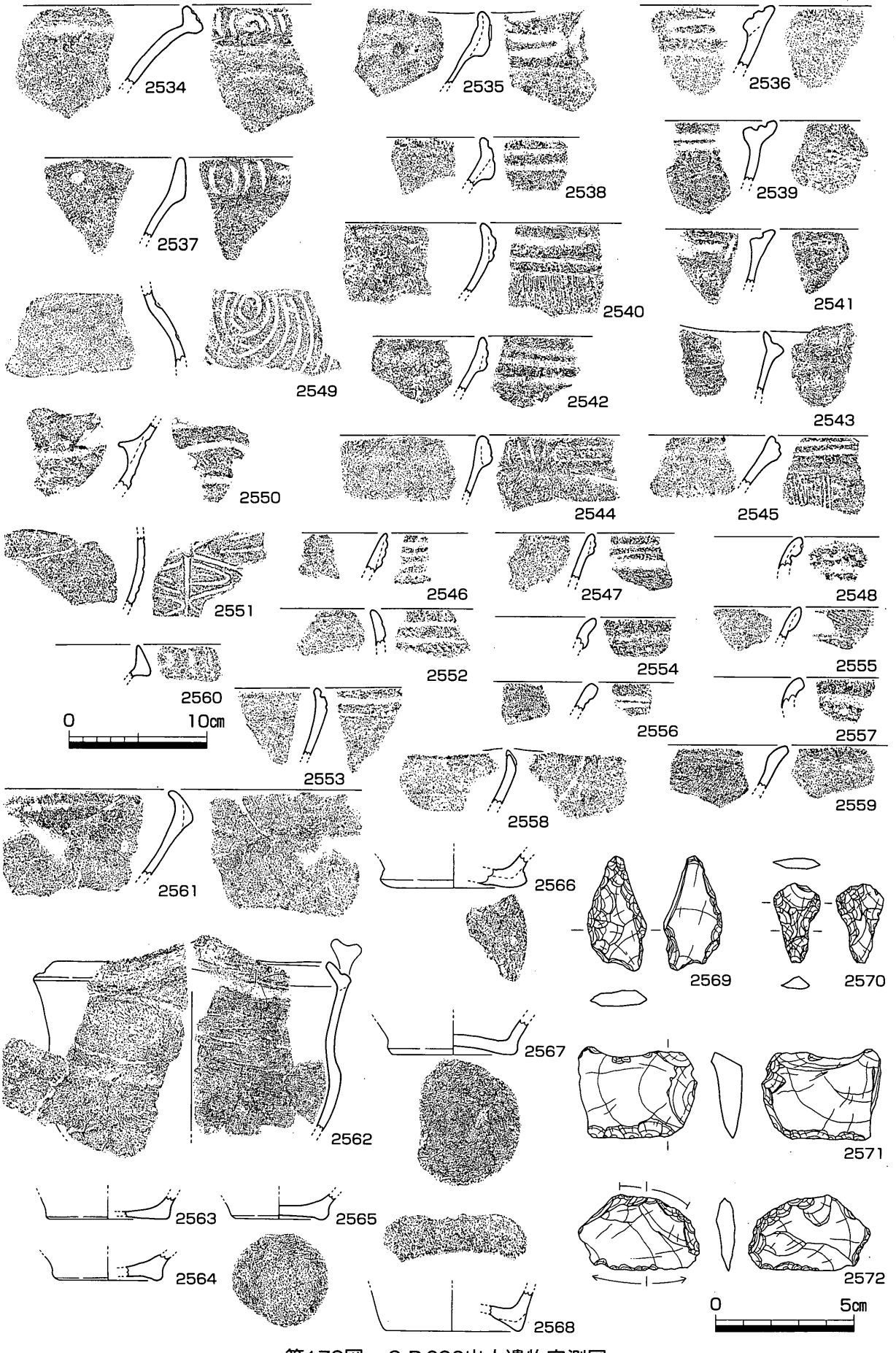
自然流路跡から縄文土器、石製品が出土している。

縄文土器は深鉢と浅鉢がある。深鉢には体部と頸部の境に屈曲部が認められ、外反する頸部から口縁部外側が主として肥厚し、肥厚した外面に沈線及び縄文を施す有文深鉢、所謂縁帯文土器や口縁部が無文のものがある。また少量ではあるが口縁部内側を肥厚させる深鉢もあり、２条の沈線を施す。

有文深鉢の文様は口縁部外面に主として２条の沈線を施し、部分的に同心円文様などの沈線が施されている。１条の沈線の場合は狭く、縄文の場合も同様に狭い。頸部外面には有文と無文があり、2540・2545の頸部外面には縦方向のヘラ描き沈線が数条施されている。また体部外面には同心円文様、縦方向の波状文様の沈線が施されている。2562は口縁部が波状口縁の深鉢で、肥厚した口縁部外面に１条の沈線のみが施され、ＳＲ625出土遺物で見られた波頂部外面の文様はない。

浅鉢は体部がボール状を呈し、口縁部外側を肥厚させ、口縁部外面に沈線及び縄文を施す有文浅鉢がある。

有文浅鉢の文様は口縁部外面を肥厚させ、その外面に２条の沈線で構成される。




第172図　ＳＲ626出土遺物実測図

底部は高台状を呈するものと平底状を呈するものとがある。

これらの縄文土器は口縁部外側を肥厚させる縁帯文土器であり、外面に施される沈線が同心円文様を中心とした曲線的文様であることからＳＲ625出土遺物と同様に津雲Ａ式とするが、ＳＲ625出土遺物に比べると口縁部外面の３条の沈線がかなり少ないこと１条の沈線、縄文のみのものなどが多いことから彦崎Ｋ１式の要素もあり、また遺構の切り合い関係が認められないことから同一時期とし、彦崎Ｋ１式の時期とするのか、時期幅がある遺物なのかの判断はここでは避けるものとする。

石製品は全てサヌカイト製で、石鏃の未製品、石錐、スクレイパー等が出土している。

時期は縄文土器が津雲Ａ式、彦崎Ｋ１式であることから、縄文時代後期前半と考えられる。

## ６．不明遺構

第Ｖ－４調査区で検出した古代の不明遺構跡は総数３基で、概ね北東部に集中する。

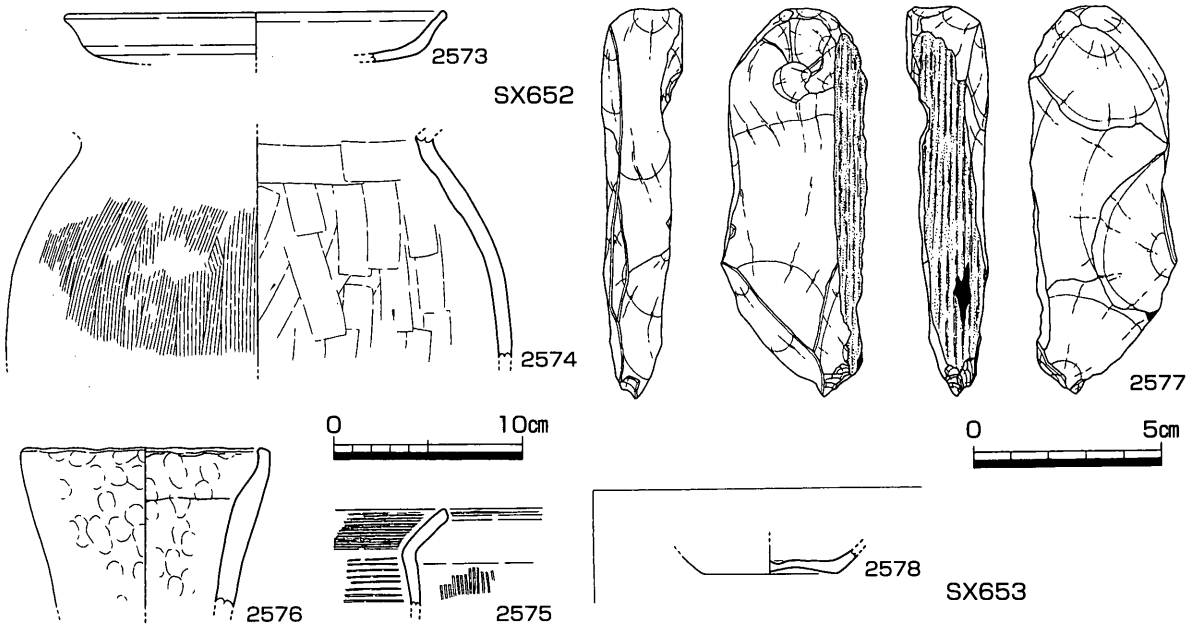
### ＳＸ652

ＳＸ652は第Ｖ－４調査区（Ａ－71）北東部で検出した。ＳＢ604と重複しているが、ＳＢ604の北東隅の柱穴が、撹乱で消滅していることから、検出状況からの前後関係は不明である。平面形態は不定形を呈し、最大幅約3.7m、検出面からの深さ約0.16mを測る。断面形態は浅い窪み状を呈し、黒色小礫混じり粗砂層が堆積する。

堆積土から土師器皿、土師質土器甕、製塩土器、石製品が出土している。

土師器皿は庭部から緩やかに体部となり、外反しながら外上方に延びる。口縁端部は内方に僅かに屈曲させ、口縁端部内面に窪みを持たせる。底部は手持ちヘラケズリが施されている。

製塩土器は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部を内方に屈曲させる。内外面に指頭痕が顕著に認められ、口縁部内面には横方向に指ナデが施されている。内面に布目の痕跡は確認できない。




第173図　ＳＸ652・653出土遺物実測図

器壁は約１cmと厚く作られ、胎土には0.5～２mm程度の石英・長石を多量に含んでいる。

時期は出土遺物より８世紀と考えられる。

### ＳＸ653

ＳＸ653は第Ｖ－４調査区（Ａ－72）北東部で検出した。ＳＢ604・605と重複し、それぞれの掘立柱建物を構成するＳＰ61262がＳＸ653によって切られていることが解る。平面形態は楕円形を呈し、西側では溝状に西方向に延びる。楕円形部分は南北約3.3m、東西約2.5m、検出面からの深さ約0.2mを測り、溝部分は検出長約４mを測る。断面形態は浅い窪み状を呈し、黒色小礫混じり粗砂層が堆積する。

土坑内から土師器坏が出土している。

土師器坏は底部がヘラ切りで、体部は直線的に外上方に延びる。

出土遺物より時期は10世紀前半と考えられる。

## ７．包含層

包含層出土遺物として図化したものは第Ｖ調査区全体（Ｖ－１・２・４区）において機械掘削時、遺構面精査段階で出土したものである。

遺物には土師器、瓦器、須恵器、土師質土器、緑釉陶器、弥生土器、縄文土器、石製品があり、時期は古代（７世紀、８世紀、10世紀、12世紀）、縄文時代晩期と概ね検出遺構と同時期のものである。出土傾向としては縄文時代の遺物は主として第Ｖ－１・２調査区から、古代の遺物は主として第Ｖ－４調査区から出土している。

2579～2581は瓦器椀で、底部に断面方形で、外方向に踏ん張る高台が付く。口縁部外面には横ナデが、体部外面には指頭痕が、内面にはヘラミガキが施されている。形態・調整の特徴から和泉型瓦器椀で、Ⅱ－３期あるいはⅢ－１期と考えられる。

2583～2586は黒色土器椀で、全て内面のみに炭素を吸着させたＡ類である。

2587～2589は須恵器坏である。2587・2589は器壁が薄く、体部はやや外方に開く。全て底部はヘラ切りされている。時期は９～10世紀前半と考えられる。

2592～2594は緑釉陶器である。2592はやや浅い椀で、口縁部はやや外反する。焼成は軟質焼成で、釉調は黄緑色である。2593は底部が削りだしの平高台の椀で、焼成は硬質焼成され、釉調は暗緑色である。内面にはヘラミガキが施され、内底面にはトチンの痕跡も確認できる。底部外面に線刻が認められる。2594は底部が削りだしの平高台の椀で、焼成はやや軟質焼成され、釉調は淡黄緑色である。全て畿内産と考えられ、時期は９世紀後半頃と考えられる。

2598～2601は土師器坏、皿、高台付坏である。2601は土師器皿で、口縁部がやや外反させ、端部を内方に曲げ、内面を沈線状にする。内底面には連結輪状のヘラミガキが施されている。2602は土師器高台付坏で、底部端に外方に踏ん張る高台を持ち、体部は下位を内湾させ、上位を外反させ、端部を内方に曲げ、内面を沈線状にする。口縁部内面に斜め方向の細いヘラミガキが施されている。

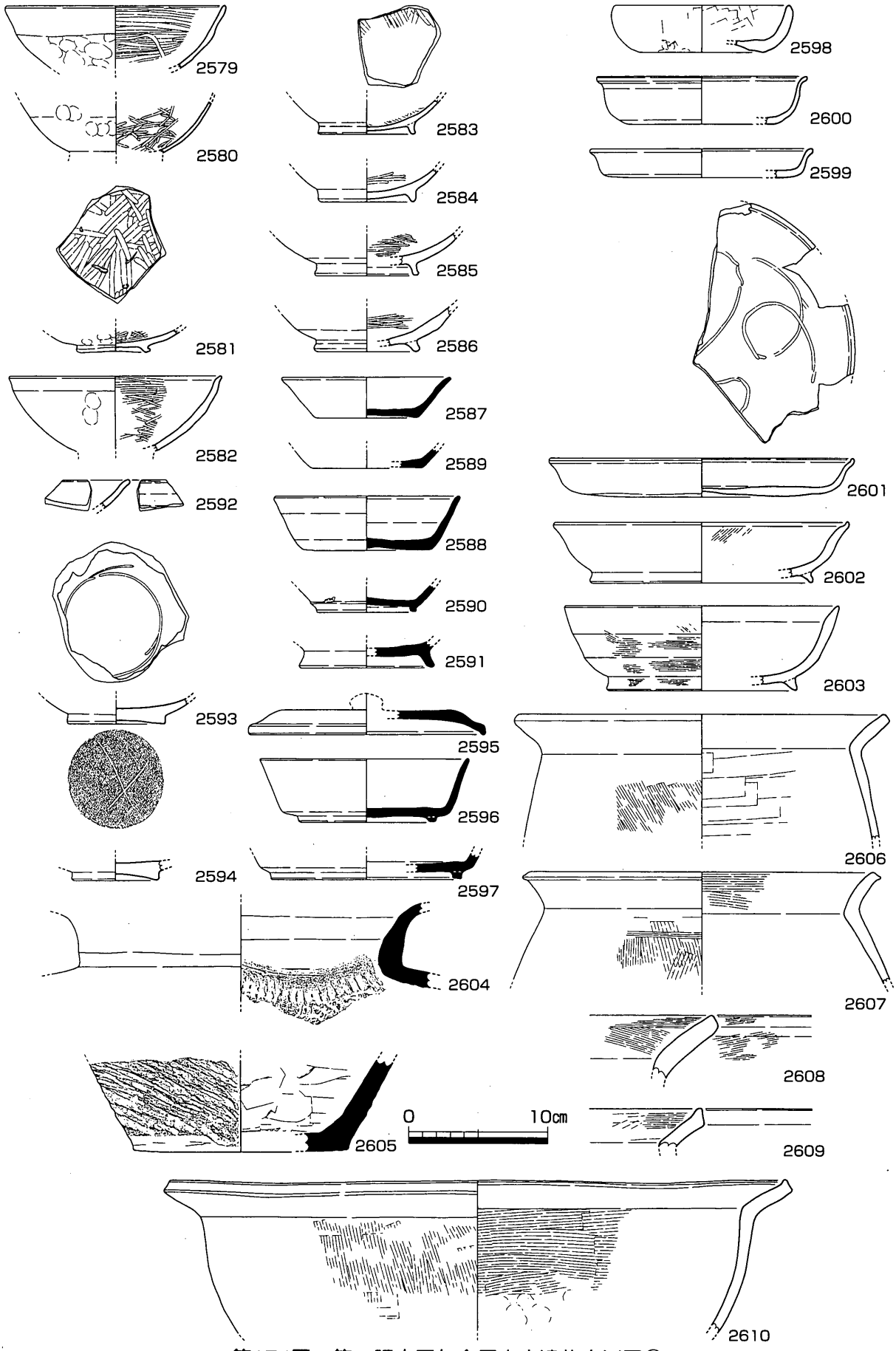
2590・2591・2595～2597は須恵器高台付坏、蓋である。底部に断面方形の高台が付き、体部は直線的に外上方に延びる。時期は８世紀と考えられる。

2604・2605は須恵器甕である。2605は底部が平底で、体部外面に右下がりの格子目叩きが施されている。

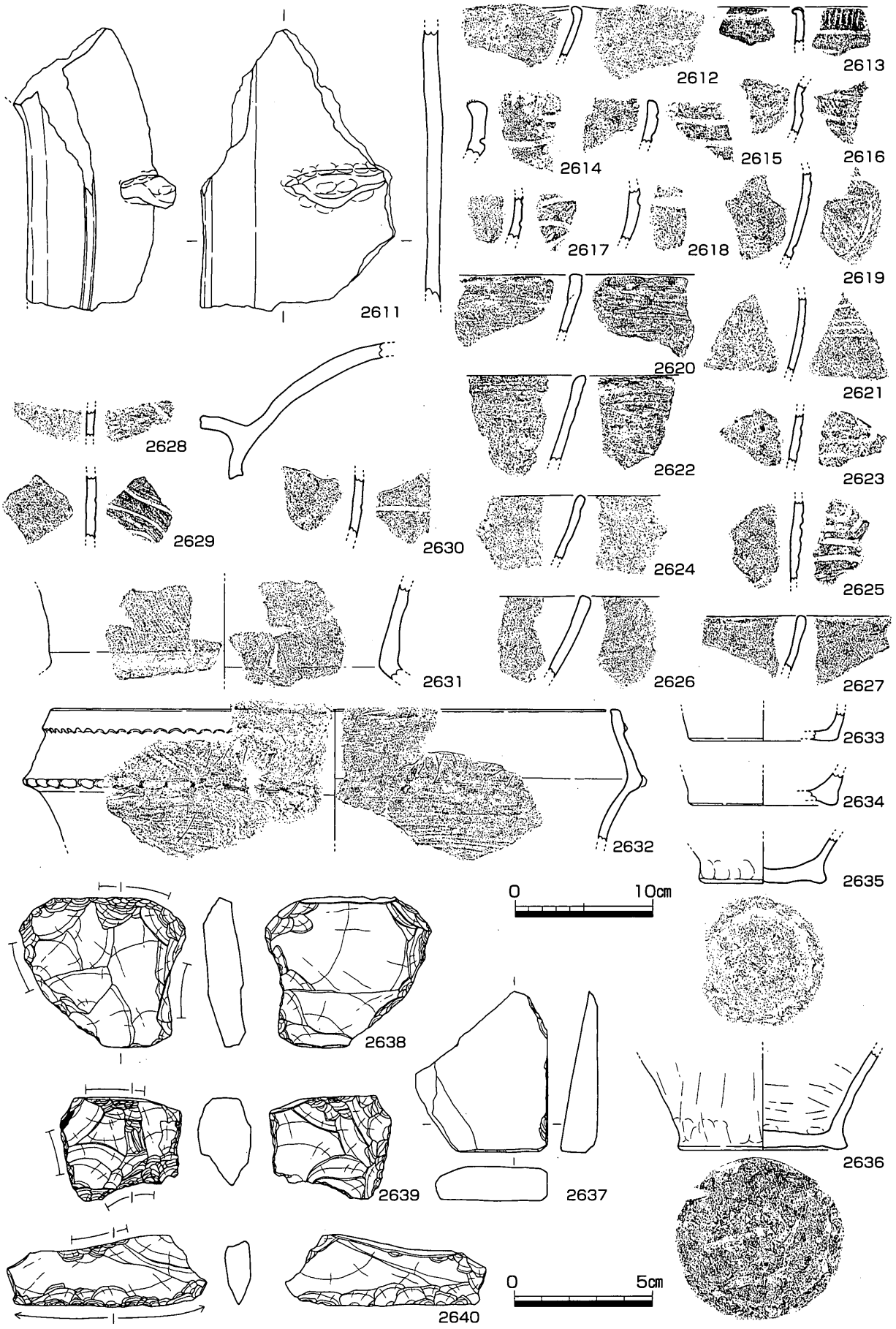
2606～2611は土師質の甕、鍋、移動式竈である。

2612～2636は縄文土器である。有文深鉢、有文浅鉢、無文深鉢がある。明確な縁帯文土器は出土しておらず、無文の土器が中心である。

2637～2640は石製品である。




第174図　第Ⅴ調査区包含層出土遺物実測図①




第175図　第Ⅴ調査区包含層出土遺物実測図②

# 第４章　自然科学的分析

## 小山・南谷遺跡の古植生について

パリノ・サーヴェイ株式会社

### １．はじめに

香川県高松市新田町小山～高松町南谷に所在する小山・南谷遺跡は、高松平野北東部縁辺から低丘陵に挟まれた谷部に立地する。高松城下に対して「古高松」と呼ばれたこの地域は、江戸時代初期の干拓以前は湾が深く入り込んでいたとみられ、弥生時代から古墳時代の遺跡が山麓・丘陵地に集中する。今回の発掘調査においても、縄文時代後期の落とし穴、弥生時代後期前半の集落跡、中世の柱穴などが確認されているが、主体は弥生時代後期前半である。

本報告では、縄文時代後期の堆積物において花粉分析を実施し、古植生に関する情報を得ることを目的とする。

### ２．試料

試料は縄文時代後期の自然流路（ＳＲ626）堆積物から６点である。

**第２表　分析試料一覧**

| 番号 | 地点名 | 層名 | 土質 | 時代 |
|---|---|---|---|---|
| ① | ＳＲ626 | ８層 | 褐灰色砂質シルト | 縄文時代後期 |
| ② | ＳＲ626 | ９層 | 黒褐色小礫混り砂質シルト | 縄文時代後期 |
| ③ | ＳＲ626 | 10層 | 褐灰色粗砂混り小礫 | 縄文時代後期 |
| ④ | ＳＲ626 | 11層 | 黒褐色砂質シルト | 縄文時代後期 |
| ⑤ | ＳＲ626 | 11層 | 黒褐色砂質シルト | 縄文時代後期 |
| ⑥ | ＳＲ626 | 13層 | 暗灰色細砂混り粘質シルト | 縄文時代後期 |

### ３．花粉分析の方法

試料約５～11ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数する。

結果は、出現個体数の一覧表に表示する。また、木本花粉が100個体以上検出された試料については、百分率で出現率を算出し花粉化石組成図として表示する。出現率の算出は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数として用いた。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。なお、総数が100個体未満の試料は、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるため出現した種類を＋で表示する。

## 4．結果

結果を第３表・第176図に示す。

自然流路ＳＲ626から採取した試料内の花粉化石の保存状態は悪く、ＳＲ626の試料⑥を除いて統計的に扱えるだけの花粉化石が検出されなかった。

ＳＲ626の試料⑥でも花粉化石の保存状態はあまり良好ではない。花粉化石群集の特徴は、木本花粉ではコナラ属アカガシ亜属の出現率が高く、コナラ属コナラ亜属・ニレ属－ケヤキ属などを伴う。マツ属・モミ属・ツガ属・スギ属などの針葉樹も高率に出現する。草本花粉ではイネ科とヨモギ属の出現率が高いが、その他は種類数も個体数も少ない。

## 5．考察

花粉化石組成から植生について考察する。

縄文時代後期頃には、アカガシ亜属を中心とした暖温帯性の常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）が存在していたことが推定される。マツ属・コナラ亜属・ニレ属－ケヤキ属なども当時の森林を構成していたと考えられる。モミ属・ツガ属・スギ属などは、冷温帯と暖温帯の間に発達する中間温帯林（温帯針葉樹林）の構成要素であることから、遺跡の後背の山地などに分布していたと考えられる。

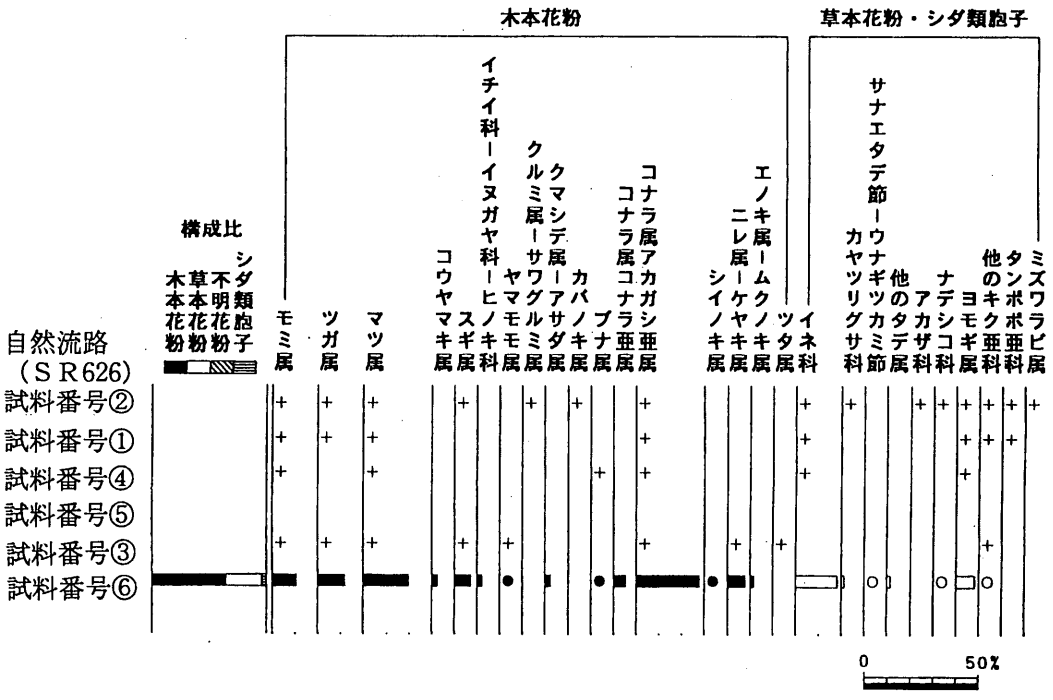
県内での縄文時代から弥生時代頃の花粉分析例としては、下川津遺跡での報告がある。それによれば、縄文時代晩期頃から弥生時代前期前半まではカシ類とナラ類による植生で、弥生時代前期前半から奈良時代にかけて中間温帯林要素の針葉樹が増加する傾向がみられる。（パリノ・サーヴェイ株式会社，1990）。今回の結果とは針葉樹の出現状況に違いがみられるが、これは中間温帯林の拡大時期の差ではなく、試料中の花粉化石の保存状態が悪いことから、比較的風化に強い針葉樹類の花粉が強調されて表現されたものと考えられる。

〈引用文献〉

パリノ・サーヴェイ株式会社（1990）下川津遺跡における花粉・珪藻分析委託報告．「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ　下川津遺跡　－第２分冊－」，p.479－518，香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団．

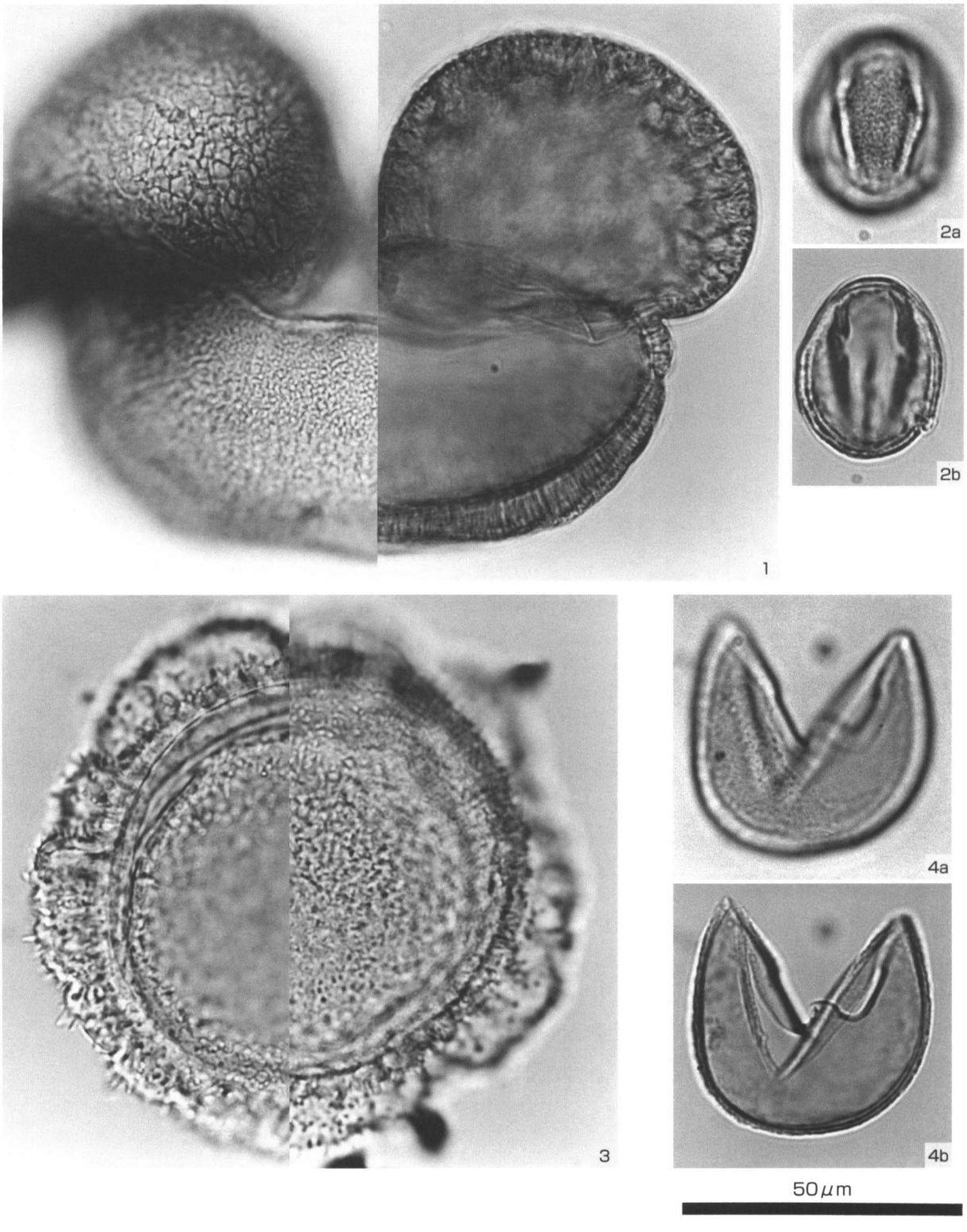
## 第3表　花粉分析結果

| 種類 ＼ 試料番号 | ② | ① | ④ | ⑤ | ③ | ⑥ |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 木本花粉 | | | | | | |
| モミ属 | 3 | 5 | 1 | - | 3 | 24 |
| ツガ属 | 10 | 2 | - | - | 9 | 27 |
| マツ属 | 23 | 6 | 1 | - | 4 | 45 |
| コウヤマキ属 | - | - | - | - | - | 6 |
| スギ属 | 4 | - | - | - | 1 | 16 |
| イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科 | - | - | - | - | - | 5 |
| ヤマモモ属 | - | - | - | - | 1 | 1 |
| クルミ属－サワグルミ属 | 1 | - | - | - | - | - |
| クマシデ属－アサダ属 | - | - | - | - | - | 5 |
| カバノキ属 | 1 | - | - | - | - | - |
| ブナ属 | - | - | 1 | - | - | 1 |
| コナラ属コナラ亜属 | - | - | - | - | - | 12 |
| コナラ属アカガシ亜属 | 19 | 13 | 1 | - | 5 | 63 |
| シイノキ属 | - | - | - | - | - | 1 |
| ニレ属－ケヤキ属 | - | - | - | - | 8 | 18 |
| エノキ属－ムクノキ属 | - | - | - | - | - | 4 |
| ツタ属 | - | - | - | - | 1 | - |
| 草本花粉 | | | | | | |
| イネ科 | 31 | 11 | 7 | - | - | 64 |
| カヤツリグサ科 | 1 | - | - | - | - | 4 |
| サナエタデ節－ウナギツカミ節 | - | - | - | - | - | 2 |
| 他のタデ属 | - | - | - | - | - | 5 |
| アカザ科 | 2 | - | - | - | - | - |
| ナデシコ科 | 2 | - | - | - | - | 1 |
| ヨモギ属 | 28 | 6 | 3 | - | - | 29 |
| 他のキク亜科 | 5 | 1 | - | - | 1 | 3 |
| タンポポ亜科 | 1 | 1 | - | - | - | - |
| 不明花粉 | | | | | | |
| 不明花粉 | - | - | - | - | - | 3 |
| シダ類胞子 | | | | | | |
| ミズワラビ属 | 1 | - | - | - | - | - |
| 他のシダ類胞子 | 28 | 9 | 2 | - | 31 | 16 |
| 合計 | | | | | | |
| 木本花粉 | 61 | 26 | 4 | 0 | 32 | 228 |
| 草本花粉 | 70 | 19 | 10 | 0 | 1 | 108 |
| 不明花粉 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 3 |
| シダ類胞子 | 29 | 9 | 2 | 0 | 31 | 16 |
| 総計（不明をのぞく） | 160 | 54 | 16 | 0 | 64 | 352 |



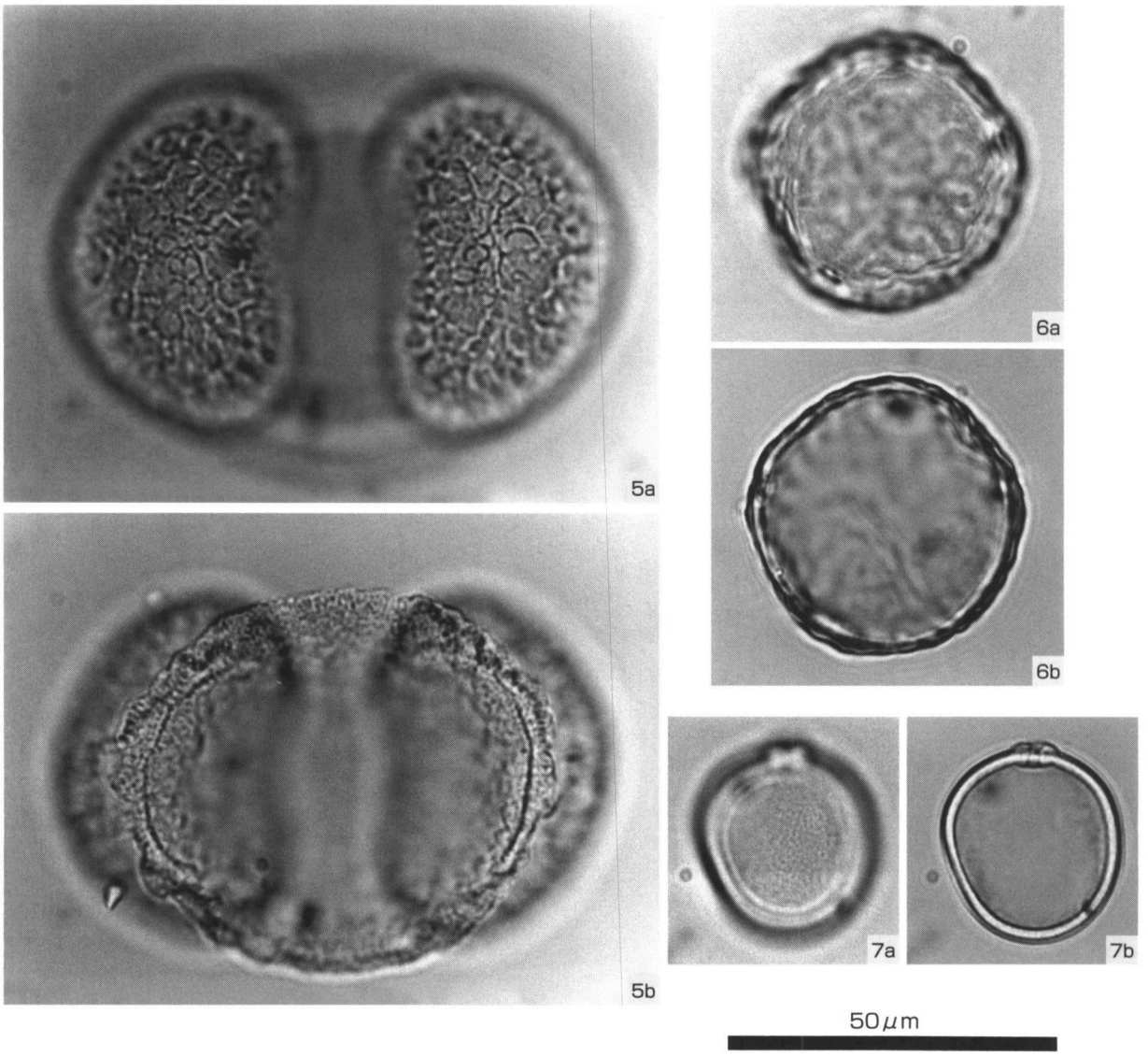

出現率は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものをそれぞれ基数とした百分率で算出した。なお、●○は１％未満、＋は木本花粉が100個体未満の試料において出現した種類を示す。

第176図　花粉化石組成




1.モミ属(SR626)
2.コナラ属アカガシ亜属（SR626）
3.ツガ属(SR626)
4.スギ属(SR626)

第177図　花粉化石（1）




5.マツ属(SR626)
7.イネ科(SR626)

6.ニレ属－ケヤキ属(SR626)

第178図　花粉化石（2）

# 第5章　まとめ

## 第1節　縄文時代の「落し穴」

### 1．落し穴について

日本列島で確認されている「落し穴」（国内の報告書等では「落とし穴」、「落し穴状遺構」、「陥とし穴」、「陥し穴」など様々な用語を使用しているが、ここでは全てを含み「落し穴」と統一し、使用する。）と思われる土坑は縄文時代の落し穴だけでも100万基を超えているものと佐藤氏は予想している(1)。

落し穴を使った狩猟、落し穴猟は後期旧石器時代（約3万年前）から現代まで行われており、後期旧石器時代では前半期後葉と細石刃期に特に盛行する。前半期後葉の落し穴は、関東・中部地方を中心に確認され、細石刃期になると九州から東北まで確認されるようになる。縄文時代になると落し穴は最も盛行し、平面形態も後期旧石器時代に円形中心だったものが、後期旧石器時代末の細石刃期から円形・楕円形・長方形など形態が徐々に多様となり、また柱穴等の底部施設も出現し、縄文時代に確立する。平面形態には東北日本を中心として溝型タイプがあるが、西日本では見られないようである。

落し穴の配置には2～3基を一単位とする組配列と列配列があり、列配列は後期旧石器時代から確認され、組配列は縄文時代前半期に盛行する。

註（1）

佐藤宏之　2004「日本列島の陥し穴猟」『第14回　九州縄文研究会鹿児島県国分大会』九州縄文研究会・南九州縄文研究会

### 2．小山·南谷遺跡の落し穴

#### （1）はじめに

第Ⅱ調査区中央部の弥生時代の遺構面となる基盤層上で、弥生時代以降の土坑と比べると土坑内堆積土と基盤層が近似し、土坑内から縄文土器しか出土しない土坑を総数16基検出した。

これらは第Ⅱ調査区中央部、東西約60m、南北約20m（調査範囲の関係で南北幅は厳密には不正確）の範囲で検出した。検出した土坑の形状は平面形態が隅丸方形・円形・長方形・楕円形を呈し、ＳＫ563は上面の形態が円形で、底面の形態が長方形を呈する特異なものもある。断面形態は概ね箱型を呈しているが、擂鉢状や不定形のもある。土坑底面には底部施設として直径20cm程度の柱穴、直径約7cm程度の杭穴が確認されており、土層断面から土坑内下位に堆積した土層上面から検出できるものと底面で検出できるものに分類できる。

検出した土坑の掘削・使用目的は貯蔵穴・落し穴などの可能性が考えられるが、

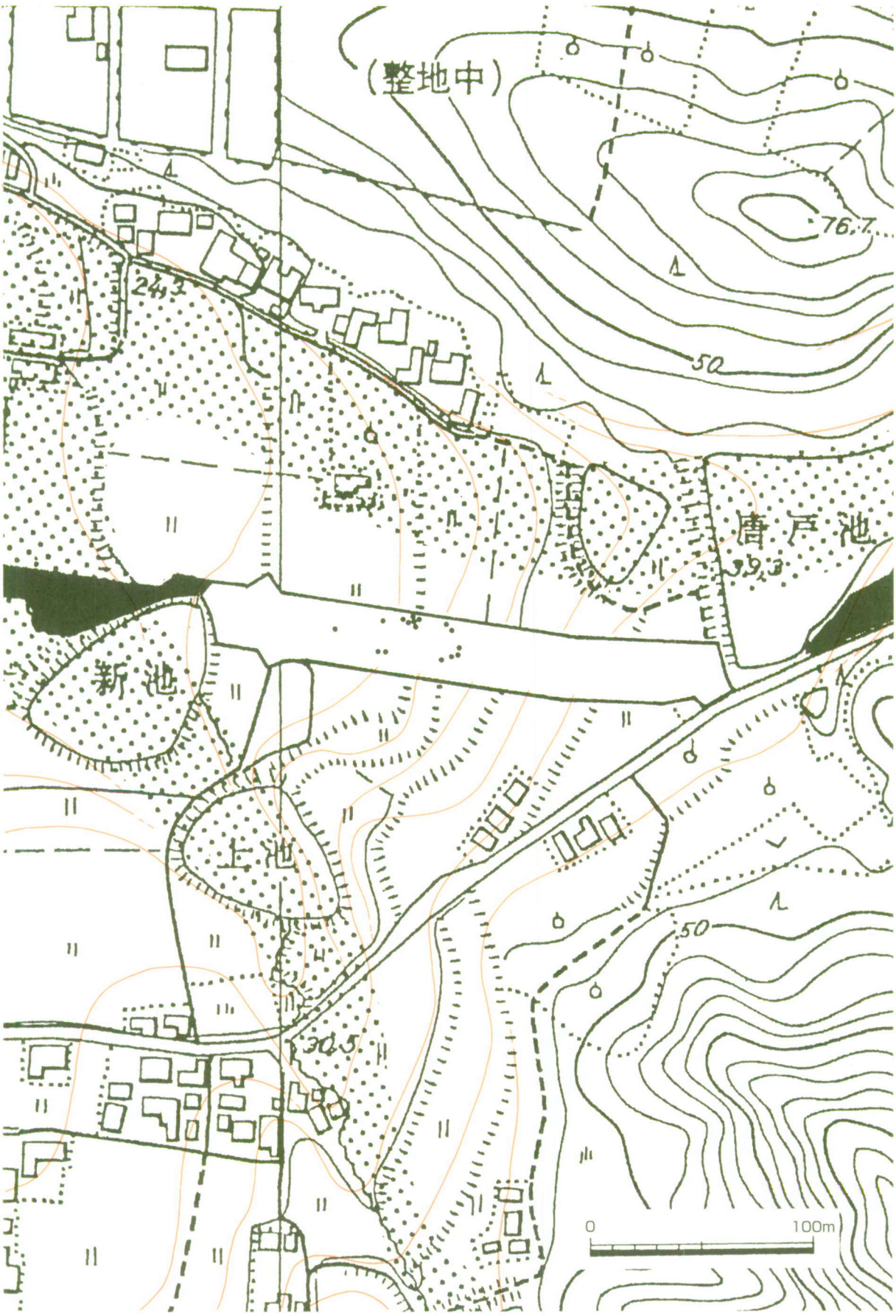
①近接して竪穴住居等の居住域としての遺構を検出していないこと

②上面の形態と底面の形態が違う土坑があること

③底部施設として杭状の柱穴が不規則に多数確認できる土坑もあること

などから、小山・南谷遺跡で検出した16基の土坑は全て落し穴（これ以降落し穴ＳＫ●●と呼称する）と判断した。

#### （2）立地




第179図　落し穴配置図

第Ⅱ調査区中央部で検出した落し穴を地形的な観点、現地形からの旧地形復元の結果及び遺構検出面での地形から検出位置をみるとちょうど南東方向にある丘陵から延びる傾斜（南東方向から北西方向へ傾斜）が、東から西への傾斜へと変わり、その傾斜方向の変化と共に傾斜角度も約３ｍで約30cmから約３ｍで約20cmと僅かではあるが緩やかになる。その傾斜の変換点、丘陵先端から平地への変換点の西側に集中していることが解る。

また、旧地形復元からみると落し穴を検出した部分はちょうど唐池→唐戸池→唐戸下池→長尾池→新川に至る旧流路部分の南側に位置する。

巨視的にみると北側には立石山山塊からほぼ北西に延びる丘陵が唐池・唐戸池北側でいったん低く、狭くなり、更に西に延びる独立丘陵がある。南にはウラ谷池→上池→新池→長尾池に延びる旧流路、この２つの旧流路に挟まれた部分には立石山山塊から北西に延びる丘陵があり、その先端部付近で16基の落し穴を検出したことになる。

このことから当遺跡で検出した落し穴は緩傾斜の平野部から丘陵になる変換点で、北側と南側に丘陵・旧流路に挟まれた部分に立地していることが解る。

（３）配置

16基の落し穴は一箇所に纏まっているわけではない。調査区内という限定された範囲内での検出であるために南北の広がりについては不明であるが、東西については約60mの範囲で検出した。南北の範囲に制約はあるものの、これらは大別すると６つのグループに分けられる。仮に西グループから東→南へとＡ～Ｆグループとする。

各グループ間の距離はＡグループとＢグループ間が約20m、ＢグループとＣグループ間が約８m、ＣグループとＤグループ間が約11m、ＤグループとＥグループ間が７m、ＥグループとＦグループ間が23mと、それぞれのグループは約７～23mの間隔を開けて構成されている。

それぞれのグループはＡ･Ｂグループ１基、Ｃグループ６基、Ｄグループ２基、Ｅグループ４基、Ｆグループ２基と、それぞれが落し穴１～６基、主として複数基で構成される。その内複数基あるグループのそれぞれの落し穴間の距離はＣグループが約１～２ｍの間隔で約８ｍの範囲内に、Ｄグループが約２ｍの間隔で約４ｍの範囲内に、Ｅグループが約１～４ｍの間隔で約12mの範囲内に、Ｆグループが約３ｍの間隔で約６ｍの範囲内で検出している。

このようにそれぞれのグループは約７～23mの間隔を開け、各グループは複数基の落し穴で、それぞれの落し穴間が約１～４ｍ間隔の約10m前後の範囲に纏まるように配置されていることが解る。

（４）形態分類

落し穴は検出面の平面形態が、長方形・隅丸方形・楕円形・円形と４形態あり、底面での形態も検出面の平面形態と同じものと形を異にするものが認められる。また、底部施設についても柱穴・杭跡など様々な様相がある。

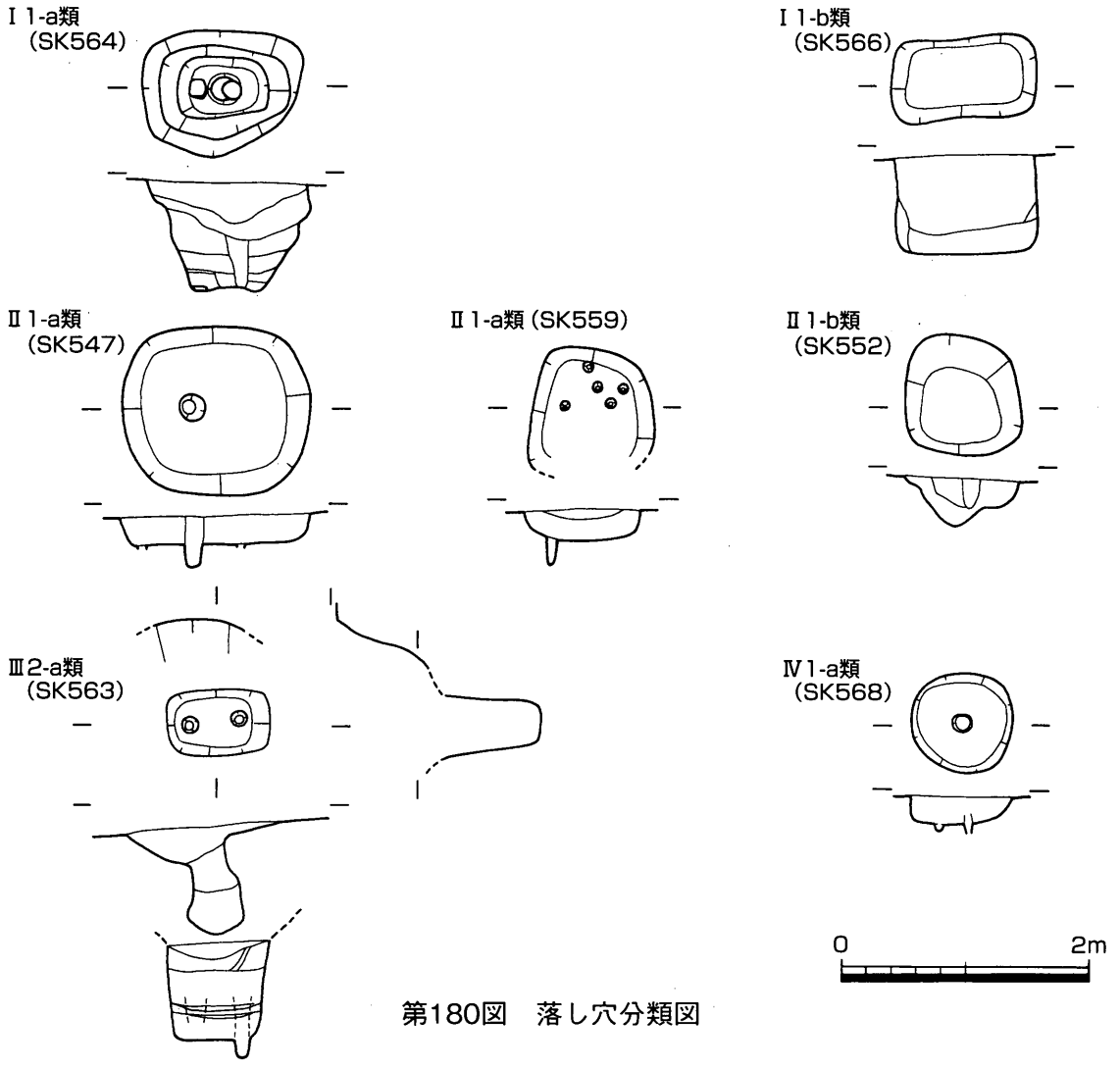
ここでは16基の落し穴を

①検出面での平面形態

②底面での平面形態

第４表　落し穴観察表

| グループ | 遺構名 | 形態 | 上面規模（m） | 深さ（cm） | 底部柱穴径（cm） | 分類 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| A | ＳＫ579 | 隅丸長方形 | 1.28×0.94 | 18 | | Ⅰ1-b |
| B | ＳＫ566 | 隅丸長方形 | 1.17×0.63 | 80 | | Ⅰ1-b |
| C | ＳＫ555 | 隅丸方形 | | 70 | | Ⅱ |
| | ＳＫ554 | 隅丸方形 | 1.50×1.39 | 94 | 11 | Ⅱ1-a（①） |
| | ＳＫ561 | 隅丸方形 | 1.21～1.40 | 36 | | Ⅱ1-a（①） |
| | ＳＫ559 | 隅丸方形 | 0.98×1.00 | 21 | 7（5基以上） | Ⅱ1-a（⑤以上） |
| | ＳＫ563 | （上）楕円形<br>（下）隅丸長方形 | | 190 | 12 | Ⅲ2-a（②） |
| | ＳＫ558 | 円形 | 0.62 | 19 | 24 | Ⅳ1-a（①） |
| D | ＳＫ549 | 隅丸方形 | 0.79～0.75 | 18.3 | 20～24 | Ⅱ1-a（①） |
| | ＳＫ550 | 隅丸方形 | 1.04×0.88 | 27 | 35 | Ⅱ1-a（①） |
| E | ＳＫ544 | 隅丸方形 | 1.53×1.39 | 25.5 | 20 | Ⅱ1-a（①） |
| | ＳＫ545 | 隅丸方形 | 1.35×1.33 | 46 | 26 | Ⅱ1-a（①） |
| | ＳＫ547 | 隅丸方形 | 1.52×1.36 | 40.2 | 20 | Ⅱ1-a（①） |
| | ＳＫ552 | 隅丸方形 | 0.92×0.96 | 25 | | Ⅱ1-b |
| F | ＳＫ564 | 隅丸長方形 | 1.28×1.01 | 90 | 26 | Ⅰ1-a（①） |
| | ＳＫ568 | 円形 | 0.82 | 30 | 15 | Ⅳ1-a（①） |




第180図　落し穴分類図

③底部施設

をそれぞれの属性として分類したい。

分類方法としては平面形態が長方形のものⅠ類、隅丸方形のものⅡ類、楕円形のものⅢ類、円形のものⅣ類に分類し、検出面での平面形態と底面での平面形態が同じもの1、異なるもの2、更に底部施設で柱穴・杭の痕跡があるものa、ないものbとし、最後に柱穴・杭痕の個数を付した。

上記の分類根拠で分類するとⅠ1－a(①)類が1基（落し穴ＳＫ564)、Ⅰ1－b類が2基（落し穴ＳＫ566・579)、Ⅱ1－a(①)類が7基（落し穴ＳＫ544・545・547・549・550・554・561)、Ⅱ1－a(⑤以上)類が1基（落し穴ＳＫ559)、Ⅱ1－b類が1基（落し穴ＳＫ552)、Ⅱ類が1基（落し穴ＳＫ555)、Ⅲ2－a(②)類が1基（落し穴ＳＫ563)、Ⅳ1－a(①)類が2基（落し穴ＳＫ558・568）となる。

検出した落し穴は平面形態が隅丸方形で、底部施設として柱穴を1基持つⅡ1－a(①)類が多いことが解る。

これを前述したグループごとに見るとＡ・ＢグループがⅠ1－b類1基で、ＣグループがⅡ1－a類3基・Ⅲ2－a類1基、Ⅳ1－a類1基で、ＤグループがⅡ1－a類2基で、ＥグループがⅡ1－a類3基、Ⅱ1－b類1基で、ＦグループがⅠ1－a類1基、Ⅳ1－a類1基で構成されていることが解る。

このように2基以上の複数基で構成されるグループでは、Ⅱ1－a類が多いことが解る。

（5）規模

検出面での規模を見ると、Ⅰ類の隅丸長方形の規模は長軸1.17～1.28mと約1.20m程度で、短軸0.63～1.01mと若干幅が認められる。Ⅱ類は大別すると一辺0.8～1.0mと規模の小型のものと一辺1.4～1.5mと規模の大型のものに分けられる。Ⅲ類は推定であるが1.0mを超えるものと考えられる。Ⅳ類は直径0.62～0.82mと1.0mを超えるものがない。

上記の規模から落し穴には1.0mを超える大型のものと1.0m以下の小型のものがあることが解る。

（6）時期

16基中、落し穴内から遺物が出土しているのは4基と少ないが、落し穴内堆積土の状況、底部施設の状況から全て同時期と考えており、出土遺物からこれらの落し穴は、縄文時代後期前半（彦崎Ｋ1式、永井Ⅱ式併行）と考えられる。

## 3.四国4県の状況

四国4県の状況を見ると、高知県では林田シタノジ遺跡[3]（廃棄土坑？　縄文時代後期初頭・晩期)、松ノ木遺跡[4]（貯蔵穴・廃棄土坑　縄文時代前期・後期)、田村遺跡群[9]（貯蔵穴・廃棄土坑　縄文時代後期)、奥谷南遺跡[7]（縄文時代中期末)、船戸遺跡[6]（貯蔵穴　縄文時代後期後葉)、居徳遺跡[8]（貯蔵穴　縄文時代晩期後半)、北川遺跡[5]（廃棄土坑？　縄文時代後期)、美良布遺跡[2]（貯蔵穴　縄文時代晩期)、十万遺跡[1]（貯蔵穴　縄文時代晩期）などで縄文時代の土坑を検出している。

これらの土坑は、土坑内から堅果類、シカ、イノシシ、タイなどが出土していることから全て貯

蔵穴、廃棄土坑と報告されており、落し穴は確認されていない。しかし、美良布遺跡で検出した貯蔵穴と考えられているP64、P90については底面に20～30cmの扁平な石材を据えており、貯蔵穴とするには違和感があるが、落し穴とも断定しがたい。

徳島県では庄遺跡[3]、[4]（貯蔵穴？　縄文時代後期・晩期）、矢野遺跡[5]（貯蔵穴・廃棄土坑　縄文時代後期）、上喜来蛭子～中佐古遺跡[1]（廃棄土坑　縄文時代晩期中葉）、西谷遺跡[2]（貯蔵穴　縄文時代後期中葉）などで縄文時代の土坑を検出している。

これらの土坑は、土坑内から縄文土器片、多量の礫片などが出土していることから全て廃棄土坑、貯蔵穴と報告されており、落し穴は確認されていない。

愛媛県では医王寺Ⅲ遺跡[2]（落し穴状遺構　縄文時代早期）、明穂Ⅰ東岡東遺跡[4]（廃棄土坑　縄文時代早期）、馬島亀ヶ浦遺跡[6]（廃棄土坑　縄文時代後期）、火内遺跡[5]（廃棄土坑　縄文時代晩期後葉）、久米高畑遺跡[7]（廃棄土坑　縄文時代晩期）、福成寺遺跡[8]（不明　縄文時代早期・晩期）、鶴来が元遺跡[3]（廃棄土坑？　縄文時代後期）、西野Ⅰ遺跡[1]（不明　縄文時代晩期後半）などで縄文時代の土坑を検出している。

愛媛県内では主として廃棄土坑が多い。しかし福成寺遺跡、西野Ⅰ遺跡、医王寺Ⅲ遺跡で検出した土坑は落し穴の可能性が高いものである。

西条市実報寺に所在する福成寺遺跡で検出した縄文時代早期・晩期の土坑は、緩やかな傾斜がある平地で13基が確認されている。底部施設に柱穴を持つものは１基と少ないが、平面形態が不定形・長方形で、１～２ｍの規模を持つ土坑が４基６ｍの範囲内に纏まっていることから、落し穴が４基で組配列の可能性も考えられる。

松山市西野町に所在する西野Ⅰ遺跡で検出した縄文時代晩期の土坑は、丘陵先端の頂部から斜面にかけて、約23基が確認されている。平面形態が不定形を呈するものもあるが、底面に約20cm程度の柱穴を持つものも数基確認されている。これらの土坑の配置は丘陵頂部から２～３列程度の列状に配されているようにも見え、立地・形態から見て落し穴の可能性が考えられる。

唯一落し穴状遺構として報告している愛媛県土居町に所在する医王寺Ⅲ遺跡で検出した５基の土坑についても丘陵傾斜から見た配列、土坑の下部施設から見ると落し穴として意義付けるのには無理があるのではないか。しかしそれぞれの地域において地形選択の結果、独自の狩猟方法が発達した可能性も考えられることからこれ以上の言及は避けたい。

以上から四国内では、当遺跡以外に縄文時代の落し穴は確認されておらず、四国初の事例になる。しかし、愛媛県において落し穴状遺構や落し穴の可能性のある土坑が所在することや国内的に落し穴による狩猟方法が縄文時代に盛行することから四国内においても落し穴を使った同様な狩猟方法が存在した可能性もあることから、今後増加するものと思われる。

## ４．まとめ

小山・南谷遺跡で検出した落し穴をまとめると16基の落し穴は、北側の丘陵、旧流路と南側の旧流路に挟まれた推定100ｍの範囲にあり、ちょうどなだらかな平地部分から丘陵になる境に位置している。更に複数の落し穴からなるグループを一単位とする組配置で、約10ｍの範囲で、それぞれのグループは約７～23ｍの間隔を開け配置されていることが解る。落し穴は平面形態が方形で、下部施設として20cm程度の柱穴を１基持つものが大半を占める。規模は1.0ｍを超える大型のものと

1.0m以下の小型のものがある。時期は全ての落し穴が縄文時代後期前半である。

狩猟方法については落し穴の立地から推測すると立石山山塊に生息する獲物を対象とした狩猟方法の痕跡であることが解り、旧流路の低湿地部分に集まるイノシシ等を捕獲対象とした罠猟である。ただし、この罠猟が積極的な追い込み猟なのか、消極的な待猟なのかは不明である。

これ以上は今後の類例を待ち、検討を加えたい。


参考文献

・稲田孝司　1993「西日本の縄文時代落し穴猟」『論苑考古学』天山舎

・佐藤宏之　2004「日本列島の陥し穴猟」『第14回　九州縄文研究会鹿児島県国分大会』九州縄文研究会・南九州縄文研究会

・2004「九州における縄文時代のおとし穴状遺構」『第14回　九州縄文研究会鹿児島県国分大会』九州縄文研究会・南九州縄文研究会

高知県

（1）「十万遺跡」1988香我美町教育委員会

（2）「美良布遺跡」1991香北町教育委員会

（3）「林田シタノジ遺跡Ⅱ」1993『土佐山田町埋蔵文化財報告書　第15集』土佐山田町教育委員会

（4）「松ノ木遺跡Ⅲ」1993『本山町埋蔵文化財調査報告　第６集』本山町教育委員会

（5）「北川遺跡」1995『東津野村埋蔵文化財調査報告書　第１集』高知県東津野村教育委員会

（6）「船戸遺跡」1996『高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第27集』高知県教育委員会、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター

（7）「奥谷南遺跡Ⅰ」1999『高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第37集』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター

（8）「居徳遺跡群Ⅴ」2003『高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第86集』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター

（9）「田村遺跡群Ⅱ」2004『高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第85集』高知県教育委員会、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター

愛媛県

（1）「西野Ⅰ遺跡」1978『愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書　Ⅰ』愛媛県教育委員会

（2）「医王寺Ⅲ遺跡」1991『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書　Ⅲ』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

（3）「鶴来が元遺跡」1994『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書　Ⅵ』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

（4）「明穂Ⅰ東岡東遺跡」1995『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書　Ⅹ』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

（5）「火内遺跡」1998『来島海峡大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書　第３集』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

（6）「馬島亀ヶ浦遺跡」1999『来島海峡大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告書　第４集』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

（7）「来住・久米地区の遺跡－久米高畑遺跡－」2004『松山市文化財調査報告書　101』松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター

（8）「福成寺遺跡」2005『東予玉川線地域活性化道路緊急整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

徳島県

（1）「上喜来蛭子～中佐古遺跡」1994『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第7集』徳島県教育委員会、財団法人徳島県埋蔵文化財センター

（2）「西谷遺跡」1995『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第12集』徳島県教育委員会、財団法人徳島県埋蔵文化財センター

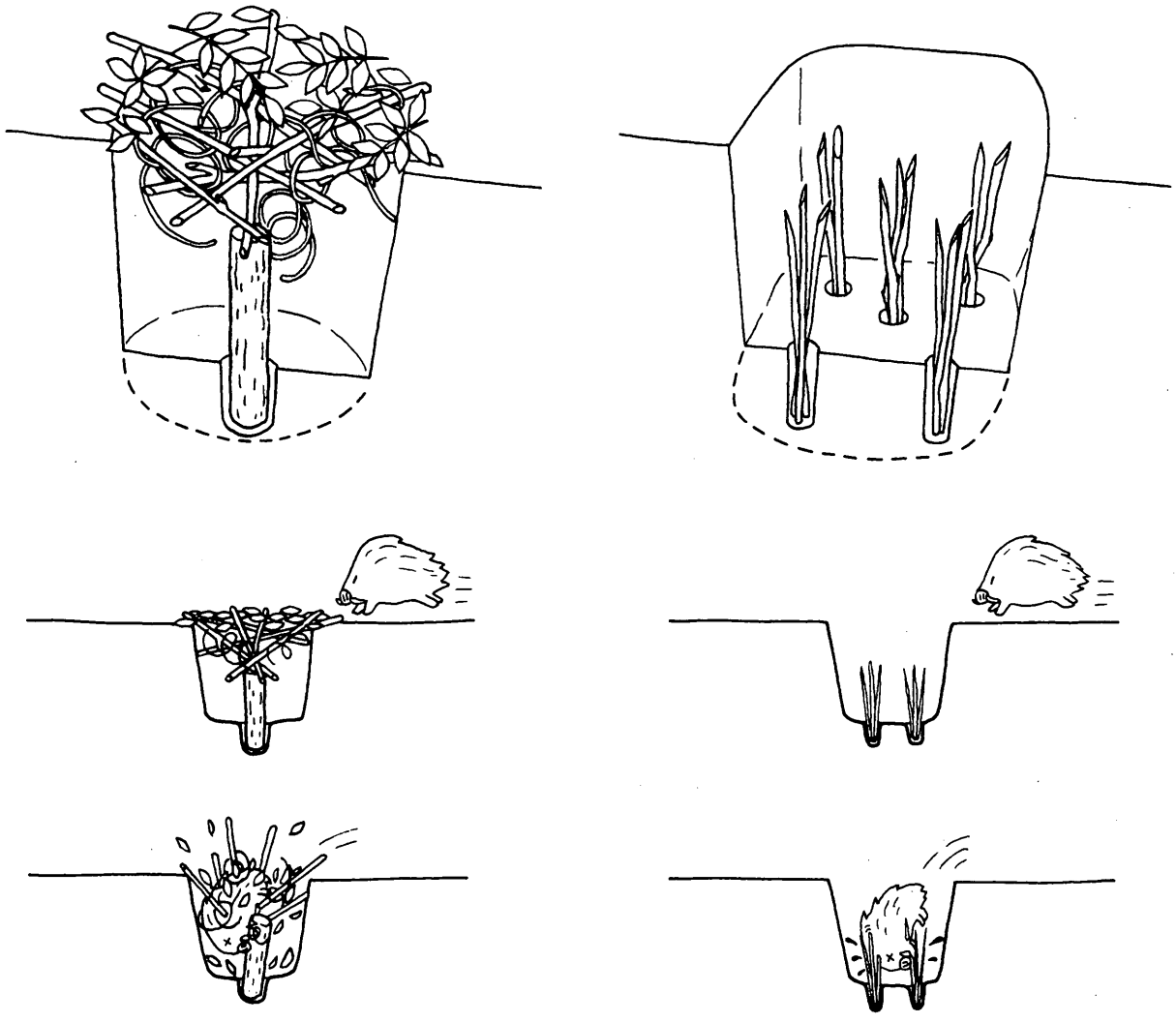
（3）「庄遺跡Ⅱ」1997『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第21集』徳島県教育委員会、財団法人徳島県埋蔵文化財センター

（4）「庄遺跡Ⅲ」1999『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第21集』徳島県教育委員会、財団法人徳島県埋蔵文化財セ

ンター
（5）「矢野遺跡（Ⅱ）」2003『徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第44集』徳島県教育委員会、財団法人徳島県埋蔵文化財センター

Ⅰ1-a類

Ⅱ1-a類



第181図　落し穴推定復元図

## 第２節　弥生時代後期初頭～中葉の土器

### １．はじめに

小山・南谷遺跡では、立石山山塊から北西方向に延びる丘陵の先端付近の緩斜面に位置する第Ⅰ～Ⅲ調査区を中心に竪穴住居跡21基、土壙墓、土坑、溝等を検出している。特に竪穴住居内からは壺・甕・鉢・高坏等多数の弥生土器が出土しており、時期は弥生時代初頭～中葉に限定される。また、周辺には弥生時代後期初頭の標識遺跡として著名な大空（スベリ山）遺跡があり、近年では高松市教育委員会による発掘調査で、同時期の遺跡として奥の坊権現前遺跡、奥の坊奥池西遺跡、大空北遺跡などが確認されている。

一方立地的に見るとこれらの遺跡が所在する地点は高松平野の北東部にあり、西は新川･春日川･詰田川による氾濫原で、東は立石山山塊、南はその立石山山塊から西に延びる久米山丘陵、北は屋島と瀬戸内海によって遮られた南北約３㎞、東西約1.5㎞の範囲の東から西に向けて緩やかに傾斜する扇状地のほぼ中央部に位置する。前述した弥生時代後期初頭～中葉の遺跡はこの狭い地域の北東部に集中して確認されている。

この狭い地域の北東部に位置するこれらの遺跡は、径約800m内に立地しており、特に大空遺跡、南谷遺跡とは直線距離にして約500m内に所在することから一つの集落として考え、出土した土器の特徴・変遷を提示することは高松平野の弥生時代の土器編年を考えるに当たり、重要な意義を持つものと考える。

### ２．土器の変遷

#### （１）出土遺物

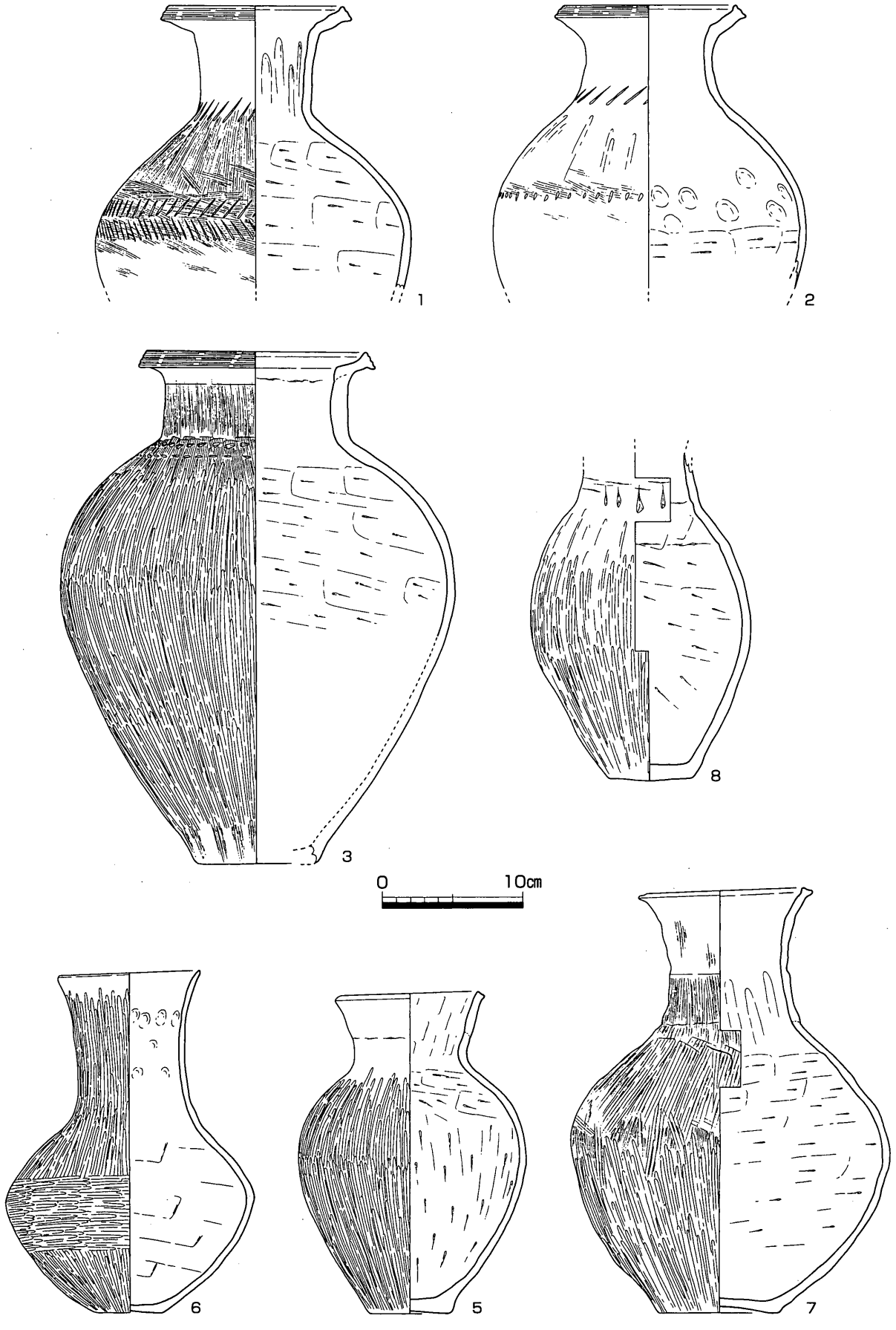
大空遺跡、小山･南谷遺跡から出土した弥生土器には壺、甕、高坏、製塩土器、鉢、器台がある。土器の変遷を考えるのに資料とした遺構は大空遺跡を除き、小山・南谷遺跡では比較的纏まって遺物が出土している竪穴住居跡出土遺物を取上げる。中でも形態の変化が顕著に認められ、出土量の多い甕を基準とし、その変遷を提示し、その他の器種でこの変遷の補強をしたい。

#### （２）甕

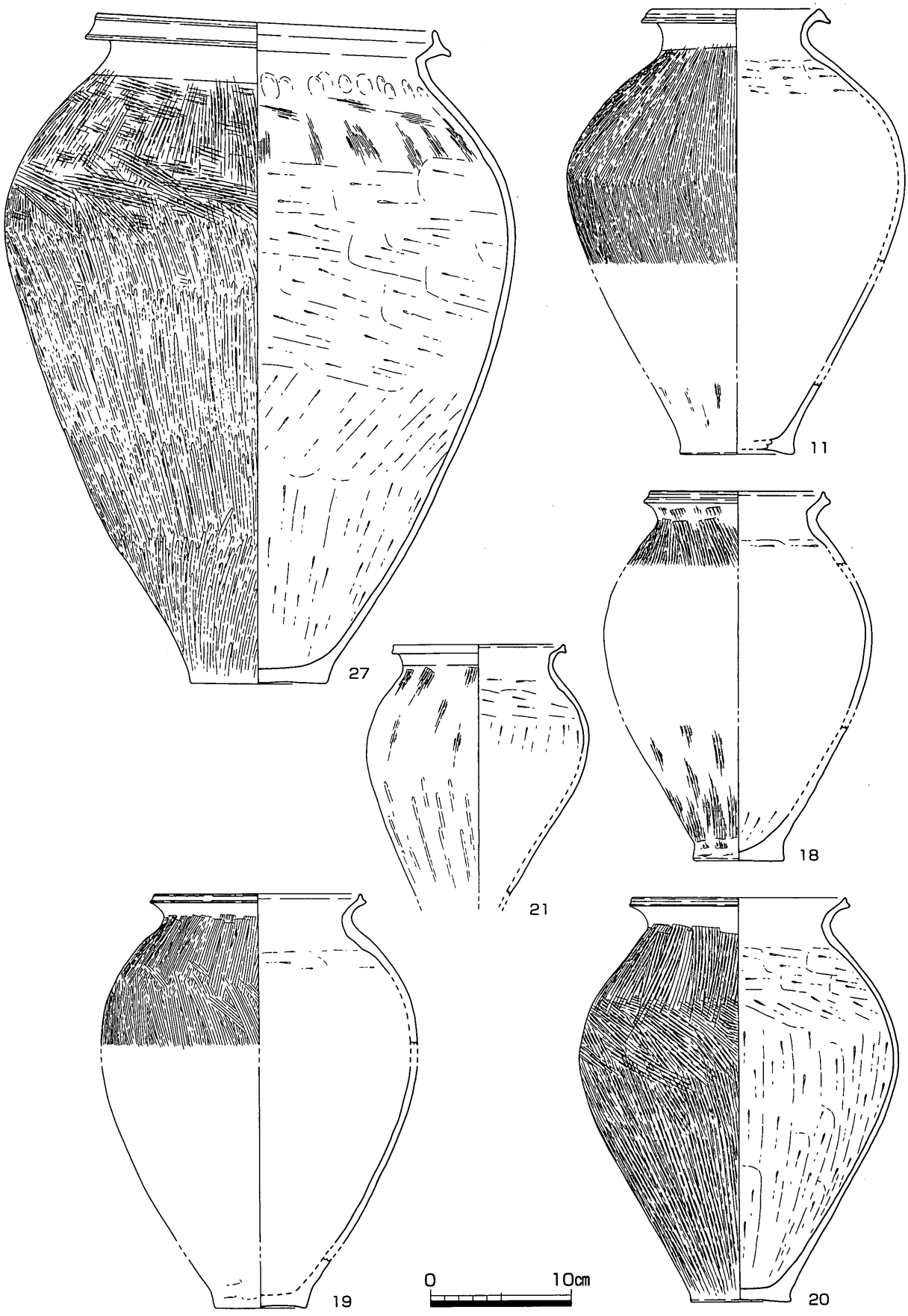
甕は出土点数の多少はあるものの、ほとんどの遺構から出土している。

##### 大空遺跡出土遺物

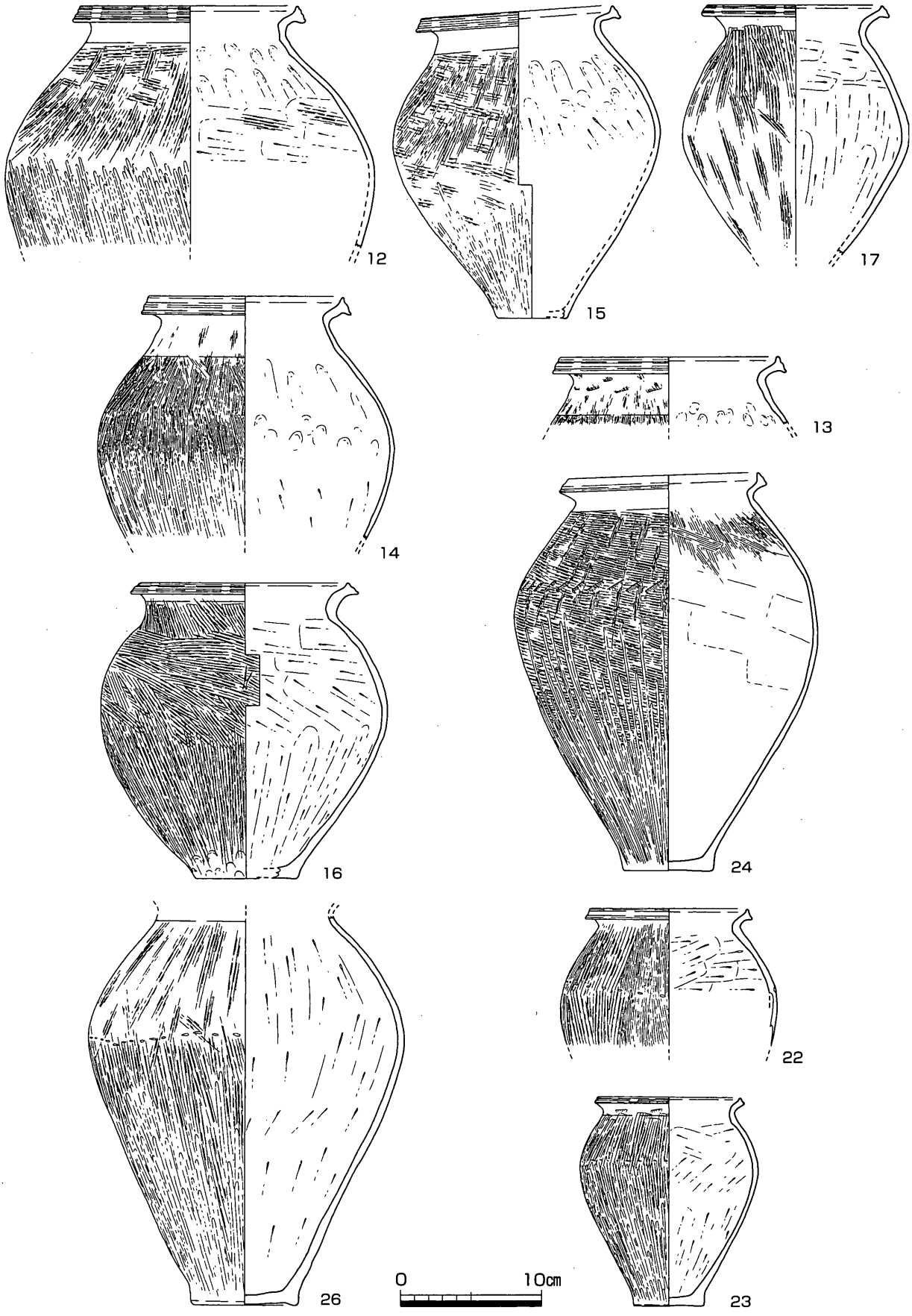
大空遺跡から出土した甕は底部が平底で、体部は倒卵形を呈し、頸部が「く」の字に屈曲し、口縁部となる。形態的にみると底部はしっかりした平底を呈し、体部最下段が約１㎝程度突出するように作られている。体部は倒卵形を呈し、体部最大径は上位にある。頸部から体部最大径までと体部最大径から底部までの比率で、前者を１とした時の数値は平均2.17となる。頸部外面は明瞭な稜を持ち「く」の字に屈曲するものと緩やかに屈曲するものがある。頸部内面は長さ1.0～1.3㎝で、上下の平坦面を持つ。口縁部は頸部から外上方に直線的に延び、口縁端部を上下に拡張する甕が主体である。口縁端部外面には２～３条の退化凹線を施している。この口縁端部を上下に拡張する甕以外に下方あるいは上方に拡張し、退化凹線を施すものと口縁端部を上下に僅かに拡張し、１条の凹線？（窪み）を持つものがある。口縁端部の形態から分類すると４種類が確認できる。



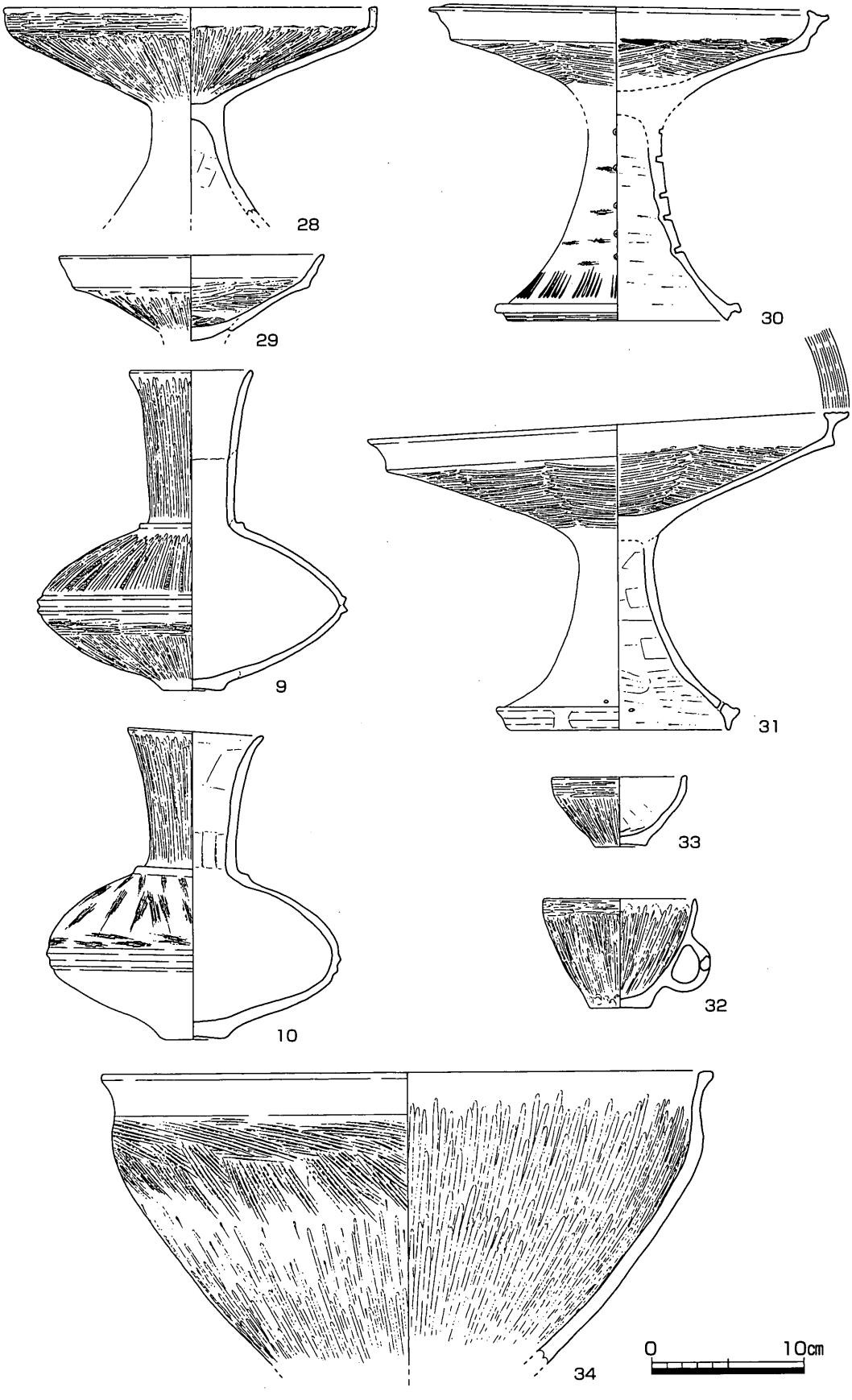

第182図　大空遺跡出土遺物実測図①



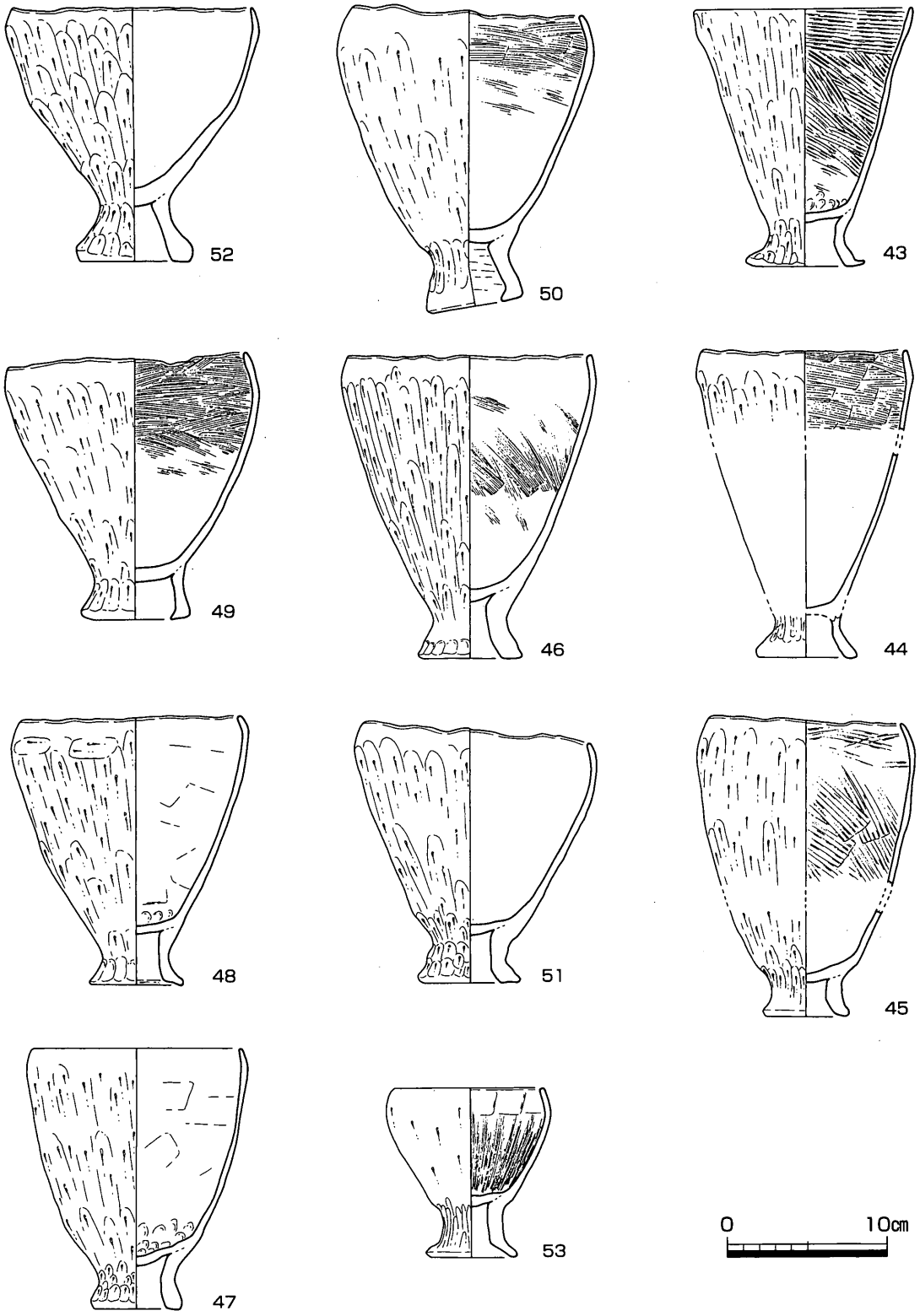

第183図　大空遺跡出土遺物実測図②



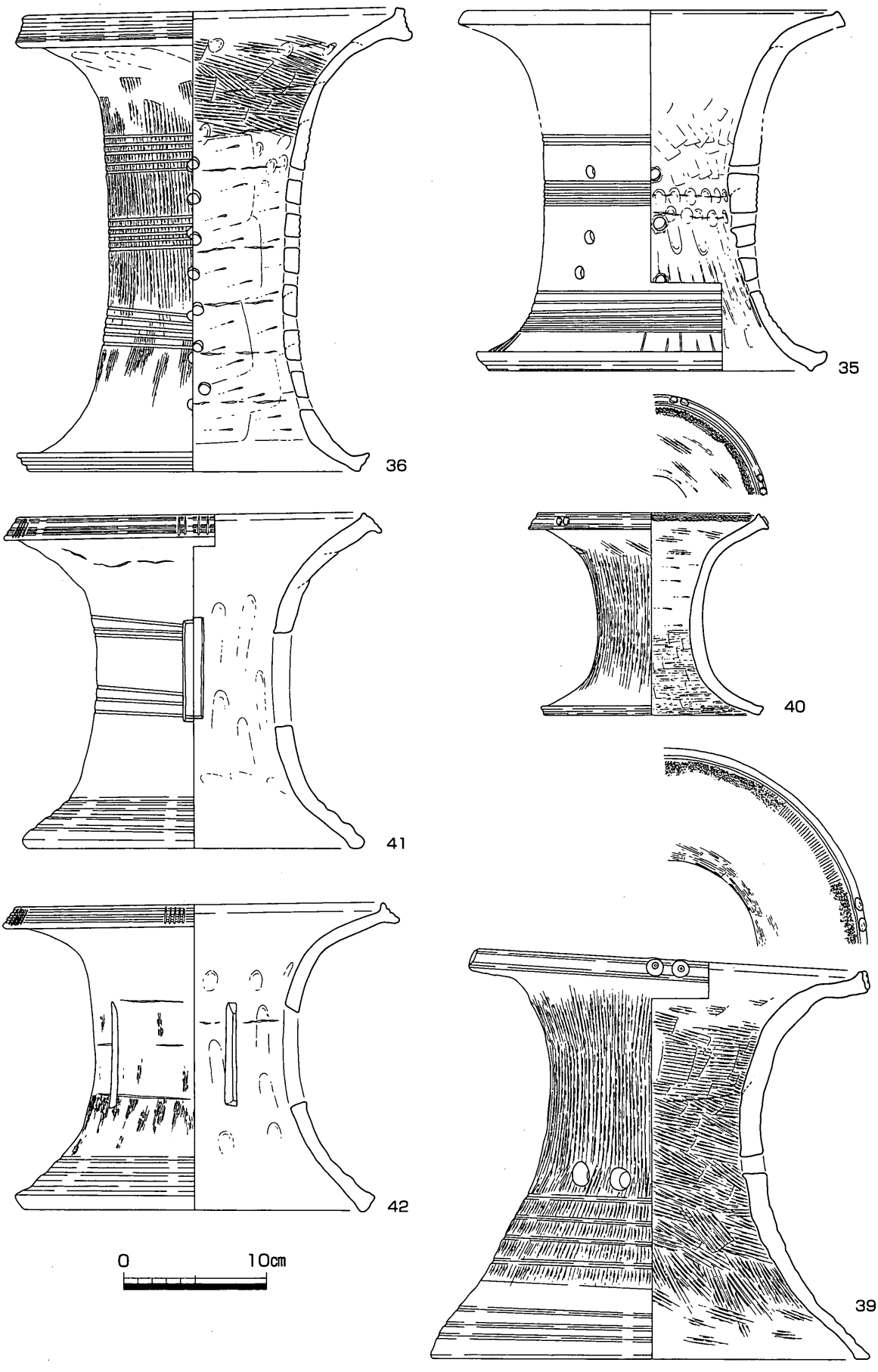

第184図　大空遺跡出土遺物実測図③




第185図　大空遺跡出土遺物実測図④




第186図　大空遺跡出土遺物実測図⑤




第187図　大空遺跡出土遺物実測図⑥

次に調整をみると体部外面は全面にハケ目が施され、一部叩き痕が確認できるものもある。

ハケ目は調整方法で見ると体部最大径を境に上半部、下半部の２つに分けられるものと上半部、体部最大径部分、下半部の３つに分けられるものがある。前者は上半部がやや斜め方向のハケ目も認められるが、概ね縦方向の粗いハケ目で、下半部は縦方向の粗いハケ目が施されている。上半部と下半部のハケ目の前後関係は下半部のハケ目が上位にあることから、上半部の調整を行った後に下半部の調整を行ったものと考えられる。更に下半部はハケ目の後、縦方向のヘラミガキが密に施されている。後者は上半部が斜め方向か、縦方向のハケ目で、体部最大径部分が横方向に近い斜め方向のハケ目で、下半部は縦方向のハケ目が施されている。その前後関係は上半部のハケ目より体部最大径部分のハケ目が、体部最大径部分のハケ目より下半部のハケ目が上位にあることから、上半部の調整を行った後に体部最大径部分の調整、続いて下半部の調整を行ったものと考えられる。更に下半部はハケ目の後、縦方向のヘラミガキが密に施されている。このように体部外面の調整で２つに分けられる。一方体部内面の調整は全面にヘラケズリ、指ナデ、ハケ目が認められる。これらの調整方法も体部外面と同じように上半部、下半部に分けられるものと上半部、体部最大径部分、下半部に分けられるものがある。前者は上半部が横方向のヘラケズリか、縦方向の指ナデ・指頭痕で、下半部が縦方向のヘラケズリが施されている。上半部と下半部の調整の前後関係は下半部のヘラケズリより上半部のヘラケズリが上位にあることから、下半部の調整を行った後に上半部の調整を行ったものと考えられる。また別のものは上半部の指ナデ･指頭痕よりヘラケズリが上位にあることから、指ナデ･指頭痕の後にヘラケズリを行ったものと考えられる。ただし指ナデ･指頭痕については成形段階の調整と考えている。後者は上半部が縦･横方向のハケ目及び指頭痕で、体部最大径部分が横方向のヘラケズリで、下半部が縦方向のヘラケズリが施されている。その前後関係は下半部のヘラケズリより体部最大径部分のヘラケズリが上位にあり、体部最大径部分のヘラケズリより上半部のハケ目が上位にあることから、下半部の調整を行った後に体部最大径部分の調整、続いて上半部の調整を行ったものと考えられる。指頭痕は同様に成形段階のものと考えている。

体部外面の調整の単位による２段、３段区分と体部内面の２段、３段区分に相関関係は認められない。

また体部最大径部分に櫛先刺突文、ヘラ先列点文を施す甕も確認できる。

頸部内面平坦面の調整は指ナデが施されている。

### 小山・南谷遺跡ＳＨ511出土遺物

小山・南谷遺跡ＳＨ511から出土した甕は底部が平底で、体部は倒卵形を呈し、頸部が「く」の字に屈曲し、口縁部となる。形態的にみると底部はしっかりした平底を呈し、体部最下段が約１㎝程度突出するように作られている。この部分の体部外面最下段には指頭痕が施されている。体部は倒卵形を呈し、体部最大径は上位にある。頸部から体部最大径までと体部最大径から底部までの比率で、前者を１とした時の数値は平均2.05となる。頸部外面は明瞭な稜を持ち「く」の字に屈曲するものと緩やかに屈曲するものがある。頸部内面は長さ0.8～1.0㎝で、上下の平坦面を持つ。しかし量的には少なく、調整の違いにより確認できる丸みのある平坦面をもつもの、頸部外面と同様に明瞭な稜を持ち、「く」の字に屈曲するものが主体を占める。口縁部は頸部から外上方に直線的に延び、口縁端部を上下に拡張する甕があり、口縁端部外面には２～３条のかなり退化した凹線を施

している。この口縁端部を上下に拡張する甕以外に口縁端部を上下に僅かに拡張し、１条の凹線？（窪み）を持つものやそのまま口縁端部となるものもある。口縁端部の形態から分類すると概ね３種類が確認できる。

次に調整をみると体部外面は全面にハケ目が施され、一部叩き痕が確認できるもの（797・802）もある。

ハケ目は単位で見ると体部最大径を境に上半部、下半部の２つに分けられるものと上半部、体部最大径部分、下半部の３つに分けられるものがある。前者は上半部が概ね縦方向の粗いハケ目（６本／cm）で、下半部は縦方向の粗いハケ目（６本／cm）が施されている。上半部と下半部のハケ目の前後関係は上半部のハケ目が上位にあることから、下半部の調整を行った後に上半部の調整を行ったものと考えられる。更に802は下半部のハケ目の後、縦方向のヘラミガキが密に施されている。後者は上半部が縦方向のハケ目で、体部最大径部分が横方向あるいは斜め方向のハケ目で、下半部は縦方向のハケ目が施されている。その前後関係は下半部のハケ目より体部最大径部分のハケ目が、体部最大径部分のハケ目より上半部のハケ目が上位にあることから、下半部の調整を行った後に体部最大径部分の調整、続いて上半部の調整を行ったものと考えられる。このように体部外面の調整で２つに分けられる。一方体部内面の調整は全面にヘラケズリ、指頭痕、板ナデが認められる。これらの調整も体部外面と同じように単位が上半部、下半部に分けられるものと上半部、体部最大径部分、下半部に分けられるものがある。前者は上半部が横方向のヘラケズリで、下半部が縦方向のヘラケズリが施されている。上半部と下半部の調整の前後関係は下半部のヘラケズリより上半部のヘラケズリが上位にあることから、下半部の調整を行った後に上半部の調整を行ったものと考えられる。ただし指頭痕については成形段階の調整と考えている。後者は上半部が横方向の板ナデ及び指頭痕で、体部最大径部分が横方向のヘラケズリで、下半部が縦方向のヘラケズリが施されている。その前後関係は下半部のヘラケズリより体部最大径部分のヘラケズリが上位にあり、体部最大径部分のヘラケズリより上半部の板ナデが上位にあることから、下半部の調整を行った後に体部最大径部分の調整、続いて上半部の調整を行ったものと考えられる。指頭痕は同様に成形段階のものと考えている。

体部外面の調整の単位による２段、３段区分と体部内面の２段、３段区分に相関関係は認められない。

また体部最大径部分に櫛先刺突文を施す甕も少量確認できる。

頸部内面平坦面の調整は指ナデ、ハケ目が施されている。

小山・南谷遺跡ＳＨ521・515出土遺物

小山・南谷遺跡ＳＨ521・515から出土した甕は少量であるため、底部が平底であること、頸部が「く」の字に屈曲し、口縁部となることが確認できるに留まる。形態的にみると底部はしっかりした平底を呈し、体部最下段が突出するように作られているものは出土していない。ただし体部外面最下段には指頭痕が施されている底部は出土している。体部形態は不明である。頸部内外面は明瞭な稜を持ち「く」の字に屈曲するものと緩やかに屈曲するものがある。頸部内面に上下の平坦面を持つものは出土していない。口縁部は頸部から外上方に直線的に延びるものとやや外反するものがある。口縁端部は上下に、僅かに摘み出し、口縁端部外面には２条のかなり退化した凹線を施して

いる。この口縁端部を上下に僅かに摘み出す甕以外に上方あるいは下方に僅かに摘み出すものも確認できる。

次に調整をみると体部外面にはハケ目が施されるが、全体的な特徴は確認できない。一方体部内面の調整についてもヘラケズリ、ハケ目が施されるが、全体的な特徴は確認できない。

体部最大径部分に櫛先刺突文を施す甕は出土していない。

頸部内面平坦面の調整は、屈曲部下段に指ナデ、板ナデ状の調整が確認でき、体部内面のヘラケズリはこの部分まで及んでいない。

### 小山・南谷遺跡ＳＨ518・519出土遺物

小山・南谷遺跡ＳＨ518・519から出土した甕は底部が平底で、体部は倒卵形を呈し、頸部が「く」の字に屈曲し、口縁部となる。形態的にみると底部はしっかりした平底を呈し、体部最下段が0.7～0.8cm程度突出するように作られている。この部分の体部外面最下段には指頭痕が顕著に認められる。体部は倒卵形を呈し、体部最大径は上位にある。頸部から体部最大径までと体部最大径から底部までの比率で、前者を１とした時の数値は平均1.94となる。頸部内・外面は明瞭な稜を持ち「く」の字に屈曲するものと緩やかに屈曲するものがある。頸部内面に上下の平坦面は持たない。

口縁部は頸部から外上方に概ね直線的に延び、口縁端部を上下に僅かに摘み出し、口縁端部外面はそのまま終わらせる。この口縁端部を上下に僅かに摘み出す甕以外に、頸部から口縁端部をそのまま終わらせるものもある。口縁端部の形態から分類すると概ね２種類が確認できる。

次に調整をみると体部外面は全面にハケ目が施されている。

ハケ目は単位で見ると全ての甕の調整が上半部、体部最大径部分、下半部の３つに分けられる。

体部外面の調整は上半部が斜め方向のハケ目で、体部最大径部分が縦方向あるいは若干斜め方向のハケ目で、下半部は縦方向のハケ目が施されている。その前後関係は下半部のハケ目より体部最大径部分のハケ目が、体部最大径部分のハケ目より上半部のハケ目が上位にあることから、下半部の調整を行った後に体部最大径部分の調整、続いて上半部の調整を行ったものと考えられる。一方体部内面の調整は全面にヘラケズリ、指頭痕、指ナデ、ハケ目が認められる。これらの調整も体部外面と同じように上半部、体部最大径部分、下半部に分けられる。

体部内面の調整は上半部が横方向のハケ目及び指頭痕・指ナデで、体部最大径部分が横方向のヘラケズリで、下半部が縦方向のヘラケズリが施されている。その前後関係は下半部のヘラケズリより体部最大径部分のヘラケズリが上位にあり、体部最大径部分のヘラケズリより上半部のハケ目が上位にあることから、下半部の調整を行った後に体部最大径部分の調整、続いて上半部の調整を行ったものと考えられる。指頭痕・指ナデよりヘラケズリが上位にあることから成形段階のものと考えている。

### 小山・南谷遺跡ＳＨ509出土遺物

小山・南谷遺跡ＳＨ509から出土した甕は底部が小さい平底で、体部は倒卵形を呈し、頸部が「く」の字に屈曲し、口縁部となる。形態的にみると底部は上げ底状の平底を呈する。体部は倒卵形を呈し、体部最大径はやや上位にある。頸部から体部最大径までと体部最大径から底部までの比率で、前者を１とした時の数値は平均1.65となる。頸部内・外面は明瞭な稜を持ち「く」の字に屈

曲するものと緩やかに屈曲するものがある。頸部内面に上下の平坦面は持たない。口縁部は頸部から外上方に概ね直線的に延び、口縁端部を上方に僅かに摘み出すものとそのまま終わらせるものがある。また胎土に角閃石を含み、口縁端部を上方に僅かに摘み出す甕が少量確認できる。この甕は下川津B類土器である。

次に調整をみると体部外面は全面にハケ目が施されている。

かなり摩滅しているが、体部外面の調整は全面縦方向のハケ目で、上半部、体部最大径部分、下半部の区別がなく、ハケ目の1単位も5.0～6.0cm程度と短い。また前後関係についても不明である。

体部内面の調整は上半部が横方向のヘラケズリで、体部最大径部分がやや斜め方向のヘラケズリで、下半部が縦方向のヘラケズリが施されている。その前後関係は下半部のヘラケズリより体部最大径部分のヘラケズリが上位にあり、体部最大径部分のヘラケズリより上半部のハケ目が上位にあることから、下半部の調整を行った後に体部最大径部分の調整、続いて上半部の調整を行ったものと考えられる。

このように各遺跡、遺構出土の甕を見ると

形態的には

①体部最大径位置の上位から下位への移動

②頸部内面の上下の平坦面の退化傾向

③口縁端部拡張の縮小化から摘み出すような口縁端部への変化

④口縁端部外面の退化凹線の更なる退化傾向

⑤底径の縮小化

⑥底部の突出に伴う体部最下段指頭痕の明瞭化

調整的には

①体部外面下半のハケ目後ヘラミガキを施す甕の少量化からハケ目のみへの変化

②体部外面最大径部分の櫛先刺突文、列点文を施す甕の少量化

上記8つの要素から甕を見ると大空遺跡→SH511→SH521・515・518・519→SH509の変遷が考えられる。

SH521・515出土の甕については出土量が少量であったため、SH518・519出土の甕との明瞭な差が認められなかった。ただ口縁端部の形態をみるとほぼ同時期か、SH521・515出土遺物が若干古くなるのではないかと考えられる。

### （3）製塩土器

製塩土器は出土点数の多少はあるものの、ほとんどの遺構から出土している。これらは上部の鉢部と下部の脚部からなる。

これらの製塩土器は鉢部の形態で、A～C形態の3種類に分類できる。更にA類は口縁部の形態から2種類に細分できることから、合計4種類に分類できる。

A類・・体部が直線的に外上方に延び、口縁部を内方に屈曲させるものである。

更にA類は口縁部の屈曲で、口縁端部（約1cm）のみをやや内方に屈曲させるもの（A－①類）と体部が直線的に外上方に延び、口縁端部下2～3cmから内湾し、端部にかけて緩

やかに屈曲するもの（A－②類）の２種類に細分できる。

B類・・体部全体を内湾させ、そのまま口縁端部となるものである。

C類・・体部全体を若干内湾させ、そのまま口縁端部となるもので、全体的な形態は器高が高く、A・B類に比べると胴長となる。C類とした748が鉢部と脚部が連続一体作りかどうかは不明である。

大空遺跡出土遺物

この分類を基に、大空遺跡出土遺物を見ると鉢部の形態分類で、A－①、A－②類の製塩土器が確認できる。製塩土器は鉢部と脚部が連続一体作りで、鉢部底に円盤を充填して作られている。鉢部は上部が開く、断面逆台形状を呈する。鉢部内底面は平底状を呈し、直径は5.0～6.0cmを測る。脚部は「ハ」の字に開く形態であるが、開きは小さく、中には脚部端のみを外方に屈曲させるものもあり、脚部を全体的にみると筒状を呈しているものがほとんどである。

外面の調整は脚部・鉢部外面とも下方から上方へのヘラケズリが施されている。ヘラケズリの範囲は鉢部でA－①、A－②類の形態差によって範囲に差が認められる。A－①類は口縁端部の僅かな屈曲部までの全域に、A－②類は口縁端部下1.0～1.5cm、ちょうど口縁端部にかけて緩やかに屈曲するまで施されている。脚部はほぼ全域にヘラケズリが施されている。

ヘラケズリの単位をみると概ね脚部外面と鉢部外面とに分けられる。脚部外面には幅0.8cm、長さ1.2cm程度のヘラケズリが細かく施され、鉢部外面では幅1.0～1.2cmのヘラケズリが上下に重複して施され、残存する長さは５～６cm程度を測る。

鉢部外面のヘラケズリと脚部外面のヘラケズリの前後関係は脚部側が上位となることから、口縁部側から脚部側へと施されていることが解る。おそらく成形後、製塩土器本体を逆転させ、下方（口縁部側）から上方（脚部）へ、すなわち鉢部の口縁部側から脚部側方向にヘラケズリを行った後に、脚部外面のヘラケズリを行った結果と考えられる。鉢部内面の調整は粗い刷毛（４～８本／cm）が横方向、斜め方向に施されている。

法量は口径12.0～15.2cm、器高15.2～19.0cm、底径5.3～7.4cmを測る。鉢部の器厚は約0.3～0.4cm、鉢部内高12.8～15.6cmを測る。脚部の器厚は1.0～1.3cmと厚く、脚高1.7～3.4cm、脚部内高2.1～3.8cmを測る。

全体に粗く作られており、どっしり感を持つ。

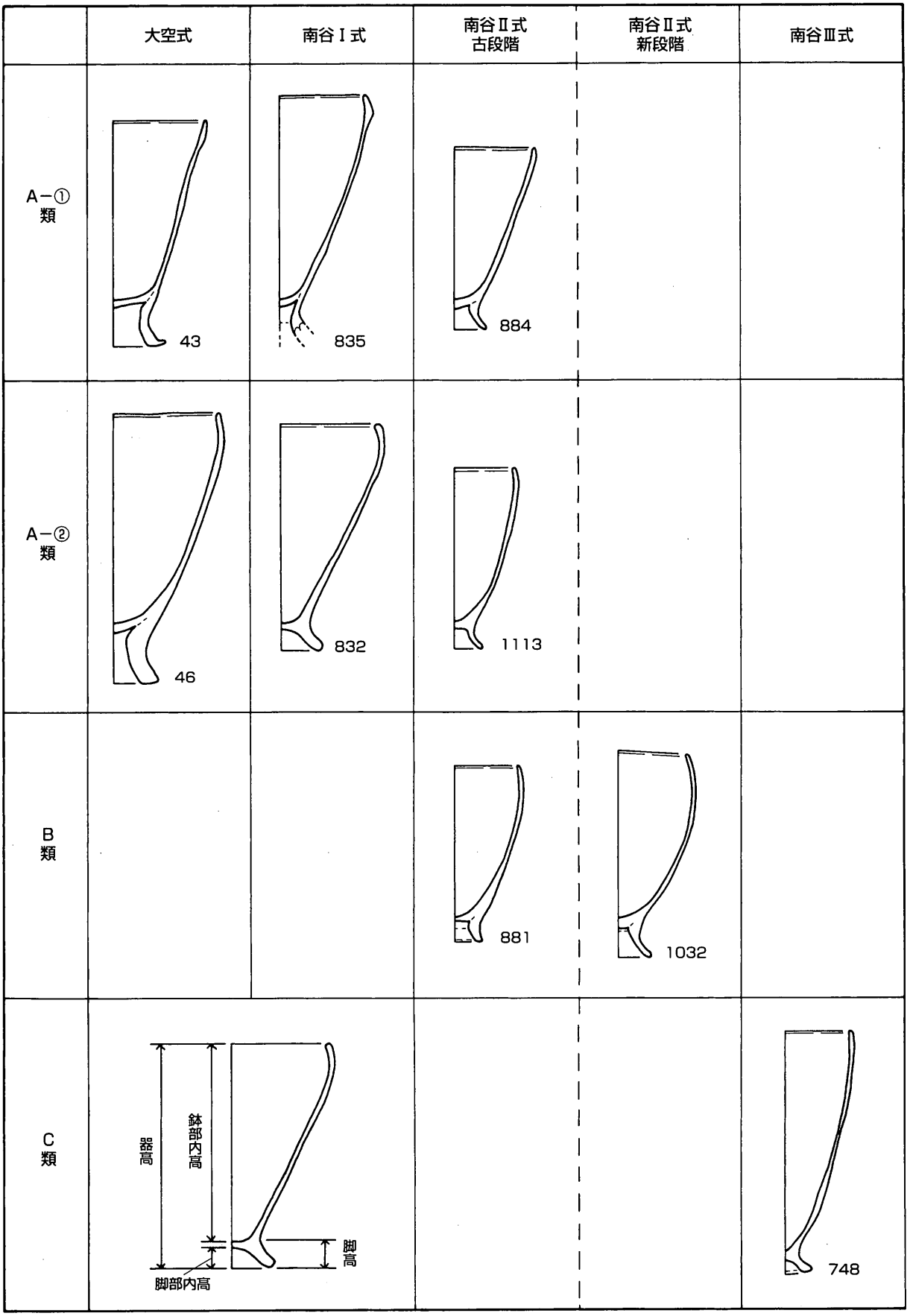
鉢部の容量はほとんどが1,000cc以上のもので、平均は1,343ccを測る。

小山・南谷遺跡ＳＨ511出土遺物

小山・南谷遺跡ＳＨ511出土遺物には鉢部の形態分類で、A－①・A－②類の製塩土器が確認できる。鉢部の形態に大空遺跡のように若干体部が内湾するものは認められず、全て直線的なものに限定できる。製塩土器は鉢部と脚部が連続一体作りで、鉢部底に円盤を充填して作られている。

鉢部は上部が開く、断面Ｖ字状を呈する。脚部は「ハ」の字に開く形態であるが、中には開き方が小さく、筒状を呈しているものも認められる。

外面の調整は脚部・鉢部外面とも下方から上方へのヘラケズリが施されている。ヘラケズリの範囲は鉢部でA－①・A－②類の形態差によって範囲に差が認められる。A－①類は口縁端部の屈曲




第188図　製塩土器形態分類及び変遷図

部までの全域に、A－②類は口縁端部下1.0～1.5cm、ちょうど口縁端部にかけて緩やかに屈曲するまで施されている。脚部は最下段の指頭痕部分以外全域にヘラケズリが施されているもの（833・834）と脚部外面全域に指ナデ・指頭痕を施しているもの（832）が認められる。

ヘラケズリの単位で、脚部外面と鉢部外面とに分けられるもの（832）と脚部から鉢部へと連続してヘラケズリが施されているもの（833）もある。また脚部外面のヘラケズリは全体に施されるものと脚部外面最下段に指頭痕を施し、上段にヘラケズリを施すものの２種類が確認できる。脚部外面のヘラケズリは幅1.0cm、長さ1.3cm程度で、大空遺跡と同様に細かく施される。鉢部外面には幅1.0～1.5cmのヘラケズリが上下に重複して施され、残存する長さは５～10cm程度を測り、中には鉢部外面の下位から上位にかけて、一気にヘラケズリされているもの（835）もある。また脚部から体部にかけて連続して一気にヘラケズリが施されているものがあり、大空遺跡ほど明確に脚部と鉢部外面のヘラケズリが分離できない。

鉢部外面のヘラケズリと脚部外面のヘラケズリの前後関係は鉢部側が上位となり、脚部から口縁部へと施されていることが解る。おそらく成形後、製塩土器本体を逆転させ、上方（脚部側）から下方（口縁部側）へとヘラケズリを行った結果と考えられる。832は口縁部から脚部側にヘラケズリを行い、最後に口縁部外面に横方向のヘラケズリを行っている。835は鉢部外面のヘラケズリ前の左下がりの叩き痕が確認できる。鉢部内面の調整は板ナデが横方向、斜め方向に施されている。また指ナデ、指頭痕が認められるもの（834・835）もある。

法量は口径12.8～14.2cm、器高15.9～16.2cm、底径4.9～5.6cmを測る。鉢部の器厚は0.2～0.3cm、鉢部内高12.9～14.2cmを測る。脚部の器厚は0.8～1.0cmと厚く、脚高1.5～2.4cm、脚部内高1.0～2.6cmを測る。

大空遺跡出土の製塩土器と比べるとかなり洗練された作りとなっている。

鉢部の容量はほとんどが1,000cc以下のもので、平均は950ccを測る。

### 小山・南谷遺跡ＳＨ521・515出土遺物

小山・南谷遺跡ＳＨ521・515出土遺物には鉢部の形態分類で、A－①・A－②・Ｂ類の製塩土器が確認できる。鉢部の形態はA－①・A－②類が中心であるが、体部が全体的にやや内湾するＢ類が少量出現する。製塩土器は鉢部と脚部が連続一体作りで、鉢部底に円盤を充填して作られている。鉢部の形態がA－①類・A－②類は上部が開く、断面Ｖ字状を呈するが、Ｂ類は断面Ｕ字状を呈する。脚部はA・Ｂ類とも短く「ハ」の字に開く形態である。

外面の調整は鉢部外面に下方から上方へのヘラケズリが施される。脚部外面には指頭痕、指ナデが施され、A・Ｂ類とも脚部と鉢部外面の調整が異なる。

鉢部外面のヘラケズリは下位から上位にかけて、幅1.0～1.3cmのヘラケズリが一気に施されている。ヘラケズリの範囲はA類が口縁端部下1.0～1.5cmのまでで、Ｂ類は口縁端部下2.0～2.2cmまでである。

鉢部外面のヘラケズリと脚部外面の指頭痕・指ナデの前後関係は、指頭痕・指ナデが、ヘラケズリの上位にあることから、おそらく成形後、製塩土器本体を逆転させ、鉢部上方（脚部側）から下方（口縁部側）へとヘラケズリを行ったのち、脚部外面を指頭痕・指ナデによって調整した結果と考えられる。

鉢部内面の調整は主として粗い刷毛（４～７本／cm）が横方向、斜め方向に施され、少量同方向の板ナデが施されているものもある。

法量は口径8.5～11.5cm、器高12.5～12.8cm、底径3.6～4.5cmを測る。鉢部の器厚は0.3～0.5cm、鉢部内高10.7～12.4cmを測る。脚部の器厚は0.3～0.7cm、脚高1.0～1.5cm、脚部内高0.8～1.5cmを測る。鉢部、脚部ともかなり小型化している。

鉢部の容量はほとんどが500cc以下のもので、平均は440ccを測る。

### 小山・南谷遺跡ＳＨ518・519出土遺物

小山・南谷遺跡ＳＨ518・519出土遺物には鉢部の形態分類で、Ｂ類の製塩土器が確認できる。鉢部の形態で、体部全体が内湾するものに限定できる。製塩土器は鉢部と脚部が連続一体作りで、鉢部底に円盤を充填して作られている。鉢部の形態がＢ類で、断面Ｕ字状を呈し、脚部は短く「ハ」の字に開く形態である。

外面の調整は鉢部外面に下方から上方へのヘラケズリが施される。脚部外面には指頭痕、指ナデが施され、脚部と鉢部外面の調整が異なる。

鉢部外面のヘラケズリは下位から上位にかけて、幅0.8～1.4cmのヘラケズリが一気に施されているものが主体であるが、ヘラケズリが重複して施され、残存する長さは４～６cm程度を測るもの（1032）もある。ヘラケズリの範囲は口縁端部下0.7～2.0cmの範囲はヘラケズリが及んでおらず、指ナデ・指頭痕が認められる。

鉢部外面のヘラケズリと脚部外面の指頭痕・指ナデの前後関係は、指頭痕・指ナデが、ヘラケズリの上位にあることから、おそらく成形後、製塩土器本体を逆転させ、鉢部下方（脚部側）から上方（口縁部側）へとヘラケズリを行ったのち、脚部外面を指頭痕・指ナデによって調整した結果と考えられる。

鉢部内面の調整は主として粗い刷毛（７本／cm）が横方向、斜め方向に施され、少量同方向の板ナデが施されているものもある。またハケ目、板ナデ前に指頭痕が認められるものもある。

法量は口径8.7～10.1cm、器高13.3～14.6cm、底径3.5～4.4cmを測る。鉢部の器厚は0.2～0.4cm、鉢部内高11.2～12.6cmを測る。脚部の器厚は0.4～0.5cm、脚高0.8～1.6cm、脚部内高0.7～1.5cmを測る。

鉢部の容量は500～600ccのもので、平均は545ccを測る。

### 小山・南谷遺跡ＳＨ509出土遺物

小山・南谷遺跡ＳＨ509から出土した遺物には製塩土器の完形のものが少なく、詳細は不明であるが、形態分類のＣ類の製塩土器と体部外面に併行叩き痕が施されている製塩土器が確認できる。製塩土器は鉢部と脚部が連続一体作りのものも認められるが、748・758は明確に連続一体作りとは断定できない。鉢部の形態がＣ類で、断面Ｖ字状を呈し、脚部は「ハ」の字に開く形態である。

外面の調整は鉢部外面に下方から上方へのヘラケズリが施されるものと叩き痕が施されているものもある。脚部外面には指頭痕、指ナデが施され、脚部と鉢部外面の調整が異なる。

鉢部外面のヘラケズリは下位から上位にかけて、幅1.0～1.5cmのヘラケズリが一気に施されている。ヘラケズリの範囲は口縁端部下3.0～4.5cmの範囲はヘラケズリが及んでおらず、指ナデ・指頭痕が認められる。鉢部外面の叩き痕は、鉢部下半では右下がりに、中位ではほぼ水平に施されてい

る。

鉢部外面のヘラケズリと脚部外面の指頭痕・指ナデの前後関係は、ヘラケズリが指頭痕・指ナデの上位にあることから、成形後、脚部外面を指頭痕·指ナデによって調整した後に、製塩土器本体を逆転させ、鉢部下方（脚部側）から上方（口縁部側）へとヘラケズリを行った結果と考えられる。

鉢部内面の調整は主として粗い刷毛（６～７本／cm）が横方向、斜め方向に施され、同方向の板ナデが施されているものもある。また指ナデが認められるものもある。

法量は口径9.2cm、器高17.2cm、底径3.8～4.6cmを測る。鉢部の器厚は鉢部外面ヘラケズリのものが0.2～0.4cm、叩きのものが0.7cm、鉢部内高15.6cmを測る。脚部の器厚は0.4～0.7cm、脚高0.8～1.6cm、脚部内高1.0～1.4cmを測る。

鉢部の容量は640ccを測る。

前述した各遺跡、遺構出土の製塩土器は、甕で時期設定を行った順番にそれぞれの特徴を提示した。

形態的には

①鉢部の形態のＡ類→Ｂ類への変化

ＳＨ515出土の製塩土器にはＡ・Ｂ類があり、ほとんどがＡ類でＢ類が少量

Ｂ類の出現は鉢部容量の増加と被熱の効率化

②口径、器高、底径、脚高、脚部内高などの縮小化傾向

③脚部の形態が筒状のものから「ハ」字状のものへの変化が

上記の要素から見ると甕で設定した大空遺跡→ＳＨ511→ＳＨ521・515・518・519→ＳＨ509の変遷に矛盾しない。しかしＳＨ521・515・518・519出土の製塩土器には明らかに鉢部の形態がＡ類を主とし、少量Ｂ類が出土する遺構（ＳＨ521・515）とＢ類しか出土しない遺構（ＳＨ518・519）に分離が可能であることから、ＳＨ521・515・518・519を細分し、大空遺跡→ＳＨ511→ＳＨ521・515→ＳＨ518・519→ＳＨ509への変遷とする。

ただし、製塩土器からＳＨ521・515とＳＨ518・519出土遺物を時期差ととらえ、細分したが、最も基準となる甕・高坏などの資料が少ないため、検証は今後の資料の増加で検討したい。

### （４）壺

#### 大空遺跡出土遺物

大空遺跡から出土した壺は頸部から口縁部の形態で分類できる。

頸部から口縁部にかけて外反しながら上方に延び、口縁端部をそのまま終わらせるもの、頸部から口縁部にかけて直線的に外上方に延びるもの、頸部が直線的に上方に延び、口縁部を外方に「く」の字に屈曲させ、口縁端部を上下に拡張するものがある。口縁端部外面には２～３条の退化凹線が認められるが、甕の口縁端部外面で認められる退化凹線に比べると明瞭である。体部外面の調整は粗いハケ目の後に縦方向のヘラミガキを密に施しており、体部外面上半までヘラミガキを施されているものが主体を占め、また体部外面最大径部分と体部と径部の境部分に櫛先刺突文、列点文が認められるものがかなり認められる。

体部内面に調整は縦方向、横方向のヘラケズリが全面に施されている。

体部が算盤状を呈し、頸部から口縁部にかけて細く延びる細頸壺がある。体部最大径部分と体部

と頸部の境に突帯を持ち、この部分のみに赤色顔料を施すものもある。

小山・南谷遺跡ＳＨ511出土遺物

小山・南谷遺跡ＳＨ511から出土した壺は頸部から口縁部の形態で分類できる。

頸部が直線的に上方に延び、口縁部を外反させ、口縁端部をそのまま終わらせるあるいは拡張するもの、頸部から口縁部にかけて外反しながら外上方に延びるもの、頸部が直線的に上方に延び、口縁部を外方に「く」の字に屈曲させ、口縁端部を上下に拡張するものがある。口縁端部外面には２条の退化凹線が認められるが、甕の口縁端部外面で認められる退化凹線に比べると明瞭である。体部外面の調整は粗いハケ目の後に縦方向のヘラミガキを密に施しており、体部外面上半までヘラミガキが施されているものと体部下半しかヘラミガキしていないものもある。

体部内面に調整は下半部が縦方向のヘラケズリで、体部最大径部分が指頭痕の後板ナデで、上半部が指頭痕の後ハケ目である。また全面板ナデ調整されているものもある。

小山・南谷遺跡ＳＨ521・515出土遺物

小山・南谷遺跡ＳＨ521・515から出土した壺は少ないが、頸部から口縁部の形態で分類できる。

頸部が直線的に上方に延び、口縁部を「く」の字に屈曲させ、口縁端部をそのまま終わらせるもの、頸部が直線的に外上方に延び、口縁部を「く」の字に屈曲させるもの、頸部が直線的に上方に延び、口縁部を外方に「く」の字に屈曲させ、口縁端部を上下に拡張するものがある。口縁端部外面には１条の退化凹線が認められる。

体部外面の調整は全面粗いハケ目が施されている。

体部内面の調整は上半部に指頭痕が、それ以外はヘラケズリが施されているものと考えられる。また全面ヘラケズリされているものも（874）もある。

小山・南谷遺跡ＳＨ518・519出土遺物

小山・南谷遺跡ＳＨ518・519から出土した壺は、頸部から口縁部の形態で分類できる。

頸部が直線的に上方に延び、口縁部を外反させるもの、頸部が直線的に外上方に延び、口縁部を「く」の字に屈曲させるもの、頸部が直線的に上方に延び、口縁部を外方に「く」の字に屈曲させるものがある。口縁端部外面はそのままで、退化凹線は認められない。

体部外面の調整は粗いハケ目の後に縦方向のヘラミガキを密に施しており、体部外面上半までヘラミガキが施されているものと体部下半しかヘラミガキしていないものもある。

体部内面に調整は上半部に指頭痕が、それ以外はヘラケズリが施されているものと考えられる。

小山・南谷遺跡ＳＨ509出土遺物

小山・南谷遺跡ＳＨ509から出土した壺は、頸部から口縁部の形態で分類できる。

頸部が直線的に上方に延び、口縁部を「く」の字に屈曲させ、更に上方に屈曲させる所謂二重口縁のもの、頸部が直線的に上方に延び、口縁部を外反させるものがある。二重口縁壺の口縁部外面には退化凹線が認められる。

体部外面の調整は粗いハケ目の後に縦方向のヘラミガキを施している。

体部内面に調整は上半部までヘラケズリが施されているものと考えられる。

### （5）高坏

#### 大空遺跡出土遺物

大空遺跡から出土した高坏は口縁部、脚部の形態で分類できる。

坏部から口縁部は上方に屈曲させ、口縁端部を左右に拡張させる。口縁端部上面には3条の退化凹線を持つものと指ナデにより窪ませるものがある。口縁端部を指ナデにより窪ませるものの脚柱部には、縦に一列5個の竹管文が施されている。また裾部には6条一単位でヘラ描きによる縦方向の条線が施されている。口縁端部上面に退化凹線を持つものは脚部に直径2㎜程度の穿孔が施されている。これ以外にも口縁端部をそのまま終わらせるものもある。

坏部の調整は外面ヘラケズリの後、分割ヘラミガキが施されており、内面は分割ヘラミガキされているものと放射状のヘラミガキを施すものが認められる。

#### 小山・南谷遺跡ＳＨ511出土遺物

小山・南谷遺跡ＳＨ511から出土した高坏は口縁部、脚部の形態で分類できる。

坏部から口縁部は上方に屈曲させ、口縁端部を左右に僅かに拡張させる。口縁端部上面には3条のかなり退化した凹線（818は沈線状になる）を持つものと口縁端部をそのまま終わらせるものもある。818は脚柱部を縦方向のヘラミガキの後、3単位の櫛描沈線により2分割し、裾部は縦方向のヘラ描き沈線を3～6㎜程度の間隔をあけて施している。他の高坏の脚部は概ねスカート状に緩やかに広がるが、818は脚柱部と裾部の境部分、ちょうど最下段の櫛描沈線部分に屈曲部があり、外方に広がる脚部である。口縁端部を指ナデにより窪ませるものの脚柱部には、縦に一列5個の竹管文が施されている。また裾部には6条一単位でヘラ描きによる縦方向の条線が施されている。口縁端部上面に退化凹線を持つものは脚部に直径2㎜程度の穿孔が施されている。これ以外にも坏部を椀状にするもの（822）もある。

坏部の調整は外面ヘラケズリの後、分割ヘラミガキが施されており、内面は放射状のヘラミガキ、ハケ目を施すものが認められる。

#### 小山・南谷遺跡ＳＨ521・515出土遺物

小山・南谷遺跡ＳＨ521・515から出土した高坏は少量で、脚柱部のみの出土である。

脚柱部と裾部の境部分に屈曲があり、裾部は外方に広がる。877は脚柱部に2段のヘラ描き沈線が、878は1段のヘラ描き沈線が施されている。

#### 小山・南谷遺跡ＳＨ518・519出土遺物

小山・南谷遺跡ＳＨ518・519から出土した高坏は口縁部の形態で分類できる。

坏部から口縁部は外上方に屈曲させ、口縁端部を左右に僅かに拡張させる。口縁端部上面にはかなり退化した凹線状の窪みを持つものと口縁部をそのまま外反させ、口縁端部を終わらせるものもある。

小山・南谷遺跡ＳＨ509出土遺物

小山・南谷遺跡ＳＨ509から出土した高坏は少量である。

脚柱部はかなり短く、外面にヘラ描きによる沈線が施されている。717・718は下川津Ｂ類土器の高坏で、胎土に角閃石を含む。

３．器種ごとの変化

大空遺跡、小山・南谷遺跡出土の遺物には壺、甕、高坏、製塩土器、鉢、器台等があるが、その中でそれぞれの時期ごとに形態変化が顕著に認められ、出土量ともに多い壺、甕、高坏、製塩土器についてその形態的な変化、調整の変化を見たい。

（１）壺

①口縁端部の上下の拡張の縮小化

徐々に上下の拡張が短くなり、ＳＨ518・519出土遺物では上下に若干摘み出す程度になり、ＳＨ509では口縁端部上部の指ナデにより、若干摘み出したようになるか、そのまま終わらせるものとなる。

②体部外面のヘラミガキの退化

口縁部が直線的に上方に延び、口縁部が「く」の字に外方に屈曲する壺で体部外面の調整を見ると、大空遺跡では体部外面全域に縦方向のヘラミガキが施されているが、ＳＨ511出土壺では体部全面へのヘラミガキは変わっていないが、若干粗くなり、上半部、体部最大径部分、下半部に分割され、それぞれに違う方向のヘラミガキが施されている。ＳＨ521・515・518・519出土壺はＳＨ511出土壺と同じようにヘラミガキが施されるが、粗くなり、全面ハケ目調整のものが出現する。ＳＨ509出土壺ではヘラミガキがかなり粗くなる。

③二重口縁壺、細頸壺の出現

ＳＨ509出土壺に二重口縁壺と細頸壺が出現し、細頸壺には角閃石を含む。細頸壺は下川津Ｂ類土器で、小山・南谷遺跡内でＳＨ509の時期に出現する。

（２）甕

①口縁端部の上下の拡張の縮小化

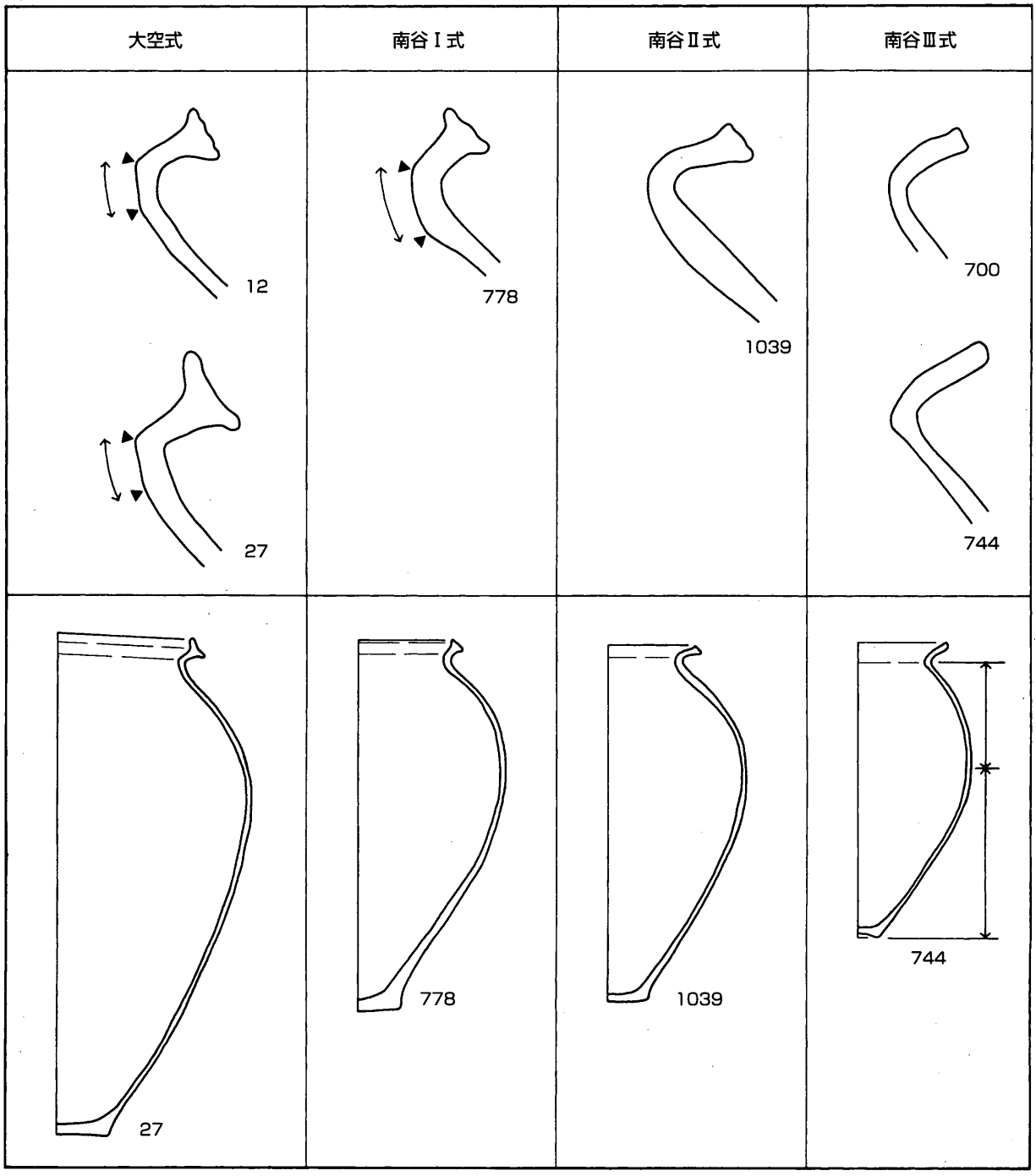
徐々に上下の拡張が短くなり、ＳＨ518・519出土遺物では上下に若干摘み出す程度になり、ＳＨ509では口縁端部上部の指ナデにより、若干摘み出したようになるか、そのまま終わらせるものとなる。

②頸部内面の上下の平坦面の形骸化

大空遺跡では頸部内面に上下の平坦面が明確に認められるが、ＳＨ511出土遺物では丸みを持った平坦面となり、徐々に形骸化していることが解る。ＳＨ521・515出土遺物では平坦面はなくなり、緩やかに屈曲する。

③体部最大径位置の低下

体部を底部から体部最大径部分と体部最大径部分から頸部屈曲部までに分け、体部最大径部分から頸部屈曲部までの長さを１とした時に、体部最大径部分から底部の長さを見ると、大空遺跡出




第189図　細部変遷図

土甕の平均は2.17となり、ＳＨ511出土甕では2.05、ＳＨ521・515・518・519出土甕では1.94、ＳＨ509出土甕では1.65と徐々に下位になっていくことが解る。

④底部突出の形骸化

大空遺跡出土甕では底部が明瞭に突出している。ＳＨ511出土甕では底部の突出度に変化はないが体部外面最下段のハケ目、ヘラミガキが雑になり、突出を形成した指頭痕が顕著に認められる。ＳＨ521・515・518・519出土甕でも突出する底部に変化はないが、若干底径が小さくなる。ＳＨ509出土甕では前期までの突出した底部はなくなり、底径もかなり小さくなり、底部が上げ底状のものも認められる。

⑤体部外面のヘラミガキの退化

大空遺跡出土甕で、体部外面の調整を見ると、大空遺跡ではほとんどの甕に、底部から体部最大径部分まで縦方向のヘラミガキが施されているが、ＳＨ511出土甕ではヘラミガキを施す個体数が減少し、若干粗くなる。ＳＨ518・519・509出土甕では体部外面のヘラミガキはなくなり、ハケ目のみとなる。

⑥櫛先刺突文、列点文の減少

大空遺跡出土壺、甕には、体部最大径部分と体部と径部の境部分に櫛先刺突文、列点文がかなりの個体数に認められるが、ＳＨ511出土甕では２点のみとなり、ＳＨ521・515以降、櫛先刺突文、列点文が施される甕はなくなる。

（３）高坏

①口縁端部の左右の拡張の縮小化

徐々に左右の拡張が短くなり、上面に施されていた２～３条の退化凹線もなくなる。

②口縁端部の拡張からそのまま終わらせる形態への変化

ＳＨ518・519出土高坏に口縁端部を拡張させるものが少量のこるが、ほとんどは口縁部を外反させ、端部をそのまま丸く収めるものが主体となる。

③吉備の影響

大空遺跡出土高坏（30）、ＳＨ511出土高坏（817・818）、ＳＨ515出土高坏（877・878）の口縁部の形態、脚部外面の櫛描、ヘラ描き沈線等は吉備の影響で出現している。

（４）製塩土器

①鉢部の形態のＡ類からＢ類への変化

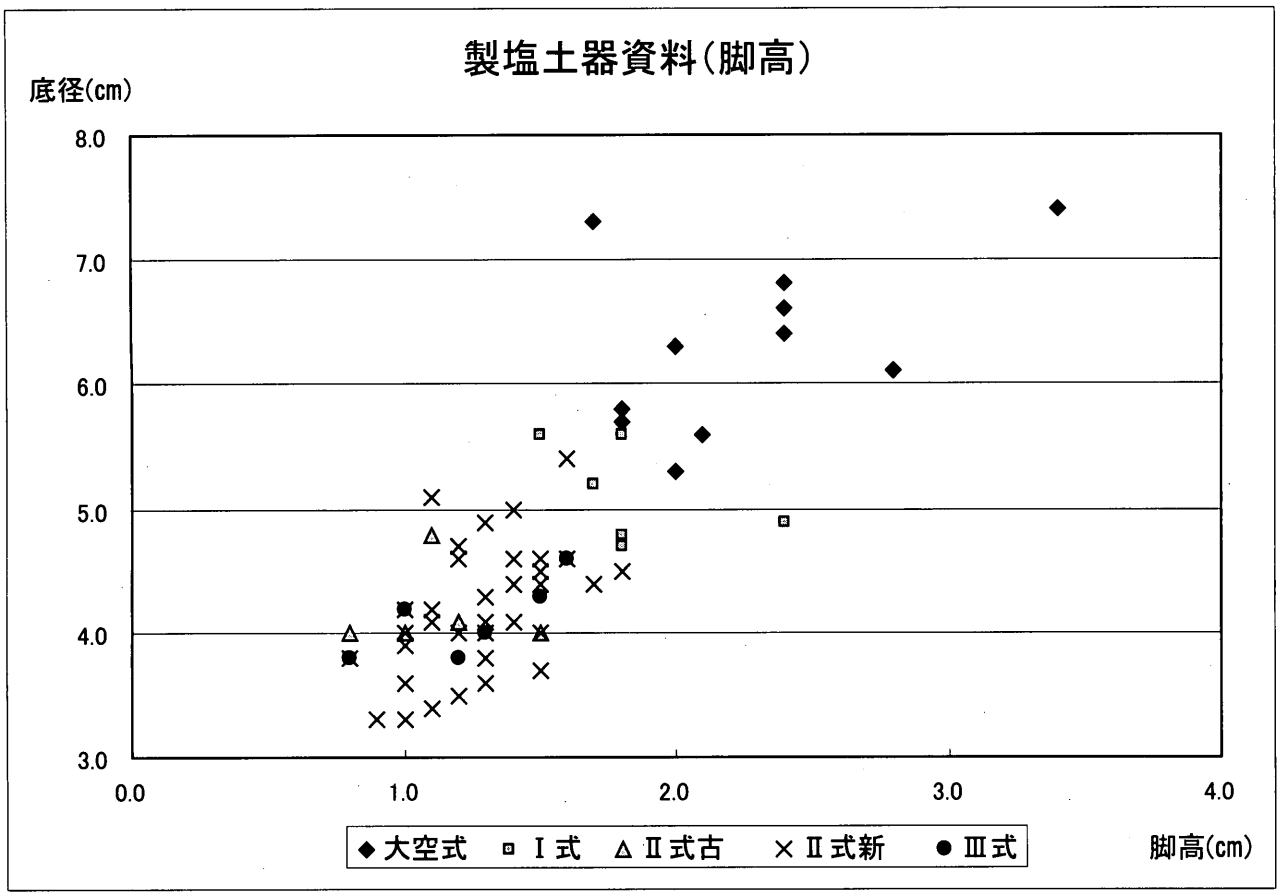
出土した製塩土器は鉢部の形態で、体部が直線的に外上方に延び、口縁部を内方に屈曲させるＡ－①類、体部が直線的に外上方に延び、口縁端部下２～３cmから内湾し、端部にかけて緩やかに屈曲するＡ－②類、体部全体を内湾させ、そのまま口縁端部となるＢ類、体部全体を若干内湾させ、そのまま口縁端部となるもので、鉢部の器高が高いＣ類に分類できる。

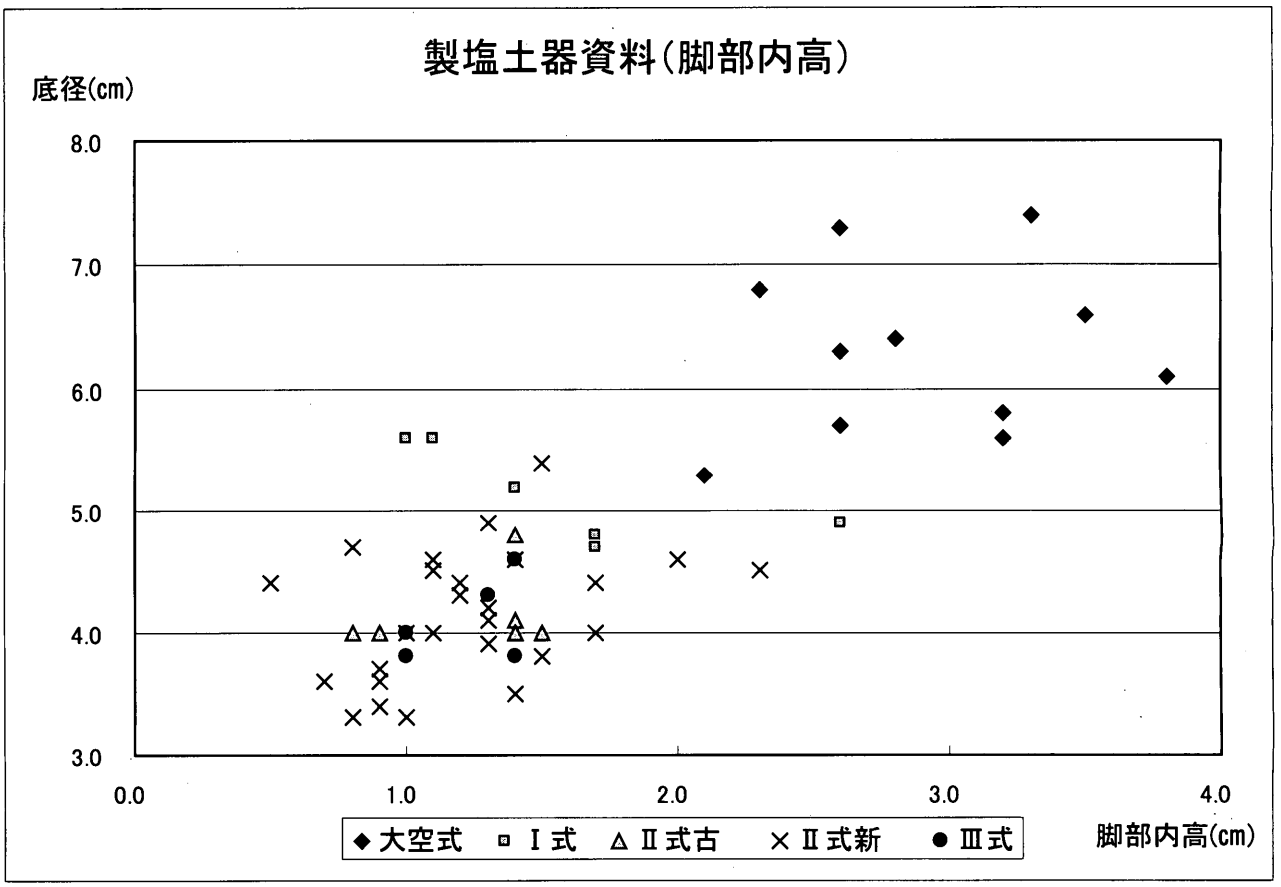
大空遺跡ではＡ類のみであるが、ＳＨ521・515出土製塩土器ではＡ類が主体の中に若干Ｂ類が出現し、ＳＨ518・519出土遺物ではＢ類のみとなる。ＳＨ509ではＣ類が出現する。

②筒状の脚部から「ハ」字状の脚部へ

大空遺跡の製塩土器の脚部の形状は、若干「ハ」の字に開き気味のものも認められるが、全体的には筒状を呈している。ＳＨ511出土遺物では「ハ」の字になり、以後脚高は小さくなるものの、この形態を維持している。

参考資料として例示した前田東・中村遺跡Ｆ区ＳＫ07出土遺物、志度町天野出土遺物の製塩土器を見ると脚部が筒状を呈しており、脚部筒状の部分がしっかりしている両遺跡より大空遺跡は後出することが解る。両遺跡の時期は弥生時代中期（Ⅳ期前半）と考えられ、大空遺跡とは若干時期差がある。この間の資料が現在確認されていない現状では、同じ系譜上の製塩土器とは断定できない。しかし鉢部の形態がどちらもＡ類であること、脚部の形態が筒状を呈すること、脚部・鉢部外面の調整が下方から上方に向けてのヘラケズリであることからこれらは同じ系譜上のものと考えた




第190図　製塩土器法量変化

い。

③ヘラケズリ方法

製塩土器の鉢部と脚部外面には主としてヘラケズリが施されている。ヘラケズリの単位を見ると幅は1.0～1.5cm程度で、全期間通じてほとんど変化はない。しかしヘラケズリの長さ（残存長）を見ると大空遺跡出土の製塩土器のヘラケズリは口縁端部側から脚部へと重複させながら行っており、結果的に確認できる残存長は5.0～10.0cmである。ＳＨ511出土の製塩土器になると部分的に重複してヘラケズリを施すが、主体として脚部側の下方から口縁部側の上方へのヘラケズリが認められる。この一気のヘラケズリはこの時期以降同じ方法がとられている。

④ヘラケズリの範囲の変化

製塩土器の鉢部、脚部外面に施されているヘラケズリの範囲は大空遺跡、ＳＨ511ではともに鉢部と脚部に施されているが、ＳＨ521・515・518・519以降は鉢部外面のみとなる。また鉢部外面のヘラケズリの範囲も大空遺跡、ＳＨ511では口縁端部までヘラケズリが及んでいるものが、徐々に口縁端部下1.0～3.0cm程度はヘラケズリを行わず、指ナデで終わらせるようになる。

⑤鉢部外面の叩き痕の出現

製塩土器の鉢部外面の調整は基本的にはヘラケズリであるが、ＳＨ509出土製塩土器に体部外面に叩き痕を施す製塩土器が少量出現する。ＳＨ511出土の製塩土器にヘラケズリ前に叩き痕を持つもの（835）があるため、鉢部外面調整における叩き痕の初現は不明である。ただ確実に最終調整として、鉢部外面に叩き痕が認められるのはＳＨ509出土製塩土器からである。

⑥法量の変化

製塩土器の法量の変化として、口径、器高、底径、鉢部内高、脚高、脚部内高について見てみたい。

口径は大空遺跡出土製塩土器では12.0～15.2cm、ＳＨ511出土製塩土器では12.8～14.2cm、ＳＨ521・515出土製塩土器では8.5～11.5cm、ＳＨ518・519出土製塩土器では8.7～10.1cm、ＳＨ509では出土製塩土器では9.2cmを測る。特にＳＨ511からＳＨ521・515の出土製塩土器に口径の縮小が認められ、これ以降はほぼ同じとなる。

器高は大空遺跡出土製塩土器では15.2～19.0cm、ＳＨ511出土製塩土器では15.9～16.2cm、ＳＨ521・515出土製塩土器では12.5～12.8cm、ＳＨ518・519出土製塩土器では13.3～14.6cm、ＳＨ509では出土製塩土器では17.2cmを測る。器高は徐々に低くなる傾向があるが、鉢部の形態のＢ類の出現とともに高くなる傾向が認められる。

底径は大空遺跡出土製塩土器では5.3～7.4cm、ＳＨ511出土製塩土器では4.9～5.6cm、ＳＨ521・515出土製塩土器では3.6～4.5cm、ＳＨ518・519出土製塩土器では3.5～4.4cm、ＳＨ509では出土製塩土器では3.8～4.6cmを測る。底径は徐々に小さくなり、特にＳＨ511からＳＨ521・515出土製塩土器に底径の縮小が著しく認められ、これ以降はほぼ同じとなる。

鉢部内高は大空遺跡出土製塩土器では12.8～15.6cm、ＳＨ511出土製塩土器では12.9～14.2cm、ＳＨ521・515出土製塩土器では10.7～12.4cm、ＳＨ518・519出土製塩土器では11.2～12.6cm、ＳＨ509では出土製塩土器では15.6cmを測る。鉢部内高は徐々に低くなる傾向があるが、鉢部の形態のＢ類の出現とともに高くなる傾向が認められる。

脚高は大空遺跡出土製塩土器では1.7～3.4cm、ＳＨ511出土製塩土器では1.5～2.4cm、ＳＨ521・

515出土製塩土器では1.0～1.5cm、ＳＨ518・519出土製塩土器では0.8～1.6cm、ＳＨ509では出土製塩土器では0.8～1.6cmを測る。特にＳＨ511からＳＨ521・515の出土製塩土器に脚高の縮小が認められ、これ以降はほぼ同じとなる。

脚部内高は大空遺跡出土製塩土器では2.1～3.8cm、ＳＨ511出土製塩土器では1.0～2.6cm、ＳＨ521・515出土製塩土器では0.8～1.5cm、ＳＨ518・519出土製塩土器では0.7～1.5cm、ＳＨ509では出土製塩土器では1.0～1.4cmを測る。脚部内高は徐々に低くなり、特にＳＨ511からＳＨ521・515の出土製塩土器に脚部内高の縮小が著しく認められ、これ以降はほぼ同じとなる。

脚部の法量である底径、脚高、脚部内高は鉢部を支えることから鉢部の大きさに左右され、同じ時期に縮小する。しかし、器高、鉢部内高、特に鉢部の法量である鉢部内高は鉢部の形態の変化に左右されていることが解る。

⑦鉢部容量の変化

鉢部の容量は大空遺跡出土製塩土器では平均1,343cc、ＳＨ511出土製塩土器では平均950cc、ＳＨ521・515出土製塩土器では平均440cc、ＳＨ518・519出土製塩土器では545cc、ＳＨ509では出土製塩土器では640ccを測る。

鉢部の器高、鉢部内高の縮小に伴い鉢部の容量も少なくなり、鉢部の形態のＢ類の出現とともに多くなる傾向が認められる。鉢部の形態のＢ類の出現は容量の増加をもたらし、体部全体を内湾させることで熱効率、口縁部からのふきこぼれを押さえるなど製塩土器による塩づくりに画期的なものだったと考えられる。

第５表　製塩土器鉢部容量表

| 期 | 大空式 | | 南谷Ⅰ式 | | 南谷Ⅱ式（古） | | 南谷Ⅱ式（新） | | 南谷Ⅲ式 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 資料点数 | 報文番号 | 容量(cc) | 報文番号 | 容量(cc) | 報文番号 | 容量(cc) | 報文番号 | 容量(cc) | 報文番号 | 容量(cc) |
| 1 | 43 | 844 | 832 | 950 | 881 | 400 | 967 | 560 | 748 | 640 |
| 2 | 46 | 1,463 | 833 | 1,110 | 884 | 430 | 1030 | 590 | | |
| 3 | 48 | 1,126 | 834 | 840 | 1111 | 520 | 1031 | 460 | | |
| 4 | 49 | 1,337 | 835 | 900 | 1113 | 420 | 1032 | 560 | | |
| 5 | 50 | 1,454 | | | | | 1033 | 570 | | |
| 6 | | | | | | | 1042 | 550 | | |
| 7 | | | | | | | 1056 | 520 | | |
| 8 | | | | | | | 1079 | 550 | | |
| 平均 | | 1,343 | | 950 | | 440 | | 545 | | 640 |

※大空式（大空遺跡）の資料の報文番号は高松市歴史資料館収蔵資料目録の遺物番号で、容量は実測図から計算により、算出した。
※大空式の平均値は報文番号43を除いたものである。
※南谷Ⅰ～Ⅲ式の資料は小山・南谷遺跡竪穴住居跡出土遺物である。

参考資料

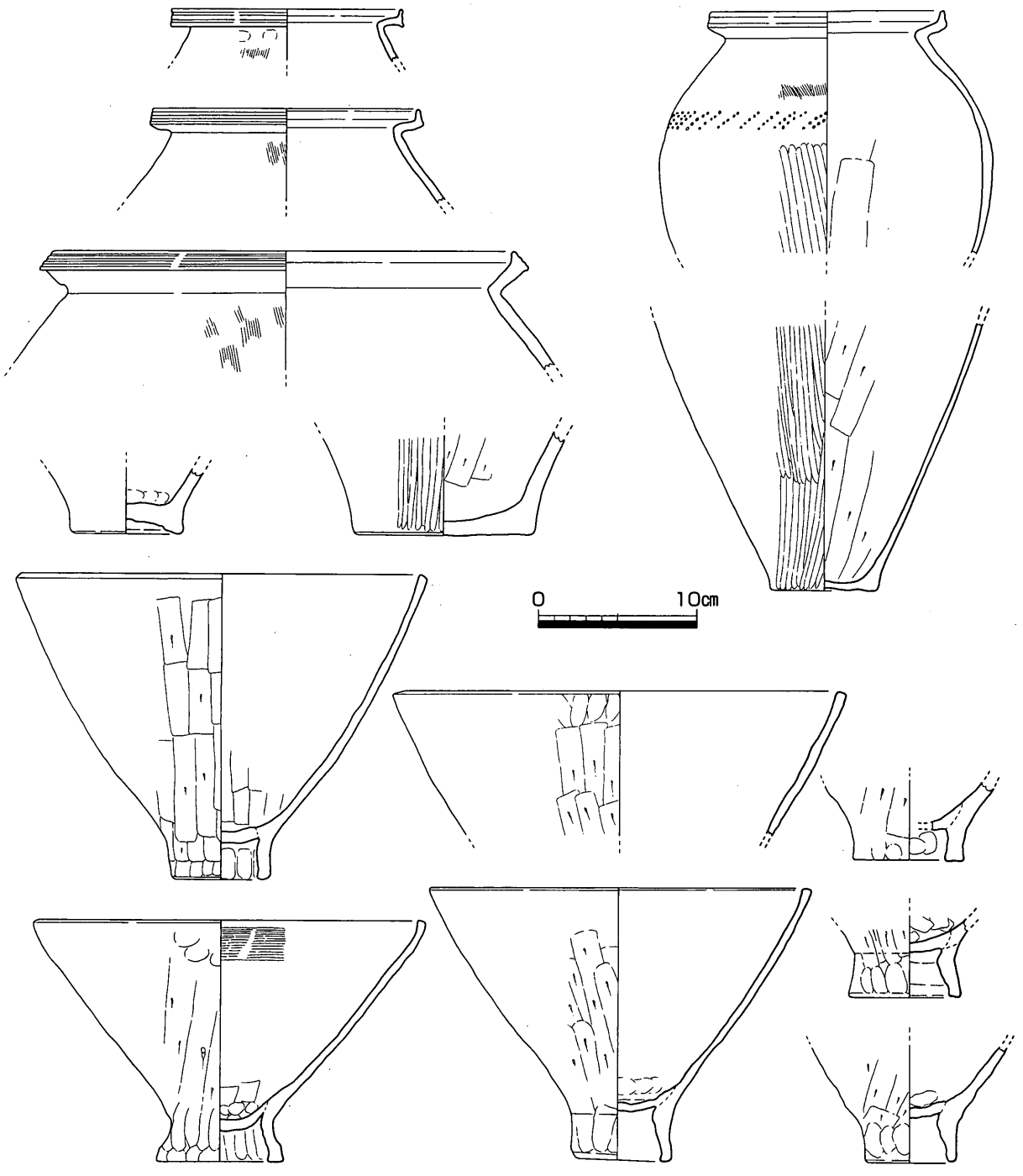
香川県内で大空式（大空遺跡出土遺物）より古い製塩土器は高松市前田東町に所在する前田東・中村遺跡のＦ区ＳＫ07出土遺物とさぬき市志度町字天野（旧大川郡志度町志度字天野）から出土した遺物がある。

前田東・中村遺跡Ｆ区ＳＫ07出土遺物

高松市前田東町に所在する前田東・中村遺跡は、立石山山塊の南西の裾部に位置する。製塩土器が出土したＳＫ07は東西に800mと長い調査区の東部、Ｆ４区の南側の標高約23mで検出しており、平面形が隅丸の長方形で、長辺1.45m、短辺1.1m、深さ0.85を測る土坑である。

製塩土器はこの土坑の最上部に一括して廃棄された状態で出土している。時期は共伴遺物から弥生時代中期（Ⅳ期前半）と考えられており、周辺には同時期の竪穴住居跡、土坑等を検出している。

前田東・中村遺跡内では弥生時代後期（Ⅴ期）の製塩土器は出土しているもののこの土坑出土の




第191図　前田東・中村遺跡Ｆ区ＳＫ07出土遺物実測図

製塩土器以外に同時期の製塩土器は出土しておらず、また弥生時代Ⅳ期前半と後期間を埋める製塩土器も出土していない。

ＳＫ07からは甕とともに12点の製塩土器が出土している。

これらの製塩土器は鉢部と脚部が連続一体作りで、鉢部底に円盤を充填して作られている。

鉢部は上部が開く、断面Ｕ字状を呈する。体部は直線的に外上方に延び、一部口縁端部のみを僅かに内方に屈曲させるものも認められるが、ほとんどは体部からそのまま口縁端部となる。鉢部内底面はやや窪ませるが、平丸底状を呈し、直径４～５cmを測る。

鉢部外面には下方から上方へのヘラケズリが施され、内面には横方向のハケ目を施すものも認められる。鉢部外面のヘラケズリは口縁端部下1.0～1.5cmまで施され、一気に下方から上方に向けてヘラケズリされているものと残存する長さが5.0～6.0cmで、脚部側が上位となるようにヘラケズリされているものが確認できる。

脚部はほぼ真っ直ぐ下方に延び、筒状を呈する。脚部外面には鉢部外面から連続したヘラケズリが施されているもの、指頭痕・指ナデが施されているものの２種類が認められる。

鉢部外面のヘラケズリと脚部外面の指頭痕・指ナデは、指頭痕・指ナデが上位にあることから、成形後、製塩土器本体を逆転させ、鉢部の下方（口縁部）から上方（脚部側）へとヘラケズリを行った後に、脚部外面の調整を行った結果と考えられる。また鉢部外面のヘラケズリと脚部外面のヘラケズリは、鉢部外面のヘラケズリが上位にあることから、成形後、製塩土器本体を逆転させ、上方（脚部）から下方（口縁部）へ、脚部外面のヘラケズリを行った後に、鉢部外面のヘラケズリを行った結果と考えられる。脚部外面の調整の違いでヘラケズリを行う方向に差が認められる。

法量は口径23.0～28.0cm、器高15.0～19.0、底径5.0～8.0cmを測る。鉢部の器厚は約0.6cm、鉢部内高は12.0～16.0cm、脚部の器厚は約0.9cm、脚部内高は2.3～2.8cmを測る。

鉢部・脚部とも器厚は厚いものの、成形・調整とも丁寧に作られている。

これらの製塩土器は鉢部の形態的にはＡ－①類と考えられ、鉢部と脚部の連続一体作り、鉢部外面のヘラケズリの方法が大空遺跡出土の製塩土器と類似するが、法量、脚部の形態から大空遺跡出土製塩土器より先行することが解る。また共伴する甕が弥生時代中期（Ⅳ期前半）であることからも、先行することを裏付けている。

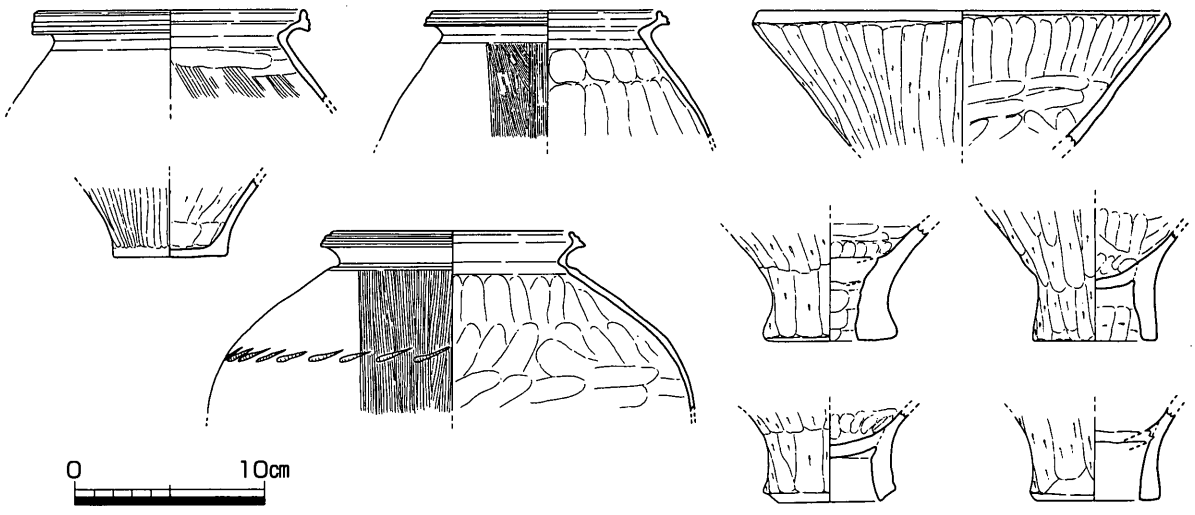
### 志度町天野出土遺物

製塩土器出土地はさぬき市志度町天野（旧大川郡志度町志度字天野）に所在する。志度町には志度湾に面する狭い平野があり、その周囲には雲附山、五瀬山などの山塊が平野を取り囲んでいる。周囲の山塊の東側に位置する五瀬山から北西方向に延びる丘陵の北緩斜面の標高約50ｍの位置で、製塩土器が出土した。出土地点の北には五瀬山越えの天野峠があり、現在は高松から津田・大内町へ向けて延びる国道11号線がある。

出土遺物には甕、製塩土器があり、すべて包含層からの出土で、報告されている遺物は４点の甕とともに５点の製塩土器である。

これらの製塩土器は鉢部と脚部が連続一体作りで、鉢部底に円盤を充填して作られている。

鉢部は上部が開く、断面Ｕ字状を呈する。体部は直線的に外上方に延び、口縁部は体部からそのまま終わらせるが、端部内面を内方に摘み出す。鉢部内底面はやや窪ませるが、平丸底状を呈し、




第192図　志度町天野出土遺物実測図

直径５～６cmを測る。

鉢部外面には下方から上方へのヘラケズリが施され、内面には指ナデが顕著に施されている。鉢部外面のヘラケズリは口縁端部まで施され、一気に下方から上方に向けてヘラケズリされている。

脚部はほぼ真っ直ぐ下方に延び、筒状を呈する。脚部外面には鉢部外面とは別の単位でヘラケズリが施されている。

鉢部外面のヘラケズリと脚部外面のヘラケズリは鉢部側が上位となっていることから、成形後、製塩土器本体を逆転させ、上方（脚部）から下方（口縁部）へ、脚部外面のヘラケズリを行った後に、鉢部外面のヘラケズリを行った結果と考えられる。

法量は口径21.3cm、底径5.0～7.0cmを測る。鉢部の器厚は約0.5cm、脚部の器厚は約0.5～0.8cm、脚部内高は2.4～2.7cmを測る。

鉢部・脚部とも器厚は厚いものの、成形・調整とも丁寧に作られている。

これらの製塩土器は鉢部の形態的にはＡ－①類と考えられ、鉢部と脚部の連続一体作り、鉢部外面のヘラケズリの方法が大空遺跡出土の製塩土器と類似するが、法量、脚部の形態から大空遺跡出土製塩土器より先行することが解る。また共伴する甕が弥生時代中期（Ⅳ期前半）であることからも、先行することを裏付けている。

## ４．時期設定

大空遺跡、小山・南谷遺跡出土遺物を詳細に検討した結果、大空遺跡→ＳＨ511→ＳＨ521・515→ＳＨ518・519→ＳＨ509への変遷が可能となった。この５つに分けた遺跡・遺構の変遷順に、弥生時代の集落が所在する小字名をとり、大空式～南谷Ⅲ式とする。

つまり遺跡・遺構から出土した遺物を標識とし、大空遺跡出土遺物を大空式、小山･南谷遺跡ＳＨ511出土遺物を南谷Ⅰ式、小山・南谷遺跡ＳＨ521・515・518・519出土遺物を南谷Ⅱ式、小山･南谷遺跡ＳＨ509出土遺物を南谷Ⅲ式とし、更に製塩土器の成果を基に南谷Ⅱ式を細分し、大空遺跡出土遺物を大空式、小山・南谷遺跡ＳＨ511出土遺物を南谷Ⅰ式、小山・南谷遺跡ＳＨ521・515出土遺物を南谷Ⅱ式古段階、小山・南谷遺跡ＳＨ518・519出土遺物を南谷Ⅱ式新段階、小山・南谷遺

跡ＳＨ509出土遺物を南谷Ⅲ式とする（第188図）。ただし、南谷Ⅱ式の新・古は形態変化の基準とした甕の出土量が少なく、製塩土器で補完したが、甕の形態変化と製塩土器の形態変化の速度差が認められることから、ここでは暫定的に用いている。

また、南谷Ⅱ式と南谷Ⅲ式の間には甕の形態の極端な変化、調整の極端な粗雑化、製塩土器のＣ類の突然の出現など、大空式～南谷Ⅱ式の連続性と比べ、南谷Ⅱ式と南谷Ⅲ式の間に連続性を感じない。おそらく南谷Ⅱ式と南谷Ⅲ式間には１期前後の空白期があるものと考えるが、小山・南谷遺跡の出土資料でこれを埋める資料が出土していないため、今後の資料の増加を待って検討したい。

大空式～南谷Ⅲ式の時期は、香川県内の弥生土器編年に当てはめると弥生時代後期初頭から中葉になる。

参考文献


・「小山・南谷遺跡」『県道高松志度線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成５年度』香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1994
・「前田東・中村遺跡」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第３冊』香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1995
・「上天神遺跡」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第６冊』香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1995
・「下川津遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ』香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1990
・井沢肇一　「志度町天野出土の弥生式土器について」『文化財協会報　昭和56年　特別号』香川県文化財保護協会　1982
・「大空遺跡出土弥生土器」『高松市歴史資料館収蔵資料目録』高松市歴史資料館　1996
・「奥の坊遺跡群Ⅰ（奥の坊地区(試掘)・大空古墳・金川渕古墳）」『高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第１冊』高松市教育委員会　1999
・「奥の坊遺跡群Ⅱ（奥の坊権現前遺跡）」『高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第２冊』高松市教育委員会　2004
・「奥の坊遺跡群Ⅲ（大空北遺跡・奥の坊奥池西遺跡）」『高松市東部運動公園（仮称）整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第３冊』高松市教育委員会　2004

## 第３節　角閃石含有土器について

### １．はじめに

小山･南谷遺跡から出土した遺物の胎土を見ると0.3～3.0㎜程度の石英・長石を多く含み、荒い胎土で、黄茶色を呈するものと0.2～1.0㎜程度の石英・長石と0.2～1.0㎜程度の角閃石を含み、胎土が精良で、褐茶色を呈するものがある。前者は出土遺物の胎土としては主体を占めていることから小山・南谷遺跡が位置する高松市高松町南谷の地域で産出する粘土で製作されたものと考えられ、後者は胎土に角閃石を含むことから他地域からの搬入品と考えられる。

胎土に角閃石を含む土器については、大久保氏、森下氏により高松平野に所在する遺跡出土の土器についての詳細な検討がある。

森下氏は太田下・須川遺跡出土の土器を「角閃石と考えられる黒色砂粒を含む土器の胎土を胎土１類」と呼称し、上天神遺跡、太田下・須川遺跡出土土器では90％を超える極めて高い比率で胎土１類土器が出土しているとした(1)。また大久保氏は高松平野内の遺跡出土の土器を観察することにより、両遺跡からの距離が遠くなるほど胎土１類土器は少なくなり、高松平野の東部に位置する南谷遺跡（弥生時代後期前葉～中葉)、前田東・中村遺跡（弥生時代後期前葉～中葉）においては約１／４程度となるとしている(2)。

大久保氏は胎土１類土器の生産地について明言は避けているものの胎土１類を在地品とし、上天神遺跡を中心にして概ね半径４㎞圏内で製作された土器としている(3)。

小山・南谷遺跡出土の角閃石を含む土器が、太田下・須川遺跡で定義した胎土１類土器そのもので、上天神遺跡を中心として概ね半径４㎞圏内から搬入されているものかは不明であるが、小山・南谷遺跡出土土器中主体を占めていないことから明らかに胎土に角閃石を含んでいる土器は他地域からの搬入品とすることが可能である。

### ２．角閃石含有率と出現時期

角閃石含有率は胎土に含まれる角閃石を肉眼により観察し、第６表に主要な器種ごと(甕、高坏、壺、鉢、製塩土器）の全破片点数中の角閃石を含む破片点数と、割合を％で示した。

その結果、甕では南谷Ⅰ式、南谷Ⅱ式古段階では胎土に角閃石を含むものはなく、南谷Ⅱ式新段階から南谷Ⅲ式までの間10～15％程度出現する。高坏では南谷Ⅰ式から40％と高い割合で出土しており、継続的に多量に出土する器種である。壺も高坏と同様に南谷Ⅰ式から角閃石を含む胎土の壺が出現するが、10％以下と少ない。しかし南谷Ⅲ式になると35％と高い割合で出土していることが解る。鉢は出土点数が少ないこともあるが、南谷Ⅱ式新段階以降出現する。製塩土器は南谷Ⅱ式古段階から38％と高い割合で出土しており、以後継続的に10％以上となる。

大空式とした大空遺跡の土器を詳細に検討していないため、胎土１類土器の有無については不明であるが、小山・南谷遺跡の出土遺物をみる限り、南谷Ⅰ式の段階で高坏、壺に角閃石を含むものがあることが解る。それ以外の器種については南谷Ⅱ式の段階で出現するようである。

### ３．特定器種の時間差搬入

胎土を肉眼観察した器種は甕、高坏、壺、鉢、製塩土器についてである。弥生時代後期初頭の上天神遺跡４区ＳＤ08出土遺物の土器比率を見ると壺、甕、高坏（製塩土器は出土していない。鉢は

## 第６表　角閃石含有比率

| 時期 | 遺構名 | 甕 | | | 高坏 | | | 壺 | | | 鉢 | | | 製塩土器 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 角閃石 | 計 | 割合 | 角閃石 | 計 | 割合 | 角閃石 | 計 | 割合 | 角閃石 | 計 | 割合 | 角閃石 | 計 | 割合 | 合計 |
| Ⅰ式 | ＳＨ511上層 | 0 | 984 | 0.0% | 42 | 105 | 40.0% | 5 | 96 | 5.2% | 0 | 0 | 0.0% | 0 | 118 | 0.0% | 1303 |
| Ⅱ式（古） | ＳＨ521 | 0 | 52 | 0.0% | 1 | 1 | 100% | 1 | 11 | 9.1% | 0 | 1 | 0.0% | 16 | 42 | 38.1% | 107 |
| | ＳＨ515 | 0 | 54 | 0.0% | 0 | 8 | 0.0% | 0 | 43 | 0.0% | 0 | 1 | 0.0% | 24 | 158 | 15.2% | 264 |
| Ⅱ式（新） | ＳＨ518 | 102 | 672 | 15.2% | 7 | 43 | 16.3% | 74 | 813 | 9.1% | 0 | 14 | 0.0% | 50 | 498 | 10.0% | 2040 |
| | ＳＨ519 | 3 | 662 | 0.5% | 0 | 5 | 0.0% | 0 | 66 | 0.0% | 1 | 64 | 1.6% | 25 | 110 | 22.7% | 907 |
| Ⅲ式 | ＳＨ509 | 92 | 861 | 10.7% | 6 | 18 | 33.3% | 6 | 17 | 35.3% | 1 | 18 | 5.6% | 40 | 46 | 87.0% | 960 |

## 第７表　角閃石含有器種時期別変遷

| | 大空式 | 南谷Ⅰ式 | Ⅱ式(古) | Ⅱ式(新) | Ⅲ式 |
|---|---|---|---|---|---|
| 高坏 | － | ● | ● | ●(少量) | ● |
| 壺 | － | ●(少量) | ●(少量) | ●(少量) | ● |
| 製塩土器 | － | | ● | ● | ● |
| 甕 | － | | | ●(少量) | ● |
| 鉢 | － | | | ●(少量) | ●(少量) |

大型鉢のみ）には胎土１類が確認できる[4]。若干後出する小山・南谷遺跡から出土した胎土１類が高松平野、特に上天神遺跡を中心とした地域からの搬入品であれば、弥生時代後期初頭の段階でほとんど全ての器種が搬入されていてもおかしくない。しかし、小山・南谷遺跡では胎土１類を持つ器種の搬入時期に差が認められる（第７表）。

小山・南谷遺跡では胎土１類の高坏、壺が先行して搬入されるようである。壺は5.2％と少量であるが、特に高坏の高坏全体に占める割合が40％と多いことが解る。

これは煮炊きという日常生活に欠くことができない器種ではなくて、高坏などの特定器種の移動がまず行われていたことが確認できた。

しかし、前述したがこの作業については、胎土に含まれる角閃石の有無を肉眼観察した結果であることから、ここでは傾向があるという結果に留めたい。


参考文献

・「下川津遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ』香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1990


註

（1）「太田下・須川遺跡」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊』香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1995

（2）「上天神遺跡」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第６冊』香川県教育委員会、財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1995

（3）註（2）に同じ

（3）註（2）に同じ

## 第４節　弥生時代後期前半～中葉の遺構の変遷

### １．はじめに

小山・南谷遺跡は東西1,500mとかなり広い範囲の遺跡で、第Ⅰ～Ⅲ調査区では弥生時代後期前半～中葉を主とする時期の遺構を中心に検出し、第Ⅳ・Ⅴ調査区では古代を主とする遺構を検出している。

ここでは弥生時代の遺構を主として検出している第Ⅱ調査区を中心に、弥生時代後期前半～中葉にかけての遺構の変遷を見てみたい。遺構の変遷の画期は第５章第２節で設定した大空式～南谷Ⅲ式を基準とする。また周辺で検出している遺構を含め、集落の広がり、変遷を追ってみたい。

### ２．大空式以前

大空式が弥生時代後期初頭であることから、それ以前となると弥生時代中期の遺構となり、小山・南谷遺跡では弥生時代中期の土器は出土しているものの明確な遺構は検出していない。そのため周辺の遺跡も含めて遺構をみると、奥の坊権現前遺跡で竪穴住居跡２棟、土坑１基が、大空北遺跡で竪穴住居跡７棟、土坑１基、溝２条が確認されている。これらの遺構は出土遺物から弥生時代中期前半～末頃と考えられる。

立石山山塊の北西部緩斜面に位置する遺跡から、弥生時代の集落の広がりが想定でき、出現は弥生時代中期前半に遡ることが解る。

竪穴住居跡の平面形態は主として円形を呈するが、僅かに方形のものも出現している。

### ３．大空式

大空式は弥生時代後期初頭である。

この時期の遺跡は大空遺跡、南谷遺跡で、集落の中心がやや緩斜面の高所側、南側に移動するものと考えられる。

### ４．南谷Ⅰ式

南谷Ⅰ式は弥生時代後期前半で、小山・南谷遺跡で検出した遺構からその変遷を見ると竪穴住居跡２棟のみで、調査区東部に集中する。周辺の遺跡では南谷遺跡で若干遺物が出土している程度で、この時期の遺構はあまり広範囲に広がってないものと考える。

### ５．南谷Ⅱ式

南谷Ⅱ式は弥生時代後期前半で、小山・南谷遺跡では掘立柱建物跡１棟、竪穴住居跡11棟、溝11条、井戸跡１基を検出している。これらの遺構は第Ⅱ調査区全域で検出しており、南谷Ⅰ式に比べるとかなり遺構数が増加している。

竪穴住居跡の平面形態は円形のものと方形のものがあり、方形のものが９棟と多数を占める。溝は緩斜面の傾斜等高線に併行するものと直交するものがある。等高線に併行する溝と直行する溝は延長し、復元すると直交するようで、また等高線に直交する溝は、溝間約25mで併行していることから、これらの溝は緩斜面上部からの雨水を排水するための機能と竪穴住居を区画するために計画的に掘削されているものと考えられる。

周辺の遺跡では南谷遺跡、奥の坊権現前遺跡、奥の坊奥池西遺跡などでも遺構・遺物が確認されていることから、この時期にかなり広範囲に集落が拡大するものと考えられる。

## 6．南谷Ⅲ式

南谷Ⅲ式は弥生時代後期中葉で、小山･南谷遺跡では竪穴住居跡３棟、土坑、溝を検出している。これらの遺構は概ね調査区東部に集中し、南谷Ⅱ式に比べると遺構数は減少する。

竪穴住居跡の平面形態は方形のみで、南谷Ⅱ式まであった円形の竪穴住居跡はなくなる。溝は等高線に直交するものを主としており、依然として区画としての機能を持っているものと考えられる。

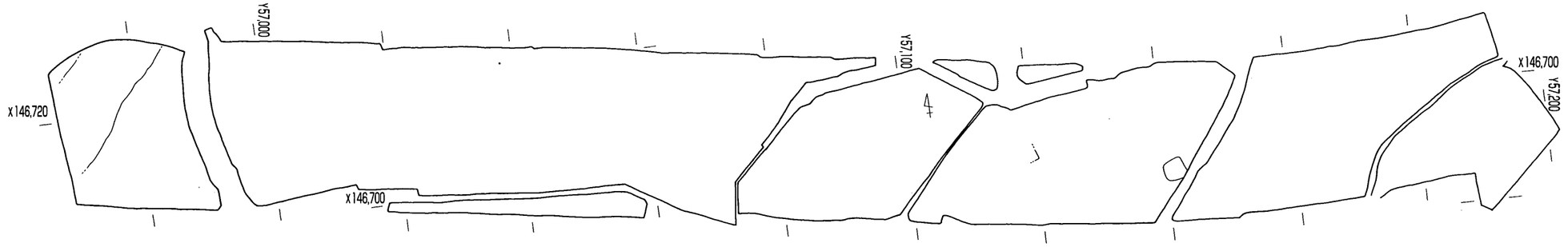
## 7．まとめ

小山・南谷遺跡周辺の遺跡も含め、集落の広がり、遺構の変遷を見てきた。

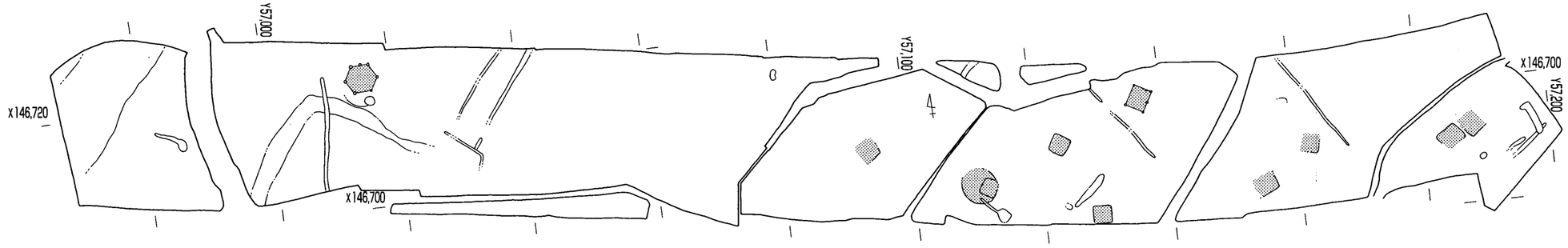
その結果、小山・南谷遺跡周辺で集落として成立するのは弥生時代中期前半で、弥生時代後期中葉まで継続して集落が形成されているようである。特に南谷Ⅱ式の弥生時代後期前半に集落域の拡大と遺構数の増加が認められることが解った。

また、それぞれの遺跡ではかなり製塩土器が出土しており、製塩を生業とする集団の集落であることが解った。

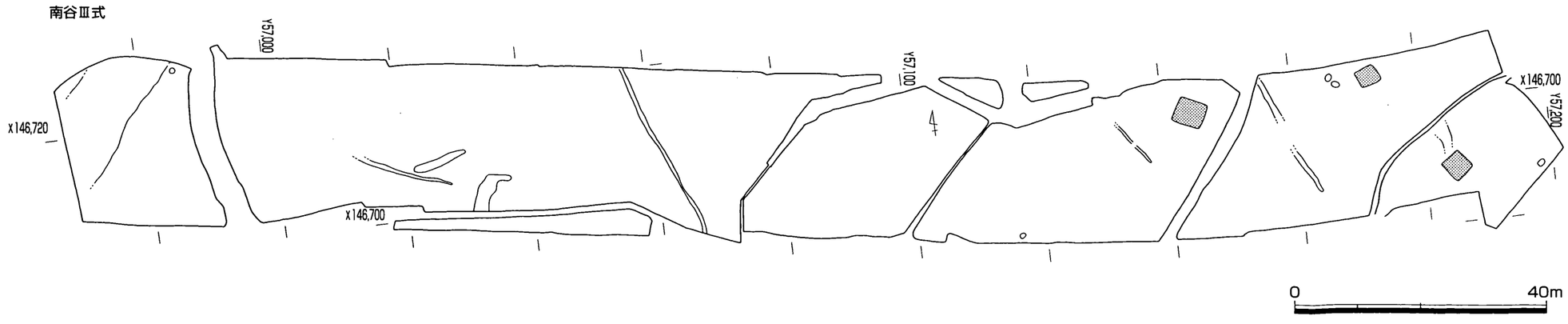
南谷Ⅰ式




南谷Ⅱ式




南谷Ⅲ式




第193図　第Ⅱ調査地区、弥生時代遺構変遷図

# 観　察　表

## 第８表　柱穴観察表

### 第Ⅰ調査区

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| E-2 | 5001 | － | － | 円形 | 24 | 18 | A |
| E-2 | 5002 | － | － | 円形 | 15 | 14 | B |
| E-2 | 5003 | － | － | 円形 | 30 | 23 | B |
| E-2 | 5004 | － | － | 円形 | 17 | 9 | A |
| E-2 | 5005 | － | － | 円形 | 16 | 11 | A |
| E-2 | 5006 | － | － | 円形 | 17 | 11 | A |
| E-2 | 5007 | － | － | 円形 | 18 | 10 | A |
| E-2 | 5008 | － | － | 楕円形 | 52·26 | 12 | C |
| E-2 | 5009 | － | － | 円形 | 14 | 11 | A |
| E-2 | 5010 | － | － | 円形 | 18 | 6 | B |
| E-2 | 5011 | － | － | 円形 | 35 | 37 | B |
| E-2 | 5012 | － | － | 円形 | 18 | 12 | A |
| E-2 | 5013 | － | － | 円形 | 28 | 8 | B |
| E-2 | 5014 | － | － | 円形 | 20 | 13 | A |
| E-2 | 5015 | － | － | 円形 | 33 | 25 | B |
| E-2 | 5016 | － | － | 円形 | 22 | 0 | C |
| E-2 | 5017 | － | － | 円形 | 24 | 10 | D |
| E-2 | 5018 | － | － | 円形 | 18 | 9 | B |
| E-2 | 5019 | － | － | 隅丸方形 | 30 | 12 | E |
| E-2 | 5020 | － | － | 円形 | 20 | 10 | A |
| E-2 | 5021 | － | － | 円形 | 26 | 10 | C |
| E-2 | 5022 | － | － | 円形 | 40 | 13 | C |
| E-2 | 5023 | － | － | 円形 | 20 | 14 | A |
| E-2 | 5024 | － | － | 円形 | 33 | 16 | C |
| E-2 | 5025 | － | － | 円形 | 23 | 16 | C |
| E-2 | 5026 | － | － | 隅丸方形 | 26 | 14 | － |
| E-2 | 5027 | － | － | 円形 | 21 | 12 | － |
| E-2 | 5028 | － | － | 円形 | 24 | 10 | － |
| E-2 | 5029 | － | － | 円形 | 25 | 10 | A |
| E-2 | 5030 | － | － | 円形 | 18 | 6 | C |
| E-2 | 5031 | － | － | 円形 | 19 | 10 | B |
| E-2 | 5032 | － | － | 円形 | 15 | 13 | B |
| E-2 | 5033 | － | － | 円形 | 45 | 9 | A |
| F-3 | 5034 | － | － | 円形 | 16 | 20 | A |
| E-2 | 5035 | － | － | 隅丸方形 | 34 | 7 | C |
| E-2 | 5036 | － | － | 円形 | 28 | 11 | C |
| E-2 | 5037 | － | － | 円形 | 30 | 8 | C |
| E-2 | 5038 | － | － | 円形 | 20 | 9 | C |
| E-2 | 5039 | － | － | 円形 | 26 | 12 | C |
| E-2 | 5040 | － | － | 円形 | 16 | 11 | C |
| E-2 | 5041 | － | － | 円形 | 40 | 14 | C |
| E-2 | 5042 | － | － | 円形 | 28 | 10 | C |
| E-2 | 5043 | － | － | 円形 | 22 | 13 | B |
| E-2 | 5044 | － | － | 円形 | 26 | 16 | C |
| E-2 | 5045 | － | － | 円形 | 28 | 19 | C |
| E-2 | 5046 | － | － | 円形 | 46 | 13 | C |
| E-2 | 5047 | － | － | 円形 | 35 | 20 | C |
| E-2 | 5048 | － | － | 円形 | 36 | 12 | B |
| E-2 | 5049 | － | － | 円形 | 32 | 11 | B |
| E-2 | 5050 | － | － | 円形 | 46 | 17 | C |
| E-2 | 5051 | － | － | 楕円形 | 25·20 | 12 | － |
| E-2 | 5052 | － | － | 楕円形 | 50·45 | 13 | A |
| E-2 | 5053 | － | － | 円形 | 20 | 18 | C |
| F-3 | 5054 | － | － | 円形 | 14 | 10 | B |
| E-4 | 5055 | － | － | 円形 | 51 | 5 | C |
| E-4 | 5056 | － | － | 円形 | 30 | 18 | C |
| E-4 | 5057 | － | － | 円形 | 34 | 14 | C |
| E-4 | 5058 | － | － | 円形 | 35 | 23 | E |
| E-4 | 5059 | － | － | 円形 | 26 | 8 | C |
| E-2 | 5060 | － | － | 円形 | 24 | 12 | B |
| E-2 | 5061 | － | － | 円形 | 30 | 14 | B |
| E-2 | 5062 | － | － | 円形 | 30 | 6 | B |
| E-2 | 5063 | － | － | 円形 | 30 | 9 | A |
| E-4 | 5064 | － | － | 円形 | 18 | 6 | A |
| E-4 | 5065 | － | － | 円形 | 17 | 5 | A |
| E-4 | 5066 | － | － | 円形 | 19 | 8 | B |
| E-2 | 5067 | － | － | 円形 | 16 | 5 | B |
| E-4 | 5068 | － | － | 円形 | 31 | 5 | B |
| E-4 | 5069 | － | － | 円形 | 23 | 6 | C |
| E-2 | 5070 | － | － | 隅丸方形 | 26 | 10 | A |
| F-3 | 5071 | － | － | 円形 | 19 | 12 | A |
| F-3 | 5072 | － | － | 円形 | 38 | 7 | A |
| F-3 | 5073 | － | － | 円形 | 30 | 6 | A |
| F-3 | 5074 | － | － | 円形 | 31 | 8 | A |
| E-4 | 5075 | － | － | 円形 | 29 | 12 | B |
| E-4 | 5076 | 製塩土器 | 弥生 | 円形 | 25 | 11 | B |
| E-4 | 5077 | － | － | 円形 | 26 | 13 | B |
| E-4 | 5078 | － | － | 円形 | 32 | 11 | C |
| E-4 | 5079 | － | － | 円形 | 33 | 6 | C |
| E-4 | 5080 | － | － | 円形 | 48 | 11 | C |
| E-4 | 5081 | － | － | 円形 | 31 | 12 | C |
| E-4 | 5082 | － | － | 円形 | 28 | 11 | C |
| E-4 | 5083 | － | － | 円形 | 18 | 13 | C |
| E-4 | 5084 | － | － | 円形 | 21 | 12 | B |
| E-4 | 5085 | － | － | 円形 | 32 | 13 | C |
| E-4 | 5086 | － | － | 円形 | 34 | 14 | C |
| E-4 | 5087 | － | － | 円形 | 32 | 16 | C |
| E-4 | 5088 | － | － | 円形 | 26 | 9 | C |
| E-4 | 5089 | － | － | 円形 | 28 | 10 | B |
| E-4 | 5090 | － | － | 円形 | 26 | 7 | B |
| E-4 | 5091 | － | － | 円形 | 28 | 9 | － |
| F-4 | 5092 | － | － | 円形 | 19 | 5 | B |
| E-4 | 5093 | － | － | 円形 | 29 | 8 | B |
| E-4 | 5094 | － | － | 楕円形 | 37·31 | 8 | B |
| F-4 | 5095 | － | － | 円形 | 34 | 10 | B |
| F-4 | 5096 | － | － | 円形 | 30 | 1 | F |
| F-4 | 5097 | － | － | 楕円形 | 28 | 4 | D |
| F-4 | 5098 | － | － | 円形 | 20 | 7 | A |
| F-4 | 5099 | － | － | 円形 | 14 | 14 | C |
| F-4 | 5100 | － | － | 楕円形 | 30 | 8 | C |
| F-4 | 5101 | － | － | 楕円形 | 28 | 5 | E |
| F-4 | 5102 | － | － | 楕円形 | 25 | 6 | C |
| F-4 | 5103 | － | － | 楕円形 | 20 | 5 | C |
| F-5 | 5104 | － | － | 円形 | 10 | 6 | C |
| F-5 | 5105 | － | － | 楕円形 | 25 | 14 | C |
| F-5 | 5106 | － | － | 円形 | 20 | 7 | C |
| F-5 | 5107 | － | － | 楕円形 | 56·32 | 6 | B |
| F-5 | 5108 | － | － | 円形 | 24 | 9 | E |
| F-5 | 5109 | － | － | 円形 | 25 | 13 | B |
| F-5 | 5110 | － | － | 円形 | 10 | 13 | E |
| F-5 | 5111 | － | － | 楕円形 | 55 | 9 | C |
| F-5 | 5112 | － | － | 楕円形 | 45 | 6 | C |
| F-5 | 5113 | － | － | 円形 | 25 | 5 | F |
| F-5 | 5114 | － | － | 円形 | 45 | 4 | C |
| F-5 | 5115 | － | － | 円形 | 19 | 3 | 3 |
| F-5 | 5116 | － | － | 楕円形 | 50 | 14 | F |
| F-5 | 5117 | － | － | 円形 | 25 | 6 | F |
| F-5 | 5118 | － | － | 円形 | 20 | 4 | － |
| F-5 | 5119 | － | － | 楕円形 | 30 | 6 | G |
| F-5 | 5120 | － | － | 楕円形 | 15 | 3 | H |
| F-5 | 5121 | － | － | 円形 | 20 | 3 | － |
| F-5 | 5122 | － | － | 円形 | 35 | 8 | G |
| F-5 | 5123 | － | － | 円形 | 45 | 10 | C |
| F-5 | 5124 | － | － | 楕円形 | 25 | 3 | G |
| F-5 | 5125 | － | － | 楕円形 | 40 | 8 | G |
| F-5 | 5126 | － | － | 円形 | 10 | 5 | I |
| G-5 | 5127 | － | － | 楕円形 | 15 | 4 | I |

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| G-5 | 5128 | — | — | 円形 | 20 | 3 | — |
| G-5 | 5129 | — | — | 楕円形 | 25 | 7 | F |
| G-5 | 5130 | — | — | 円形 | 35 | 6 | F |
| G-5 | 5131 | — | — | 円形 | 25 | 12 | J |
| G-5 | 5132 | — | — | 円形 | 20 | 11 | J |
| G-5 | 5133 | — | — | 円形 | 15 | 5 | J |
| F-6 | 5134 | — | — | 楕円形 | 40 | 2 | F |
| G-6 | 5135 | — | — | 円形 | 2 | 8 | F |
| G-6 | 5136 | — | — | 楕円形 | 40 | 2 | F |
| H-9 | 5137 | — | — | 円形 | 25 | 11 | F |

第Ⅱ-1調査区

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| H-9 | 5138 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 23 | 2 | K |
| H-9 | 5139 | — | — | 円形 | 24 | 8 | I |
| H-9 | 5140 | — | — | 円形 | 22 | 5 | K |
| H-9 | 5141 | — | — | 円形 | 28 | 29 | K |
| H-9 | 5142 | — | — | 円形 | 22 | 10 | I |
| H-9 | 5143 | — | — | 円形 | 29 | 34 | I |
| H-9 | 5144 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 隅丸方形 | 52 | 12 | — |
| H-9 | 5145 | — | — | 円形 | 30 | 26 | I |
| H-9 | 5146 | — | — | 円形 | 10 | 5 | K |
| H-9 | 5147 | — | — | 円形 | 36 | 9 | I |
| H-9 | 5148 | — | — | 円形 | 18 | 10 | K |
| H-9 | 5149 | — | — | 円形 | 29 | 20 | G |
| H-9 | 5150 | — | — | 円形 | 20 | 17 | K |
| H-9 | 5151 | — | — | 円形 | 20 | 13 | K |
| H-9 | 5152 | — | — | 円形 | 23 | 22 | K |
| H-9 | 5153 | — | — | 円形 | 28 | 14 | G |
| H-9 | 5154 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 24 | 12 | K |
| H-9 | 5155 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 29 | 13 | — |
| H-9 | 5156 | — | — | 円形 | 36 | 15 | K |
| H-9 | 5157 | — | — | 円形 | 18 | 11 | G |
| H-9 | 5158 | — | — | 円形 | 18 | 10 | K |
| H-9 | 5159 | — | — | 円形 | 21 | 10 | G |
| H-9 | 5160 | — | — | 円形 | 36 | 13 | L |
| H-9 | 5161 | — | — | 円形 | 17 | 11 | K |
| H-9 | 5162 | — | — | 円形 | 27 | 12 | G |
| H-9 | 5163 | — | — | 円形 | 30 | 8 | K |
| H-9 | 5164 | — | — | 円形 | 24 | 12 | K |
| H-9 | 5165 | 弥生土器　甕·製塩土器 | 弥生 | 円形 | 19 | 10 | G |
| H-9 | 5166 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 30 | 15 | G |
| H-9 | 5167 | — | — | 円形 | 22 | 35 | K |
| H-9 | 5168 | — | — | 円形 | 16 | 8 | K |
| H-9 | 5169 | — | — | 円形 | 18 | 18 | K |
| H-9 | 5170 | — | — | 円形 | 26 | 9 | K |
| H-9 | 5171 | — | — | 円形 | 15 | 19 | I |
| H-9 | 5172 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 32 | 12 | K |
| H-9 | 5173 | — | — | 円形 | 20 | 11 | K |
| H-9 | 5174 | — | — | 円形 | 21 | 12 | K |
| H-9 | 5175 | — | — | 円形 | 19 | 20 | K |
| H-9 | 5176 | — | — | 円形 | 20 | 30 | K |
| H-9 | 5177 | — | — | 円形 | 50 | 12 | K |
| H-9 | 5178 | 弥生土器　甕·鉢 | 弥生 | 円形 | 22 | 17 | G |
| H-9 | 5179 | — | — | 円形 | 20 | 28 | G |
| H-9 | 5180 | — | — | 円形 | 20 | 23 | G |
| H-9 | 5181 | — | — | 円形 | 32 | 7 | — |
| H-9 | 5182 | — | — | 円形 | 25 | 18 | — |
| H-9 | 5183 | — | — | 円形 | 26 | 16 | I |
| H-9 | 5184 | — | — | 円形 | 24 | 16 | I |
| H-9 | 5185 | — | — | 円形 | 17 | 13 | I |
| H-9 | 5186 | — | — | 円形 | 17 | 6 | I |
| H-9 | 5187 | — | — | 円形 | 28 | 11 | I |
| H-9 | 5188 | — | — | 円形 | 20 | 6 | I |
| H-9 | 5189 | — | — | 円形 | 17 | 9 | I |
| H-9 | 5190 | — | — | 楕円形 | 27·18 | 3 | I |
| H-9 | 5191 | — | — | 円形 | 15 | 11 | I |
| H-9 | 5192 | — | — | 円形 | 17 | 5 | I |
| H-9 | 5193 | — | — | 円形 | 21 | 14 | K |
| H-9 | 5194 | — | — | 円形 | 20 | 6 | I |
| H-9 | 5195 | — | — | 円形 | 19 | 7 | I |
| H-9 | 5196 | — | — | 円形 | 22 | 5 | I |
| H-9 | 5197 | — | — | 円形 | 20 | 17 | I |
| H-9 | 5198 | — | — | 円形 | 16 | 12 | K |
| H-9 | 5199 | — | — | 円形 | 22 | 12 | K |
| H-9 | 5200 | — | — | 円形 | 19 | 10 | K |
| H-9 | 5201 | 弥生土器　壺·製塩土器·器台 | 弥生 | 円形 | 42 | 22 | K |
| H-9 | 5202 | — | — | 円形 | 18 | 9 | I |
| H-9 | 5203 | 弥生土器　壺 | 弥生 | 円形 | 26 | 2 | K |
| H-9 | 5204 | 弥生土器　壺 | 弥生 | 円形 | 24 | 8 | K |
| H-9 | 5205 | — | — | 円形 | 19 | 6 | K |
| H-9 | 5206 | — | — | 楕円形 | 31·21 | 2 | K |
| H-9 | 5207 | — | — | 円形 | 18 | 6 | I |
| H-9 | 5208 | — | — | 円形 | 20 | 12 | I |
| H-9 | 5209 | — | — | 円形 | 32 | 12 | K |
| H-9 | 5210 | 弥生土器　甕·鉢 | 弥生 | 円形 | 25 | 12 | K |
| H-9 | 5211 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 42 | 5 | K |
| H-9 | 5212 | — | — | 円形 | 26 | 9 | K |
| H-9 | 5213 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 17 | 11 | K |
| H-9 | 5214 | — | — | 楕円形 | 61·40 | 6 | K |
| H-9 | 5215 | — | — | 円形 | 15 | 11 | K |
| H-9 | 5216 | — | — | 円形 | 15 | 16 | K |
| H-9 | 5217 | — | — | 円形 | 17 | 11 | K |
| H-9 | 5218 | — | — | 円形 | 27 | 17 | K |
| H-9 | 5219 | — | — | 円形 | 14 | 12 | — |
| H-9 | 5220 | — | — | 円形 | 20 | 11 | — |
| H-9 | 5221 | — | — | 円形 | 18 | 9 | — |
| H-9 | 5222 | — | — | 円形 | 16 | 9 | — |
| H-9 | 5223 | — | — | 円形 | 17 | 13 | — |
| H-9 | 5224 | — | — | 円形 | 50 | 14 | — |
| H-9 | 5225 | — | — | 円形 | 25 | 8 | — |
| H-9 | 5226 | — | — | 円形 | 20 | 10 | — |
| H-9 | 5227 | — | — | 円形 | 20 | 9 | — |
| H-9 | 5228 | — | — | 円形 | 22 | 5 | — |
| H-9 | 5229 | — | — | 円形 | 16 | 5 | — |
| H-9 | 5230 | 弥生土器　甕·壺 | 弥生 | 円形 | 30 | 14 | — |
| H-9 | 5231 | — | — | 円形 | 28 | 8 | — |
| H-9 | 5232 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 隅丸方形 | 56·27 | 21 | — |
| H-9 | 5233 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 46 | 9 | — |
| H-9 | 5234 | — | — | 円形 | 39 | 18 | — |
| H-9 | 5235 | — | — | 円形 | 26 | 11 | — |
| H-9 | 5236 | — | — | 円形 | 34 | 8 | K |
| H-9 | 5237 | — | — | 円形 | 22 | 10 | K |
| H-9 | 5238 | — | — | 円形 | 28 | 9 | K |
| H-9 | 5239 | — | — | 円形 | 26 | 16 | K |
| H-9 | 5240 | — | — | 円形 | 22 | 28 | K |
| H-9 | 5241 | — | — | 円形 | 32 | 13 | I |
| H-9 | 5242 | — | — | 円形 | 27 | 20 | I |
| H-9 | 5243 | — | — | 円形 | 28 | 9 | — |
| H-9 | 5244 | — | — | 円形 | 32 | 6 | — |
| H-9 | 5245 | — | — | 円形 | 21 | 6 | — |
| H-9 | 5246 | — | — | 円形 | 16 | 8 | — |
| H-9 | 5247 | — | — | 楕円形 | 28·19 | 23 | — |
| H-9 | 5248 | — | — | 円形 | 23 | 14 | — |
| H-9 | 5249 | — | — | 楕円形 | 47·29 | 11 | K |
| H-9 | 5250 | — | — | 円形 | 17 | 7 | K |
| H-9 | 5251 | — | — | 円形 | 27 | 11 | K |
| H-9 | 5252 | — | — | 円形 | 33 | 4 | K |
| H-9 | 5253 | — | — | 円形 | 33 | 19 | K |

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| H-9 | 5254 | — | — | 円形 | 29 | 11 | K |
| H-9 | 5255 | — | — | 楕円形 | 54·39 | 18 | K |
| H-9 | 5256 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 楕円形 | 34·26 | 17 | K |
| H-9 | 5257 | — | — | 円形 | 24 | 15 | K |
| H-9 | 5258 | — | — | 円形 | 26 | 13 | K |
| H-9 | 5259 | — | — | 円形 | 26 | 16 | K |
| H-9 | 5260 | — | — | 円形 | 30 | 16 | K |
| H-9 | 5261 | — | — | 円形 | 20 | 13 | K |
| H-9 | 5262 | — | — | 円形 | 19 | 11 | K |
| H-9 | 5263 | — | — | 円形 | 30 | 13 | K |
| H-9 | 5264 | — | — | 円形 | 22 | 8 | K |
| H-9 | 5265 | — | — | 円形 | 30 | 10 | K |
| H-9 | 5266 | — | — | 円形 | 23 | 10 | K |
| H-9 | 5267 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 30 | 14 | K |
| H-9 | 5268 | — | — | 円形 | 24 | 14 | K |
| H-9 | 5269 | — | — | 円形 | 19 | 10 | K |
| H-9 | 5270 | — | — | 円形 | 31 | 13 | K |
| H-9 | 5271 | — | — | 円形 | 29 | 11 | K |
| H-9 | 5272 | — | — | 円形 | 33 | 9 | K |
| H-9 | 5273 | 弥生土器　高坏 | 弥生 | 円形 | 34 | 13 | K |
| H-9 | 5274 | 弥生土器　甕・サヌカイト | 弥生 | 円形 | 33 | 11 | K |
| H-9 | 5275 | — | — | 円形 | 23 | 13 | K |
| H-9 | 5276 | — | — | 円形 | 15 | 4 | K |
| H-9 | 5277 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 41 | 14 | K |
| H-9 | 5278 | — | — | 円形 | 35 | 9 | K |
| H-9 | 5279 | 弥生土器　器台 | 弥生 | 円形 | 34 | 10 | K |
| H-9 | 5280 | — | — | 円形 | 34 | 10 | K |
| H-9 | 5281 | — | — | 円形 | 30 | 11 | K |
| H-9 | 5282 | — | — | 円形 | 25 | 11 | K |
| H-9 | 5283 | — | — | 円形 | 34 | 9 | — |
| H-9 | 5284 | — | — | 円形 | 30 | 24 | — |
| H-9 | 5285 | — | — | 円形 | 31 | 22 | — |
| H-9 | 5286 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 29 | 19 | — |
| H-9 | 5287 | — | — | 円形 | 36 | 5 | K |
| H-9 | 5288 | — | — | 円形 | 29 | 4 | K |
| H-9 | 5289 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 27 | 6 | K |
| H-9 | 5290 | — | — | 円形 | 28 | 11 | K |
| H-9 | 5291 | — | — | 円形 | 29 | 13 | K |
| H-9 | 5292 | — | — | 円形 | 30 | 9 | K |
| H-9 | 5293 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 22 | 18 | — |
| H-9 | 5294 | — | — | 円形 | 30 | 10 | K |
| H-9 | 5295 | — | — | 円形 | 28 | 7 | K |
| H-9 | 5296 | — | — | 円形 | 21 | 10 | K |
| H-9 | 5297 | — | — | 円形 | 39 | 9 | K |
| H-9 | 5298 | — | — | 円形 | 23 | 11 | K |
| H-9 | 5299 | — | — | 円形 | 17 | 6 | K |
| H-9 | 5300 | — | — | 円形 | 17 | 17 | K |
| H-10 | 5301 | — | — | 円形 | 33 | 8 | K |
| H-10 | 5302 | — | — | 円形 | 20 | 9 | K |
| H-10 | 5303 | — | — | 円形 | 17 | 11 | K |
| H-10 | 5304 | — | — | 円形 | 26 | 16 | K |
| G-9 | 5305 | — | — | 円形 | 32 | 8 | C |
| G-9 | 5306 | 弥生土器 | 弥生 | 円形 | 40 | 12 | B |
| G-9 | 5307 | — | — | 円形 | 20 | 13 | E |
| G-9 | 5308 | — | — | 円形 | 20 | 13 | C |
| G-9 | 5309 | — | — | 円形 | 24 | 14 | C |
| G-9 | 5310 | — | — | 円形 | 28 | 10 | E |
| G-9 | 5311 | — | — | 円形 | 25 | 15 | E |
| G-9 | 5312 | — | — | 円形 | 25 | 21 | — |
| G-9 | 5313 | — | — | 円形 | 36 | 29 | — |
| G-9 | 5314 | — | — | 円形 | 26 | 16 | — |
| G-9 | 5315 | — | — | 円形 | 32 | 16 | E |
| G-9 | 5316 | — | — | 円形 | 20 | 8 | E |
| G-9 | 5317 | — | — | 円形 | 24 | 12 | E |

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| G-9 | 5318 | — | — | 円形 | 40 | 16 | E |
| G-9 | 5319 | 弥生土器 | 弥生 | 円形 | 36 | 10 | E |
| G-9 | 5320 | — | — | 円形 | 22 | 27 | K |
| G-9 | 5321 | — | — | 円形 | 25 | 8 | — |
| G-9 | 5322 | — | — | 円形 | 14 | 15 | — |
| G-9 | 5323 | — | — | 円形 | 18 | 11 | — |
| G-9 | 5324 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 28 | 38 | G |
| G-9 | 5325 | — | — | 円形 | 18 | 4 | C |
| H-9 | 5326 | — | — | 円形 | 27 | 12 | C |
| H-9 | 5327 | — | — | 円形 | 35 | 13 | I |
| H-9 | 5328 (SB501) | — | — | 円形 | 20 | 14 | E |
| H-9 | 5329 | — | — | 円形 | 33 | 13 | — |
| G-9 | 5330 | — | — | 円形 | 30 | 12 | — |
| G-10 | 5331 | — | — | 円形 | 32 | 9 | E |
| G-10 | 5332 | — | — | 円形 | 23 | 31 | — |
| G-10 | 5333 | — | — | 円形 | 16 | 20 | — |
| G-10 | 5334 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 38 | 25 | E |
| G-10 | 5335 | — | — | 円形 | 24 | 21 | — |
| G-10 | 5336 | 弥生土器　鉢·壺 | 弥生 | 円形 | 32 | 41 | E |
| G-10 | 5337 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 楕円形 | 60·50 | 24 | G |
| G-10 | 5338 | — | — | 円形 | 22 | 22 | — |
| G-10 | 5339 | — | — | 円形 | 18 | 14 | — |
| G-10 | 5340 | — | — | 円形 | 22 | 16 | E |
| G-10 | 5341 | — | — | 円形 | 20 | 34 | G |
| G-10 | 5342 | — | — | 円形 | 16 | 24 | — |
| G-10 | 5343 | — | — | 円形 | 24 | 17 | — |
| G-10 | 5344 | — | — | 円形 | 31 | 16 | E |
| G-10 | 5345 | — | — | 円形 | 21 | 10 | E |
| G-10 | 5346 | — | — | 円形 | 42 | 14 | I |
| G-10 | 5347 | — | — | 円形 | 30 | 30 | I |
| G-10 | 5348 | — | — | 円形 | 21 | 11 | E |
| G-10 | 5349 | — | — | 円形 | 30 | 10 | E |
| G-10 | 5350 | — | — | 円形 | 36 | 13 | E |
| G-10 | 5351 | — | — | 円形 | 28 | 13 | — |
| G-10 | 5352 | — | — | 円形 | 25 | 12 | E |
| G-10 | 5353 | — | — | 円形 | 22 | 38 | E |
| G-10 | 5354 | — | — | 円形 | 20 | 12 | E |
| G-10 | 5355 (SB501) | — | — | 円形 | 21 | 19 | E |
| G-10 | 5356 (SB501) | — | — | 円形 | 14 | 18 | E |
| H-10 | 5357 (SB501) | 弥生土器 | 弥生 | 円形 | 18 | 16 | E |
| H-10 | 5358 (SB501) | — | — | 円形 | 20 | 13 | E |
| H-10 | 5359 | — | — | 円形 | 16 | 11 | E |
| H-10 | 5360 | — | — | 円形 | 30 | 19 | C |
| H-10 | 5361 | — | — | 円形 | 16 | 16 | E |
| H-10 | 5362 | — | — | 円形 | 32 | 9 | — |
| H-10 | 5363 (SB501) | — | — | 円形 | 16 | 20 | E |
| H-10 | 5364 | — | — | 隅丸方形 | 74·52 | 8 | — |
| H-10 | 5365 | 製塩土器 | 弥生 | 円形 | 22 | 15 | — |
| G-10 | 5366 | — | — | 円形 | 23 | 10 | E |
| G-10 | 5367 (SB501) | 弥生土器　甕 | 弥生 | 楕円形 | 35·30 | 15 | E |
| G-10 | 5368 | — | — | 円形 | 25 | 10 | — |
| G-10 | 5369 | — | — | 円形 | 21 | 12 | E |
| G-10 | 5370 | — | — | 楕円形 | 30·25 | 8 | E |
| G-10 | 5371 | — | — | 円形 | 17 | 9 | E |
| G-10 | 5372 | — | — | 楕円形 | 31·26 | 17 | — |
| G-10 | 5373 | — | — | 円形 | 16 | 11 | E |
| G-10 | 5374 | — | — | 円形 | 22 | 9 | E |
| G-10 | 5375 (SB501) | — | — | 円形 | 18 | 15 | E |
| G-10 | 5376 | — | — | 楕円形 | 42·35 | 16 | E |
| G-10 | 5377 | — | — | 円形 | 30 | 34 | E |
| G-10 | 5378 | — | — | 円形 | 23 | 29 | E |
| G-10 | 5379 | — | — | 円形 | 24 | 29 | E |
| G-10 | 5380 | — | — | 円形 | 18 | 19 | E |
| G-10 | 5381 | — | — | 円形 | 34 | 29 | E |

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| G-10 | 5382 | − | − | 円形 | 26 | 9 | − |
| G-10 | 5383 | − | − | 円形 | 23 | 18 | E |
| G-10 | 5384 | − | − | 楕円形 | 38·32 | 19 | E |
| G-10 | 5385 | − | − | 円形 | 30 | 17 | − |
| G-10 | 5386 | − | − | 円形 | 19 | 11 | E |
| G-10 | 5387 | − | − | 円形 | 21 | 17 | E |
| G-10 | 5388 | − | − | 楕円形 | 27·22 | 18 | − |
| G-10 | 5389 | − | − | 円形 | 24 | 22 | E |
| G-10 | 5390 | − | − | 円形 | 28 | 11 | E |
| G-10 | 5391 | − | − | 円形 | 34 | 20 | E |
| G-10 | 5392 | − | − | 円形 | 25 | 22 | E |
| G-10 | 5393 | − | − | 円形 | 28 | 7 | E |
| G-10 | 5394 | − | − | 円形 | 30 | 8 | E |
| G-10 | 5395 | − | − | 円形 | 40 | 12 | E |
| G-10 | 5396 | − | − | 円形 | 22 | 12 | E |
| G-10 | 5397 | − | − | 円形 | 19 | 13 | − |
| H-10 | 5398 | 製塩土器 | 弥生 | 円形 | 32 | 18 | − |
| H-10 | 5399 | − | − | 円形 | 24 | 23 | − |
| H-10 | 5400 | − | − | 円形 | 22 | 25 | − |
| H-10 | 5401 | − | − | 円形 | 16 | 14 | E |
| H-10 | 5402 | − | − | 円形 | 33 | 22 | C |
| H-10 | 5403 | − | − | 円形 | 35 | 6 | E |
| H-10 | 5404 | − | − | 円形 | 33 | 38 | I |
| H-10 | 5405 | − | − | 楕円形 | 50·42 | 12 | E |
| H-10 | 5406 | − | − | 円形 | 20 | 11 | E |
| H-10 | 5407 | − | − | 円形 | 30 | 23 | E |
| H-10 | 5408 | 弥生土器　壺 | 弥生 | 楕円形 | 32·24 | 26 | C |
| H-10 | 5409 | − | − | 円形 | 20 | 23 | E |
| H-10 | 5410 | − | − | 円形 | 20 | 11 | E |
| H-10 | 5411 | − | − | 円形 | 20 | 13 | E |
| H-10 | 5412 | − | − | 円形 | 22 | 20 | E |
| H-10 | 5413 | − | − | 円形 | 17 | 11 | I |
| H-10 | 5414 | − | − | 円形 | 20 | 16 | E |
| H-10 | 5415 | − | − | 円形 | 24 | 11 | E |
| H-10 | 5416 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 38 | 12 | E |
| H-10 | 5417 | − | − | 円形 | 24 | 13 | E |
| H-10 | 5418 | − | − | 円形 | 22 | 13 | C |
| H-10 | 5419 | − | − | 円形 | 17 | 13 | C |
| H-10 | 5420 | − | − | 円形 | 34 | 26 | E |
| H-10 | 5421 | − | − | 円形 | 22 | 23 | C |
| H-10 | 5422 | − | − | 円形 | 25 | 28 | C |
| H-10 | 5423 | − | − | 円形 | 34 | 33 | C |
| H-10 | 5424 | − | − | 円形 | 38 | 21 | C |
| H-10 | 5425 | − | − | 円形 | 24 | 18 | C |
| H-10 | 5426 | − | − | 円形 | 21 | 9 | C |
| H-10 | 5427 | − | − | 円形 | 28 | 26 | C |
| H-10 | 5428 | − | − | 円形 | 16 | 18 | E |
| H-10 | 5429 | − | − | 円形 | 20 | 22 | C |
| H-10 | 5430 | − | − | 円形 | 15 | 5 | − |
| H-10 | 5431 | − | − | 円形 | 16 | 19 | E |
| H-10 | 5432 | − | − | 円形 | 18 | 20 | E |
| G-10 | 5433 | − | − | 円形 | 16 | 16 | E |
| G-10 | 5434 | − | − | 円形 | 16 | 16 | E |
| G-10 | 5435 | − | − | 円形 | 14 | 18 | E |
| G-10 | 5436 | − | − | 円形 | 16 | 12 | − |
| G-10 | 5437 | − | − | 円形 | 15 | 16 | E |
| G-10 | 5438 | − | − | 円形 | 20 | 18 | E |
| G-10 | 5439 | − | − | 円形 | 26 | 11 | C |
| G-10 | 5440 | − | − | 円形 | 16 | 12 | C |
| G-10 | 5441 | − | − | 円形 | 26 | 14 | C |
| G-10 | 5442 | − | − | 円形 | 16 | 13 | C |
| G-10 | 5443 | − | − | 円形 | 16 | 13 | C |
| G-10 | 5444 | − | − | 円形 | 21 | 25 | E |
| G-10 | 5445 | 弥生土器　甕·鉢·製塩土器 | 弥生 | 円形 | 45 | 15 | K |

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| G-10 | 5446 | − | − | 円形 | 18 | 17 | E |
| G-10 | 5447 | − | − | 円形 | 16 | 18 | K |
| G-10 | 5448 | 製塩土器 | 弥生 | 円形 | 34 | 10 | E |
| G-10 | 5449 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 30 | 18 | − |
| G-10 | 5450 | − | − | 円形 | 24 | 25 | E |
| G-10 | 5451 | 弥生土器　壺 | 弥生 | 円形 | 38 | 11 | E |
| G-10 | 5452 | − | − | 円形 | 35 | 15 | C |
| G-10 | 5453 | − | − | 円形 | 16 | 17 | E |
| H-10 | 5454 | − | − | 円形 | 16 | 22 | E |
| H-10 | 5455 | − | − | 円形 | 16 | 13 | E |
| H-10 | 5456 | − | − | 円形 | 12 | 14 | E |
| H-10 | 5457 | − | − | 円形 | 18 | 11 | − |
| H-10 | 5458 | − | − | 円形 | 14 | 19 | M |
| H-10 | 5459 | 弥生土器　壺 | 弥生 | 円形 | 18 | 14 | M |
| H-10 | 5460 | − | − | 円形 | 18 | 25 | M |
| H-10 | 5461 | − | − | 円形 | 21 | 14 | E |
| H-10 | 5462 | − | − | 円形 | 26 | 43 | M |
| H-10 | 5463 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 18 | 20 | M |
| H-10 | 5464 | 弥生土器　高坏 | 弥生 | 円形 | 26 | 24 | M |
| H-10 | 5465 | − | − | 円形 | 22 | 25 | C |
| H-10 | 5466 | − | − | 円形 | 20 | 34 | M |
| H-10 | 5467 | − | − | 円形 | 17 | 34 | M |
| H-10 | 5468 | − | − | 円形 | 30 | 36 | M |
| H-10 | 5469 | − | − | 円形 | 18 | 24 | M |
| H-10 | 5470 | − | − | 円形 | 24 | 28 | C |
| H-10 | 5471 | − | − |  |  |  | C |
| H-10 | 5472 | − | − | 円形 | 12 | 26 | M |
| H-10 | 5473 | − | − | 円形 | 18 | 21 | M |
| H-10 | 5474 | − | − | 円形 | 17 | 30 | − |
| H-10 | 5475 | − | − | 円形 | 24 | 16 | − |
| H-10 | 5476 | − | − | 円形 | 26 | 24 | C |
| H-10 | 5477 | − | − | 円形 | 20 | 21 | E |
| H-10 | 5478 | − | − | 円形 | 22 | 14 | E |
| H-10 | 5479 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 22 | 33 | K |
| H-10 | 5480 | − | − | 円形 | 24 | 24 | C |
| H-10 | 5481 | − | − | 円形 | 32 | 24 | − |
| H-10 | 5482 | − | − | 円形 | 22 | 18 | E |
| H-10 | 5483 | − | − | 円形 | 22 | 27 | I |
| H-10 | 5484 | − | − | 円形 | 38 | 16 | K |
| H-10 | 5485 | − | − | 円形 | 26 | 23 | E |
| H-10 | 5486 | − | − | 円形 | 26 | 18 | E |
| H-10 | 5487 | − | − | 円形 | 20 | 9 | I |
| H-10 | 5488 | − | − | 円形 | 23 | 13 | E |
| H-10 | 5489 | − | − | 円形 | 25 | 12 | E |
| H-10 | 5490 | − | − | 円形 | 22 | 13 | E |
| H-10 | 5491 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 54 | 11 | E |
| H-10 | 5492 | − | − | 円形 | 19 | 15 | − |
| H-10 | 5493 | − | − | 円形 | 57 | 14 | C |
| H-10 | 5494 | − | − | 円形 | 28 | 40 | C |
| H-10 | 5495 | − | − | 円形 | 29 | 13 | − |
| H-10 | 5496 | − | − | 円形 | 22 | 22 | − |
| H-10 | 5497 | − | − | 円形 | 26 | 25 | C |
| H-10 | 5498 | − | − | 円形 | 28 | 27 | M |
| H-10 | 5499 | − | − | 円形 | 28 | 25 | E |
| H-10 | 5500 | − | − | 円形 | 28 | 29 | E |
| H-10 | 5501 | − | − | 円形 | 20 | 20 | E |
| G-10 | 5502 | − | − | 円形 | 15 | 9 | C |
| G-10 | 5503 | − | − | 円形 | 21 | 8 | C |
| G-10 | 5504 | − | − | 円形 | 15 | 14 | C |
| G-10 | 5505 | − | − | 円形 | 20 | 16 | C |
| G-10 | 5506 | − | − | 円形 | 32 | 21 | C |
| G-10 | 5507 | − | − | 円形 | 26 | 12 | C |
| G-10 | 5508 | − | − | 円形 | 25 | 11 | C |
| G-11 | 5509 | − | − | 円形 | 26 | 15 | C |

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| G-11 | 5510 | − | − | 円形 | 18 | 17 | E |
| G-11 | 5511 | 弥生土器 甕・鉢・製塩土器・サヌカイト | 弥生 | 円形 | 55 | 16 | C |
| H-11 | 5512 | − | − | 円形 | 17 | 21 | C |
| H-11 | 5513 | 弥生土器 甕 | 弥生 | 円形 | 22 | 17 | C |
| H-11 | 5514 | 弥生土器 甕 | 弥生 | 円形 | 25 | 14 | C |
| H-11 | 5515 | − | − | 円形 | 17 | 17 | C |
| H-11 | 5516 | − | − | 円形 | 14 | 12 | C |
| H-11 | 5517 | − | − | 円形 | 22 | 3 | E |
| H-11 | 5518 | − | − | 円形 | 17 | 18 | C |
| H-11 | 5519 | − | − | 円形 | 23 | 18 | C |
| H-11 | 5520 | − | − | 円形 | 24 | 23 | E |
| H-11 | 5521 | − | − | 円形 | 25 | 18 | C |
| H-11 | 5522 | − | − | 円形 | 32 | 17 | C |
| H-11 | 5523 | − | − | 円形 | 15 | 16 | I |
| H-11 | 5524 | − | − | 円形 | 22 | 11 | I |
| H-11 | 5525 | − | − | 円形 | 22 | 18 | E |
| H-11 | 5526 (SH507) | 弥生土器 甕 | 弥生 | 円形 | 25 | 18 | E |
| H-11 | 5527 (SH507) | − | − | 円形 | 21 | 1 | E |
| H-10 | 5528 | − | − | 円形 | 32 | 8 | E |
| H-11 | 5529 (SH507) | − | − | 円形 | 17 | 11 | E |
| H-10 | 5530 (SH507) | − | − | 円形 | 32 | 20 | G |
| H-11 | 5531 (SH507) | − | − | 円形 | 19 | 11 | E |
| H-10 | 5532 (SH507) | − | − | 円形 | 31 | 27 | E |
| H-10 | 5533 (SH507) | − | − | 円形 | 28 | 22 | − |
| H-10 | 5534 | − | − | 円形 | 13 | 14 | K |
| H-11 | 5535 | − | − | 円形 | 23 | 4 | E |
| H-11 | 5536 | 弥生土器 | 弥生 | 円形 | 36 | 23 | E |
| H-11 | 5537 | 弥生土器 高坏 | 弥生 | 円形 | 27 | 14 | K |
| H-11 | 5538 | 弥生土器 壺 | 弥生 | 円形 | 30 | 12 | E |
| H-11 | 5539 | − | − | 円形 | 29 | 9 | E |
| H-11 | 5540 | 弥生土器 甕 | 弥生 | 円形 | 28 | 8 | E |
| H-11 | 5541 | − | − | 円形 | 24 | 11 | E |
| H-11 | 5542 | − | − | 円形 | 14 | 8 | E |
| H-11 | 5543 | − | − | 円形 | 26 | 26 | − |
| H-11 | 5544 | − | − | 円形 | 19 | 10 | − |
| H-11 | 5545 | − | − | 円形 | 15 | 14 | E |
| H-11 | 5546 | − | − | 円形 | 30 | 8 | E |
| H-11 | 5547 | − | − | 円形 | 32 | 16 | E |
| H-11 | 5548 | − | − | 円形 | 17 | 9 | E |
| H-11 | 5549 | − | − | 円形 | 25 | 9 | E |
| H-11 | 5550 | − | − | 円形 | 19 | 11 | E |
| H-11 | 5551 | − | − | 円形 | 20 | 13 | E |
| H-11 | 5552 | − | − | 円形 | 14 | 12 | E |
| H-11 | 5553 (SH507) | − | − | 円形 | 27 | 16 | E |
| H-11 | 5554 | − | − | 円形 | 38 | 8 | E |
| H-11 | 5555 | − | − | 円形 | 17 | 13 | E |
| H-11 | 5556 | − | − | 円形 | 56 | 5 | D |
| H-11 | 5557 | − | − | 円形 | 13 | 10 | K |
| H-11 | 5558 | 弥生土器 甕 | 弥生 | 円形 | 29 | 30 | E |
| H-11 | 5559 | − | − | 円形 | 34 | 26 | E |
| H-11 | 5560 | − | − | 円形 | 14 | 20 | E |
| H-11 | 5561 | 弥生土器 甕 | 弥生 | 円形 | 12 | 11 | E |
| H-11 | 5562 | − | − | 円形 | 23 | 11 | E |
| H-11 | 5563 | − | − | 円形 | 36 | 14 | E |
| H-11 | 5564 | − | − | 円形 | 19 | 14 | E |
| H-11 | 5565 | − | − | 円形 | 15 | 17 | E |
| H-11 | 5566 | − | − | 円形 | 27 | 15 | E |
| H-11 | 5567 | − | − | 円形 | 22 | 7 | E |
| H-11 | 5568 | − | − | 円形 | 40 | 12 | E |
| H-11 | 5569 | − | − | 円形 | 25 | 13 | E |
| H-11 | 5570 | − | − | 円形 | 24 | 10 | E |
| H-11 | 5571 | − | − | 円形 | 18 | 12 | E |
| H-11 | 5572 | − | − | 円形 | 26 | 12 | E |
| H-11 | 5573 | − | − | 円形 | 30 | 16 | E |

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| H-11 | 5574 | − | − | 円形 | 30 | 24 | E |
| H-11 | 5575 | 弥生土器 高坏 | 弥生 | 円形 | 22 | 8 | E |
| H-11 | 5576 (SH510) | − | − | 円形 | 30 | 44 | C |
| H-11 | 5577 (SH510) | 弥生土器 壺 | 弥生 | 円形 | 24 | 30 | I |
| H-11 | 5578 (SH510) | − | − | 楕円形 | 36·30 | 38 | I |
| H-11 | 5579 | − | − | 円形 | 18 | 21 | C |
| H-11 | 5580 | − | − | 円形 | 27 | 5 | C |
| H-11 | 5581 (SH510) | − | − | 楕円形 | 60·38 | 44 | I |
| H-11 | 5582 | − | − | 円形 | 21 | 20 | I |
| H-11 | 5583 | − | − | 円形 | 20 | 38 | I |
| G-11 | 5584 (SH510) | − | − | 円形 | 38 | 18 | − |
| G-11 | 5585 (SH510) | 炭 | − | 楕円形 | 55·43 | 30 | − |
| G-11 | 5586 | − | − | 円形 | 36 | 13 | C |
| G-11 | 5587 | 製塩土器 | 弥生 | 円形 | 17 | 20 | − |
| G-11 | 5588 | − | − | 円形 | 17 | 22 | G |
| G-11 | 5589 | − | − | 円形 | 31 | 12 | − |
| G-11 | 5590 | − | − | 円形 | 20 | 20 | − |
| G-11 | 5591 | − | − | 円形 | 18 | 15 | − |
| G-12 | 5592 | − | − | 円形 | 28 | 17 | C |
| G-12 | 5593 | − | − | 円形 | 19 | 16 | C |
| G-12 | 5594 (SB502) | − | − | 円形 | 30 | 7 | C |
| G-12 | 5595 (SB502) | − | − | 円形 | 25 | 18 | C |
| G-12 | 5596 (SB502) | 弥生土器 甕 | 弥生 | 円形 | 31 | 21 | C |
| G-12 | 5597 | 弥生土器 鉢 | 弥生 | 円形 | 34 | 38 | C |
| G-12 | 5598 | − | − | 円形 | 17 | 10 | C |
| G-12 | 5599 | − | − | 円形 | 20 | 12 | − |
| G-12 | 5600 (SB502) | 弥生土器 高坏・甕 | 弥生 | 円形 | 36 | 25 | C |
| G-12 | 5601 | − | − | 円形 | 23 | 10 | D |
| G-12 | 5602 | 弥生土器 甕 | 弥生 | 円形 | 30 | 29 | − |
| G-12 | 5603 (SB502) | 弥生土器 甕・製塩土器 | 弥生 | 円形 | 27 | 29 | E |
| G-12 | 5604 | − | − | 円形 | 28 | 16 | C |
| G-12 | 5605 (SB502) | − | − | 円形 | 30 | 15 | − |
| G-12 | 5606 (SB502) | − | − | 円形 | 24 | 21 | F |
| G-12 | 5607 | 弥生土器 甕 | 弥生 | 円形 | 76 | 8 | F |
| G-12 | 5608 | − | − | 円形 | 24 | 16 | F |
| H-12 | 5609 | − | − | 楕円形 | 45·35 | 21 | G |
| H-12 | 5610 | − | − | 円形 | 23 | 17 | − |
| H-12 | 5611 | − | − | 円形 | 20 | 14 | − |
| H-12 | 5612 | − | − | 円形 | 23 | 29 | C |
| H-12 | 5613 | − | − | 円形 | 13 | 6 | C |
| H-12 | 5614 | − | − | 円形 | 21 | 9 | C |
| H-12 | 5615 (SH510) | サヌカイト | 弥生 | 円形 | 21 | 33 | − |
| H-12 | 5616 | − | − | 円形 | 33 | 18 | C |
| H-12 | 5617 | − | − | 円形 | 15 | 20 | C |
| H-12 | 5618 | − | − | 円形 | 16 | 22 | F |
| H-12 | 5619 | − | − | 円形 | 19 | 17 | D |
| H-12 | 5620 | − | − | 円形 | 17 | 19 | F |
| H-12 | 5621 | − | − | 円形 | 24 | 21 | N |
| H-12 | 5622 | − | − | 円形 | 20 | 27 | N |
| H-12 | 5623 | 弥生土器 甕・製塩土器 | 弥生 | 円形 | 21 | 28 | − |
| H-12 | 5624 | − | − | 円形 | 32 | 30 | C |
| H-12 | 5625 | − | − | 円形 | 15 | 23 | − |
| H-12 | 5626 | 弥生土器 甕 | 弥生 | 円形 | 30 | 32 | − |
| H-12 | 5627 | − | − | 円形 | 24 | 26 | C |
| H-12 | 5628 | − | − | 円形 | 20 | 27 | − |
| H-12 | 5629 | − | − | 円形 | 23 | 22 | C |
| H-12 | 5630 | − | − | 円形 | 20 | 28 | C |
| H-12 | 5631 | − | − | 円形 | 20 | 24 | C |
| H-12 | 5632 | − | − | 円形 | 16 | 21 | C |
| H-12 | 5633 | − | − | 円形 | 35 | 21 | C |
| H-12 | 5634 | − | − | 円形 | 30 | 63 | I |
| H-12 | 5635 (SH510) | − | − | 円形 | 40 | 20 | I |
| H-12 | 5636 (SH510) | − | − | 円形 | 27 | 33 | C |
| H-12 | 5637 | − | − | 円形 | 24 | 17 | C |

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| H-12 | 5638 | − | − | 円形 | 16 | 16 | C |
| H-12 | 5639 | − | − | 円形 | 21 | 12 | C |
| H-12 | 5640 | − | − | 円形 | 16 | 16 | C |
| H-12 | 5641 | − | − | 円形 | 24 | 11 | C |
| H-12 | 5642 | − | − | 円形 | 17 | 20 | C |
| H-12 | 5643 | − | − | 円形 | 18 | 25 | C |
| H-12 | 5644 | − | − | 円形 | 15 | 12 | C |
| H-12 | 5645 | − | − | 円形 | 27 | 7 | G |
| H-12 | 5646 | 弥生土器　高坏 | 弥生 | 円形 | 20 | 11 | C |
| H-12 | 5647 | − | − | 円形 | 16 | 9 | C |
| H-12 | 5648 | − | − | 円形 | 15 | 15 | G |
| H-12 | 5649 | 弥生土器　鉢 | 弥生 | 円形 | 24 | 16 | G |
| H-12 | 5650 | − | − | 円形 | 33 | 13 | I |
| H-12 | 5651 | − | − | 円形 | 13 | 13 | C |
| H-12 | 5652 | − | − | 円形 | 13 | 13 | C |
| H-12 | 5653 | − | − | 円形 | 30 | 13 | C |
| H-12 | 5654 | − | − | 円形 | 27 | 11 | − |
| H-12 | 5655 | − | − | 円形 | 28 | 20 | − |
| H-12 | 5656 | − | − | 円形 | 22 | 13 | − |
| H-12 | 5657 | − | − | 円形 | 20 | 8 | C |
| H-12 | 5658 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 20 | 18 | C |
| H-12 | 5659 | − | − | 円形 | 20 | 12 | − |
| H-12 | 5660 | − | − | 円形 | 23 | 19 | − |
| H-12 | 5661 | − | − | 円形 | 18 | 18 | − |
| H-12 | 5662 | − | − | 円形 | 25 | 17 | − |
| H-12 | 5663 | − | − | 円形 | 18 | 22 | − |
| H-12 | 5664 | − | − | 円形 | 20 | 18 | − |
| H-12 | 5665 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 20 | 18 | C |
| H-12 | 5666 | − | − | 円形 | 20 | 26 | C |
| H-12 | 5667 | − | − | 円形 | 18 | 12 | − |
| H-12 | 5668 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 20 | 22 | C |
| H-12 | 5669 | − | − | 円形 | 23 | 12 | C |
| H-12 | 5670 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 隅丸方形 | 30 | 39 | C |
| H-12 | 5671 | − | − | 円形 | 20 | 28 | G |
| H-12 | 5672 | − | − | 円形 | 18 | 24 | − |
| G-12 | 5673 | − | − | 楕円形 | 25·20 | 17 | O |
| G-12 | 5674 | − | − | 円形 | 32 | 26 | O |
| G-12 | 5675 | − | − | 円形 | 20 | 13 | B |
| G-12 | 5676 | − | − | 円形 | 28 | 8 | − |
| G-12 | 5677 | − | − | 円形 | 15 | 12 | − |
| G-12 | 5678 | − | − | 円形 | 20 | 23 | − |
| G-12 | 5679 | − | − | 円形 | 20 | 18 | B |
| G-12 | 5680 | − | − | 円形 | 16 | 20 | − |
| G-12 | 5681 | − | − | 円形 | 26 | 35 | C |
| G-12 | 5682 | − | − | 円形 | 14 | 18 | − |
| G-12 | 5683 | − | − | 円形 | 22 | 15 | B |
| G-12 | 5684 | − | − | 円形 | 24 | 15 | B |
| G-12 | 5685 | − | − | 楕円形 | 33·27 | 15 | O |
| G-12 | 5686 | 弥生土器　鉢 | 弥生 | 円形 | 30 | 13 | O |
| G-12 | 5687 | − | − | 円形 | 26 | 14 | O |
| G-12 | 5688 | − | − | 楕円形 | 31·25 | 17 | O |
| G-12 | 5689 | − | − | 円形 | 16 | 20 | B |
| G-12 | 5690 | − | − | 円形 | 27 | 16 | O |
| G-12 | 5691 | − | − | 円形 | 21 | 18 | P |
| G-12 | 5692 | − | − | 円形 | 42 | 9 | B |
| G-12 | 5693 | − | − | 円形 | 21 | 15 | B |
| G-12 | 5694 | − | − | 円形 | 22 | 15 | B |
| G-12 | 5695 | − | − | 円形 | 18 | 20 | − |
| G-12 | 5696 | − | − | 円形 | 21 | 22 | O |
| H-12 | 5697 | − | − | 楕円形 | 74·57 | 42 | B |
| H-12 | 5698 | − | − | 円形 | 25 | 31 | B |
| H-12 | 5699 | − | − | 円形 | 19 | 9 | − |
| H-12 | 5700 | − | − | 円形 | 16 | 16 | − |
| H-12 | 5701 | − | − | 円形 | 15 | 18 | − |

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| G-12 | 5702 | − | − | 円形 | 20 | 10 | P |
| H-12 | 5703 | − | − | 円形 | 16 | 19 | − |
| H-12 | 5704 | − | − | 円形 | 20 | 13 | B |
| H-12 | 5705 | − | − | 円形 | 19 | 11 | B |
| H-12 | 5706 | − | − | 円形 | 16 | 6 | − |
| H-12 | 5707 | − | − | 円形 | 14 | 14 | − |
| H-12 | 5708 | − | − | 円形 | 22 | 28 | B |
| H-12 | 5709 | − | − | 円形 | 21 | 19 | B |
| H-12 | 5710 | − | − | 円形 | 13 | 13 | − |
| H-12 | 5711 | − | − | 円形 | 21 | 43 | − |
| H-12 | 5712 | − | − | 円形 | 22 | 12 | B |
| H-12 | 5713 | − | − | 円形 | 28 | 17 | B |
| H-12 | 5714 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 22 | 6 | B |
| H-12 | 5715 | − | − | 円形 | 18 | 9 | B |
| H-12 | 5716 | − | − | 円形 | 18 | 9 | B |
| H-12 | 5717 | − | − | 円形 | 16 | 21 | B |
| H-12 | 5718 | − | − | 円形 | 23 | 25 | − |
| H-13 | 5719 | − | − | 円形 | 22 | 24 | C |
| H-12 | 5720 | − | − | 円形 | 9 | 9 | − |
| H-12 | 5721 | − | − | 円形 | 40 | 31 | O |
| H-12 | 5722 | − | − | 円形 | 32 | 19 | − |
| H-12 | 5723 | − | − | 円形 | 21 | 2 | − |
| H-12 | 5724 | − | − | 円形 | 20 | 31 | − |
| H-12 | 5725 | − | − | 円形 | 22 | 32 | C |
| H-12 | 5726 | − | − | 円形 | 20 | 18 | − |
| H-12 | 5727 | − | − | 円形 | 33 | 27 | C |
| H-12 | 5728 | − | − | 円形 | 28 | 27 | − |
| H-12 | 5729 | − | − | 円形 | 18 | 19 | − |
| H-13 | 5730 | − | − | 円形 | 17 | 8 | − |
| H-13 | 5731 | − | − | 円形 | 30 | 20 | − |
| H-13 | 5732 | − | − | 円形 | 30 | 19 | C |
| H-13 | 5733 | − | − | 円形 | 25 | 23 | C |
| H-13 | 5734 | − | − | 円形 | 24 | 20 | C |
| H-13 | 5735 | − | − | 円形 | 26 | 18 | C |
| H-13 | 5736 | − | − | 円形 | 28 | 16 | D |
| H-13 | 5737 | − | − | 円形 | 30 | 16 | − |
| H-13 | 5738 | − | − | 円形 | 18 | 10 | − |
| H-13 | 5739 | − | − | 楕円形 | 52·45 | 22 | B |
| H-13 | 5740 | − | − | 円形 | 20 | 20 | − |
| H-13 | 5741 | − | − | 円形 | 37 | 19 | − |
| H-13 | 5742 | − | − | 円形 | 24 | 不明 | I |
| H-13 | 5743 | 弥生土器 | 弥生 | 円形 | 42 | 14 | C |
| H-13 | 5744 | − | − | 円形 | 24 | 不明 | I |
| H-13 | 5745 | − | − | 円形 | 17 | 10 | I |
| H-13 | 5746 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 32 | 7 | − |
| H-13 | 5747 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 隅丸方形 | 47 | 10 | Q |
| H-13 | 5748 | − | − | 円形 | 21 | 3 | − |
| H-13 | 5749 | − | − | 円形 | 28 | 8 | Q |
| H-13 | 5750 | − | − | 円形 | 32 | 15 | K |
| H-13 | 5751 | − | − | 円形 | 18 | 12 | Q |
| H-13 | 5752 | − | − | 円形 | 25 | 20 | − |
| H-13 | 5753 | − | − | 円形 | 26 | 13 | − |
| G-13 | 5754 | − | − | 円形 | 19 | 12 | S |
| G-13 | 5755 | − | − | 円形 | 19 | 19 | R |
| G-13 | 5756 | − | − | 円形 | 20 | 15 | R |
| G-14 | 5757 | − | − | 円形 | 12 | 8 | R |
| G-14 | 5758 | − | − | 円形 | 24 | 15 | S |
| G-13 | 5759 | − | − | 円形 | 30 | 14 | R |
| G-14 | 5760 | − | − | 円形 | 21 | 22 | R |
| G-13 | 5761 | − | − | 円形 | 13 | 11 | − |
| G-14 | 5762 | − | − | 円形 | 24 | 22 | S |
| G-14 | 5763 | − | − | 楕円形 | 58·38 | 24 | R |
| G-14 | 5764 | − | − | 円形 | 23 | 20 | R |
| G-14 | 5765 | − | − | 円形 | 10 | 7 | R |

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| G-14 | 5766 | − | − | 円形 | 24 | 13 | R |
| G-13 | 5767 | − | − | 円形 | 12 | 8 | − |
| G-13 | 5768 | − | − | 円形 | 14 | 19 | R |
| G-13 | 5769 | − | − | 円形 | 26 | 10 | R |
| G-14 | 5770 | − | − | 円形 | 14 | 14 | R |
| G-14 | 5771 | − | − | 円形 | 17 | 13 | R |
| G-14 | 5772 | 製塩土器 | 弥生 | 円形 | 26 | 19 | R |
| G-14 | 5773 | − | − | 円形 | 15 | 13 | R |
| G-14 | 5774 | − | − | 円形 | 33 | 15 | R |
| G-14 | 5775 | − | − | 円形 | 31 | 17 | S |
| G-14 | 5776 | − | − | 円形 | 34 | 15 | R |
| G-14 | 5777 | − | − | 楕円形 | 36·28 | 17 | − |
| G-14 | 5778 | − | − | 円形 | 15 | 8 | − |
| G-14 | 5779 | − | − | 円形 | 15 | 5 | − |
| H-14 | 5780 | − | − | 楕円形 | 31·26 | 8 | − |
| H-14 | 5781 | − | − | 円形 | 20 | 18 | S |
| H-14 | 5782 | − | − | 円形 | 34 | 35 | − |
| H-14 | 5783 | − | − | 円形 | 15 | 11 | S |
| H-14 | 5784 | − | − | 円形 | 22 | 24 | − |
| H-14 | 5785 | − | − | 円形 | 38 | 9 | − |
| H-14 | 5786 | − | − | 円形 | 24 | 31 | − |
| H-14 | 5787 | − | − | 円形 | 25 | 27 | − |
| H-14 | 5788 | − | − | 円形 | 27 | 33 | − |
| H-14 | 5789 | − | − | 円形 | 28 | 19 | − |
| H-14 | 5790 | − | − | 楕円形 | 25·16 | 15 | − |
| H-14 | 5791 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 63 | 4 | − |
| H-14 | 5792 | − | − | 円形 | 12 | 11 | − |
| H-14 | 5793 | − | − | 円形 | 16 | 8 | − |
| H-14 | 5794 | − | − | 円形 | 20 | 22 | − |
| H-14 | 5795 | 炭 | − | 円形 | 32 | 5 | − |
| H-14 | 5796 | − | − | 円形 | 13 | 15 | − |
| H-14 | 5797 | − | − | 円形 | 20 | 10 | − |
| H-14 | 5798 | − | − | 円形 | 22 | 13 | − |
| H-14 | 5799 | − | − | 円形 | 22 | 13 | − |
| H-14 | 5800 | − | − | 円形 | 13 | 5 | − |
| H-14 | 5801 | − | − | 円形 | 18 | 17 | − |
| H-14 | 5802 | − | − | 円形 | 12 | 11 | − |
| G-14 | 5803 | − | − | 円形 | 20 | 18 | − |
| G-14 | 5804 | − | − | 円形 | 18 | 18 | − |
| G-14 | 5805 | − | − | 円形 | 24 | 6 | R |
| G-14 | 5806 | − | − | 円形 | 29 | 2 | R |
| G-14 | 5807 | − | − | 円形 | 20 | 17 | E |
| G-14 | 5808 | − | − | 円形 | 40 | 18 | − |
| G-14 | 5809 | − | − | 円形 | 21 | 18 | − |
| G-14 | 5810 | − | − | 円形 | 23 | 18 | − |
| G-14 | 5811 | − | − | 円形 | 25 | 20 | − |
| G-14 | 5812 | − | − | 円形 | 17 | 27 | − |
| G-14 | 5813 | − | − | 円形 | 16 | 12 | − |
| H-14 | 5814 | − | − | 円形 | 16 | 18 | − |
| H-14 | 5815 | − | − | 円形 | 24 | 21 | − |
| H-14 | 5816 | − | − | 円形 | 28 | 19 | − |
| H-14 | 5817 | − | − | 円形 | 20 | 25 | − |
| H-14 | 5818 | − | − | 円形 | 27 | 22 | − |
| H-14 | 5819 | − | − | 円形 | 16 | 8 | − |
| H-14 | 5820 | − | − | 円形 | 16 | 21 | − |
| H-14 | 5821 | − | − | 円形 | 22 | 24 | − |
| H-14 | 5822 | − | − | 円形 | 16 | 15 | − |
| H-14 | 5823 | − | − | 楕円形 | 48·32 | 9 | − |
| H-14 | 5824 | − | − | 円形 | 20 | 5 | − |
| H-14 | 5825 | − | − | 円形 | 40 | 27 | − |
| H-14 | 5826 | − | − | 円形 | 20 | 12 | − |
| H-14 | 5827 | − | − | 円形 | 28 | 22 | − |
| H-14 | 5828 | − | − | 円形 | 24 | 21 | − |
| H-14 | 5829 | − | − | 楕円形 | 35·26 | 9 | − |

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| H-14 | 5830 | − | − | 円形 | 17 | 14 | − |
| H-15 | 5831 | − | − | 円形 | 18 | 17 | − |
| H-15 | 5832 | − | − | 円形 | 18 | 11 | − |
| H-15 | 5833 | − | − | 円形 | 20 | 8 | − |
| H-15 | 5834 | − | − | 円形 | 22 | 5 | − |
| H-15 | 5835 | − | − | 円形 | 20 | 16 | − |
| H-15 | 5836 | − | − | 円形 | 22 | 20 | − |
| H-15 | 5837 | − | − | 円形 | 22 | 9 | − |
| H-15 | 5838 | − | − | 円形 | 18 | 15 | − |
| H-15 | 5839 | − | − | 円形 | 23 | 14 | − |
| H-15 | 5840 | − | − | 円形 | 16 | 12 | − |
| H-15 | 5841 | − | − | 円形 | 30 | 9 | − |
| H-15 | 5842 | − | − | 円形 | 20 | 16 | − |
| H-15 | 5843 | − | − | 円形 | 32 | 5 | − |
| H-15 | 5844 | − | − | 円形 | 16 | 12 | − |
| H-15 | 5845 | − | − | 円形 | 36 | 13 | − |
| H-15 | 5846 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 17 | 8 | − |
| H-15 | 5847 | 黒色土器　椀 | 10c | 円形 | 28 | 8 | − |
| G-14 | 5848 | − | − | 円形 | 18 | 9 | T |
| G-14 | 5849 | − | − | 隅丸方形 | 39 | 12 | T |
| G-14 | 5850 | − | − | 円形 | 20 | 3 | U |
| G-15 | 5851 | − | − | 円形 | 16 | 4 | U |
| G-15 | 5852 | − | − | 円形 | 21 | 3 | U |
| G-15 | 5853 | − | − | 円形 | 18 | 5 | V |
| G-15 | 5854 | 弥生土器 | 弥生 | 円形 | 20 | 22 | V |
| G-15 | 5855 | − | − | 円形 | 42 | 8 | − |
| G-15 | 5856 | − | − | 円形 | 20 | 10 | − |
| G-15 | 5857 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 24 | 10 | − |
| G-15 | 5858 | − | − | 円形 | 22 | 11 | − |
| G-15 | 5859 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 14 | 7 | − |
| G-15 | 5860 | − | − | 円形 | 25 | 5 | − |
| G-15 | 5861 | − | − | 円形 | 29 | 7 | − |
| H-15 | 5862 | − | − | 楕円形 | 50·38 | 11 | − |
| H-15 | 5863 | − | − | 楕円形 | 43·35 | 8 | − |
| H-15 | 5864 | 弥生土器　甕・サヌカイト | 弥生 | 隅丸方形 | 54 | 11 | − |
| G-15 | 5865 | − | − | 隅丸方形 | 48 | 8 | − |
| G-15 | 5866 | − | − | 円形 | 49 | 8 | − |
| G-15 | 5867 | − | − | 円形 | 16 | 4 | V |
| G-15 | 5868 | − | − | 楕円形 | 30·22 | 7 | W |
| G-15 | 5869 | − | − | 円形 | 25 | 5 | W |
| G-15 | 5870 | − | − | 円形 | 37 | 4 | V |
| G-15 | 5871 | − | − | 隅丸方形 | 41 | 3 | V |
| G-15 | 5872 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 62 | 13 | V |
| G-15 | 5873 | − | − | 円形 | 31 | 7 | V |
| G-15 | 5874 | − | − | 円形 | 13 | 12 | W |
| G-15 | 5875 | − | − | 円形 | 24 | 19 | W |
| G-15 | 5876 | − | − | 円形 | 13 | 5 | V |
| G-15 | 5877 | − | − | 円形 | 14 | 15 | V |
| G-15 | 5878 | 弥生土器 | 弥生 | 円形 | 36 | 7 | − |
| H-15 | 5879 | − | − | 円形 | 30 | 8 | − |
| H-15 | 5880 | − | − | 円形 | 26 | 11 | − |
| H-15 | 5881 | − | − | 円形 | 22 | 14 | − |
| H-15 | 5882 | − | − | 円形 | 26 | 4 | − |
| H-15 | 5883 | − | − | 円形 | 24 | 4 | − |
| H-15 | 5884 | − | − | 円形 | 36 | 8 | − |
| H-16 | 5885 | − | − | 楕円形 | 22·17 | 12 | − |
| H-16 | 5886 | − | − | 円形 | 16 | 11 | − |
| H-16 | 5887 | − | − | 楕円形 | 56·50 | 7 | − |
| H-16 | 5888 | − | − | 円形 | 26 | 15 | − |
| G-16 | 5889 | − | − | 円形 | 20 | 17 | − |
| G-16 | 5890 | − | − | 円形 | 14 | 5 | − |
| G-16 | 5891 | − | − | 円形 | 13 | 5 | − |
| G-16 | 5892 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 24 | 6 | − |
| G-16 | 5893 | − | − | 円形 | 19 | 21 | − |

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| G-16 | 5894 | — | — | 円形 | 15 | 13 | — |
| G-16 | 5895 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 19 | 16 | — |
| G-16 | 5896 | 弥生土器　甕・土師器　椀 | 中世 | 円形 | 16 | 13 | — |
| G-16 | 5897 | — | — | 円形 | 18 | 3 | — |
| G-16 | 5898 | — | — | 円形 | 16 | 18 | — |
| G-16 | 5899 | — | — | 円形 | 19 | 23 | — |
| G-16 | 5900 | — | — | 円形 | 16 | 4 | — |
| G-16 | 5901 | — | — | 円形 | 20 | 16 | — |
| G-16 | 5902 | — | — | 円形 | 28 | 23 | X |
| H-16 | 5903 | — | — | 楕円形 | 38·29 | 10 | X |
| H-16 | 5904 | — | — | 円形 | 30 | 11 | X |
| H-16 | 5905 | — | — | 楕円形 | 62·38 | 10 | X |
| H-16 | 5906 | 弥生土器 | 弥生 | 楕円形 | 38·28 | 10 | X |
| H-16 | 5907 | 土師器 | 中世 | 楕円形 | 38·25 | 7 | X |
| H-16 | 5908 | 弥生土器　甕・サヌカイト | 弥生 | 隅丸方形 | 45·33 | 16 | X |
| H-16 | 5909 | — | — | 楕円形 | 40·34 | 5 | X |
| H-16 | 5910 | — | — | 楕円形 | 53·44 | 3 | X |
| H-16 | 5911 | — | — | 円形 | 23 | 8 | X |
| H-16 | 5912 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 楕円形 | 64·39 | 22 | X |
| H-17 | 5913 | — | — | 楕円形 | 64·50 | 11 | X |
| H-17 | 5914 | — | — | 隅丸方形 | 50 | 7 | X |
| H-17 | 5915 | — | — | 円形 | 23 | 17 | X |
| H-17 | 5916 | 弥生土器　甕・壺 | 弥生 | 楕円形 | 35·27 | 13 | X |
| H-17 | 5917 | — | — | 楕円形 | 31·26 | 9 | X |
| H-17 | 5918 | — | — | 円形 | 20 | 11 | X |
| H-17 | 5919 | — | — | 円形 | 22 | 9 | X |
| H-17 | 5920 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 26 | 8 | X |
| F-17 | 5921 | — | — | 円形 | 21 | 20 | Y |
| G-17 | 5922 | — | — | 円形 | 35 | 28 | Q |
| G-17 | 5923 | 弥生土器　壺 | 弥生 | 円形 | 32 | 28 | Y |
| G-17 | 5924 | — | — | 楕円形 | 36·21 | 9 | W |
| G-17 | 5925 | — | — | 円形 | 18 | 6 | — |
| G-17 | 5926 | — | — | 円形 | 36 | 6 | — |
| G-17 | 5927 | — | — | 円形 | 25 | 10 | W |
| G-17 | 5928 | — | — | 楕円形 | 51·35 | 8 | W |
| G-17 | 5929 | — | — | 円形 | 39 | 9 | W |
| G-17 | 5930 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 楕円形 | 29·20 | 5 | — |
| G-17 | 5931 | 弥生土器　甕・サヌカイト | 弥生 | 円形 | 33 | 6 | W |
| G-17 | 5932 | 弥生土器 | 弥生 | 円形 | 17 | 11 | W |
| G-17 | 5933 | — | — | 楕円形 | 25·17 | 13 | W |
| G-17 | 5934 | — | — | 楕円形 | 44·36 | 9 | W |
| G-17 | 5935 | — | — | 円形 | 31 | 6 | W |
| G-17 | 5936 | — | — | 円形 | 15 | 8 | — |
| G-17 | 5937 | — | — | 円形 | 17 | 7 | — |
| G-17 | 5938 | — | — | 円形 | 18 | 14 | — |
| G-17 | 5939 | — | — | 円形 | 18 | 11 | — |
| G-17 | 5940 | — | — | 楕円形 | 53·36 | 8 | — |
| G-17 | 5941 | — | — | 楕円形 | 40·33 | 10 | — |
| G-17 | 5942 | — | — | 円形 | 17 | 不明 | — |
| G-17 | 5943 | — | — | 円形 | 13 | 13 | — |
| G-17 | 5944 | — | — | 円形 | 17 | 11 | — |
| G-17 | 5945 | — | — | 楕円形 | 63·50 | 4 | — |
| G-17 | 5946 | — | — | 円形 | 12 | 10 | — |
| G-17 | 5947 | 弥生土器　高坏・壺 | 弥生 | 円形 | 48 | 110 | — |
| G-17 | 5948 | — | — | 円形 | 13 | 11 | — |
| G-17 | 5949 | — | — | 円形 | - | 不明 | — |
| G-17 | 5950 | — | — | 円形 | 13 | 10 | — |
| G-17 | 5951 | — | — | 円形 | 54 | 24 | — |
| G-17 | 5952 | — | — | 円形 | 29 | 20 | — |
| G-17 | 5953 | — | — | 円形 | 13 | 10 | — |
| G-17 | 5954 | — | — | 円形 | 26 | 6 | Z |
| G-17 | 5955 | — | — | 円形 | 32 | 10 | Y |
| G-17 | 5956 | — | — | 円形 | 23 | 8 | Q |
| G-17 | 5957 | — | — | 円形 | 28 | 10 | Q |

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| G-17 | 5958 | — | — | 円形 | 20 | 9 | E |
| G-17 | 5959 | — | — | 円形 | 18 | 16 | E |
| G-17 | 5960 | — | — | 円形 | 14 | 13 | E |
| G-17 | 5961 | — | — | 円形 | 24 | 13 | 1 |
| G-17 | 5962 | — | — | 円形 | 20 | 13 | E |
| F-17 | 5963 | — | — | 円形 | 17 | 13 | 2 |
| F-17 | 5964 | — | — | 円形 | 16 | 9 | E |
| G-17 | 5965 | — | — | 円形 | 20 | 21 | Y |
| G-17 | 5966 | — | — | 円形 | 40 | 57 | — |
| G-17 | 5967 | — | — | 円形 | 17 | 9 | — |
| G-17 | 5968 | — | — | 円形 | 15 | 9 | — |
| G-17 | 5969 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 24 | 7 | — |
| G-17 | 5970 | 弥生土器 | 弥生 | 楕円形 | 64·28 | 10 | — |
| G-17 | 5971 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 楕円形 | 79·50 | 11 | — |
| G-17 | 5972 | — | — | 円形 | 34 | 3 | — |
| G-17 | 5973 | — | — | 円形 | 38 | 32 | — |
| G-17 | 5974 | — | — | 円形 | 17 | 不明 | — |
| G-17 | 5975 | — | — | 円形 | 30 | 32 | — |
| G-17 | 5976 | — | — | 円形 | 15 | 12 | — |
| G-17 | 5977 | — | — | 円形 | 17 | 15 | — |
| G-17 | 5978 | — | — | 円形 | 34 | 9 | — |
| G-17 | 5979 | — | — | 円形 | 13 | 7 | — |
| G-17 | 5980 | — | — | 円形 | 14 | 7 | — |
| G-17 | 5981 | — | — | 円形 | 8 | 4 | — |
| G-17 | 5982 | — | — | 円形 | 18 | 7 | — |
| G-17 | 5983 | — | — | 円形 | 14 | 8 | — |
| G-17 | 5984 | — | — | 円形 | 13 | 8 | — |
| G-17 | 5985 | 弥生土器 | 弥生 | 円形 | 15 | 9 | — |
| G-17 | 5986 | — | — | 円形 | 12 | 7 | — |
| G-17 | 5987 | — | — | 円形 | 10 | 9 | — |
| G-17 | 5988 | — | — | 円形 | 9 | 9 | — |
| G-17 | 5989 | — | — | 円形 | 11 | 6 | — |
| G-17 | 5990 | — | — | 円形 | 11 | 5 | — |
| G-17 | 5991 | — | — | 円形 | 24 | 4 | — |
| G-17 | 5992 | — | — | 円形 | 12 | 6 | — |
| G-17 | 5993 | — | — | 円形 | 10 | 不明 | — |
| G-17 | 5994 | — | — | 円形 | 27 | 10 | — |
| G-17 | 5995 | — | — | 円形 | 26 | 5 | — |
| G-17 | 5996 | — | — | 円形 | 13 | 9 | — |
| G-17 | 5997 | — | — | 円形 | 10 | 7 | — |
| G-17 | 5998 | — | — | 円形 | 10 | 9 | — |
| F-18 | 5999 | — | — | 円形 | 15 | 6 | I |
| F-18 | 51000 | — | — | 円形 | 18 | 7 | I |
| F-18 | 51001 | — | — | 円形 | 18 | 11 | I |
| F-18 | 51002 | — | — | 円形 | 13 | 7 | I |
| F-18 | 51003 | — | — | 円形 | 15 | 5 | I |
| F-18 | 51004 | — | — | 円形 | 17 | 9 | E |
| F-18 | 51005 | — | — | 隅丸方形 | 36 | 12 | I |
| F-18 | 51006(SH521) | — | — | 楕円形 | 44·35 | 122 | E |
| F-18 | 51007 | — | — | 隅丸方形 | 48 | 3 | I |
| F-18 | 51008(SH521) | 弥生土器　壺 | 弥生 | 円形 | 39 | 48 | E |
| F-18 | 51009 | 弥生土器　甕・高坏 | 弥生 | 円形 | 56 | 24 | 3 |
| G-18 | 51010 | — | — | 円形 | 20 | 11 | E |
| G-18 | 51011 | — | — | 円形 | 22 | 15 | E |
| G-18 | 51012(SH521) | 製塩土器 | 弥生 | 円形 | 37 | 32 | — |
| G-18 | 51013 | — | — | 楕円形 | 64·28 | 9 | 3 |
| G-18 | 51014(SH521) | 弥生土器　壺・甕・製塩土器・サヌカイト | 弥生 | 円形 | 50 | 56 | E |
| G-18 | 51015 | — | — | 円形 | 59 | 29 | E |
| F-18 | 51016 | — | — | 円形 | 20 | 8 | — |
| F-18 | 51017 | — | — | 楕円形 | 31·22 | 7 | E |
| F-18 | 51018 | — | — | 円形 | 19 | 22 | — |
| F-18 | 51019(SH521) | 弥生土器 | 弥生 | 隅丸方形 | 44 | 66 | E |
| F-18 | 51020 | — | — | 円形 | 32 | 12 | E |
| F-18 | 51021(SH521) | 弥生土器 | 弥生 | 円形 | 44 | 57 | E |

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| F-18 | 51022 | − | − | 円形 | 20 | 13 | 4 |
| F-18 | 51023 | − | − | 円形 | 16 | 9 | − |
| F-18 | 51024 | − | − | 円形 | 20 | 9 | 4 |
| F-18 | 51025 | 製塩土器 | 弥生 | 円形 | 26 | 7 | 4 |
| G-18 | 51026 | − | − | 円形 | 32 | 9 | − |
| G-18 | 51027 | − | − | 円形 | 17 | 13 | − |
| G-18 | 51028 | − | − | 円形 | 32 | 6 | 5 |
| G-18 | 51029 | − | − | 円形 | 43 | 11 | E |
| G-18 | 51030 | − | − | 楕円形 | 44·36 | 4 | E |
| G-18 | 51031 | − | − | 円形 | 14 | 11 | − |
| G-18 | 51032 | − | − | 円形 | 19 | 9 | 6 |
| G-18 | 51033 | − | − | 円形 | 15 | 12 | − |
| G-18 | 51034 | − | − | 円形 | 14 | 13 | E |
| G-18 | 51035 | − | − | 円形 | 24 | 35 | E |
| G-18 | 51036 | − | − | 円形 | 17 | 14 | 6 |
| G-18 | 51037 | − | − | 円形 | 20 | 7 | − |
| G-18 | 51038 | − | − | 円形 | 20 | 10 | − |
| G-18 | 51039 | 弥生土器　甕·製塩土器 | 弥生 | 円形 | 19 | 20 | 6 |
| G-18 | 51040 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 楕円形 | 37·31 | 14 | E |
| G-18 | 51041 | − | − | 円形 | 54 | 3 | − |
| G-18 | 51042 | − | − | 円形 | 13 | 12 | − |
| G-18 | 51043 | − | − | 円形 | 15 | 16 | − |
| G-18 | 51044 | − | − | 円形 | 19 | 10 | − |
| G-18 | 51045 | − | − | 隅丸方形 | 36 | 6 | − |
| G-18 | 51046 | − | − | 円形 | 18 | 8 | − |
| G-18 | 51047 | − | − | 円形 | 26 | 14 | − |
| G-18 | 51048 | − | − | 円形 | 27 | 11 | − |
| G-18 | 51049 | − | − | 円形 | 38 | 7 | − |
| G-18 | 51050 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 隅丸方形 | 65·53 | 8 | − |
| G-18 | 51051 | − | − | 円形 | 11 | 4 | − |
| G-18 | 51052 | − | − | 円形 | 13 | 7 | − |
| G-18 | 51053 | − | − | 円形 | 12 | 42 | − |
| G-18 | 51054 | − | − | 円形 | 15 | 9 | − |
| G-18 | 51055 | − | − | 円形 | 15 | 11 | − |
| G-18 | 51056 | − | − | 円形 | 17 | 5 | − |
| G-18 | 51057 | − | − | 円形 | 21 | 7 | − |
| G-18 | 51058 | − | − | 円形 | 36 | 17 | − |
| G-18 | 51059 | − | − | 円形 | 11 | 10 | − |
| G-18 | 51060 | − | − | 円形 | 55 | 10 | − |
| G-18 | 51061 | − | − | 円形 | 26 | 7 | − |
| G-18 | 51062 | − | − | 円形 | 17 | 11 | − |
| G-18 | 51063 | − | − | 円形 | 13 | 7 | − |
| G-18 | 51064 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 18 | 16 | − |
| G-18 | 51065 | − | − | 円形 | 15 | 7 | − |
| G-18 | 51066 | − | − | 円形 | 17 | 8 | − |
| G-18 | 51067 | − | − | 円形 | 16 | 3 | − |
| G-18 | 51068 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 16 | 7 | − |
| G-18 | 51069 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 17 | 10 | − |
| G-18 | 51070 | − | − | 円形 | 14 | 5 | − |
| G-18 | 51071 | − | − | 円形 | 13 | 9 | − |
| G-18 | 51072 | − | − | 円形 | 25 | 6 | − |
| G-18 | 51073 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 25 | 13 | − |
| G-18 | 51074 | − | − | 円形 | 27 | 17 | − |
| G-18 | 51075 | − | − | 楕円形 | 78·45 | 不明 | − |
| G-18 | 51076 | − | − | 円形 | 19 | 5 | − |
| G-18 | 51077 | − | − | 円形 | 18 | 6 | − |
| G-18 | 51078 | − | − | 円形 | 43 | 16 | − |
| G-18 | 51079 | − | − | 楕円形 | 62·35 | 5 | − |
| G-18 | 51080 | − | − | 円形 | 13 | 8 | − |
| G-18 | 51081 | − | − | 円形 | 18 | 7 | − |
| G-18 | 51082 | − | − | 円形 | 15 | 6 | − |
| G-18 | 51083 | − | − | 円形 | 14 | 9 | − |
| G-18 | 51084 | − | − | 円形 | 17 | 9 | − |
| G-18 | 51085 | − | − | 円形 | 19 | 9 | − |

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| G-18 | 51086 | − | − | 円形 | 24 | 3 | − |
| G-18 | 51087 | − | − | 円形 | 21 | 6 | − |
| G-18 | 51088 | − | − | 円形 | 21 | 15 | − |
| G-18 | 51089 | − | − | 円形 | 19 | 13 | − |
| G-18 | 51090 | − | − | 円形 | 19 | 6 | − |
| G-18 | 51091 | − | − | 円形 | 12 | 8 | − |
| G-18 | 51092 | − | − | 円形 | 15 | 7 | − |
| G-18 | 51093 | − | − | 円形 | 19 | 1 | − |
| G-18 | 51094 | − | − | 円形 | 31 | 8 | − |
| G-18 | 51095 | − | − | 円形 | 28 | 3 | − |
| G-18 | 51096 | − | − | 円形 | 21 | 8 | − |
| G-18 | 51097 | − | − | 円形 | 15 | 11 | − |
| G-18 | 51098 | − | − | 円形 | 11 | 14 | − |
| G-18 | 51099 | − | − | 円形 | 40 | 4 | − |
| G-18 | 51100 | − | − | 円形 | 15 | 6 | − |
| G-18 | 51101 | − | − | 円形 | 37 | 9 | − |
| G-18 | 51102 | − | − | 楕円形 | 34·30 | 6 | − |
| G-18 | 51103 | − | − | 円形 | 11 | 7 | − |
| G-18 | 51104 | − | − | 円形 | 14 | 7 | − |
| G-18 | 51105 | − | − | 円形 | 43 | 21 | − |
| G-18 | 51106 | − | − | 楕円形 | 34·29 | 12 | − |
| G-18 | 51107 | − | − | 円形 | 28 | 不明 | − |
| G-18 | 51108 | − | − | 円形 | 16 | 8 | − |
| G-18 | 51109 | − | − | 円形 | 13 | 5 | − |
| G-18 | 51110 | − | − | 円形 | 23 | 27 | − |
| G-18 | 51111 | − | − | 円形 | 17 | 12 | − |
| G-18 | 51112 | − | − | 円形 | 15 | 16 | − |
| G-18 | 51113 | − | − | 円形 | 18 | 13 | − |
| G-18 | 51114 | − | − | 円形 | 24 | 5 | − |
| G-18 | 51115 | − | − | 円形 | 19 | 9 | − |
| G-18 | 51116 | − | − | 楕円形 | 46·25 | 19 | − |
| G-18 | 51117 | − | − | 円形 | 17 | 5 | − |
| G-18 | 51118 | − | − | 円形 | 17 | 7 | − |
| F-18 | 51119 | 弥生土器 | 弥生 | 円形 | 38 | 13 | E |
| F-18 | 51120 | 弥生土器　壺 | 弥生 | 円形 | 38 | 11 | E |
| F-18 | 51121 | − | − | 円形 | 31 | 11 | 3 |
| F-18 | 51122 | − | − | 円形 | 28 | 11 | 6 |
| F-18 | 51123 | − | − | 楕円形 | 49·34 | 12 | − |
| F-18 | 51124 | − | − | 円形 | 17 | 10 | I |
| F-18 | 51125 | − | − | 円形 | 25 | 10 | W |
| F-18 | 51126 | − | − | 円形 | 18 | 10 | W |
| F-18 | 51127 | − | − | 円形 | 23 | 7 | I |
| F-18 | 51128 | − | − | 円形 | 16 | 6 | B |
| F-18 | 51129 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 19 | 25 | 6 |
| F-19 | 51130 | − | − | 円形 | 20 | 12 | 5 |
| F-19 | 51131 | − | − | 円形 | 30 | 6 | 5 |
| F-19 | 51132 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 19 | 8 | 5 |
| F-19 | 51133 | − | − | 隅丸方形 | 45·36 | 9 | 3 |
| F-19 | 51134(SB503) | − | − | 円形 | 28 | 15 | 7 |
| F-19 | 51135(SB503) | − | − | 円形 | 19 | 18 | 7 |
| G-19 | 51136(SB503) | − | − | 円形 | 24 | 15 | 7 |
| G-19 | 51137 | − | − | 円形 | 18 | 16 | 7 |
| G-19 | 51138(SB503) | − | − | 円形 | 31 | 17 | 7 |
| G-19 | 51139 | − | − | 円形 | 17 | 7 | − |
| G-19 | 51140(SB503) | − | − | 楕円形 | 36·30 | 12 | 7 |
| G-19 | 51141 | − | − | 円形 | 28 | 8 | 7 |
| G-19 | 51142 | − | − | 円形 | 19 | 6 | − |
| G-19 | 51143 | − | − | 円形 | 18 | 8 | − |
| G-19 | 51144 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 20 | 6 | − |
| G-19 | 51145 | − | − | 円形 | 16 | 9 | − |
| G-19 | 51146 | サヌカイト | 弥生 | 円形 | 17 | 9 | − |
| G-19 | 51147 | − | − | 円形 | 17 | 11 | − |
| G-19 | 51148 | − | − | 円形 | 15 | 9 | − |
| G-19 | 51149 | − | − | 円形 | 15 | 14 | − |

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| G-19 | 51150 | − | − | 円形 | 24 | 7 | − |
| G-19 | 51151 | − | − | 円形 | 25 | 5 | − |
| G-19 | 51152 | − | − | 円形 | 30 | 6 | − |
| G-19 | 51153 | − | − | 円形 | 20 | 7 | − |
| G-19 | 51154 | − | − | 円形 | 16 | 9 | − |
| G-19 | 51155 | − | − | 円形 | 32 | 5 | − |
| G-19 | 51156 | − | − | 楕円形 | 80·64 | 27 | − |
| G-19 | 51157 | 弥生土器 | 弥生 | 楕円形 | 32·26 | 16 | − |
| F-19 | 51158 | − | − | 円形 | 13 | 4 | − |
| F-19 | 51159 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 楕円形 | 44·38 | 13 | − |
| F-19 | 51160 | − | − | 円形 | 27 | 9 | − |
| F-19 | 51161 | − | − | 円形 | 20 | 9 | − |
| F-19 | 51162 | − | − | 円形 | 25 | 23 | − |
| F-19 | 51163 | − | − | 円形 | 16 | 10 | − |
| F-20 | 51164 | 縄文土器 | 縄文 | 円形 | 51 | 21 | − |
| F-20 | 51165 | − | − | 円形 | 42 | 13 | − |
| F-20 | 51166 | − | − | 円形 | 31 | 12 | − |
| F-20 | 51167 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 25 | 10 | − |
| F-20 | 51168 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 20 | 99 | − |
| F-20 | 51169 | − | − | 円形 | 23 | 8 | − |
| F-20 | 51170 | 弥生土器 | 弥生 | 円形 | 23 | 15 | − |
| G-20 | 51171 | − | − | 円形 | 15 | 11 | − |
| G-20 | 51172 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 29 | 23 | − |
| G-20 | 51173 | − | − | 円形 | 24 | 17 | − |
| G-20 | 51174 | − | − | 円形 | 20 | 17 | − |
| G-20 | 51175 | − | − | 円形 | 22 | 21 | − |
| G-20 | 51176 | − | − | 楕円形 | 56·31 | 8 | − |
| G-20 | 51177 | − | − | 円形 | 21 | 10 | − |
| G-20 | 51178 | − | − | 楕円形 | 69·53 | 15 | − |
| G-20 | 51179 | − | − | 円形 | 17 | 12 | − |
| G-20 | 51180 | − | − | 楕円形 | 56·45 | 11 | − |
| G-20 | 51181 | − | − | 円形 | 57 | 11 | − |
| G-20 | 51182 | − | − | 円形 | 18 | 11 | − |
| F-20 | 51183 | − | − | 円形 | 17 | 11 | − |
| F-19 | 51184 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 31 | 10 | − |
| F-20 | 51185 | − | − | 隅丸方形 | 35 | 11 | − |
| F-20 | 51186 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 円形 | 21 | 25 | − |
| F-20 | 51187 | − | − | 円形 | 19 | 20 | − |
| F-20 | 51188 | − | − | 円形 | 48 | 8 | − |

第Ⅱ－2調査区

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| F-21 | 61189 | − | − | 円形 | 30 | 7 | − |
| F-21 | 61190 | − | − | 楕円形 | 45·20 | 9 | − |
| F-21 | 61191 | − | − | 楕円形 | 40·20 | 9 | − |
| F-21 | 61192 | − | − | 円形 | 40 | 12 | − |
| F-21 | 61193 | − | − | 円形 | 35 | 4 | − |
| F-21 | 61194 | − | − | 円形 | 35 | 8 | − |
| F-21 | 61195 | − | − | 円形 | 45 | 14 | − |
| F-21 | 61196 | − | − | 円形 | 40 | 14 | − |
| F-21 | 61197 | − | − | 円形 | 30 | 14 | − |
| F-22 | 61198 | − | − | 楕円形 | 55·40 | 12 | − |
| F-22 | 61199 | − | − | 円形 | 70 | 2 | − |
| F-22 | 61200 | − | − | 円形 | 30 | 9 | − |
| F-23 | 61201 | − | − | 楕円形 | 60·35 | 13 | − |
| E-26 | 61202 | − | − | 円形 | 45 | 23 | − |
| E-26 | 61203 | − | − | 円形 | 20 | 8 | − |
| E-26 | 61204 | − | − | 円形 | 40 | 13 | − |
| E-26 | 61205 | − | − | 円形 | 35 | 19 | − |

第Ⅲ調査区

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| E-28 | 51206 | − | − | 円形 | 40 | 9 | − |
| E-28 | 51207 | − | − | 楕円形 | 55·40 | 10 | − |
| E-28 | 51208 | − | − | 楕円形 | 90·65 | 5 | − |
| E-28 | 51209 | − | − | 楕円形 | 30·25 | 6 | − |
| E-28 | 51210 | − | − | 円形 | 25 | 不明 | − |
| E-28 | 51211 | − | − | 楕円形 | 35·20 | 2 | − |
| E-28 | 51212 | 弥生土器　甕 | 弥生 | 楕円形 | 45·35 | 7 | − |
| E-28 | 51213 | − | − | 円形 | 25 | 3 | − |
| E-31 | 51214 | − | − | 円形 | 35 | 11 | − |
| E-31 | 51215 | − | − | 円形 | 20 | 13 | − |
| E-31 | 51216 | − | − | 円形 | 20 | 8 | − |
| D-32 | 51217 | − | − | 円形 | 45 | 9 | − |
| E-33 | 51218 | − | − | 円形 | 25 | 9 | − |
| E-33 | 51219 | − | − | 楕円形 | 65·55 | 16 | − |
| E-33 | 51220 | − | − | 円形 | 35 | 7 | − |

第Ⅳ－1調査区（第１遺構面）

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| C-48 | 61221 | − | − | 円形 | 10 | 7 | − |
| C-48 | 61222 | − | − | 円形 | 30 | 16 | − |
| C-48 | 61223 | − | − | 円形 | 20 | 3 | − |
| C-48 | 61224 | − | − | 円形 | 15 | 10 | − |
| C-48 | 61225 | − | − | 円形 | 20 | 13 | − |
| C-50 | 61226 | − | − | 楕円形 | 55·35 | 3 | − |

第Ⅳ－1調査区（第２遺構面）

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| C-48 | 61227 | − | − | 円形 | 15 | 21 | − |
| C-48 | 61228 | − | − | 円形 | 20 | 9 | − |
| C-48 | 61229 | − | − | 円形 | 15 | 8 | − |

第Ⅳ－2調査区（第１遺構面）

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| C-52 | 61230 | − | − | 円形 | 60 | 9 | − |
| C-52 | 61231 | − | − | 円形 | 35 | 11 | − |
| C-52 | 61232 | − | − | 円形 | 25 | 10 | − |

第Ⅴ－2調査区（第１遺構面）

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| B-65 | 61233 | − | − | 楕円形 | 40·25 | 11 | − |
| B-66 | 61234 | − | − | 円形 | 30 | 10 | − |
| B-66 | 61235 | − | − | 円形 | 40 | 20 | − |
| B-66 | 61236 | − | − | 円形 | 20 | 14 | − |
| B-66 | 61237 | − | − | 円形 | 30 | 25 | − |
| B-66 | 61238 | − | − | 円形 | 45 | 10 | − |
| B-67 | 61239 | − | − | 円形 | 30 | 10 | − |
| B-67 | 61240 | − | − | 円形 | 30 | 8 | − |
| B-67 | 61241 | − | − | 円形 | 20 | 13 | − |
| B-67 | 61242 | − | − | 円形 | 20 | 8 | − |
| B-67 | 61243 | − | − | 円形 | 20 | 6 | − |
| B-67 | 61244 | − | − | 円形 | 40 | 14 | − |

第Ⅴ－2調査区（第２遺構面）

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| B-65 | 61245 | − | − | 円形 | 20 | 18 | − |
| B-65 | 61246 | − | − | 楕円形 | 70·30 | 18 | − |
| B-66 | 61247 | − | − | 円形 | 60 | 38 | − |

第Ⅴ－4調査区（第０遺構面）

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| B-72 | 61248 | − | − | 円形 | 25 | 10 | − |
| B-72 | 61249 | 土師質土器 | 古代 | 円形 | 25 | 9 | − |
| B-72 | 61250 | 須恵器 | 8C | 円形 | 20 | 12 | − |
| B-72 | 61251 | 土師質土器 | 古代 | 円形 | 40 | 18 | − |
| B-72 | 61252 | 須恵器・土師器・土師質土器 | 古代 | 円形 | 40 | 12 | − |
| B-72 | 61253 | 土師質土器 | 古代 | 円形 | 35 | 15 | − |
| B-72 | 61254 | 須恵器・土師質土器 | 古代 | 円形 | 30 | 14 | − |
| B-72 | 61255 | 須恵器・土師質土器 | 古代 | 円形 | 30 | 12 | − |
| B-72 | 61256 | 土師質土器・製塩土器 | 古代 | 円形 | 25 | 9 | − |
| B-72 | 61257 | 土師質土器 | 古代 | 円形 | 20 | 9 | − |

## 第Ⅴ－4調査区（第１遺構面）

| グリッド | 遺構名 | 出土遺物 | 時期 | 形態 | 直径(cm) | 深さ(cm) | 埋土 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| A-72 | 61258(SB605) | 須恵器・土師器 | 9C | 円形 | (60)・60 | 31 | — |
| A-72 | 61259(SB605) | 須恵器・土師質土器 | 古代 | 円形 | 30 | 17 | — |
| A-72 | 61260(SB605) | 須恵器・土師器・土師質土器 | 古代 | 円形 | 60 | 37 | — |
| A-72 | 61261(SB605) | 土師質土器 | 古代 | 円形 | 35 | 16 | — |
| A-72 | 61262(SB604・605) | 土師質土器 | 古代 | 楕円形 | 65・50 | 26 | — |
| A-72 | 61263(SB605) | — | — | 歪な楕円形 | 60・30 | 18 | — |
| A-72 | 61264(SB605) | 土師器・土師質土器 | 古代 | 円形 | 35 | 20 | — |
| A-72 | 61265(SB605・606) | — | — | 歪な隅丸方形 | 105・40 | 36 | — |
| A-72 | 61266(SB605) | 土師器・土師質土器 | 古代 | 楕円形 | 60・30 | 21 | — |
| A-72 | 61267(SB605) | 土師器・土師質土器 | 古代 | 円形 | 50 | 36 | — |
| A-72 | 61268(SB604) | 土師器・土師質土器 | 古代 | 円形 | 50 | 26 | — |
| A-72 | 61269(SB604) | 土師質土器 | 古代 | 円形 | 30 | 15 | — |
| A-72 | 61270(SB604) | — | — | 円形 | 40 | 20 | — |
| A-71 | 61271(SB604) | — | — | 楕円形 | 35・25 | 13 | — |
| A-71 | 61272(SB604) | — | — | 円形 | 25 | 8 | — |
| A-72 | 61273(SB604) | — | — | 円形 | 25 | 11 | — |
| A-72 | 61274(SB604・608) | 土師質土器 | 古代 | 円形 | 50 | 17 | — |
| A-72 | 61275(SB604) | — | — | 歪な楕円形 | 60・30 | 31 | — |
| A-72 | 61276(SB606) | 土師質土器 | 古代 | 歪な方形 | 95・30 | 33 | — |
| A-72 | 61277(SB606) | — | — | 円形 | 40 | 11 | — |
| A-72 | 61278(SB606) | — | — | 楕円形 | 45・30 | 26 | — |
| A-72 | 61279(SB606) | — | — | 円形 | 30 | 28 | — |
| A-72 | 61280(S606) | 土師質土器 | 古代 | 歪な楕円形 | 80・50 | 20 | — |
| A-72 | 61281(SB607) | — | — | 円形 | 50 | 25 | — |
| A-72 | 61282(SB607) | — | — | 円形 | 40 | 18 | — |
| A-72 | 61283(SB607) | — | — | 楕円形 | 40・25 | 16 | — |
| A-72 | 61284(SB607) | 土師器・土師質土器 | 古代 | 円形 | 35 | 17 | — |
| A-72 | 61285(SB607) | 土師器 | 古代 | 歪な楕円形 | 60・35 | 18 | — |
| A-72 | 61286(SB607) | — | — | 円形 | 25 | 15 | — |
| A-72 | 61287(SB607) | — | — | 歪な楕円形 | 60・25 | 18 | — |
| A-72 | 61288(SB607) | 土師質土器 | 古代 | 円形 | 30 | 10 | — |
| A-72 | 61289(SB608) | 縄文土器・須恵器・土師器 | 縄文・8C | 隅丸方形 | 65・40 | 16 | — |
| A-72 | 61290(SB608) | 土師質土器 | 古代 | 隅丸方形 | 60 | 25 | — |
| A-72 | 61291(SB608) | 土師質土器 | 古代 | 円形 | 65 | 37 | — |
| A-72 | 61292(SB608) | — | — | 円形 | 70 | 10 | — |
| A-72 | 61293(SB608) | 土師質土器 | 古代 | 楕円形 | 50・40 | 20 | — |
| A-72 | 61294(SB608) | — | — | 円形 | 30 | 6 | — |
| A-72 | 61295(SB608) | 須恵器・土師器・土師質土器 | 8C | 円形 | 55 | 29 | — |
| A-72 | 61296(SB608) | 土師質土器 | 古代 | 円形 | 55 | 34 | — |
| A-72 | 61297(SB608) | 土師質土器 | 古代 | 歪な楕円形 | 120・30 | 37 | — |
| A-72 | 61298(SB609) | 須恵器・土師器・土師質土器 | 7~9C | 歪な楕円形 | 85・45 | 35 | — |
| A-72 | 61299(SB609) | — | — | 隅丸方形 | 65・45 | 30 | — |
| A-72 | 61300(SB609) | — | — | 円形 | 45 | 30 | — |
| A-72 | 61301(SB609) | 土師質土器 | 古代 | 円形 | 55 | 24 | — |
| A-72 | 61302(SB609) | — | — | 円形 | 45 | 24 | — |
| A-72 | 61303(SB609) | — | — | 円形 | 45 | 19 | — |
| A-72 | 61304(SB609) | — | — | 円形 | 30 | 16 | — |
| A-72 | 61305(SB609) | — | — | 円形 | 20 | 9 | — |
| A-72 | 61306(SB609) | 須恵器・土師質土器 | 古代 | 円形 | 45 | 24 | — |
| A-72 | 61307(SB609) | — | — | 歪な円形 | 60・50 | 31 | — |
| A-72 | 61308(SB610) | 須恵器 | 古代 | 円形 | 30 | 21 | — |
| A-72 | 61309(SB610) | — | — | 円形 | 40 | 26 | — |
| B-72 | 61310(SB610) | 土師質土器 | 古代 | 円形 | 30 | 16 | — |
| B-72 | 61311(SB610) | 土師器・土師質土器 | 古代 | 円形 | 30 | 10 | — |
| B-72 | 61312(SB610) | — | — | 楕円形 | 35・20 | 18 | — |
| B-72 | 61313(SB610) | — | — | 円形 | 25 | 8 | — |
| A-73 | 61314(SB611) | — | — | 円形 | 30 | 8 | — |
| A-72 | 61315(SB611) | — | — | 円形 | 30 | 13 | — |
| A-72 | 61316(SB611) | — | — | 円形 | 40 | 20 | — |
| A-72 | 61317(SB611) | — | — | 円形 | 30 | 13 | — |
| A-72 | 61318(SB611) | 土師質土器 | 古代 | 円形 | 30 | 13 | — |
| A-72 | 61319(SB611) | — | — | 円形 | 30 | 13 | — |
| A-73 | 61320(SB611) | — | — | 円形 | 30 | 15 | — |
| A-73 | 61321(SB611) | 須恵器・土師質土器 | 古代 | 円形 | 40 | 11 | — |
| A-73 | 61322(SB612) | — | — | 歪な楕円形 | 45・20 | 8 | — |
| A-73 | 61323(SB612) | — | — | 円形 | 30 | 7 | — |
| A-72 | 61324(SB612) | — | — | 円形 | 40 | 19 | — |
| A-72 | 61325(SB612) | — | — | 円形 | 40 | 19 | — |
| A-72 | 61326(SB612) | 土師質土器 | 古代 | 円形 | 40 | 17 | — |
| A-72 | 61327(SB612) | — | — | 円形 | 45 | 19 | — |
| A-72 | 61328(SB612) | — | — | 円形 | 20 | 11 | — |
| A-73 | 61329(SB612) | — | — | 円形 | 35 | 18 | — |
| A-73 | 61330(SB612) | — | — | 円形 | 35 | 9 | — |
| A-73 | 61331(SB612) | — | — | 楕円形 | 40・25 | 12 | — |
| A-73 | 61332(SB613) | — | — | 円形 | 50 | 14 | — |
| A-73 | 61333(SB613) | — | — | 楕円形 | 50・35 | 15 | — |
| A-73 | 61334(SB613) | — | — | 円形 | 35 | 8 | — |
| A-73 | 61335(SB613) | — | — | 円形 | 30 | 13 | — |
| A-73 | 61336(SB613) | — | — | 円形 | 40 | 19 | — |
| A-73 | 61337(SB613) | — | — | 円形 | 25 | 10 | — |
| A-73 | 61338(SB614) | — | — | 円形 | 50 | 19 | — |
| A-73 | 61339(SB614) | — | — | 円形 | 50 | 23 | — |
| A-73 | 61340(SB614) | 須恵器・土師質土器 | 9C | 楕円形 | 55・35 | 27 | — |
| A-73 | 61341(SB614) | — | — | 楕円形 | 65・40 | 33 | — |
| A-73 | 61342(SB614) | 土師質土器 | 古代 | 楕円形 | 75・40 | 31 | — |
| A-73 | 61343(SB614) | 土師質土器 | 古代 | 円形 | 70 | 25 | — |
| A-73 | 61344(SB614) | — | — | 円形 | 60 | 22 | — |
| A-73 | 61345(SB614) | — | — | 楕円形 | 85・55 | 29 | — |
| A-73 | 61346(SB614) | 土師質土器 | 古代 | 円形 | 45 | 24 | — |
| A-73 | 61347(SB614) | — | — | 円形 | 40 | 31 | — |
| A-71 | 61348 | — | — | 円形 | 70 | 7 | — |
| A-71 | 61349 | — | — | 円形 | 35 | 19 | — |
| A-71 | 61350 | — | — | 円形 | 35 | 27 | — |
| A-71 | 61351 | 土師器 | 古代 | 歪な円形 | 50 | 23 | — |
| A-72 | 61352 | 須恵器・土師器・土師質土器 | 古代 | 円形 | 40 | 15 | — |
| A-71 | 61353 | — | — | 円形 | 20 | 10 | — |
| A-71 | 61354 | — | — | 楕円形 | 40 | 12 | — |
| A-72 | 61355 | — | — | 円形 | 20 | 10 | — |
| A-72 | 61356 | — | — | 円形 | 30 | 8 | — |
| A-72 | 61357 | — | — | 円形 | 40 | 11 | — |
| A-72 | 61358 | — | — | 円形 | 30 | 15 | — |
| A-72 | 61359 | — | — | 円形 | 20 | 12 | — |
| A-72 | 61360 | — | — | 円形 | 15 | 7 | — |
| A-72 | 61361 | 土師器・土師質土器 | 8C | 隅丸方形 | 50 | 17 | — |
| A-71 | 61362 | — | — | 円形 | 30 | 7 | — |
| A-72 | 61363 | — | — | 円形 | 25 | 13 | — |
| A-72 | 61364 | — | — | 歪な楕円形 | 55・35 | 9 | — |
| B-72 | 61365 | — | — | 楕円形 | 40・25 | 7 | — |
| B-72 | 61366 | — | — | 楕円形 | 45・30 | 10 | — |
| A-72 | 61367 | 土師質土器 | 古代 | 隅丸方形 | 70 | 36 | — |
| A-72 | 61368 | — | — | 円形 | 25 | 7 | — |
| A-72 | 61369 | — | — | 円形 | 30 | 25 | — |
| A-72 | 61370 | — | — | 円形 | 25 | 2 | — |
| A-72 | 61371 | — | — | 円形 | 45 | 23 | — |
| A-72 | 61372 | — | — | 楕円形 | 35・25 | 19 | — |
| A-72 | 61373 | 須恵器・土師質土器 | 古代 | 楕円形 | 55・40 | 19 | — |
| A-72 | 61374 | 土師質土器 | 古代 | 円形 | 30 | 19 | — |
| A-72 | 61375 | 須恵器・土師質土器 | 古代 | 円形 | 35 | 21 | — |
| A-72 | 61376 | — | — | 円形 | 45 | 22 | — |
| A-72 | 61377 | — | — | 円形 | 25 | 12 | — |
| A-72 | 61378 | — | — | 円形 | 30 | 16 | — |
| A-72 | 61379 | 須恵器・土師質土器 | 8C | 円形 | 40 | 20 | — |
| A-72 | 61380 | — | — | 円形 | 20 | 12 | — |
| A-72 | 61381 | 土師質土器 | 古代 | 円形 | 15 | 7 | — |
| A-72 | 61382 | 土師質土器 | 古代 | 円形 | 30 | 10 | — |
| A-72 | 61383 | — | — | 円形 | 20 | 12 | — |
| A-72 | 61384 | — | — | 円形 | 25 | 14 | — |